THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十二月號

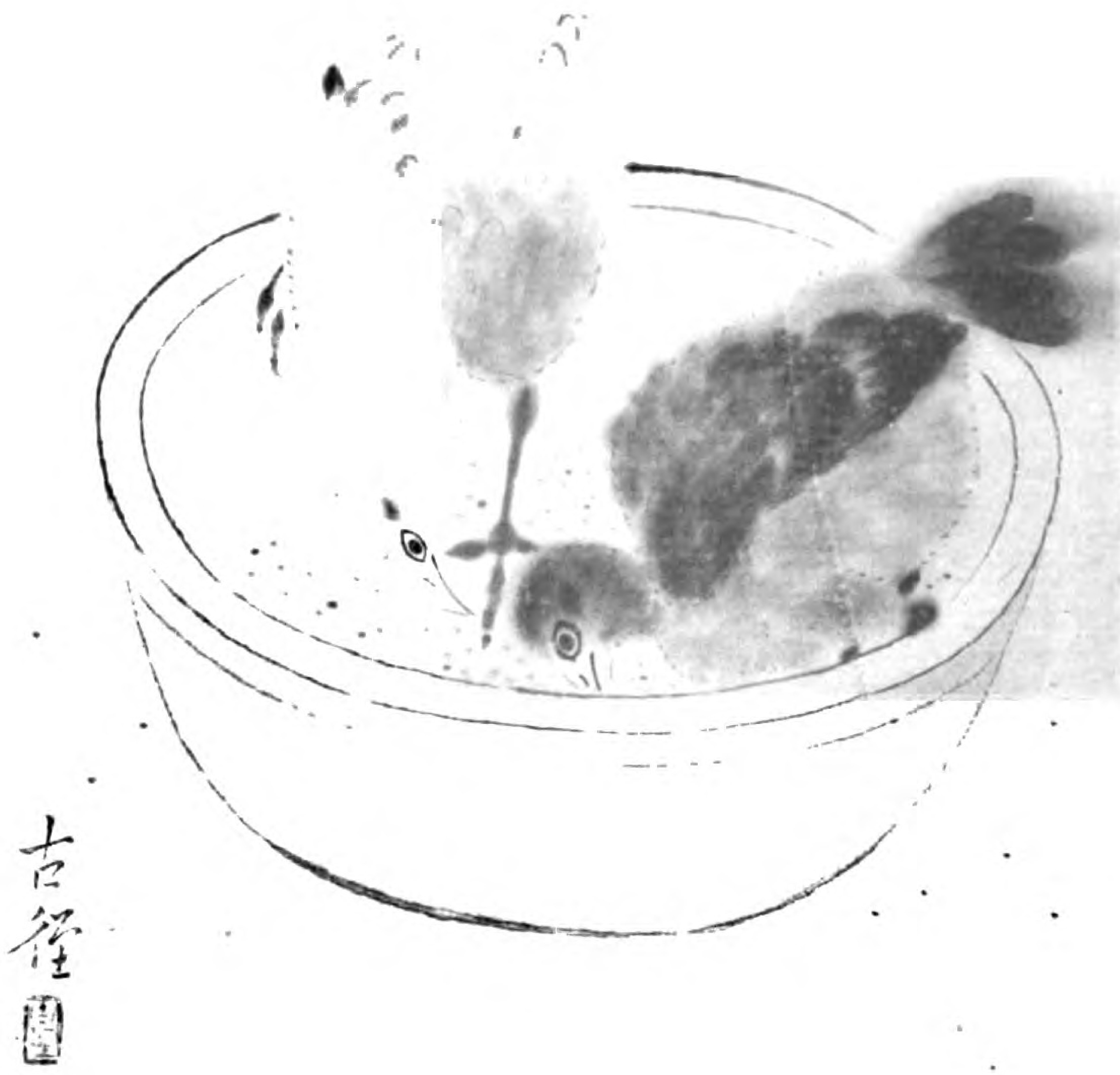
第三十七年 第十三號 第四百六十號



▼說苑

香水梅の花

新製品としては



餌を拾ふ雛鳥　　小林古徑筆

新刊發賣 ― 杉村楚人冠先生の快著出づ ―

蟲のみどころ

四六版總クロース
製美本紙數四百頁
定價金貳圓五拾錢
郵税金十二錢

東京日本橋本石町
至誠堂
振替東京一七四四

興味津々讀者を魅了せずんばやまざる楚人冠先生近來の大快著

◉装幀―岡本一平畫伯◉原色版口繪―伊東忠太博士、北澤樂天畫伯、岡本一平畫伯

著者曰く……………

腹の中に蟲がゐる。この蟲を殺し、この蟲をおさへて、過ごして行くのが世の中である。兎もすれば、殺すどころかおさへる事さへできぬ事がある。この書はさういふ時に出來た。と…………………

著者の輕妙洒落なる文章と、清新にして奇智に富める想意とは文壇既に定評あり。この著者にしてこの著あり。その內容の如何に奇拔にして興味多きかはこゝに贅言を要せざるべし。

讀書界、稀に見るの快著として一本を薦む。

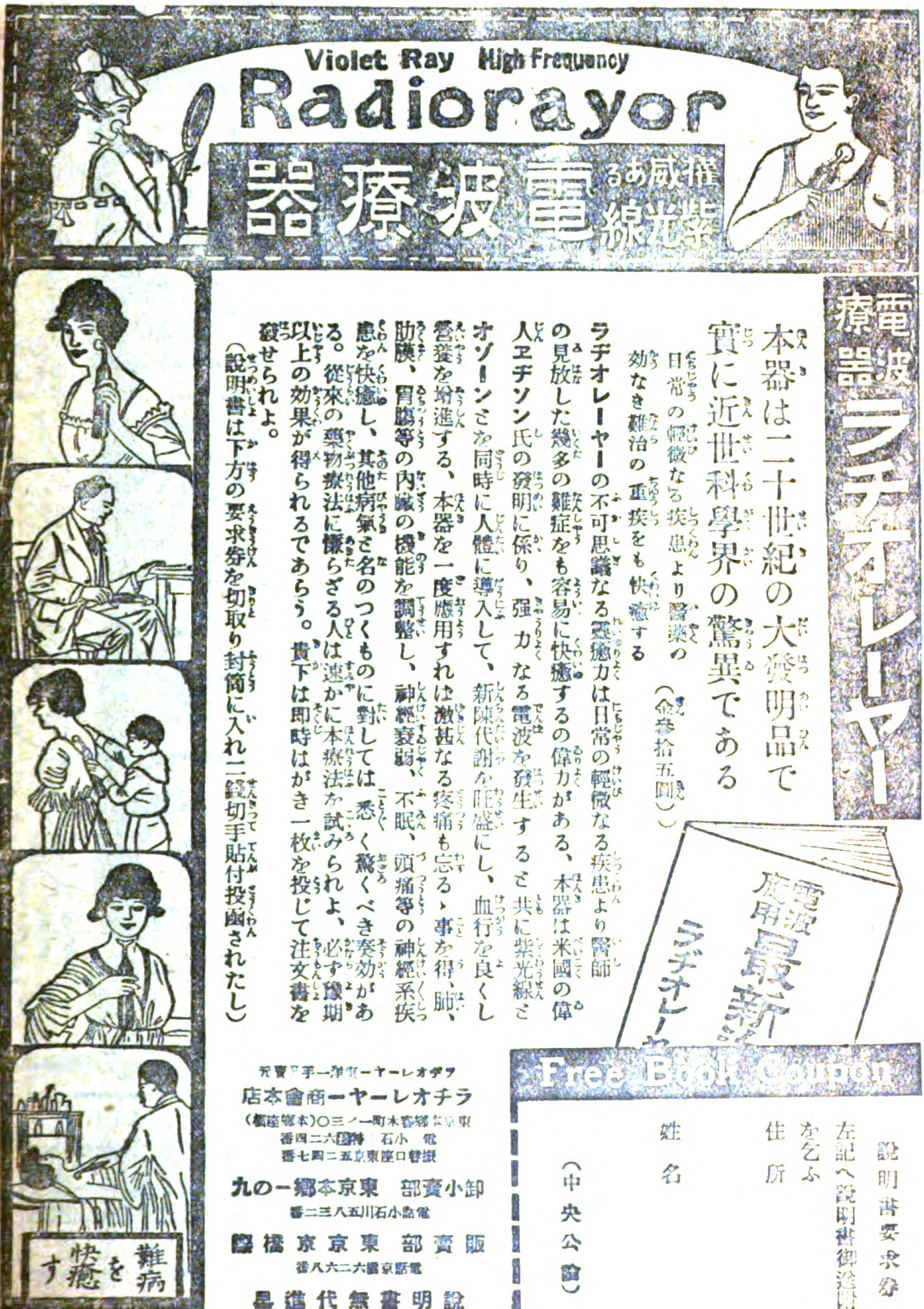
楚人冠先生著

へちまのかは　定價二圓五十錢　郵税十錢

弱者の爲に　定價二圓五十錢　郵税十錢

縮刷合本　大英遊記　半球周遊　定價二圓八十錢　郵税十二錢

戰に使して　定價三圓　郵税十二錢



Violet Ray High Frequency
Radiorayor
權威ある紫光線
電波療器
電波療器ラヂオレーヤー
本器は二十世紀の大發明品で實に近世科學界の驚異である
日常の輕微なる疾患より醫藥の効なき難治の重疾をも快癒する
（金參拾五圓）
ラヂオレーヤーの不可思議なる靈癒力は日常の輕微なる疾患より醫師の見放した幾多の難症をも容易に快癒するの偉力がある、本器は米國の偉人エヂソン氏の發明に係り、强力なる電波を發生すると共に紫光線とオゾーンとを同時に人體に導入して、新陳代謝を旺盛にし、血行を良くし營養を增進する、本器を一度應用すれば激甚なる疼痛も忘るゝ事を得、肺、肋膜、胃腸等の內臟の機能を調整し、神經衰弱、不眠、頭痛等の神經系疾患を快癒し、其他病氣と名のつくものに對しては悉く驚くべき奏効がある。從來の藥物療法に慊らざる人は速かに本療法を試みられよ、必ず豫期以上の効果が得られるであらう。貴下は即時はがき一枚を投じて注文書を發せられよ。
（説明書は下方の要求券を切取り封筒に入れ二錢切手貼付投函されたし）
電波應用最新
難病を快癒す
ラヂオレーヤー東洋一手發賣元
ラヂオレーヤー商會本店
東京市本郷區春木町一ノ三〇（本郷座横）
電話小石川特六二四番
振替口座東京五二四七番
卸小賣部 東京本郷一の九
電話小石川五八三二番
販賣部 東京京橋際
電話京橋六二八番
説明書無代進呈
Free Book Coupon
説明書要求券
左記へ説明書御送附を乞ふ
住所
姓名
（中央公論）

大泉黒石著（最新刊）

老子とその子

四六判背布四百頁
函入堅牢頗美本
村瀬錦司裝幀

▼定價貳圓五拾錢
▼送料金拾四錢

▼見よ突如として出でて本年後半期の文壇及び思想界を風靡せる大著作の續篇は出でたり！曩の『老子』は此の雄大怪奇のロマンスの單なる序曲をなすに過ぎず、曠世の放浪老哲學者の眞面目は本書に於て初めて躍動し來る。

▼舞臺は魏の段干町を中心とす。老子の子李宗將軍は強權と暴力との代表也。孫の李注と稱する彫刻家は近代的懷疑思想の代表也。注の妻環玻は敬虔なる宗教思想の代表也。而も此の三者悉く蹉跌、破滅して、虛無恬淡の思想の獨り雲外に高嘯せる所著者の老子觀とその批判とを見る。事件としては親子の反目、夫妻の嫉視、僚友の爭鬪、戀愛、密通、強姦、戰爭、虐殺、革命、悲嘆、絶望等相交錯し、萬波重疊、興趣つくる所を知らず。新日本の代表的作品として英譯近く米國より出でん。

發店所　東京市神田區表神保町十　春秋社　振替東京二四八六壹　電話神田二一三八

東京高等師範學校教授 岡倉由三郎先生
東京帝國大學文學部教授 市河三喜先生
主幹

研究社 英文學叢書

豫約締切期日 十二月廿日限

第二輯 豫約會員募集

弊社嚢に、我文化が英米に負ふ處多年而も其の精華にして魂の糧たる文學を閑却するを遺憾とし、岡倉・市河兩先生主幹の下に「研究社英文學叢書」刊行を發表するや、忽ち江湖の視聴を集めて、學界及出版界空前の美擧とせられ、實に締切半ばにして豫定會員數を突破するの盛觀に逢へり。爾來、兩主幹及執筆各大家が學殖を傾けらる丶献身的努力と、弊社が此の光榮に副はんとする犠牲的努力とは、月と共に加はる識認と讃辭との中に、遂に第一輯廿四册――豫定頁數を超過する事一千頁――を約束期限に完成配本せり。而も弊社の感激と歡喜とは一日の休息をも屑しとせず、切に兩主幹に請うて、茲に第二次事業に邁進するに至れり。識者諸賢、冀くは弊社の微意を諒とし、更に前輯に倍するの高顧と聲援とを賜へ。

第一輯特別會員募集

▼追加要求殺到の爲今回に限り特に敢行す

體、裁、清、雅、〔四六新形池田請伯装幀、上等クロース優麗典雅、新鑄ポイント式活字を用ひ、印刷鮮明英米版を凌ぐ。〕

會、期、一ヶ年、〔一、二輯共自大正十二年一月至同年十二月完結、第一輯毎月二册宛、第二輯毎月一册又は二册宛。〕

會、費、低、廉、
第一輯〔一時拂金六十六圓、毎月拂最初申込金六圓、以後毎月六圓宛十一ヶ月拂込。〕
第二輯〔一時拂金四十四圓、毎月拂初申込金四圓、以後毎月四圓宛十一ヶ月間拂込。〕

内容見本

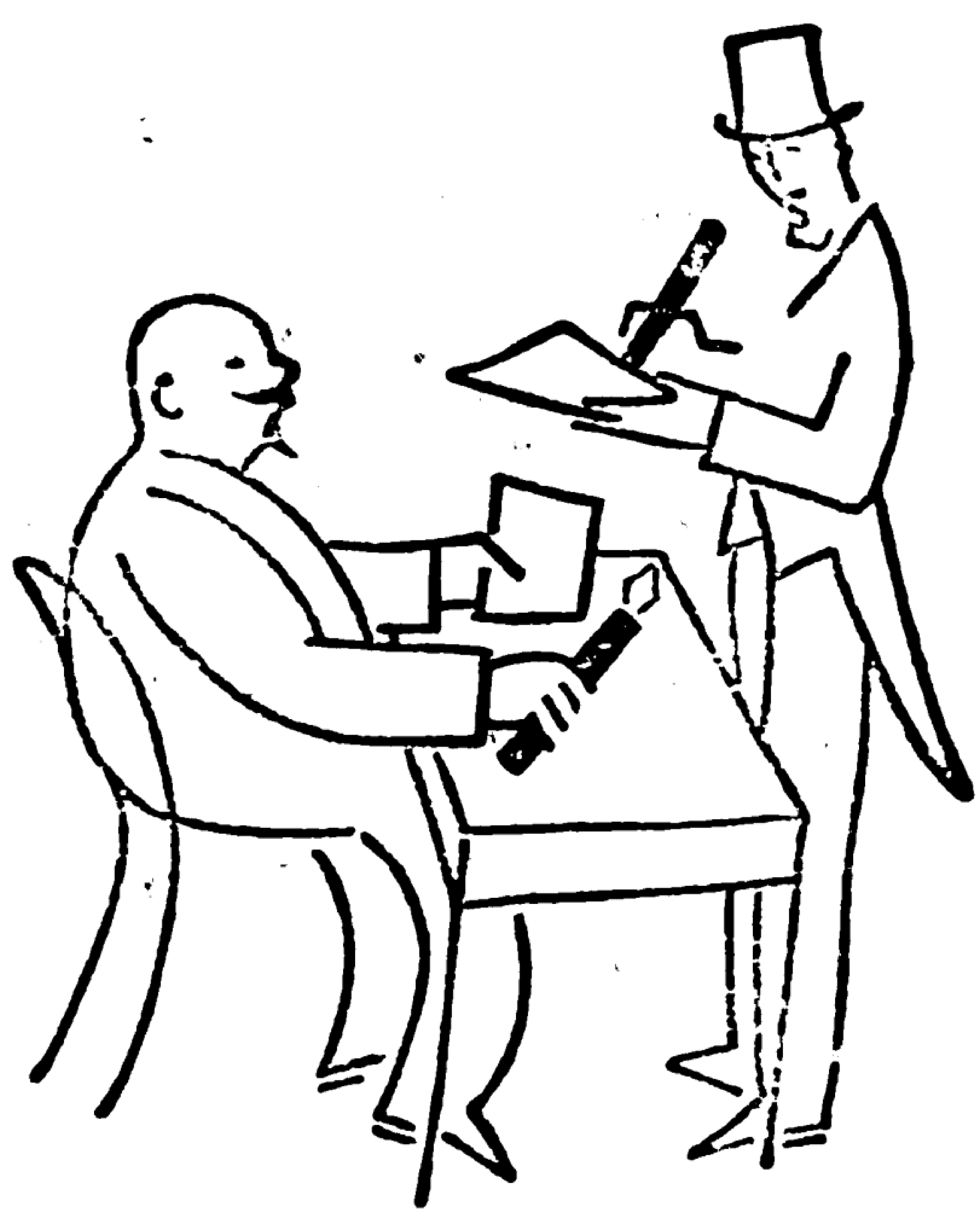
本叢書の内容見本及規定を詳記せる美麗なる册子御申込次第進呈す

研究社英文學叢書部

東京市麴町區富士見町六丁目・電話九段一五七〇・振替二八六〇一

オノトが現はれて惣ての
ビスネスを根本から一新しました
丁度相對性原理が物理學の
一新紀元を創つた様に

オノト萬年筆 金八圓以上
オリオン萬年筆 金參圓五拾錢以上
ウオーターマン萬年筆 金五圓以上
アルビオン萬年筆 金五圓以上
萬年筆用アテナ・インキ 金四拾錢
送料 各金拾八錢



東京神田駿河臺下 （振替東京二八一六番）
大阪東區博勞町 （振替大阪七四番）
京都三條通 （振替大阪一七三番）

東京日本橋通
丸善株式會社
（振替東京五番）

名古屋榮町 （振替名古屋一〇二九番）
橫濱辨天通 （振替東京七四番）
福岡上西町 （振替福岡五千番）
仙臺國分町 （振替仙臺一五番）

大正十一年

中央公論

十二月一日發行

十二月號

第卅七年　第十三號

第四百十六號

國際問題の處理に關する驚くべき無智と無責任

國際問題の處理に關し、私共は今日程無智無責任の甚しい時代は嘗てなかつたと考へて居る。日本が海外諸國と交通し始めたのは、もと左う久しいことではない。従て所謂外交を有つ様になつたのも比較的新しい事だ、而して其の短い時期に於てすら、顧れば隨分と失態を演じたのだが、併しその孰れの失態を擧げたつて、最近の夫れ程に醜と拙とを極むるものはない。年と共に進歩するといふが總ての物の通則なるに、外交のみは獨り我國に於て儼乎たる一例外をなして居るのが妙だ。

失態の一つの原因は、云ふまでもなく世界の形勢に關する當局の驚くべき無智である。當局の總てを無智と誣うるを穏ならずとせば、驚くべき程極度に無智なる一部の當局（例へば軍閥）の意見を外交界に跋扈せしむることだと云つても可い、之等の事實は別に證明を要するまでもなく明白だが、餘りにヒドいから一つだけ例を擧げて置かう。そは先般世間の論評に上つた武器問題に關する當局の打算の大過誤である。長春會議に於て、我國は武器の獲得に垂涎措く能はざるチタ側の腹を見透した積りで、大に彼を讓らしめ得べしと期待したのであつた。そして愚圖々々するなら武器は浦鹽の白軍側にやつて仕舞うぞと豪語したのであつた。口善悪なき俗人は白軍に武器を遣りたいばツかりに長春會議の順調なる進行を妨げたとすら云ふ者もあつた。少くとも其の決裂を聞いて大に愁眉を開いた者のある事實は疑ふことを得ない。斯かる期望の是非は暫く措き、所謂白軍なるものに若干の期待をおきし之等の打算には、抑何の據る所があつたのであらうか。長春會議の決裂後間もなく、帝國駐剳軍隊の未だ撤退を了せざるに、所謂浦鹽政權なるものは見る影もなく潰散して、白軍の殘壘意外に脆弱なることを示したではないか。爲に帝國政府は武器を交附すべき相手を喪ひ、去ればとて先の聲明の手前今更赤軍にやるといふ譯にも行かず、「放棄」の二字に辛くも面目を立てた積りで、而かも周圍の憫笑の裡に、引き上げねばならぬ羽目に陥つたではないか。而して斯の如きもの皆責任ある當局者が赤白兩派の勢力の判定を根本的に

誤つた結果ではないか。

更に遡つて寺内々閣が段祺瑞政府の勢力の打算を誤れる、軍閥の巨頭連が欧洲大戰の當初獨逸の優勢を誤信せる如き、算へ來れば際限はない。近くは張作霖の勢力を盲信し、之を後援するの意味に於て北京に於ける借款問題に斷乎たる態度を示さず、爲に英米と歩調を一にせずといふが如き、亦私に恐る、形勢の誤診よりして復び救ひ難き窮地に陷るなからんかを。

我國外交の歴史に由來失敗の跡は頗る多い。併し其の多くは無智なる民間の盲論に累されたるに因し、當局の聰明辛うじて之を誤しからざるに救ふたことを常とする。今や形勢は全く之に反し、民間の世界的智識漸く聰明を開けるに拘らず、廟堂の君子ひとり著しく蒙昧を極むる樣になつたのは、誠に不思議の現象と謂はねばならぬ。

若し夫れ失態に對する責任感念の欠如に至ては言語道斷といふの外はない。西伯利の出征、金だけでも十數億は使つた筈だ。得る所は日本民族に對する不信と怨恨とのみ。而かも其の基く所は當局の誤算專ら重きに居るのに、彼等は恬として耻ぢる所なからんとする。私かに思ふに、彼等いまだ其の迷夢より覺めず、其の企劃せる所、假令失敗に歸しても、帝國の爲に努めたるの誠意は以て誇るに足ると考へて居るのではあるまいか。若しさうなら、彼等に事を托するは益々險吞の沙汰だと謂はなくてはならない。

我々はこの糺彈に於て現加藤内閣を專ら攻めんとする意思はない。同じ過誤は政友會内閣も其前の寺内々閣も大隈内閣も一樣に冒したのだ。否之を後援した議員は固より、或點まで之を默認した國民も全く責なしと謂ふを得ぬと考へる。何れにしても我々は最近餘りに屢々繰り返した苦い經驗に鑑み、世界の形勢にもつと聰明を開かうではないか。殊に東北亞細亞諸國の形勢に付ては、一層戒心して事實を有の儘に觀且つ受取り、一切の偏僻から脫れようではないか。而して偏僻頑迷に加ふるに邪視盲聽を國民に強ひ、其の大に誤れる形勢の打算に基いて各種の企劃を樹つる者に對しては、鼓を鳴らして排斥の陣を張らうではないか。

而して我等の敵は果して何處に在りや。讀者の愼慮を促す所以である。

中央公論



第卅七年第十三號
十二月號
第四百十六號

創造人の宣言

室伏高信

一

文化の聲は今の日本では最も壓倒的な叫び聲のように見えてゐる。宗教の欲求も時代の最も根本的な動きであるとされてゐる。街頭の人々はこの流行の渦の中に捲きこまれてゐるかに見える。書齋の人もこの流行の意義を掴もうとあせつてゐるかに見える。それは慥に私たちの目前の現象でないとは云はれないのである。それにもかゝはらず、眞に文化と宗教とは彼等によつて欲求されてゐるのであるか。シトラウスの言葉を借りていへば宗教は尚ほ存在するか？更に文化と宗教とは尚ほ存在するか？社會主義は現代世界を救ふべく生れた。運動としての社會主義の勝利は來るべき直前の時代

がそれの生活様式によつて規範されるであらうと云ふことを既に一つの常識にまで堅めたのである。それにもかゝはらず流行の社會主義が世界を救ふであらうと云ふことの希望は何處にも兆候してはゐないのである。文化哲學の最高點に立ちながら人心に訴へる何ものをももつてはゐないやうに、社會主義は、カウツキイの社會民主々義もレニンの共產主義もともに大道演說以上の何ものでもありえない。現代に安住の地を求めてゐる人も、現代から逃れようとしてゐる人も、現狀維持の心理も現狀打破の心理も、革命の蛇蝎を恐れる人も革命の葡萄酒に醉ふてゐる人も、本質的な何ものをも摑むではゐない。人々の眼はたゞ第二義的なものを睨んでゐる。第二義的なものゝうへに化石してゐる。動きつゝあるものはこの第二義的なものである。だから今日は實に騷々しい時代である。到るところに大道演說が叫ばれてゐる。大道演說と大道演說とが爭つてゐる。雜音である。交響樂ではなくて雜音の集まりである。雜音を如何に多く集めて見ても一つの交響樂とはなりえないやうに、第二義的の世界で如何に騷々しくともそれは本質的な何ものをも、若しくは何ものにも反響することはできない。私は文化の聲、宗教の聲、そして社會主義の運動が地上に滿ちてゐる現代において、ほんとうに宗教、文化、革命が存在してゐるかを反問しないではゐられないのである。

善と惡とは絕對的の觀念ではない。現狀維持の心理は現代において時代善を見る。現狀打破の心理は現代において時代惡を見る。時代善と時代惡とが鬪爭する。こゝに革命と反革命とが存在するのである。現代は他の如何なる時代においてよりも革命と反革命との鬪つてゐる時代であらう。それにもかゝはらず革命家は時代惡の本質を理解してはゐない。反革命家は時代善の本質を理解してはゐない。こゝに爭鬪は必然的に外面的となる。外面的なものはまた必然的に破壞的となるのである。しかもその破壞は決して建設の一步であるのではない。外面的な鬪爭によつて曾つて何ものも建設されたことはないのである。それは永久破壞である。マアクスの所謂革命の永久宣言ではなくて破壞の永久宣言な

のである。現代は、反革命家のかゝはる範圍においても、革命家のかゝはる範圍においても、破壞の永久宣言のもとにおかれてゐると云ふことができるであらう。こゝに現狀維持への不滿と現狀打破への恐怖とが橫はつてゐるのである。こゝに現にあるものへの不滿の心理が存在すると共に將に來らんとするものへの恐怖の心理が醱酵してゐるのである。

二

現代の特質は何んであるか。現代の原理は何んであるか。私たちが現代と云ふ時には既に前代を考へてゐる。また來らんとする時代をも考へてゐる。希臘があつてロオマがあり、ロオマの後に中世紀があり、そして近代があり、そして更に新時代も將に來るべく待つてゐるのである。しかも一つの時代と他の一つの時代とは單に文明の相違若しくは文化の相違ではない。マアクス主義の所謂生産樣式の變化でもない。ニイチエの所謂價値の轉換だけでもない。一つの時代と他の一つの時代とにはもつと根本的な區劃が存在しなければならないのである。ヘエゲルのデイアレクチイクに從へば各時代は他の時代の先驅者である。一の時代と他の時代との間には調子においても大局觀においても變化があり、一つの時代は他の時代の特質をなしたものゝアンチテエゼをなすのである。例へば宗教の力の强められた時代には宗教的無關心の時代がつゞくのである。生活の法則は矛盾の鬪爭であつて、その結果は成長である。カアライルは一つの時代を消極、他のものを積極の時代となしたことは人のよく知つてゐるところである。

積極の時代とは信仰と建設との時代である。消極の時代とは無信仰と破滅の時代である。信仰と建設の時代の後には無信仰と破壞の時代がつゞき、神を忘れ、信仰に飢えた時代にはまた所謂積極の時代がつゞくのである。世界史の跡を尋ねるものはこうした時代のテエゼとアンチテエゼとの反覆の事實を見逃すことはできないであらう。しかもそれはヘエ

ゲルのデイアレクチイクにおいて見るやうな一種の進化論をもつて說明したことで充分だとは思はれない。否、われ〳〵は進化論以後においてあまりに多く相似と同一との混同に惱やまされてきたのである。消極の時代が積極の時代より成長したものだと考へることはできないやうに、積極の時代にしても必ずしも消極の時代より成長したものだと云ふの證據はない。われ〳〵は過去の影響を否まない。ある場合にはわれ〳〵の生活はたゞ過去の陰影にしか過ぎないやうな場合もあるのである。しかも新らしい時代がその凡ての古るき時代に對して成長だと云ふとの證據となるのではない。イェリネツクの國家論が、プラトウの共和國よりも成長してゐると云ふことの證據もないし、レニンの獨裁政治論がボオダンの主權論よりも進化してゐると云ふ理由も成立することはできない。世界の歷史は煉瓦の積み重ねではない。世界歷史の齒車の轉回してゆくことは煉瓦の山の不斷に高まつてゆくことではない。ある時には建設であり、生命であり、そして他の時には破壞であり、死である。ラアテナウに從へば文明とは一般的の生活樣式であるに對し、文化は特種的生活原理である。文化は特種的生活原理であるから同時代に別種の文化が存在しえられるのである。それは外部から世界の諸民族を規律する生活樣式ではなくて、しつかりと大地に根を据えてゐる。それは何ものゝ積み重ねでもなくて生命の表現である。それはダイナミツクである。それは建設であり、靈的であり、そしてゲエテの言葉でいへば原始現象である。即ち前代の遺物を盛り上げて出來上つた共同墓地の高まりでもなく、またその共同墓地のうへに立てられた墓石の高さでもない。それは如何なる文化、如何なる時代の文化にしてもゲエテの所謂原始現象なのである。だから直接經驗の世界であり、靈の國であり、生命の國である。從つて如何なる文化においてもその最も根本的なものは宗教と藝術とである。宗教と藝術とがなくては文化は存在することはできないのである。宗教と藝術との時代は文化の時代である。だから文化の時代は信仰と創造との時代である。カアライルの言葉で云へば積極の時代である。希臘の歷史はこの意味に

おいて明らかに文化の記録であり、從つて積極の時代であつたと云ふことができるのである。ところが續いてロオマになるとこの關係は希臘時代に對して一つのアンチテエゼをなしてゐるのを見る。ロオマ文明の精髓はロオマ法である。ロオマ法の精髓は imperium と dominium とである。前者は國家的專制權力であり、後者は私有財産である。一つは政治的であり、他は經濟的ではあるが、ともに建設でなくて破壞である。創造でなくて死滅である。ラッセルの言葉で云ふと創造的衝動の顯現ではなくて所有的衝動の刻印が押されてゐるのである。カアライルの言葉で云へば消極の時代であつたのである。そこには哲學もなく、藝術も起らず、宗教は低劣であり、人々は信仰の代りに實利的、靈的生活の代りに唯物的生活を營むでゐたのである。こゝに現狀維持の典則としての法律學が發達し、破壞の魔力としての權力思想と財産思想とが發達し、後年になつてマキアベリイをしてロオマの偉大なのはその獨裁政治にあつたとまで云はしめたのである、オスヷルド・シペングラアが希臘の時代とロオマの時代とを比較して、前者は文化の時代、從つて靈の時代であるに對し、後者は文明の時代、從つて知性の時代であると云つてゐることは慥に優れた歷史眼であると見なければならないのである。中世紀は淺薄な歷史家によつて屢々闇黑の時代とされてゐる。しかも中世紀においてわれ〳〵は他の如何なる時代においてよりも宗教的信仰と美的創造の豊かな記錄を見ないではゐられないのである。基督教の全盛時代はロオマ帝國の衰亡につゞいたのである。中世紀の哲學が宗教哲學であつたやうに、中世紀の政治史は主として教權の歷史だと云つてもいゝのである。しかもこの時代が藝術の花壇を織りなしてゐたことは中世紀の歷史にまで遡らなくても一度ヨオロッパの赤毛布旅行を試みたものゝ等しく驚きをもつて承認しないではゐられないほどに、スコットランドから伊太利まで、ゲロナからブレスラウまで、今にまだその偉大な輝きを傳へてゐるのである。しかもその藝術はクロポトキンも指摘してゐるとほり、古代希臘のそれと同じように、同胞的協同と相互的統一との表徴であり、生々の活力の

表現である。そはたゞに中世紀藝術の表徴であるばかりではなく、また中世紀における宗教と藝術との表望すべき一致を示してゐるばかりではなく、そこに中世紀における靈的生活の偉大さを見ないではゐられないのである。カアライルの言葉でいへばこゝに積極の時代を見ることができるのである。

現代はかくのごとき時代に續いた。

三

今日の時代は一般に資本主義の時代だと云はれてゐる。階級的に云ふとブルヂョアジイの支配する時代だと云はれてゐる。現狀維持の心理は資本主義の維持を中心として働き、現狀打破の心理もまたこの資本主義の打破を中心にして働いてゐる。現代が資本主義の時代であることに何人も異論はないであらう。しかし資本主義の時代とは如何なる時代であるか。マアクスの云つてゐるようにそは生産樣式の一類型であるのであらうか。若しくは集産主義の一般的承認のように資本の私有、財的個人主義を意味するものなのであらうか。若しくはギルド社會主義者の一部の云ひなしてゐるように現代の特質はその賃銀制度にあるのであらうか。私の見るところではその何れも現代の本質を摑むでゐるとは思はれない。

現代の資本主義の起原が機械の發明にあつたことは何人も異論のない所である。それにもかゝはらず人々は一切此根本を忘れてゐるかに見える。凡ての社會改良家も若しくは社會革命家も資本主義の生産樣式が機械生産であることを認めながら、彼等が社會改良家として若しくは社會革命家として立つ時にこの機械生産をもつて資本主義の本質だと認めてかゝらないとは現代の最も大きな不思議でなければならない。彼等は資本主義か機械生産であることを認めながら、資本

主義の本質を他の何れかのところに求めようとあせつてゐる。目前の最も簡單な事實に眼を蔽ふて何れかの場所から事實に非ざる事實を探し求めようとしてゐる。そしてあるものはそれが生産手段の私有制度だと云ふの結論を探し當てながら、其生産手段の根本が機械であることを知らぬふりをしてゐる。あるものは小さかしくもそれは生産手段の問題ではなくて、賃銀制度だと云ふ。しかもその賃銀制度が何處から生れてきたかの根本的詮索を差し控えてゐるのである。

スペンサアは進歩と機械生産とを同一視した人であつた。彼は機械生産から進歩が來りつゝあり、また益々來たるものだとなしたのである。マアクスは機械生産によつて舊社會、即ち資本主義の社會の自壞するであらうことを豫言した。しかも新らしい時代は奇蹟でもなく、ユトピアでもなく、たゞ古るき時代の胎内に醱酵するのである。舊時代が機械生産によつて支持されてゐたごとくに新時代もまた機械生産のある進化の行程上における產物なのである。だから彼もまた資本主義の本質が機械生産であると云ふことを摑むではゐながらも機械の破壞力を見ないでその創造力を見てゐたのである。ハアバート・スペンサアの社會進化が機械生産の讃美者であつたようにカアル・マアクスのデイアレクチイクもまた機械生産において甲の時代から乙の時代への進化の動力を見てゐたのである。機械の破壞性を見ることの代りにそれの創造性を見たのである。勿論われ〲はわれ〲の先輩のうちにラスキンを、マシュウ・アヽノルドを、モリスを、若しくは近くはペンテイーチエスタアトンの所謂近代世界における最も創造的な思想家の二人若しくは三人のうちに計へられるペンチイのごとき優れた天才的批評家の名を忘れてゐるのではないが、しかも現代の資本主義の潮流もその反抗としての社會主義の流れもともに機械の破壞性を見ないでその創造性を見てゐるのである。こゝに現代とそして將に來らんとする時代との最も恐るべき危險が横はるのである。この危險は最も簡單明白な危險である。それにもかゝはらず、この危險を見るためには人々は天才的直觀、オツサのうへにペリオンを積み重ねた昔の希臘の巨人にだけ許る

された直觀的天才の力がなくてはこの簡單明白な危機を見ることができないほどに機械の魔力は人々の精神と魂とを萎縮させてゐるのである。現代の謳歌者だけではなしに、現代の改革家も革命家もともに現代そのもののメスメリズムにしつかりとその心を握り締められてゐるからである。現代のメスメリズムとは何であるか。

四

科學が現代に始まつたものでないことは勿論であるが、現代を科學の時代だと云ふとも勿論である。現代はその生產樣式においては機械生產の時代であるとともにマアクスの所謂上部構造としては科學の時代である。科學とは何んであるか。科學とはポアンカレの言ふてゐるとほり關係の系統なのである。即ちそは主として一つの分類であつて外見上分離してゐる事實を排列する方法なのである。科學はかくのごとき方法によつてのみ眞理に到達することができると敎へてゐる。科學のための科學ではなくて目的は眞理であると言ふにしても、しかもこの目的の眞理に到達するの道は關係の系統、事實の排列、從つて經驗的に說明しえらるる方法によらなくてはならない。說明なくては客觀性はない。一人より他人に傳達することのできるものでなくては客觀的價値はない。ポアンカレはこういふのである。その意味において現代は科學の時代である。關係の系統、事實の排列、一人から他人へ傳達のできるものが、一人から他人へ、多衆へ、萬人へ傳へられる。一人も他人も多衆も萬人も現代の科學の前にはたゞ一つの事實である。人ではなくて自然である。關係の系統中における一つの鎖環なのである。そは一つの積み重ねである。煉瓦の積み重ねである。一つの系統のうへに他の系統を、一つの發見のうへに他の發見を、郵便貯金のように積み重ねてゆくことができるのである。マッハの言葉を借りていふと思惟經濟、概念經驗、思惟の安定と持續——Denkökonomie, Gedankenexperiment, Beständigkeit und Kontinuität des

Denkens ——とが可能なのである。科學はこの積み重ねによつて天にまで高まることを求めてゐるのである。凡てのものを試驗管の中に入れる。分析する。同一物の系統を作りあげる。それを他の系統に結合する。一度作りあげたものは思惟の安定と持續とである。かくのごとき積み重ねによつて目的の國、眞理にと到達ができるものだと考へてゐるのである。

疑もなく科學は一歩一歩その領域を擴大してきた。曾つて不可能であるとされたものが可能となつた。船には櫓も帆も不用のものとなつた。二階に上るためには梯子段は最早や必要ではない。人間は最早や地上の動物ではなくなつてきた。法律は地上だけでなくて空中を規律する關係にまで進んできた。しかも一歩一歩、科學は常に新らしいものをわれ〱に示してきた。奇蹟は一歩一歩科學の前に征服されたかに見える。神の代りに試驗管が、教會の代りに工場が置き換えられてきた。奇蹟の起らざることが永遠の奇蹟である——ポアンカレがこういつた言葉は勝ち誇れる科學の關の聲であるのである。こゝに科學のメスメリズムが存在する。科學の野心は經驗の世界から出でゝ超經驗の世界を證明しようとする。證明の尺度をもつて超證明の世界を測らうとする。彼等はその系統の積み重ねによつて有限の世界を證明するに止まつてゐないで、更に無限の世界を證明しようとする。星學の法則を發見した彼等は萬物は整正であり、調和であり、系統であるが故に神的であると說くのである。即ち郵便貯金の積み重ねによつてロツクフエラアとならうとする野心家であるに止まらずしてそれによつて神にまで到達しようとするのである。こゝに科學の誤謬がある。しかも一般に認められてゐるのはこの科學の誤謬ではなくて科學の關の聲である。有限の積み重ねによつて無限に到達しようとする科學の野心は現代における最も支配的なメスメリズムである。現代を支配するものはチエツカの權力でもない。ロツクフエラアの金でもない。それは科學のメスメリズムなのである。

現代に宗教が尙ほ存在するとなすことは宗教の本質を知らざるものの無知である。宗教は中世とともに終りを告げ

てゐるのである。シトラウスが嘗つてわれ〳〵は尚ほ宗教をもつてゐるか――Haben wir noch Religion?――と云ふた言葉は單なる唯物主義者の言葉ではなくて現代の眞相に徹した問ひである。勿論基督教も佛教も回々教も尚ほその形を存してゐるのであらう。半野蠻民族の間には今に尚ほ強き宗教的欲望を存してゐるのであらう。しかもわれ〳〵が現代なる言葉を用ゐえられる範圍において宗教は既に死滅してゐるのである。殘存してゐるものは宗教ではなくてその形骸である。ヨオロツパの諸都市においてわれ〳〵は今も尚ほ壯麗雄大な寺院を見ることができる。そは人類の最も誇りある紀念であり、人々はそれ等の建物の前に立ちどまつて仰ぎ見る時にそこに敬虔の神秘に打たれずにはゐられないのである。しかもそはたゞ過去の紀念塔である。現代の支配者ではなくて過去の紀念塔である。ベンチイが言ふてゐるとほりに寺院が中世を紀念するごとくにドレツドノオトが現代を紀念する。現代を紀念するものは寺院ではなくてドレツドノオトである。私たちは現代においてはたゞ宗教の死屍を見せられてゐるだけなのである。私たちは屢々今の日本において宗教が流行してゐると云ふ聲を聞かないことはない。讀物として、大道說教として、特に娛樂的な讀物としての宗教が今の日本の市場に多くの顧客をもつてゐることの事實を私は拒もうとしてゐるものではない。しかもそは眞に宗教的生活であるか、眞に宗教的生活の欲求であるか。ゲエテに從へば宗教的生活の本質は崇敬の感情である。宗教が異教的であり、哲學的であり、若しくは基督教的であるとはたゞこの崇敬の客體の區別である。凡ての宗教に本質的なのは敬虔の感情なのである。その敬虔の感情――Gefühl der Ehrfurcht――を私たちは私たちの生活の何處に求めることができるか。敬虔の感情こそ宗教の本質である。從つて宗教とは神の命令としての義務の認識でなければならない。かくのごとき崇敬たる義務の認識が現代人の何處に求めるとができるか。宗教が市場において流行するといふことは敬虔的義務の認識の前に人々の心が嚴肅となつてゐるとの證據であるのではない。却つてその逆である。その逆に敬虔的

信仰の缺欠を意味する。市場宗教の流行はたゞ人心の一つの不安を反影してゐることは事實である。しかも人心の不安は人心の懷疑を意味する。懷疑は信仰ではなくして無信仰である。懷疑は信仰の始めではなくてその死滅である。プラスでなくてマイナスである。積極でなくて消極である。宗教でなくて無宗教である。今日の私たちの周圍においては宗教の聲を聽くことと喧しいほどである。しかも喧しければ喧しいほどそは宗教的生活の本質から遠ざかつてゐるとを意味する。騷々しい聲が嘗つて宗教の聲であつたとはない。ほんとうのものは如何なる場合においても外面的ではない。市場的宗教の聲の喧しいことは本質的宗教の墮落を意味する。日蓮宗の太鼓の音が高ければ高いほどそれは反宗教的である。ほんとうの宗教的生活は常に死のごとく靜かである。生命の血に漲りながら死のごとくに靜かである。その動きは太鼓の音の動きではなく、流行宗教小說の騷々しさではなくて星のごとくに靜かに動くのである。こゝにプラスがある。ここに積極がある。宗教はマイナスではなく、消極ではなく、死ではなく、破壞ではなく、そはプラスであり、積極であり、生であり、創造である。しかも現代の宗教――と稱せられてゐるものは一つの墓のうへに立つてゐる。アウグストウスの壯大な庭園がロオマの賤民の墓のうへに立つてゐたごとくに現代の所謂宗教は現代の一つの賤民の墓のうへに立つてゐる。そは最早や人間の眞の感激として存在してゐるのではなくて現代の制度の一つの寄生虫として存在してゐる。そは現代の巨大なメキャニズムのうちの一つの寄生虫として餘喘を保つてゐるに過ぎないのである。そは最早や支配する力ではなくて支配される機關である。神ではなくて奴隷である。創造の側にあるのではなくて死の側にある。マアクスが宗教とは一つの阿片だと云ふたのは現代の宗教の眞相を一言のうちに道破してあまりある。バクウニンはわれ〳〵は神の存在を信んじない、若しも神なるものがあるならたゞそれを廢止するまでゝあると云ふてゐるとはたゞ無神論者の獨斷だとしてすましてゐるとはできない。現代において尙ほ神があるといへるならその神とは無限の神ではなくて有限なる

もあのでる。敬虔なあるものではなくて貪慾なあるものである。從つて廢止するとのできない神ではなくて廢止の可能な神である。現代は神によつて支配されてゐるのではなくて見えざる他のものによつて支配されてゐるのである。若しそれを神と云ひうるならばそは破壞の神である。そはLogosではあつてもErosではない。然り、現代はErosの時代ではなくてLogosの時代なのである。プラスでなくてマイナスの時代である。積極でなくて消極の時代である。靈でなくて智、信仰でなくて忘神の時代なのである。獨逸の一社會學者の言葉を借りてきて言ひ現はすと神を忘れ、信仰に貧しく、必然に支配される否定の時代なのである。現代はそれ自身一つの奇怪なるメキヤニズムなのである。必然の法則が支配して敬虔なるものは舞臺から退いた。奇蹟なきことが奇蹟であるごとくに、神なきことが現代の宗教なのである。

われ〱は永く智の世界に住むできた。幾代も幾代も人類は智の世界で生活してきた。生活したのではなくて生活させられてきた。この世界では人々は自分の生活の決定者ではなくてその機械である。否、もつと適切に言へばわれ〱人類は幾代も幾代も生活を失つてゐた。失業者の群は現代の一表徵であるが、しかも現代の凡ての人々は生活喪失者である。智の支配するところに人間の生活は生活ではなくて機械の作用と化した。智の最高の産物は科學である。科學の自然征服戰は目ざましくわれ〱の目前で戰はれた。私たちはまた今日私たちの目前にこの科學の最高産物としての相對性理論なるものを與へられてゐる。しかもそはどこまでも智の産物である。智の最高産物である。アインシタイン自身がいふてゐるとほり彼はあくまでも一つの自然研究者である。自然を如何に研究しても超自然の扉を開くとはできないごとく彼が一つの自然研究者である間は彼の學問は何ものゝ創造であるのでもない。そはたゞ煉瓦の積み重ねである。彼が自然科學者として偉大であることは最早や何人も否むことはできまい。彼のなしとげたことは今日までの人智の限りを盡してゐる。そは一つの奇蹟にも近いことなのである。しかもそは何の奇蹟でもない。そは經驗の世界において證明

の可能な範圍である。彼は恐らく前代の如何なる科學者よりも巨大な理論を完成したに相違ないのである。ニユウトンよりもガリレオよりもコペルニクスよりも彼の名が一層高く秀でゝゐることは許るさなければならないであらう。しかもアインシタインがかゝる地位を許るされるとしてもそはアインシタインが世界の今日までの凡ての科學者のうちで最も偉大な天才であつたと云ふとの證據にはならない。そは彼がニユウトンよりもガリレオよりもコペルニクスよりも後から生れたことを意味する。科學とは煉瓦の積み重ねを意味してゐるにほかならないからである。從つてアインシタイン以後の科學者は更にまた彼の功業のうへに他の一つの煉瓦を、若しくは尙ほ幾つかの煉瓦の斷片を加へることが可能であらう。しかもこの煉瓦の斷片を如何に積み重ねても天に到達することが不可能であるところに科學の限界が存在する。繰返すことの可能なものを幾百、幾千回繰返しても繰返すことの不可能なものにと到達することはできない。相對性理論が人智の最高所に立ちながら人生と何の接觸もないのはこのためである。アインシタイン自身がガウスの科學においてよりもドストエフスキイの藝術において感激をもつてゐると云つてゐることは科學者の僞らざる自己評價であると見なくてはならない。ラアテナウの分類に從へば智の世界はたゞ現象の舞臺なのである。智は世界のほんとうの舞臺、人生の眞を把握し、秘密の扉を開くべき神の使ではなくて、たゞ扉の前に鍬をもつて控へてゐる切符賣りであるに過ぎないのである。しかも現代はこの切符賣りの支配する時代である。現象の舞臺には生命の舞臺と云ふレツテルが貼り付けられてゐる。內容を人々は問ふてゐるのではない。人々はレツテルの如何を問ふてゐるのである。智の世界は本質の世界でなくてレツテルの世界である。人々の問ふところは商品の品質が第一であるのではなくてそれに卓越のレツテルが貼られてゐるか否かを問ふのである。會社の重役が書記を採用するにはその人の能力を問ふのではなくて何處の學校を何番で卒業したかを問ふのである。凡てのものが試驗管を通らねばならぬ。凡てのものが分析されねばならぬ。同一物が

系統され、他のもゝの連續が他の系統を形らねばならぬ。人間の特性は失はれて凡ての人がある程度の智者にまで引き上げられた。そして一人の天才すらも出てはこない。天才は現代にとつては一つの反逆者である。ゲエテは今日も尙ほ獨逸の國民的詩人として彼の名は階級の區別を越へて崇拜されてゐる。タンネンベルクの紀念日が今日の民主的の若しくは半社會主義の獨逸政府によつて禁んぜられながらゲエテの紀念日は獨逸の全土において祝福されたのである。しかもゲエテの思想の何ものが現代の獨逸の人心を動かしてゐるであらうか。資本王スチンネスの何千分の一の勢力を彼の思想がもつことができるであらうか。基督が若し今日の世界に生れたとしたら彼は革命家として紳士階級の指揮をうけずにはゐられないであらう。老子は今日に至つて尙ほ日本の安寧秩序を紊すものとされてゐるではないか。現代のメキヤニズムは一切の天才に反逆者の名を與へずにはおかないのである。獨り天才だけではない。現代のメキヤニズムに調和することのできないものは一切が反逆者である。エムマ・ゴオルドマンとアレキサンダア・バアクマンとの二人は平凡な二人のアナアキストである。彼等の思想のために亞米利加の資本主義から反逆者として追はれた。そしてせめてもの安住の地を「勞働者の國」——彼等の生れた共産ロシヤに見出すべく太西洋を横切つた。しかも「勞働者の國」も亦た一つのメキヤニズムでなくてはならなかつた。二人の平凡な無政府主義者は廣大な世界にその身の置くところさへもないでゐるのである。人格が滅ひて機械が殘つた。現代文明が機械文明であると云ふことはそれが否定の文明、破壞の文明、死の國であると云ふことである。私たちは正しく死の都に住むでゐるのである。しかもそれの死の都であることさへも意識することのできないまでに化石的な死の都に住まされてゐるのである。私は伯林にゐる間に一日フリドリツヒ街のある劇場で一人の老人の歌ふのを聽いた。歌は悲しい故郷の歌であつた。私は伯林のことを思出すたびにこの悲しい故郷の歌を忘れることができないでゐる。戰に敗れたものゝ故郷を思ふ心は人間の眞情の流露である。しかも故郷の

荒廢してゐるのは獨逸だけではない。墺國だけではない。戰敗國も戰勝國も若しくは中立國の人たちも今日は完全に彼等の故郷を失つたのである。今日の文明は故郷喪失の文明―― heimatlose Zivilisation ――なのである。シペングラアが現代文明を論んじてそれが一つの世界都市の文明だといふてゐることはこの意味において慥に卓見である。

世界都市は一つの吸血兒である。倫敦に紐育に巴里に伯林に世界都市は世界の吸血兒である。そこには創造的な何ものもなく信仰的な何ものもなく、機械と屑と虚榮とぴかぴかしたまやかし物とがその前を行きつ戻りつゝしてゐる奢侈婦の群とともに物質文明の末期を彩つてゐる。中世紀の寺院の偉大なる壯嚴さの側らに五層樓の石造、煉瓦造、若しくはペンキ塗りが監獄の塀のごとくに並んでゐる。凡ての家が一軒のごとくである。一軒の家を見て凡ての家を判斷することができる。家の連りは質の高まりではなく量の重なりである。そは繰返すことのできない何ものでもなくて凡てが幾度でも繰返すことのできるものである。中世紀の都市の藝術的建築が一度破壞されると再び繰返すことのできないとの反對に世界都市の建築は幾度でも繰返すことができるのである。そは人間の創造ではなくて機械の產物である。アメリカの諸都市になると人があつて都市があり、都市があつて地圖があるのではなくて先づ技師があり、次に地圖があり、そして建物の列があり、町名があり、最後に人があるのである。この憐れむべき人は常住坐臥必ず幾くつかの鍵を携へてゐる。家を出る時、家に入る時、室を出る時、室に入る時、彼等は鍵によつて彼等の行動を始め、鍵によつて彼等の行動を終らねばならぬ。退屈な歲月、機械的な行動、死せる生活、そは實に人間の堪ゆるところではないのである。往來を行く商人の狡猾な眼、月給取りの失望した顏、勞働者の疲れた足、更に慘じめな失業者の群、世界都市は人間の心には堪ゆることのできない傷ましい地獄なのである。ホッブスが人は人にとつて狼である―― homo homini lupus ――と云つてゐることが世界の都市の人と人との關係なのである。この堪えがたい生活は必然的に官能的享樂の生活を

伴はないではゐない。倫敦に巴里に伯林に、退屈な都市生活の一面は動物的な官能享樂である。カフエに倶樂部にタンツエンハウスに人々はたゞ瞬間的肉慾を求め、官能の痺酔を求め、一日は一日より强烈な物的刺激のうちに自己を忘れることによつて生活の悶えから逃れてゐるのである。一言にしていへば現代の生活は否定の生活である。

宗教の聲が聞えることのないのでないように、文化の聲、哲學の聲、若しくは藝術の聲、更に革命の聲も聞えてこないことはないのである。しかしそれがほんとうの聲なのであらうか。市場宗教の喧しい聲が却つて反宗教の聲であるように文化、哲學、藝術、革命の聲もたゞ反文化、反哲學、反革命の聲ではないだらうか。特に私たちは私たちの周圍においていろ〳〵な意味で文化と云ふ聲を聽かされる。しかもそは所謂文化生活、文化村以上の何ものでもないようである。言葉を代へていへばそは物質生活の整頓以上の何ものでもない。そは物質生活の科學化以外の何ものでもありえない。即ち人間生活の機械化の完成なのである。もつと適切にいへば生活の非人格化の完成なのである。そは文化の生活ではなくて反文化の生活である。文化喪失の完成である。現代のプテイ・ブルジョアはロオマの自由民のようにその機械的生活の整成に急がしいのである。そは明らかに末期文明である。プテイ・ブルジョアの末期を表徴するとゝもに現代文明の末期を表徴してゐるのである。私たちは現代の哲學においても同一の現象を見ることができる。リツカアトがその「生命の哲學」の小册子を書いた時に、彼はこの生命の哲學を一つの流行思潮だとなしてゐる。そしてこの流行思潮に痛擊を加へてアリストウトルの言葉を引用しながら結論する、最も深く考へることが最も多く生命的であるのだと。勿論私たちは生命哲學の一つの流れを見ないことはない。先きにニイチエがあり、デイルタイがあり、ベルグソンの哲學が汎く行はれ、そしてこの世界大戰の後半において、年を同じくして獨逸に二人の非職業的な、そして反主知的な哲學者、哲學者と云ふよりは豫言者の出たことを見た。オスヷルド・シペングラアとヷルタア・ラアテナウの二人がこ

れである。しかもこの二人の反主知的預言が獨逸の讀書界を征服するほどの勢を示したのを見た。講壇哲學者はこの素人獵師のために顔色を失つたのである。それにもかゝはらず講壇哲學の間ではリッカアトの心配は單なる杞憂である。そこには智的哲學が講壇の眞中に立つてゐるからである。リッカアトは哲學それ自身が科學だと云ふ。彼の「哲學體系」はまだその一卷を出したゞけではあるが、彼がこの第一卷の「科學と眞理」のうちで哲學それ自身が科學であるといふてゐることは彼の全哲學の根本信條である。この信仰のもとに彼は哲學の體系を組織すべく彼の老後の全力を注いでゐるのである。この體系の整成、概念の建築こそ彼の哲學の凡てゞあるばかりではなしに、それは實にブルジョア文明の末期における代表的な哲學的精神なのである。それはロオマのストア哲學が人間の靈を文字なき扁額だと云ふたやうに知識の積み重ねによつてのみ眞理に到達しようとするのである。彼にとつては體驗とは他人に傳へることのできないものであり、從つて學的の方法とはなりえないのである。彼の「哲學の體系」の最初の方でいふてゐるところによれば直接體驗の世界は科學人にとつては一つの混亂なのである。彼の哲學の努力はこの混亂の整成、概念の系統立て、知識の積み重ねなのである。しかもこの知識の整成、概念の建築が進めば進むほど哲學は生活から遠ざかつてゆくのである。リッカアトの哲學が實に體系の構成において殆んど完成の域にまで進んでゐるにかゝはらず少しもわれ〳〵の心に訴へることのないのは決して偶然であるのではない。それは生命の哲學でなくて否定の哲學であり、積極の哲學でなくて消極の哲學であるからである。

　道徳の墮落は現代の藁標である。ロオマが道徳の代りに法律を發達させたやうに、現代は道徳を失つた時代である。道徳は創造人の規律であつて機械人の規律ではありえない。機械人の前には法律はある。命令はある。しかし道徳はありえない。若し現代に行はれてゐるものが道徳だと云ひえられるならばそれはカアペンタアの謂ゆる「この事が正であの

事が不正だとの道德」―― this-thing-right-and-that-thing-wrong-morality ――なのである。しかもこの事が正であの事が不正であると決定することの動機は再びロオマにおいてのように imperium と dominium との原理によつて決定されるの時代となつたのである。權力と財産とは現代においては最高最大の二つの神であり、しかもまた一つの神である。道德が支配するのではなくて權力が、神が命令するのでなくて財産が現代に命令する。そはたゞ權力者が人民を、財産家が貧民を支配するのではなくて權力者も權力によつて、財産家も財産によつて支配されるのである。何故なら權力者は權力から自由であるのではなく、財産家は財産から自由であるのではなく、そは弱者と同じく、貧乏人と同じく權力渇仰、財産渇仰のメスメリズムのために、權力と人格、財産と人格とを取り代へてしまつてゐるからである。現代においては服從者だけが奴隷であるのではない。貧乏人だけが奴隷であるのではない。權力者も財産家も服從者も貧民も一つの機械的作用の前に彼の自由を喪失してゐるのである。智が舞臺の中央に控へてゐて靈魂は舞臺の外に萎縮してゐる。人間は忘れられて機械が鬨の聲を揚げてゐるのである。財産も權力もタウネイの所謂職分を喪失してたゞ破壞の力として働いてゐる。一切のものが一つの巨大なメキヤニズムの建設のために働いて凡ての人間は奴隷と化してゐるのである。昔の埃及人がピラミツドを建てるために奴隷とされたように、昔のロオマの一貴族が一尾の珍魚を求めるために五百人の奴隷を海中に送り出したように、現代の神は、神なき神は一つの巨大なメキヤニズムを建設するために萬人を奴隷とし、萬人を海に送り出しつゝある。社會學はこれに應ずるためにデュルクヘイムをして社會は個人のあらゆる綜合よりも偉大だと云ふの理論にまで到達せしめ、政治學は國家法人格說の荒唐無稽にまで到達したのである。前代の如何なる時代においてよりも智と系統と企とが發成して靈と自由と個とが萎縮してゐるのである。現代はそれゆえに破壞の時代、消極の時代、否定の時代であらねばならぬ。

宗教が科學によつて、信仰が智によつて代へられただけではない。教育も藝術も、あらゆる文化の形態は一樣に巨大なメキヤニズムの一作用にまで墮してしまつてゐるのである。教育は各國において、ラツセルがその小冊子のうちで近頃雄辯に指摘してゐるやうに、一つのプロパガンダにまで墮してゐる。教育家は生命保險の勸誘員と撰むところのない唯物的なプロパガンデイストにまで墮してゐるではないか。藝術家と自稱する人たちはその小さい集團の中でブルヂヨア藝術と云ひ、プロレタリヤ藝術と云つて彼等特有のロツグロオリングとともにまた彼等特有の仲間喧嘩に急がしく見えてゐる。しかも謂ふところの藝術が現代において如何なる地位を占めてゐるのであるかを靜に反省するために十分か二十分かを費して見るがいゝ。劇は活動寫眞によつて、音樂は蓄音器によつて、繪畫と文學とは印刷機械によつて征服され盡して殆んど餘ますところないまでに落魄しきつてゐるのではないか。藝術は最早や原始現象ではない。それは繰返すことのできないものではなくて機械の破れても、活字の磨滅しても、幾度でも幾度でも、繰返すことのできるものとなつた。そこに藝術は質の世界から量の世界へ、靈の世界から智の世界へと墮してしまつたのである。

機械化の作用は人生のあらゆる方面を征服し盡した。丁度爲替相場と云ふ經濟上の一つのメキヤニズムが今日のヨオロツパの物質生活の運命を翻弄しつゝあるように、機械化の作用が、政治に經濟に法律に道德に宗教に學問に藝術に教育に、人生のあらゆる生活內容を腐蝕し盡して信仰は失はれ、美は色褪せ、自由は地を拂ひ、そして一つの巨大なインフエルノが死の冷やかな手を差しのべてゐるのである。

創造人は危機に瀕してゐる。

科學的社會主義は革命を叫んでゐる。革命の聲は文化の聲、宗教の聲のごとくに喧しく叫ばれてゐる。しかも凡ての革命家は考へて見なくてはならぬ。必然の法則から自由が生れるであらうか？彼の求めてゐるものは現代のメキヤニズムへの抗議ではなくてそれの完成への要求であるのではないか。然り、消極の完成、否定の完成であるのではないか。科學的社會主義は聲を高くして革命を叫んでゐながら現代のメキヤニズムの中から一足だも出ることのできない憐れむべき靈魂喪失者ではないか。ギルド社會主義は、少くともオウレイヂが一九〇七年に彼の紀念すべき論文 Politics for Craftsman を書いた時に、彼の主張は現代のメキヤニズムへの偉大なる抗議であつた。しかもそは一歩一歩その本來の精神から遠ざかつて今はコオルの妥協主義へと墮してしまつたのである。

六

私は私たちの運動が再び三十年前の Arts and Crafts movement へと復歸しなければならないことを思ふ。私は今までこゝに詳しく私の言はんとすることをいふてゐることはできない。私はウオルタア・クレエンが一八九三年に宣言したところに創造人の宣言を見出すことに止めるのほかはない。クレエンは彼等の運動の精神を宣言して曰く、この運動はある意味において硬き機械的習俗的生活とそして美に對するそれの無感覺とへの反抗を代表する。そはその安價がその生産者の生命とそして消費者の墮落とによつて償はれてゐるまやかし商品を生産する所謂工業的進歩への反抗である。そは人間を機械に化することに對し、藝術における人工的差別に對し、そして市場價値または利潤の可能性を藝術價値の主なる標準とすることに對する反抗であると。彼等の運動は勿論一つの藝術運動であつた。しかも私は創造人の一切の宣言がこのうちに書かれてゐることを思ふ。そして私たちが再びこの精神にと歸らねばならぬことを思ふ。

（一九二二、十一、六）

小學教員及下級警察官の優待法と其質の改善案

法學博士 堀江歸一

報酬と効用との關係

今日の經濟組織に種々の缺陷の存することは明瞭の事實であつて、其數の多きは殆んど屈指遑なき次第であるが、就中缺陷の最も大なるものとして、私の常に感じて居るのは勞働なり、勤勞なりに對して支拂はれる報酬が其勞働又は勤勞の社會全般に與へる効用に一致せず効用の極めて大なる割合に報酬が頗る薄かつたり効用の必ずしも著しくないのに、報酬が厚かつたりする事實が社會到る所に出現し、効用と報酬との關係の頗る亂雜である一事に外ならない。而して私は此亂雜である著明なる事例を小學教員並に下級警察官の俸給に於て、認めるのである。

アダム・スミスは國富論の第一編第一章に於て、勞働報酬に高低の差を生ずる原因として、五種の事情を擧げ、第一仕事自身の愉快であるか、不愉快であるかと云ふこと、第二仕事を修得する難易並に費用の多寡、第三仕事の繼續的性質を持つものか、斷續的性質を持つものかと云ふこと、第四仕事に當る人に置かれる信任の大小、第五仕事に於ける成効の確實であるか、不確實であるかと云ふことを以つて、是等の事情に當るものであるとした。私も多くの場合を通じて、勞働報酬の高低の決せられる原因は右の諸事情に外ならぬことを考へる。アダム・スミスは右の原則を適用する對象として、勞働に對する賃銀を選んだのであるが、獨り賃銀ばかりに止まらず、稍や高尚なる勤勞に對する報酬即ち俸給の類に高低のあるのも、大體以上の原則に示された諸種の事情に依るものと考へられる。而して經濟社會現在の狀況から觀察すると、以上の五原因を以つてして

は、ただ全般の事情を説明するに足ると思はれない、少なくとも、

第六、他の有利なる仕事に轉ずる梯梯と爲るを得るや否や

第七、職業に伴ふ社會的尊敬なり、社會的榮譽なりのあるものであるかどうか

第八、職業に就いて立派に之を爲し遂げ得る人の多いか、少ないか

第九、職業に關聯して、生命や健康に危險を及ぼす虞れはないかどうか

と云ふ四件を追加しなければならないと考へる。而して以上の諸條件たる、單に勞働報酬の高いとか、低いとか云ふ所以を説明する用に供されるに過ぎない。假令ひ或る種類の職業に對する報酬が如上の諸事情に支配されて、低いとして吾人は其低い所以が經濟學上から説明されると云ふ故を以つて、之に滿足す可きものであるかと云ふに、決してさうではない。若しも茲に或る種類の仕事があつて、現在之に對して支拂はれて居る報酬は甚だ低い、然し其仕事の社會に及ぼす效用の大である場合には、其大なるに應じて、國家の力に依つて、或る程度まで報酬を引上げさせることを計畫しなければならぬ次第である。自由放任主義の盛に行はれた時代に於ては、世間は學者が勞働報酬の低き所以を説明すれば、之を聽いて滿足を表して居つたかも知れないが、經濟思想の根柢の變化した今日に於ては、本來低かる可き報酬であつても、或る社會的必要の存する場合には、國家の力に依つて、之を引上げることを辭さない、而して之を引上げるに當つて、其標準とする所は之を何れに置く可きかと云へば、其事は專ら仕事の社會に及ぼす效用の大小に繋がらなければならないのである。

小學教員は仙人に非ず

我國に於て小學教員の俸給の薄菲であることは、掩ふ可からざる事實である。近年此事が大分世間の問題に上り、一般的に各地方團體を通じて、增俸が行はれたし、恩給法とか、年功加俸とか云ふような制度も制定されるように爲り、一時に比較したならば、餘程待遇の改善されたことは先づ喜ぶ可き次第であるようなもの丶、尙ほ私は第一時勢の進歩と共に、勤勞に對する報酬の一般に增進しつ丶あること丶、第二初等教育を擔任する者の社會に對する責任の重大なること丶、第三初等教育の效果の社會に及ぼす影響の著しきこと丶の、三點に着眼して、小學教員に對する待遇が果して實質的に改善されたものであるかどうかを考へなければならぬ。晩近幾年の間を通じて、我國

に於て國民生活の程度の向上したと共に、生活費の増嵩したることの著しく、爲めに國民生活の壓迫される傾きの大なるは私の屢々論述した所である。我國に於ては敎育家を遇するに、一個の仙人を以つてする趣きがある。敎育家であるから、金錢などは澤山要らぬと云ふ考が社會の到る所に行はれて、已まない。是は封建時代に儒者とか、讀書人とか云ふような階級に屬する者が殊更に豪放磊落を裝ひ、家を治めず、財を貯へず、淸貧の裡に樂を求めることを得意とし、世人亦此點に就て、讀書人に權威を認めて居つた當時の餘習に過ぎない。然しながら封建時代に於ても、儒者で相當の名聲を博した人々の內には諸侯に聘されて、豐富なる食錄を給され、一生涯を通じて、安樂に研學に從つて居つたし、又時に藩政に參與して、社會的に權勢を揮つたりした人も少なしとしない。儒者であり、讀書人であるから、必ず待遇が薄く、隨つて貧乏が付き物でなければならぬと云ふのは、何としても當を得た議論とは考へられないばかりでなく、如何に尊敬す可き敎訓を說いたり、言論を述べたりしたとした所で、其人の一身の獨立が全うされず、生活が甚だ不安であつて、何時他人に迷惑を掛けたり、他人の厄介に爲つたりすることの測り知れざるような次第であつたならば、其人の敎には三文の價値すら、之を認めるを得ない。

小學敎員をして淸貧に安んぜしめようと云ふ考も封建時代の餘習として、今日まで續いて居るやうに見受けられる。小學敎員の內に、自ら淸貧に安んじて、他を顧みないと云ふような風格の人があれば、其れまでの話であるが、斯る仙骨を帶びた人は當世に珍らしいし、又假に斯る人があつたとしても、此仙人型の人物に子弟の敎育を託することが果して當つて居るかどうかは、一個の疑問に屬する。小學敎育としては、矢張り圓滿に常識の發達した人が之に當ることを必要と考へる。卽ち斯る人であつて、朝夕接觸する兒童に善良なる感化を及ぼし、彼等の心身を完全に發達せしめるを得る道理であつて、畸形的人物であつたならば、必ず兒童に及ぼす感化の方嚮に間違を生ずるものと思はざるを得ない。既に小學敎員にして、常識の發達した人物であるとすれば、常識と共に、物質的欲望の備はつて居ることも、亦當然の事實としなければならず、而して物質的欲望の滿足されない場合には、其人をして他の有利なる職業に轉ずることを工風するに至らしめるであらう。

小學敎員亦厚俸を要す

或は從來小學敎員の待遇の薄いことを指摘する一材料として、彼等の或る者は自己の出生した居村の學校に奉職して居り

農家の次男なり、三四男なりとして、自分の分讓された土地を耕作するなり、又は其地代を領收するなりして、家計を補つて居り、教員は名譽職同様の考で之に當るのであると云ふ事實が擧げられる。然しながら斯の如きは中産以上の農家の子弟が吻數奇にも小學教員と爲り、居村附近の學校に奉職して居る場合に限つて、適用される例であつて、全國を通じて斯る好都合の地位に居る者が果して幾人を數へるであらうか、其數に於て甚だ乏しきを知らざるを得ないであらう。又幸に自己の住宅附近に若干の田圃を持つて居つたとした所で、家計の補ひをするまでに、之を耕作することが教員一家の勤勞だけで成し遂げられるとも考へられない。又之と同様に男教員と女教員とが結婚して、夫婦に爲つて居る場合には、兩者の所得を合して、家計を營むことが出來るから、双方に對して、俸給は薄くとも差支ないと云ふ考も亦懐かれて居るようである。此種の考は或は公然主張されて居らないかも知れないが、實際問題として着目すると、俸給の高い男教員を使うよりも、俸給の安い女教員を使う方が教育費の負擔を輕くするに足りる、女教員は概して勤務年限の永きを通じて、奉職するものとは考へられない。結婚、分娩、育兒、家庭に於ける雜用等の關係から、短期間に退職し、随つて恩給年限に達する者が少ないと云ふような考が地方團體理事者の頭に在つて、女教育の任用される範圍の次第に廣く爲る傾きのあることが掩うべからざる事實であるとすれば、女教員は今日の處では當然薄給を以て、或は男教員よりも低い俸給を以つて、任用される運命を擔つて居るものと解される。斯くて女教員は其本性の女性であるの故を以て、薄給を強ひられ薄給の女教員が一人前の教員の仕事をする爲めに、男教員の俸給まで壓迫されるに至り、結局男女教員の夫婦者が共に働いて、二人で二人前より以下の報酬に安んじなければならぬことゝ爲るのである。

斯の如きは勤勞に對する報酬の公正を重んずる原則から考へたならば、不合理の甚だしきものと言はなければならぬ。勤勞に對する報酬は勤勞の價値を標準として、決定され可きものであつて、勤勞を爲す者の性の差別に據る可きものではない。女教員であつても、其勤勞が男教員と同等程度の能率を現はす以上は、男教員に給與すると同一額の給與を以つてするのが當然である。或は女子の生活費の男子よりも低廉であること、女子が父兄の家に寄食して、獨立の家計を營まないことなどが理由に爲つて、女教員の俸給が低い程度に置かれる事情もあるようであるが、女子の生活費の男子に比較して、低廉であることは、多年女子の生活が社會上に種々の束縛を蒙つて居つた結果であつ

て、女子解放の行はれるに隨つて、其生活費が漸く增加し來るのは、當然の數であり、又斯く報酬を豐にして、女子の心身を發達せしめることが社會改良の一捷徑と爲るのである。若し夫れ女教員の在職年限が短かくて、恩給年限に達しない內に、退職するから、結局廉價に勤務を使役し得ると云ふが如きは、公共團體自ら女教員の勤勞を奪略し、搾取することを語るものであつて、私の最も不公正の甚だしきものと認めざるを得ざる所である。アダム・スミスは曩に述べた通り、仕事の繼續的性質と斷續的性質とを以つて、賃銀の高低の決される一原因であるとし、繼續する仕事に於ては、賃銀は低く斷續する仕事に於ては其高いことを當然とする道理を說明した。時に多少の除外例はあるが、大體に於ては、眞理と認められる。此點から女教員の勤勞を考へると、其仕事の繼續的でなくて斷續的のものであることは、爭う可からざる事實に屬する。隨つて彼等の俸給は或る程度まで高くして、姙娠分娩等に於ける休業期の生活費を支へたり、又身體健康の狀況から見て、男子よりも早く退職することの必然の運命である以上は、退職後の生活を安んずるを得る餘裕を求めるに至らなければならぬ道理である。

小學校教員たるの難易如何

然らば男子の小學教員には生活費を支辨する財源を有する者があるとか、教員夫婦共稼ぎであるとか云ふような理由を以つて、彼等の薄給を辨解するが如きは、當らざるの甚だしきものである。然らば彼等の薄給を辨解する理由として、何が最も重きを爲すかと云へば、アダム・スミスの擧げた諸條件中の第二の仕事を修得する難易並に費用の多寡が人々の考に浮ぶであらう。即ち今日小學の正教員と爲るには、尋常師範學校を卒業すれば宜しいし、而して在學中は公費生として、公共の負擔に依つて、修業の目的を達することが出來るし、准教員に至つては、此以上に簡單なる方法に依つて、就職する便宜が開かれて居るのである。斯くて世間では小學教員と爲るのは事甚だ容易であつて、費用を要しない、隨つて其報酬も低廉で差支ないと云ふ說が生ずるし、又斯く容易に少なき費用を以つて、養成されるものであれば、其供給の乏しきに苦しまない、淘汰革職勝手次第であると云ふ考も出て來るかも知れないが、私は斯の如き說を以つて、良教員と不良教員との差別若しくは此差別に依つて、教育上に生ずる効果の相違を辨へざるの甚だしきものと認めざるを得ない。即ち師範學校に於ける數年間の修業は人をして國家の公認する小學校教師たらしめるを得るであらう。然しながら其人を以つて、直に良教員と認めるを難しとしないで

あらうか。良教員たる資格の如何に就ては、世間に種々の異説が行はれるであらうが、私は敢て其資格として、第一相當の人格者であつて、單に少年子弟の品性を陶冶する上に、感化を及ぼすばかりでなく、一村一郡に於ける模範的人物として、民衆の尊敬を集めること、第二學識に就ては、必ず專門學者に望むが如き深く又廣きことを要しないが、師範學校に於て修得した以外に、何か獨得の知識を收め殊に現代の思想に對して、相當の理解を持つこと、第三地方に頻發する種々の爭議殊に家庭關係に於て起る爭議に對しては、和解者と爲り、調停者と爲つて、地方の平和を維持するに資することの三點を擧げたいと思ふ。而して小學教育が斯る資格を兼ね備へるには單に師範學校に於ける數年間の在學を以つて足れりとする道理はない。一方に職を小學教師に奉じつゝ他の一方に於ては、專心知徳を研き讀書思索に依つて知識を吸收するのは勿論、講習會に出でゝ、先覺者專門家の所説を窺ひ社會諸般の事相に接して、正しき解釋を下し、更に人としての修養に專念する如きは小學教員の正に爲す可き所であつて、斯くてこそ初等教育家としての面目を發揮するを得るのである。其れには現在の如き貧しき待遇法を以つてして宜しいであらうか。小學教員が地方に於て中流以下の生活すら營むを得ずして、常に生活難に脅かされて居る。地方名譽職や、地方有力者の歡心を收めなければ立身を望み難い、彼等の歡心を得る爲めには、彼等の子弟には、特別の取扱をすることを心得なければならぬ、日々の教案を作り教材を整へるに、少なからぬ時間と勞力とを要し、讀書修養の餘暇を得るとか、子弟の個性に注意を拂つて、長所の發揚を工風するとか云ふような餘裕を持つを得ない有様であつて、何として如上の資格を具備し得るであらうか。小學教員を以つて、其任に就くに最も易く、又費用の最も少なきものであるとするが如きは、小學教員の本質を誤解した説であつて、最良最善の小學教員と爲り、而して其任を盡すに遺漏なきことを期するからには、小學教員こそ、最も困難なる職業であり、又職業を營む上に於て、相當の費用や、勞力を要すものとせざるを得ない。人間の職業として、文部大臣と爲るが如きは、必ずしも難い事ではなかろう。現に今日まで教育とか、文政とか云ふような事柄には、何の交渉を持たない、又些の豫備知識を持たない政治家などが突然文部大臣の地位に就いて、相當の成績を收めた一事を以つてしても、事の一斑を解されるであらう。例に出すのは聊か氣の毒でもあるが、中橋徳五郎氏の如き學校昇格問題の解決に蹉跌した爲め、近代の文部大臣として、他に比類なき程の失敗を演じた。然しながら若しも假に中橋氏を小學校の校長とし、教員と

したならば、如何であつたらうか。文部大臣として、演出した失敗よりも、更に大なる失敗を暴露したことであらうと想像される。小學校の教員たり得る者の多數あることは、伴食文部大臣の候補者の天下に多きと同様であるが、良教員の少なきに至つては、是れ亦理想の文部大臣の得られ難いのと同一の嘆を免かれないのである。然らば私が蓋に追加した勞働報酬の高低を決定する條件の第八から考へたならば、小學教員にして眞に優良なる人に對する報酬は必ず伴食文部大臣の俸給以上に置くか然らずんば伴食文部大臣の俸給を斯る小學校教員の給與以下に引下げるか、孰れかの一にすることが論理上當然の歸着點と爲るのである。然るに今日我國に於ては始めから小學教員に對する待遇を薄くし、斯くて優良教員の輩出することを妨げて置き、豫定通り優良の教員の少ない場合には其少ないことを理由として、不備の教員に對する待遇を薄くして、顧みざる次第であつて、錯誤に錯誤を重ねて、遂に改むる所を知らざる者と云はなければならぬ。

誤まれる優待法

或は當局者をして云はしめたならば、政府と雖も、小學教員に對して、相當の優待法を講じて居ると辯ずるかも知れない。即ち近年小學校長中、永年勤續者に對しては勲章を授與するとか、奏任官の待遇を賜はるとか云ふやうなことは、彼等に對する破格の優遇であつて、彼等の勤勞に少なからざる刺戟を與へるに足りるとするが如きは、其一ツであらう。社會の事相は觀察の仕様に依つて、如何やうにも議論を試みることを難しとしないが、何を以つて人の榮譽とし、又榮譽としないかと云ふことの如きは、専ら其人の主觀的判斷に待たなければならぬ。今日の小學校長の内には、國家が多年彼等に對する待遇の道を誤まつたことの結果として、俗臭の紛々たる者もあり、勲章が欲しいとか奏任待遇に爲りたいとか、俗念の旺盛を極めることもあるかも知れないが、國家が彼等に臨む場合には、飽くまでも君士人を以つてし、讀書人を以つてしなければならぬ。君士人や、讀書人の眼から見たならば勲章とか、官吏としての待遇の如きものは、一個の土芥にも異ならない。殊に勲章と云へば戰時に一兵卒と雖も、授與される位の下級のものであり、待遇と云へば、小學校長が二十年三十年前に教へた教へ兒の現に受領して居るものであるとすれば、是等を授けられた所で、果して何の之を名譽とする刺戟を感じるであらうか、覺束なき次第である。斯の如く考へると、今日小學教員に對する我國政府の待遇法には矛盾した點の著しきことが認められる。即ち俸給を

薄くする點に於ては彼等を仙人扱ひにして置きながら、勳章や官吏待遇の點に至ると、極端なる俗物扱ひをする。何故に其中間の途を取つて、常識ある人間扱ひをしないのであらうか、私の不思議に感ずる所である。

或は小學敎員の職務にして、社會的價値の乏しいものであれば、報酬の少ないことも、已むを得ないとしよう。官廳の使丁や、給仕人などの俸給が如何に薄いからと云つて、特に彼等にだけ増給を與へよと云ふことは、仕事の性質から云つて、主張されない譯である。然しながら私共の考へる所では、小學敎員の職務たる、其性質に於て、最も重大なるものであつて、アダム・スミスが勞働報酬の差別を生ずる條件とした第四の「仕事に當る人に置かれる信任」の最も大なる種類に屬する。小兒の頭腦の純白であり透明であることに就ては、何人も些の疑を挾まないであらう。此兒童を託されて、敎導の任に當る小學敎員にして其道を誤まつたならば、社會に如何なる害毒を及ぼすか、測り知る可からざる譯である。國語や、算術は如何なる敎師も間違なく敎へ得られるであらうが、此以上に兒童に向つて、人間として踏む可き正しき道を敎へ、正邪善惡の觀念を明にし、不知不識の間に立派なる魂を植へ付けると云ふ一事に至つては、智育の能くする所ではなく、敎師其人の善行を以つて、活きた模範としなければならぬ。斯く考へたならば小學敎師の勤勞に對して、私は大なる價値を認めざるを得ざる譯であつて、社會が其價値を輕く評定し低廉なる報酬を拂つて、意に介しないが如き大なる間違とせざるを得ない。

下級警察官亦同じ

私は是れまで專ら小學敎員の待遇に就て論述したが、以上述べた所は略ぼ下級警察官即ち巡査階級にも適用される。殊に警察官に至つては、其職務とする所は治安、衛生、交通等社會生活の複雜と爲るに隨つて、多岐多端に渉り、時には晝夜兼行事に當らなければならぬ場合があるし、時には人命の救助に關し、時には盜賊の搜索に關し、時には傳染病の取締に關して、警察官自ら生命の安全を脅かされる虞れの極めて大なるものがある。然らば私が嚢に擧げた勞働報酬に相違を生ずる諸條件中の第九は最も適切に下級警察官に適用される可き譯である。近年は公務の爲めに、斃れた警察官に對する待遇法も餘程改善されたやうに聞くが、同一の事情に依つて、生命を失つた軍人などに比較して、果して權衡を得て居ると見られるであらうか。軍人は國防の爲めに、警察官は民防の爲めに、其れ〲生命を職務上に失うのであつて、私共から見れば、兩者の間に何等の差別のあると

とを認められない。國を防衛する職務に社會的價値がある以上は、民を防衛する職務にも同じく社會的價値のあることは、論を俟たないのである。然も警察官の仕事が社會的に認められず又重んじられないのは、如何なる理由であらうか、抑も亦社會が、警官の職務を尊重しない上に國家も亦警察官の勤勞に酬ゆることの薄いのは、如何なる次第であらうか、共に私の了解に苦む所である、近年私人の團體で小學教員の爲めに、學術の研究を奬勵する施設が出來たようであり、又或る篤志家は獨身巡査の爲めに合宿所を建設して、生活上に慰安を與へようと試みつゝある。共に結構なる計畫であるが、何分にも私人の計畫であつて、爲めに利益を及ぼす範圍には限りあることを免かれない。國家が教員や警察官に對する優遇法を斯く私人の施設に一任して、晏如たるを得るのであるか、私の敢て問はんとする所である。

教員警察官の素質

近來小學教員や、警察官の素質が以前と比較して、餘程悪く爲つたと云ふことが、一般に傳唱される、一方に新聞紙の記事に依ると、教員や、警察官の非行が頻に摘發され、世人に不快の感を與へる場合が少なくない。同じ日本人が同じ職務に就き、殊に近年國の地位の上進した場合に、獨り小學教員と警察官とだけの素質に低落を來すと云ふような現象の生じたことが事實であるとすれば、其れは如何なる原因に基くものと見る可きであらうか。私は其の原因を以つて、彼等に對する俸給の薄く待遇の貧しい爲めに、第一に其れ等の職に優良なる人物を吸引するを得ないこと、第二に一旦其職に就いた者も機會さへあれば、他の有利なる職に轉じようとして已まず、随つて現在職に居る者も一種の腰掛け氣分を持つことの二點に歸するに躊躇しない。明治初年から二十年頃まで、我國に於て下級警察官に爲るとか、小學教員に爲るとか云ふような者の多くは士族出身の人々であつて、自ら職業に對する自尊心が強かつた。薄給であつても、之に辛抱して、職責を守らうとする念慮が盛んであつた。是れは封建時代から士族の間に鍛錬された一種の性癖であつて、弊害もあつたらうが、同時に幾多の長所もあつたのであつて、斯る氣位の人が小學教員であれば、以つて子弟の教養を託するを得るし、又斯る人が巡査であれば、以つて生命財産の安全を委するを得たのである、然るに今日に於ては、一方に職業の選擇に關する自由は極度まで、擴張されたし、他の一方に有利なる職業が社會到る所に見出されるに至つた爲め、小學教員とか、下級警察官とか云ふような常に報酬の薄く、而し

て生活の不安なる職業に對しては、多少の才能ある者は之に就くことを喜ばない。偶々青年にして學問を好むが、研學を積けるだけの資金を有しない場合に、暫く節を屈するような考を以つて、小學教員を志願する、地方の青年で何か有利なる職業を見出す爲めに、大都會に出て來たが、就く可き職業のない場合に、直に巡査を志願して、教習所に入り、所定の教習を終つて、職に就く有様であつて、兩者共に職業に對する自尊心もなければ、特殊の愛着も持たない。唯生計の方便として、仕事に當る次第であるとすれば、機に觸れて間違つた行動をする者のあることも、亦怪むに足らない。唯此間に於ても、我國に於て時々巡査の間から、職に殉じて生命を擲つような立派な行をする人があり、又小學教員の内からも過般東北一寒村に於て、教へ兒の生命を救う爲めに一身に、奇禍を蒙ることを恐れなかつた訓導小野女史の如き人もあり、一概に教員や警察官の素質の低落したと云ふ斷定を下すことは出來ないかも知れないが、一方に斯る美談佳話を打消して、餘りある位の不評判を耳にすることは、私の甚だ遺憾とする所である。

轉職の自由に對する制限

或は以前の如く小學教員なり、下級警察官なりから、如何なる方面にも立身出世の道が開かれるとしたならば、現在に於ける物質的報酬の薄いことの如きは、或る程度まで堪え得られるであらう。現に清浦樞密院議長は以前埼玉縣下の小學教員であつたと云ふことであり、故大浦兼武子も、今の田健次郎男も巡査から身を起して、兎に角官吏として最も羨望される地位に達した。其外にも詮議立てをしたならば、斯る例は幾らもある可き筈であつて、是等の事は現に小學教員や警察官の職を奉ずる者に一種の希望を與へ、將來の好運を夢みつゝ、現在の薄給に甘んぜしめるであらう。然しながら今日は果して如何であるか。社會の秩序が餘りに確立し過ぎたことは、人の處世上に於ける行路を非常に窮屈のものとし、一々資格や履歴に重きを置き是等に該當する者でなければ、如何なる才能を持つて居つても、立身出世の道を得ない。隨つて我國今後の時勢にして、今日の有様を以つて、推移する以上は、小學校教員の内から、他日の樞密院議長が出たり、巡査の内から臺灣總督が現はれたりすることは、到底望まれない。一旦小學教員と爲つた者は校長と爲ることを以つて、一度び巡査となつた者は警視と爲ることを以つて、立身の頂上とし、自己の處世に於ける出發點を以つて、生涯の到着點としなければならぬ次第と爲つた。私が勞働報酬に高低の差を生ずる原因に舉げた第六の事情即ち「他の有

利なる仕事に轉ずる楷梯と爲るを得るや否や」と云ふことが否定の形に於て働き出す次第であつて、一方に小學教員は小學教員の儘警察官は警察官の儘一生を終る運命に居ると云ふ事が心なき人々をして彼等に對する尊敬心を薄からしめる所以たらざるを得ない。

右の如き事情であるとすれば、今日の儘に彼等の待遇を放置したならば、小學教員や、下級警察官の質の悪く爲るとか、爲つたとか云ふやうな噂は事實として、裏書されざるを得ない。然も社會的効用の著大なる是等の職務を斯の如く荒廢した狀態に置くことは、何としても吾人の忍ぶ能はざる所であつて、彼等の素質を改善する爲めに、確乎たる政策を樹立しなければならぬ。而して以上私の叙述した所から綜合すれば、彼等に對する優遇策は俸給増加の一事を主なるものとす可きであつて、彼等の勤勞の社會に有用であることを標準とし、又有能者をして職務を樂ましめ、其地位に安んぜしめることを規矩としたならば、何人も此優遇法に異論を唱へる者はないであらう。而して無形の方面に於て、優遇策を求め、或は勳章を與へるとか或は待遇を官吏並みにするとか云ふやうな場合には、從來行はれた杓子定規は一切之を除き去り、文部大臣を一二年勤めた政治家に勳一等を授けたり、又叙爵の恩典に浴せしめたりすることのある以上は、小學校長の永年勤續者にも同樣の榮譽を與へ可きであり、待遇の如きも奏任官同等の如き低いものに止めず、勅任官にも、親任官にも引上げる位の勇斷に出でなければならず、警察官の如きは、今少し勤務を樂にして、修學の餘裕を與へ、才能ある者は警察官以外の方面に發展せしめる道を開くとを要する。學校で成規の學問を修めた者でなければ、立身の道が閉塞されると云ふやうな窮屈極まる制限を設けるが如きは、社會の秩序を維持するやうに見へて、其實却つて社會の基礎を脆弱ならしめるものと認めざるを得ない。

國際勞働運動の太陽と遊星

林 癸未夫

はしがき

勞働階級から成る國際的の聯合團體は、之を先づ大きく二つに分つことができる。一つは社會主義のためにするもの、他は勞働組合主義のためにするもの之である。而して社會主義運動に從事する國際團體は更に第二インターナショナルと第三インターナショナルとに分れて居り、勞働組合運動に從事する國際團體は更に國際勞働組合聯合會（アムステルダム・インターナショナル）と國際基督教勞働組合聯合會（基督教インターナショナル）とに分れて居る。

第二インターナショナルと第三インターナショナルとの主義の相違はボルセビズムに歸依するか何うか、言ひかへればプロレタリヤの獨裁政治を是認するか否かに其基點を置いてゐる。又アムステルダム・インターナショナルと基督教インターナショナルとの主義の相違は資本主義の撤廢を理想とするか何うか、言ひかへれば階級闘爭の理論を肯定するか否かに其基點を置いてゐる。而してアムステルダム・インターナショナルは其奉ずる社會思想の根本に於て第二インターナショナルと共通であつて、要するに同一の目的に向つて進むに、社會主義といふ旗幟を掲げるか、勞働組合主義といふ旗幟を掲げるかの差別に過ぎない。從つてアムステルダム・インターナショナルに加盟してゐる各國の有力なる勞働團體の大部分は、第二インターナショナルにも亦加盟してゐる。又對モスコウの軋轢關係に於ても、此兩インターナショナルは、同一戰線に立つてゐると言つて可い。曾てアムステルダム・インターナショナルに加盟してゐた米國勞働聯合會が、戰後斷然之から脱退するに至つたのも、其理由はアムステルダム・インターナショナルの「社會主義化」に慊らずして、米國勞働運動の傳統的なる保守的色彩を穢されさらんがために外ならなかつたのである。

アムステルダム・インターナショナルに對して米國勞働聯合

會と略同じ立場に在るのが、基督教インターナショナルである。舊い意味に於ての勞働組合主義、即ち勞働階級の社會的及經濟的生活の改善向上を、勞働組合としての團結力によつて、達成しやうとする意圖に於ては、基督教インターナショナルも他の勞働組合と全く同一である。唯彼等に特異な點は、階級鬪爭を非として階級協調を重んじ、資本主義の弊害を救ふに專ら社會政策的立法を以てし、飽くまでも社會革命のメリツトを否定する所に在るのである。此理由によつて彼等は「社會主義化」したるアムステルダム・インスターナショナルと協同戰線に立つことができないのである。

アムステルダム・インターナショナルは正面から基督教に叛いてゐるのではなくて、寧ろ宗教といふものを無視してゐるのである。宗教上の信仰を以て勞働運動に無關係なものとして、之を問題外に置いてゐるのである。併しそれは必ずしも彼等が基督教を呪詛し、意識的に之を壓伏しやうとしてゐるがためではない。現に基督教主義を奉じない、勞働組合の大集會がプログラムの最初に僧侶の祈禱を置く例は私自身の數回目擊した所である。尤も社會主義の理論に於ては基督教を奴隸道德を鼓吹するものとして之を排斥するのを通例とするけれども此理論は形式上未だ勞働組合によつて左程潔癖には遵奉されてゐない。從つて勞働組合は基督教を排斥するといふよりも、寧ろそれに對して無感覺（インデイフエレント）であるといふのが當つてゐると私は思ふ。併し假令彼等が基督教に無感覺であつても、彼等が社會革命を理想とし、階級鬪爭說を是認する以上は、それは思想に於て仁慈博愛の同胞愛を基本とする基督教の精神と相悖るものであつて、到底基督教勞働組合の主義と相容れ難いとは言ふまでもない所である。

基督教勞働組合はカソリツク教徒たる勞働者を中心として組織されるのを通例とする。基督教勞働組合の最も發達してゐる獨逸、伊太利、其他の諸國皆さうである。從つてカソリツク教徒の極めて少い英國に於ては基督教勞働組合なるものは存在しない。（尤も曾てランカツシエア地方の紡績職工組合の仲間ではカソリツク教徒が相當に勢力があつて、其組合の首領が保守黨候補者として選擧場裡に表はれたこともあつたさうであるが、併し今日では彼等も一般の勞働組合運動の中に完全に溶解されてゐる）唯唯一の例外と認むべきは和蘭であつて、此國だけでは基督教勞働組合がプロテスタントとカソリツクとの二派に分裂してゐるが、勢力に於てはカソリツク派の方が遙かに優勢である。

右に述べたやうに勞働組合の國際運動は、これをアムステルダム・インターナショナルと基督教インターナショナルとの二

つに分つことができるのであるが、此兩インターナショナルは言ふまでもなく各國に於ける各種勞働組合の聯合團體を更に國際的に聯合したものである。從つて此兩インターナショナルはあらゆる產業に屬する勞働者を悉皆網羅してゐることは勿論であるが、同時に此兩インターナショナルは、各々其下に各產業毎に組織された勞働組合の國際聯合體たる多數のインターナショナルを抱擁してゐるのである。尤も歷史的の順序から言へば諸產業を總括したる國際聯合體（私は假に之を大インターナショナルと呼んで置かう）は、各產業毎に設けられた國際聯合體（小インターナショナル）とは無關係に組識せられ且發達した徑路を有するものである。從つて小インターナショナルが相寄つて大インターナショナルを組織したものと見るのは妥當でなく、又史實にも一致しないが、併し兩箇の大インターナショナルに屬する各國の勞働組合が、更に產業毎に小インターナショナルを組織し、大インターナショナルに對して恰も母體と子體との關係に在ることは現在吾々の認めざるを得ない事實である。つまり大インターナショナルは、太陽で小インターナショナルは遊星であると思へば好い。もと〳〵遊星が寄つて太陽を造つたのではなくて、太陽が先づできてそれから分れて、遊星ができたのである。而して此遊星は太陽を中心として回轉しつゝ、相共に太陽系なる一星群として一致の運動をしてゐる。其關係が丁度大小のインターナショナルにあてはまるのである。

アムステルダム・インターナショナルといふ一つの太陽に就ての發達の歷史は本誌の二月號に『各國勞働組合聯合團體の國際運動』と題して既に之を記述した。從つて本篇に於て私の說かうとしてゐる題目は、

一、他の一つの太陽たる基督教インターナショナル

二、アムステルダム・インターナショナルの遊星たる各產業別インターナショナル

三、基督教インターナショナルの遊星たる各產業別インターナショナル

の過去及現在に於ける狀況である。併し私が玆に舉げる兩太陽系の諸遊星は其全部ではない。此外に少くも基督教系に於て二三、アムステルダム系に於て四五の遊星の存在が認められるけれども、是等は其形態が極めて小さかつたり或は未だ星雲狀態に在つて其輪廓が判然しないために、十分觀測が屆きかねるので、餘儀なく之を省略した次第である。

尙序でを以て申添へて置きたいことは、社會主義インターナショナルに關する文献は割合に豐富であるけれども、勞働組合インターナショナルに關する纏つた文献は甚だ少いことであ

る。稀に在つてもそれは理論又は感想を主としたものであつて、私の求めるやうな平明な事實を詳述したやうなリテラチュアは殆ど見當らない。殊に此嘆は小インーナショナルに對して、一層甚だしい。そこで私は本稿を草するに當つて、專ら其資料を種々なる小冊子、報告、雜誌の類に散見する斷簡零墨の間に模索せざるを得なかつた。從つて叙述の內容には私自身の意に滿たぬ點も甚だ少くないのであるが、これが改訂は他日を期するより外はない。唯我邦に於て此方面の事實の紹介は未だ曾て何人によつても試みられなかつたと記憶するからして、本稿が勞働運動の國際化——それは疑ひもなく現代に於ける最も注目すべき傾向の一つである——に興味を有せらるゝ讀者の研究に多少の手引となり得るならば、筆者に取つては本懷の至りである。

上　國際基督教勞働組合聯合會

歐洲大陸諸國に於ては、カソリック教信者たる勞働者は、普通の勞働組合に加入しないで、別に同教派に屬する者のみを以て職業別若しくは産業別の勞働組合を組織し、是等の勞働組合は更に相提携して自國內に一箇の聯合團體を組織してゐる例が甚だ多い。而して是等の勞働團體は、多く其名に「カソリック」又は「基督教」等の名を冠して、他の勞働團體と區別してゐるのが普通である。

カソリック教に無關係な各國の勞働組合聯合團體は一九〇一年以來國際勞働組合聯合會を組織してゐたに拘らず、所謂基督教勞働團體は未だ同樣の組織を成してゐなかつた。それは主として是種の勞働團體は其目的に於て社會組織の變革を主張せず、單に社會政策的立法や、團體交涉の手段によつてのみ生活の向上を圖ることを運動の目標としてゐたので、やゝもすれば政治問題に觸れ易い國際運動に深入りすることを好まなかつたためであつた。

各國基督教勞働團體の幹部が最初に國際會議を催したのは、一九〇八年八月チューリヒに於てゞあつた。此會議に代表者を送つたのは獨、佛、白、墺、伊、露、瑞西、和蘭及瑞典の九箇國で、此會議の結果として獨逸のキョルンに國際事務局が設けられ、一九一一年の九月に同市に於て各國幹部會議が催されたが、戰前には未だ判然たる形態を有する國際聯合會を組識するまでの運びには至らなかつた。

然るに戰後に於ける一般社會思想の推移は各國の基督教勞働組合を刺激して、もつと緊密な國際的結合を欲求せしめるやうになつた。而して其運動は先づ中歐諸國から起され、一九二〇

年六月に至つて、ヘーグに其創立總會を開催することになつた。此總會に參列した者は獨、佛、白、墺、伊、和蘭、瑞西、西班牙、チエッコ・スローヴキヤ及ルクセンブルグの十箇國に於ける約二百六十萬人の勞働者を代表する九十八名の人々であつた。

此會議に於て正式に國際基督教勞働組合聯合會 (International Confederation of Christian trade Unions)が成立し其本部を和蘭に置くことゝなつた。而して此會の綱領としては

一、暴力の使用及階級鬪爭に反對すること

二、立法的手段により勞働者の社會的及經濟的地位を改善すること

等が決議された。

本會の第二回總會は一九二二年六月二十一日から二十三日まで墺太利のインスブルックで開會された。此總會に參加した諸國及其勞働組合會員數は次の通りである。此數字によつて略各國の基督教勞働團體の現勢力を知ることができる。

獨逸	一、一四二、九五六
伊太利	一、〇五二、六九四
和蘭（二團體）	二二五、一九三
白耳義	二〇〇、二〇二
佛蘭西	一二九、〇〇〇
匈牙利	一一三、八五五
墺太利	七八、五六一
西班牙	四二、三一九
ユーゴスラビヤ	二二、五〇〇
瑞西	一四、九五九
チエッコ・スローヴキヤ	一三、二五〇
ルクセンブルグ	五〇〇
計	三、〇三五、九八九

此總會で決議された事項は左の通りである。

一、本會の主義は基督教の教理と道德とに合致するものであつて、經濟及社會の組織は基督教を以て其根柢としなければならぬものである。從つて本會の活動も努力も總て基督教精神に準據するを以て方針とし個人も階級も民族も皆基督教徒の理想たる正義と博愛とによつて指導されなければならぬ。

二、本會は社會主義と共産主義とに反對する。國家に對する服從は決して社會主義者の主張するやうに、人格の無視でもなければ、自由の投棄でもない。階級鬪爭の思想は却て正義と同胞の觀念に背き、全社會を一部の奴隷とするもの

である。本會は極力個人の權利と自由とを擁護するに努めると同時に、自由の行使は義務と博善の精神によつて局限さるべきものと主張する。

三、基督教主義を經濟生活に適用するならば、それは個人、階級又は民族が、あらゆる力を、忠誠(ローヤルチー)、共同(ソリダリチー)及慈善(チャリチー)の精神の中に調整(コーディネーション)することである。此方法に由つて經濟的生產の窮極の目的は達成せられ、總ての物質上の必要は充され、富の均等なる分配は行はれるであらう。

四、國家は產業上の一組織ではないからして、それ自身生產に對する責任を負ひ得べきものでなく、又直接に經濟生活を支配(コントロール)し得べきものでもない。此故に國家が直接に生產を管理することは、私營產業が如何にしても一般の需要品を供給することのできない場合にのみ限らるべきである。

五、本會が雇傭條件に就き差當り要求する所は左の事項である。

(イ)勞働時間は八時間を限度とし、坑內、熔鑛爐間の如き不衞生なる事務に於ては八時間以下に短縮し、土曜日は半休とし、日曜日及夜間は必要已むを得ざる場合に限り就業を許すこと。

(ロ)最低年齡は十四歲とし、徒弟及少年工に對しては特別の保護法規を設くること。

(ハ)夜業は十八歲未滿の者及婦人には絕對に禁止すること。

(ニ)母の賃金勞働は漸次之を廢止するの方針を取り、國家は彼等を保護するために特別の施設を行ふこと。

(ホ)家內工業に從事する勞働者を保護するため、特別の法規を設くること。

(ヘ)一切の勞働者に對し疾病、負傷、不具癈疾、老衰及失業の諸保險制度を設け、傭主をして保險費用の一部を負擔せしむること。

(ト)勞働者の道德、健康及生活狀態を向上せしむるため、國家は必要なる社會政策を實施すること。

(チ)能率增進の目的を以て科學的職業選擇(ヴオケーシヨナル・ガイダンス)を行ひ、且工場監督は政府と勞働組合との協同事業とすること。

(リ)賃率の決定は總て團體協約を以てし、且總ての成年男工に對し、品位を保ち家族を扶養し、子女を敎育するに足るべき最低賃金を一定すること。

(ヌ)勞働者移民の自由を認め、國籍により待遇に差別を設けざること。

六、勞働階級の進步は、彼等が社會、經濟及政治の諸問題を

研究することによりて、勞働の權威を自覺し、家族、社會及國家に對する義務と責任の觀念を培養することを以て、必要條件とするがゆゑに、勞働者に對する普通教育及專門教育の普及發達に努力しなければならぬ。

七、歐洲各國に於ける勞働階級の現狀は最も不滿足なる狀態に在る。而して其主因は戰爭のために重要なる經濟的價値が破壞され、購買力が低落し、消費が衰へ、生產が減じ、失業者が增加したことに在る。本會の信ずる所によれば、勞働階級の社會的及經濟的狀態の確實なる改善は、先づ世界の經濟組織の健康を恢復することによつてのみ唯可能である。而して此改造の事業は、各國民を結合せしめ、總ての憎惡を一掃すべき基督教の慈愛の精神によつてのみ唯達成することができる。此故に基督教徒たる勞働者は次の諸事項を實現するに努力する。

(イ)各國政府及國民は基督教の主義を服膺して、眞の平和と相互の信用を保持すること。

(ロ)各國民は四海同胞の誼により、有無相通じて、互に經濟的恢復に協力すること。

(ハ)爲替の安定を維持し、生產及商業の常調を恢復するため有効なる手段を取ること。

(ニ)戰時國債の相殺及戰敗國に對する賠償金の減額を行ふこと。

(ホ)軍備を縮少し、其他の不生產的費用を削減すること。

(ヘ)豫算を緊縮し通貨を縮少すること。

(ト)自由貿易の實行を促進すること。

(チ)露西亞との經濟的關係の復活は、同國が外國債を承認し、外國人の私有財產の安全及個人的自由を保證することを條件とし、且同國が經濟制度を常態に復したる後でなければならぬこと。

(リ)國際間の原料配給方法を改善すること。

(ヌ)資本家側の反動運動に對抗し、勞働階級の自由と權利とを擁護し、特に經濟生活の管理に參與するに努力すること。

(ル)平和條約第十三篇の國際勞働總會に關する條項は、本會の主義と一致するものなるを以て、本會は其活動を支持し、其目的の達成に助力すること。

八、本會は各國勞働者の消費組合組織の發達を奬勵し、同運動に對し何等の妨害をも加へないことを各國政府に要望する。

中　アムステルダム・インターナショナルに屬する產業別インターナショナル

一　國際抗夫聯合會

國際坑夫聯合會（International Federation of Miners）は最初の總會を一八九〇年に開催し、英、佛、獨、墺、白の五箇國から百十一名の坑夫組合代表が出席した。爾來戰前まで每年缺さず倫敦、巴里、伯林、ウヰーン、ブラッセル、アムステルダム其他の諸都市に總會を開き、參加國は上記五箇國の外に、瑞典が一八九八年に、米國が一九〇四年に和蘭が一九一〇年に新に加入した。戰前に於ける總加入坑夫組合員は百三十七萬三千と稱せられたが、其約半數は英國坑夫聯合會で、最初から國際聯合會の牛耳を執り、之に次ぐのが獨逸、佛蘭西及白耳義の坑夫團體であつた。從つて本會の常任理事は英國坑夫聯合會の幹部が之に當り、其事務所も亦マンチエスターに設けられてゐた。

本會の過去の努力は主として鑛山に於ける就業時間の短縮に向けられてゐた。戰前最後の總會たる一九一三年のカルルスバート會議に於て要求された事項は(1)坑口出入八時間法の制定、(2)勞働者中より選任せられ政府より俸給を與へらるゝ鑛山監督の配置、(3)最低賃金法の制度、(4)鑛山に於ける婦人勞働の禁止、(5)十六歲未滿者の坑內勞働禁止、(6)作業場附近に浴場の設置、(7)傷害賠償、養老及寡婦年金制度の完備、(8)賃金付休暇制度の實施、(9)鑛山國有等であつた。

坑夫のインターナショナルは、他の勞働組合インターナショナルの總てがさうであつたやうに、戰時中には一回の會合も催さなかつたが、戰後英國坑夫聯合會の主唱によつて、最初の總會が一九一九年八月アムステルダムに招集され、坑夫インターナショナルの再建が企てられた。併し白耳義坑夫團體は戰時に於ける獨逸勞働團體の不信を詰責し、一般の空氣は未だ敵對國双方の勞働者の感情を融和せしめるまでに至つてゐなかつたので、此會議は何等の議事も纏めることができずに散會した。が其後各國坑夫團體の感情も次第に接近して來たので、一九二〇年の二月に國際執行委員がブラッセルに會合し、相談の上、いよ〳〵正式の總會を同年の八月二日から六日までゼネヴに招集することに決定した。

ゼネヴ總會は坑夫インターナショナルの最初から計算すると第二十五回目の總會であつた。之に參列したのは、英、佛、獨、墺、匈、伊、白、和蘭、瑞典、ユーゴスラヴ、チエッコ・スロ

ーヴキヤ等十三箇國の坑夫代表者百四十八人で、彼等に代表された各國坑夫團體の總員數は約二百五十萬、即ち戰前の二倍近くであつた。而して議長には英國のスマイレーが推擧された。

此總會で決議された事項の要旨は左の通りであつた。

一、將來の國際戰爭を防止する手段として、何れかの國が攻擊的な軍事行動を取らうとする場合には、坑夫の國際的總罷業を行ふこと。

二、鑛山の國有（ナシヨナリゼーシヨン）若しくは社會化（ソシアリゼーシヨン）の實現を促進するために、必要なる、方法を講ずること。而して若し此目的のために必要ある時は、總罷業の斷行を是認すること。

三、石炭、鑛物其他の原料を各國に公平に分配し又其運送を圓滑に行ふ手段として、國際的の一中心機關を常設するの必要を認め、且其實行に對し國際勞働局の努力を促すこと。

右諸決議の外に最低賃金制度の得失や、勞働時間問題に就き種々なる議論があつたが、決議を行ふには至らなかつた。

第二十六回總會は一九二一年八月キヨルンで開催される筈であつたが、同年四月一日から開始された英國炭坑大罷業のために翌年に延期され、その代りに一九二一年八月一日から三日までヘーグに於て國際執行委員會議が開かれ、各國に於ける傭主團體の賃金引下其他の反動的政策に極力反抗すべきことを議決した。

第二十六回總會は一九二二年八月七日からフランクフルトで開催された。出席者は百十九人で、英、佛、獨、墺、匈、白、和、チエツコ・スローヴキヤ、ユーゴ・スラビヤ、ルクセムブルグ及北米合衆國に於ける二百十二萬八千人の勞働者が玆に代表されてゐた。國際勞働局からも一名の代表者が臨席した。露國の坑夫組合代表者が出席を申込んで拒絶されたことは注意すべきである。

英國坑夫聯合會長のハーバート・スミスが議長席に就き、討議の上、可決された事項の要點は次の通りである。

一、世界各國の鑛業勞働者の要求を統一する一手段として各國に於ける雇傭條件を詳細に調査し、且之を會員に報告するため、獨、佛、英、の三箇國語を以て記載したる一雜誌を定期刊行する。

二、各國支部は鑛山に勞働者協議會（ワーカースカウンシル）を設置すべき要求の實現に特別の努力をする。而して本協議會員は傭主に對し團體交渉權を有する團體から選任せられ、且同團體の恒久的支配の下に屬せしめる。

三、不具癈疾者、寡婦及孤兒を救濟すべき方法を確立し、且業務傷害賠償の規定を職業病に及ぼすべき法律の制度に努

力する。

四、鑛業は本來危險なる業務であるからして、坑夫の健康及生命の安全を圖るには、鑛業監督制度の發達に俟つより外に良法がない。よつて本會は勞働者より選任し、國家より俸給を與へる鑛業監督官を設置することを要求する。

五、現下の世界的不景氣の主因は、富の生產及分配の方法が混沌狀態に在るがためであつて、しかもその狀態は戰爭に原因する國際爲替相場の亂調子によつて一層促進されて居る。從つて之を救濟する方法は先づ此點から着手されなければならぬ。

六、石炭の危機は一般的不景氣の僅に一面に過ぎないのではあるが、併し其一つの原因は、平和條約によつて獨逸の石炭を佛國に輸送せしめるために起る需給關係の不均整に在ると認められる。從つてこれはゼネヴの前總會の決議の如く、石炭の國際的配給を司る一中心機關を設立するの必要を證據立てるものである。

七、失業問題の眞の原因を除去する方法を講ずるに當つて、失業の犧牲者を彼等の運命に放棄することは許さるべきでない。何となれば失業者自身は失業の原因たる經濟界の沈衰に對して、何等の責任をも有するものではないからである。失業の責任は社會を代表する所の國家と、勞働によつて利潤を收める所の傭主と、或程度までは自身の前途を豫見して之に對する準備をなすべき筈の勞働者とが之を負擔すべきものである。此故に本會は國家、傭主及被傭者が其費用を分擔すべき失業保險法の普及を要求する。

八、坑內勞働時間は坑口より坑口まで七時間を原則とし、溫度華氏八十二度以上の地下では六時間に、九十度以上の地下では五時間に短縮すべき法律上の保證を獲得することに努力する。

九、坑夫に對し毎年一回二週間づつ賃金附休暇を與へらるべき方法の實現を要求する。

十、米國炭坑同盟罷業に對し、歐洲同胞の同情を表明するために、罷業資金中一萬磅を寄附する。

右の諸決議の外、ゼネヴの前回總會で決議された炭坑國有の要求及之を實行する手段としての國際的總罷業は、本總會に於て再議された結果、滿場一致を以て贊同せられたが、佛蘭西代表者から、總罷業は獨り炭坑國有遂行手段としてだけでなく、あらゆる國際的な提案を強要するためにも實行したいといふ修正案が提出されたけれども、十六に對する八十六を以て否決された。

尙本總會は爾今二年目毎に招集することになつた。

二　國際運輸勞働者聯合會

歐洲各國の鐵道從業者組合の代表者は、一八九三年初めて瑞西のチューリヒに國際會議を開催したが、此會議に參加したのは、英、佛、伊、墺、和蘭及瑞西の六箇國の鐵道從業者組合代表者であつた。而して此會議は其翌年には巴里で翌々年にはミランで引續き開催された。然るに海港、河川、船渠等の勞働者は一八九六年初めて倫敦に會合して、國際船舶船渠及河川勞働者聯合會(International Federation of Ship, Dock, and River Workers)を組織し、その一八九七年の總會には、各國の鐵道從業者も亦參加したので、一八九八年には兩會を合同して國際運輸勞働者聯合會(International Transport Workers' Federation)が組織された。而して本會は巴里(一九〇〇)、ストックホルム(一九〇二)、アムステルダム(一九〇四)、ミラン(一九〇六)、ウヰーン(一九〇八)、コーペンハーゲン(一九一〇)、倫敦(一九一三)に總會を開催し、主として八時間勞働制の確立と鐵道國有論とを高唱した。一九〇四年までは英國の勞働組合が牛耳を執つてゐたが、其以後は獨逸の組合が優勢を示したので、戰前其事務所は伯林に置かれてゐた。一九一二年に於ける加入國籍は十七、組合數四十三、總組合員數八十七萬五千を算した。

戰後最初の會合は一九一九年四月二十九、三十の兩日アムステルダムに開催せられ、本インターナショナル復活準備委員五人が指定された。次で一九二〇年三月十五日から十九日までクリスチャニヤに戰後第一回の總會が招集され、準備委員の起草した新會則を確定し、事務所を伯林からアムステルダムに移し軍國主義を彈劾し、勞働運動の國際的協力を高唱した決議案を通過した。

本會の鐵道部會議は一九二〇年十一月二十九、三十の兩日倫敦に開催された。此鐵道部だけの會議は最初一九〇〇年にミランで、二度目は一九〇六年に巴里で開かれ、今度が三度目であつた。英、佛、獨、墺、白、和蘭、ルクセンブルグ、丁抹、瑞典の九箇國から、百三十五萬七千の鐵道從業者を代表する三十五名の勞働組合員が列席した。此會議で決議された事項は、八時間勞働制の確立、雇傭條件の標準化（スタンダーダイゼーション）、安全裝置の完備等であつた。戰後第二回の總會は一九二一年四月十八日から二十二日までゼネヴに於て開催された。本インターナショナル加盟勞働團體は戰後急激に增加して、一九二〇年末には英、佛、獨、墺、白、瑞西、丁抹、和蘭、瑞典、諾威、チェッコ・スローヴキヤ、

希臘、芬蘭、ユーゴ・スラヴヰヤ、ルクセンブルグ、愛蘭の十六箇國に亘る三十一團體に達し、其總組合員は二百七十一萬を超えたが、一九二一年一月以後更に勃牙利、西班牙、匈牙利等の鐵道組合も亦之に加盟した。併し其中でゼネヷ總會に代表者を差遣したのは、英、佛、獨、墺、白、瑞西、瑞典、諾威、丁抹、和蘭、チエツコ・スローヷキヤ、ルクセンブルグの十二箇國に於ける二十六團體（總組合員二百二十五萬）であつた。此會議で決議された主なる事項は左の通りである。

一、勞働運動に對する反動的傾向を打破するため、各勞働組合インターナショナルの協力を必要と認むるにより、先づ坑夫インターナショナルに交渉を開始して、此目的の達成に努むること。

二、鐵道、道路、空中、水上の別なく一切の運搬機關と之に附屬する生産設備とを社會の公有となし國家或ば公共團體（ミユニシパリチー）と、勞働團體との共同管理によつて經營すること。

三、戰爭のため荒廢に歸したる地方の復舊事業の促進に努力すること。

四、一般的に保護關稅政策を放棄すること。

五、既に諸國に於て行はれつゝある鐵遺の雇傭條件及經營方法の決定に對する勞働者の參加權を擴大するの目的を以て、適當なる調査を行ふこと。

六、勞働團體組織上人種及宗教上の障壁を撤廢すること

七、船員待遇の改善を謀るため高級船員團體（オフヰサース・オルガニゼーション）と提携すべき手段を講ずること。

八、國際水夫聯合會と協議の上(1)一週四十八時間制度を實施すること(2)乘組員四十人以上の船舶は總て無線電信を裝置すること、(3)乘組員數の八分の七以上は船籍所屬國の言語を解する者たることを要する法規を設くること、(4)難船に基く失業及貧窮を扶助すべき法規を設くること、(5)乘組員一人當平均船舶容積を限定すること、(6)乘組員に對する食堂、浴場、燃火、洗濯、圖書室、其他の生活設備を改善すること、(7)船員資格を國際的に一定すること、(8)船員に對する諸種の保險制度を制定すること等に就き、適宜の運動方法を講ずること。

九、ゼノアに於ける國際勞働會議に於て決議せられたる海員花柳病、撲滅方法の實行を督促すること。

十、海港及船渠に於ける同盟罷業の發生中、船主又は荷主をして他國の海港及船渠を利用することを得ざらしむるため海港及船渠勞働者の特別國際會議を開催すること。

十一、時間延長、賃率引下等に關する傭主側の組織的努力に抵

抗するため適當なる方法を講ずること。

十二、海港に於ける臨時的勞働者を保護する目的を以て、傭主の國際團體と協議の上、現にアムステルダム及ロッテルダム等に於て行はるゝが如き海港勞働登錄制度を實施すべき方法を講ずること。

右の外に比較的主要ならざる三四の議案が討議された。尙此會議中に注意すべき一つの出來事は、愛蘭共産黨員マーフヰーがモスコウの赤色勞働組合インターナショナルの信任狀を携帶して、會議に列席を申込んだが、殆ど滿場一致（反對投票二）を以て拒絕されたことである。

國際運動勞働者聯合會中の海員部會議が一九二二年一月十一、十二の兩日ハムブルグに於て開催された。英、獨、白、和、瑞典、諾威の六箇國に於ける八海員團體から十九人の代表者が參列した。而して聯合會を代表して會長ロバート・ウヰリアムス、副會長デーリング、同フヰメンの三人が之に臨んだ。主たる議題は失業問題であつたが、此會議はそれよりも寧ろ英國海員組合が運輸勞働者聯合會を脫して別に獨立の海員インターナショナルを組織しやうとする計畫に對し、對抗的の示威運動として行はれたものゝ如く察せられる。

三　國際金屬勞働者聯合會

國際金屬勞働者聯合會(International Federation of Metal Workers)は一八九三年チューリヒに於て最初の總會を招集した。參列者は二十七名で、英、佛、獨、墺、匈、白、瑞西及米國の八箇國代表者であつた。其後戰前に至るまで、三年若しくは四年目毎に、倫敦、巴里、アムステルダム、ブラッセル、バーミングハムに總會を開催し、一九一三年の總會は伯林に招集せられ、十二箇國を代表する八十五人の勞働組合員が之に臨んだ。戰前其事務所は獨逸のスットガルトに設けられ、加盟總員數は百十萬人であつた。

戰後最初（創立當時より算へて第八回）の總會は、一九二〇年八月二十日より二十六日までコーペンハーゲンに於て開催された。此會議の參列者は四十九人で、獨、佛、白、墺、匈、瑞西、チエッコ・スローヴキヤ、和蘭、丁抹、瑞典、諾威の十一箇國に於ける十六の勞働團體員二百十七萬人を代表してゐた。英國勞働者は此會議開會の數日前から、露波戰爭に對する英佛兩國の武力干涉を防止するために勞働組合の總罷業を斷行しやうとする運動が行はれてゐたゝめに、又伊太利勞働者は工場占領騷動のために、何れも代表者を送ることができなかつたが、

前記の總員數に英伊兩國の金屬勞働者を加へると、總數二百五十萬に達し、戰前の二倍以上の增加であつた。尤も此增加は主として獨逸の金屬勞働組合が戰後急激に膨脹したことに原因するもので、當時本會への加入者數約三十萬、即ち總員數の二分の一以上に及んでゐる。

此會議の決議の要旨は左の通りである。

一、將來の戰爭を防止するため、各國勞働者は武器の製造及軍隊の輸送に從事することを拒絶すべきこと。

二、ワシントン勞働會議に於て決議されたる八時間制度の實行を督促すること。

三、本會の事務所を伯林よりベルンに移すこと。

四、本會執行委員は五人とし、英、佛、獨、瑞西及スカンヂナビヤ諸國より各一人づゝを推擧すること。

五、平和條約により設立せられたる國際勞働總會に對し、本會が助力を與へ或は之に參與すべきや否やは、今後實際問題の發生に當つて之を決定するの自由を留保すること。

本會の第九回總會は一九二一年八月八日から十二日までルチエルンに於て開催された。當時に於ける總加入者は前年の二百五十萬から更に三百二十六萬に增加したが、ルチエルン總會に參列したのは、獨、佛、英、白、墺、匈、瑞西、伊、チエツコ・スローヴキヤ、波蘭、ルクセンブルグ、和蘭、丁抹、瑞典、諾威の十五箇國に於ける二百八十萬の金屬勞働者を代表する五十七名の人々であつた。本會に加盟しながら代表者を送らなかつた團體中最大のものは會員三十五萬を有する米國の國際機械工組合(International Association of Machinists)であつた。

(註)米國に於て「國際」なる文字を冠する勞働組合は總て合衆國と加奈陀との聯合團體たることを意味するのである。

此會議で決議された主な事項の要旨は次の通りである。

一、本總會に出席しやうとした露國の赤色勞働組合の代表者に對して入國を拒絶した瑞西政府の態度は非難すべきであるが、併し之は曩に勞農政府が國際勞働組合聯合會代表者の入國を許さなかつたことに對する報復であると考へられる。本總會は露國の共產主義者が西歐諸國に於ける勞働階級の經濟的及政治的事情に通曉せずして、動もすれば侮辱不信の言語を弄するを遺憾とする。從つて本總會はモスコウ・インターナショナルに加盟して居る團體は、同時に本會會員たることを許さないといふ本會執行委員の既定の方針を是認する。

二、平和條約の實施に當り聯合國が獨墺兩國に對し啻に死力的壓迫を加へ、獨逸の諸都市を占領し、或は獨墺兩國の併

合を妨害するが如き政策を取るのは不當と認める。

三、軍國主義否認、戰爭反對の運動に關する國際勞働組合聯合會の聲明を支持する。

四、匈牙利に於ける反動的革命(ホワイトテロル)の下に苦鬪しつゝある同僚に對し深厚なる同情を寄せ、且彼等を救援するために適當なる方法を講ずる。

五、社會主義的新社會建設の準備として、勞働階級に必要なる組織的教育制度の普及に努力する。

四　國際紡績職工聯合會

國際紡績職工聯合會(International Federation of Textile Workers)の第一回總會は一八九四年マンチエスターに開催せられ、英、佛、白、墺、丁抹、和蘭及米國の七箇國から約十八萬人を代表する五十四人の代表者が之に臨んだ。其翌年白耳義のガンで開かれた第二回總會には獨逸が新に加り、其後露西亞伊太利、瑞西等も亦之に加入した。戰前には二年若しくは三年目毎に總會を開き、一九一四年英國ブラックプールに開いた第九回總會が最終であつた。

戰後最初の(第十回)總會は一九二一年九月十九日から二十四日まで巴里に於て開催せられた。英、佛、獨、白、伊、瑞西、チエック・スローヴキヤ、丁抹、和蘭、瑞典の諸國に於ける百五十六萬餘の勞働組合員を代表する九十六名の人々が參集した。匈牙利及米國からは出席者がなかつたけれども、本會に加盟の意志を表示した。

本總會決議の要旨は左の通りである。

一、當時同盟罷業進行中であつた北部佛蘭西六萬人、白耳義二萬人の紡績職工應援のため、本會資金中から二十萬フランを寄贈すること。

二、一週四十四時間勞働(一日八時間、土曜日半休)とし、オヴータイムには組合の承認を必要とし毎年賃金付休暇を一般に給與する制度の實現に努力すること。

三、失業問題解決策として、左記諸項の實行を要求すること

(イ)公共的諸事業の經營。

(ロ)失業手當の給與額は賃金と同率。

(ハ)一週四十四時間勞働。

(ニ)オヴータイムの全廢。

(ホ)職工一人の受持織機數を最少限度に減少すること。

(ヘ)失業問題の繼續中臨時勞働時間の短縮を行ふこと。

(ト)爲替相場の安定。

(チ)前敵對國(露西亞を含む)相互間に於ける通商を助長す

ること。

此會議中露國勞働組合代表者に關して一波瀾が起つた。それは最初此總會招集の案內狀は露國の紡績職工組合に向つても發せられてゐたが、露國からは何の應答もなかつた。然るに會議の四日目になつて、突然佛蘭西代表者の一人として列席してゐたゼクープが、露國紡績職工組合の信任狀を提示して、自ら露國代表者として列席することの承認を求めたので、之を許すべきや否やに就て議論沸騰し、特別委員十名を選んで審議したが、やはり議が纏まらなかつたので、結局總會の投票に問うた所が、贊否同數で不承認に決した。

五　國際建築職工聯合會

國際建築職工聯合會（International Federation of Building Workers）の第一回總會は一九〇三年に伯林に於て開催せられ、獨、墺、匈、伊、瑞西、和蘭、丁抹、瑞典、諾威の勞働組合代表者が參列した。第二回總會は一九〇七年にスツトガルトに招集せられ、米國、白耳義、露西亞が新に參加した。第三回は一九一〇年にコーペンハーゲンで、第四回は一九一三年にウヰーンで開かれたが、其事務所は伯林に置かれ、戰前の加盟總員數は約四十萬であつた。

戰後最初の（第五回）總會は一九二一年八月二十二日から數日間墺太利のインスブルツクに於て開催された。之に參加したのは獨、墺、匈、伊、瑞西、チエツコ・スローヴキヤ、ルクセンブルグ、和蘭、丁抹、瑞典の十箇國勞働組合員約八十萬の代表者であつたが、伊太利代表者は露國代表者の參列を許可すべきことを主張して容れられなかつたのに憤慨して退席した。其結果伊太利に最も關係の深い重要議案であつた、建築職工の移民問題は討議されずに了つた。此會議で滿場一致可決されたのは、建築に關係ある總ての精神的及肉體勞働者を綜合したる大建築インターナショナルの組織を計畫することであつた。

六　國際石工聯合會

國際石工聯合會（Interna ional Federation of Stone Workres）の第一回總會は一八九八年獨逸のウルツブルグで開かれ、僅に獨逸、瑞典、ボヘミヤの勞働組合員のみが參會したに止まつたが、一九〇三年にチユーリヒで開かれた第二回總會には獨、佛、墺、匈、白、伊、瑞西、瑞典の諸國から參列し、一九〇八年にカツセルで開かれた第三回總會には和蘭、西班牙、セルビヤからも亦之に參加した。事務所はチユーリヒに置かれ、戰前の總加入者は七萬五千であつた。

本會は一九二一年八月二十一日から三日間インスブルックで戰後最初の總會を開催した。之に臨んだのは獨、墺、匈、伊、白、瑞西、チェッコ・スローヴキヤ、和蘭の勞働組合代表者で、佛蘭西及瑞典は本會に加盟はしたれども代表者は送らなかつた。但伊太利代表者は露國代表者の出席許可を提案し、三十八票對十五票の差で否決されたので、退席した。本會議決議の要領は左の通りである。

一、左記の諸事項を含む石工勞働に關する法規の制定を各國政府に要求すること。

(イ)徒弟に對する強制的健康診斷。

(ロ)職工員數に相當する工場容積の制限。

(ハ)作業場に於ける塵埃飛散の防止。

(ニ)或種の作業に對する婦女及少年の雇傭禁止。

(ホ)作業中に適當なる休憩時間を設くること。

(ヘ)毎年賃金付休暇を與ふること。

(ト)個數拂の廢止若しくは最低賃金保證附個數拂の實施。

二、八時間制の維持、土曜半休制の獲得、作業用具の無料供給及オヴータイムの撤廢に努力すること。

三、全國的團體交渉權の獲得、一週四十五時間勞働及最低賃金法の制定に努力すること。

七　國際木工聯合會

國際木工聯合會(International Federation of Wood Workers)は端を一八九一年のブラッセル會議に發したけれども、一九〇四年までは殆ど其存在を認めらなかつたが、同年アムステルダムに招集された總會には、英、佛、獨、墺、匈、伊、白、丁抹、和蘭、瑞典、セルビヤの十一箇國の組合代表者が參列して、初めて國際聯合會としての形態を成した、其後スツトガルト(一九〇七)、コーペンハーゲン(一九一〇)に總會を招集し、戰前には參加國二十、組合數三十九總組合員數三十九萬三千に達し、其事務所は伯林に置かれてゐた。

戰後最初の總會は一九一九年十二月アムステルダムに招集せられ、英、佛、白、獨、和蘭、瑞典、諾威、瑞西及ルクセンブルグに於ける約六十五萬人の勞働組合員の代表者が參列して、本聯合會の復活を議決した。

戰後第二回の總會は一九二二年六月十二日から十五日までウ井ーンに招集された。前回の總會に參加した諸國に、墺、匈、及チェッコ・スローヴキヤを加へて十二箇國の代表者が參列した。露國の木工勞働組合の加入を許可しやうとする提案は十一に對する五十九を以て拒絕せられ、本會はアムステルダム・イ

ンターナショナルに加盟してゐる勞働團體に屬するものに限つて入會を許すといふ決議が成立した。

八　國際帽子職工聯合會

國際帽子職工聯合會（International Federation of Hat Workers)の第一回總會は一八九三年チューリヒに開催せられ、佛、獨、墺、匈、伊、瑞西の六箇國から十七名の勞働組合員が參會した。其後三年若しくは四年目毎に各地に總會を開き、一九〇九年にウヰーンに招集された第六回總會には、前記各國の外、英吉利、白耳義、丁抹、瑞典、諾威、露西亞、芬蘭の諸國からも參加し、一九一二年にミランに開かれた第七回總會には西班牙及葡萄牙からも亦代表者を送つた。戰前の總加入者は約三萬三千で、事務所は獨逸のアルテンブルグに置かれてあつた。

戰後最初の(第八回)總會は一九二〇年アルテンブルグに招集されたが、僅に獨逸及スカンヂナビヤ諸國の代表者が參會したゞけであつたので、殆ど流會に了つた。其次の第九回總會は一九二一年六月五日から九日までチューリヒに開催せられ、これに代表者を送つたのは、英、佛、白、獨、墺、匈、伊、チエツコ・スローヴキヤ、瑞西、丁抹、瑞典、諾威、芬蘭の勞働組合で、其總員數約九萬、内二萬は獨逸人、一萬は伊太利人であつた。本總會の主たる決議事項は左の通りである。

一、八時間勞働制を維持し、オヴータイムは勞働組合の承認を經且失業者なき場合に限り之を認めること。

二、製帽工業に於ける水銀中毒の現狀を調査し、且之を防止するに必要なる手段を講ずべきことを國際勞働局に要求すること。

三、各國間移民出入に關する制限の撤廢に努力すること。

四、國際的資本主義に反抗するがため、各國勞働階級の結束を鞏固にすること。

九　國際硝子職工聯合會

國際硝子職工聯合會（International Federation of Glas Workers) の第一回總會は一八八六年倫敦に開催せられたが、之には單に英蘭、愛蘭及スコットランドの勞働組合員が出席したゞけであつた。一八九一年に倫敦に招集された第二回總會には、英、佛、獨、丁抹、の代表者十九名が集り、其後も多くは倫敦、時としては巴里に總會を開き、墺、匈、伊、瑞西、西班牙、白耳義、和蘭、丁抹、瑞典、米國、ブラジル、アルゼンチンの諸國に於ける勞働組合が之に參加した。戰前最後の總會は一九一一年伯林に催された第十回總會で、總加入者約二萬九千

事務所は伯林に置かれてゐた。

戰後最初の(第十一回)總會は一九二一年三月三十日及三十一日アムステルダムに開催された、出席者は、英、佛、白、獨、墺、和蘭、チエツク・スローヴキヤに於ける約十五萬人(内獨逸六萬三千)の勞働組合員を代表する二十六名の人々であつた。此會議の議案は主として會則の改正で、事務所を今後巴里に移すと時同時に、左記の諸事項を以て本會の目的とすることに決議した。

一、各國硝子勞働組合の關係を密接にすること。

二、各國硝子職工の賃金其他雇傭條件及生活狀態に關する報告及統計を蒐集配賦すること。

三、勞働爭議の勃發に際し、外國勞働者の雇傭を防止すること。

四、各國に於て重大なる同盟罷業又は工場閉鎖發生したる時は、相互に財政的援助を與ふること。

五、硝子工業の社會化及原料の國際的分配制度の實現を圖ること。

十 國際印刷工聯合會

國際印刷工聯合會(International Federation of Printers)の第一回總會は一八八七年巴里に開かれ、英、佛、獨、墺、匈、伊、白、西、諾、米及瑞西の諸國から之に參加した。其後戰前に五回の總會を開き、第六回目は一九一二年スツトガルトで開かれ、上記各國の外、丁抹、瑞典、諾威、芬蘭、ルーマニヤ、セルビヤ、ボスニヤ、ルクセンブルグ等も亦代表者を送つた。事務所はスツトガルトに置かれ、總加入人員は約十四萬であつた。

戰後第八回總會が一九二一年九月五日から九日までウヰーンに於て招集された。之に參加したのは獨、佛、墺、匈、伊、瑞西、ボヘミヤ、ルーマニヤ、勃牙利、和蘭、丁抹、諾威、瑞典、芬蘭、アイスランド、ユーゴ・スラビヤ、チエツコ・スローヴキヤ、の諸國に於ける約十六萬の勞働組合員を代表する人々で、英米兩國の印刷工組合は未だ之に加入しなかつた。

此總會で決議された重な事項は左の通りである。

一、基督教勞働組合が一般的勞働運動から分離して別旗幟を立て、殊に資本主義の討伐と階級鬪爭を否認する態度を取つてゐることに反對し、政治及宗教の異同を問はず、勞働階級の大同團結を促進すること。

二、ボルセビズムの主義に反對し、アムステルダム・インターナショナルに加盟すること。

十一　國際毛皮工聯合會

國際毛皮工聯合會（International Federation of Furriers）の最初の總會は、一八九四年ブラッセルで開かれ、英、獨、佛墺、匈、白の勞働組合代表者が之に臨み、後瑞西、和蘭、丁抹も亦之に加入し、本部は伯林に置かれてゐた。戰前最後の總會は一九一二年にウヰーンに開かれた第五回總會であつた。

戰後第六回總會が一九二一年八月一日から三日までミュンヘンに招集された。獨、墺、匈、白、丁抹及瑞典から之に參列し佛蘭西は加入を申込みはしたが、代表者は送らなかつた。此總會で決議された事項は左の如くであつた。

一、モスコウ・インターナショナルの主義を否認しアムステルダム・インターナショナルの主義を是認すること。

二、軍國主義を排斥し、國際戰爭に參加せざること。

三、家内工業の弊害を矯正し、毛皮職工の待遇を改善すること。

十二　國際理髮師聯合會

國際理髮師聯合會（International Federation of Hairdressers）は第一回總會を一九〇七年にスツトガルトで、第二回を一九一一年にチューリヒで開催したが、戰後第三回總會を、一九二一年八月九日から十一日まで、チエツコ・スローヴキヤのライヘンベルグに招集した。之に參加したのは、獨、墺、佛、丁抹、瑞典、芬蘭及チエツコ・スローヴキヤの七箇國に於ける理髮師勞働組合員一萬八千五百人を代表する十五名の人々で、英吉利、和蘭、匈牙利の三箇國は加入を申込んだけれども、代表者は送らなかつた。此總會で決議された重なる事項は左の通りである。

一、八時間勞働制を實施すること。

二、日曜日を休業すること。

三、祝儀を廢止すること。

四、徒弟の員數に制限を設くること。

五、勞働爭議の強制的仲裁制度に反對すること。

六、理髮料は傭主、被傭者及公衆の代表者により協議の上決定すること。（丁抹に於て既に實施）

十三　國際飲食物勞働者聯合會

國際飲食物勞働者聯合會（International Federation of Workers in the Food and Drink Trades）は戰前に存在して居つた左の四種の國際勞働團體の幹部が一九一九年の八月アム

ステルダムに集合して、合同を決議した結果、新に設立されたものである。

麵麭燒、菓子料理、チョコレート製造、糖菓製造及ビスケット製造職工の國際聯合會（International Association of Bakers, pastrycooks, Chocolate-makers, Confectioners, and Biscuit-makers）

醸造及製粉職工の國際聯合會（International Association of Brewers and Millers）

牛豚屠殺者の國際聯合會（International Association of Butchers and Pork Butchers）

ホテル使用人の國際聯合會（International Association of Hotel Employees and Waiters）

新設された國際飲食物勞働者聯合會の第一回總會は一九二〇年八月二十五日から二十七日までチューリヒで開催された。此會議に臨んだ各國の代表者と、彼等に代表されたる勞働組合員の數は左の通りである。

國名	代表者數	勞働組合員數
獨逸	八	一五八、七〇〇
墺太利	三	二六、〇〇〇
伊太利	一	二五、〇〇〇
チェック・スローヴキヤ	四	二五、〇〇〇
佛蘭西	二	二一、〇二四
瑞西	二	二〇、〇〇〇
丁抹	二	一三、三〇〇
白耳義	二	一〇、〇〇〇
瑞典	二	一〇、〇〇〇
匈牙利	二	八、〇〇〇
和蘭	二	七、五〇〇
米國	一	三、九五〇
諾威	二	二、九〇〇
計	三三	三三一、三七四

此總會に於て本會の目的として決定された事項は次の如くである。

一、飲食物關係の事業に從事する勞働者の經濟的及社會的の利益を擁護增進すること。
二、勞働階級の國際的團結を促進し、勞働搾取の制度に對しては、國民的及國際的のあらゆる手段を盡して、之を排斥するに努力すること。
三、帝國主義及軍國主義に反抗すること。
四、社會主義的經濟組織の實現によつて、資本主義の壓倒を

圖ること。

次に本會の運動の目標としては次の三項が決議された。

一、絕對必要の場合を除くの外夜間勞働を禁止すること。

二、國際的帝國主義と苦鬪しつゝある勞農露國のプロレタリヤに同情を表し、彼等を壓服せんとする各國の行動を防害すること。

三、勞働の果實を少數資本家の掌中より奪ひて一般勞働階級の福利に移用するため、あらゆる產業の社會化に關する國際的宣傳を歡迎し、且速に其實現を期するがため努力すること。

十四　國際一般工場勞働者聯合會

各種の產業に從事して居る不熟練勞働者の各國勞働團體が最初に國際會議を催したのは、一九〇七年スツトガルトに於てゞあつた。此會議には獨、墺、丁抹、瑞典の四箇國に於ける若干の勞働組合が參加した。次で一九一〇年にコーペンハーゲンに於て第二回の會合が開かれ、獨、丁抹、瑞典、諾威、ブルガリヤの五箇國に於ける二十二萬五千人の不熟練勞働者が玆に代表された。併し戰前に於ては未だ判然たる國際聯合團體としての形態を備へるには至つてゐなかつた。

戰後最初の會合が一九二〇年十月二十五日から二十七日までアムテルダムに開催された。之に參加したのは英、獨、墺、白、和蘭、丁抹、瑞典、諾威、ボヘミヤ、チエツク・スローヴキヤの十箇國に於ける不熟練工場勞働者二百四十二萬人を代表する二十八名の人々で、其中全員百二十八萬を有する英國の一般勞働者聯合會（National Federation of General Workers）と、會員六十八萬を有する獨逸工場勞働者聯合會(Deutscher Fabrikarbeiter Verband）が大勢を支配する地位に在つた。佛蘭西及丁抹の勞働組合も加入の希望を表明したけれども、代表者を送るまでには至らなかつた。露國からも三名の列席希望者があつたが、和蘭政府が入國を禁止した。

此會議によつて正式に國際一般工場勞働者聯合會（International Federation of General Fatocry Workers）が創立され其事務所をアムステルダムに置くことになつた。本會は言ふまでもなく各產業又は各職業に於ける熟練工、勞働組合に加入することのできない、若しくは加入することを欲しない不熟練工の包括的な各國勞働團體の國際聯合であつて、あらゆる種類の產業及職業に從事してゐる者を含んでゐるので、「一般（ゼネラル）」といふ名稱が與へられたのであるが、併し其中最も多くを占めてゐるのは油脂、染料、燐寸、紙、護謨等の化學工業に屬する勞働者

であつた、

新に造られた會則に於て、本會の目的は(1)不熟練勞働者の社會的及經濟的利益を擁護し、(2)勞働搾取に反抗するあらゆる國家的及國際的鬪爭を援助し且勞働階級の國際的團結を推持するに在りとし、又其實行手段として左の事項を列擧してゐる。

一、各種勞働組合の關係を密にすること。

二、各國に於ける不熟練勞働者の團結を鞏固にし、未だ其團體を有せざる諸國に於ては速に之を組織するの方法を講ずること。

三、數箇語を以て記述する一雜誌を發行すること。

四、各國に於ける不熟練勞働者の生活狀態及雇傭條件に關する報告を蒐集し公表すること。

五、勞働爭議の勃發に際し、罷業破りを防止すること。

六、重要なる同盟罷業又は工場閉鎖の發生に際しては、出來得る限り財政的援助をなすこと。

七、加盟組合相互間に於ける會員の異動を自由ならしむること。

八、各國不熟練勞働團體間の密接なる協働を行ふこと。

九、國際勞働組合聯合會並に其他の國際的勞働團體との提携を維持すること。

十五 國際農業勞働者聯合會

國際農業勞働者聯合會 (International Federation of Land Workers) は一九二〇年八月アムステルダムに於ける創立總會に於て成立したが、其第二回總會は一九二二年八月十五日から十七日まで、ウヰーンに於て開催された。其席上に報告された所により、本會加入の農業勞働組合員を國別に示すと左の通りである。

獨逸	六五〇、〇〇〇
伊太利	五〇〇、〇〇〇
英吉利	二四〇、〇〇〇
波蘭	一四〇、〇〇〇
墺太利	五〇、〇〇〇
チエツコ・スロヴキヤ	四五、九〇〇
佛蘭西	三〇、〇〇〇
瑞典	二〇、〇〇〇
ラトヴヰア	一六、〇〇〇
丁抹	一五、〇〇〇
和蘭	一二、〇〇〇
匈牙利	二、四二〇

白耳義　二〇〇
計　一、七二一、五二〇

右の中佛蘭西、白耳義及瑞典の三箇國を除いた他の諸國は第二回總會に代表者を出席せした。露國の代表者は參列を拒絶せられた。

此總會に於て決議された主な事項は次の通りである。

一、ワシントンに於ける國際勞働會議の決議の批准を要求すること。

二、ゼネヴに於ける第三回國際勞働會議が農業勞働時間問題を議案から削除したことを遺憾とし、一九二三年の同會議には其復活を要求すること。

三、第三回國際勞働會議が農業勞働に從事する婦人の產前產後に於ける保護、婦人及少年の夜業禁止、幼年者の雇傭禁止及社會保險制度の適用に付き、最低限度の要求すら許容しなかつたことを遺憾とすること。

四、前三項に關する要求を貫徹するの方法として、各國政府議會及黨派に對し極力運動すると同時に、農業勞働者の團結を强固にし、且社會黨に協力を求めて、一致の行動を取ること。

十六　國際精神勞働者聯合會

一九〇四年に創立せられた國際商業被傭者事務所（International Secretariat of Commercial Employees）は、戰後其組織を擴大して國際精神勞働者聯合會（International Federation of Non-manual Workers）を形造り、其第一回總會を一九二一年の八月十日から十二日までウヰーンに招集した。英、佛、獨、墺、匈、和、丁、瑞典、葡萄牙、ユーゴ・スラビヤ及チエツコ・スロヴキヤの十一箇國に於ける會社、銀行、商店の書記から成る組合の代表者が之に參列した。此總會では主として勞働保護立法、露國飢饉救濟、移民等に關する諸問題が討議されたが、委員に附託して決議するまでに至らなかつた。

尙此會議に參加した銀行書記組合の仲間だけで、別に國際銀行書記事務所（International Secretariat of Bank Clerks）を設けやうといふ議が纒り、伯林、ウヰーン、プラーグ及ブダペストの銀行書記組合が之に加入して、一九二一年十月一日から其國際事務所を伯林に開設した。

十七　皮革勞働者の國際會議

靴、鞣、鞍等の製作に從事する勞働者は戰前各別の國際團

を組織してゐたが、戰後に至つて是等の諸團體を合同し、新に皮革關係勞働者の國際聯合會を組織しやうといふ意見が略一致したので、一九二一年八月九日ウヰーンに於て其創立協議會を開催した。出席者は英、佛、白、獨、墺、伊、瑞西、チェッコスロヴキヤ、丁抹、瑞典、諾威及ルクセンブルグの十二箇國に亙る六十九人の勞働組合代表者で、之を職業別にすると、靴工四十二人、鞣工十三人、鞍工十四人であつた。此會議で合同問題は決定せられたが、會則案に就ては議論が一致しなかつたので、修正の上次に開かるべき總會に於て正式に決定されることになつた。

此會議は大多數を以て左の意味の決議を通過した。

一、本會議は露國勞働者をも包含する萬國勞働階級の團結を主張するものであるけれども、第三インターナショナルの行動は、詭詐、不法及不眞實を以て、各國勞働者間の分裂を促すものと認むるを以て、吾人は從前の如くアムステルダム・インターナショナルに加盟すること。

二、生産及分配機關の社會化を實行すること。

三、産業管理の權能を有する勞働者協議會を設置すること。

四、八時間制を確立すること。

五、各國に於ける皮革關係勞働者團體の發達を促進すること

下　基督教インターナショナルに屬する産業別インターナショナル

一　國際基督教坑夫聯合會

國際基督教坑夫聯合會（International Federation of Christian Miners）組織の豫備會議は、一九二一年四月十日十一日に墺太利のザルツブルヒで開かれたが、いよ／＼其發會式をかねた最初の總會は、一九二二年六月十四日から十七日まで墺太利のインスブルックに招集された。之に加入した各國勞働組合員數（一九二一年四月調）は左の通りである。

獨逸	一六三、七六七
白耳義	一〇、〇〇〇
波蘭	九、〇〇〇
佛蘭西	六、〇〇〇
和蘭	四、三四〇
墺太利	一、六三二

其外ユーゴ・スラビヤ、チェッコ・スローヴキヤの二國からも亦之に參加した。

本總會は先づ社會主義の階級鬪爭思想は基督教の精神と相容

れないもので、社會の安寧を害するものであるといふことを聲明して其立場を明かにしたる後、本會の運動方針として差當り社會保險制度の完備を要求することを決議した。

二　國際基督教鐵道從業者聯合會

國際基督教鐵道從業者聯合會（International Federation of Christian Railwaymen）の第一回總會は一九二一年四月六七の兩日ルチエルンで開かれた。本會に加入してゐる各國の勞働組合員數（一九二二年七月調）は左の通りである。

獨逸	二四六、〇〇〇
和蘭	一八、七五〇
佛蘭西	一〇、九六二
白耳義	一〇、四六八
墺太利	八、〇〇〇
瑞西	二、〇〇〇
計	二九六、一八〇

本總會の決議の趣旨は左の通りであつた。

一、一般勞働階級並に鐵道從業者の社會的及經濟的狀態を改善するには、正義及博愛の基督教精神を以てしなければならぬ。

二、戰後世界の經濟狀態を常調に恢復せしめるがためには、各國民が基督教主義の下に和衷協力することが必要である。

三　國際基督教金屬勞働組合聯合會

國際基督教金屬勞働組合聯合會（International Federati n of Chrisian Metal Workers Unions）の第一回總會は、一九二一年十一月六日から九日まで伊太利のトリノで開かれた。これに參列した人員と本會に加盟した勞働組合員數（一九二二年七月調）とを各國別に示すと次の通りである。

國名	參列人員	加入組合員
獨逸	一五	二二〇、四三三
和蘭	四	二一、六一八
白耳義	三	六、四七五
佛蘭西	三	四、〇〇〇
匈牙利	二	四、〇〇〇
瑞西	二	二、八一六
伊太利	一二	二、六〇〇
墺太利	一	二、四四三

本會で決議された主なる事項は次の通りであつた。

一、本會事務局をデュイスブルグに置くこと。
二、四箇國語を以て記載された機關雜誌を發行すること。
三、社會保險制度の普及及發達を要求すること。
四、各國の社會的及經濟的諸機關に勞働者代表者が合法的に参與すべき制度の確立を要求すること。
五、賃金引下の諸計畫に反對すること。
六、各國政府及議會が平和條約により創設せられたる國際勞働總會の事業を援助することを要求すること。

四 國際基督教紡績職工聯合會

國際基督教紡績職工聯合會 (International Federation of Christian Textile Workers) の第一回總會は一九二一年三月七日から十日まで獨逸のデュセルドルフで開かれた。此會議に参加した各國の代表者と本會に加入してゐる勞働組合員數（一九二二年七月調）とを示すと左の通りである。

國名	参列者數	勞働組合員數
獨逸	一五	一二九、五三五
白耳義	四	三九、四三二
和蘭	一	一七、七二三
チエッコ・スローヴキヤ	一	七、五〇八
瑞西	二	六、九九九
佛蘭西	二	六、五〇〇
墺太利	一	五、九四〇
計	二六	二一三、六三七

此總會では主として内部の統制に關する問題が討議せられ、一般の運動方針としては、一週四十五時間勞働と、社會主義團體の恐怖主義(テロリズム)に對する反對とが決議された。

五 國際基督教農業勞働組合聯合會

國際基督教農業勞働組合聯合會 (International Federation of Christian Land Workers Unions) の第一回總會は一九二一年四月二十七、二十八日の兩日獨逸のコブレンツで開かれた。此會議に参列したのは僅に獨、墺、白、和の四箇國に於ける農業勞働者組合員二十三萬六千人を代表する二十二名の人々に過ぎなかつたが、本會に加盟した各國の農業勞働者組合員は之よりも遙に多數で、一九二二年七月の調べによると次の如くである。

伊太利	三三六、〇〇〇
獨逸	一七五、〇〇〇
墺太利	四五、〇〇〇

和蘭 二〇、〇〇〇
匈牙利 二二、〇〇〇
白耳義 二、三三〇
チエツコ・スローヴキヤ 六〇〇

右の總會で決議された重な事項は左の通りである。

一、平和條約に依る國際勞働總會の組織を必要と認め、共目的の貫徹に助勢すること。

二、農業は天候及季節により支配されること大なるを以て、工業の如く一日八時間制を直に適用すること困難なるも、主義としては平均に於て八時間を超えざることを原則とし各國の事情に應じ適宜オヴータイム の制度を採用すること。

三、農業勞働者のために特別の職業紹介所を設け、傭主被傭者双方の代表者により之を管理すること。

四、農業勞働者土地購入の便宜を圖るため、公共團體より資金貸付制度を設くること。

五、農業勞働者にも失業保險法を適用すること。

六、ワシントン國際勞働會議に於て決議したる工業勞働者最低年齢婦人及少年の夜業、産前産後の保護等に關する條約は、農業勞働者に對しても之を適用すべきこと。

七、十八歳未滿の者に對しては強制的夜學教育制度を設くること。

八、農村に於ける小學教育に於ては、女兒には家庭經濟及嬰兒哺育、男兒には動物取扱、植物栽培、農具使用等に關する實用智識を授くること。

九、農業勞働者の居住及衛生狀態を改善すること。

十、農業勞働者に團結の自由を確認すること。

六 國際基督教精神勞働者組合聯合會

國際基督教精神勞働者組合聯合會 International Federation of Christian Unions of Non-manual Workers) は一九二一年九月二十八、二十九の兩日にルクセンブルグで開かれた創立總會に於て正式に成立した。此總會に代表者を送つたのは獨、佛、其他七箇國に於ける精神勞働者（主として會社、銀行商店等の書記的事務に從事してゐる人々で、官公署の被傭者は含まれてゐない）約五十八萬人で、之を國別に示すと左の通りである。

獨逸 五〇〇、〇〇〇
佛蘭西 三七、〇〇〇
チエツコ・スローヴキア 一四、五〇〇

和蘭	一一、七〇〇
白耳義	一〇、〇〇〇
墺太利	八、六〇〇
ルクセンブルグ	二、〇〇〇

右の外、伊太利、匈牙利及瑞西の勞働組合からは代表者は送らなかつたけれども、本會に加盟の意志を表示した。會長としては獨逸のハーペルマン、セクレタリーとしては佛蘭西のタッシエーが選擧せられ、本部は巴里に置かれることゝなつた。

七 國際基督教被服勞働組合聯合會

國際基督教被服勞働組合聯合會（International Federation of Christian Trade Unions in the Clothing Industry）の創立總會は一九二一年八月二三の兩日獨逸のコブレンツに於て開催せられた。之に參列したのは獨、佛、白、墺、和、の五箇國に於ける勞働組合員約七萬人の代表者で、伊太利及匈牙利からは書面を以て加盟を申込んだ。決議としては勞働者移民の自由を認むること、國境附近に同盟罷業が起つた時は隣國の勞働者は之に聲援すること等であつた。

八 國際基督教煙草勞働者聯合會

國際基督教煙草勞働者聯合會（International Federation of Christian Tobacco Workers）の創立總會は一九二〇年十月十日及十一日に獨逸のデュッセルドルフで開かれ、獨、和、白、墺及チエッコ・スローヴキヤの五箇國に於ける約五萬八千人の勞働組合員が之に加入した。本會の第二回總會は一九二一年八月二十三、二十四の兩日墺太利のザルツブルヒに招集せられた。參列代表者の國籍は前回の通りであつたが、匈牙利の勞働組合が新に之に加盟した。討議の題目は主として一般勞働條件の改善及社會保險に關するものであつた。

九 基督教婦人勞働者の國際會議

基督教婦人勞働者の國際會議（International Congress of Christian Women Workers）は、國際基督教勞働組合聯合會の招集によつて、其第一回を一九二一年九月十二日及十三日にブラッセルで開催した。獨、佛、伊、匈、白、和蘭、瑞西、西班牙及ルクセンブルグの九箇國から代表者が參列した。此會議に報告された所によると、歐州各國の基督教勞働組合に屬する婦人勞働者の數は次の通りである。

獨逸	二〇〇、〇〇〇
伊太利	一四〇、〇〇〇

佛蘭西	四四、九一七
白耳義	二九、五一八
墺太利	二〇、〇〇〇
和蘭	一七、七四五
匈牙利	一七、四九九
瑞西	六、八一一
計	四七六、四九〇

此會議で決議された事項は左の通りである。

一、婦人勞働者に勞働組合主義を鼓吹し、勞働保護政策上に婦人の發言權を確保すべき運動を行ふこと。

二、婦人勞働者に對し土曜半休制度を實施すること。

三、產前產後各六週間の休養及强制的姙婦保險の制度を設くること。

四、男子の收入を以て家族全體の生活を支持するを原則とし、婦人の賃金勞働は漸次之を廢止するの方針を取ること。

五、家內工業の勞働條件は之を工場工業と同一にすること。

基督教婦人勞働組合の第二回國際會議は一九二二年六月二十日及二十一日に墺太利のインスブルックに於て開催された。獨、佛、白、伊、波蘭、チェッコ・スローヴキヤ、瑞西及和蘭の八箇國から代表者を送つた。此總會では主として女工の教育問題が討議された。而して次の意味の決議が滿場一致を以て通過した。

一、婦人の徒弟に對しては特別の訓練方法を設け、婦人の體質、知識及道德的特色に合致したる職業選擇法を施行すること。

二、婦人勞働者の道德的及社會的教育は、彼等個人の幸福のみならず、社會の福利、生產力の增進に與つて力あるものなれば、婦人勞働組合は社會工業團體及宗教團體と協力して、婦人勞働者の教育施設を振興すること。

民衆の要求を體現するの途は只青年民主黨の創造あるのみ

永井柳太郎

(一)

我國に於ては今や政黨の存廢が問題である。新政黨を説くは時代錯誤だと云はるゝかも知れぬ。如何にも現在の政黨政派は孰れも其存在の價値を疑はれて居る。黨派の弊害は啻に立法部のみならず、行政部にも浸潤し、官公吏を選任するにも、民衆の要求よりも黨派の都合を主とするに至つた。中央でも、地方でも、其施設は專ら黨利黨略に依つて決せられ、絶對に嚴正中立であるべき裁判官と雖も時としては黨派の感情を無視しては其職務を遂行する事の困難を感ぜざるを得ないのである。從つて一般世人の黨派に對する反感は昔日の藩閥に對するに異らざるものとなり、今や既成政黨打破は識者の輿論であると云ふて差支へない。善良なる人は孰れも黨派に關係する事を避け、經濟界に於けるグレシアムの方則と同じ方則が政治界に於ても亦其儘行はれつゝあるやうに見える。斯くの如き時に於て政黨を論ずる事は世人の趣味に逆行せんとするものであるかも知れぬが、併し今日の黨派をして斯くの如く墮落せしめたことに對しては、議員を選出する權利を有する有權者は云ふまでもなく、一般民衆も亦責任がないとは云へない。加ふるに黨派の善惡は別問題としても、それが現在我國の立法府を左右する地位にある限り、一般民衆としては其存在を是認すべきか、否認すべきか、是認するとしても現在の狀態に放任すべきか、又進んで改造を施すべきか、それは民衆自身の生活に密接且つ重大なる關係を有する問題であらねばならぬ。

政黨は廢止すべしと云ふ論者が今日の我國には少くない。獨り政治家のみならず、民間に於ても亦總ての黨派制度を廢せんことを主張する者は隨分多いけれども、併し黨派制度を全廢すると云ふ事は云ふべくして行ひ難き所である。第一に政黨の出

現は社會心理學上より見て必然の現象である。凡そ自由な國家で政黨のないものはない。極端なる專制政治國家、又は其文化の程度が自由政治を行ふ程度に發達して居ない程低級な未開國は論外であるが、苟も民衆の政治運動が行れる國では必ず其主義を異にし、其利害を同うせざる者の間に分裂を生じ、異れる黨派を生ずるのは必然である。民衆は黨派の組織に依つて初めて混沌たる群集の狀態から、組織あり討論決議の能力ある一團體を構成し得るのであつて、如何に自覺あり熱誠ある民衆と雖も、組織なき場合は系統ある活動をする事は出來ぬ。パウルゼン博士が其政黨政策論に於て「組織なき群集は風に從つて吹き廻さるゝ砂塵の如し」と喝破したのは大に味ふべきである。偶然落ち合つた民衆の大會に於ては稍もすれば有力なる演說や、巧妙なる掛引のために誤て其本意に非る決議をなし、又少數なる人々に依つて豫め計畫せられたる日程を其儘鵜呑にするやうなことが珍しくない。而て翌日更に會議が開かれ、何人かゞ前日に優りて有力なる演說や、巧妙なる懸け引きに依つて前日と全然異る決議をなさしむる事も不可能でない。そこで民衆は自己の生活上の要求を政治上に徹底せしめんとするに際しては系統ある討論決議の團體を組織すると云ふ事が必要となるのであつて、それが卽ち政黨である。だから政黨は民衆が其要求を實際政治上に實現するがために自發的に發生する必然的組織であると云つていゝ。第二に、單獨では政治上に於て自己保存、及び自己貫徹の機會を得る事の出來ない階級が、政黨を組織する事に依つて初めて國家に重大なる關係を有する有力なる階級である事を認識せしむる事が出來る。勞働黨が其の適例である。勞働階級の利害は啻に勞働者自身にとつてのみならず、國民全體にとつて重大なる關係を有する事は云ふまでもない。勞働階級の精神的及び經濟的萎縮はやがて其社會全體の經濟的及び精神的萎縮となつて現れるのであるから、勞働階級の利害と國家の利害とは不可分の關係があるけれども、孰れの國に於ても勞働階級が黨派を組織して其自己保存及び自己貫徹の要求を實現せんとする系統的運動を始めるまでは、勞働階級と國家との密接なる關係に對する正當なる理解が一般世人に普及しなかつた。而るに各國ともに優勢なる勞働黨が起つて政治上に於ける重大要素なる事を認識せしめ、勞働階級の盛衰が國家社會の盛衰に大關係ある事を絕叫したればこそ、一般世人も初めて勞働階級の生活上の要求を理解し、勞働階級以外に於て社會問題解決の急務を絕叫する者を生ずるに至つたのである。第三に代議政治は黨派の組織的活動なくしては其運用が困難である。若し議會に於て政黨がなく、重大なる法案に對する議員

の賛否を豫測する事が出來なければ、政府は法案の運命を確むるの術なく、政局の不安は絶えざるのみならず、稍もすれば議員が私利私慾に動かされて其賛否を決する事が少くないであらう。現にフランスの如きは黨派の離合集散常なく、多數の小黨割據して互に權謀術數を事とするので、何れの内閣も基礎鞏固なるを得ず、第三共和國の憲法の制定以來約五十年の間に内閣を更迭したる事六十回以上に及んで居る。而て政治家の犯罪は極めて多く、政治的疑獄事件の多數なる事に於て遙かに英米兩國を凌いで居る。だからグラッドストンやジスレリーの如きも政黨の弊害を知つて居たが又其價値を認めて居た。ヘーゲルは背て現實は同時に合理的なりと云つた。此言葉は少くとも今日の政黨に適用し得るのであつて、今日の黨派は種々なる弊害を有するに相違ないが、而も黨派の存在其物は實に止むべからざる理由あるがためである。現に革新俱樂部の如きも議員の社交團體に過ぎぬと聲明はして居るが、最近所謂暫定政綱なるものを發表して其共同主張を明にし、頻りに地方に遊說して其支部の設置に腐心しつゝあるを以て見ても、其事實上に於ける活動は、既成政黨が其政綱を宣言して同志を天下に募りつゝある行爲に比して異る所はない。其他貴族院を見ても、或は何々會と呼び或は何々俱樂部と稱して其外形は曖昧に附して居るが、事實上政黨に外ならざる大少多數の團體がある。之等は孰れも堂々と政綱を宣言しては居ないが其目的は同一利害關係を有する政治家が政權の爭奪を目的として集つて居るのであつて、其實質に於ては一種の政黨である事爭はれない。

（二）

だから政黨打破と云ふ事は事實に於て云ふべくして行はれざる事である。只歷史上に於て統一的專制政治の行はれたる時代には政黨の爭がなかつた。けれども其場合に於てさへ猶暗默の間に專制政府に對する反抗者の群れは到る所に發生し、それが鬪爭以上に恐るべき革命又は動亂となつて勃發し來つたのである。茲に於て私共の進むべき途は政黨其物の打破ではなく、民衆の要求に離反したる政黨を打破し、民衆の要求を體現する政黨の創造に向ふ事である。而るに我國に於ける現在の政黨は果して民衆の生活上の要求を實現する事を目的とするや否やと云ふに、其多くは反つて民衆の生活上の要求に背反して居ると云はざるを得ない。歐米諸國の政黨は旗幟鮮明なる主義の上に立つて居るけれども、我國の政黨は主義政見の結晶の上に立つて居ると考へる事は出來ぬ。歐米諸國の政黨は其思想の系統より之を見れば、大體に於て三派に大別する事が出來る。第一は現

在の資本主義經濟組織を承認する保守黨、第二は現在の資本主義經濟組織を承認する進步黨、第三は現在の資本主義經濟組織を否認する急進黨の三である。即ち英國に於ては統一黨、獨逸に於ては獨逸國民黨、基督教民主人民黨、佛蘭西に於ては共和團結等が其第一種に屬し、英國に於ける自由黨、獨逸に於ける獨逸人民黨、獨逸民主黨、佛蘭西に於ける民主共和黨、左派急進黨、左派共和黨、は第二種に屬し、英國に於ける勞働黨、獨逸に於ける社會黨、共產黨、佛蘭西に於ける合同社會黨、及び共產黨等が、第三種に屬する。然るに我國に於ては何れの政黨も其主義主張は出來得る限り曖昧にし、只時々に民衆と社會とに迎合して政權爭奪に便宜なる政綱を揭げるに過ぎない。私は先日前浦潮政權の主腦者たるアントーノフに會つた。其時アントーノフが、自分は日本の政黨の分野を見て奇異の感に打れた。現在の日本に於ける政界主腦者は多く故大隈侯の部下である。現首相加藤大將は大隈內閣の海軍大臣であつた。反對黨首領加藤子は大隈內閣の外務大臣であつた。兩加藤の孰れにも與せず、獨立の地位に立つ尾崎氏も亦大隈內閣の司法大臣であつた。最近國民黨を解體して革新俱樂部を組織せんとする犬養氏も大隈侯の部下であつた事を知つて、大隈侯の勢力の如何に大なりしかを知ると同時に之等の政治家が同一の首領より出でゝ個々別々の行動を執らざるべからざるに至りし理由を解する事が出來ぬ。何となれば之等の政治家は今日の世界の大問題たる資本主義經濟組織を持續すべきや否やの大論爭に對しては何れも持續派に屬すべき政治家たる事に於て一である。然るに之等の政治家が別々の團體を組織して對立しなければならぬ理由は何處にあるかと質問せられたのであるが、外國人から見れば日本の政黨が何故に分立しなければならないかと云ふ事を理解する事は容易であるまい。我國の現在の政黨の中で政綱及び政策を宣言して居る者は政友會と、憲政會と、革新俱樂部とに過ぎない。然るに我々日本人が此政綱政策を一讀した丈でも何故に彼等が別箇の團體を組織して對立しなければならぬかを理解する事は困難である。其政綱なる物は孰れも大同小異である程度の相違はあつても主義の相違はない。或は世界の平和を保障し、國際聯盟の完成に努むべしとか、或は國民生活の安定を計り、其思想を善導すべしとか、或は勞働問題の解決を期すべしとか、何れも漠然と雲を掴むやうな事を云ふて居る丈け夫れ丈け何處にも其主張政見の相違を見る事は出來ない。固より憲政會と革新俱樂部とは其思想に於て政友會よりは稍進步的にして、共に西伯利撤兵を主張し、日露貿易の復舊を切言し、內に於ては普通選擧の即時斷行を叫ぶ點に於て、些か政友會と趣を異にするけ

れども、日露貿易の復舊を叫ぶに拘はらず勞農政府承認を躊躇し、我國現下の大問題たる社會問題を如何に解決すべきかに就いて何等の具體的方策を示さない點に於ては其不徹底なる事に於て政友會と同樣の非難を被らざるを得ぬ。今日程我國の勞働者の間に階級鬪爭の思想の盛になつた事はない。殊に最近數年間の物價暴騰に伴ふ生活難は益々其思想を激成した。大正七年即ち講和第一年には日本全國を通じて四百十七の同盟罷業が起つた。そして約六萬三千の勞働者が之れに參加した。大正九年即ち三年目には既にそれが同盟罷業數千六十九、參加勞働者十二萬七千五百と云ふ程度に激增した。今年に至つてはそれが益增加して上半期に於て同盟罷業數約五百、參加勞働者數二十四五萬に達して居る。此簡單なる數字の中にも階級鬪爭を意味する運動が我產業界を其根柢より震撼せんとしつゝある傾向を認むる事が出來るのであつて、我國の政治家たるものは勞働問題を如何に解決すべきかは彼等に取つて重大なる事業であらねばならぬ。地主對小作人の爭議も亦最近著るしく增加し、昨年五月一日より今年四月三十日に至る一ヶ年間に於て其數實に千六百八十件を算し、之れに關係した地主は三萬四千八十六、小作人十四萬五千八百と云ふ事である。勿論之れは表面に表れたもの丈けであるが隱れたるものを合算すれば尙之れに二倍、三倍するに相違ない。之等の問題を解決する事は實に緊急の事業と云はねばならぬが、之等の問題の解決に對しても何等の具體的の政策を示して居らぬ。勞働問題解決に就いて憲政會は稍具體的に勞働組合及び社會保健に關する制度を設け、其他各種の社會政策を實行すべしと云ふて居るが、其他各種の社會政策とは何を意味するか。革新俱樂部に至つては其暫定政綱に於て只漠然と社會政策に關する施設を民本的ならしむる事と云ふ一條と、勞働問題及び小作問題に關する立法的解決を圖る事との二ヶ條を揭げて居るに過ぎぬ。憲政會が小作問題に就いて何等の宣言をもして居ない時に革新俱樂部が小作問題解決の必要を認めた事は多とすべきであるが、只立法的解決を計ると云ふ丈けでは、勞働者や小作人がストライキのやうな直接行動に出る事は宜しくない、法律の解決に立法の解決に俟つべきであると云ふ丈けの事で、如何なる法律を制定すべきかに就いて全然沈默して居る事は、革新俱樂部に多少の望みを屬したる無產階級を失望せしめたに相違ない。斯くの如くにして今日の我國に於ける政黨の政綱及び政策なるものは、何れも軍備縮少とか、財政整理とか、物價調節とか、綱紀肅正とか、外交刷新とか、只一時の彌縫と、氣休めを意味するのみで、毫も國家改造の根本義に徹底して居ない。而も有體に云へば今日の上下兩院を組織す

る政治家に徹底したる大改造を期待するは期待する者の愚である。政友會でも、憲政會でも、亦革新倶樂部でも中に少數の例外の人物もあるが、大體としては皆一種のブルジョア黨である。ブルジョアの代表機關である以上、ブルジョア階級の利益を脅威する如き宣言及び政策を實行する事は至難であるに相違ない。

（三）

民衆から見た現代日本の政治は階級政治たる事に於て封建時代と變りはない。今日の生活の封建時代に比して著るしき相違の一つは刀劍の代りに法律を以て人の生命を保護する事である。併し人は殺されて死ぬのみでなく、又餓えて死ぬのである。營養不良のために年々多數の人が死ぬ。今日の法律は刄を以て人を殺す事を禁ずるけれども、人を營養不良にする事を禁じて居らぬ。否時としては人を營養不良にし、甚しきに至つては餓死せしむる如き冷酷なる人間を、或は國産奨勵とか、或は殖産興業とか、種々なる美名の下に援助することも少くない。前內閣及び前々內閣の物價政策の如きも、其動機は反對であつたに相違ないが、其結果より見る時は確かに一種の殺人政策であつた。而も民衆は法律の制定に參與する權能を有たないのであるから、假令自己のために如何なる危險なる法律が出來ても、それに對して自己を防禦するとは出來ない。其生活の不安は封建時代に於て唯一の護身具たる大小を帶する事を禁ぜられた百姓町人と同じである。今や民衆殊に勞働者の特權階級に對する反感憎惡、復讐の精神は殆んど炎ゆる如く熱烈なるものがある。彼等の中には特權階級の獨裁政治を顚覆すると同時に、之れに代ふるに無産階級の獨裁政治を以てすべしと叫ぶ者もある。彼等の中には資本主義政治を否認する餘り、無政治を唱道する者もある。斯くの如き極端なる議論に與せざる者と雖も、猶且つ從來彼等が特權階級より受けたる無法なる壓迫と、冷酷なる待遇と誠意なき約束と、不正なる分配とに對して火の如き不平不滿の氣を吐くに至つた。若し特權階級が此白熱した民衆の自覺と、憤怒との叫びに耳を藉す事なく、猶權力及び利益の壟斷を繼續するに於ては勢の趣く所遂に如何なる大事變を發生するかも知れない。

歷史の唯物的解釋は必しもフオイエル・バツハやマルクスに初つたのではない。アリストートルや、マキアベリや、ロツクや、古來の偉大なる政治哲學者の頭腦にも既に類似の思想が宿つて居た事を認めざるを得ない。アリストートルは云ふた。總ての政治革命は物の均衡を失するより起る。互者の數著るしく

増加し、富力が君主の權力に匹敵するに至ればやがて政體は一變して寡頭政治となる。貧者の勢力が富者の勢力と對抗し得るに及んで、富者が猶其權力を壟斷すれば革命を免れない。民主國に於ては少數の煽動政治家が貧民を煽動して富豪に對する反感を激成するか、又は富豪が貧民の蹶起せん事を恐るゝの餘り、自ら進んで貧民を壓迫するか、孰れかに依つて屢々革命を挑發する。其他にも副因又は偶發的原因と稱すべきもの少からされども、其主要なる原因は常に自己が同等と信ずる他の人々が自己以上の物を所有するか、又自己より劣等と信ずる他の人々が自己と同等の物を所有する場合に於て其不權衡を破らんとする本能より革命的運動が起り來る、と。マキアベリも亦之と同じ意味に於て君主に警告して『貴族やギルドや其他の階級間に於ける富の爭奪に對する衝突を豫防する事が君主の仁愛と賢明と威嚴とを示す最適の機會である。』と云ふて居る。ロックに至つては人間が國家を組織し、政府の支配に一身を委ねる第一の目的は財産の保存である。故に財産の保存は國家の發生の原因であると同時に又目的であるのだから、猥りに自己の財産を誅求し、或は侵略する如き政府に對しては革命の權利があるとさへ云ふて居る。之等の議論が餘りに極端であるとしても、生活に對する脅威と其脅威より脱出せんとする本能とが孰れの時代に於ても亦何れの國に於ても政治革命の主要原因である事は爭ふ事が出來ない。

譬へば政治革命中最も倫理的であると考へられた米國獨立戰爭にしても、其原因は時の英國政府が米國在住の英人に與へた生活上の脅威に對する反動である。十七八世紀時代に於ける歐洲諸國の植民政策は專ら君主及び貴族の財政上の慾望を充す事を目的とした。出來得る限り其植民地の生産業を壓迫して、出來得る限り本國の商品を買はせ、其代價として出來得る限り多量の貴金屬を其植民地より徴發する事が根本方針となつて居たのであるから、植民地の住民としては高價を忍んで本國政府の御用商人から其生活必需品を買ひ入るゝか、それとも斷然獨立して自己の手に依つて自己の生活必需品を生産する自由を得るか、生死孰れかを選ぶの外なきに至つた爲に革命を決心したのであつて、決してルソーの天賦人權論を聞いて始めて獨立自由の必要を悟つたのではない。假令ルソーの天賦人權論を聞き、人間は政治上の束縛や社會上の壓迫より脱出して自然に歸らなければ人間としての生存の意義に徹底する事は出來ぬと教へられても、彼等が英國政府の政治に滿足し、現實の生活に不平不滿がなかつたならば、決して其教は彼等の熱血を沸騰せしめて彼等の心臟に大なる鼓動を與へる事はなかつたであらう。米國

の獨立戰爭と同じ程度に倫理的意義を有するものと考へられて居る南北戰爭と雖も、南部が奴隷主義を執り、北部が奴隷解放主義を取つた其思想的相違の根柢に經濟的理由が實在した事を認めざるを得ぬ。固より南北戰爭の原因には政治的理由もあつた。即ち合衆國の主權が合衆國全體に在るか、合衆國の各州に別々に存在するかと云ふ事が南北の分裂を激成したる重大なる原因の一であつた事は爭はれぬが、併し之れと同時に南部が擧つて奴隷主義を主張し、北部が擧げて奴隷主義を否認したと云ふ事は南北の產業上の要求に出でたるものである事を認めざるを得ぬ。北部は農業地でない、工業地である。南部は農業地である。農業地にして人口の少い所には自ら奴隷の必要があつた。北部は工業地で智識もなく、熟練もなき奴隷の必要がない。從つて北部は奴隷解放を主張し、南部は之れに反對せざるを得なかつたので、必しも北部の人が博愛主義で、南部の人が皆利己主義であつたと云ふのではない。北部を代表するリンコルンが奴隷解放を宣言した時に、南部諸州が聯合して獨立を宣言するに至つた其革命的事變の背後にも亦生活上の一大脅威が潜んで居た事を認めざるを得ぬ。斯くの如く學說上に於ても、又實際政治上に於ても、經濟上の要求が政治上の治亂興廢を決すべき重大要素となるのであつて、此點より見る時は、今日の日本に於て民衆の生活上の要求を實現すべき一切の機會が奪はれて居ると云ふ事程大なる危險はない。

（四）

今日の民衆の最も痛切なる要求は人格平等の認識と、其認識に基く政治及び社會組織との徹底的改造である。僅かなる納稅額の減少や、少々なる物價の調節に依つて、今日の我國に於ける社會問題の解決が出來るなど丶思ふならば大間違である。之等の事も必要に相違ないが、假令之等の事が悉く成就しても民衆は依然として不平不滿である。何となれば人格平等の認識と、其認識に基く政治及び社會組織の徹底的改造が行はれざる限り、社會は依然として征服者と被征服者との二大階級に分裂し、征服者は恣まゝに被征服者の勞力を搾取し、其生活を脅威する危險が存在するからである。

此多數民衆の要求と現在の我國政治家の思想との間には殆ど越ゆるべからざる溝渠ある事を拒む事が出來ない。今日の政治家は、政黨も官僚も唯政權の爭奪に沒頭するのみで、勞働問題乃至生活問題の解決には殆んど風馬牛相關せざるの傾向がある。殊に我國の立法府は貴衆兩院共に大體に於て特權階級の代表機關であつて、其政治團體の多數は依然たる保守黨である。

唯憲政會及び革新倶樂部のみは其政綱に於て比較的進歩的であつて、普通選擧の必要を認むる點に於て纔かに一點民衆の要求と相通ずるものがあるけれども、而も勞働階級乃至無產階級の生活の安定及び其向上を計るものとしては未だ甚だ不徹底である。犬養氏其他の舊國民黨員が解黨を決したのは此民衆と既成政黨との間に於ける思想上の距離を短縮せんと欲する苦心に出でたものであらうと察して大に望みを屬したのであるが、愈々其政綱を見るに及んで其期待を裏切られたるを遺憾とせざるを得ない。總ての政治家中民衆に最も密接なる關係を有する政黨政治家にして尙且つ斯くの如しとすれば、民衆は何處に於て其生活上の要求を徹底すべき機會を求むべきぞ。或人は今日の我國に於て議會否認の思想の勃興した事を以て議員の品位墮落の罪に歸するけれども、それは皮相の觀察であつて、其根本原因は現在の議會が上下兩院ともに特權階級の代表機關たる性質を有し、毫も民衆の生活上の要求を顧慮せざる點に存する。

茲に於てかどうしても既成政黨政派以外に於て直接民衆解放を理想とする新政黨の大に興るべき必要がある。最近私及び私の同志が各地に遊說したる間に直接見聞したる處に依れば、今や全國各地に於て、多數の青年政黨が崛起し、何れも政友會とか、憲政會とか、革新倶樂部とか、既成の政黨政派に超越して自ら國家改造の中心勢力たらん事を理想として居る。之等の青年政黨は今各地に割據して居るけれども、之が早晩相互の間に聯絡をとつて一大改造運動を興す事になれば、民衆の生活上の要求を體現する點に於て最も進歩したる新政黨となる可能性がある。最近一躍して政權を掌握して天下の耳目を聳動したる伊太利のファスチスチィの如きも、最初は微々たるもので、千九百十九年十月其第一回大會を開催したる時には、會員の總數一萬七千を出でなかつた。それが僅かに三ヶ年にして全國に四五十萬の團員を有し、遂に政權を把握するに至つたのを見ても、民衆の要求に適合したる運動が起つて一度機運の熟したるに際會すれば、意外の大勢力をなす事を想像し得るのであつて、新政黨を興さんとする者にとつては好箇の參考と云はざるを得ない。我國にはファスチスチィの運動の本質を誤解し、我國の國粹會などゝ大同小異のものと考へる人があるけれども、それは大なる誤解であつて、ファスチスチィ團の根本思想は伊太利獨特の民族箇性を基礎とする勞働問題の解決に存する。伊太利は戰後諸國の勞農政府と脈絡を有する共產主義者の革命的運動の爲めに、共產業上及び社會生活上に多大の慘害を受けた。ファスチスチィ團は共產主義者の革命的運動に反對するが、勞働問題解決の急務を否認するものではない。唯總ての民族は各其固

有の民族箇性を有する、其箇性を完成する事が軈て又人類文明に對する貢献である。勞働問題解決も亦此民族箇性の要求を基礎として其解決を計るべきである。同じカール・マルクスの學說が英國に入つてギルド社會主義となり、獨逸に入つて國家社會主義となり、露西亞に入つて無產階級の獨裁政治となるのは皆其民族箇性の要求に基くものであつて、夫れを取捨選擇することなく直譯的に露國の勞農政府を模倣せんとする思想に反抗して立つたのが即ちファスチスチィの勞働運動の發生したる根本原因である。故にファスチスチィ團の指導者中にはムツソリニオを初めとし、アルビナチとか、ロツシとか云ふサンヂカリストを網羅せるのみならず、多數の勞働者や、其他無產階級に屬する人々が之れに參加して居るのも偶然でない。だから此ファスチスチィ運動を單純なる反動運動として看過せんとすることは大なる誤りであつて、或程度迄戰後經營を完成して新に生れ出でんとする伊太利民族の要求を體現したる所に其運動の强みが存するのである。故に若し我國に於ても、內には民衆の生活上の要求を體現し、外に對しては日本民族の白人諸民族に對する對等權と共生存權を確立する事を理想とする青年民衆黨が起つて大に天下に呼號し、自ら既成政黨政派に超越し其大正維新を意味する政治的社會的大革新を斷行せんとする抱負と、見識と、熱血と、氣力とに富む青年の大運動が興つて、特權階級の牙城に肉迫するならば、全國の民衆は歡呼して其出陣を祝し、ファスチスチィ團蹶起と等しく數年ならずして其理想を實現するの地位に達するかも知れぬ。舊日本を葬つて新日本を建設せんとするには唯此一途あるのみである。

全然失敗に畢りたる西伯利出兵の全部撤退を機として

軍閥を葬るの辭

西比利亞座の軍閥劇

水野廣德

世に馬鹿氣たことの代表語として「骨折損のくたびれ儲け」と云ふのがある。我が西比利亞出兵ぐらい適切に此語に當て嵌まるものはあるまいと思ふ。素より對露政策の失敗は獨り日本のみでなく、勞農露國に對して武力干渉を試みたる列國は何れも皆悉く失敗したのである。併しながら最も目先の見へぬ、最も諦らめの悪き、最も慾張りたる、最も意地穢なき、我が國が最も多く骨折つて最も多く草臥れた譯である。

内地に於ては蕎麥代の二錢、湯錢の一錢の値下げに浮身を窶し、一人の殺人犯に三年五年の裁判を要する今日此頃、惜し氣も無く六億餘の巨財をば空しく黒龍江の濁水に投じ、二千五百の同胞をば朔風凍ふる雪の曠野に犬死せしめたるものが西比利亞出兵である。而かも之に依つて得たる處のものは何であるか。日本の侵略慾に對する世界の誤解と、日本軍の……に對する露人の怨恨ではないか。二重外交、二重統帥の暴露に依る國家組織の破壊と、苦心慘憺多年の經營に成れる在西邦人利益の覆滅ではないか。若し强ゐて殘るところのものを求むれば、某々等軍司令官の男爵と、總花的に撒き散らしたる出征軍人胸間の勳章ばかりである。

無謀の師は旋らず、無名の師は勝たずとか。見よ、我が軍の浦鹽引揚當時に於ける悲哀の狀を。宛として敗竄兵の夜逃げ同樣ではないか。我が運送船の影未だ消へずして、浦鹽全市赤旗に埋れたるは果して何を語るものぞ。見よ、軍司令部の東京歸着の當時に於ける蕭景の景を。五ヶ年外征の將士を迎ふる國民の感謝が何處にあるか。報道好きの新聞紙までが筆を收めて無言の迎辭を述べたるは果して何を示すものぞ。凱旋の字は價せ

ず、歸着せる將士等が、萬歳歡呼の聲を聞く代りに秋風落莫、枯葉獨り塵に舞ふ東京驛頭の此の景を見たる時、心中の感慨夫れ如何ぞやである。

新聞紙の報ずる處に依れば、歸着せる某參謀は「今度の出兵は政略出兵である。政略出兵の價値を解せざる國民は、チャンバラをやらなければ出兵の價値を認めない。實戰をやれば一兵卒の戰死にさへ熱狂するのに、政略の犧牲になつた多數の將校士卒を失つたことに對して冷淡であるのは甚だ遺憾に堪へぬ」と憤慨したとある。全く同感である。西比利亞出兵は慥に政略出兵であつたに相違ない。併しながら其の政略たるや、軍閥の爲めの政略である。政商の爲めの政略である。唯斷じて國家の爲めの政略ではなかつた。吾人國民は斯くの如き不純なる政略の犧牲と爲つて、雪の西比利亞に犬死せる將校士卒に對しては、一層の同情を表するに吝なるものではない。若し夫れ強ゐて出兵の價値を認めしめ、恩賞の口實を作らんが爲めに、不必要なるチャンバラを遣りたりとすれば、兩國の犧牲者に對して更に層一層の同情を表する。軍閥の徒にして、國民の同意と了解とを得ざる軍事行動なるものが、如何に悲慘なる結果を生ずるかを經驗し得たりとせば、是ぞ西比利亞出兵に依つて我國の得たる唯一の利益である。但し國民は其の餘りに高價なるに泣かさるを得ない。」

「夫れ兵は國の大事である。猥りに動かすべきでない。之を動かすには必ず舉國一致でなければならぬ。左れば吳子も其の兵書に「國を和せずんば以て軍を出すべからず、先づ和して而して大事を爲す、敢て其の私の謀あるを信ぜず」と說いて居る。我が西比利亞出兵は果して國民の同意を得て居つたか、果して國民の了解を得て居つたか。即ち吳子の所謂先づ國を和して而して後に大事を爲したのであるか、更に國民は此の出兵が軍閥政商輩の私謀にあらざることを信じて居つたであらうか。」

國民の大多數は最初より西比利亞出兵に反對して居つた。少くも出兵の目的と理由とを了解して居なかつた。西比利亞出兵當初の唯一の理由は、エタイの知れぬチエツク軍救援の爲めと云ふことであつた。素より此の時に於ては聯合國の共同出兵なりしが故、我が國としても國策上政略上出兵の已むを得ざりしことを承認せねばなるまい。此の點に對して吾人は軍閥を責めない。政府を責めない。併しながら公平なる國際正義の見地に立つて論ずれば、當時露國は革命に依り帝政滅びて勞農政府成立し、國內渾沌として紛亂を極めたりとは云へ、日本は勿論列國共に露國に對して宣戰を布告して居たのではない。即ち露國は日本及列國の敵國ではなかつたのである。敵國にあらざる外

國の領土に恣まに兵を出して國土を蹂躙し、國民を殺戮することは、國際法より見るも、國際道徳より見るも、大なる不正であると云はねばならぬ。

チェック軍救出は其の理由甚だ薄弱なりとは云へ、同盟軍の救援と云ふ點に於て尙ほ幾分出兵の名目を有して居つた。而して日本以外の國は出兵唯一の理由たるチェック軍救出の目的を達するや、大正九年春までに何れも潔く西比利亞より撤兵し、チェック軍も亦同年六月を以て全部浦鹽を引揚げたのである。是に於て西比利亞出兵の目的と理由とは全然消滅したので、日本も此際斷然撤兵するが至當であつたのである。然るに日本軍のみは其の後も尙ほ引續き、種々勝手なる理由と口實とを儲けて荏苒駐兵を繼續した。されば此の時よりして我軍の西比利亞出兵（或は駐兵）の目的と理由とは全然別種のものとなつたのである。即ち「チェック軍救出」と云ふ借り物の金看板を奪はれたる後に於ける我軍の行動には一定の目的さへなく、恰かも娼婦の出來心の如く其日〱の風次第で、實に支離滅裂を極めたものであつた。乃ち最初の積極的赤軍討伐より消極的赤軍防止となり、白軍後援となり、更に赤白に對して嚴正中立となり最後に赤軍との握手となり、恰かも猫の目玉の如く變化したのである。此の朝令暮改の豹變的命令に軍隊は殆んど其の歸適する處を知らず、之が爲め軍令其の威を失して軍紀弛廢し、終に原少佐の如き不逞なる愛國軍人をさへ出すに至つたのである。七書尉繚子に所謂「令は衆心を一にす、衆審かならざれば則ち屢變ず、屢變ずれば則ち令出づると雖も衆信せず」とは即ち是である。

斯くの如く、我軍駐兵の目的と理由とは屢々變じたりとは云へ、要するに西比利亞政情の不安定を口實とし、武力を以て露國の內政に干渉したるに外ならないのである。一體全體露國が帝政にならうと、勞農政にならうと、露國民の自由意思に任かすべきもので外國の干渉すべき問題ではない。隣の家で、働き手の妻君が飲んだくれの亭主を尻に敷いたのが癪に障はると云つて、無斷で土足で闖入して、妻君の横つ面を張り倒しても構はんと云ふ法はない。彼我地を代へて考ふれば、他國の君主政體が氣に食はぬと云つて、勞農露國が勝手に兵を君主國に出し恣まに都市鐵道を占領し、國土を蹂躙し、住民を殺傷したとすれば、其國人は何と思ふであらう。我身を抓つて人の痛さを知れとは此處のことである。西比利亞駐兵は其の名に於て正しくない、其の目的に於て不純である。」

「軍閥の輩は口癖の如く、西比利亞駐兵は國策の命ずる處で、陸軍が勝手に行つたものではないと辨明して居る。然り、日本

の憲政如何に幼穉なりとは云へ、日本の軍閥如何に横暴なりとは云へ、政府の同意なくして恣まに兵を國外に出すことの出來ぬ位は彼等の辨明を待つて後に知るべきでない。併しながら是れ表面に現はれたる形式論である。其の内實を窺へば、征服慾の權化たる軍閥と、利權慾の奴隷たる財閥とが、政府を脅威して之を實施せしめたることは、少しく日本政局の内情に通ぜるものゝ、容易に想像し、容易に首肯し得るところである。殊に出兵を實行したるは寺内軍閥内閣たるに於ておやである。區々たるチエツク救出を名として、七萬有餘の大軍を動かしたるを見るも、其の意の存する處を察知することが出來る。二十世紀の今日に方て尙ほも無理由なる武力侵略の可能を信ずる點に於て近眼的軍閥の時代錯覺がある。劍付鐵砲の下に利權獨占を夢みる點に於て我利的財閥の時代謬想がある。

露國の革命に依りて國内動亂するや、征服慾に燃ゆる軍閥と利權慾に憬るゝ財閥とは、好機乘ずべしと爲し、忽ち火事泥的西比利亞占領を夢み、出兵の口辭を求むるに藻搔き足搔いたのである。彼の、馬賊や、滿洲ゴロや、露國の不平分子やを買收し、煽動し、教唆し、使嗾してブラゴエチエンスクの騷動を起さしめ、日本人の商店を破壞し、無辜の露國人民を殺戮したる如きも、其の黑幕に日本の軍閥潜めりとの世評あるは、之を軍閥の過去史に照して滿更無稽の言とも思はれない。此の騷動に依つて生じたる露國人の孤兒數百人、日本は之を露國過激派の殘虐に歸するも露國人は之を日本軍閥の陰謀と云ひ、尼港の慘劇は之に對する報復手段とさへ傳へられて居る。幸か、不幸か軍閥の夢は列國殊に米國の斷乎たる不同意に依つて一旦打ち破られた。此時に於ける軍閥悶々の情は察するに餘りがある。

然るに其後米國よりチエツク軍救出の爲めに共同出兵の交渉に接するや、喉から手の出た軍閥は、得たり賢こし開いた口に牡丹餅と、待つて居ましたとばかりに二ツ返事で不見轉式のオーライを極め込んだのである。出したが最後最早やコツチのものと、何だカンだと理屈を付けて、露人の反感を意とせず、列國の疑惑を念とせず、軍閥式盲斷を以て增兵又增兵、遂に七萬五千の同胞をして、業を棄て、妻子を棄て、西比利亞の野に凍へしむるに至つたのである。而して列國軍の撤退したる後はズル〳〵ベツタリに獨り東部西比利亞の亭主氣取りで据はり込みヤレ居留民保護の、ヤレ西比利亞政情不安定のと、尤もらしき御託を並べ愚圖〳〵せるうち、内外の攻撃非難に居溜まらず進退谷まつて不面目にも、内よりは引き戻され外よりは追ひ出されたのである。保護せらるべき居留民が駐兵の爲めに却つて迷惑し撤兵要求を決議したり、不安定と稱せられた西比利亞の政

情が撤兵と同時に却つて安定したりするなど、何たる滑稽、何たる皮肉であらう

今西比利亞座に於ける軍閥劇の筋書を簡單に述ぶれば大體次の様なものである。

先づ東西屋を使つて、嘘八百口から出まかせの「殘忍暴虐人類の敵過激派政府」の大廣告大宣傳を爲したる後、愈西比利亞座に於て日本軍閥一座の過激派討伐劇を興行せんとした處世界の警視總監を以て自ら任ずる米國から治安妨害の廉を以て興行を停止せられた。然るに其後妥協が成立し、今度は更に列國聯合座に依つて開演せられたることゝなつた。舊式ながら三番叟として舞臺に現はれたる役者は、聯合座々頭兼日本派頭取大谷大將の卒ゆる日本軍と、香港より驅け付けたワード大佐の卒ゐる英國軍と、米國の歩兵大隊とである。元々寄り集まりの役者のことにして、最初から手の舞も足の踏みも、名々勝手の思ひ〱で、打ち振る鈴の音は統一もなく整調もなく、唯ガチヤ〱と亂雜極まつてゐる。次には序幕としてチエツク救援の舞臺が現はれるシテ役のチエツクを中央に据へて、ワキの役者は後ろ向になり、各勝手放題な臺詞を言つて居る。此の間にコルチヤツク見殺しの場と云ふ悲劇が舞臺の隅の方で演ぜられるが、役者も無關心に済まして居れば、見物人も譯が判らんのでポカンとして居る。舞臺が替はると、花道では機械の如く正直一點張りで融通の利かぬ日本兵が過激派らしい露國人を片つ端から勇猛活潑にヤツ付つて居る。過激派らしいのが死ぬる、あがく、手を合はして拜む。女小供が悲鳴を擧げて逃げ迷ふて居る。すると、舞臺の一方では呑氣そうな米國兵が、花道から逃げて來た過激派らしいのと一所に酒を飲んだり躍つたりして居る。かと思ふと、反對の方では親切氣取りの英國兵が泣き狂ふ女子供を慰めながら、さも忌ま〱し氣に日本兵と米國兵とを迭み替はりに睨んでおる。見物人には何の事だか薩つ張り判らない。たゞ過激派らしいのが日本兵の銃劍に突かれ虚空を掴んで倒れる毎に大向ふの日本人席から拍手喝采が起る。英米人席からシツシツと叱聲が聞へる。グルリと舞臺が廻はると、浦鹽埠頭に於ける英米軍及チエツク軍引揚の場じや。離別を惜しむ露西亞美人の愁歎が此處其處に演ぜられる。チエツクの軍人が佛國領事立會の下に、武器搭載車輛の保管を日本の軍人に依托する場面もある。愈各國の軍隊が引き揚げて仕舞ふと、後には山の様に積み重ねた武器の間に、日本の軍人が唯一人考へ込んで居る。其の左の方からは赤い露西亞兵が大きな目玉で日本人を睨んで居る、右の方からは白い露西亞兵が頭をペコ

ペコ日本の軍人に下げて居る。

此處で列國聯合劇が幕となつて、是からが日本軍閥一座の滑稽劇となるのじや、舞臺は當世流行電氣仕掛けの八段返へしと云ふので中々目眩はしい。舞臺が大きいのと、本物の血が流れる丈に、淺草の花屋敷や國技館菊人形八段返へしよりは大分面白い。白皚々たる雪の廣野に田中大隊とかの全滅の悲劇があるかと思ふと、五月二十四日を忘るゝなと云ふ尼港の慘劇がある。日本式の軍服を着たセメヨノフ、カルミコフなど云ふ露西亞人が過激派と戰つて逃げ廻はる活劇があると思ふと、樺太占領など云ふ景氣の良い場面もある。

併し何ぼうにも筋書の判らぬ斯んな瓢箪芝居に、流石芝居好きの日本人の見物人も見るに見兼ねたと見へ、「止せ！」とか、「引つ込め！」とか、盛んに彌次り出し、遂には愛想が盡きたと見へて言ひ合はした樣に舞臺に尻を向けて仕舞つた。夫でも役者は今止めては飯の食ひ上がりとでも思つたものか見物人などには御構ひなしに相變はらず馬鹿〱しい拙藝を續けて居る。あまり人氣が悪るいので、興行元も人心轉換と思つたものか、切揚げの機會を作ろと 思つたものか、大連會議とか長春會議とかの舞臺を設けて、日本の外交官が日本は赤白兩軍に對して一視同仁嚴正中立などゝ叫んで居る旁、浦鹽方面では日本の軍閥がジトリツクスなどの白軍を尻押して赤軍から二重外交の尻つぼを握られ、日本の外交官が目を白黑して居る處などを見せる。あまりの愚劣さに、見物人たるもの愈以てヤリ切れない。ヤツト引揚げの拍子木が入つたので、ヤレ〱助かつたと思へば最後の大詰が、武器問題を引起して軍閥と外務の啀み合となり、國論の大沸騰となり、ドドの詰まりが赤軍嚇の虎の子たる保管武器は、日本は捨てた體、赤軍は拾つた體とかでお茶を濁し、赤軍に追つ拂はれて夜逃同樣の撤退となつて、大切りの幕が引かれたのじや。

何とふざけた曾我の家式笑劇ではないか。何と下らぬニワカ式愚劇ではないか、此の笑劇と、此の愚劇とを見せられる爲めに、此の失敗と此の罪過とを演ぜしむる爲めに、吾人國民は驚く勿れタツタ七億圓の見物料と實驗費とを拂はされ たのである。何と廉い見物料ではないか、何と廉い實驗費なではないか。流石に節約デーを設ける國のヤリ方は違つたものであると感心せざるを得ないではないか。大正七年七月我が西比利亞派遣軍が意氣揚々初めて浦鹽に上陸してより、本年十月二十六日我が最後の運送船が孤影消然浦鹽を出發するに至るまで、指折り數へて滿四年四ケ月の間、西比利亞に於ける我が軍否な我が軍閥の行動は國家の威信を損じ、國交の親睦を害し、軍隊の士氣を

傷け、軍紀の嚴肅を紊り、徹頭徹尾失敗と罪過との歴史である。十露盤勘定と世界的舞臺を知らぬ色盲軍閥のやる殺人芝居は何時でも何國でも、斯くの如く高價なものである。今度と云ふ今度こそ神經遲鈍の國民も恐らく目が覺めたであらう。西比利亞座の日本軍閥劇を世界の觀客が如何に評して居るかは、英國の西比利亞派遣軍指揮官たりし「ジョン、ウード」大佐の著書 WITH THE "DIE-HARDS" IN SIBERIA を讀めば、其の一斑を知ることが出來る。

とは云へ、吾人は西比利亞出兵若しくは駐兵に對して獨り軍閥のみを責め、全責任を之に負はすものでは無い。名義上とは云へ、形式的とは云へ政府の政策として出兵が實行せられ駐兵が繼續せられたる以上、之に關係ある歷代の政府は其の責任を免るゝことは出來ない。外交調査會と雖ども之に關係ある限り亦其の責任を分たざるを得ない。然るに斯くの如き失敗と罪過とに滿てる出兵駐兵を承認したる外調委員が其の解散に際し、恬々洒々として勳爵の恩賞を貪りたるは、上は君德を辱かしめ下は國民を侮辱せるものである。彼等が平素口癖の如く唱ふる忠君愛國の意義を疑はざるを得ない。時の政府當局亦然りである。行賞を奏薦したるもの亦其の罪を免れない。外調委員たりし某氏の如きは日本に最早や軍閥なるものゝ存在を認めずと公言して居る。其の勇や感ずべしである。併しながら今の日本に軍閥の儼存し跋扈せることは、十目の見る處十指の示す處嚴として明らかである。彼が故らに軍閥の存在を否認する所以は、外調委員として西比利亞出兵に對する自己責任を感ずる爲めであるか、否らざれば恩賞に對する御禮奉公の爲めとしか思へない。若し前者とすれば軍閥否認の廻はりくどき論法を取らずして、潔く西比利亞出兵の責任を背負ふべきである。若し又後者とすれば、御宮仕へはすまじきもの、驥も老いては駑に如かずの悲哀をシミ／＼感ぜざるを得ない。

外調委員の厚顏嗤ふべく、政府當局の失敗素より責むべきである。併しながら彼等は任として國策の樹立と政策の設定に膺るべき職責を有して居る。されば西比利亞問題は彼等の重大なる失敗として、上聖明と下國民とに對して負荊面縛深く罪を謝すべきであるとは云へ、彼等を以て越權潛恣を責むることは出來ない。然るに軍閥の場合に於ては彼等と大に趣を異にして居る。西比利亞問題の張本人が軍閥であることは衆說の歸一せるところである。彼等軍閥は國家の國策と政府の政策とを左右し案配するの權限と資格とを與へられて居ない。權限なく、資格なくして私かに國策政策に關する謀を運らすは是れ陰謀である。閥力を濫用して陰謀を逞ふし、國策政策を亂すが如きは國

家の患害之より大なるはない。」

併しながら吾人は軍閥の對西比利亞策を以て、單に彼等の個人的或は閥族的野心の滿足を圖らんが爲めの私心とのみ思はない。彼等とても恐らく國家觀念の發動に依つて斯かる愚擧を敢てしたるものであらうと信じたい。同時に吾人とても、滿蒙西比利亞等に於ける帝國の發展を望む點に於て軍閥に一歩を讓るものでない。唯其の發展は合理的でなければならぬ。平和的でなければならぬ。卽ち國際正義と國際道德の上に立脚したるものでなければならない。軍閥一派の企つるが如き、爲すが如き時代錯誤時代盲目の火事泥的侵略政策は斷じて成功せさるのみならず、却て累を國家の將來に及ぼすものである。五年に亘る西比利亞出兵の結果が明らかに之を立證して居る。軍閥の爲せる處が縱令「私利私慾の爲めでなく、我が軍我が國を思ふ至情である」としても、吾人は彼等に對して「眞に同情に堪へさるものがある」などゝ安價なる空涙を注ぐには、軍閥の罪は餘りに大である。執行猶豫を與ふる譯には行かない。

「我が國が軍閥の跋扈に惱まされ、軍閥の跳梁に累はされたること旣に久しいものである。彼等軍閥は時代後れの舊制度たる帷幄上奏權を楯と爲し、大臣官制を矛と爲し、國民を蔑視愚弄し、政府を威嚇脅迫し、由つて以て內には軍閥的政策を強要して國利を損傷し、外には二重外交を暴露して國信を失墜しつゝある。」歷代の內閣中、軍閥の壓迫と强要とを蒙むらさるものは稀であると聞いて居る。故伊藤公の如きすら軍閥の專橫には苦しまれたと云ふことである。「今日動もすれば國民と軍隊との間に不和反目の不祥なる傾向を生じ、延ひて國軍の基礎を搖がし國軍の堅實を傷つけんとするの狀あるは、一に軍閥の橫恣に對する國民の憎怨が忠良なる軍隊の上に轉課せらるゝが爲めである。實に軍閥は國家を害する敵であり、憲政を毒する賊であり更に軍隊を傷ふ獅子心中の虫である。國家の爲めに軍閥を葬れ！、憲政の爲めに軍閥を倒せ！、軍隊の爲めに軍閥を滅せ！國民は最早や軍閥の專擅橫恣に依り、第二第三の西比利亞事件を繰り返へすの弊を忍ぶことは出來ない。獨逸は軍閥の跋扈に依つて敗れた。露國は軍閥の跳梁に依つて崩れた。日本の將來を誤るものは必ずや軍閥である。」

吾人は過去に於ける軍閥の功績を認めることに於て吝なるものでない。又個人としての彼等の閲歷に對して尊敬を拂ふことを躊躇するものでない。併しながら自ら國民の一人として國家の現狀に徵へ、國家の將來を想ふの時、情としては忍びざるも義として白木の三寳と何とかを彼等軍閥の前に供へさるを得ない。彼等軍閥なるもの功遂げ名成りたる今日、徒に國民の怨府

となつて終りを傷つるの愚を爲すことなく、國家の爲め憲政の爲め軍隊の爲め、宜しく正道に立ち返へるこそ明哲保身の計である。生者必滅、色即是空、南無頓生菩提。玆に辭を述べて軍閥を葬る。(了)

シベリヤ撤兵と軍閥の專恣

法學博士　堀江歸一

無意義なる出兵と撤兵

シベリヤの出兵は何等國民の理解を得ず、一に軍閥の專斷に依つて行はれた、當時此出兵を以つて、我國策の上から考へて、已むを得ざる擧と認めた者は果して幾人あつたであらうか、軍閥者流と軍閥の歡心を繋いで、政權を維持しようとする政黨者流の外に、其人あるを見なかつたであらう。而して今や出征軍隊は出兵駐兵の功業を擧げることなくして、全部本國に歸還した。我國出征軍隊にして今日に至るまで、國民に依つて凱旋の禮を以つて、國内に迎られなかつたものは、甚だ稀れであると云はなければならぬ。シベリヤ出征軍隊の出征するや、國民の之を見送る者なく、其歸國するや、家族親朋を除いては、之を歡迎する者のないと云ふのは、何たる事であらうか。以前出征軍の司令官であつた軍人は既に敍勳授爵の恩命に浴した、天恩の廣濶なる、誠に四民の感歎する所であつて、思ふに現在の司令官にも何れ同樣の恩典の授けられることゝ考へられるが、國民は其果して何の武功に依るものであるかを知つて居るであらうか。

從來日清戰役に、北清役に、日露戰役に我國が外に向つて兵力を用いた場合は、其數に於て乏しとしないが、孰れの場合に於ても、出兵の目的は國民に依つて、明白に理解され政府も亦之を國民の間に宣傳することに努め、出征將卒も護國の任を盡す爲めに、征途に、就けば、國民も亦彼等に對して、後顧の患なからしめる爲めに、應分の援助を與へることを辭さなかつたのである。唯日獨戰爭に於ては國民の敵愾心は必ずしも熾盛であるとは云へなかつた。然し日英同盟條約の存する以上は我國が其誼を重んじなければならぬことは、識者の諒とする所であり、又東洋に於ける獨逸の根據地を滅ぼすことは、歐洲に於ける獨逸の勢力を殺いで、世界平和の到來を促すものと解された

のであつて、國民の多數は固より青島攻略に異論を懷かなかつた。私の如きは寧ろ當時獨逸崇拜の軍人や、半可通學者が世界の大勢を辨へざるに拘はらず、戰爭の捷利は結局獨逸にあるとか、日本が獨逸を敵とするのは、立國上に不利であるとか云ふような妖言を唱へて、國民を惑はす態度に出たことを以つて苦々しく感じたのである。

國民と沒交渉の出兵沙汰

然るに今度のシベリヤ出兵の場合に於ては之に對する國民の感情は極めて冷靜であつて、殆ど出兵の何ものたるかに就て、風馬牛相關せざる態度を示し、政府亦出兵の理由に就て確乎たる見解の下に、之を說明することを敢てしなかつた。過日來世間の一問題と爲つて居つた兵器密賣問題にした所で、要するに軍隊內に於ける綱紀の弛廢した結果であつて、此外に風紀の如何に頹廢して居つたかを語る幾多の事實は頻々として內地に報道された。斯の如きは要するに事の發端から終局に至るまで、出兵の目的が將卒の間に理解されず、戰うに敵なき所に兵を動かし時に敵はあつても、何故に此敵を倒さなければならないのか其道理の不可解であつたことが斯る結果を生じたものであつて、出兵に依つて、軍隊の最も重んず可き精神を傷けたことは、吾人の遺憾とする所である。

元來シベリヤ出兵の目的は當初チェック救援の一事であつた。然しながら我立國の立場から考へて、何故にチェックを救援しなければならないのであるか、國民の間に異論なきを得ないのみならず、政府に於て既に一旦チェックを救援すると云ふ方針の下に、出兵を斷行した以上は何故に此事を徹底的に行はなかつたかと云ふことも、亦一の疑問に屬する。殊に合衆國の撤兵後に於ては、我國の單獨出兵の如きは、益々無意味の沙汰に屬した。或は我國の駐兵に依つて、シベリヤに於て、商工業を營む我國民の生命財產を保護し、彼等をして各自の生業に安からしめるを得たと云ふことを以つて、辯解の理由に充てる者があるかも知れないが、然らば今回の如き撤兵は國民の生命財產を危險に暴露するものであつて、出兵が正しいとすれば、撤兵が大なる間違と爲るし、撤兵が當然であるとすれば、出兵は當初から行う可からざる所であつたと云ふ議論に歸着するのである。

軍閥專恣の證據

斯の如く徹頭徹尾不可なるシベリヤ出兵が斷行され、然も數年の久しきに亘つて、駐兵の事實に接したのは、何故であるか

と云へば、要するに我國に於ける軍閥の勢力之を然らしめたのである。即ち我國には軍閥と稱する少數軍人の一團があり、陸軍の創設に功勞のあつた長老を中心として、稍や才略あり、識見ある軍政軍略の當局者之に屬し、陸軍の武威を盛ならしめることを一の目標として、總ての事を畫策して已まない。我國を擧げて軍國化とし、職業的軍人の數を多くし、軍人をして頭角を擡げしめるには、何は差し措いても、陸軍を擴張することが必要であり、陸軍を擴張するには機會さへあれば、事を外國に構へ、之を口實として出兵し、或は領土を擴張したり、或は商業線を伸張したりして、陸軍の効驗著しきことを國民に示さなければならぬと云ふ考の頗る盛なるものがある。之が爲めに國民の自由を拘束しようが、外國の怨恨を買はうが軍閥としては毫も之を顧みない、飽くまでも軍隊の威力を示して、容易く軍備の擴張される理由を求め斯くて職業的軍人の爲めに、立身榮達の道を謀らうとすることが實に軍閥の慣用手段に供されたのであつて、シベリヤ出兵の如きも、實に其手段の一と爲つたのである。

現に出兵當初の目的であるチエツク救援の如きは、少しも徹底しない、チエツクから保管を託された軍器が支那の手に渡ると云ふが如きは何たる失態であらうか。然らばシベリヤ出兵は極東の赤化する勢を防禦し、過激思想の我國に傳播するなり、我國民をして過激主義實行の跡を目撃せしめることを遮斷するなりした効果があつたであらうか。此事も出兵の一目的であるが如くに傳へられたが、斯の如きは干戈を以つて思想に當らしめようとするものであつて、其効果の如きは、企て及ぶ所でない。現に出征將卒の内に、過激主義の思想に感染した者のあると云ふ一事に徴しても、事の一端を知るに難しとしないのでる。

國民にも責任あり

唯從來、我國に於て軍閥が跋扈し、單に軍事上の事柄を主宰したばかりでなく、其權勢を挾さんで、外交財政其他重要なる國務に容喙し、時に意の赴く儘に、國政を向はしめたのは、要するに我國に現存する幾多の制度が軍閥に牢乎たる勢力を張らしめるに至つたことを以つて、一の原因とするが、同時に國民が將來の戰爭に就て、常に恐怖の念を懷き軍閥に依賴して、國家の安全を維持しようとする弱味に乘ぜられたものであることを指摘するに難としない。然も今日國際間に平和の基礎の固く築かれた以上は、吾人は百弊のあることを承知しつゝ、尙ほ之を寬假して、軍閥に依賴することを要しない。軍閥あるが故に

我國は人間愛を解せざる粗野の國と爲り、國際間を通じて、到る所に、反感を持つ國を生じ、我國をして平和裡に國運を發展せしめる妨害を爲し來つたことは、爭ふ可からざる所であつて軍閥を葬る國論は正に今日に於て、成熟しつゝあるのである。

如何にして軍閥を一掃する

近頃東京日々並に大阪毎日兩新聞に連載されて居る獨逸前皇帝の回想記を讀んで、私は獨逸帝國の彼の如く覆滅するに至つた所以の要するに前皇帝の軍國的思想に依るものであり、又前皇帝をして斯る思想を懐抱せしめるに至つた重なる原因は皇帝を圍繞する軍閥者流の固陋なる思想の鼓吹に存することを知つて嗟歎せざるを得なかつた。我國に於て軍閥の跋扈斯の如きに至らなかつたのは、我國に取つて、多幸とせざるを得ない。然らば軍閥の勢力を掣肘するには、如何なる方法を以つてするか軍備縮小の勢に乘じて、軍隊の實勢力を減ずることは、其第一であり、文官を陸海軍大臣として、軍政を整理せしめるは、其第二であり、軍令の及ぶ範圍を局限して、政治に對する交渉を絶ち、軍閥外交の弊なからしめるは、其第三であり、軍政又は軍令當局者の持つ帷幄上奏權の如き、陸海軍大臣の内閣の外に超然たる地位を占めることの如きは、當然之を廢止せしめなければならぬ。從來屢々軍閥の爲めに、熱湯を飮まされて居つた我外交當局者も今度は軍閥に對する反感の禁ず可からざるものがあるであらう。或は彼等の卑屈にして、强者に屈從する性癖は軍閥に對抗する勇氣を持たないかも知れない。然も軍閥者流の專恣横暴を目前に、又現實に見せ付けられた國民が手を拱して、軍閥の爲す所に任せて置くが如きことは、何としても之を考へるを得ない。我國の陸軍をして軍閥から解放せしめて、之を名實共に完全なる護國の機關たらしめるのは、今日の急務である。

言論上の無抵抗主義と實行上の抵抗主義

林　癸未夫

一

過去に於て軍閥は殆ど全く言論上の無抵抗主義者であつた。それにも拘らず彼等は實行上に於ては最も頑强な抵抗主義者で

あつた。そして一切のものを「軍機」と稱する神聖なる寶藏に閉ぢ込めて、かりそめにも局外者の窺ひ知ることを許さぬ方針を取つて居つた。これがそもく立憲政治の常道を逸した態度であつて、軍閥に對する世人の反感をいやが上にも增大せしめる原因であつたことは確かである。若し軍閥にして、今少しく彼等の奉ずる言論上の無抵抗主義を廢し、世論の非難に對して相當の辯明をなし、事情を究め、所信を明かにして、世人の諒解を得べき方法を取つてゐたならば、或は之によつて識者の同情を博し、咎むべきは軍事當局者でなくして却て外に在ることを悟らしめ、或は彼此共に咎むべきでなくして、寧ろ我國の政治組織全體の上に缺陷が存するといふが如き、論者の未だ想ひ至らなかつた問題を提供する動機ともなつて、之によつて軍閥呪詛の聲を全滅せしむるには足らずとするも、少くも大に之を緩和すること位はできたかも知れぬと想像されるのである。然るに軍事當局者の策玆に出でずして、傳統的な不言實行主義を墨守してゐたことは、ますく彼等に對する非難の聲を高からしめ國民の心證上に於ける彼等の立場を一層不利ならしめたのである。さうして其當然の結果として、彼等は國民の聲に無頓着に飽くまでも其所信を貫かうとする暴虎馮河の決意に出るか、さもなくば彼等の所信を枉げて、軍閥攻擊論者に讓步するより外はない窮境に陷つて行つたのである。

二

何故に軍閥が從來言論上の無抵抗主義を取つてゐたか、それは固より私の與り知る所ではないが、思ふにそれは主として彼等が自己の力を恃み過ぎてゐたからではあるまいかと私は推察する。無論彼等は此理由の外に、軍事上の機密の漏洩を慮るとか、うつかりした事をしやべつて却て論敵に新たなる攻擊の材料を摑まれることを虞れるとか、政府の他の機關の缺點を指摘する結果に陷つて、國務の不統一を暴露してはならぬといふ遠慮とかさういふ理由も多少存したには違ひないと思ふが、併し恐らく是等表面の理由よりも、もつと重きをなしてゐたのは、軍閥の自尊心、自負心であつたと思ふ。詳しく言へば彼等が自己の力を恃んで、無理押しをしても、結局それが國家の利益であれば差支ないことであるし、又必ずそれは國家の利益であるに相違ないからして、世間の口ばかり達者な連中が何と言つて騷がうとも、そんなことは齒牙にかけるに及ばぬ。又それによつて軍閥の勢力がびくともする氣づかひはないから、どしくやるだけの事はやつてしまへ。さうすれば結句世間はおれたちの功名手柄に對して感謝の辭を捧げる時期が今に來るのだとい

ふやうな一種の信念が彼等に對する攻撃を無視して、敢て之に應戰することを欲せしめなかつた原因であつたと私は信ずる。

同時に又かくの如き彼等の自恃心は、故山縣公といふ軍閥の大統領が、政治上に並びなき權力の持主であつたといふ事實によつて堅固に支持されてゐたことも疑ひない。彼等は其畫策する所が假令我國の政治上の手續から見て、多少正道を脫れてゐやうとも、結局それが國家に對する眞の利益を持來すものである以上は、實質に於て政治道德に悖るものではなく、又それがために一時世上の物議を醸すやうなことはあつても、山縣公の勢力は容易に是等の物議を鎭壓して、彼等の地位を擁護してくれるに十分であるといふ確信を抱いて、安心してゐたに相違ないのである。而して又幸か、不幸か彼等の此唯信は、過去に於て決して彼等の空望でないことを幾度も證據立てゝゐたのである。かくて彼等の自恃心はいやが上にも增張して、冷眼に世論を默殺し之に辯解を加へるが如きは、却て其自尊心を傷けるものと考へしめるまでに至つたのである。

三

然るに今や時勢は變轉した。政治なるものは實質的にも形式的にも、將國家的にも國際的にも其面目を一新しなければならない時代に到着した。此新時代の政治を指導するプリンシプルは、一言にして盡せば、國民生活の政治化といふことである。或は逆に政治の日常生活化と言つても可いかも知れない。要するに政治が廟堂から街頭に引卸されたことを意味するのである。

恐らく我軍閥は此新時代の空氣を理解することに於て甚だ遲鈍であり、又不用意であつた。彼等の過去の自恃心は此新時代の空氣に觸れて、當然或程度まで彼等自身によつて抑遜されなければならぬ筈であつたに拘らず、彼等は其用意を缺いだ。而して時世は彼等を見すてゝ進み行くことに氣づかなかつたのである。

併しながら彼等も漸く其眼を開かなければならぬ時節が到來した。而して其直接の動機となつたものは軍縮問題と山縣公の死であつた。

茲で鳥渡明かにして置かなければならぬことは、軍閥とは言ふまでもなく陸軍閥だけを意味することである。而して今度の軍縮問題は最初先づ海軍に對して起つた。それは此問題が國際問題として提起されたがためである。併し單に日本だけの問題として考へるならば、軍縮問題は海軍よりも先づ第一に陸軍に對して提起されなければならぬ筈であつた。何となれば露國の

革命以來、我國將來の假想敵國が何れであつたとしても、我國が從來の如き大陸軍を擁してゐなければならぬ理由は全く消滅してゐたからである。

然るに海軍は此點に於て陸軍とは全く異つた事情の下に置かれてゐた。縮少どころか寧ろ却て擴張を必要とすることが、國際政治の常識であつたのである。然るに實際の出來事としては海軍に對して先づ軍縮問題が起つた。これは政治常識を脫れた形勢の變化に因るものであつて、何人にも豫期されなかつたことである。そしてワシントンに於て首尾良く列强の相談が纏つた。これは全く此問題が最初から國際問題として、考慮されたお蔭であつて、我國だけの國內問題として提起されたのでは、到底物になる理由はなかつたのである。國民から見て、海軍が必ずしも與し易いからでなくて、問題の性質が然らしめたのである。

然るに陸軍縮少問題は海軍と異り、國際問題としては提起されない代りに、國內問題として提起さるべき理由があり、又國內問題として解決されなければならぬ性質の問題である。國民の政治常識は正に之を要求するのである。

然り、陸軍縮少の必要は政治常識に於て何人にも容易に首肯さるべき問題であつた。然るに獨り軍閥は一度此政治常識を拒否しやうと試みた。此試みは確に軍閥の自滅を促すべき一つの原因を造つた。何となれば彼等は、此試みの不成功によつて、過去に於て彼等が屢々繰返し且成功したる言論上の無抵抗主義と實行上の抵抗主義とが、此問題に對しては用を爲さなかつたといふ苦い經驗を嘗めなければならなかつたからである。具體的に言へば彼等は、前議會に於ける下院一致の決議案の脅威の下に、多年の唯我獨尊的の態度を棄てゝ國民の前に枉屈しなければならぬ苦痛を味つたからである。玆に於てか彼等の自恃心は大に動搖せざるを得なくなつた。

且其上に彼等に取つて重ね〳〵の災厄は、彼等が靈驗並びなき守護神としてゐた山縣公を失つたことである。之がために既に動搖したる軍閥の自恃心は無殘にも崩壞し初めたのであつた。勿論曆の上の順序としては山縣公の死は陸軍縮小決議よりも先んじてゐた。併し彼等は山縣公の死の當時に於ては、未だ眞に其死が彼等に何を意味するかを領解してゐなかつたのである。而して彼等が眞にそれを領解し、痛感したのは、數箇月の後であつたのである。勿論これは私の推測である。推測ではあるが確信する所である。

四

軍閥の自恃心は既に崩壊し初めたにも拘らず、彼等は出來るだけ之を認識することを避けやうとした。認識することは彼等の苦痛であるからである。彼等は又出來るだけ之を外部に示すまいとした、さうすることは一層崩壊を大きくするからである。併しながら彼等は内心現實暴露の悲哀を深く感じてゐたには相違ないのである。

そこへ持つて來て、いよ〳〵軍閥に最後の止めを刺さうとするかのやうに勃發した問題が、浦鹽武器紛失事件であつた。恐らく此事件は一時世人が信じた程の政治的罪惡ではなかつたらしく思はれる。從つて軍閥は此事件に對しては、從來の不言實行主義を固執したからと言つて、左程良心の苦痛を感ぜずにゐられた筈であつた。然るに實際は何うであつたかと言ふと、彼等は此事件に對して、從來曾て見なかつた程に神經質的であつたのである。彼等は非公式にではあつたが屢々辯明の辭を發表した。或者は又いかにもわざとらしい沈着振を示さうとして却て内心の動揺を暴露したかの如く思はれた。又或者は口きたなく新聞記事に當り散らしたり、或は怨みがましく外務省に當てこすつたりしたやうであつた。要するに彼等は從前の傳統的な默殺主義、喜怒を色に現はさずして世上の喧囂を雲烟過眼視するといふやうな豪傑流の態度を棄てゝ、甚しく世論に拘泥するといふ態度を示したのであつた。

これは何のためであつたか。それは單に世論が彼等に濡衣を着せたことに對して、彼等が憤慨したといふ理由からではない。それよりももつと大きな理由は、軍閥なるものが如何に國民の間に不信用であるか、いかに識者論客の間に不人望であるか、といふことが、今度の事件によつて痛切に彼等に教へられたことである。此教訓によつて彼等は明白に國民の間に於ける彼等の地位を自覺することができた。彼等の榮譽に充ちた過去の夢は全くさめ果てゝ、秋風落寞の間に、夕陽を望むの思が彼等の胸にしみ〳〵と徹したのである。茲に於て彼等は焦燥し初めた。何うかして失はれたる不信用を恢復し、いやまさり行く不人望を拭ひ去りたいと考へた。そして彼等は初めて過去の言論上の無抵抗主義を抵抗主義に、實行上の抵抗主義を無抵抗主義に改宗するの已むを得ざるに至つたのである。

彼等が實行上の無抵抗主義に改宗したとは如何なる事實を指して言ふのであるかと私に反問する人があるならば、私は浦鹽の莫大な保管武器が悉く赤軍の手に歸することを、軍閥が甘んじて傍觀しなければならぬやうになつた一事實を指して之に答へる。

今や軍閥も新時代の政治の眞の意義を理解し初めたと思はれ

る。彼等は須く死して蘇生へるべきである。金冠を脱して布衣の國民と握手せよ。これが彼等の行くべき唯一の途である。

軍閥を葬らざれば軍界の肅清期し難し

法學博士　吉野作造

○

日本の歴史始つて以來西伯利出兵の如き醜き失敗に終つたものはない。而かも之が國民の輿論を無視し識者の抗爭を抑へて決行されたるものなるを思ふ時、事實上の責任者たる所謂軍閥の人々は何を以て罪を國家に謝せんとするか。今や全部撤兵を機として本件は玆に形式上一段落を告げんとする。知らず軍閥の人々の之に對する道德的前後措置は如何。

單純な一片の理論として軍閥の許す可からざる所以は、僕本誌に於ても屢之を說いた。最近『二重政府と帷幄上奏』一篇を公にしてあらためて挑戰を試みたるも、今に至るまで何等聽くに足る辨明に接せざるは聊遺憾とする所である。讀者にして本書を讀まれなば、軍閥と憲政との關係に付ての理論に多少了解せらるゝ所あるべきを信ずるが、僕が更にまた改めて玆に軍閥糺彈の一小編を草するは、軍閥跋扈の結果として蒙れる帝國最近の損害の餘りに甚しきに憤慨せるが故である。帝國最近の損害とは云ふまでもなく西伯利出兵の失態をいふのだ。口にするだに馬鹿々々しい程の大失態を演じて、物質的にも精神的にも夥多の損害を蒙らした事を思ふと、諄い樣だが繰り返して我が軍界の肅清を叫ばずには居られない。蓋し軍閥を葬るに非んば、軍界の肅清は期せられず、文武統一諧調の施政は期せられないからである。

○

軍閥の糺彈に當て每々僕達の殘念に思ふのは、國民の耳目が動もすると此事に就て聰明を缺くことである。この事に就ては外に論ずべき點が多々ある。外國に關し又國防に關し今日の多數國民が如何なる思想を有し、又其思想が如何にして作られたかを歷史的に硏究して觀ると、國民の思想そのものにも幾多反省すべき點の存することは疑ない。併し之等は國民の啓發に關する一般問題だ。之に就ては僕達不肖と雖も大に努力するの勞

を含まない。只若し國民の聰明に多少の缺陷あるに乘じて黠詐陰險の手段を弄し以て益々其の啓發を妨げんとする者あらば、僕等は大に之と戰て其滅亡を謀らなければならない。少くとも國民に警告して斯種邪謀の拒斥を勸戒せざるを得ない。此點に於て僕達はまだ一部軍閥の策士を敵とせざるを得ざるを悲む者である。

○

最近の武器問題は軍閥を彈劾する絕好の機會であつた。而して軍閥の策士は、徒に國惡をあばいて恥を外國に招く可らざるに藉口して天下の群議を沈默せしめんとした。此策何れ丈け當れりやは暫く別問題として、因循老憊の士を多少動した事は疑なく、夫れ丈また彼等の常套手段たるに於て吾人の攻究に値するものあるを感ずる。借問す。所謂國惡をあばかざる事に依て我國は果して何の得る所あるかを詳言すれば、臭い物を蓋をすることに由て吾人は果して能く、外國の非難と輕侮とを免れ得るか。抑もまた之に由りて諸外國に事の眞相を疑惑せしめざるを得るか。

滿蒙西伯利の方面に於て、軍閥の失態は之れまで幾度もある。而て之に就て全然報道を得るの便宜を缺くは日本人だけで、諸外國人は恐く事實を有りの儘に見聞して自由の批判をして居つたのは從來の例である。諸外國人は知らずして平然たる日本人を最初は白々しいと難じ、後眞に知らざるの情實を了解して啞然たるものがあつたのだ。「知らぬは亭主ばかりなり」といふことがある。隱さうたつて隱し得ない。惡事に非ずとの確信あらば固より之を隱すの必要なく、所謂「國惡」と自認しても之を隱して何の實益なきは、今日最早一點の疑がない。

所謂國惡を隱すは今日最早何等の實益なきのみならず、却て諸外國から、國民の多數亦此惡事を後援すとの疑を蒙るの恐れさへある。國惡といふも實は國民全部の責を負つべきものではなくして一部の爲す所の惡なのだ。一部の惡をして所謂「國惡」(全部の所爲たるかの如く誤想さるゝ)たらしむるは一に隱惡の結果ではないか。何となれば事の眞相を知つた以上多數の國民は之を許す道理はないからである。

僕の家の番頭が取引先で詐欺を働いたとする。之を詐欺と自認しては家名に係はるとて、一家の者に事の眞相を秘して番頭の無害を抗爭せしめたとて何になる。相手方と了解した上で世間の耳目を瞞着しやうといふのならまだいゝ、世間公知の事實をば、たゞ自家の一小天地に秘して家人の聰明を蔽ふは、其の小天地内に於ける責任逃避の目的の外には何にも役立たない。

のみならず却て一般家人の良心を鈍らしめ又頑ならしむること圖り知る可らざるものがある。良心の鋭敏なる者は、世間が大目に見て吳れたとしても、自ら進んで自家の悪を責めさいなまないでは止まぬ筈ではないか。

國悪は大にあばくがよい。あばいてあばいて其の弊根を剷滅せなければならぬのだ。日本の名譽と實益とは唯此の手段に依てのみ救はれ護られ又進められ得るものである。

○

對外問題に於て協同一致の德を說くものがある。國論の分裂を罪悪の如く呪ふものがある。バラ〈〈より協同がいゝ。分裂よりも一致がいゝことは勿論だ。だから事實を明にして當然の事理に一致の實を擧ぐべきである。協同一致がいゝからとて、軍閥の專恣横行に盲從する譯には行かぬ。

協同一致の旗幟を掲げて彼等に盲從を强ゆるの權利があるなら、僕達も同様の根據に立つて軍閥に降參を求むるに差支がない道理だ。眞の協同一致は良心の問題である。双方事理を盡し護るべきを護つて始めて一致點は見出さるゝ。協同一致の名に據つて自由批判の鋭鋒を避けんとするは陋も亦甚しい。

○

吾人が軍閥の人々と論辨を交へて常に遺憾に堪へざるは、第一には彼等が自家階級の利害を以て直に國家そのものゝ利害となし、大局高處に立つて事物を正視するの冷靜を缺くことである。先き頃田舎の物持ちが久し振りにやつて來て、柄にもなく靑年子女の忘恩を說く。何に感じての事かと探つて見ると、數年世話した愛妾に逃げられた爲めだといふ。自家の感情を以て直に天下の形勢を推す。軍閥と雖も斯の型に洩れざるものあるを反省して貰ひたい。軍事に對する糺彈は必ずしも國家の不祥を冀ふの言ではないのである。尤も自家の部分的利害を全部の利害と混同するの謬見は、今日、我國に於て軍閥のみの特弊に非るは言ふまでもない。

第二には眞理に恃むの雅量がない事である。例へば僕達が何等かの非難を軍閥に差し向けたとする。又は何等かの改革意見を提議したとする。之に對して直に聞く所の答辨は毎に堅白異同の强辨である。理を非に枉げても自分が悪くなかつたと押し通すことである。事の眞相に徹して相共に警むべきは警め、辨ずべきは辨じ糺すべきは糺すといふ誠意がない。弘く聞いて常に正しきに進まうといふ雅量を認めるに苦むのである。

終りには軍閥の人々の中に惡を頑張るの勇に富む者の多い事である。原少佐については僕に多少別種の見もあるが、一面に於ては實に軍閥の爲に一身を挺したるの勇を賞すべきである。而して此種の人物は他にも頗る多いと思ふが、併し考へて見ると、之等の人の何處に眞に國家に忠なるの誠意を認むることが出來るか。眞理に從順なるの資性を認むることが出來るか。近來軍閥の俊秀が徒らに猪勇の形備りて内に徳性の充實を缺くあるが如きは誠に憂ふべきことゝ思ふ。

○

斯くて僕達は軍界の肅清は之を軍界の人に委せ難きを思はざるを得ない。軍閥を葬るは專ら繫りて國民の掌裡にある。國民が在來の傳習に拘泥せず又一部策士の奸策に乘ぜらるゝことなくして、事の眞相をありの儘に觀じ、又その考ふるまゝに批判するに至らんことは僕の切に願ふ所である。

箔の剥げた參謀本部

文學博士　三　宅　雪　嶺

明治大正の政治舞臺は、荒事師が最も働いた形があり、功もあれば過もある。明治維新の新政府は、久しい勢で成立つたにせよ、最近の原因と認められるのは、長及び薩が兵を以て幕府に抵抗した所に在る。それ自ら大きな力でなくても、幕府の力を以て押え切れぬだけになつて居り、引續いて新政府が薩長の兵を以て出來上つた。長の兵が先駈けたれど、兵數に於て薩が多く、それだけ薩が兵で重を爲し、警察權をも握つた。長で主將となつた高杉は夙く歿し、其率ゐた奇兵隊も、行方を失つたが、尙ほ維新回天の功あるとし、政府に不平あり、事を起して破れた。薩の方は主將西鄕を始め、多くの將校が團結し、政府の命ずる所に循はず、大戰亂を惹き起すに至つた。何れも新政府を造るに與つて功があり、更に之に反抗して罪を得た。薩長に雁行したものに、土及び肥かあり、之れ亦多少の亂を免かれなんだ。兵を以て功を立てたものは、兵を以て罪を得た姿であり、老西鄕が其代表者となつて居る。薩の戰亂は西鄕の意より出ないにしても、賊魁として誅戮せられる事になつた。かゝる事は歷史にいろ／＼例があるが、最も明白なる徑路に於て、成功及び失敗を示して居る。

既に兵力が政府に歸した後、是の類の事のあるべくもなく、普通に注意を離れて居るけれど、長い期間に似た事が無いとせ

ぬ。急病でなくて慢性病となつた所がある。明治大正を通じて政府が最も軍事を重んじ、中にも陸軍を重じ、陸軍は政府の原動力なるかの形を呈した。初め國内の反抗を鎮壓するが爲めに、次いで東洋に國家の位置を確實にするが爲めに、更らに之を世界に確實するが爲めにし、得べき限りの力を之に注がうとし、機械的設備を整へるの外に國内の智惠を蒐めるに努めた。比較的金廻りが好く、人をして働かしむるを得た。川上が獨逸より歸り、參謀本部に働き出してから、其の歿するまでは、參謀本部に人材が集り、知識の淵叢とされた。各要所に人を派出し、其事情を搜り、公使館、領事館で夢にも知らぬ所を知り、何事かあれば斯く斯くであると云ひ、他で何とも云ひ様がない。早く征韓論が起つたけれども、其の破れた後、他國と戰役が起ると思はず、せい／＼で朝鮮位のものとし、支那と開戰の議の起つた時、要路の人でいろ／＼危ぶんだのがあり、濫りに事を起し、取回しの着かぬやうになつては困るとした。普國では丁抹と戰ひ、、墺國と戰ひ、佛國と戰ひ、獨逸帝國を形造つた例が記憶に新たであつて、如何にせば如何になるか想像でなく、實地に考へ、川上等は其邊に確信がある。後から見れば格別の事でないにしても、其當時に於て他で不思議がる所であつた。川上は部下を督勵し、準備に着手し、いざと云ふ場合に出兵する事にし、略ぼ豫想通りに捗び、世間が戰勝を祝賀するだけ參謀本部の勢力及び信用が高まり、延いて川上の一言が内閣を動かすに至つた。

論より證據と云ふ事、世間に對して力があり、特に所謂實際家なるものを心服せしめるに足る。川上に何れ程の才能あるか知らぬが、參謀本部の計畫は、水も洩さぬ巧さであると感心する者が少くない。櫻田門に近く聳えて居る建築物こそ、有りと有らゆる知慧を集め、誠に測るべからざるものとする。何でも秘密の上に秘密にし、他から覗ひやうがなく、覗ひ得ぬだけ之を重じ、神秘的にするに傾く。何處に最も適れた頭腦があるかと問はれれば、參謀本部と答へ、聽く者は皆頷づく。川上が歿し、大山では看板倒れであつても、田村が次長で智慧を集めて居ると思はれ、田村が歿し、兒玉が次長となり、露國との開戰に着手し、之れ亦、連戰連勝の狀態であり、前に露國と開いて身の毛のよだつ思ひした連中が、之はと許りに驚き、參謀本部を重んぜずに居れぬ。參謀本部にどれ程の智慧があるか、何とも測る事が出來ぬとし、感服したり、懼れたりする。參謀總長の云ひ出した事ならば、厭でも應でも何うにかせねばならぬとなつた。總長は別段の事なくても、機關が整ひ人が揃つて居るので間違ひなからうと思はれる。時として疑を挾むものあれ

ど、多數は之に耳を傾けず、何と云ふても調べが屆いて居り、かれこれ云ふのが間違つて居るとする。世界戰役に關連して、青島に出兵しても、さう信ぜられた。

所が露國に革命が起り、西伯利に出兵してから、參謀本部の智慧が疑はれ、年數を經る程いよ〳〵疑はれ、參謀本部に誰が居るか、碌な頭が無いでないかと云ふやうになつた。果して前に頭が邁れて居り、後に頭か劣るやうになつたか、一人一人、取出して比較し、さう云へるか何うか。之を明かにするに難いが、嘗てロンドン、タイムスで日本は、露國との戰役を絶頂とし、其後下り坂になりはせぬかと論じたのは、偶然か偶然でないか。何からさう感じたか、別に事情あらうが、參謀本部が川上歿後に緊張味を缺き初めた事を考へねばならぬ。何にしても川上は、自ら任じて事に膺り、參謀本部と終始し、其外に出でようとせぬ。他の本部員も自のづと仕事に興味を覺え、全力を盡くさうとした。能力に於て必ず他に優ると云へず、川上とても或る點に於て兒玉に劣るのみならず、寺內に劣り、上原に劣らうけれど、性質か境遇か、モルトケ生存時代に居り、其影響を蒙つたか、一生の事業として、全力を盡くす所に於て他に勝る。上官に其覺悟あれば、下官もそれ相應に覺悟し、足らぬ知慧でも出來るだけの事をするに努める。之も時代が時代であつたと云ふものゝ、後にそれ程のものが居らず、何かの都合で參謀總長になつたり、なされたりする。初めから其覺悟あるのでなく、後にも何時何になるか分らず、榮轉する處あらば何時でもと云ふ調子である。兒玉は參謀總長適任か、他の方面が一層適任か、何れにしても、政治界で活躍する意があり、內相で文相を兼ねた程であつて、遠からず首相となるべき筈であつた。それだけ才能あるに相違ないが、さういふ有樣では、參謀本部で一生懸命に仕事をする氣にならぬ。不熱心と見えては昇進し難いが爲め、熱心と見ゆる事をすれど、心からの熱心と云ひ難い虞れがある。

兒玉は兎も角も露國と開戰し、策戰計畫に熱中し、最早や講和の時と見るや講和に急ぎ、身を以て事に當るだけの實を示したが、其後は何うであるか。腰かけに參謀總長になつたりするものがある。種々の釣合で已むを得ぬにせよ、さうなつては、本部員も眼の前ばかりの仕事をし、眞に身を入れて働かうとせぬ。秀才でも働かねば鈍才の熱心なるに劣る。露國の革命事情を知るが如き、前に爲し來つた所の外に力を用ひねばならぬ。何處の地理が何うなつて居り、何處から兵を進むべきかと云ふを考へると同樣にする譯に行かぬ。地理の智識さへ覺束ない事がある。川上時代、遼東に出兵する際、適當の地圖がなく、リヒト

ホーフエンの地質圖に據つた。後にいろ〱取調べたにしても、西伯利の知識が覺束なく、民族の生活狀態に就て不案內である。劍を持つて叱り付ければ埒が明くと考へ、埒が明かぬと見れば、打つて替つて馬鹿叮嚀となり、何が何やら當てが付かぬ。西伯利に出兵して何を爲さうとしたか。沿海州を勢力內に置かねば平和を保持するに難いとするならば、それ相應の道を取るべきであるのに、何を爲して居つたか。尼港事件の責任を問ふとて、誰に問ふのか。近頃外務省で大連に會議したり、長春に會議たりしたが、外交より內交を先きにするやうな所がないか。西伯利に七億の金を投じ、何の結果を得たところあるか。世界戰役は多く類ない出來事であり、何人も其經過及結果を見通し難く、一流の人物が誰でも失敗し、米國大統領ウイルソンは可哀想な程であつたとするが、人の事は人の事、參謀本部が最早や知識の淵叢でなく、不可思議の力なく、やはり只の人の集まりと云ふ事になつた。初めからさうであり、さうでないとしたのが買被りに過ぎないと云へばそれまでの事、前よりも價値を減じたのを打消す事が出來ぬ。參謀本部はそれで可いのであつて、策戰計畫を精密にしさへせばよいと云へば分つて居る。然し他に勝つて國家の將來を察する事が出來き、人の考へない所に着眼するとあつては、信用を置く事が出來なくなつた。二重外交と云ふは、是非よりも事實問題であり、參謀本部が外務省よりも、知識及び判斷に富まば、外務を督勵するか、又自ら着手するか、何れかに出ねばならなくなる。西伯利出兵の如き、誰が實行しても、彼の如き始末になると云ふが、我陸軍に限つて失敗なからうと考へた事が、全く裏切れて終つた。或る程度まで間違を避け難いとし、當事者が今一層職務に熱中したならば、間違を少くし得たゞけは確かである。

然し我陸軍が手本とし、模範とした所の獨逸帝國が崩壞し、一新に國防を考へねばならぬやうになり、玆で新兵制を案出するに力を注ぐの順序となる。單に上官下官の順序を賴み、命令を以て事を捗ぶと云ふを考へ直し、協同して事を爲さうと云ふやうにすべきである。戰場では人々考を練るの餘裕なく、上官の命ずる所に從はねばならぬが、平時上官が徒に威力を恃まず、理路當然とする所に由るやうにせよ。今軍縮の聲で師團長以下意外に意氣阻喪の疑がある。之も善い事でなく、將校たる者は有時の日に兵を率ゐ、敵を打つべきであつて、軍縮と聞いて落膽するを要せぬ。如何にすれば、常備軍を減じ、國民皆兵の實を擧ぐべきかを考ふべきである。陸軍が模範國とした獨逸では將官が退いてから兵書を著はし、後進者及び一般世間の爲めにするの例があつた。日本で東條の外に誰が之を試みたか。將官

は現職に居つても居らなくても、爲すべき業務がある。多數の前で威張るのが業務でなく、國防を最も有効にするのが業務であり、現役に居ると否とを問はぬ。國防は根本的に考へ直さねばならぬ。世界戰役後は軍職に在るものの最も肝膽を碎くべき所であつて、從來の軍備が減ずるとて何事があるか。之を撤廢し、代ふるに現代及今後に相當する兵制を考へるを肝要とする。今は軍事に於て有望の日であり、第二のカルノー第二のモルトケ等の出づべき日である。唯徒らに先任者の眞似するのみでなく、自ら考へ出さねばならぬ所に苦心がある。苦心無くして何が出來るか。軍事に取つて今日ほど有望の時代が無いではないか。

軍閥の問題

杉森孝次郎

その名詞の當今通用の意義に於いて、閥といふ稱呼を適當に値ひするものが現に存するならば、それがなにものであつても、有害物だ。それは、公利を私竊し、公權を私用する意思及び實行の一態にほかならないからだ。

日本に軍閥ありや否や。ありさうな歴史的及び社會的因縁が、そこにはある。封建主義から國民主義へ進化したのちの日本の二大難關であつた日清、日露の兩役に於ける日本の勝利が、直接には陸海軍人の功績であつたこと、その勝利の結果は、全體としての日本の位置の確保及び向上であつたこと、その相聯關せる二事は、軍閥の名に相當する現象をひとたび産出する可能を持つてゐた。一全體としての生物に於けるある部分的、局位的機能または器官が、その全體の必要を目的として大いに使用され、大いに役立つたのち、多少永久の瞬間にわたつて過肥狀（ハイパートロフィ）態を呈する、もしくは過肥狀態におち入る例はありあまるが、新日本に於ける、すなはち明治、大正に於ける軍閥の發生はその一例だ。最初は全體のための一手段であつた一器能が、のちには全體を自己の手段とし、わるい意味に於いて犧牲とする、そして結局は自滅するといふ、おかしくもあはれな、またあはれにもおかしい三幕劇を、人は無智ゆゑにしばしば演ずる。浪費がその全過程の意義だ。

ビスマルクは普佛戰後の獨逸の新國策を發明するために必要な原則眼を缺いてゐた。かれは、當時の獨逸式君主專制主義を、將來永久に獨逸を安泰にし、繁榮にする根本價値であると考へ信じた。あさましい淺見と卑信であつた。山縣有朋は、見識に

於いて、日露戰爭までの日本のかごかつぎ人足の一人たるにすきなかつた。今日の軍閥は、日露戰後、進化を意味とする自己制限を、日本の軍人がしなかつたかたちでもあるし、日本の國民が進化を意味とする制限を、自身のうちの軍人といふ部分に加へえなかつたかたちでもある。軍人と、國民全體とのわかつべき罪過だ。

後悔の價値はそれ自身にもいくらか存するが、將來を完全にする一手段價たる性質に一層多く存する。日本が、オムスク政府援護を企てた不明と不德とをば、われらは、いまなほ忘れることができない。あれが、もし、いはゆる軍閥の意思に第一原因を持つ現象であつたとするならば、軍閥が國家社會に及ぼす禍害は不可測の深さ、廣さにさへも達すると恐れられる。オムスク援護から推斷するに、軍閥は、良心に於いてよりも、觀念に於いて無能だ。コルチヤツクを助けて物になると判斷した頭腦がかなしい。あたまがきかなくなつたら、人は、誠意は旺盛であつても、行動を愼んで遠慮することが社會及びかれ自身のためだ。結果は手段によつて決定されるゆゑに、手段をちかへるならば、目的通りの結果はあらはれない。軍閥の愛國愛世の目的は正直だと假定してさへも、軍閥は、その目的を達するための手段を知らない。今日の擴大せる、そして紛糾せる、しかも深奥なる文化的、人間本質的意義をまでもすくなからずまぜて持つ政治、國際政治に關しては、軍閥はあまりに素人だ。子の疾患を治療する母の熱意はいかにさかんであつても、かの女がその目的を達するためには、良醫の知と術に依賴するほかない。軍閥は、日本に於いて、いまや病兒の慈母の位置に、勇斷して猛進すべき道德的必要を持つ。

わたくしが、村の小學校の生徒であつた時代には、腕力の支配圏と支配力が小兒間に於いて驚くべく廣大であつた。今日の大學生を見るに、崇拜の中心は學藝、人格の優越者だ。民族や人類の歷史に於いても、原始時代ほど、腕力の價値が高く、腕力の世界が廣い。明治以來の新日本だが、日露戰役あたりまでは、軍人の價値と世界が、無理なしに高く且つ廣かつた。いまや、殊に歐洲戰爭を一轉期として、日本も、腕力を、たとひ方法としての範圍內に於いてといふ條件つきでも、以前ほど有用とすべき事情を失なつた。そして、方法の上に於いても、腕力以外の、もつと直接に文化的意義あるもの、立法、行政、經濟、科學、教育といつた性質のものを急用とする事情を內外に發見し、また成長もさせてきた。

日本の政治の創作力、維持力、經營力が、軍務によりも經濟に、經濟によりも教育に新地步を開拓する必要がある。尊き教

育の泉源に汲む諸般の文化機能が、國策の第一要件として、目下、識者には確認されよう。軍閥は消滅して、正しき意味の武力は、國民、社會民の各員に、精神に於いては活潑に遍流し、たゞ方法として、それが國家、社會の公的見地から考察して必要であるかぎり、一部の少數者に委任されよ。軍人が、軍人としての性質に於いて政治家であることは、一機械的器官が、そのまゝに全體を占領する企てとひとしく、破壞的だ。國民にむかつて、政治的自治を、自身の必要として獲得する努力を、軍閥打破のかたちに於いても十分にしてくることを希望すると同時に、軍人にむかつて、軍務と政務とを識別する賢明を、行動に於いて自證しくることを、かれらの名譽のためにも希望する。

けれども、この問題に關して最も必要な一事は、軍人の自省には存しない。それは國民の、正しき意味に於いての政治的自奮に存する。國民の政治的自覺及び自奮が、軍閥の垣の外側にまで充ち擴がり、その內側にまでも及ぶ可能がある。政治教育と政治研究が、軍閥打破の結果をもたらす根本的原因だ。

政治を、軍閥の手から政治家の手へ取りかへせ。その手を持つ政治家がでよ。國民の政治心の延長として。

曾つて歐洲の中世に於いては、宗教が政治を壓迫した。十九世紀を通じては、資本としての經濟が政治を壓迫した。昨今は勞働としての經濟が政治を壓迫しつゝある。日本の政治は、いまなほ軍事機能に壓迫される。壓迫される政治は、自己の使命に不忠實な政治だ。政治的日本の再生が、軍閥の存在を見るにつけても急要だと考へられる。



「どん底生活」の報告書

松崎天民

はしがき

「歩いて書かう」と私はさう思つて、此一篇の勞作に着手した。瀧田哲太郎兄足下、思へば眞に久し振の事であります。

境遇の轉々やら、生活の動搖やら、何や彼やの煩ひで、私は此の半年足らずを、何の爲すこともなく過して來た。それでも心の中では、一つ、あなたを驚かすやうな名文でも書いて、それを携えてお訪ねしやうと云ふ位の氣構へは、人知れず抱いて居たのでありました。

そこへ、久し振に村松梢風君が來られて、あなたからの要件を傳へられた。「昔に若がへつた氣持になつて、十二月號の中央公論に、どん底生活の報告書を書いては何うか」といふ、あなたのお話でありました。何だか斯う怠惰の月日がつゞいて、短い文章一つ書くにも、昔のやうな感興に乘ずると云ふ、若々しい力を失つて居る私は、あなたの私に與へられた目論見を聽いた時、鋭い針か何かで、チクリと刺されたやうな心地がしました。そして私は直ぐ村松君に向つて、「面白いな、大に遣つてみませう」と、答へたのでありました。

それから中央公論社に、あなたをお訪ねしてから今日まで、私は三四日を甲州に於ける一葉女史の建碑式に列した以外、殆ど毎日毎夜のやうに、各方面に出入した。足尾銅山、救世軍の無料宿泊所、下谷の細民長屋、富川町の木賃宿、十二階下の私娼窟、鐘ヶ淵紡績の女工生活、曰く何、曰く何と云ふ風に、出來るだけ、能ふだけ身を以て突進した。初めて新聞記

者になつた當時の若い氣持に復れ、初心の探訪記者に共通する猪突勇猛の心を起せ、何の成心も無い白紙のやうな心持で何事も卒直に有るの儘を見聞して來れ―」後輩の探訪記者に教へる氣組みで、自分自身を鞭撻しながら、私の悶癖であるところの安價な詠嘆調を排り、感傷的の記述を避けやうと、心構へだけは健氣に用意して、此の一篇の報告書を認める段取に至りました。

瀧田兄足下、たゞ私が人知れず心配するのは、この一篇が果してあなたの期待に副ふや否やの點であります。新聞社に勤めて居た頃、いろ〳〵の事件で、いろ〳〵の方面へ特派された場合に、何時も抱いて居たところの職能的不安の心持は、今度もかなり強い程度で、私の神經をいらだゝせました。そして、いざ其の局面に當つて見ると、割合に易々として、諸種の材料を握ることは出來たけれど、これを何んなスタイルに報告しやうかといふことに就いては、また別な苦勞がありました。

けれども、そんな事は何うでも宜いのか知れません。私は此の二十日間、私の接觸した世相の幾斷面を、次々に「報告」する報告者としての役目を果せば、それで宜いと思つて居ますから……。――十一月一日朝――

一　足尾銅山の坑夫

「何うせ坑内で稼いで居りや、六十年生きるところは、四十年でおさらば……に極つてるんだ。さう思ふからな、酒も飲む、達磨も相手にする、不養生もする……。餘計に自分で自分を殺すやうなもんなんだ。それにな、山の中で稼いでる癖がつくと、人間て奴は妙なもんで、賑かな社會が何だか怖しくなつてよ、暗い方へ〳〵と心が向いてしまうんだ。訊いて見なせへ、五年も十年も暗い坑内で稼いでる奴は、陽の目の見える坑外よりや、暗い坑内の方が氣樂で宜いと云ひやがるから……。俺だつて仚（やまいち）の坑夫さんで、日本全國を股にかけて歩ける身分だが、これも病と云ふのだらう、今ぢや太陽さんのギラ〳〵が、眩しくてしやうがねえや……」

足尾驛を出外れて、右へ通洞の方へ行く町續きでは、秋の大掃除で、バタ〳〵遣つて居た。まだ何處へも宿を取つて居ない空腹しのぎに、私は一軒の穢いうどん屋へ入つて、かけを一杯注文した。暗い店頭には、洗ひ晒した絣の袷衣に、黒木綿の兵兒帯した四十三四の男が居て、天麩羅蕎麥か何かで、一合徳利を傾けて居た。

「何しろ時世が變つたでなア、山の仕事も容易になつたよ。

逃げて行つた奴、二人も三人も、また此の山に舞戻るだもの……」

さう云つて、髭だらけの黒い顔で、四十男の相手になつて居るのは、六十近い此の家の主人らしい男であつた。そして、

「旦那、旦那は何ですかい、銅山の御見物ですかね。秋になると、中禪寺への往復に、山見物の人が、澤山、入り込みますで……」

などと、私に言葉をかけるのであつた。暗い坑内で仕事をすることに、不氣味さと、危險さと、或る不仕合せが運命づけられて居るにしても、より以上に不如意な世の中は、明るい都會の町の中にも、展開して居るのであつた。私はさう思ふと、何とか優しい言葉をかけて、疲勞しきつて居るらしい坑夫を、慰めてやりたいやうな氣持さへした。

「ふん。ヨロケに罹つてよ、くたばらねえのがまだ見つけもんさ。父さん、も一本熱くしてくれ……。今日は臨休で、久し振りに醉拂らい氣分で奴になつて見るかな……」

自棄氣味のやうな言葉つきであつても、坑夫は美味さうに、且つ樂しさうに、盃を嘗めて居るのであつた。

昔は日光の山奥の細尾峠に區切られて、明るい世間との交渉を絕つて居た足尾銅山も、足尾線の汽車が開通してからは、世の中との距離が、非常に近くなつて居た。渡良瀨川の沿岸を喘ぎ〳〵登つて行く車窓の眺望も、秋は殊に明快で、一種の觀光列車に乘つて居るやうな氣持さへした。赤城への登山口である水沼驛を出ると、汽車は足尾の町へ入るまで、花輪、澤入、原向と、桐生から二十七哩餘を、三時間で辿るのであつた。坑内のダイナマイト、飯場、ヨロケ、衰弱、病死……と云ふ風に、强て陰慘なるべき坑夫生活を想像に描いて見ても、火成岩らしい流れの岩石は白く、樹々は青く黃に紅に、何處にも「どん底生活」を想はせるやうな、暗い影も匂も漂うては居ぬのであつた。

足尾驛の所在地が、昔は足尾の目貫であつたが、今は通洞驛の附近が、足尾町の中心に變つて居た。こんな山の中に、こんな大きな宿屋があるのかと思はせるやうに、驛前には和泉屋と云ふ宿屋が、堂々と構へて居たりした。明治四十年の二月、暴動事件のあつた頃は、つる屋といふ宿屋の二階で、馬肉ばかり食はされたけれど、……それからもう十六年になるかと思ふと、足尾の町も人も、すべてが移り變つて居るのであつた。

「東京紡績株式會社女工募集出張所」とした看板が、通洞驛の前の運漕店に出て居たり、日本鑛夫總同盟の本部か支部かの看板も、町の中に頑張つて居た。そして會社側も坑夫側も、今や

瓦に鳴を鎮めて、生活を生活して居ると云つたやうな靜けさが、たゞ何となく感じられるのであつた。

二　坑夫の妻と子供

宿は和泉屋に極めて、私は先づ町の見物に出かけた。しる粉屋、うどん屋、藝妓屋、達磨屋、女郎屋など、多くは平家建の亞鉛屋根の下で、盛衰を見せて居るのであつた。

「近頃は坑夫さんも、獨身者の方が少いでな、達磨屋も昔のやうには繁昌しません……」

と、宿の女中は語つて居た。足尾町五千七百戶、人口三萬五千人の中で、町の人と云つては僅に一萬人に過ぎず、二萬五千人は銅山の從業員と其の家族と、關係者であると云ふに見ても、「古河さんの足尾」であることは、合點が出來るのであつた。本山、小瀧、通洞の三坑區を合せて、三百萬坪の坑道延坪を有つて居るのは、「何と云つても、豪勢なことでさあ」と、町の人も自慢して居た。

午後三時近くなつて、町には小學校歸りの子供達が、ゾロゾロと步いて居た。寫眞機を差向けて、「撮つてやらうか」と云ふと、

「うん、伯父さん、寫してくんろ……」

など〻云つて、三五人が忽ち私を取卷くのであつた。そして、

「君は何處だ」と訊くと

「通洞だよ、二組の相良政雄いふんだ」

「俺は中山常太郎だ、一組だよ」

「伯父さん、寫眞、送つてくれよ」



（足尾小學生）

など〻、人懷しさうに、口々に叫ぶのであつた。この坑夫の子供達に比べると、貧乏して居ても、東京に住むことの出來る私達は、何んなに幸福を感謝して宜いか知れぬのであつた。彼等は、折角、小學校へ通つて、字を讀むことを教えられ、字を書くことを習ひ覺えても、それ以上には志業を延ばすことが出來す、父や兄と同じやうに、暗い坑內で一生を終らねばならぬと

したら、世にこれほど痛ましいことは無いのであつた。「お前達も父兄のやうに、善良な坑夫となつて、一生を此の山の中で送れよ」と、たゞそれを教え導かれぬだけのことで、坑夫の子供達は、救はれたと云ふことが出來るであらうか。私は暗い氣持になつて、通洞の坑夫住宅地の方へ歩いて行つた。

通洞の第三組に、採鑛夫の家族を訪ねたのは、黄昏近い頃であつた。主人はまだ坑内から歸らず、家には四十女房が一人、色の褪めた木綿の袢をつゞつて居た。不如意な中にも、別に窶れた様子も見せず、女房はニコ／＼として、人の好さ相な表情をして居た。品もさう惡くはなく、何となく明るい顏をして居るのが、反つて私には物足りない氣持を起させるのであつた。

「おやぢさんは、留守ですか……」

「え、まだ戻りませんで……」

「さうかね、おかみさん、子供達は……」

「二人とも學校さ、行つとりますよ……」

「幾つと幾つ、男？女？」

「あまが七つ、がきが十二でさ」

「他には……」

「兄が一人……、達者だと十九だに……」

「死んだのですか、病氣で、それは、それは……」

「おやがは坑夫でさ、一生を坑内で送るけんど……。がきやあまは、世間へ出したいとな、樂しみはそれんばかしでさ…」

「でも、男の子だつたら、坑内へ入れるんだらう。おやぢのやうに、儲けさせるんでせう」

「ふん、坑夫の子は坑夫になると、極つた話でも無いからな……。東京へ出して、修業さしてさ、明るい世間さの風に、せめてがきだけはなア、吹かれさしてやりたいのさ……」

「おかみさん、足尾へ來て、何年になる？」

「十年一昔と云ふところさ。近頃は世の中が開けたで、足尾も明るうなりましたよ」

「別に近頃は、不平も無いのですか……」

「八釜しう云ふたとて、なるやうにしかなア、世の中のことは、互に持ちつ持たれつさ……」

そのおかみの傍の壁には、東京朝日の新附錄の「攝政宮殿下」の寫眞版が、一枚だけ貼りつけてあつた。破れた疊や、新聞紙を腰張した壁の中には、日陽も射し込まぬ薄暗さが、靜に這寄つて居るやうに見えたりした。

この坑夫の女房も、二人の子供を學校へ遣るために、選鑛場に稼ぎに出ては、日に一圓内外の金を儲けて居るのであつた。

三　呼吸器病三千人

銅山の坑夫はヨロケで死ぬる――私は何よりも此の事を、第一に知りたいのであつた。足尾銅山では、私立の小學校や、實業學校、夜學校、お針の教授、眞宗布教師の講話、坑夫養成寮など、教育方面の施設は、相當に整つて居ると云ふ話であつた。けれども私が心配したのは、暗い坑夫生活と病氣、死亡との關係であつた。何事にも手抜りなく、一應の設備をして居る足尾銅山は、此の點に就いても、心を勞して居るか何うか。私は何よりも、それが知りたいのであつた。

通洞病院は、東京の山の手の何々分院と云つたやうな、小ジンマリと整つた氣持のする構へであつた。背のヒョロ高い院長の平野醫學士は、瀧田哲太郎氏や親父を知つて居るとか、曾て赤十字病院に居たとか云つて、心安くいろ〳〵の話をした。この通洞病院の他に、本山と小瀧とにも分院があつて、平野氏は總院長といふ格で、働いて居るのであつた。その話に據ると、この半ケ年に取扱つた患者數は、一萬七千三百人で、内全治した者が一萬六千五百人、未治癒者が五百三十二人、死亡者は二百六十八人あつた。坑内には保安係四人を派して、負傷や怪我を未發に防ぎ、別に安全第一、互に注意、用心第一、注意第一、萬事注意、油斷百危、用心肝要、緊張第一、用意周到などの標語を掲げて、出入坑夫の注意力を刺戟して居るが、何と云つても一番多いのは、坑内に於ける怪我、負傷であつた。

「不思議なことに、脚氣患者は一人ぎりで、十二支腸蟲も六人しかありませんでした。花柳病も僅に三十八人でしたが、多いのは外傷の三千人、呼吸器病の三千人、トラホームの三千人、消化器病の三千人でした。暗い坑内で働くのですから、何んなに注意して居ても、つい怪我をするやうになるのでせう。トラホームが多いのは、眼にゴミが入る機會が多いのも、その一原因でせうが、消化器病は先づ下痢が多いのです。呼吸器病と云つても、大半は感冒で、坑の内外の溫度の差で、つい風邪に罹る者も多いらしいのです。こゝでは特に鑛山病と云ふほどの特殊の病氣はありません」

院長の話に據ると、肺結核は他へ出稼ぎした坑夫の娘、それも紡績女工になつて居た者が、十中の八九は罹つて歸るとのことであつた。そして私が問題にしたヨロケと云ふのは、鑛肺と云つて、鑛物の粉末が肺に入り、黑色した痰を吐くやうになるけれど、それは決して結核性ではなく、傳染せぬのが特徵であると云ふ。明るい世の中で働く人のやうに、健康であるとは證明し難いにしても、鑛山で働いて居るために、短命である

とは、斷定出來ぬとの話であつた。十年も二十年も坑内で働いて、五十を過ぎても壯健な男が、澤山居るに見ても、特に坑内病と云ふやうなものは、認められぬとの話であつた。

けれども其の體質に依るとは云へ、坑夫にヨロケが多いのは、事實のやうに思はれるのであつた。銅山生活を呪咀する者のみが、ヨロケの怖しさを云ふのではなく、坑夫の多くは知らず識らずの間に、その命數を短うして、暗がりの中で働いた一生涯の幕を、また永久に暗い黄泉に閉じてしまうのであつた。銅山の當事者が、何んなに設備を良くしたり、待遇を改善したりしても、彼等は坑夫であることに運命づけられて、既に一生涯の幸福と、世の中の光明とから、見放されて居るやうなものであつた。暗い「どん底」の生活は、彼等の身體のみでなく、その心持までも、人生の深い〳〵暗がりへ、引ずり込で居るやうに思はれるのであつた。

その足尾銅山には、四千人からの從業員が居て、通洞と本山と小瀧とでは採鑛し、別に通洞には選鑛場がある、赤谷には製煉所がある、間藤には機械の製作所がある、銀山平には製材所がある、根利山には木材と木炭の林業係があると云ふ風に、多少の消長はあつても、古河さんの鑛業は、まだ衰へぬのであつた。「足尾の古河」ではなくて、「古河の足尾」であることは、山川を征服し切つた大袈裟な工場を見たゞけでも、合點されるのであつた。

坑夫達は、果して幸福なのであらうか。私はさう思ひながら、通洞病院を出て、事務所の方へ歩いて行つた。

四　變つた飯場生活

從業員は四千人居ると云ふ話であるが、今年四月末の調査では、四千三百六十九人と云ふ、多數の坑夫であつた。幼きは十四歳から、老たるは七十歳以上まで、四十一歳の百四十五人、三十五歳の百三十五人を筆頭に、六十過ぎた老人も、百四十人から働いて居た。

昔は飯場と云ふがあつて、獨身の坑夫を連れて來ては寢食をさせ、高い賄料を貪つた上に、賃金も頭役と云ふが一手に受取つて、坑夫の自由を束縛して居た。一日八時間も十時間も、暗い坑内へ入つて働いても、得た賃金は飯代を差引かれると、遣錢にも足らぬと云ふ有樣であつた。それも會社の方で認めて居る飯場建屋に居る連中は、それほどひどくは無かつたが、下飯場と云ふもぐり飯場に居た坑夫達は、脂汗を流して働いた賃金を、全部、食ふことのために捲き上げられて、目も當られぬやうな憂き目に逢つたものであつた。

飯場の頭役と云ふのは、坑夫を連れて來ては自分の飯場に入れ、身分一切を引受けて、稼ぎに出して居るやうなものであつた。昔から銅山坑夫の生活が、「この世からなる活地獄だ」などゝ云はれたのは、暗い坑内の作業を比喩したにも因るが、一つには此の飯場生活が、非合理で、沒義道で、一種の奴隷制度に似て居たからであつた。甘い汁を吸ふのは、獰猛な頭役だけで、その飯場に居る坑夫達は、何のことはない膏血をしぼり取られるやうなものであつた。飯場制度を何とかして改善する前に、先づ退治ねばならぬのは、下飯場やモグリ飯場であつた。誘拐されたり、募集されたりして、手數料だの旅費だのと云つて、多額の金を貪られた上に、坑夫はその賃金までも、不當に捲上げられて居たのであつた。

モグリ飯場の悪辣手段に依つて、坑夫の生活が如何に虐げられて居たかに、やつと眼の覺めた會社[illegible]もう默視して居ることは出來なかつた。一つには時代の進展や、汽車の開通に依つて、人心も昔のやうに、たゞ運命にのみに甘んじて居ると云ふ風ではなかつた。會社側では積極的にモグリ飯場を退治るよりも、消極的に絶滅しやうとの手段を考へて、最初に着手したのが、直營の共同炊事であつた。飯場では粗末な飯を食はされて、月に二三十圓の飯代を取られて居たのに、會社側の直營共同炊事は、毎日／＼獻立表を發表して、月八九圓位の安價で以て、美味い物を喰べさせるやうにした。モグリ飯場の組織や方法の不備不當に、泣いて服從して居た坑夫達は、爭ふて此の共同炊事の恩惠に、隨喜するやうになつた。普通の飯場でも、頭役には炊事上の儲けがあつたけれど、此の安價にして美味い共同炊事が出來てからは、從來の飯場生活を、根柢から改革せねばならぬやうに、自然に變つていつたのであつた。

頭役が中心になつて、瀧田飯場とか、松崎飯場とか云つて居た組織も、從つて其の存立の意義に異動を見るやうに變つた。今日までは、頭役その人を親分兄分と立た人的關係や、同じ家に住むと云ふ同居關係に依つて、仕事の割振りや、私人交際をして來て居たが、さうした飯場の意味が、新時代の坑夫達に、何れほどの力となり、頼りとなるものであらうぞ。飯場と云ふ古い名稱には、いろ／＼と不快な聯想が伴ふ上に、在來の頭役制度では、雇主側も坑夫側も、困るやうなことが多かつた。昔の飯場の善い點は殘し、更に新代の自由な、公明な組織の下に、飯場に代るべき設備だけは、何としても必要なのであつた。

「そこで出來たのが、通洞第一組とか、本山第二組とか云ふ組なんです。飯場の名が組に變つたのみでなく、頭役は、世話役と云ふことにして、會社から選任することになつたので

す。組合員の中には、二名の總代と若干の委員を設けて、その組のことを萬事處理するやうにしたのです。昔のやうに頭役の專制でなくて、會社と坑夫とが協同して、新しい飯場を設けたといふことになるのです」

この組の者は、獨身者ばかりでなく、坑夫住宅に住で居る者も加盟して、分隊的組織の下に、主張もし、互助もして居るのである——と、以上は廣井人事係長の話であつた。

五　一室の坑夫長屋

採鑛夫とか支柱夫とか、その職別に依つても、獨立した組合が出來て居るし、採鑛夫だけは別に全山の聯合會を組織して、組合長や相談役を置き、幸福の增進や、權利の主張や、會社側への交渉や、すべてを合理的に、堂々とし得るだけの機關は整うて居る、と云ふ話であつた。

この組の世話役と云ふのは、通洞に十二人、小瀧に九人、本山に九人居て、何れも百圓乃至百五六十圓の給料を貰つて居るのであつた。世話役も坑夫の一人として、坑内で働きもすれば、組の者に病氣その他の事故や、慶弔があつた場合など、公私兩面ともに、世話をするやうに定められて居た。昔のやうに、頭役一人の意志で、何うともすることが出來ぬやうに、萬機公論に決すると云つた風の組織が、銅山經營者の主眼らしく思はれた。


（通洞の坑夫長屋）

通洞に二百戸、砂畑に四百戸の坑夫長屋は、大抵一棟五戸建のトタン屋根で、一戸は八疊か六疊の一室のみであつた。世話役の家は、六疊二室、四疊半二室の四室で、臺所の板の間も廣く、そこには昔の頭役らしい有福な名殘が、殘つて居るやうに見えもした。東京の細民窟に見るやうな、醜汚な氣分は流れて居ぬにしても、僅か六疊の一室に、四五人の家族が雜居して居る有樣は、決して仕合せには見えぬのであつた。

「電燈料三十錢の他に、疊一枚が月七八錢當りですから、月七八十錢と云ふ家賃なんです。會社では此の一室ぎりでは不可(いけな)いと云ふので、二室に改築するやう、着手した所もありますが、それは六疊に三疊か、八疊に三疊かの二室にする豫定であります。夫婦に子供一人ぐらゐなら、さう不自由でも無いと思ひますが……」

案內してくれた峰君は溫和な顏に、微笑を湛えながら、途で逢ふ坑夫やその家族達に、叮嚀に挨拶して居た。坑夫長屋のある方面には、別に平家建の五六十疊も敷ける「よりあひ所」があつて、中には簡易圖書館を設備し、帝國文庫や、歷史物や、少からぬ雜書を揃へてあつた。その本はビール箱大の木箱に、二三十冊も入れて、各所の寄合所に持廻るさうで、巡廻圖書館の名も、さう可笑しくは感ぜられぬのであつた。

「共濟組合もありますし、購買組合の三養會と云ふのも出來て居ますし、收入の割合に、さう生活の脅威を感ずる譯は無いと思ふのです。賃金は日給の本番別の他に、出來高拂別もあれば、臨時就業の割增別もありますし、賞與は模範賞與、善行賞與、精勤賞與、臨時賞與の四種を出して居るのです。それに米は二十五錢を標準價とし、一日二升までは補給し、時價が二十五錢より高い時は、その差額だけを金で支給するやうにして居るのです。木炭にしても、仕上まで二十二錢かゝるのを、十八錢で渡して居ますが、萬事、世間で想像して居るやうな、そんなヒドイことは時節柄、有り得ない話なんですよ……」

今度は廣井人事係長が、よりあひ所の前に立つて、詳しく說明してくれるのであつた。昔は八時間の三交替で、「いやな三の番にかゝ取られ……」などの唄も出來たほどであつたが、今は日中の八時間だけで、夜は入坑作業せぬとの話であつた。月には一日と十六日と、他に二日の定休日があつて、一年を通じて四十八日間は、休ませる規定になつて居り、正月三日の他、櫻咲く四月の山神祭には、一萬圓からの費用をかけて、全山みな興じ合ふさうであつた。

「櫻花も宜しいが、秋の萬靈供給も盛なものです。近頃は巡廻活動寫眞を催して居ますが、別に町の方には金田座足尾館など云ふ芝居や寄席もありますよ……」

と、會社の人達は、坑夫の待遇に就き、如何にも心を勞して居るやう話であつた。農商務省の調査に依ると、全國鑛山の一人一日平均賃金は、一圓六十錢になつて居るが、足尾銅山は一圓九十九錢三厘平均であると、これは杉本所長の話であつた。待遇が良い、賃金も割合に宜い……と、たとそれだけの事で、滿足せねばならぬ坑夫達の生活を想ふと、私は又しても暗い氣

持に沈むのであつた。

六　通洞坑内の半日

「坑内へ入つて見やう」私はさう思つて、若い金子と云ふ工學士に案内され、半日を暗い通洞坑内で暮した。事務所の大きな浴室で、坑内着に着換へて、手にはカーバイトのカンテラを提げ通洞坑の入口に向つた。入口には「用心第一」とした過失防止の貼紙や、先月分の負傷數や原因などを、彩色入の圖樣にしたのが、何となく不安な氣分を唆るのであつた。

銅山の坑内と云ふ所は、これ程までに出入者や從業者の注意を促がさねば、常に危險が伴ふて居るのであらうか……と、私は怯々した氣持になりながら、金子技師の白い顏を見上げた。小さい電氣機關車の引くトロに乘つて、背延すれば架線に觸れる危なかしさに、小さくなつて默つて居ると、やがて電車は速力を出して、チリン／＼と警鐘を鳴らしながら、闇の中へ突進するのであつた。暗い坑道の地平線を、三百尺も四百尺も奥の方へ進むと、兩側には太い支柱が水に濡れて、所々の十燭光に照らさせて居るのが、何となく物凄い氣持を起させたりした。

電車が停つた所には、岩石の中に十坪ばかりの事務所が出來て居て、明るい電燈の下で、五七人の男が事務を執つて居た。坑内の見張所とも云ひ、事務所とも云つて、坑夫の出入や、採鑛量の勘定や、ダイナマイトの出し入れなどを、そこで取扱つて居るのであつた。カン／＼熾つて居る炭火の上には、爆烈彈の導火に使ふ白い線や、川柳らしい茶の袋を、乾燥してあるのが眼についた。一日八時間を、カンテラや電燈の光りを頼みに、晝を夜にして働かねばならぬ人々の姿は、決して鼻唄一つ唄ふだけの餘裕も無いやうに見えた。勞役そのものの苦しさよりも暗黑の中に働くと云ふ不氣味な不愉快な感じの上に、人々の顏は何れも緊張し切つて居るやうに見えた

「ここまでは銀座通りなんです。日本橋區や廣小路は、まだ他にもありますが、これから細い小路に入つて見ませう。それから竪坑へのエレベーターにも、折角ですから乘つていたゞきませう。三越のや第一相互館のとは、少し違ひますけれど、要するに同じエレベーターなんですから……」

金子技師は斯う云つて、ズン／＼暗い方へ入り込むのであつた。手には鐵のテコを持て、左右の岩石をトン／＼叩きながら、「これが皆、銅なんですよ」と、得意らしい表情さへ見えるのであつた。坑口から入つた平地は、坑外と大して異つても居ぬが、竪坑を三百尺も四百尺も下つた地下は、地熱のため暑くて、シャツ一枚でも汗が出るといふ話であつた。その竪坑を下

るエレベーターは、僅に四五人を乘せるだけの四角形で、四方には太い材木を壁のやうに支へてあるが、暗黒な中に冷たい水の滴り落る有樣は、決して氣味の好いものではなかつた。坑夫はその竪坑を上下して、深い岩石の間で、探鑛に從事するし、黒い鑛石はその竪坑から運ばれて、坑外の選鑛場へ送り出されるのであつた。

「六百五十尺のカジカへ御案内いたしませう。これは二三年前に發見した大鑛區でして、若しこれが無かつたら、古河さんの足尾も、悲觀すべき狀態になつたか知れぬのです。何と云つても、運の好いことで、從來は火成岩の中に、鑛脈を辿つて採つて居たものが、何うです、堅い〳〵水成岩の中に、ウヨウヨするほど、多量の鑛脈を發見したんですからね……」

その六百五十尺のカジカといふのは、通洞坑口から少し右に寄つた六百五十尺の下層で、前後左右上下、見渡す限り、黒光りする岩石が、壘々と層を成して居た。そして、壓搾空氣の鑿岩機を使つて、五寸、八寸の穴を穿ち、ダイナマイトを裝置して、爆烈させる仕事は、名狀し難い物凄さを呈して居た。

「手掘で遣る所もありますが、大きな所はこの鑿岩機で、ドン〳〵穴を明けるのです」

自然を征服すると云ふことに、精神的の快感は伴ふにせよ、暗い坑内の作業は、決して愉快には眺められなかつた。カンテラの光を地獄の冥府(よみ)の燈火と思つたり、異形な作業姿を、赤鬼青鬼に擬して見ないまでも、四邊の氣分は陰慘として、何の事はなく「現世地獄」といふやうな、誇大した形容詞を使つても、さう可笑しくないやうな氣持さへした。

これがほんとの「どん底」生活なのであらう。——

七　富川町の木賃宿

菊川橋線の電車を富川町で下車して、夕暮の木賃宿町に迷い込んだのは、足尾から歸つて間の無い時であつた。都會の場末町の賑はしさと云つても、それは何だかブリキ鑵でも叩くやうな、妙に雜然とした賑かさに見えた。

大阪から東京に來て、國民新聞記者として、初の續(つゞ)き物を書いた時、私が最初に飛び込んだのは、此の富川町の木賃宿町であつた。その頃は電車も開通せず、伊豫橋も今のやうに、石造の立派なものではなく、路上には穢い風體をした密娼婦が、ウヨ〳〵と右往左往した居た。まめ屋の二階の三分芯のランプの下で、「木賃宿通信」の第一回を書いてから、私は實に十七年目で、再び富川町のお客樣となつたのであつた。その豆屋の前には、電車がゴーウゴーウと通つて居て、大きな活動寫眞館さへ、何

時の間にか出來て居た。

停留場近くを右へ入つた横町には、昔ながらの浪華館がそのまゝ在つて、浪花節御一人二十五錢で、重松とした太字の看板が出て居たりした。まめ屋の隣の近江屋といふ質屋も、昔の儘の構へをして、十錢二十錢の安い質物の出し入れに、忙しさうな聲を響かせて居た。この貧し氣な木賃宿町の中央を、澁谷から出て來るボギー車の通る世の中に、私自身だけは、何だか昔の儘の自分であるやうな氣持さへした。故郷へ歸つたといふほどの、懷しい氣持では無いにしても、私のためには何となく、異郷で無いやうな氣持のする富川町なのであつた。電車が通つた爲めに、伊豫橋からかけて一體の氣分は、大分、明るくはなつたけれど、それでも汗臭い勞働者が蠢動して居る横町には、昔ながらの「人生のどん底」と云つた氣分が、濃く強く流れ漲つて居るのであつた。

其筋の調査なるものに據ると、最近二十年間に於いて、東京の郡部の方は、次第に木賃宿が減少したけれど、市內の方は二割から增加して居るとのことであつた。その昔、品川子爵が內務大臣であつた當時、市內に指定した木賃宿町は、各區を通じて十三ケ町であつたが、その內、芝白金、下谷初音町、深川靈岸町の三ケ町には無くなつて、現在では市內だけでも、四百五軒あるとの話であつた。その中でも最も多いのが、深川富川町の百十二軒で、本所花町が八十九軒、淺草町が七十三軒、小梅業平町が六十三軒、四谷永住町が二十五軒、旭町が二十一軒、新廣尾町が十六軒、上富士前町が三軒、東大工町が三軒と云ふ風であつた。投宿者は屋外勞働者が大部分で、獨身者が六割三分、家族連れが三割七分、全市を通じては一萬四千人からの勞働者が、木賃宿で



(富川町の木賃宿)

生活して居るのであつた。中にも此の富川町は、獨身者が最も多く、朝に出かけては晚に歸るその賑はしさ騷々しさは、恰も印絆纏の市が立つやうな景氣に見えた。雨露を凌ぐに足るだけの休息の家で、僅に睡ると云ふだけの彼等の生活には、「昨日」も無く「明日」も無くて、たゞ「今日」の現在があるばかりに見えた。

一夜一泊、疊一疊に一枚の蒲團を柏餅にして、寢るだけが二十三錢は、それでも他の町に比べて、安い方であつた。別室と云ふのは大抵二疊か三疊の室になつて居て、一泊四十錢内外であるが、四五泊以上になると、入込みの方は一泊二十錢位には割引するやうになつて居た。上總屋、伊勢屋、佐野屋、古川屋、河内屋、藤屋など、軒を並べて居る中にも、三十一番地の黑田屋本店や、第三佐野屋などは、店構へだけ西洋風まがひの三階建になつて居た。妙な洋風した「御泊宿」の長い軒燈を掲げた三階建の中に、汗臭い酒の呼吸した印袢纏の群が吸込まれる圖は、同じ東京の町の中でも、空氣が大分ちがつて見えた。

私は昔を懐しむもの丶やうな足どりで、伊豫橋の東詰から、東の方へと歩いて行つた。右側の三十七番地には、勢國屋、黑田屋などと云ふ、木賃宿にしては立派な構への硝子戸が、軒燈に照り映えて居た。

七　朝々立つ勞働市

三十一番地の簡易食堂や、三十五番地の伊勢屋、大内支店、東支店などの飯屋や酒屋では、飯を食べたり、酒を飲だり、仕事歸りの印袢纏が、互に氣勢をあげて居た。この界隈には、勞働者のために出來た飯屋が十軒、酒屋が十軒、酒と飯を出す家が十軒ほどあつて、四千人近い勞働者に、「日常の糧」を供給して居るのであつた。

同じ屋外勞働者と云つても、彼等の仲間にはいろんな階級と種類があつた。河岸へ雇はれて行く小揚人夫もあれば、ビルヂングなどの工事場へ雇はれて行く土方、日雇もあり、又は冬の日の雪かきや、土砂運びや、手傳いや、樣々の種類があつた。年齡の差別に依り、知合の有無に依り、健康不健康に依つて、彼等の稼ぐ方面も、自然に異つて居た。それでも稼ぎに出さへすれば、日に二圓から三圓までの收入があつて、獨身の一人口を糊するには、何の不自由も無いのであつた。割引電車の切符代さへ持つて出れば、晩には二圓なり三圓なりの紙幣を握つて、食べることと寢ることを樂しみに、この富川町の巣窟へと、雪崩のやうに戻つて來るのであつた。

富川町には、日本勞働株式會社と云ふ、人夫や稼ぎ人の請負商が居て、毎朝四時ごろから、町の四辻で市が立つのであつた。印袢纏の上にスコッチの外套を着て、長い靴足袋にゴム靴と云ふ扮裝(いでたち)の親方らしい男は、茶の中折帽を阿彌陀にかむつて、怪し氣な金鎖を光らせながら、左手に小さい紙片の一束を握つて、「小揚ッ」とか、「市役所ッ」とか、「丸の内ッ」とか、怒鳴り立るのであつた。その周圍を取卷いて居る印袢纏の群

は、「あいよ」とか、「頼むッ」とか、「吉田ッ」とか云つて、黒い手を出して、その紙片を受取ると、三々五々連れ立つて、指定された仕事場へ出かけるのであつた。仕事が無くてあぶれた連中や、朝の間は怠けて休んで、午後の半日に一圓でも稼がうとする連中は、家の軒下や、路傍に蹲居つて、他愛もなく日なたぼつこをするのであつた。何んなに大勢の印絆纏が居ても、天氣



富川町の午前

が好くて、稼ぐに差支へ無い限り、一人も殘らず出拂つてしまうとは、何と云つても東京と云ふ都會は、勞働者のための稼ぎ場所なのであつた。

「仕事が無くつて困つて居る奴は、富川町へ行くが宜い。汗を流して稼ぐ積だつたら、何んな仕事でも、お前達を待受けて居る」

全くさう云ひたいほど、富川町の勞働市は榮えて居るのであつた。けれども雨が降り續いて、二日も三日も五日も、屋外勞働が出來なくなると、彼等の生活は滅入つたやうに元氣が無くなつて、毎日〱木賃宿の一室に、ゴロゴロと寢ころぶ他は無いのであつた。宿に信用さへあれば、三四日の木賃は貸して貰へるし、一日や二日位ならば、三度の飯を二度に減じても、生きて行くことは出來るのであるが、それ以上は何うともすることが出來ぬやうに、彼等は困憊するのであつた。「何うして食はう」と云ふことのために、「何うして生きやう」と云ふことのために、彼等の神經は尖がるのみであつた。

木賃宿の一室に於いて、霽れた日の稼ぎと收入とを目的に、いろんな賭博が行はれるのも、また彼等の着のみ着のまゝの着て居るものが、更に薄く剝がれていくのも、實はさうした場合なのであつた。附近の質屋に印絆纏の出入が俄に繁くなつて三十錢、五十錢の安い質物が轉々するのも、雨の日に限られた情景であつた。日の光の下で、稼いでさへ居れば、その日〱の收入に、強烈なブランの醉を買つて、鼻唄の一つも唄い得る彼等でありながら、雨の日が二三日も續くと、全く生色を失つてしまふのであつた。

「俺達に好景氣不景氣の風が吹くのは、世間様よりや一年も遲れて居るんだ。雨が降りや不景氣で、天氣が良けれや好景氣と、俺達の世界はとうから相場が極つて居るんだ」

身を以て働くと云ふ强い彼等の生活も、たゞ雨のために受ける不安と恐怖とだけは、何うすることも出來ぬのであつた。

八 簡易食堂と附近

簡易食堂のある三十一番地は、電車通りから右へ入つた横町で、おでん屋、駄菓子屋、天麩羅屋、支那料理屋などの居酒屋から、異樣な臭氣が漲つて居た。もうしたゝか醉ぱらつた連中も居て、喧嘩でもして居るやうな口調で、ガヤ〳〵と浮かれ騷いで居た。

食堂の横には、ブランや正宗を賣る酒場が出來て居て、一杯賣が忙しさうに見えて居た。食堂の前には、うどんあげなんばん五錢、コロツケうどん五錢、肉なんばん十錢、天なんばん十錢、牛フライ四ツ十錢などゝ、立看板に書いてあるのが、空腹を唆るやうに眺められたりした。安い酒精分の强い酒と、安い脂肪分の强い食物と、多くの印袢纒は、その滿足に乘じつて、浪花館に重松の「國定忠次」を聽いたり、晉羽館に「豪探偵」を見たりして、半夜を興じ合ふのであつた。

「おい、上州、てめえ昨晩、龜戶へ行たな。こん畜生、出し拔きやがつて……」

「馬鹿、誰が龜戶など、行くもんか。俺にはな、洲崎へちやんと待つてるのが……」

「へん、ふざけるねえ、目か一奴が……。淸水組の兄イだと振れ込みやがつても、だんべの上州で、ケツが割れらアな」

「何とでも吐かし居れ……だ。おい甲州、羨ましけりや、龜戶でも何處でも行け……」

「怒つたな、面白えや。怒りついでに晉羽館をおごれえよ。面白いぜ、今度のは……」

「活動なんか、見たくねえや。てめえ、勝手に見たけりや見てこう……。馬鹿〳〵しい」

「……なら、重松にまけとくぜ……」

「浪花節もきイらイだアよウ」

「つきあへの惡い野郞だ。束で一ぺいおごつてやるよウ。ついてこう、ついてこう……」

醉ぱらつて、絡むやうに縺れて行くのは、三十近い背の高い、元氣の宜い二人連れの印袢纒であつた。何處かでブランでも引かけたのか、二人は喧嘩をして居るやうな、荒ツぽい口調でありながら、二人とも險しい顏つきではなく、ニヤリ〳〵として

居た。二圓でも三圓でも儲けただけの金を、その晩中に飲でしまはなくては、宿へ歸つて寢つかれねと云ふやうな、その日限りの果敢い歡樂を追つて居る男なのであつた。

簡易食堂では、百人足らずの連中が入つて、大きな丼飯に、燒豆腐と吉原揚げらしい煮物で、晩飯をパクついて居た。向ふづけは菜のしたし物で、一食十五錢の分量も、さう少い方ではなかつた。朝は味噌汁と澤庵二切が付いて十錢、米は三等米でも、二合以上の分量があるので、飯屋としては高い方ではなかつた。三四月の頃は、毎朝七八百人の勞働者が、三交替位で食べに來たが、近頃でも四五百人のお客様で、賑はうと云ふ話であつた。普通の飯屋に比べて、さう安くもなく、美味いと云ふほどでも無いが、一時に多人數が食べられる賑やかに、心の淋しい彼等は、自然に集つて來る樣子に見えた。

「兄さん、うちの人、知んねえけ……」

入口に立つて、食堂の中を窺いて居るのは、三十近い異樣の風をした女であつた。色の褪めた赤いネルの腰卷に、木綿縞白の洗ひざらした腰卷を重ねて、襟には帝國劇場と染拔いた古い印袢纏と、木村金物店とした印袢纏を重ねて居た。そして細い黑い紐か何かで、二つばかりの子供を背にからみ付け、髮をいぼぢり卷にした亂れ毛が、割合に白い面長の頰にからんで居るのであつた。

「駒さんか、知りませんよ……」

十八九の若い印袢纏が答へると、女はちよッと舌打ちして、險しい表情をした。

「しようのねえ人だね。二圓持つてけえつて、それぎりお金の面も見せねえで、また、何處を飲だくれ歩いて居るだか……」

女はさう云つて、背の子をゆすぶり／＼、電車通りの方へ歩いて行つた。夫婦と子供と三人で、木賃宿の二疊一室を棲家にして、その日／＼を糊して居る女なのであらう。

九　本所小梅業平町

富川町で泊まるのは、何となく氣味が悪いやうな氣持がした。それに一寸小綺麗な家は、大抵滿員になつて居て、私のやうな風來人を泊めてくれさうには思はれなかつた。通りの勢國屋へ入つて、「番頭さん、一晩、泊めて貰ひませう」と云つたら、二十八九の人の好ささうな番頭は、私の顏をジロ／＼見て居たが、「旦那、御戲談もんでせう」と、ニヤ／＼笑つて見せるのであつた。

「洲崎、龜戶、吉原、公園と、旦那方の御定宿は、明るい火の町の方で御座んせう。こゝはね旦那、金緣眼鏡に薄羅紗の外

姿など云ふ、紳士の御宿では御座んせんからな……」と、妙な口調で、いやに敬遠するのであつた。人の好さゝうな若い番頭君よ、羽二重の長襦袢にお召の袷衣、お召の羽織、薄マントに金縁眼鏡して居ても、要するに印袢纒と同じではないか。私も木賃宿の生活には、愛と親しみとを人一倍感じて居るものを、君は何うして泊めてくれないのか……と、私は淋しい氣持になつたりした。十七年の時代の進化は、四邊の氣分を明るくして居るのみでなく、木賃宿の內容も、昔のやうに醜汚ではなく、掃除も行屆いて居れば、設備も少しは改良されて居た。けれども、何んなに綺麗になつたと云つても、木賃宿が木賃宿として在る限り、そこには落伍と、沈淪と、自暴自棄と、失意と、絶望との廢殘の諸相が、強く濃く渦卷いて居るのであつた。

「印袢纒を着て來れば宜かつた」と、不要意を悔いても遲かつた。私は富川町を一巡した後、更に電車を押上線に乘つて、中の郷の停留場で下車した。そこには、小梅業平町の一郭に、六十三軒の木賃宿があつて、富川町とは少しく上等だと云つても、木賃宿は木賃宿に違ひ無いのであつた。下總屋などは下宿屋と思はれるほどに、堂々たる三階建の構へで、一夜に百人、百五十人を宿泊させる設備が整うて居た。こゝも長四角形の硝子行燈に「御泊宿」とした軒燈が出て居て、一人一泊疊一枚分で三十錢、幾日泊つてもそれ以上には、割引せぬと云ふ話であつた。こゝに泊つて居る印袢纒は、富川町のよりも工面の宜い連中らしく、中には年中かきがら町に通つて、一攫千金の儲を夢見て居る者や、神田の下宿屋にも住むことが出來ぬやうな、青雲の志望を抱いた貧しい青年も、宿泊して居るのであつた。業平館と云ふ家には、丸顏の元氣の快さゝうな番頭さんが居て、「入らつしやい、別室は六七十錢です」と、キビ〳〵した口調で、世間話を初めるのであつた。

そこへ入つて來たのは、頭髮を長くした中柄の男で「林さんは居ませんか……」と、馴々しい口調に聞えた。そして私の姿を見るや否や、「やア、松崎さん、妙な所で逢ますね」と、言葉をかけるのであつた。「淺草の會」で初めて逢つて以來、心安くして居る流行唄讀賣の本家本元で、雜誌「民衆娛樂」の發行元兼主筆である添田啞蟬坊と、私は妙な所で逢うたのであつた。

「木賃宿の情況視察に來て居るのです。どうも想像して居たよりは、綺麗になつて居るので、吃驚して居るところです」と云ふと、添田君は笑ひながら、

「木賃宿の暮しなんか、どん底生活の中でも上等の部に屬する方ですよ。私の住んで居る下谷山伏町の四十八軒長屋と云ふ

のに來て御覽なさい、びつくりしますから……」
と云ふのであつた。そして添田君が訪ねて來た林さんと云ふのは、林含霜と云ふ六十近い浪人で、本名を本間勝作と云ひ、若い頃から政治運動に熱中して、財を傾けた奇人だと云ふ話であつた。日向輝武とか大竹貫一とか、高島米峰、堺利彥、西川光二郎の諸家とも交つて居る新潟縣人で、今は林含霜と云ふ假名の下に、木賃宿生活を續けて居るのであつた。
「堺利彥の唯物史觀に、反對論を抱いて居る人で、木賃宿のお客樣としては、珍中の珍と云つた人物なんです。不在で殘念ですなア、御紹介すると宜いのに……」
と啞蟬坊は如何にも、殘念さうであつた。

十　淺草公園の引力

業平館の店頭で、啞蟬坊に別れてから、私は業平町を一巡した後、吾妻橋を淺草の方へ渡つた。木賃宿で寢るには早い半夜を、公園劇場の澤田正二郎劇で、興じてみやうと思つたからであつた。「城山の月」や「冬木心中」や、勞働者の生活とは、何の交渉も無い舞臺面であつても、世界がカラリと變つて居るだけ、それだけ別樣の面白味はあつた。

酒と女と、この二つの他の樂しみと云へば、木賃宿のお客樣のためにも、淺草公園六區が、唯一の對照なのであつた。世界戰爭の惡い影響や、觀覽稅など云ふ惡稅のために、淺草公園の觀覽料も、昔のやうに安　はないけれど、それでも淺草は勞働者のために、最も刺戟の強い、色彩の濃厚な、氣分の豐滿な歡樂場所なのであつた。飯屋や酒屋で腹一杯飲食した後、彼等の慾望が「女」に走らぬ場合には、必ず淺草公園へ心と足とを向けるのが、常習性のやうになつて居た。殊に吾妻橋一つで隔てられて居る業平町の人々は、仕事を終へて歸つて來ると、明るい灯の影を慕つて、何を措いても淺草へ出かけるのであつた。

そして彼等は、澤正の立見で、義憤の血を湧かしたり、金龍館の普通席で、感傷的の涙をこぼしたり、帝國館の混み合ふ中で、可憐な少女に同情したりし樣々に感情を動かされるのであつた。近頃は江川の玉乘が衰へ、八木節も盛期を過ぎたけれど、取つて代つた觀のある安來節に入つては、輕い哀趣のある節調と絃の音に、淡い悲しみを感じたり、又は紅の裾を飜へす厚化粧した女の踊に、性慾の滿足を感じて、人知れず微笑むのであつた。藝と實感とかゴツチャになつて、時にはくすぐりに似た惡落ちがあつても、何か知ら人の心を強く衝く五九郎の喜劇を見ては、苦勞も何も忘れてしまつて、心から面白さうに笑ひもするのであつた。今日の十二階下は、刹那の滿足を購ふに

も、彼等が一日の汗と膏とを代價とせねばならぬ程に、高價なものになつたけれど、月に二回か三回かは、心も身も投げ出して、抑へ切れぬ慾望を充すために、出沒もするのであつた。

淺草公園の觀衆は、活動寫眞とオペラとに依つて、文化的に向上しては來たけれど、それは智識ある若い學生や、勤人達の一部であつて、依然として多きを占めて居る者の中には、勞働者の群を見のがすことは出來ぬのであつた。私の許に出入して居る一人の土方は、相當に文字もあるのに、鐵道の線路工夫となつて、原宿の部屋に住で居るが、その男の告白に依つても、「東京で苦勞して稼いで居るのは、淺草公園があるからです」と云ふ話であつた。けれども今日の淺草は、次第に勞働者の世界では無くなるやうな、一種變妙な氣分が萠し初めて居るやうに思はれて、私には倦き足らぬ心持さへするのであつた。公園の興行者や、公園を研究して居る人達が、「民衆」と云ふ意味をハキ違へて居るやうな、そんな氣持さへもするのであつた。

六區を一巡りして、電車通りの廣小路へ出ると、そこには燒鳥、天ぷら、おでん、茶飯、すし、牛飯などの屋臺店が、雷門まで續いて居た。暗い木賃宿町で食べる物よりも、一二割の高價で、美味い風味に舌鼓打つことが出來るのも、淺草の持つ引力の一つであつた。それに賑やかで、明るくて、色彩や匂ひや音響の刺戟があつて、如何にも都會の町と云ふ氣持のする點が木賃宿生活の人々には、何がなしに心樂しくも感ぜられるのであつた。

「何も食べず、何も見ずに、たゞ歩いて來るだけでも、淺草公園の夜は宜い所なんです」

と、私の友達である線路土方は、心から淺草の夜を謳歌して居た。業平町に泊つて居る三十代の若い獨身者が、殆ど年中毎夜のやうに、淺草公園へ出かけて行く心持も、私には合點されるのであつた、

それにしても、十時を過ぎてからの淺草は、俄にガランと淋しくなつて、底冷たいやうな孤獨の感が、ヒシ〳〵と迫つて來るのであつた。

十一　木賃宿にとまる

淺草から歸つて、甲州屋の客となつたのは、十一時を過ぎたころであつた。そこの主人らしい六十男は、私の風體を見ても、別に妙な表情を見せるでもなく、「おい、二階の十六番へ、案内してあげな」と、愛想も何も無い通り一遍のことを云ふに過ぎなかつた。

東京府豐多摩郡澁谷町大字中澁谷大向八七三番地平民無職松

崎市郎四十五歳——宿帳には斯う眞實のことを記して、一泊料五十錢の他に、私は茶代として五十錢を差出した。そして二階へ案内してくれた十二三の娘に、二十錢を與へたら、「お客さん、ほんとかね、貰つても宜いのかね」と、小娘は二度も三度も問返すのであつた。木賃宿に泊る位の人は、二十錢の金でも大切にして、一度の食料にするものを、小女に心付を與へて、反つて眞僞を疑はれるほどに、彼等の世の中は切迫して居るのであつた。

案内された室は、表通りに面した二疊の室であつたが、中には電燈も何も點いて居ず、二階の昇り口の十燭光と、表のパツとした明りとで、漸く壁や疊が見える位であつた。それでも縁の無い疊は、色こそ黑くなつて居れ、さう破れて居ると云ふほどでもなく、赤茶けた壁も、完全に形を存して、破れては居ぬやうであつた。普通なら此の二疊に、二人押し込められるのであらうが、客の都合と、五十錢の茶代が利いて、私はたつた一人で、その二疊の別室に、足腰を延ばすことが出來たのであつた。外には按摩らしい笛が聞えたり、電車の軋る遠音が聞えたりして、木賃宿の旅愁を唆るのであつた。ほんとに落魄して、こんな宿屋に泊るやうになつたら、何うであらうと想ふよりも、「人間の棲家は、何處にでもある」と云ふ心安い氣持の方が、反つて私を幸福者に思はせるのであつた。

木綿縞の洗ひ晒した薄い敷蒲團に 掛蒲團も同じやうな物で、シヤツ一枚になつて寢そべると、疊の上に寢ころんで居るやうな硬張つた氣持がした。上等の部屋であらうけれど、その蒲團には汗臭いやうな、カビ臭いやうな、藥臭いやうな、酒臭いやうな氣持がして、襟の邊は殊に不氣持に感ぜられた。まどかなる一夜の夢を結ばふとして、強て心を落着けやうとしても、「氣味が惡い」と云ふ戒心が邪魔をして、一時の時計を聽いても、容易に寢つかれないのであつた。隣室には男二人連れや、夫婦者らしい二人づれも泊つて居るやうであつたが、彼等は安らかな鼾(いびき)を立て、盛りであつた頃の過ぐ世でも、夢に樂しく見て居るのであらう。貨物列車の走る遠音や、房州通ひらしい汽船の笛の音や、コトリと云ふ天井の鼠の氣配までが、澄み切つた聽神經に強く響くのであつた。「隣室で無理心中でもあると面白いのに……」と思つたり、「朝起きて見ると、若い奴が自殺して居た」などゝ、樣々の空想を描いて見ても、眼はます〱冴えて、心はいよいよ澄み切るのみであつた。

長い〱平凡な木賃宿の一夜が明けて、吾妻橋を西へ渡つたのは、翌朝の六時ごろであつた。木賃宿に泊つて見ると云ふ實感に、多大の期待を抱いて居た私は、十七年前の師走の一夜と

同じやうに、何だか裏切られたやうな氣持がした。こんなことなら、木賃宿には一二時間ほど居て、吉原へでも行つて泊つた方が、利巧であつたやうな心持さへした。同じ泊るにしても、別室へなどは入らずに、六疊一室に六七人寢るやうな、臭い合部屋に入る方が宜かつたのに、私には其の勇氣が、何うしても出ないのであつた。

それでも、木賃宿へ泊つた……と云ふ事實だけでも、何だか申譯が立つやうな心持がして、私は少しも後悔はせぬのであつた。そして自分の實生活の上に、一種のあきらめと、慰めを得たゞけでも、良い收獲であつたやうな氣持がした。

「妻や子供達も、木賃宿に一晩泊るが宜い」私はさう思ひながら、晴やかな氣持になつて、仲見世を雷門の方へと歩いて行つた。

十二　職を求める人々

足尾銅山の飯場に住で、暗い坑内で稼いで居る人達と、富川町や業平町の木賃宿に泊つて、賑かな東京で働いて居る人達と、何れが幸福であり不幸であるのか。私はそんなことを考へながら、淺草で輕い朝飯を食べた後、更に厩橋の方へ歩いて行つた。そこには救世軍の無料宿泊所と、無料職業紹介所とがあつて、職を求める人々のために、親切にいろいろの世話をしたり、木賃宿にも泊れぬ人々を收容して、雨露を凌がして居ると云ふ話を、承知して居たからであつた。

厩橋から上野の方へ向つて、電車線路を小一丁も行くと、右側にある二階建が、その救世軍の宿泊所であつた。午前八時を過ぎたばかりであるのに、入つた左手の受付には、もう二三人の若い男が來て居て、係の人に向つて、しきりに職業口を訊いて居た。係の人は小紙片に印刷した「求職票」を渡して、それに原籍、住所、姓名、年齡、經歷、希望などを記入させた後、一々、求人簿と照し合せて、

「運轉手の口は無いけれど、ゴム會社は何うです。一日一圓二十錢ですが……」

などゝ云つて、應答して居るのであつた。四十五六の小柄な、瘦せた色の黑い女は、小さな風呂敷包を抱へて、心配さうに控へて居たが、別に宜い女中口も無いと見えて、兩手で頰を押へて、考へ込んで居るらしいのが、場所柄だけに、哀れに眺められたりした。

「紹介時間、自午前八時至午後四時」とした貼紙や、「宿泊受付、自午後六時至午後八時、門限午後十時」とした貼紙や、「來る十五日より一泊金十五錢」とした貼紙が、受付の上や壁に揭げら

て居た。幅五尺、奥行二間しか無い受付の奥には、大きな下駄箱が置いてあつて、正面は二階へ通ずる階段になつて居た。洗い晒しの飛白の單衣を着た日本大學の商科生や、威勢の好い牛乳配達のやうな服装をした若者や、三十前後の塵だれた背廣を着た男や、職を求めて歩いて居る人間としては、何れも良い血色をした、「何んなことをしても食へる」人のやうに見えたりした。

「事務員になりたいのですが……。そんな口はありませんか。新聞配達はもう凝り／＼です。勉强も何も出來りやしない……」

デブ／＼肥つた二十二三の青年は、笑顔でこんな事を云つたりした。濃茶色の毛糸のジヤケツに、メリヤスの股引、黒足袋、ソフト帽と云ふ扮裝で、生活に屈托して居るやうな色は、少しも見えぬのであつた。

「皆さんが、事務員になりたがつて困る……。新聞配達は月二十五圓、銅器の製造所なら十九圓、うどん屋は十五圓、製本屋の口は十八圓です。最初の間は手傳いなんだから、菓子屋は十八圓、かざり屋は十五圓……」

係の人はニヤ／＼笑ひながら、一々忙しさうに應待して居た。

奥州あたりから、東京に出さへすれば、何んな仕事でも自分を待受けて居ると思つて、遙々と出て來たらしい洋服の男は、「新聞配達でも遣りませうか」と云つて、淋しさうに笑つて居た。

東京へ出さへすればと云ふ「東京病患者」は、大正十一年の今日でも、地方の若い人々の間に多いと見え、こゝに來る日に四五十人の求職者は、何れも上京してから、半年とは經たぬ者ばかりであつた。

「一二年前までは、求職者よりも、人を求める方が多かつたのですが、矢張り不景氣は爭へませんね。それでも女中だけは、雇ひたい方が多くて、女中になる人の方が少いのです。女は何んな事をしても、食つて行けるのですけれど、男の方はなか／＼六つかしいので困ります」



（救世軍無料職業紹介所）

主任の大森さんは、次から次へと來る求職者を相手に、落着

いて話をする暇も無いやうに見えた。山室軍平氏の救世軍の爲事が、世間の一部から何んな反感を蒙つて居るにせよ、この無料職業紹介所の光景を見ては、誰しも感謝せずには居られぬやうな氣持がした。

十三　無料宿泊十五錢

無料宿泊所は、この紹介所の二階に在つて、三十疊一室と十疊二室の三室から成つて居た。困つて居る者を、無料で宿泊させるのは、その主眼とするところであるが、反つて怠惰の惡風を助長するやうな傾向も見えるので、宿泊者からは、一夜十錢を徴收することになつて居た。そして十月十五日から、蒲團を一枚増して、一泊十五錢と云ふことになり、一人一泊制度で、滯在宿泊は許さぬと云ふ話であつた。

木賃宿に泊つても、二十錢から三十錢を拂はねばならぬ世の中に、二枚の蒲團で十五錢とは、これ以上に安價な木賃宿は無いのであつた。下等な木賃宿のやうに、蚤や虱や惡臭も無いし、四邊も騷がしくはなく、落着いて眞に休息の睡に入ることが出來るのは、何よりの幸福であるやうに見受けられた。乞食や、老衰者や、病人や、酒飲みは、何んなに可愛相でも宿泊させず、「働いて食ふ」と云ふ心掛けの男のみを泊めて居るのも救世軍としては、當然の要意なのであつた。

「御覽の通り室内では、莨も吸はせぬやうにして居るのです。さうして何時までも、こんな所に居るやうでは、折角、泊めてやつても無意味ですからね、宿泊者には少しでも貯金をさせて、身の立つやうに仕向けて居るのです。氷の運搬をして儲けた塚田作作と云ふ男は、一夏に四百八十圓も稼ぎ貯めて、こないだ歸國しましたが、土方の福島三郎と云ふ男は、二百五十圓も貯めて居ます。三十四人の宿泊者で、千二百七十四圓三十錢、一人平均三十七圓四十八錢弱の貯金ですが、その日稼ぎの人達でも、妙なもので、少しでも貯金が出來ると、恒心がきさすらしいのです。連續宿泊は許さぬと



(救世軍無料宿泊所)

とにしてありましても、事情の許す限りは泊めてやつて、その人達の浮かぶ瀬も、見屆けたいと思ひましてな……」

こゝに泊つて居る連中は、酒を飲まぬ眞面目な連中ださうで、同じ土方だと云つても、何處かに異つた人間の匂ひがすると、主任の人は語つて居た。神田三崎町の天理教のそばの交番の前で、毎朝、勞働者の市が立つので、宿泊者は大抵そこへ出かけて、一日の仕事に有り就くのであつた。そして淺草橋向ふの河内屋と云ふ飯屋で、朝晩の食事をするだけの男は、日に二圓内外の金を稼ぎ貯めるに、さう骨は折れぬと云ふ話であつた。

「湯も毎晩湧かしますし、……本人の心がけ次第では、何時までも沈淪して居なくて宜い筈ですが、そこのところが、何うもうまくゆかぬのですな」

と、親切で人の好さ相な主任は、二三人の求職者を相手にしながら、笑顏を見せて語つた。たゞ安い金で、宿泊させるだけでなく、出來ることなら勞働者の群にも、神の福音を傳へたいのが、救世軍の本旨であらうけれど、遮二無二露骨に遣らずに、遠巻きにして世話をして居るらしいのは、宜い思ひつきであると思へたりした。

「晩の八時ごろに、も一度來て御覽なさい」と云はれたので、私は其の日を淺草で遊び暮し、夜の九時頃、再び宿泊所へ行つて見ると、お客様達は大抵歸つて來て、中にはもう蒲團の上で、大きな鼾を立て居る者さへあつた。男の肌いきれで、妙な匂ひは漾つて居ても、とても木賃宿のやうに、陰慘と云つた氣分はなく、合宿者と云つた氣持の方が、多いやうに見受けられた。彼等の多くは、斯うして救はれて居ると、早計に斷言は出來ぬけれど、救世軍の斯る對世間的の仕事に、格別の意味があることだけは、私にも合點されるのであつた。

「人間は何んなにしても、雨露だけはしのぎ得るものだ。いや、人間は何んなになつても、雨露だけはしのげるものだ……」

と云ふ氣持が、又しても深い思ひ遣りとならずに、安らかな心地をさそふのであつた。

「何處に、どん底の悲慘味があらうぞ。彼等は實に、安らかなのである……」

私には、さうも感じられるのであつた。

十四　四十八軒長屋に

けれども其の翌日、下谷山伏町三十七番地の四十八軒長屋を訪れた時には、貧しい人達の姿を眺めて、自分自身の幸福を思ふやうな、さうした自己慰藉の氣持に、獨り合點することは出來ぬのであつた。「まだ〱、もつと悲慘な生計をして居る者

が、この世の中には多いに違ひない」と、强て眼前の光景を、「何でも無い」事のやうに觀やうとしても、餘りに氣の毒な廢殘の人々が、その四十八軒長屋には、棲で居るのであつた。

流行唄の作者としても、その唄の讀賣の本家本元としても、常に弱者の味方であると云ふ意味からも、社會の一部に其の名を知られて居る長髮の添田啞蟬坊君は、實に此の長屋に住むこと十年の猛者なのであつた。業平町の木賃宿で逢つた時の約を履んで、朝早く彼の住家を訪れると、朝風呂から歸つたばかりの彼は、漆のやうな長髮を梳りながら、ニコ／＼と迎へるのであつた。入口と云つては、一疊の板間になつて居る臺所で、そこには彼の息子の若い細君が居て、大きな釜で栗を茹て居た。米屋の路次を入つた左手の、更に幅三尺しか無い狹い小路の左側の五軒目で、下駄を脫いであがれば、表の溝の板の上が、恰度、玄關口と云ふ恰好になるのであつた。

それでも啞蟬坊は、極めて平然たるもので、四疊半一室しか無い座敷の中へ、私を招じ入れるのであつた。狹いその四疊半も、疊半分だけが押入になつて居て、殘りの四疊には長火鉢や、机兼餉臺や、小い本箱が置いてあつて、二人が長火鉢を中に差向いに座れば、もう少しも餘裕が無いのであつた。それに四方には棚が吊つてあつて、棚の上には本や雜誌が山のやうに積であり、壁には主人公の黑い二重マントや、若い細君の他所行きらしい衣服が掛けてあつて、南の一間ほど明いた窓とも何とも形容の出來ぬ明り取りから、朝の陽がギラ／＼と、漸く射し込むで居るのであつた。風流を解する主人の優しい心掛けなのか、僅に開いた南の疊の外には、鉢植の松や紅葉などが五六鉢、塵埃を浴びたまゝ並べてあるのが、この殺風景な貧居の中に、一脈の自然味を偲ばせるのであつた。この四疊半の一廓が、獨身の啞蟬坊と、息子夫婦の雨露をしのぐ住家であると共に、雜誌「民衆娛樂」の編輯局でもあり、發行所でもあるかと思ふと私は何とも名狀し難い沈んだ氣持になるのであつた。



(四十八軒長屋)

貧乏に馴れて居るらしい啞蟬坊は、此の長屋者に不似合な銘

仙飛白らしい袷衣に、大島まがひらしい羽織を着て、鼻下の髭もピンとした端麗な容姿で、「この長屋に住むこと十年」の物語を初めるのであつた。或る意味に於いては、日本に於ける新民謡の先達と云つても、さう誇大ではなく、また巷に哀音のリズムを流す路傍音楽家と云つて宜い唖蝉坊は、有福に暮して居た田端の家を去つてから、十年の長きを此の長屋に起居しながら、諷刺と嘲笑と諧謔と皮肉とを、起伏する世相の波に投げて居るのであつた。貧窮の困惑に洗煉され盡した彼は、生活苦の上に超越した聖者のやうな表情をだゝへて、冷熱相半したやうな口調で、四十八軒長屋を説くのであつた。

「十年前は家賃が月一圓八十錢で、六錢づゝの日掛けで取つたものなんです。古くから居る者は、今も敷金無しですが、家賃は四圓五十錢となり、六圓の家もあるのです。新しく住む者は、敷金が二十圓ですが、何うです、こゝでも疊一枚が一圓ですよ」

同じやうな四疊半の家が、一棟に十二戸づゝあつて、それが東西に四棟列んで居るので、四十八軒長屋と云ふのであつた。通路を合して二百八十坪の中に、四十八軒の世帯主が住で、上野と淺草と吉原との中間に、特殊の部落を構へて居るのは、何と云ふ現象であらうか。唖蝉坊の家がこんな風であるのに、他の四十七軒はまだこれよりひどいと云ふに至つては、實地を一巡せぬ前、既に私は胸の疼くやうな氣持がしたのであつた。

十五　添田唖蝉坊の話

「十年の間に家主も轉々して、三人ほど變りましたが、今は十二階下の銘酒屋の金持で、前原浅次郎と云ふ人が所有して居るのです。何しろ四棟で八百圓と云ふ當時の賣買相場が、三千五百圓で新家主の手に入り、修繕や何や彼やでは、小一萬も出て居るんですからね。十年前には入口の廣場で、空箱を伏せて臘燭を立て、例の露天賭博と云ふ奴を遣つて居ましたが、從つて人氣も粗暴でしてね、當時の入谷警察には、度々厄介になつたものでした。貰ひ下げに行く役目は、何時も私がして居たのでしたが、責任を負つて賭博は一切遣らせませぬと引受けても、まだ室内では遣つて居たものでしたよ。それに日掛けの家賃なども、一年から滯らせる者で居て、家主も實は並大抵のことで無かつたでせう。鬼高利貸として有名な入山と云ふ奴が、家主になつて居た時代には、よし、俺が荒療治をして遣るとばかりで、家賃を拂はねえ奴は出て行け、出なけりや斯うだと、大勢の仕事師を引張つて來て、家根をメクり初めたものなんです。恰度お正月前でしてね、私達の方でも、

そんな無法な家主には、家賃を一錢も拂はぬと云ふ同盟をつくつて、前の空地でドン／＼火を焚いて、入山に對抗戰の火蓋を切つたものです。救世軍の愛隣館に居た加藤大尉も、私達に應援に來てくれて、演說をやる、怒鳴る、叫ぶ、それはそれは大變な騷ぎを遣つたのです。家主側から談判に來やうにも、警察から取鎭めに來やうにも、入口には荷車や空箱を積で、長屋內へは一歩も入れぬと云ふ强腰ですから、たうとう三年の間と云ふもの、合同して一錢も家賃を納めずに、睨み合を續けたのですよ。それで、さすが强慾な家主も閉口して、他へ賣渡すやうになり、改めて坂本署の人事相談係も仲に入つて、やつと解決したのですが、一時は借家人の自治會を組織して、お互の心持を改良することにも努力をしたものです。今は此の啞蟬坊も、變態な差配人と云ふ格でして、月々の家賃は私の手に集めて、家主の方へ納めるやうにして居ますが、こゝを逃げ出しては、改革が出來ぬと思つて、ついつい長い間、居着いてしまふやうになつたのです。浪六の小說は八軒長屋ですが、こゝは四十八軒長屋ですからね、長い間にはいろんな小說的の出來事がありましたよ……」

啞蟬坊は一氣に斯う云つて、思ひ出に昂奮したらしい呼吸づかひを見せるのであつた。そして此の長屋を觀た人は、十中の八九まで、餘りにみじめな生活振りに、驚嘆するやうであるが、この長屋にも住むことが出來ずに、日暮里や三河島のより貧しい部落に落ちて行く者が、少くないと云ふ話であつた。世間の一部には、貧しい者だと云ふと、性來が懶惰であつて、眞面目に稼がうとしないだから……とやうに解して居る人もあるらしいが、人生のどん底に沈んで行く者の多くは、稼がうにも稼ぐことが出來ないほどに、困憊して居ることを考へて欲しいと、啞蟬坊は涙をうかべて說くのであつた。

「あなたは銅山の飯場よりも、木賃宿よりもひどいと云つて、吃驚されるけれど、まだ此の下にも、どん底がありますよ。信仰に安んずることも出來ないし、哲學に大悟することも出來ないぐらゐのことは、彼等の問題では無いのです。もつと／＼切實な、食ふことと、着ることのために、彼等は現實から一歩も離れることは出來ないのですからね。そこを見て貰はなくては……その心の生活を觀て貰はなくては……」

添田君は斯う云つて、長屋中に私を引張り廻してくれた。ブリキ屋根のボロ／＼になつた粗末な棟割長屋の下にも、親子の愛があり、夫婦の情があり、兄弟の誼があることを思ひながら、私は默つて啞蟬坊に從いて歩いた。狹い溝板の上には、僅に午前の陽の光がおとづれて、七八つの女の子が二三人、貧し

さに窶れもせずに、可愛らしい笑顔を見せて居た。

十六　生んとする努力

蜩蟬坊の隣家は、この長屋に十七年も住で居る池田と云ふ老人で、二十七になる息子は玩弄の製造を職とし、本人は様々の袋貼を業として居た。由緒あり氣な相恰で、小さい粗末な鼠入らずの上には、長屋に不似合らしい置時計が、不如意な生計の苦勞を刻んで居た。

「一方口で、南の方は壁になつて居るのですが、一日中、陽の目が拜めなくては困るし、衛生にも悪いのでね、自分で壁を壊して、破れ障子を入れたのです。これで何うやら仕事も出來ますが、舊の儘だと鼻をつまゝれても、判りつこ無しでさア……」

老人は斯う云ひながら、糊で汚れた前掛の下から、痩せてくろい膝小僧が出るのを、氣にするやうな顔をして居た。岡田安次郎と云ふヨボ〳〵の老車夫は、頼り無いたつた一人きりの暮しであるが、近頃では四圓五十錢の家賃も心細いとて、同じ車夫を同居させて居た。體の力で車を曳くと云ふよりも、老さらばつた姿を不憫と思つてか、車坂界隈に出る夜なしの折々には、思はぬ憐れみを受けることもあると、低い聲で語つて居た。

袋貼、古物買、こはし屋、清潔屋、車大工、鋳掛屋、活版職工、按摩、よなげ、手傳、車夫、荷車曳、下駄直し、蠟燭の垂れ買など、その職業も様々であつた。六七人の大家族が、四疊半一室に重なるやうに、縦に居る家もあれば、同居人を置いて狭い中に、雜居して居る者もあつた。蜩蟬坊の住で居る側は、壁さへ落してしまへば、朝のうちだけでも南の陽を受けることが出來るけれど、その前通りの家は地が閉がつて居て、屋内は晝でも眞暗に見えるのであつた。更に北の通りへ行つて見ると、南は壁になつて居て、北の一方口であるため、一層、夜のやうな暗さであるが、その中で男や女やは、腰卷一枚に襦袢一枚と云ふ姿で、手仕事をして居るのであつた。

それでも不思議なことには、これぞと云ふ病ひもなく、傳染病なぞも滅多に出ないさうで、何れも貧しく虐げられて居ても、健康だけは保つて居るのであつた。車大工の一人は、熱心なクリスチヤンで、この長屋の聖人と云はれて居るさうであるが、稀に見る貧しい人の信仰でも、神は現實の生活に、何の償ひも投げぬのであつた。そして此の長屋に住で居る人達は、互に貧しいと云ふことに結びついて、その貧しさをあきらめるでなく、何とかして貧しさから脱けやうと、たゞそれのみを樂しみにして、生きて居るのであつた。屈托や嘆息はあつても、失望もせず、落膽もせずに、その日〳〵に笑顔を見せることだけ

は、互に努めて居るのであつた。窮極の貧しさに落魄して居ても、同じ道連れが澤山あると、「でも、自分の方がましだ」と云ふ果敢い慰藉を得て、その自慰の上に、生存を續けて居るのであつた。私はさう云ふ風に眺め、さう云ふ風に解して、暗く沈んだ心持を、強て明るい方へ向けやうと、人知れずあせつたのであつた。

「公設市場とか、簡易食堂とか云ふものが出來て居ますけれど、此の長屋とは沒交渉なんですよ。昔は二錢で炭を買ふと、それで一日はしのげたものですが、今は何うして何うして、普通の世の中と同じやうな暮しを立て居るのです。貧民長屋も面白いな、簡易生活が出來るから……と思ふかも知れませんが、官吏の遣つて居る社會的施設なんか　私達とは更に交渉が無いのです」

添田唖蟬坊は斯う云つて、慨然たる表情をした。「生きられるだけ生きねばならぬ」と云ふ生活の努力は、如何なる階級の如何なる人々の上にも、共通した運命であるにしても、それが四十八軒長屋の人々にとつては、雜遝でもあり、苦痛なのでもあつた。その雜遝と苦痛とに正面しながら、貧窮の上に超越したやうな、熱を含んだ冷たさを見せて居るのが、好漢添田唖蟬坊なのであつた。

「おかげ樣で、いゝ學問をしました」

と、たゞこれだけの挨拶では、私の氣持がピッタリと、言ひ表はせないことを承知しながら、私はさう云つて、四十八軒長屋を辭去したのであつた。

十七　十二階下の今昔

「これから此の足で、十二階下へ行つて見やうと思ふのです」と云ふと、添田君は「私も今日は用事が無いから、一緒に參りませう」と云つて、二人連れ立つて初冬の白日を、十二階下へ出かけることになつた。淺草の十二階下、私娼窟、闇に咲く白粉の花、「淪落の女」――私にとつては、實に十年振りで、思ひ出深い他郷へ、旅するやうな心持であつた。

それから後、十年の間、月に二三回づゝは、必らず淺草公園へ出かけたけれど、十二階下の古巣へ滑り込むのは、全く其の日が絶えて久しい十年目なのであつた。大正五年に撲滅されてから後、造花屋と變つたり、繪葉書屋と化けたりして、極く少數の者が、銘酒屋時代の營みを續けて居たと云ふことは、傳へ聞いて居たけれど、實際、一歩も其の場面の中には、足を踏込んだことが無いのであつた。從つて、今日の十二階下が、何んな風の形體に變り、何んな風の内容に化つて居るか、添田君にでも

連れて行つて貰はなくては、全然、見當さへもつかぬのであつた。

私が「淪落の女」を書いた頃の十二階下は、東京に於ける私娼全盛時代の本據として、最も榮え賑はつて居た。その頃は市内の何處へ行つても、怪し氣な小料理屋や、素人屋とも待合ともつかぬ曖昧な家があつて、殆んど大ビラに、賣春行爲が行はれて居た。日本橋の濱町、蠣殼町、中洲にも、早稻田鶴卷町一帶の地にも、麻布笄町の低い小路にも、澁谷道玄坂の横町にも、築地にも、新橋にも、愛宕下町にも、溜池にも、本郷にも、神田にも、小石川にも、本所にも、深川にも、東京市内は何處へ行つても、私娼全盛時代の光景を現出して居た。公娼廓の吉原に近い十二階下一帶の地域にも、八百七十五軒の銘酒屋と新聞縱覽所とがあつて、そこには千六百九十二人の私娼婦が、世の光の蔭に隱れて、鼠鳴きをして居たのであつた。

五區の俗に御堂裏と云ふ觀音堂の裏手や、六區の俗に活動裏と云ふ三友館、キネマ倶樂部などの裏手にも、銘酒屋又は新聞縱覽所と云ふ名前の下に、數多くの賣笑窟があつたけれど、それは大正五年の「私娼撲滅」で、全く一掃されたのであつた。そして現在では、千束町二丁目の十二階下に、それも前よりは區域を狹められて、僅に殘存して居るに過ぎないと云つても、其の存在性は極めて根強く執拗であつて、撲滅の火の手にも、容易に避易しないのであつた。造花屋に化けたり、繪端書屋に變つたり、煙草屋に早變りしたりして、遂に今日では昔のやうに、銘酒屋時代そのまゝの雰圍氣を、醱酵して居るのであつた。内閣が更つたり、警視總監が更迭したり、當局の手加減に緩急の差があつたりして、公娼制度や賣笑婦問題に關し、縱に貫く一國の政策が確立して居ぬため、彼等は其の空隙に乘ずる機會を得て、次第に存在性を强調して來たのであつた。「實に厄介千萬な一群だけれど、警察の力ぐらゐでは、何うにもすることが出來ない」斯う思つて、たゞソツとして置かうと云ふのが、今日の氣休めらしくも、眺められるのであつた。


(十二階下の私娼)

「今日の公娼制度を、根本から革新しない限り、私娼の存在を絶滅するなんて、それは官吏者流の空想に過ぎませんよ。風俗とか衛生とか云ふ實際的の問題よりも、もつと大きな性慾の問題に觸れずして、何うして私娼の絶滅が出來るものですか？」

添田啞蟬坊君は斯う云つて、私娼撲滅反對者としての氣勢を揚げるのであつた。

「全くさうですね。藝妓の賣淫行爲を默認して居る政府者に、私娼問題は荷が勝ち過ぎて居るのです。公娼制度に多少の改良を加へたと云つて居ながら、今日の體たらくとは、何と云ふ醜態なんだ……」



（十二階下の私娼）

私も斯う云つて、觀音劇場の横手を、十二階下の方へ入つて行つた。今日の「十二階下」では、何んな女が何んな風にして、何んな氣分を漾はせて居るか？私は當面の光景を見て、感慨に耽りたいのであつた。

十八　私娼四百五十人

「先生、寄つてらつしやいな……」

と、何處でも啞蟬坊の姿を見かけると、白粉をコテ／＼塗り立た女達が、低い聲で呼込むのであつた。風呂の歸りや、買物の歸りらしいそれらしい女達も、添田君の顏を見るとニコとして、默つて頭を下げて行き過ぎるのであつた。路傍の音樂者として、彼等の胸に一脈の哀音を傳へて居る先生は、十二階下の何處を通つても、顏馴染が多いのであつた。

御獄横町から猿之助横町まで、その一廓には東西南北に小路が通じて、小便横町だの、忍横町だの、松の湯前だの、トンネル横町だの、田中新道だのと、狹い一間道路が交叉して居た。平野とか寶木だとか、山下とか蔦本とかした丸い軒燈の出て居る家は、入口にガラス障子が入つて居て、兩眼が出るだけ横に細くあけた他は、何れも硝子を紙貼にして居るのであつた。そして正午を過ぎたばかりであるのに、中には化粧した女が一人

二人居て、極めて低い聲で「ちよいと、ちよいと」と呼んだり、又は例の鼠鳴きをして、犬の子のやうに迷ひ歩くぞめきの男に遠慮勝の誘惑を浴びせかけるのであつた。

「日曜日には午前十一時頃から、ひやかしが入り込むのですが、平生は活動のハネた夜の九時十時頃が、一番雜踏するのです。昔はちよいが一圓か一圓五十錢、泊が三圓ぐらゐでしたが、今は二三圓がちよいで、泊になると五圓乃至十圓はかゝりますからね。十二階下も安くはありませんよ」

と、添田君は説明してくれた。千束町二丁目だけで、三百軒近い銘酒屋の中に、現在は四百五十人の女が居て、不景氣の風は何處を吹いて居るかと云つたやうに、朝から晩まで激しい色香の勞役に、泣いたり笑つたりして居るのであつた。五十幾歳になるお蓮と云ふ婆さんも居れば、全身に龍の刺青をした入れ墨お君と云ふ女も居るし、良家の夫人のやうに、大丸髷に結つた美人のお種、女學生風の耳隱しで評判なお芳、仇な銀杏返しのお花、頭を中央から分けた二十前後のお琴などは、何れも指折りの女であつた。色の淺黑い肌に白粉のノリ惡い下品な女や、田舍から出たばかりらしい無智な女や、瘦せたのや、肥つたのや、晝は殊に四邊が殺風景なだけに、女の姿も醜劣で、誰も彼も斯うした境涯を、樂んで居るやうな表情には見えぬのであつた。

「二軒、入つて見ませう」

啞蟬坊に案内されて、私は三四軒の家に呼込まれて、十二階下の氣分なるものに、久し振りに觸れて見たのであつた。最初の家は二室しか無い狹い家であつたが、小柄な瘦せた政ちやんと云ふ二十五六の女が居て、主人らしく取なして居た。十六七の雛妓らしく見える娘は、此の家に來たばかりの初々しさで、茶を汲んで來たが、こんな若い割合に純な女の子も、一月か二月か經つうちには、男の肌に荒みきつて、阿婆ずれたものゝ言ひやうをするやうになるのかと思ふと、私は何だか可愛想な氣持がした。男が惡いとか、世の中が惡いとか、自分が不量見だからとか、いろいろに云つたところで、若うしてこんな所に落ちて來る女は、不幸に違ひ無いのであつた。

「君は何と云ふの……、こんな所に出なくても、カフエーの女になつたつて、生きて行くことは出來さうなものだのに……」

斯う私が云ふと、添田君は、

「そのカフエーから、落ちて來た女なんですよ。この人は……須田町の兎料理に居てね、色戀には何うして〱、達人なんですよ。君は學生の人と、熱烈な戀をしたのだらう」

と云つて、その若い女の顏を凝視るのであつた。悲しいとか嬉しいとか思ふ暇も無いほどに、あはたゞしい氣持で、數々の男

から男へと移つて行く女の境遇は、淺間しいなど云ふ言葉では形容しきれぬほどに、むごたらしいみじめさが見えるのであつた。

それでも女自身は、割合に安らかな氣持で、ノホヽンに構へて居るやうにも感じら　た。

十九　タイムイツマネー

二軒目の家には、田舍者らしい丸ポチャの十八九が居て、二階に上つたり下りたり、其のうちから一二組の客が立こんで居た。

「先生、お連れさんですか。あがり花でも付して、一服してらつしやいな……」

瘦せた女將らしい女は、添田君に斯う云つて、長火鉢の傍に立膝しながら、やまと新聞を讀で居た。二人で二三十分も居て、茶を一杯づゝ飮で、五十錢札一枚置いて出る私達は、ほんとの客では無いのであつた。ビールに豆、淺漬でも取つて、女を相手にしなくては、お客樣とは云なれぬのであつた。

それでも不思議なことには、「寫眞を撮つてやらうか」と云ふと、何んな女でも「えゝ、寫して頂戴……」と云つて、小型カメラの前に來て、しなをつくつて坐るのであつた。紅白粉をつけて、割合に派手な着物を着て、男からチヤホヤ云はれるのが、女達は心から嬉しさうなのであつた。紡績の女工になつて、綿屑の中で立働いたり、看護婦の見習になつて、陰氣な病人や藥臭い中に、忙しく立廻るよりは、朝湯日化粧の方が、かうした女達には、幸福に感ぜられて居るのであつた。

三軒目の家は、割合に待合らしく整つて居て、女も美しいハイカラが二三人居た。金龍館あたりの女優〳〵した十八九は、雪江と云つて眼の大きな子で、派手な女仙メリンスの袷衣も羽織も、シツクリと調和して居た。

「お一人が三圓ですわ……、大に安いぢやないの。よウ、お遊びなさいよ、遊んでらつしやいよウ。私達はタイム、イヅ、マネーなんですもの、同情して下さいな、悲慘な運命に……」

女はこんな事を云つて、白い笑顏を見せるのであつた。

「タイム、イヅ　マネーか、君はほんとに正直なことを云ふね。全く近頃の十二階下は、どいつもこいつも、タイム、イヅ、マネーになり過ぎて居るんだ。昔のやうに遊びの氣分とか、情趣とか云ふものは、藥にしたくも無いのだからね。たゞ少しでも餘計に、金さへ貰へばそれで宜いと、營業者の方でもあせつて居るし、女の方でも金が大眼目なんだ。それが極端過ぎるからね、僕のやうに十二階下をヒイキにする者でも、つく〴〵厭になつてしまうのだ……」

添田君は斯う云つて、十二階下の氣分が金本位に變化したことを、餘りにアツ氣無いと慨嘆するのであつた。

「でも、そりや無理だわよ。少しでも澤山の金にたらなくては、誰がこんな、婦女子の貞操を安々と、男子の前に提供するものですか。金は澤山出さないし、美しい女は自由にしやうでは、そりやア、あなた、横暴と云ふものよ。でせう、さうは思はないこと……」

「横暴はいゝね、横暴、横暴、男横暴、女横暴、十二階下横暴で、怨みッこは無いから、それでいゝぢやないか……」

「……だからさ、遊んでつて頂戴な。お二人でたつた六圓ぢやないの、僅に六圓だわよ」

「六圓は何うでも宜いが、また、夜おそく遣つて來るよ。晝日中、馬鹿〱しい、それこそ性慾の横暴と云ふものなんだ……」

「憎らしいわね。では、お歸んなさいよ、ちやんとお茶代を五十錢置いて……。今度は夜分に、是非ね、お待ちしてるわ……」

私達ではこゝでも、五十錢札一枚を置いて、左樣ならをしたのであつた。婦人公論ぐらゐは讀みさうな女が云つたやうに、現今の十二階下の氣分は、タイム、イヅ、マネーと云ふ言葉で盡されて居るのであつた。彼等は一日一夜に、少い時でも五六人、多い時は十四五人から二十人ぐらゐの客を取つて、平然として居るのであつた。營業者の慾張り根性は、當然の事であるにしても、前借や分けで稼いで居る女達までが、「時は金なり」の心持に動いて居る事實は、想像の他なのであつた。

私達は何時の間にか、不愉快な沈默に落ちて、その家を立出たのであつた。

廿　金齒の時ちやん

料理店のみまきの通りには、好い構への家が軒を列べて、もう入口に盛り鹽をして居る家などもあつた。そこは同じ十二階下の中でも、最も上等の部ださうで、女達も都會風に洗練されたらしい艶めかしい姿をして、出たり入つたりして居た。

東京府を筆頭として、千葉、埼玉、栃木、神奈川、茨城、新潟、宮城、福島、群馬、靜岡、愛知、富山、秋田、長野、山形、山梨、石川、三重と云ふ風に、女は各地方から、集つて來て居るのであつた。看護婦をして居たもの、紡績の女工を稼いで居た者、女中や酌婦をして居た者、藝妓、娼妓に出て居た者などが、何處から何う云ふ風にして、墮ちて來るのか、その一人〱に就いて調べたならば、何れも相應の經路を辿つて居ることであらう。極く少數の淫奔な性の女を除いては、心弱い行路の惱みに喘いだまゝ生きねばならぬと云ふ切迫つまつた身の果を、

十二階下に酣して居る者が多いのであつた入つて行つた四軒目の家には、山の手のカフエーに居て、添田啞蟬坊や小池夢坊などゝ顔馴染になつて居た女が、びつくりしたやうな表情をして、淋しさうに微笑むのであつた。

「おウー君はこんな所に來たのか……」

「まア、添田さん……私、どうしませう」

「驚いたねえ、十二階下に居やうとは……」

「……でも、しかたがないわ、運命ですもの……」

「何時からなんだ、その運命は……」

「八月の末からよ、こんな家に來たのは……」

「男を欺したむくゐなんだね」

「しどいわ、添田さん、同情が無いのね」

「同情はあるけれど、びつくりしたね」

「私、あなたや御連中を社會主義者だと思つてましたわ」

「ところが讀賣の先生で、驚いたらう」

「いゝえ、別に驚きもしないわ。私ね、いろいろの事情で、たうとうこんなになりましたけれど、もう直ぐやめちまいますわ」

「それが宜い、早くやめてしまう方がいゝね。だけど、一度この中に來た人は、大抵二度か三度は、また舞戻るよ……」

「さうでせうか。……でも私、大丈夫よ。きつと、浮びあがつて、見せますわ」

「昔は僕も、君を可愛い人だぐらゐには、思つたこともあるんだが、こうなつてはしかたが無い。ま、大に奮闘するんだね」

「そして、お金を儲けて、可愛い男に入れあげるんですか……。あゝ厭だ、厭だ……。つく〴〵世の中が厭になつちますわ」

山の手のカフエーに居て、若い學生連中にチヤホヤ云はれて居た此の女、金歯の時ちやんは三田の文科の學生と關り合つて、彼れ是れと評判になつて居た。愛知縣生れの悧怜な質で、色白の丸々と肥つた、眼に一種の魅力をたゝへて居るのが、青年の血を唆つたらしかつた。しまひには其の學生に貢ぐために、着物は賣飛ばすし金は借ると云ふ風で、欲張な名古屋女に似合はず、餘りに其の學生に傾倒した爲め、遂に十二階下の小路にまで、墮ちねばならぬやうに、行つまつたのであつた。廣い東京には、斯うした女を狙つて居る誘惑の魔の手が、常に各方面へ延びて居て、金と云ふ甘い汁で、それも僅に百圓か二百圓の金で、何の造作も無くお時のやうな女を、ズル〳〵と深い泥水の中へ、引ずり込むのであつた。一度、この中へ落込んだが最後、さう易々と浮び上ることは出來ぬやうに、いろんなものが溺み

付くことを、多くの女は知らず識らずに、次第に深所(ふかみ)へ沈み行くのであつた。

今の十二階下が、待合風に進化して居ることや、暗い感じは割合に少くて、昔よりは明るくなつたことに、私は軽い驚異を覺えながら、六區の方へ歩いて出た。そこには芝居や活動寫眞や安來節が、歡樂の渦を卷いて、カラリと變つた氣分の中に、人々の心を浮き立たせて居るのであつた。

「金龍の時ちやん」の存在などは、何時の間にか忘れて居る私なのであつた。

廿一 賣娼政策の確立

十二階下の他に、向島の白鬚から行く玉の井新道にも、龜戸の天神附近にも、新しい私娼窟が出來て、昔の十二階下界隈を見るやうな、陰慘な場面を展開して居た。東京を追はれた私娼の群は、一滴こぼしたインキの汁が、吸取紙の四方へ散るやうに、群馬、栃木、千葉、神奈川と云ふ風に四散して居たが、何時の間にかまた東京へ舞戻つて來て、龜戸や玉の井の場末町に、ヒヨツコリと其の姿を現したのであつた。

柳島の終點から橋を渡 て、右へ溝川に沿つて行つた活動寫眞館の周圍や、天神の裏手あたりが、龜戸の私娼窟であつた。十二階下を追はれた銘酒屋が、八九年頃の好景氣時代に乘じて、その羽翼を延ばした場所柄だけに、一時は非常な勢ひで、繁昌を呈して居た。今日でも活動寫眞柳島館の周圍の柳島新地、千百六十一番地の一帶には、七十七軒の銘酒屋があり、天神界隈の遊園地、三千七百番地の一帶には、百九十軒の曖昧屋があつて、四百人内外の女が、暗いジメ／＼した中で、盛に魔風を漂よはせて居るのであつた。

玉の井新道は、小料理屋風であるが、龜戸は素人屋風や銘酒屋風が多く、價も十二階下よりは安く、ちよいが一二圓、泊が三四圓と云ふ話であつた。家も構へも大抵は下等でみすぼらしく、女も十二階下などの比ではなく、一層みじめな、どん底らしい氣持がした。警察では根本から、その絶滅を期することが出來なくて、毎夜のやうに正服や角袖を辻々に派し、時に依つては出入する浮かれ男を、誰何して居るさうであるが、斯うした性慾機關の存在は、容易な手段では、絶滅することが出來ぬのであつた。營業者の方では、組合の事務所まで設けて、結束して營業の興隆を計るなど云ふ、こゝ睨み合の姿で以て、對立して居る形に見えるのであつた。

今年の春の議會で、憲政會の代議士横山勝太郎君が、公娼制度の廢止を建議した委員會の光景を、私は暗い龜戸の小路を歩

きながら、思ひ起したのであつた。政友會の代議士で何とか云つた老人も、大に現公娼制度の非を鳴らし、國民黨の植原君や、政府委員の松田源治君なども、笑ひながら議論して居たことが、胸に浮かんだのであつた。鐵道網だとか升格案だとか云ふと、彼等は互に鎬を削つて、血眼になつて騒ぎ廻るのに、此の重大な賣笑婦制度に就いて、彼等は何故にノビ〳〵とした氣持になつて、敵も味方も笑顔で話して居るのかと、私は腹立しい氣持がしたのであつた。「政府も此の制度に就いては、決して無關心ではありませんが、現在の公娼制度を廢止しやうとも、考へては居ぬものです」などゝ、松田君が云つた言葉には、何の要意も無いらしい響がした。地方〳〵の風俗や習慣に依つて、制度の運用にも差別があつて、此の一國を貫く賣娼制度が確立して居ぬとは、何と云つても慨嘆すべき事實なのであつた。

「警察官は氣の毒である。一生懸命になつて取締つたり、撲滅しやうとしたりしても、新時代に適應した根本の賣娼制度が、少しも確立して居ないのに、何うして枝葉に渡つた其の日暮しの仕事が出來るものか。町の辻々に巡査を立たすなど、何と云ふ拙劣なことであらう。そんな事をする暇には、檢黴でも勵行して、税金でも高く取ることを考へた方が、何んなに利巧であるか知れない……」

私はこんな事を考へながら、溝川の周圍を一巡した。十月二十何日と云ふのに、界隈には猛烈な蚊がブン〳〵出て、コーヒーを飲みに寄つた安洋食屋の白い壁には、蚊が群をなしてとまつて居た。「十一月になつても、まだ蚊帳を吊りますわ」と、無智な私娼みたいな表情をした女給は、厭らしい笑顔を見せたりした。

「女のどん底も、こゝが底の底なんだ」

私は妙に腹立しい氣持になりながら、柳島橋の上に佇んで居た。東京の東の場末町、これでも東京の内なのかと思ふと、心持は暗く沈んで行くばかりであつた。

廿二　鬼が住む鐘ヶ淵

吾妻橋から白髭、小松島、鐘ヶ淵へ行く川蒸汽は、發動機船の曳船に變つて、一錢蒸汽時代の名殘は、何處にも漂うて居なかつた。曳船の中には、向島撮影所へ出る活動寫眞の女優や、紡績に娘を訪ねて行くらしい地方出の老婆や、百花園行らしい夫婦者などが居て、東京景物の一つを展べて居た。

鐘ヶ淵の汽船發着所は、紡績會社の赤煉瓦塀を廻らした裏手に當つて居て、この會社一つのために出來た發着所のやうに眺められた。大きな煙筒が二本、物凄いほど黑い煙を吐いて居

て、その下の工場では、三千四百人からの男女工が、綿屑にまみれて立働いて居るのかと思ふと、何となく暗い氣持がした。昔は千鳥も飛だであらう。杜鵑も啼いたであらう向島も、今は住宅や工場がゴタ〳〵出來て、自然の風趣などは、次第に損はれて居るのであつた。隅田川の水も氣味惡く濁つて、秋晴の明るい日であるのに、一帶の感じが何となく、薄暗いやうに見えるのであつた。

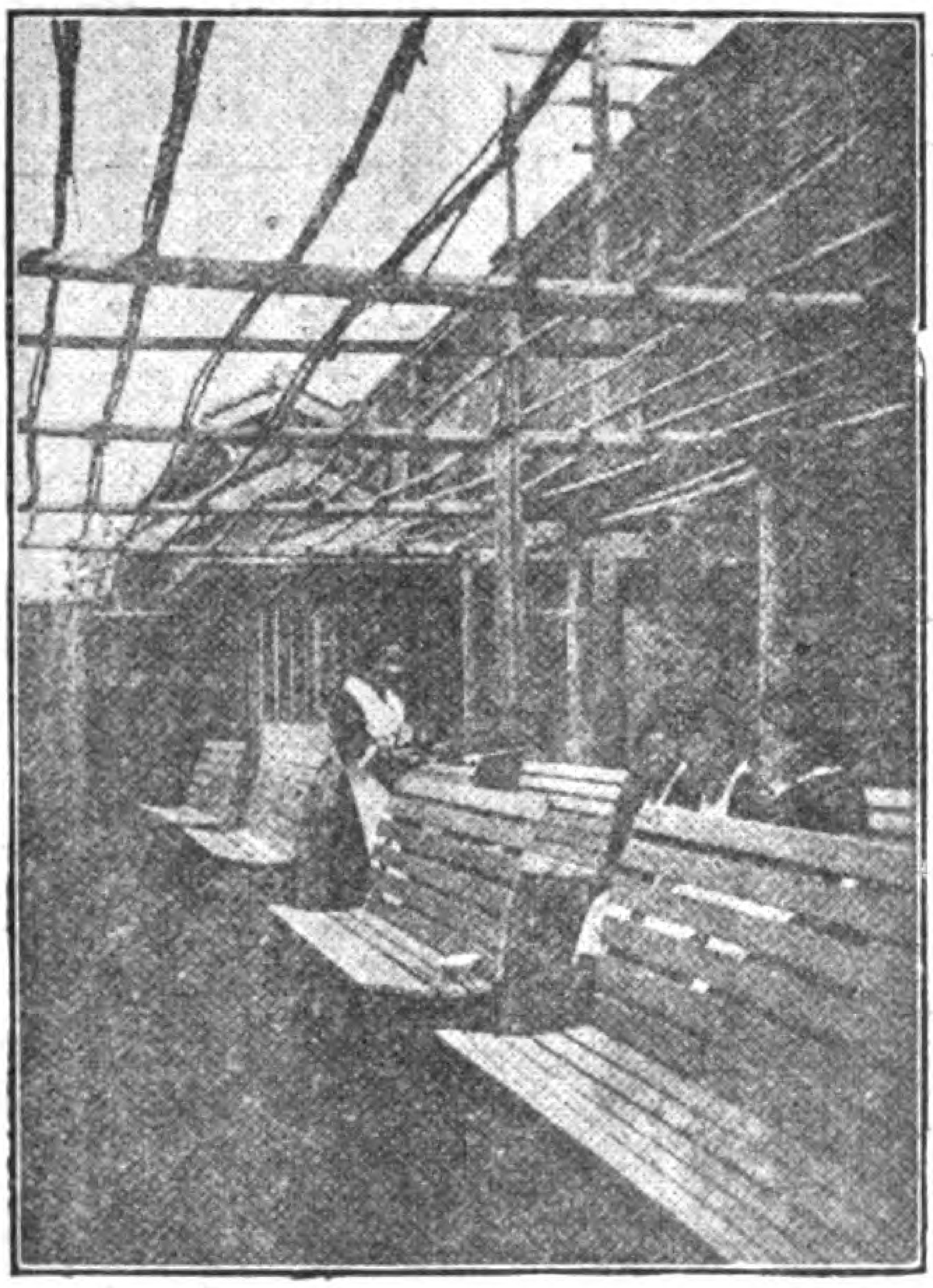
それでも、鐘ヶ淵紡績株式會社東京本店の門を入つた時、私が最初に感じた氣持は、構内の清潔なことであつた。堤の櫻並木の兩側にある社宅も、粗末なりに掃除が行屆いて居たが、會社の構内は一層、隅から隅まで掃除されて、何處に塵一つも落ちて居なかつた。紡績會社などと云ふと、入ると直ぐ綿屑が散亂して居るやうに、何となく想像されて居た心持は、第一に裏切られたのであつた。コレラの流行で、殊に敏感になつて居たとは云へ、來訪者は門衛の傍らで、桃色した昇汞水で手を洗ふなど、行屆いた要意のほども窺はれた。「女工の生活に就いて、いろ〳〵と見聞したくて參りました」と云つて、餘り血色の良くない若い受付の娘に名刺を渡すと、叮嚀に洋館の應接室へ案内されて、叮嚀にお辭儀をされるのであつた。私は生れて初めて、正面から紡績工場を訪れて、女工の生活を觀ると云ふ興味に、好奇心を躍らせて居た。

「や、初めてお目にかゝります。お名前は新聞や雜誌で承知して居ましたが、……私はこの工場の……さ、何うぞお掛け下さい」

と、やがて一人の紳士が出て來て、にこやかに應接するのであつた。工場長の多和田督太郎と云つて、五十がらみの背の高い、何となく遲塚麗水老と話して居るやうな、懷し味のこもつた紳士であつた。そして「紡績工場はお初めてゞすか」とか、「私が一々御案内いたしませう」とか、「先日、宮殿下がおいでになりました」とか、「高島平三郎さんの御講話がありました」とか云つて、いろ〳〵と打解けた話をするのであつた。鬼が住む鐘ヶ淵とか、女工誘拐の爭奪戰で、血の雨を降らした鐘ヶ淵とか、牢獄のやうな女工の寄宿舍生活とか、肺病で死ぬ女が多いとか云ふ風に、傳へ聞いて居た一種の豫期も、斯うした正面探訪では、必らず裏切られてしまうことを、私は考へぬ譯でも無いのであつた。けれども、探訪術の最も幼稚な初歩の手取早い正面突擊にも、意外の獲物は引かゝる例が、今日まの經驗に再三ならずあつた。たとへ、これと云ふ內面的の材料は摑めなくても、工場の當事者が何んな考へで、何んな態度で、女工達に向つて居るか、その一事が判るのみで、私は滿足して宜い

とタカを括つて居たのであつた。

「何しろ、社長は、徹底的の温情主義者ですからね。それも結局は、會社の利益のため……と云ふことになるのですが、對職工の設備に就いては、私どもも頭を痛めて、その十全を期して居るのです」


（鐘紡の女工休憩）

男工を男工手と云つたり、女工を女工手と云つたりして、彼等を「人」として待遇して居ることや、男工手は六百人、寄宿舍の女工手は二千三百人、通勤の女工手は五百人居ることなどを、工場長は語つた。混綿から梳綿までは男工の仕事で、煉綿から仕上げまでが、女工の受持であることや、すべては機械の力が主で、女工は其の機械を使ふ技手のやうなものだと、説明するのであつた。

廿三　正味十時間勞働

多和田工場長に案内されて、工場を巡覽した時にも、私には意外のことが多かつた。米國や伊太利から來たと云ふ板のやうに堅い綿を、男工が混合して居る工場のみは、綿屑や塵埃が、濛々と立舞つて居たけれど、その他の工場は明るくて綺麗で咫尺も辨ぜぬほどに綿屑が舞飛ぶやうな場所は、一ケ所も無いのであつた。原綿から粗綿となり、精綿となり、糸に撚られ、艶付けとなり、更に幅の廣い白木綿に織上るまで、何處にも塵埃と臭氣とは、流れもせず漲りもせぬのであつた。

けれども私の神經を強く刺戟したのは、百雷が一時に落ちて來るやうな、機械の廻轉する大音響であつた。何の室へ入つて見ても、無數の糸巻はガタ〳〵と動いて、中には一分間に百回轉も二百回轉もする速力で、ガラ〳〵ギヤラ〳〵と鼓膜を強く烈しく刺すのであつた。男工は初給が一日六十錢で、それに七割五分の割増が付いて、一日十時間勞働が一圓十錢位となり、女工は初給が四十錢で、割増を加へて六七十錢になると云ふが、何としても堪えられないのは、この音響であるやうな氣持がし

た。黒木綿の袴に藍色の筒袖を着て、頭には白い看護婦帽をかなり、足には白い長い靴下を穿いた姿は、如何にもハイカラに見えるけれど、彼の女達はほんとに樂んで、仕事に勵しんで居るか何うか、その心持の中に入つて、一々に就いて訊かねば若い女工手の心持と云ふものは、とても想像することが出來ぬのであつた。

赤や海老茶や黄の襷をかけて居るのは、上級の女工の徽章ださうで、伍長、班長と云つた格に、給料も多いと云ふことであつた。朝は午前六時四十分から、夕は午後六時までの間、午前九時に二十分、正午に四十分、午後三時に二十分と、三回に一時間二十分の休息を與へて、正味十時間働かせ、夜業の部も六時から曉の五時二十分まで、三回に一時間二十分の休憩時間を引いて十時間働かせるのであつた。晝と夜とは一週間交替で、その時二十四時と四十八時間の休みが出來るやうに、巧く差繰してある他に、一ケ月に四日の定休日が出來て居た。そして有樂座と同じやうな構への娛樂堂と云ふのが、事務室の隣に出來て居て、第一の休日は活動寫眞か芝居。第二の休日には日蓮宗や眞宗や基督教のお話、第三の休日には名士の修養講話、第四の休日には學校生徒の學藝會と云ふ風に、「爲になること」に努めて居るのであつた。娛樂堂の内部は、有樂座を疊敷にしたさうなもので、三ケ月に一回づゝ帝劇の下廻り連中が來て、飛だりハネたりして見せるのであつた。そして娛樂堂だけでは、觀衆を收容し切れぬので、裏手の大食堂に舞臺を作り、二ケ所に分れて、芝居を見せると云ふ話であつた。

夫婦共稼ぎをして居る工手のためには、三歲以下の乳兒を預る乳兒保育所があつたり、三歲以上の幼兒を預る幼兒保育所があつたり、幼稚園や尋常小學校や實科女學校や、何れも工場長が校長として、努めて居るのであつた。小學校には女の子が六百人、女學校には百八十五人の生徒が居て、紡績職工の家族としては、割合に行屆いた教養を受けて居るのであつた。「職工を如何にして幸福にして遣るかに就いて、會社は全力を盡して居るのです。心から愉快に働いて貰はなくてはならん、それが本人の幸福でもあり、會社の利益にもなるのですから……」多和田氏はさう云つて、鬼が住む鐘ケ淵など云ふ巷説は、舊い昔の夢と過ぎたことを、極めて明るい口調で、詳しく説明するのであつた。

職工の救濟資金を十五萬圓以上、幸福增進資金を二百五十萬圓以上、傷害老衰退職恩給資金を二百十萬圓以上も有つて居て、兎に角從業員の待遇法に一貫した主義を抱き、それを實行して居るらしいのは、鐘紡の特色と云つて宜いやうであつた。

社長武藤山治翁の温情主義は、たとへ會社の利益と云ふことに立脚して居ても、勞働者待遇の上には、人道的の光をも放つて居るのであつた。

恰度、晝飯の時刻となつたので、私は工場長に從つて、大食堂の方へ歩いて行つた。

廿四　寄宿舎の夕の窓

白ペンキ塗、四方ガラス戸の下は石疊で、八間と三十六間と云ふ、如何にも大きくて廣い三百坪の大食堂であつた。百人からの炊事係が居て、一日に四十俵の米を、大きな四個の竈で炊くほどに、四千人近い大家族の生活は、すべてが大がゝりに見えた。

白米八に玄米二といふ割合で、少し色は黒いけれど、御飯の味は美味かつた。晝飯には何時も工場長が列して、中央の卓子で食事をするが例で、その日は牛肉と馬鈴薯を煮たお菜であつた。卓子は四角形の五六人づゝ取卷かれるのが、數十となく列べてあつて、中央には大きなおひつに、御飯を十二分に入れてあつた。女工達はお菜の入つた皿を受取つて、同じ年同志の者が集つて食事をするので、その賑かさは大變であつた。「牛は神戸から來るのですが、一頭が二日で無ります。近頃は魚が食へぬので閉口しましたが、もう大丈夫でせう」などゝ工場長は話して居た。

朝は味噌汁に煮豆に澤庵漬、晝は牛か魚の煮物一皿、晩は魚か野菜の煮物が一皿で、中流の家庭の食物と、少しも變らぬだけの分量と味とがあつた。それで男工は三食が二十錢、女工は十五錢で、殆ど倍額を會社から補助して居るやうなものであつた。美味い物を食べさせて、營養分をウンとつけて、壯健に働いて貰はねばならぬと云ふ會社側の心持は、食事の上にも察することとが出來るのであつた。美味い蕎麥のかけは、一杯三錢であるが、さうした物も安價に提供して、生活を安易にする設備も、出來て居るやうであつた。共濟會で賣つて居る日用品は、公設市場などよりも一二割安く、白米でも木炭でも、社宅に住む工手達は、購買組合の恩澤に浴して居るのであつた。

工手の社宅は工場の周圍に、一棟四戸か六戸建のが五百戸ほどあつて、大抵、六疊、四疊、二疊の三室になつて居た。電燈も水道も無料で、家賃は月一圓から二圓位なので、たとへ月の收入は少くとも、生活費に不足を感ずるほどに、窮迫しては居ぬのであつた。中には社宅に住で居ながら、食事は工場で濟ます者も居て、月に十圓、十五圓の貯金は、誰にでも出來ると云ふ話であつた。工手の貯金は一年一割の利子で、男工が二十五

萬圓、女工が十三萬圓ほど貯金して居るさうであつた。それに着物を新調する場合には、月賦の方法も出來て居るので、さう買食などせぬ女は、三十圓や五十圓の前借金を返すのに、三ヶ月とはかゝらぬと云ふ話であつた。

「今でも女工を募集するのですか、そして前借をさせるのですか……「募集と前借……そこに樣々の悲劇が生れるのですね」

と云ふと、多和田工場長は、一寸、眉を顰めて、

「やはり募集しませんと、女工が得られませんのでね。前借は成るべくさせぬやうにして居ますが、矢張り三十圓、五十圓、七十圓程度は、止むを得ないのですね。女工と家庭との聯絡を取るため、近頃は係員に家庭訪問を遣らせて居ますが、關東奥羽六縣の者が多いのです。貯金と國許への送金は奬勵し、前年度は東京、神戸、九州の各工場を合せて、八百三十八萬六千三百圓からの金を、女工の國許へ送金させたほどです」

と語るのであつた。女工募集の甘言、東京生活の樂しい話、紡績工場の美しい繪端書、職工待遇の行屆いた說明、前借金、貯金、送金……斯うした事を夢心地に聞きながら、前途の幸福のみを空想して上京した地方の娘達は、果して幻滅を感ずることなしに、寄宿舍の夕の窓から、故鄕の空を仰ぐことが出來るであらうか。紡績女工から墮落して、賣春婦になる女もあれば、肺を病で死ぬる女もあると云ふに、果して彼の女達の生活は、「會社の設備」が說明するやうに、幸福なのであらうか。

女工達と一緒に、割合に美味い昼飯を食べた後、私は更に寄宿舍から病院の方を見て廻つた。多和田場長と女工達とは、途で逢つても親しさうに挨拶するのが、私には心地好く眺められるのであつた。

廿五　幸不幸の岐れ道

鶯の寮、目白の寮、鳩の寮、ほとゝぎすの寮、にほの寮、かもめの寮、千鳥の寮、きじの寮、鶴の寮と云ふ風に、寄宿舍は九棟に分れて居た。女子大學や高等師範出身の寮長が、一寮に一人づゝ居て、別に世話係を一人づゝ附け、萬事の世話をして居るのであつた。

一室は二十疊敷位の疊數で、十二三人から五六人が同居して、枕を列べて寢るやうに出來て居た。各人用の吊戸棚の上には、シーツを付けた木綿蒲團を積重ねてあり、掃除も行屆いて居て、反つてガランとした、淋しさうな氣持を起させる程であつた。廊下は廣く長く、大きな浴場の方へ通じて居て、そこを出外れたところに、新しい病院が建てあつた。寄宿舍の室々には、

大きな火鉢が一個置いてあるのみで、何の風情も無いけれど、彼の女達はそこを唯、寝る所としてのみしか、考へないのであつた。

共濟組合に收入の百分の三を積立て置けば、病氣した四日目から、月收の十分の七を、四ケ月間は支給して貰ひ、あとの四ケ月間は、會社から補助することになつて居た。病院に入つても、寄宿舍の女工は全部無料で、全快まで無制限に、治療することになつて居り、藥價なども一日分六錢と云ふ安價であつた。機械で怪我をしたり、內科の病氣に罹つたり、中にも多いのはトラホームと、十二支腸虫とであつた。十二支腸虫は治療せずに置くと、結核性の病氣になるので、新入の女工が來ると、先づ糞便の檢査をして、一ケ月位は遊ばせて置き、完全に治療した後、仕事をさせると云ふ話であつた。新しく女工になつて入る女の三割は、不思議に十二支腸虫を持つて居ると云ふことであつた。

最も多いのは呼吸器病で、會社の方でもこれを最も怖れ、出來るだけの治療方法は講じて居るのであつた。九州方面の工場のためには、肥後の日奈久に、關西方面の工場のためには、播州の高砂に、理想的の療養所を設けて居るが、東京の工場のためにも、相州の茅ケ崎に保養所を設立中とのことであつた。そして早期診斷法と云つて、一週間に一回づゝ體溫をはかり、一ケ月に一回體重を檢し、三十七度五分以上の體溫があるものは、橋本院長が診査して、その經過を注意する他、二週間に一回以上、工場、寄宿舍、食堂などを醫師が巡つて、望診を行ふことになつて居た。この呼吸器病と云ふことは、輕い感冒ぐらゐのことも意味し、重い肺結核も意味して居るが、「紡績女工に肺病が多い」と云ふことは、この行屆いた會社の用意と設備とが、何よりも雄辯に說明するのであつた。「紡績工場から病氣して歸る女は、十人の內八人まで、蒼い顏した肺病に罹つて居る」と云ふ事實も、頭から否定し去ることは出來ないのであつた。

それにしても、若い妙齡の娘達は、女優だのカフエーの女だの、事務員だのと志して、少しでも自分の世の中を、明るく美しく暮さうと思ふが人情である世の中に、十時間の長きを喧々囂々たる機械の中に暮して、少しも悔るところ無いやうに見えるのは、いじらしくも哀れに思はれるのであつた。墮落せぬやう、病氣せぬやう、働くやう、金を貯めるやう、幸福になるやうにと、會社の方ではすべての設備に、親切を盡して居るけれど、女として、娘として、たゞそれだけのことで、充される彼の女達であるとは、何としても思ふことが出來ぬのであつた。

「如何にも行届いて居る、抜目なく要意してある、女工達は仕合せである」と、工場を見て廻つて居る時には、私もさう感じたのであつた。けれども、再び川蒸汽に乗つて、あの長い煙筒の黒煙と、赤煉瓦を振り返つて見た時、私の心は妙に暗く沈むのであつた。「武藤山治老人の温情主義と云ふのも、結局、自分自身を利するための氣休めなのではなからうか……」私はさう思はれるのであつた。

親切にいろ／＼と見せて下さつた工場長に、お禮を申上げると共に、紡績女工としては仕合せな彼の女達であつても、「若い女」としては不幸な彼の女達のために、私の氣持が鬱陶しくなつたことをも、申添へて置かう。

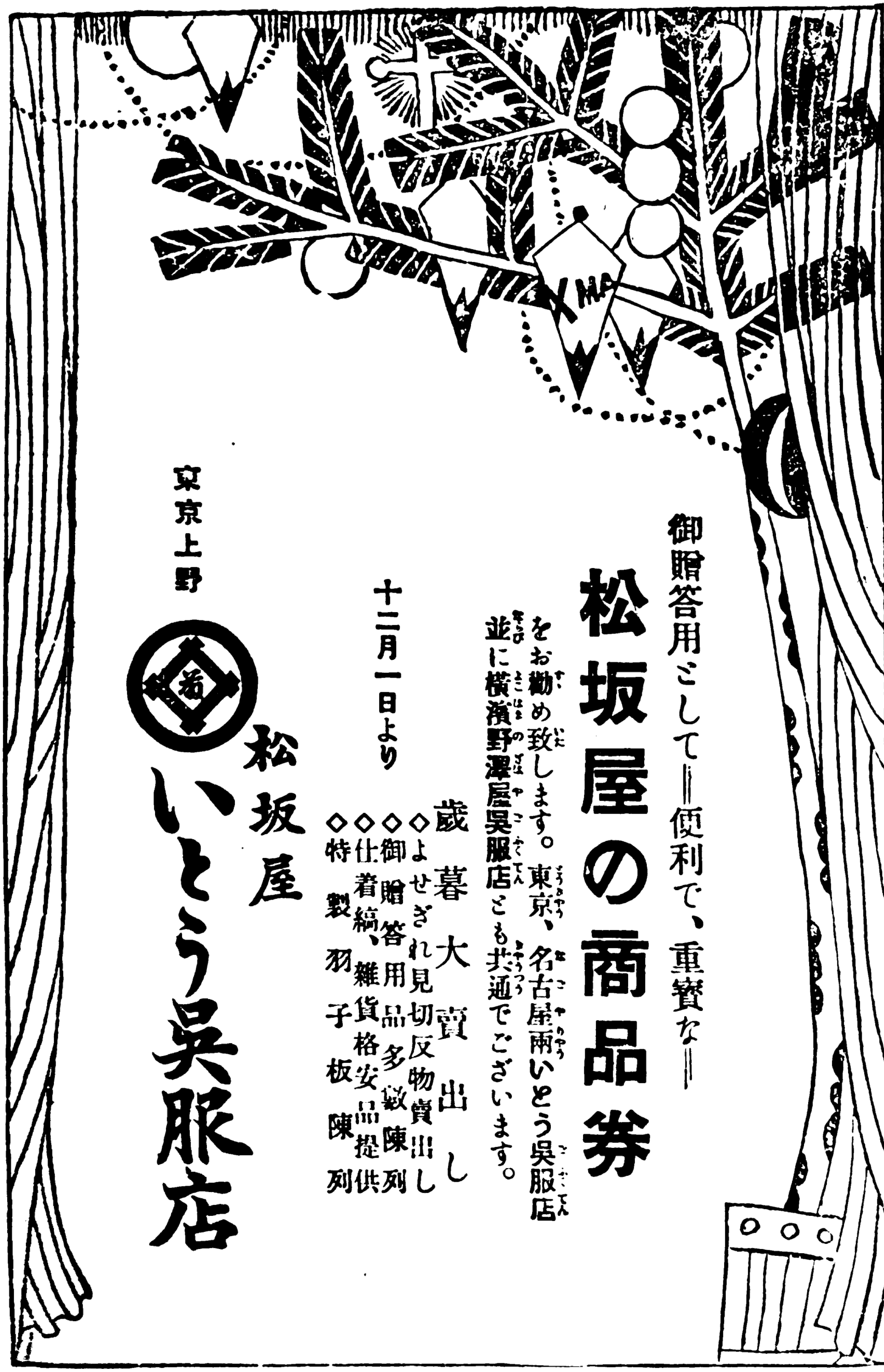
鬼も蛇も棲で居ない鐘ヶ淵でも、然し人知れぬ悲劇は潜んで居るのであつた。――

あとがき

瀧田兄足下――歩いて書かうと思つて、こゝまでは何うやら此うやら歩いて書くことが出來ました。何の方面にも、も少し深入りして、所謂、化け込みの探訪方法を用ゐたならば、或は期待に副ふやうな獲物があつたものをと、残念に思ひます。

酒を断つて、寫眞を道樂にして居る私は、初めてこれを職業的に應用して、到る所でパチ／＼遣りました。文章以外、少しでも境情を想像される助けにならうとて、數葉を添付しました。同郷出身の兄分で、寫眞機淺沼商會の支配人淺沼龍吉兄が、特に此の仕事のためにくれたアンスコ〇號のE六、三で撮つたことを、附記さして頂きます。

養育院や感化院や、土方の部屋や特殊部落や、行つて見たところは、まだ五指に餘るけれど、これだけの復命書で、御免を蒙ることにいたしました。今、十一月三日午後一時、明治神宮祭の煙花がドン／＼あがつて、私の心持を浮き立せて居ます。以上――


御贈答用として――便利で、重寶な――
松坂屋の商品券
をお勸め致します。東京、名古屋兩いとう呉服店
並に横濱野澤屋呉服店とも共通でございます。
歳暮大賣出し
◇よせぎれ見切反物賣出し
◇御贈答用品多數陳列
◇仕着縞、雑貨格安品提供
◇特製羽子板陳列
十二月一日より
東京上野
松坂屋
いとう呉服店

長崎吉利支丹寺興廢記

渡邊庫輔

1

わたしは、曾て「異教の渡來と長崎の回顧」なる一文を草し、是を、大正十一年三月發行「新小說」に託した。

文は、慶長ごろ長崎に行はれた、吉利支丹宗徒のプロセッションを書いたもので、それによつて、當時に於ける長崎の、風俗、習慣、建築、さうしたものを、讀者に回顧して頂うとしたのである。

プロセツシヨンは、千六百十四年五月九日から、同じ年五月二十日まで、十二日間行はれた。この中、十二日、十四日、十九日、二十日、この四日間だけは、詳細な記錄が殘つて居て、わたしは、夫を用ひたのである。

再び書くやうであるが、あれは、ここに書かうとする文章にも、必要である。だから、煩をいとはず、この四日間の道筋を、左に掲げて置かう。

十二日。Todos Los Santos（トードス・ロス・ント）よサスり、諸會堂を巡る。

十四日。San Juan Bantista（サン・ジユアン）—作大連Bernardino de Avila の住所—Santa Maria（サンタ・マリア）— Santa Cruz（サンタ・クルス）— Santo Domingo（サント・ドミンゴ）— San Francisco（サン・フランシスコ）—Meseri Cordia（ミゼリ・コルテイア）—Compania de Jesus（耶蘇會）— San Antonio（サン・アントニオ）— San Pedro（サン・ペトロ）— San Juan Bautista（サン・ジユアン）

十九日。San Domingo（サン・ドミンゴ）— San Francisco（サン・フランシスコ）— Miseri Cordia（ミゼリ・コルテイア）— Compania de Jesus（耶蘇會）— San pedro（サン・ペテロ）— San Juan Bautista（サン・ジユアン）— Santa Maria（サンタ・マリア）— Santa Cruz（サンタ・ク

ルス）— Sants Domingo（サント・ドミンゴ）

二十日。古川町の San Augustin（サン・アウグスチン）—橋を渡る—本紺屋町（その頃は、モトカウヤマチといはず）— Miseri Cordia（ミゼリ・コルテイア）裏手、即ち下町—島原町（現在の萬歳町）—分知町（現在の外浦町。また、文知町と書く）— Compania de Jesus（耶蘇會）—外浦町—大村町—本博多町（モトハカタマチは後年の稱）—興善町（現在の本興善町）—豊後町—小川町—上町— Santa Maria（サンタ・マリア）— Santo Domingo（サント・ドミンゴ）— San Francisco（サン・フランシスコ）—新紺屋町（現在の紺屋町）—大工町（現在の本大工町）— San Antonio（サン・アントニオ）及び墓所—魚町（現在の今魚町）—本紺屋町—古川町— San Augustin（サン・アウグスチン）

プロセッションは、實に盛觀であつた。そして是らのプロセッションを行はしむるに至つた信仰は、長崎びとが、吉利支丹と呼びなれた異國人の教説にあつた。

異國から來た伴天連たちは、大伽藍に居住した。十六世紀から十七世紀へかけての、建築術が持つ粋を蒐めた大伽藍は、長崎の市中に聳立して居た。

わたしたちの想像は、どれほど自由だか分らない。わたしは夫れを利用して、靜に眼をつむり、ありし昔の大伽藍を空に描いて見る。しかし、現實は、わたしの想像を超越して居るようだ。

もし年稚き少女の巡禮があつて、見馴れぬ大伽藍の扉の前にたつたとする。然る時、音もなく扉開かれて、紅毛碧眼の僧侶があらはれる。僧侶のうしろには、清淨にして奥ふかく、大理石の佛殿があらはれたとしたら如何だらうか。巡禮の驚愕した心は分る。

わたしたちの想像し得る範圍は、要するに、未だ巡禮の驚愕しない心である。現實は、もつと遼遠なところに、祕密を幽閉して居るのであらう。

2

織田信長のころから、日本に布教された吉利支丹宗は、アウグスチン派、フランシスコ派、ドミニコ派、耶蘇會派、この四派であつた。

慶長以前の長崎に、あだかも獨占したかの觀をなしたのは、この中の耶蘇會派である。他の派は、まだ是を犯さうとしなかつた。

然らば、いつごろから他の派の寺は建立されたであらうか。

わたしは、次にその大略を示して置かう。

ミゼリ・コルテイア。	天正
耶蘇會。	文祿
サン・パブロ。	同
サンタ・マリア。	慶長
トードス・ロス・サントス。	同
サン・ペドロ。	同
サン・アントニオ。	同
サント・ドミンゴ。	同
サン・フランシスコ。	同
サン・アウグスチン。	同
サンタ・クルス。	同

すなはち長崎の市中には、異風の建築が支配しはじめた。樹木も、言語も、それに相當するものが發達した。

敷き並べた石の上を、滑らかに靴がすべつて行く。白いザボンの花が、やはらかくなでるやうに、上の方から薫つて來る。紅羅紗の脚衣をまとうた人は、たちどまつて、黑船渡りのシガレットに、火を點じて吸ふ。それと行き違ひに、髮を引締めて結つた娘が、金の十字架を胸に見せながら、花輪をもつて過ぎる。

そのころは、かういつた毎日毎日があつたではなからうか。なほ、年代的に、寺院其他の數を、次に示して置かう。

千六百三年。

寺院、三。
サンタ・マリア。
トードス・ロス・サントス。
サン・パブロ。

耶蘇會、一。
ミゼリ・コルテイア、一。

千六百四年。

寺院、四。
サンタ・マリア。
トードス・ロス・サントス。
サン・アントニオ。
サン・パブロ。

耶蘇會、一。
ミゼリ・コルテイア、一。

千六百十一年。

寺院、九。
サンタ・マリア。

トードス・ロス・サントス。
サン・アントニオ。
サン・ペトロ。
サント・ドミンゴ。
サン・フランシスコ。
サン・アウグスチン。
サン・ジユアン。
サン・パブロ。
耶蘇會、一。
ミゼリ・コルテイア、一。
墓地、三。
サンタ・クルス。
サン・ミカエル。
不詳。
病院、二。
サンチアゴ。
サン・ラザル。

長崎の土地に馴染で來るにつれて、伴天連たちは、會合、運動、散歩、さうした方面に使用する土地を要求した。また、せめて故國の風物を忍び得るやうなものを要求した。

花園は、この方面の要求が齎した一つである。そこには、珍花奇草が栽培された。ほのかに木の間を洩るる月の光は、黒船渡りの伴天連にとつて、故國で見るそれに異ならなかつた。市中に流れみなぎる鐘の響も、窓からこぼるる勤行の聲も、それらは、すべて故國に居ると等しかつた。

3

天正のころである。豐臣秀吉は、九州方面へ手を入れはじめた。秀吉は、吉利支丹宗に對して、積極的態度をとつた。長崎の吉利支丹宗は、勿論その注目するところであつた。是は、一に秀吉の外交政策に關聯するもので、伴天連其他の者として、長崎に居住して居た葡萄牙や西班牙の人人は、秀吉にとつて、その雄圖を滿足させることの出來なかつた、或部分と色彩を同じうするものであつたからである。

秀吉は、加藤主計頭清正、黒田甲斐守長政、鍋島飛驒守直茂、毛利壹岐守吉成、この四人に、長崎を守護させた。

つづいて、鍋島と毛利の二氏に、長崎の地を保管させた。

秀吉のころは、吉利支丹宗徒の大殺戮があつた。つづいて、徳川家康のころ、同じく徳川秀忠のころ、等しく吉利支丹宗徒の大殺戮が行はれた。

さしも特異の文化を示した長崎の吉利支丹も、この三代のうちに、殆んどすべてを消滅させて了つたのである。

わたしは、これら吉利支丹の興廢を記して置かうと思ふ。それにつけては、あのプロセッションを行つたころの、吉利支丹宗の隆盛と、吉利支丹宗徒の信仰を思ふがよい。もしも、あれらのものが其儘傳つて居たならば、それから後の長崎は、どんな狀態を示したであらうか。日本の國勢は如何なつて居たであらうか。

長崎のすべてのものは、葡萄牙風であつた。また、西班牙風であつた。日本人は、老いたる者も、若き者も、それに感化されて居た。山も川も、それらによつて、生生して居た。

そこに、破壞が始つたのである。未練なく、過去の文化は革命されたのである。而して、再生したものは、全く反對のものであつた。

永い眠を容易になし得る者があつて、吉利支丹宗隆盛の時に眼を閉ぢ、吉利支丹宗衰微の時に眼を開いたとしたなら、其人は、どんな感じを經驗するであらう。其人にとつて、何事も幻影と觀ずるかも知れない。

現世に住むわたしたちは、日本のどこを歩いても、淸淨な、沈靜な、過去の長崎を見ることが出來ない。わたしたちは、遂に覺むることなき永い眠を欲して、眼を開く日を苦悶するがよいのであらうか。

眼を開けば、現世の騷音がきこえる。眼を閉づれば、過去の美麗が浮ぶ。わたしたちは、この苦悶を如何ともなし得ない。

4

ミゼリ・コルテイアのこと。

本博多町に、坂上天滿宮といふがある　本博多町長崎郵便支局の前面にあつて、長崎の東から北を見はらし、下通りは、長崎公設市場の往來が騷騷しい。この坂上天滿宮から北手に當つて坂がある。すなはち、新町尋常小學校の前にある坂で、堀町から本紺屋町に通ずる坂である。

ミゼリ・コルテイアは、この坂上天滿宮から、天滿宮の北手坂際までの位置に該當するものである。

長崎の初期には、現在見ることの出來るこのあたりの建築とは似もつかぬ、名さへミゼリ・コルテイアといふ、異國風の建築があつたのだ。

ミゼリ・コルテイアの存在して居たころは、このあたりを通過する人も、物質洗禮をうけた現代の人とは、餘程違つたものであつたらう。

ミゼリ・コルテイアは、後の長崎人によつて、ムラギシユンと訛稱された。後の長崎人は、實在を見ることなしに、祖先の訛と、傳寫の誤と、さうしたものを受けついだからであらう。

勿論わたしたちは、ムラギシユンと訛稱した長崎人でさへ、見ることの出來なかつたミゼリ・コルテイアを、どうして見ることが出來やう。しかし、長崎の地勢が現在のやうでなくて、ミゼリ・コルテイアの前通りに松並木があり、港から吹く潮風が、そこに無限の音樂を發生して居たことを想像することが出來る。また、ミゼリ・コルテイアに住む人人が、この土地の人人と、生ひ繁つた草の間を、睦み親しく語りあつて居たことを想像することが出來る。さうした事物の間に織り込まれて、ミゼリ・コルテイアは、靜かに建立して居たのだ。

5

ミゼリ・コルテイアは、「憐みの心」である。慈悲を意味するラテン語である。

ミゼリ・コルテイアは、あの悲田院に類似したものである。

天正ごろ、長崎の吉利支丹宗徒と、神佛信徒は、協力して一つの慈善團體をつくつた。この慈善團體の建物が、ミゼリ・コルテイアであつた。そのころ、會員は既に百名を越えて居た。これらの會員は、一週のうち二回の集會をなした。而して、特志家の寄附により、四院を維持して居た。

第一は、養老院、第二は、女養老院、第三は、癈疾院。第四は、救劑院、この四院である。

養老院は、老齢にして貧困であり、遂に生計を營むことの出來ない男子を收容した。

女養老院は、その女子を收容した。

癈疾院は、職につくことの出來ない癈疾の徒を收容した。

救劑院は、救恤すべき貧民を收容した。

ミゼリ・コルテイアの主宰者は、日本人である。吉利支丹宗徒で、名をジユスタンといふ。

ジユスタンは、慈善事業に趣味をもつて居た。そこで、己れの財貨を散して、世の憐れな人たちを救濟した。

ジユスタンは、男院に於て、看護のことを幹つた。その妻も亦、女院の事務を執つて、夫を輔けた。夫妻は、共に、僧尼の如く剃髮して居た。

後の人に、慈悲屋として傳つたのは、ミゼリ・コルテイアと、これらの分院のことであらう。

また、貨物を與へるところを、本クルスと傳へ、米穀を與へるところを、今クルスと傳へたのは、ミゼリ・コルテイアと、こ

の分院の活動から來た名稱であらう。

ミゼリ・コルテイアは、かうした特異の任務をもつて居た。

6

このころ、秀吉は、京都に施藥院をたてた。後になつて、肥後に、ミゼリ・コルテイア會が設けられた。

肥後のミゼリ・コルテイアは、長崎のそれを模範とした。肥後では、事務を幹る者を、慈悲役と稱した。

前記ジユスタンの如きは、慈悲役とか、慈悲役頭とでも、いふべきものであつたらう。

7

文祿元年である。秀吉は、寺澤志摩守を、長崎奉行に任じた。寺澤は、毛利と鍋島に代つたのである。

この時、秀吉は、朝鮮手入れのころで、肥前名護屋に出張して居た。長崎の市中には、もう吉利支丹寺が、あちらこちらに建つて居た。

秀吉は、長崎に於ける吉利支丹寺の、狀勢は知つて居たが、事情は未だ疎であつた。秀吉は、寺澤に、吉利支丹寺の破却を命じた。

ここに於て、吉利支丹寺は、一部または全部を破却された。すなはち、吉利支丹寺は無住となり、伴天連たちは、南蠻商人の家に移つた。或は、ミゼリ・コルテイアに退居した。おそろしき避難は、かうして始まつた

この時、ミゼリ・コルテイアは無事であつた。

同じく文祿元年のことである。蒲生秀鄕は長崎に來た。秀鄕は、これら破壞された會堂の址を訪れた

古戰場の址を逍遙する時、わたしたちは、どんな感懷をもつだらう。吹き荒ぶ風も、亡者のすすり泣く聲とおののくかもしれない。草葉にすだく虫の音も、刄劍の火花する音ときくかもしれない。

伴天連は自由をうばはれ、信徒は祈唱を斷たれ、殘るものは荒廢した會堂の礎のみである。

そこに來た秀鄕は、どんな心持をもつて長崎を去つたであらうか。

破壞された吉利支丹寺の木材は、肥前名護屋にある、秀吉の陣營に輸送された。

しかし秀吉は、南蠻貿易のため、將また、朝鮮手入れの際であれば、餘りに峻嚴なる態度を採るの愚を感悟したのであらう。寺澤が折からの進言を入れて、吉利支丹寺の再建を許可し

た。但し、建築費用は自辨たるべしといふ條件つきである。

而後、ミゼリ・コルテイアは、いよいよ隆盛になつた。

慶長六七年のころには、あだかも其極致の如く盛大であつた。

ミゼリ・コルテイアには、世人に、見放された衆くの癩病患者が収容された。病院の方には、普通一般患者が治療をうけた。而して、寄附は、諸方面から間斷なく申込で來た。維持などのことに至つては、決して苦勞を要せなかつた。

慶長十九年の晩秋である。また、吉利支丹寺の破壞が行はれた。しかし、自餘の吉利支丹寺は破却されても、ミゼリ・コルテイアだけは、なほ災害を免れた。

元和六年である。また再び、吉利支丹寺の破壞が行はれた。この時、ミゼリ・コルテイアは破却された。

8

破却されたミゼリ・コルテイアのあとには、佛閣の建立がはじまつた。元和七年のことである。寺は、現在の大音寺である。住持は、傳譽である。

吉利支丹宗のもとに、異國風に統一されて居た長崎の市民はここに混亂をはじめた。

寺の建立に入る勞働者は、昨日どころか今日も吉利支丹宗を信奉する者である。それが、如何して佛寺の建立に努力することが出來やう。勞働者の多くは、勞働することを太だ忌みきらつた。

わたしは、それに就いて一つの話を書いて置かう。

パウロ小七といふ勞働者が居た。パウロは、寺の建立に雇はれたが、吉利支丹信徒であつた爲に、どうしても、それをする氣にならなかつた。このことは、役人の機嫌を損うて、パウロは捕縛された。

そこで、或る西班牙人は佛寺の僧侶と相談して、共に協力して、パウロを助けやうとした。僧侶は傳譽であらう。

西班牙人と僧侶は、當路の人に歎願した。パウロは、やつとのことで、もとの身になることが出來た。

9

コンパニヤ・デ・ゼススと、サン・パブロ寺のこと。

長崎の中央部は、小さな丘陵をなして居る。この丘陵の尖端は、木樹が高く茂つて居た。現在の長崎縣廳は、そこに在る。

コンパニヤ・デ・ゼススと、サン・パブロ寺の在つたのも、そこである。

コンパニヤ・デ・ゼススは、單に耶蘇會といはれる。耶蘇會なる言は、既に慶長ごろにあつて、林羅山も是を使用した。しかし、同じく慶長ごろ、Nagasaki Jesus no Compania すなはち、長崎ゼススのコンパニヤとも呼ばれて居た。なほ、コンパニヤといふ略稱も、當時は、普く用ひられたやうである。

現在では、耶蘇會なる言葉が普通になつた。

長崎の市民は、朝夕、ここに參詣して祈禱した。

サン・パブロ寺は、西班牙言である。葡萄牙言では、サン・パウロ寺といつた。

既にいふ如く、コンパニヤ・デ・ゼススと、サン・パブロ寺は、同位置にあつた。後の長崎人は、そこに、ヤヲハと、トリノハボツクと、ウキシユと、この三つがあつたといふ。しかし、これらの名稱が、悉く誤であることは、贅言する必要もあるまい。

10

後の長崎人の呼稱に、トリノハボツクといふがある。このうち、トリノハだけは、一般にいふ烏ノ羽屋敷の、烏ノ羽と同一であらう。トリノハボツクは、すなはち、烏ノ羽屋敷ではなからうか。さう思惟される。

烏ノ羽屋敷は、市を立てて諸人を集め、博奕をなし、餘所を禁じたといふ。また、欄屋と同じく、伴天連の住所だといふ。

烏ノ羽屋敷は、羽烏屋敷であつて、すなはち、ハドリ屋敷はパドレ屋敷の訛であらうと思はれる。伴天連の住所とするは、それだからであらう。

東上町にあつたと傳へる烏ノ羽屋敷は、すなはち、パドレ屋敷の誤である。ここには、伴天連ベルナルデイノ・デ・アヴイラが、住んで居たやうだ。

コンパニヤ・デ・ゼススとパブロ寺のところにあつたといふ、トリノハボツクは、すなはち、伴天連の屋敷であらう。

11

試に、現在の縣會議事堂の在る場所の前面にあたつて、現在の東側外浦町(慶長ごろの分知町)の通路を、西南の崖の方へ一直線に延長し、この通路は、江戸町へ下るものとして見る。すると、現在の縣會議事堂の北側に一線を作つて居る崖と、東から南へ、やや弓なりに周つて居る崖と、前面に於て、東側外浦町にならび續く通路とによつて、限られた一つの區域が出來る。これを、假に第一號區域と名づける。

次に、前記東側外浦町にならび並く通路と並行して、更に、

西側外浦町(慶長ごろの外浦町)の通路から、同じ方面に一直線をなす通路があつて、この通路も亦、江戸町に下るものとする。そして、現在の縣會議事堂前から、現在の縣廳の前面を一直線に、大波止場の方へ下つて行く通路があつたとする。ここに、南から西へ周つた崖と、二つの並行せる通路と、一つの横斷せる通路とによつて、周まれた一つの區域が出來る。これを、假に第二號區域と名づけて置く。

この二つの區域を合併したものが、コンパニヤ・デ・ゼススとサン・パブロ寺の敷地に外ならぬのである。

分知町を通つて、この第一號區域の前面に來ると、一つの門がある。このうちに、耶蘇會司教の住邸があつた。そこを通つて、小門から出ると、第二號區域に入る。ここには、會堂があつた。これを通過すると、本門に至るのである。而して、本門から出ると、外浦町に入るのである。

この二つの區域内に在つた建築物は、その建築の傑構にして、畫甍は堆く、實に、莊嚴豪麗であつたといふ。

莊嚴なる耶蘇會の會堂とは、時の人が嘆美した言葉であつた。また、日本第一の大伽藍とも稱した。

伴天連たちは、此の如き會堂は、長崎か良魔(羅馬)でなければ、見ることが出來ないと隨喜した。

12

耶蘇會の建築物の一部は、三階の大家とも稱せられた。三階の大家は、また、森崎の大家とも稱せられた。

第一號區域内に在つた、この巨大なる三階建の建物は、城廓の天主臺のやうに聳えて、長崎全市に君臨して居た。

この建築物は、或は、城廓の天主臺と、殆んど同樣な役目をもつて居たかもしれぬ。そして、吉利支丹宗徒にも、佛教徒たちにも、偉麗といふ印象を、示威的に、深く刻みこむべき役目をもつて居たかもしれぬ。

この建築物は、牛窓の大工總七が、棟梁になつて設けたといふ。時に、慶長八年である。

わたしは、時折かう思ふ。この三階の大家には、何人と雖も足を踏み入れることが出來ない。ただ、あかがしらの伴天連のみが、自由に出入するだけである。伴天連どもは、ここで、いろいろのものを企劃する。そして、はるかに故國を思ひ出す。目の前には、港のいろがあらはれる。目の下には、町の女が通る。いくら布教のためとはいへ、孤獨であることは寂しい。中には、戒しめを破つて、町の女と通じた者が居たかもしれない。また、町の女を、かどわかした者が居たかもしれない。三階の

大家には、倫敦塔の物語に似た事柄が、或は、あつたかもしれない。かう思ふのである。

第一區域内に在つた耶蘇會司教の邸宅は、あだかも宮殿のやうに、立派なものであつたといふ。

13

慶長十七年の晩秋である。この時に、他と等しく、コンパニア・デ・ゼススとパブロ寺は、破却された。

破却の命が下つてから、三階の大家の一部分は、村山等安の家に使用され、また一部分は、皓台寺の方丈厨屋に使用されたといふ。

皓台寺の本堂は、紅毛木を用ひたと傳へられる。紅毛木といふは、チーク材である。是は本堂である。あれは方丈厨屋である。破却された時の木材では、勿論なからうが、いささかそれかとも思はれる。しかし、未だ判然しない。

耶蘇會司教の邸宅は、後に至つて、高木作右エ門忠次の住邸となつた。忠次は、剃髪して宗順といふ。高木氏は、耶蘇會の一部分を得たのである。司教の邸宅のみを、その住邸としたのである。

以上は、所謂第一號區域である。

次に、第二號區域に就ていふ。

元和ごろである。第二號區域は、絲割符宿老會所の敷地となつた。絲割符宿老會所が、存在したのではない。

寛永十年である。ここに、本博多町の奉行所が移された。絲割符宿老會所は、本博多町に轉じた。

これが、第二號區域である。

その後、高木作右エ門屋敷は、濱町の下屋敷に替つた。濱町の下屋敷は、與力同心の居宅であつた。

この時、江戸町の内から、町人の所有に係る五ケ所の敷地を、濱町築地の一部分と交換し、高木作右エ門屋敷址と同樣に、奉行の敷地に加へた。

かくの如くして、高木作右エ門屋敷址には、新に奉行所の屋敷が出來た。これを東屋敷、または、東御役所、或は、東役所と呼んだ。すなはち第一號區域である。

そして、寛永十年以來、西手に在つた奉行所を、西屋敷、または　西御役所、或は、西役所と呼んだ。俗には、お西とも呼稱した。すなはち第二號區域である。

寛文十二年の正月である。もと、サンタ・マリヤ寺であつた井上筑後守屋敷は、奉行所の敷地と定められた。そこで、新築工事が始まつた。同じ年十月に至つて、過半竣工した。明けて寛

文十三年の春である。これは、落成した。

そこで、同じ年(延寶と改元、すなはち延寶元年)三月初旬までのうちに、東役所は、悉皆ここに移轉した。すなはち、立山奉行所である。

もとの東役所は、一部は取崩されて明地となり、其際、なほ遺存せる古長屋に、船番屋敷が設けられた。

このころは、もう徳川幕府の根柢も十分であつて、長崎の街には、それによる秩序が成り立ちかけて居たのである。

そして、葡萄牙人や西班牙人に代つて、阿蘭陀人が、市中の店を、大きなズボンのポケツトに、手を入れながら、素見して居た。

14

サンタ・マリア寺のこと。

後の人が、稱してサンタ・マルヤといつたのは、サンタ・マリア寺のことである。ベヤトノ、または ベヤトノ・ビヨウトウサイといつたのも、さうだといふが、是は尙ほ考ふべきである。ベヤトノは、すなはち、Beato であつて、信徒の謂である。ビヨウトウサイは、平等劑に作るが、正しくは、平等齋ではなからうか。

サンタ・マリア寺は、耶蘇會の司教 D. Luis Cerqueira が、建立の基礎を作つたのである。時に、千六百年であつた。すなはち、慶長五年である。而して、「お守りのサンタ・マリアの御堂」と稱した。

その後二年を經て、千六百二年である。會堂が建立された。献堂式は、千人の童貞達の祭日に擧げられた。かうして新に、「至聖童貞マリア昇天堂」と名づけられた。

献堂式から八日たつて、長崎の街に大火があつた。幸にも、サンタ・マリア寺は、この災を免れた。

サンタ・マリア寺は、極めて壯麗なものであつた。これは、コンパニヤ・デ・ゼススやパブロ寺に對して、あだかも片方の大關のやうであつた。

サンタ・マリア寺には、參詣者の群が雲集して居た。長崎人の祖先は、寺門の前に立つて、十字架を高くかさして居る紅毛碧眼の徒の前に、たやすくひざまづいて、お祈をした。

サンタ・マリア寺のうしろは、常盤樹が鬱蒼として居る。物はすべて、冴えて響く。夜は、きつと梟が薄氣味惡く啼いたであらう。月の光も、黯黯として明でない。大きな建物は、その前に、ずんと聳えて居る。そして、若い伴天連は、物思ひに沈んだ如く、前庭をとぼとぼと歩く。さうしたことも、あつたであ

らう。

サンタ・マリア寺の裏門は、東上町に接して居た。その本門は東手にあつた。

千六百五年である。伴天連ミゲエルは、耶蘇會の司教セルケイラに抜擢されて サンタ・マリア寺の長老になつた。ミゲエルは、日本人である。サンタ・マリア寺の伴天連には、日本人も居たのだ。

15

千六百六年の夏である。印度から、長崎へ渡航しやうとする、南蠻船があつた。この南蠻船は、支那海に來た時、暴風にあつた。例のタイフーンである。南蠻船は、將に、覆沒しやうとした。

海はひろびろとして居る。風は暴れ狂つて、すべての分別がつかない。船員は、如何とも手の下しやうをしらなかつた。乘客は、或は、檣にしばりつき、或は、床に臥し、生死の程もおぼえない。船は、前後左右に動搖する。

この時、乘客や船員の一同は、長崎のサンタ・マリア寺の方を遙拜し、よくこの災危を免れ得て、長崎に到着することが出來たならば、波止場からサンタ・マリア寺まで、敗帆を肩にして參詣し、是を聖像に奉納して、永く殊恩を記念すべしと、一向に、聖母マリアの加護を祈念した。

同じく千六百六年七月二日に至つて、南蠻船は、恙なく長崎に入港した。祈念した甲斐があつたのである。そこで乘組の人たちは、入津匆匆願解きのため、サンタ・マリア寺に、跣足で參詣した。而して、船首の帆を奉納した。

16

吉利支丹宗徒は、聖母マリアを、海の星と稱して居る「浮世の波風、常に吹き荒みて、我を漂はし淪めんとす。爾、海路の難うして、我か危きを、遙に見給へは、冀くは、希望の星となりて、終なき安樂の港へ、我を導きたまへ」是は、聖母マリアに身を献ぐるお祈の一節である。これは、直ちに、聖母マリアをして、海上の保護たる資格を具有せしむるのである。

聖母マリアの、聖美と慈愛の根元から、八方に放たるる燦きの光は、光明となり、指導となり、保護となり、救難となつて、よく、暗黑、困惑、憂愁、不安、危險などの重疊せる闇を破り、暗きを照し、迷へるを導き、憂るを慰め、安からざるを安からしめ、危きを救ふ、から解釋し、なほ海上にあつては、狂へる風よりも、怒れる濤よりも、のがれしむる保護者であるとして、

よく信仰されたのであらう。から解するは、蓋し妥貼である。

それは、唐人が、海上の守護神として、天后聖母を信仰するのと、同一理由である。また、日本人が、海上の守護神として觀自在菩薩や、金毘羅大權現を崇敬するのと、同一理由である。

サンタ・マリア寺の重視されたことは、觀自在菩薩を祭れる御堂や、金毘羅社、または、媽祖殿が、あがめられたのと、趣を等しくする。

當時、万里の波濤を淩いで梯航した吉利支丹の徒は、聖母マリアを尊崇して、往往船名にその尊稱を選んだ。例へば、慶長年間に、媽港から長崎へ航海した南蠻船の名稱が、マドレ・デ・デイオス、すなはち、神の母なる、聖母マリアの尊稱を附けて居た如きである。

かくの如くして、耶蘇會派の吉利支丹宗徒も、長崎のサンタ・マリア寺を、特に重く見て居たことを想見することが出來る。

17

かれらが言ひ傳へた黄金の島に、伴天連と船貨をのせて、黒船とか、白船とか、或は、赤船とか、所謂南蠻船が渡つて來たころは、もとより、船體は堅牢でなく、小さい羅針盤の一つを頼りに、帆と檣の運用により、貿易風に乘じて、航海し得たに過ぎなかつた。

海の危險の太しかつたことは、また已むを得ないことである。

長い旅行の途中で、故國に殘した約婚の女を思ひながら、太陽の光をくらく感じつつ、命を引取つたものもあらう。また、黄金の島に上陸した時の、限りなき希望をいだきながら、折からの暴風雨に、行方知れずになつたものもあらう。

長崎から歸るにしても、さうである。丸山の遊女に馴染んで、深い情をうけた人が、きぬぎぬの別れの、尙ほさめやらぬに、どうしたはづみか、船より落ちて、海底ふかく沈んで行つた。かうした場合もあつたらう。

長崎の古い唄に、かういふのがある。「昔より、今に渡り來る黒船の、緣が盡きれば、鱶の餌となる。サンタ・マリア」そこに示されたものは、何といふ哀調を帶びて居ることだらう。そして、南蠻船が持つて居る冒險を、何とよく唄ひ得て居ることであらう。

唄の解は、聖母マリアを海上の保護者とすることによつて、はじめて明になる。

わたしは、この唄によつて、ひとり吉利支丹宗徒のみでなく、佛敎徒の間にも、聖母マリアは海上の保護者として、知られて

居たものと認めたい。

そして、この唄と、長崎のサンタ・マリア寺を結びつけて、一つの感興を起して居る。

18

筆は、またもとにかへる。

千六百七年である。サンタ・マリア寺に、聖母會といふが組織された。

千六百十四年の晩秋である。サンタ・マリア寺は、大村民部少輔純頼によつて、破却された。

その後に、井上筑後守の屋敷が建つた。そして更に、立山奉行所となつた。

現在の女子師範學校の位置は、すなはち、その後である。

19

サンタ・クルス墓地のこと。

サンタ・クルス寺でつく鐘の響の、最も近いところに、耶蘇會の司教セルケイラが設けた、一つの墓地があつた。この墓地は長崎で最も大きな墓地の一つと謂はれて居た。

長崎の氏神なる諏訪神社に詣でた人は、あの長坂を下りきつて、更に、次の坂を下ると、左右に通ずる道路に出るであらう。それを右に折れる。すなはち、爐粕町である。爐粕町は、殆んど商家がない。從つて、靜かである。昔でも、石疊に反へる已れの下駄音を、あやしむ位にまで、それは靜かだ。爐粕町に隣接して、八百屋町の一部がある。それを通りきつて、また右に折れると、そこが、サンタ・マリア寺の址だ。

この爐粕町から八百屋町の一部にかけてが、恐く墓地の域内であつたと想像される。

墓地の域内であつたと想定される位置のうしろは、すなはち、玉園山である。所謂お諏訪の森である。

墓地の域内には、巨大なる十字架が、此處彼處に立つて居た。そこにある土も、すべて冷たい感じを與へた。しづかに、吉利支丹宗徒は、そこに參詣した。而して、これら十字架の前に跪き、うやうやしく禮拜した。また、墓前で、つつしんでお祈した。かうしたことは常であつた。

お祭でもある時は格別として、平日でも、長崎の吉利支丹宗徒は、しげしげ祖先や舊知の墳墓に、參詣したのである。

この墓地は、一方に、現在の玉園山を負ふて居る。從つて、どれほど墓域を擴げやうとも、すこしの差支へもない餘裕を持つて居た。而して今日、諏訪の山に繁茂して居る楠の樹の森は

この墓地に連續して居るのである。墓域は、風致の佳い丘陵をなして居たであらう。

20

この墓地も、元和六年に至つて、將軍秀忠の嚴命により、他の、サン・ミカエル墓地外一ケ所の墓地と共に、遂に破壞された。

その際、十字架は悉く倒されて破棄され、吉利支丹宗徒の墳墓の石碑は、悉く取拂はれ、平和のうちに永眠して居た遺骨は、汚らはしいものとして、悉く發掘され、市邑の外に、捨てられた。尤も、血族や舊知の遺骨を、そのゆかりのものが、役人たちは勿論、人知れず他の氣付かない場所に移して、埋葬したのも、すくなくはなかつたに相違ない。

この墓地あとには、まもなく、街衢が設計された。寛永ごろの長崎地圖を見ると、この街の名を、ルヤス町と記して居る。そのころは、名さへ未だルヤス町であつたのである。ルヤス町は、爐粕町となつた。そして、その南は新御座町に接し、その北は在郷ぬか町に續いて居た。新御座町は、現在の八百屋町である。在郷ぬか町は、現在の爐粕町の一部と、上西山町の一部である。

人あつて、現在の爐粕町を通るとも、曾てそこに、十字架や吉利支丹宗徒の墳墓があつたとは思ふまい。町の通は、いくら靜かであつても、その何れも、恨み狂ふ鬼の哭きごゑはきくまい。すべては、革つた安らかさにある。

21

サント・ドミンゴ寺のこと。

サント・ドミンゴ寺は、現在の勝山尋常小學校並に勝山高等小學校の位置にあつた。それは、サンタ・マリア寺から、耶蘇會へ行く通路であつて、サンタ・マリア寺に、極く近かつた。

勝山尋常小學校並に勝山高等小學校は、その前に、高木作右エ門の屋敷であつた。高木は、長崎の代官であつた。それで、俗に代官屋敷と稱した。

高木作右エ門屋敷の、更に前は、末次平藏の屋敷であつた。末次は、近世貿易界の先驅者として、德川の初期ごろ活動したのである。

末次平藏屋敷の、更にもつと前は、すなはち、サント・ドミンゴ寺であつた。

サント・ドミンゴ寺は、慶長十四年に、伴天連フランシスコ・デ・モラレスが、ドミニコ派の會堂として、建てたものである。

慶長六年である。薩摩の人レオン・喜左エ門が、呂宋に渡航した時、この一行は、マニラに上陸した。この時、一行の一人であつた、船員ジュアンは、ドミニコ派の會堂に參詣した。

このことは緣を作つた。そして、モラレスは日本布敎を思立つた。

ここに於て、ドミニコ派の敎區長フワン・デ・サン・トマスは、薩摩の城主島津氏へ出す書簡を、レオンに託した。

慶長七年である。レオンは、島津の命をうけて、再び呂宋へ行つた。而して、慶長六年九月二十二日附の返簡を、トマスに與へた。それは、甚だ厚意を示して、勸誘したものであつた。

モラレスは、日本に行くことになつた。伴天連トウマス・ヘルナンデス。同じくアロンソ・デ・メナ。同じくトウマス・デ・スマルラ。それにモラレスを加へて、伴天連都合四人である。他に、伊留滿フワン・デ・フバデイアが加つた。總べてで五人である。

日本に來た時、もう島津の態度は變つて居た。幕府の方針に逆することの不利であつたからだ。

慶長八年である。レオンは、甑島にささやかな會堂を、モラレス等の爲に建てた。島津の仕方の、あまり氣の毒だつたからである。

しかし、伴天連たちは、困阨に陷り　その辛酸なること名狀すべからざるものがあつた。

島津は、京泊に、會堂を建てることを許した。これは、玫瑰花冠の聖母堂と稱された。

慶長九年である。ミゲル・デ・サン・ヒアシンセは、ドミニコ派の敎區長に、選擧された。そこで、薩摩にあるこの聖母堂を、玫瑰花冠敎區に加入した。而して、補助金を送つた。

モラレスは、京泊をドミニコ派の根據地とした。そして、九州に伴天連を派遣して、その布敎に從事せしめた。特に、肥前方面には全力をそそいだ。

肥前に來た伴天連は、メナであつた。メナは、深堀に赴き、港に碇泊して居る西班牙船を訪れ、船長と共に、佐賀に至つた。佐賀では、鍋島勝茂に接した。

鍋島領のうち、佐賀には、サン・パブロ寺、濱町には、玫瑰花冠の聖母堂　鹿島には、サン・ヴイセンテ寺、これらの寺寺が建立さるるに至つた。

慶長十三年三月上旬である。マニラで、ドミニコ派の敎區會議が開かれた。この時、選擧されて、バルタザル・フオルトが、敎區長になつた。

フオルトは、濱町と鹿島の會堂を 玫瑰花冠敎區に加入した。

22

これより先、慶長九年のことである。フイリツピン群島長官ドン・ペドロ・デ・アクニヤは薩摩在住ドミニコ派伴天連たちの爲に、千六百四年七月二十八日附の書翰を、家康に贈つた。ドミニコ派の伴天連が、家康に謁することを得、その布教に、保護を與へて呉れるやう懇願したのである。伴天連メナは、家康に謁して、この書翰を捧呈した。併せて、葡萄酒などの方物を獻上した。

明けて慶長十年である。家康は、フイリツピン群島長官に、返翰を送つた。日本は神國なるが故に、吉利支丹宗の弘布を許さぬといふのである。

慶長十三年である。伴天連モラレスは、伏見に行つて、家康に謁した。

モラレスの不在中に、薩摩では、迫害が甚しくなつた。

23

慶長十三年六月十六日である。伴天連ホウセフ・デ・サン・ヒヤシンセは、レオン七右衛門を洗禮した。七右衛門は、地位高き男であつた。

同じ年十月十日に、七右衛門は、斬罪の刑に處せられて、殉教した。その屍躰は、呂宋に送られて、ドミニコ派の會堂に埋葬された。遺骨の一部分は、これを京泊の會堂に保存した。

慶長十四年三月上旬である。ドミニコ派の伴天連たちは、薩摩から退去を命ぜられた。早速、京泊の玫瑰花冠の聖母堂は、解躰した。

同じ年四月上旬である。伴天連たちは、京泊の病院に收容して居た癩病患者たちを伴ひ、而して、殉教者レオン七右衛門の遺骨をも携へて、心寂しく、しかも、覇氣を藏して、西の極の長崎を目ざして移つて來た。

この時、京泊の會堂の木材などは、長崎に運送された。これは、長崎に於ける會堂新築の際に、その建築材料の一部分となつた。

長崎の新會堂は、玫瑰花冠の聖母堂、または、聖ドミニコ會堂と、稱せられた。

同じく慶長十四年である。京都にも、玫瑰花冠の聖母堂と名づくる、一つの會堂が建立された。

按ずるに、長崎の新會堂は、慶長十四年九月か、十月ごろに竣工したものであらう。

その後五年を經て、例の吉利支丹寺破却の年となつた。すな

はち、慶長十九年の晩秋である。サント・ドミンゴ寺は、寺澤志摩守によつて、破却された。

慶長十九年九月十一日は、すなはち、千六百十四年十月十四日である。此日、伴天連たちは、會堂を破壞し、十字架を破壞し、他の祭器などと共に、これを火中した。

明けて九月十二日である。みなの者は、會堂内を整理し、燈明を消し、聖餐を瘞した。

破却は、眼前にあつた。皆の者の顏いろは、すさまじい程緊張して居た。誰一人として、聲を發する者もなく、聲なき儘に、すべては、はこばれて行つた。

24

サント・ドミンゴ寺が、破却された時である。伴天連モラレスは、逃れて日本に止り、ひそかに、布教に務めて居た。會堂はなくなり、この上、命を落さうとも、布教だけは、モラレスにとつて、やめられなかつたのである。

元和五年正月晦日である。村山等安の子、村山德庵の邸宅に潜伏して居たモラレスは、遂に捕縛された。

伴天連モラレスは、大村の獄屋に入れられた。

元和八年八月五日、すなはち、千六百二十二年九月十日である。モラレスは、耶蘇會の伴天連カルロ・スピノラ其他と共に、長崎の西坂で、處刑されて、殉教者の籍に入つた。

此日、殉教したものは、五十五名である。この中、火刑に處せられた者の一人に、伴天連モラレスは、加つて居た。モラレスの最後は、實にいさぎよかつた。

この殉教日は、後に大殉死日と稱された。日本公教會祝日表には、この九月十日のところに、「日本の福者カルロ・スピノラ及びその侶殉教者」と書き入れてある。

25

サン・フランシスコ寺のこと。

勝山町のサント・ドミンゴ寺と、本博多町のミゼリ・コルテイアとの間に、クルス町と名付けられた町があつた。名さへ、既に異なる。サン・フランシスコの堂宇は、この町に建つて居た。クルス町は、現在の櫻町である。

フランシスコ派の伴天連たちは、その長崎に來た時、既に、他派の勢力の强盛であるのを見た。

長崎の郊外に、秀吉のころにあつた會堂が、文祿ごろの迫害のため、一時、無住になつて殘つて居た。フランシスコ派の伴天連たちは、これを見つけて、居となし、耶蘇會派の伴天連に

對抗して、さかんに布教の運動をなした。

しかし、間もなく、長崎奉行の嚴命によつて、この會堂は、閉鎖しなければならなかつた。

サン・フランシスコ寺の位置は、未だ明確に判然しない。非藝術的建築物である長崎市役所のところが、或は、それではなからうか。

サン・フランシスコ寺は極めて淸麗な建物であつた。庭には、黃なる花や、紅い花が、小石にまじつて、咲いて居た。月のよい晩などは、はるかに見ゆる港の波が、きらきらときらめいて、永久の美は、そこに、しみこむで了ふのではないかと、思はれた。それを見入つて居る、伴天連のかげは、物音一つしない庭の上に、黑い長い影を、ながして居た。

26

フランシスコ派の伴天連は、はやくから、京、大阪、江戸、かうした方面に、全力を注いで布教した爲、三都並に其方面の勢力は、なかなかあなどり難きものがあつた。

長崎に、フランシスコ派の會堂が建立されたのは、中央方面に於ける迫害が甚だしくなつた、あの慶長末季に入つてからである。

しかし、日本に於けるフランシスコ派の寺は、漸く維持が困難になつた。維持費は、はじめマニラからの送金になつて居たが、遂に困阨の時が來たのである。

その困難になつたとき、フランシスコ派の伴天連は、唯四人の伴天連を殘し、それを、長崎のフランシスコ寺に留め、他はマニラに引上げた。又は、新イスパニヤ、或は、インドに赴いた。

サン・フランシスコ寺は、かうした事情で、寺そのものが寂寞になつた。

そこに、すさまじい破却がはじまつた。例の慶長十九年晩秋のことである。竣工して、未だ間もなきサン・フランシスコ寺は、惜しげもなく破却された。

27

サン・ミカエル墓地のこと。

現在の櫻町に、サン・フランシスコ寺が建立されたのは、千六百十一年、すなはち、慶長十六年のことである。

この時、サン・フランシスコ寺の附近に、フランシスコ派の墓地が、設立された。

慶長十六年は、徳川幕府が、重て吉利支丹宗を嚴禁した年で

ある。五畿内は、板倉伊賀守、西國地方は、山崎長門守、それらの人人が擔當して、吉利支丹宗徒を縛し、京都に送つて、五條河原に是を斬つた。

長崎では、南蠻船を、港外神崎の海上に燒いた。奉行は、長谷川左兵衛である。

この年に、サン・フランシスコ寺は建立され、サン・ミカエル墓地は設立されたのである。

サン・ミカエル墓地は現在の西彼杵郡役所附近一帶と、推定される。

長崎の吉利支丹宗の堂宇は、すべて高所を求めて、設けられたやうである。墓地も亦、さうだ。その平地にあつたのは、異例としてよい。そして、長崎の全部を、吉利支丹市にして了つて居た。

サン・フランシスコ寺の内には、サン・ミカエル會といふ團體があつた。

サン・ミカエル墓地は、サン・フランシスコ寺の破却と共に、また破壞された。

サン・ジュアン寺のこと。

サン・ジュアン寺は、後の人によつて、サン・ジュアン、または、大寺三壽庵といはれた。西班牙風には、サン・フワン・バウチスタといふべきであり、葡萄牙風には、サン・ジョアン・バプチスタといふべきである。後の人の發音は、葡萄牙風に近い。

サン・ジュアン寺は、現在の本蓮寺から、福濟寺にかけての地である。舟津村のチョキスヤマにあるといふ、先蹤の說は、よく是を說明し得たと、いはなければなるまい。

ひところ、サン・ジュアンの町といふがあつた。現在の西上町の一部である。のち寛永年間に至つて、筑後町なる法泉寺門前の町を、俗に法泉寺町と稱へたのと同一である。サン・ジュアンの町は、サン・ジュアン寺の前面であつた。長崎は、かうまで吉利支丹化して居た。

サン・ジュアン寺は、長崎の港外までも、その前庭の、風緻の中に加へて居た。

そこでは、落ち日が、大きく見えた。幾重にも折りかさなつた山は、遙かまで續いて、その終は、水と空とが、一つになつて居た。近くの山の上には、入道雲が湧き立つて居る。すべての山も、街の甍も、片日影つて、大氣は動かない。やがて、すべてが昏くなつてゆく。サン・ジュアン寺の細い窓から、灯がもれて來た。

わたしは、曾て、かうしたこともあつたらうと想像する。

慶長十九年の晩秋である。サン・ジュアン寺は、自餘の吉利支丹寺と共に、破却された。サン・ジュアン寺の破却は、大村民部少輔純頼が引請けた。純頼は、家臣大村彦右衛門をして、長崎奉行長谷川左兵衛に、サン・ジュアン寺の木材を、燃さずに、取毀つやう交渉した。奉行は、なるべく、破却するやうに、同答した。

ここに於て、大村家では、或は、鋸で挽切り、或は、斧で切折り、或は、大綱をもつて引倒し、日ならずして、是を取崩した。

29

サン・ジュアン寺の遺跡として、現世に殘つて居るのは、現在の本蓮寺にある、俗にいふ外道の井戸である。外道の井戸は、また、南蠻井戸ともいふ。

本蓮寺の本堂から、東の方へ廊下を通抜けて、位牌など安置してある堂に入り、更に、方丈室へ向つて行くと、椽がある。椽の左側に、古井戸がある。これが、外道の井戸だ。

現在は、この井戸に、平たい重重しい石を覆ひ、その上には、稲荷大明神を安置して居る。井戸の傍には、たけの低い石燈籠が、一基寂しく立つて居る。その下には、八つ手が植ゑてあつて、葉は、かなり多い。

30

外道の井戸には、いろいろの話が傳つて居る。その中、二つだけ、次に書かう。

その一つ。

サン・ジュアン寺破壊の時である。吉利支丹宗徒にとつて、それが、どれ程くやしいことであつたか分らない。宗徒は、たゞデウス（神）のガラシア（恩寵）を祈願するばかりであつた。宗徒は、已れのアニマ（靈魂）を信じた。アニマの行衛を、見つめやうとした。

いよいよとなつた時、宗徒は、十字架やコンタツをもつて來て、是を井戸に投げ入れた。井戸は、すなはち、外道の井戸である。また、あまりの悲哀に、井戸の中に、身を投げた者もあつた。井戸は、同じく外道の井戸である。

かうして、井戸は現世に殘された。呪を封じた儘に、現世に傳つた。

ひとたび、井戸の水に顔をうつした人は、どの位、それが物凄いか知るであらう。また、どれ程、それが深いものか知らな

いであらう。すべての秘密はつつまれて居る。

いづれの場合にも、好事家の一人二人は居る。

或年のこと、好事家の一人は、井戸を浚つて見やうとした。井戸を浚つて見たら、秘密の扉は、容易に開くと思つたのであらう。

井戸を浚つて居るうちに、さぐりにくつついて、半途まで上つたものがある。居あはせた人人は、秘密の正體を見たやうに叫んだ。しかし、忽ち音をなして、其物は落ちて了つた。說く者は、それが十字架であつたといふ。或は、何であつたといふ。とに角、結局は分らない。

好事家は、唯一人ではなかつた。それから、たびたび好事家があらはれた。好事家は、いつも失敗した。

井戸を浚へる度に、その浚へる者は、きつと、怪我をした。また、喧嘩をした。或はまた、發熱した。

すべては、變化なくしてはやまぬ。けちが起らなくてはやまぬ。

かうして、到頭、外道の井戸には蓋がされた。

そのも一つ。

雨のしとしとと降る夜半である。雨垂の一滴二滴は、それと反對に、ゆつくりと石を打つ。廊下から見ゆる遙かの部屋も、油が斷えたのか、行燈の光も消えて了つた。とき折、風が強くなつて、さつと吹き過ぐる。その時、雨の音も、一入强くなる。

そのころ、くらい井戸の中から、隱火があらはれる。何ともしれぬ白いものが、ふわりふわりと音もたてず、廊下をさまよふ。木枯の唸るやうな聲は、怨むがやうに、歎くがやうに、あだかも物いふ如くである。そのさまは、眞に物凄く、何ともいひやうのない、ひやりとしたものを胸に抱かせられたやうである。

31

外道の井戸の西手に接して、枕返しの間といふがある。もし此部屋に寢する者で、外道の井戸に足を向けたならば、其夜は必ず魘はれて、西手を枕にして居たのが、或は、あられもない方を向いたり、或は、地上へころび落ちたりするといふ。

かうした話は、人の記憶から記憶へと活きながらひ、吉利支丹宗徒の悲みと恨みは、いつまでも、わたしたちの心の中を辿つて居るのである。

32

本蓮寺には、常盤の遺物として、杉の板戸がある。板戸は二

枚ある。わたしは、曾て是を見せてもらつた。一面には、唐土の仙女らしいものが、描いてある。も一面には、花籠らしいものが、描いてある。この面は、光と風に、よくあたつたものらしく、古色も帯び、磨滅も甚しい。

これは油繪である。下地には、黒色がかすかに殘つて居る。そして、狩野派の銘辭がある。

わたしは、サン・ジュアン寺の遺物だといふ、従來の説を否定したい。わたしは、十分にそれを疑ふ。そして、寧ろ平賀源内どころの作品ではなからうかと思ふ。

33

本稿は、まだ書かなければ完結しない。しかし、以上で、ちよつと筆を擱く。そして、他日、「續長崎吉利支丹寺興廢記」と題し、このあとを書かう。さうしないと、餘りに長くなつて、讀者に氣の毒だと思ふからである。

わたしが、本稿を執筆して居る時、鷗外森林太郎先生は他界された。森先生は、わたしの私淑した人である。わたしは、悲しい。わたしは、この拙文を、森先生の靈に捧げやうと思ふ。

書き終つた今日は、ちようど盆だ。わたしの部屋の前にも、迎へ燈籠が出してある。これに灯を入れるころ、三方の山にもいつぱい燈籠がつくのだ。そして、爆竹がなりわたるのだ。長崎の人人は　吉利支丹宗の勢力があつたころを、忘れたかのやうに振舞ふのだ。

もうしばらくしたら、わたしも、紋付羽織を着、袴をつけてお墓に行かう。

いささか、私事を記して濟まぬが、これで筆を擱く。

最新 ヴヰタミン(Vitamin)物語

大日本私立衛生會編輯主任 三澤素竹

□ヴヰタミンとは如何なる物か

常々大廈高樓に棲みて美食を漁り何不足なき身分でありながら、或は心身違和を生じ、末梢神經の痲痺を來し、心臟疾患となり、果ては脚氣症に罹り、又時に乾性眼炎を來し結膜乾燥症、角膜軟化症となり、甚しきは佝僂病となり、骨軟化症を招くが如きことがある。蓋し其原因は何に因て起るかは是迄頓と分らなかつた、或は榮養不良とか、或は運動不足の爲めとか、又は座食の結果なりなど唱へて居つたが、其病理的說明に至つては之を詳說することが出來なかつた。

然るに今より二十五年前（一八九七年）にアイクマンといふ人が、白米のみを鷄に與へて飼つて見た、處が其鷄は數日の後食慾減少して脚氣のやうな症候を起し大に瘦せ衰へて遂に死んでしまつた、又其死に瀕したる鷄に米の糠を與へた處が其病氣は忽ちにして全快した、此事實に據りて糠には或る特殊の成分が含まれて居るといふことが認められ、糠に關する研究が非常の興味を以て學者間に迎へられた。而して最初に糠から有效成分を取り出すことに成功したのは我國では駒場農科大學教授の鈴木梅太郎博士であつた、又同時に英國のフアンク博士も其抽出に成功したのであつた、是が即ち鈴木氏のオリザニンであつて、フアンク氏は之にヴヰタミンといふ名稱を與へたのである。

此ヴヰタミンなるものは蛋白質でもなければ脂肪でも、含水炭素の類でもなく、唯是等のものと共に榮養調節上我々の身體に缺くことの出來ない、無ければならぬ榮養素であるといふことが分つた。

此研究が歐米諸國に於て盛に行はれた結果、獨り脚氣に効能あるヴヰタミンばかりでなく、其外に全く別種の効能を有するものが漸次發見せられ、今日ではＡＢＣの三種に區別せられて居るが、最近の海外電報にはＤ及Ｅのヴヰタミンをも發見した

との通知があつた。

併し是迄性狀の判別したのはＡＢＣの三種であるから、先づ此三種に就て少しく說明を試みやう

（一）Ａヴヰタミン

Ａヴヰタミンは Ｂヴヰタミンより稍遲れて發見せられたるもので、專ら米國のマツクコラム、オスボルン、メンデル氏等に依つて最も精確に研究せられたものである。

此ヴヰタミンを含まざる食物を動物に與ふれば、身體の發育生長を妨げられ、或は乾性眼炎（トリメ）、又は佝僂病（セムシ）などの病氣を起し又時に神經衰弱して終に死に到るものである。Ａヴヰタミンの缺乏と佝僂病との關係を研究したのは英國の醫學者エドワートメランバイ氏である、又乾性眼炎との關係はフレイス、ゴールドシユミツト、フランク氏等であつてＡヴヰタミンを含まざる食物にて鼠を飼つた處が約三週間にて一定の眼變化を起し漸次角膜は乾燥溷濁し、終に潰瘍性の變化を來した、而かも其初期に於て毎日二立方仙迷の牛乳即ちＡヴヰタミンの含有する牛乳を與ふれば、それで充分全快せしむることが出來る、元來角膜軟化症所謂鳥目なるものゝ原因に就ては唯榮養不良にのみ歸して深く怪しまなかつたが此研究に據つて始めて其原因が闡明せられた譯である。

Ａヴヰタミンは水には容易に解けないが、油類、エーテル、又は溫かいアルコール等には容易く溶解するから一名之を溶油性ヴヰタミンとも稱する、一般料理の溫熱には變化せぬが、日光に永く曝らすと漸次變化を來すのである、又溫熱に對する抵抗力は頗る強いが、酸化作用に對しては甚だ弱いものである。

□Ａヴヰタミン含有食品

然らばどんな食物に此Ａヴヰタミンが最も多く含まれて居るかと云ふに、先づ肝油、卵黃、牛乳、バタ、動物性脂肪其他綠色の野菜等である、唯動物の脂肪中獨り豚脂のみは殆と含まれて居らぬ、動物の脂肪及臟器中に含む所のＡヴヰタミンの分量は其動物の攝取する食物に從つて非常なる差違を來すもので、今牛乳に就て檢するに、牧場に於て常に新鮮なる野菜を食する牛と、乾燥せる野菜を食する牛とを比較すれば、其乳汁に含む所のヴヰタミンに多大の差を見るのである、鷄卵に於ても同樣の關係がある。

又植物と其色素の關係がありて胡蘿蔔又はトマトの類は、赤い程多く含み、綠菜にありては靑い程ヴヰタミンの量多く、牛酪の如きは黃色なる程多量を含んで居るものである。

人體に於ても牛馬と同様で小兒に乳を與ふる母又は乳母の食物中にヴヰタミンを含むことが尠い場合には其小兒の發育不完全となり、或は骨格に異狀を來し又は眼病に罹るなどの虞れがあるから最も注意を用するのである、若し斯る場合には其母若くは乳母又は小兒に對してAヴヰタミンの多量に含む肝油或は鶏卵又は無菁胡蘿蔔などの搾り汁を與ふれば容易に恢復せしむることが出來るのである。

今近年英國食料會議の際報告せられたるものを見るに、食品中Aヴヰタミンを比較的多量に含有するものとして左の數種を擧げて居る

□牛酪□肝油□クリーム□羊脂肪□牛脂肪□鯨餅□羊腎臓、心筋、□魚肉（刺身）□全牛乳□乾牛乳□鶏卵□小麥、米、玉蜀黍胚種□亞麻仁□キヤベツ□チシヤ□ホーレン草□胡蘿蔔・

以上の各種には比較的多量のAヴヰタミンを有し、就中牛酪、肝油、クリームには最多量なるを示して居る。

Aヴヰタミンに關し最も精密なる研究を遂げたのは農學士高橋克己氏である、氏は其成績を大正十一年九月十二日帝國大學に開かれた日本化學會の席上に於て發表せられた、同氏の報告に據れば、實に榮養界空前の發見で特筆大書す可き事柄がある、元來人體の榮養素として、炭水化物即ち澱粉、脂肪、蛋白質及び無機鹽類の四要素を必要とすることは夙に周知の事實であるが今同氏の研究に據れば右四要素中最も多量を要す可き澱粉＝換言すれば米の如き、麥の如き若くはパンの如き穀類を攝取せずとも榮養上何等、差支が無いといふことになつた、其代りにBヴヰタミンの水溶液を與へねばならぬといふことである、又脂肪に對してもAヴヰタミンを補給すれば全然脂肪を除いた食物にて立派に生命を維持することが出來るといふ結論に到着した、果して之を實際に人體に應用せらるゝならば實に世界的發見と言はねばならぬ。

今高橋氏の報告講演を左に摘記しやう。

□Aヴヰタミンの本體　農學士　高橋克己

ヴヰタミンの研究は今や各國競ふて行つて居て既にABC及びDの四種が發見された、然し鈴木博士がBの本體をオリザニンとして發見された以外他の三種は未だ其本體か明かでなかつた、私は種々研究の結果此程漸くAの本體に就て知ることが出來たから夫に就て報告をしやうと思ふ。

昔から人間及動物の榮養素として蛋白質、脂肪、炭水化物（澱粉砂糖類）及無機鹽類（食鹽燐酸等）の四要素が擧

げられて居た、殊に炭水化物は最も必要とせられ、食物の大部を占めて居た、然るに近來此炭水化物は攝取しなくとも榮養上差支へないことが分明した、其實驗を鼠及鳩によつて二樣に行つて見た。

一つは蛋白質七十五プロ、バタ二十五プロにオリザニンを精製して炭水化物なきヴヰタミンBの水溶液を加へたものを用ひ、他の一つはバタ七十五プロ蛋白質廿五プロ、に前と同樣のヴヰタミンBを加へたものを用ひた、其結果何れも殆と榮養の結果には差異なく、標準生長より以上の昂速な生長をした、之に據りて見ても炭水化物が榮養素として必要なものでないことが分つた。

次に脂肪を除いた榮養試驗をして見た、此試驗は各國にても試驗の結果可能とされた事であるが、此際ヴヰタミンAを補給することが必要である。

以上申した通り動物の榮養素として重要視された炭水化物及脂肪は何れもなくても生長に何等の差支へがないことになつた、尤も卵類には炭水化物は無いが立派に孵化し又極北不毛のエスキモーの如きも炭水化物の攝取はせぬが立派に生長して居る實例もある、故に是等の炭水化物及脂肪を蛋白質の或量で補へばよろしいことになる、此結果は炭水化物の攝取を禁ずる糖尿病患者などの治療上にも變化が起るかも知れぬ。

又炭水化物及脂肪を過食すると却てヴヰタミンA及びBを必要以上に要する事實もある。

ヴヰタミンBが鈴木博士に依つて先鞭をつけられたのは十年前の事であるが爾來他のヴヰタミンに就て各國共に研究に勉めたが今日迄に一向進歩しなかつた。

肝油が滋養効果のあることに就て種々の議論、例へば其中に特殊の脂肪などがあるだらうと言ふ樣なことがあつた、それが近年の研究の結果がバターと一致して居ることからヴヰタミンのある事が知れ從つて肝油の効果もそれに因ることが分明した、そこで肝油に含有されるヴヰタミンは何かと言ふ事が研究の焦點となつて來た。

私は千瓦の肝油から一瓦の殆と純粹とも言つて良いヴヰタミンAを抽出した、此ヴヰタミンAの一萬分の一瓦を營養不良で瀕死の動物に用ひてメキ〳〵と健康を回復して舊體になつたことを知り得た。ヴヰタミンAは茶褐色の液體で其性質は殆とすべての有機溶劑に解けて黃色乃至黃赤色を呈する、ヴヰタミンAのクロヽホルム溶液に濃硫酸を加へると深色綠となる、此實驗は肝油の正否を見るに用ひら

れる實驗である、同じヴヰタミンAのクロロホルム液に酸性白土を加へると綠色となる。

又ヴヰタミンAは還元性を帶びて硝酸銀を還元する、ヴヰタミンAが忌むものは空氣と光線で抽出したものを三ミリ位の壓力で貯藏しても殆と其効果を失つて、酸化すると殊臭を發する。

以上の如く甚だ不安定の物質であるが、アルコールかエーテルの溶液だと安定になる、更に之を脂肪酸溶液とすれば非常に安定となる、ヴヰタミンの成分は炭素八十一プロ、水素十プロを含むコレステリンに似たもので窒素は無いからアルデハイドらしい、ヴヰタミンAは榮養上、醫學上極めて重要なるものであるが實用には純粹なるものを用ひる必要がない、オリーブ油溶液は肝油の十倍の効果がある、肝油がバターの十數倍の効果があるから、オリーブ油一瓦はバターの百數十瓦に相當するからして、病人とか小兒とかいふ大量の食物を攝取することの出來ぬものに用ひるに便利である、又國民の保健上にも重大なものである。

終りに千瓦の肝油から一瓦のヴヰタミンAを抽出するに要する費用は手數を除いて原料四圓餘を要する、之を肝油の原料から精製する樣になれば一層安價に得られ、副産物も取れる利益がある。

(二) Bヴヰタミン

Bヴイタミンは脚氣豫防素として既に一般に知れ渡つて居り、前記の如く鈴木博士と、フアンク博士との發見に係るものである。是は水に溶解するに依り水溶性ヴヰタミンとも稱する、Bヴヰタミンは高熱に對する抵抗力頗る强く通常の煑沸溫度に於ては決して破壞しない、又酸性のものゝ中に於ても比較的强いが亞爾加里性のものにて熱する時は速に破壞される。

爾來脚氣なる病氣は西洋には殆ど無く獨り東洋—特に我日本に於てのみ多く是を見るは全く我國民は精白米を常食とするからである、尤も我國に於ても元祿以前迄は脚氣なるものが無かつたのである、夫は元祿以前には國民一般皆玄米を常食として居つたからである、然るに元祿の初年頃から世は泰平が打續き生活は華美に流れ、是迄高貴の方のみに限られたる白米食が盛に行はるゝやうになつた、其結果として元祿四年初めて江戶に脚氣といふ病氣が發生したのである、爾來五十年ばかりの間流行して居つたが、天明四年の大饑饉に遭遇して白米どころか玄米すら缺乏を訴へたので止むを得ず雜穀を食する樣になつた、其爲め是迄續發生して居つた脚氣が頓に屏息して仕舞つた、

然るに咽元過ぐれば熱さを忘れる喩に漏れず米作も稍順調となつて來ると再び白米食に還つた爲め、寛政以後に至り又々脚氣が再發し、天保三四年の頃には流行の絶頂に達した、其前後に於て時の將軍家齊公を初め恐れ多くも一天萬乘の陛下すら白米病の爲め崩御せらるゝことになつた、其後天變地異打續き四民飢餓に泣いた爲め又々一時屏息したが、嘉永頃より精米の方法が發達し房州砂を混ぜて搗くやうになり夫より降つて今日に至りては水車、石油發動機又は電力等を加ふるに至つたのであるから病氣の發生が愈々出でて愈々劇しくなり來つたのである、要する玄米の糠及雜穀にはBヴヰタミンを含有して居るが、之を精製した白米には此要素を缺くからである、豐作、飢饉と脚氣の消長とは密接の關係を持つて居る、委しく言へば豐作の年は米が安いから贅澤になつて白米を食し、飢饉の年は高いから玄米及雜穀を食するからである。

今日田舍の人が都會人に比し非常に健康であり、又召使はるゝ下女下男が丸々肥えて居るのに主人夫妻は瘦せ枯て病氣勝だといふのは、主人等は先づ一等精白米を擇び、肉はロースばかり、野菜はグタ／＼煮なければ齒に合はぬと言ひ、自ら勉めてヴヰタミンを除き又は其成分を殺したものを食する結果と言はねばならぬ、然るに玆に困つた事は玄米は其風味不味く之を永く實行することが甚だ容易でない、然らば徐食玄米を攝らずとも白米食の間に幾回かの玄米を交ゆればヴヰタミン缺乏を防ぎ得るかとの問題が起る、之に關して農學博士澤村眞氏は最も精細なる研究を遂げて居る、同博士の說に據れば、人間は全く他の副食物を攝らぬと假定しても二日の中に一回丈玄米飯を攝れば殘る五回は白米飯を攝りて其健康を保ち得るといふ實驗を得た、左に同博士の實驗を紹介する。

□澤村農學博士の實驗

博士は先づ白米に幾何の玄米を混ずれば健康に害なきかを試驗した、試驗の方法は搗減一割二分五厘の白米を能く水洗ひして之に粟粒大に碎きたる玄米を交へて小鳥（ジウシマツ）に與へた、されど二者を混じて與ふれば小鳥は玄米又は白米のみを偏食するの虞あるから先づ小鳥は一日に幾何の米を食するかを檢したるに一日に約二百五十粒を食ふことを知つた、そこで初め一日に與ふ可き玄米のみを器に入れて小鳥に與へ其食ひ盡くしたる後一日分の白米を與へた、卽ち初めは左の割合にて玄米を與へた、

第一號	玄米一粒に付	白米百粒
第二號	同じく	白米五十粒

第三號　同じく　白米三十粒

斯くして試みたる第一號小鳥は六日目に衰弱し、第二號は十二日目に脚氣症狀となり、第三號も十二日目より衰弱し初めて二十日目に死んで仕舞つた、此試驗の後引續き白米の割合を漸次減じて試驗した結果、白米九粒に付玄米一粒の割合を以て與ふれば小鳥の生命を維持するに足るヴヰタミンの最少量なることを知り得た、白米七八粒に對し玄米一粒の割合ならば充分生命を持續する事が出來る、即ち白米の七分一乃至八分一の玄米を與ふればヴヰタミンを最も要する小鳥でさへも其健康を保ち得るとすれば人間に於ても全く副食物を取らぬ場合と假定しても二日の中に一回だけの玄米を攝り殘る五回は白米飯を攝れば充分其健康に害なきことを得たのであつた。

次に博士は小鳥に對して白米を幾日與ふれば健康を害するかを試驗した。

大正四年三月に小鳥（ジウシマツ）二羽に水洗ひせし白米を與へしに二羽共十日目に衰弱せしに依り、一羽には牛乳の蒸發殘滓を白米に添へて與へても十三日目に斃れた、他の一羽には水洗ひせざる白米を與へしに食物を換へたる七日目に其元氣恢復した。

又同年三月、雀に水洗白米を與へしに一羽は九日目に衰弱せしより牛乳の蒸發殘滓を添へ與へしも終に斃れた、又一羽には初めより水洗白米に牛乳の蒸發殘滓を添加して與へしも十三日目に斃れた、又一羽には水洗ひせざる白米を與へしに一箇月餘異狀が無かつたから試驗を中止した。

以上の事實に依り考ふるに水洗白米には生命を維持するに足る可きヴヰタミンの存在せざるを證明せるも、水洗ひせざる白米には僅に附着する其糠に存するヴヰタミンにて其健康を維持し得たといふことが明瞭となつた。

次には米を貯藏して置いて其ヴヰタミンの効力に異狀なきか否やを知らんと欲し左の如き試驗をした。

大正六年一月に、明治二十年以來貯藏せる白米を水洗ひせずして小鳥に與へしに一羽は九日目に一羽は十四日目に一羽は十六日目に死んだ、又大正九年三月、再び此貯藏米を小鳥に試みたるに今度は十一日目に斃れた、之に據つて見るに米を長く貯藏すればヴヰタミンは其効力を失ふものであることが分つたのである。

次に博士は、ヴヰタミンは熱に對して抵抗力弱きが爲め、ヴヰタミンを含むこと多き食物も料理の方法に依り其効力を失ふ虞れがある、故に熱に對する感應の試驗を行つ

た。

先づ糠より製したヴヰタミン量の多いオリザニン（三共會社製）を用ひて熱に對する試驗をした。

先づオリザニンの有効分量を知らんが爲め大正四年十一月、水洗白米二百瓦にオリザニン十立方仙を加へ陽乾せしものを小鳥に與へしに百八十九日間異狀が無かつた爲め此オリザニンを用ひることにした。

オリザニンの熱に對する感應を知らんが爲め、オリザニンを小瓶に入れコツホ殺菌器にて百度の熱を以て二時間加熱したるものを前の如く白米に添へて小鳥に與へしに七十一日目に斃れた。

以上の試驗に據ればオリザニンは二時間の加熱にてはヴヰタミンの効力未だ全く消失せざるを以て、次に三時間の加熱の影響を檢した、三時間加熱のオリザニンを白米に添へて與へしに十八日目に脚氣症狀を發せしより試驗を中止した、又大正六年九月、密封して六時間百度に熱せしオリザニン五瓦を水洗白米百瓦に添へて與へたるに一羽は八日目に、一羽は五日目に衰弱甚しきを加へた。

大正六年九月、再び三時間加熱のオリザニン五瓦を水洗白米百瓦に添加し與へしに一羽は十四日目に、一羽は十二日目に衰弱を加へた、次に二時間加熱のオリザニンを用ひしに二十二日目に衰弱し、次に一時間の加熱のものを用ひしに二十日目に衰弱を來した、大正七年三月、再び一時間加熱のものを用ひしに二十日目に斃れた、四月には三十分加熱のものを用ひしに三十五日目に衰弱甚しきを加へた。

前には二時間加熱のオリザニンにて健康を維持せしも今度は三十分加熱にて生命を維持し得ざりしは是れ前回は米百瓦には十六方仙のオリザニンを用ひたが、今度は米百瓦には五立方仙を用ひた爲めであらう、其證據は前に記せし貯藏古米百瓦にオリザニン五立方仙を添加して與へしに、一羽は十八日目に、一羽は二十三日目に、一羽は三十四日目に死んだ、唯一羽は五十七日間異狀なかつたから試驗を中止した、此成績に據りて白米百瓦に就きオリザニン五立方仙にては不充分であるといふことを知り得たのであつた。

次に玄米のヴヰタミンが熱に對し如何程の抵抗力あるかを試驗した。

先づ普通に飯を炊く位の加熱にてヴヰタミンの効力が尙存するか否やを檢せん爲め大正六年二月、玄米を炊き風乾したるものを小鳥に與へしに、一羽は十日目、一羽は二十

二日目、に死んだが是は想ふに當時寒氣が甚だ强かりし爲めならん、然るに他の一羽は七十二日間異狀なかりしを見れば玄米のヴヰタミンは普通飯を炊く間の加熱にては其効力を失はぬものである。

大正五年九月、玄米を六時間百度に熱せしものを小鳥に與へしに一羽は三日目、一羽は七日目に斃れ、一羽は十日目、一羽は十五日目、一羽は五十五日目に脚氣症狀を呈した、又同時に六時間百度に熱せし粟を小鳥に與へしに一羽は十四日目に斃れ、一羽は四十九日目に脚氣症を呈したるより考ふれば、玄米のヴヰタミンも六時間も加熱せらるれば其効力を失ふものと見ゆ。

澤村博士は以上の如き最も精密なる試驗を以てヴヰタミンの効力如何を計つたのであつた。

□Bヴヰタミン含有食品

Bヴヰタミンは食品中如何なる物に含まれて居るかといふに、動物性食品中多く含んで居るものは、牛乳、鷄卵、動物の肝臓、腦、腎臓等で我々が上肉として食する部分には割合に少く、又魚類にも比較的僅少である、其最も多量を含有するは米の胚芽と糠と麥酒の醸造用に供する酵母である、其他雜穀類中にも多く、裸麥は全體に平等に分布して居る、野菜類ではほうれん草、胡蘿蔔、蕪菁、豌豆、蚕豆、トマト等に最も多く、果實類では、橙、枸櫞、葡萄などの液汁には最多量を含んで居るが、林檎、梨には比較的少く最も少量なるはバナ、である。

（三） Cヴヰタミン

CヴヰタミンはABと全く其効力を異にし、壞血病といつて初め口中の齒齦などから出血したり、其他總て血液の腐敗する病氣を豫防し又治癒するもので、是は水又はアルコールに溶解し、又外氣の影響に對する抵抗力は他のヴヰタミンに比して遙かに弱く、百二十度乃至百四十度の熱に數時間煮沸せらるゝ場合は全く其作用を失ひ、又空氣中にて乾燥し若くは永く貯藏する時は著るしく其効力を減少するものである。

ファンク氏が鷄に就てBヴヰタミンを試驗せし如く、Cヴヰタミンは那威（ノルウエー）の學者キルスト及フレーリツヒ兩氏に依つて試驗された。夫は小麥、裸麥、燕麥等のCヴヰタミンを含まざる穀物をモルモットに與へて人間の壞血病に全く同一の疾病を生ずることを慥めた。

小兒の壞血病は專ら粉製又は牛乳製劑例へば非常なる高度に據りて煮沸せられてCヴヰタミンの効力を失ひたるコンデンス

ミルク等にて養はるゝ場合に發生するもので、斯る時には新鮮なる果實の液汁を之に與ふれば其病氣は拭ふが如く治癒するものである、されば小兒の授乳たる母親なり乳母なりが常にCヴヰタミンを含む野菜又は果實を攝取するの必要がある。

Cヴヰタミン含有食品

Cヴヰタミンは新鮮なる野菜果實等は大抵含有するが就中最も多く含むものは、キヤベツ、蕪菁、水芹、レモン、橙、トマト、イチゴであつて胡蘿蔔、三つ葉、チサ、バナ、等には比較的少量である、動物性食品では、牛乳、鶏卵、其の肉類であるが、總て新鮮なるものに多く、時日を經過すれば從て減少する、CヴヰタミンはBヴヰタミンと均しくアルカリ性のものに遭へば容易に破壞するが之に反して酸性に對しては之に熱を加ふるも比較的大なる抵抗力を持つて居る。

特に推薦したきは豆もやしである、是は獨りCヴヰタミンを含むばかりでなく、ABの兩種も最も多く含有し、野菜に於て極めて上乘のものである、東北地方冬季新鮮なる野菜を得難き所では盛に之を栽培して食膳に供する、溫泉を利用すれば最も速成に最も多額の收獲がある、家庭に於ても製造することが容易である、今其方法を左に示さう。

豆もやしは大豆小豆豌豆何れでも良いが綠豆といふ青豆が第一である、之を三合も蒔けば一貫七百五十匁約十倍にもなる、大豆だと約六倍になるが日本人の嗜好には大豆の方が適する、先づ大豆を一晩水に漬け翌日之を擧げて水を切り古新聞紙をかけて暗い臺所の隅に半日位置くと豆が一寸芽を吹き出すから、次に底を拔いた桶の底に簾などを敷き綺麗な藁を少し敷いた上に前の豆を入れ上にも同じ様に藁を載せて出來上つたら夫を湯殿か流し元の隅にをき二時間をき位に毎日〱水をかけて遣る、かけ過ぎて惡いとはない、場所さへあれば盥の上に二本も棒をわたした上に桶をのせると良い、桶は絶對に鹽氣の無い物でなくてはならぬ、斯くして水をかけて居る内に暑い時は五日、涼しくても一週間位で立派に伸びて食べ頃になる、そこで中央の良く出來た所を入用丈け取出し根を一寸つまみて好みに應じて調理する、醬油樽位の物に作れば盛りには後から〱出來、とても一家内位では食切れぬ程である、其儘汁の實にしても良く、また茹でゝ、三杯酢や胡麻合又は酢味噌など最も適する、油揚にしても豚肉を叩いて油でいためても、糅飯に混ぜても良い、もやしは非常に消化がよく蛋白質も充分に含んで居るから是程結構なるものは一寸得難きものである。

以上述べた所に據りてABC三種ヴヰタミンの性狀が略分つ

たと思ふが、此頃又D及Eヴヰタミンが新に發見せられたといふ報告があつた。

(四) Dヴヰタミンの發見

大正十一年七月廿七日の紐育電報に據れば、最近米國のジョンス、ホプキンス大學のマクコロム博士が佝僂病の研究中、新ヴヰタミンを發見し、同時にコロンビヤ醫科大學に於ても同様の研究中、日光が直接人間の血液内にヴヰタミンを發生せしむることを發見した　の報告があつた。

コロンビヤ大學に於ける實驗に據ると、佝僂病患者を日光に浴させると食物に何等の變更を加へずに平癒することが恰も肝油を豐富に與ふると同じ成績である、肝油の効力は其中に含有するヴヰタミンに因るものであるが、太陽も亦それと同様の作用をなす、それがヴヰタミンに因るか、或は他の理由の爲めかは不明であるが、兎に角血液内に化學的變化を起して損傷した骨が漸次回癒することがX光線寫眞と血液調査に據りて明瞭である。

同大學のヘス博士は日光と佝僂病との關係に就て動物試驗を行つたが、其結果に據ると、同じ飼料を與へた鼠でも暗中に居るものは罹病し、常に日光に浴して居るものは絕對に侵されない、佝僂病に罹つた小兒の血液は普通のものよりも燐分が缺乏して居るのが普通であるが、日光に浴すると共に漸次燐分が增加して來る、都會の小兒に佝僂病者の多いのは互に大なる建物に遮られて日光に浴することの機會が乏しいからである。

此新ヴヰタミンはAヴヰタミンと異る點あるに依り、マクロム博士は之をDヴヰタミンと稱して居る。

(五) Eヴヰタミンの新發見

更にまた近時にBヴヰタミンを創見して有名なるファンク博士は近頃新に一のヴヰタミンを發見したと報告して居る、同博士の言ふ所を聞くに、此ヴヰタミシが無かつたならば釀母菌が生長出來ぬのみならず、人間の生命をも維持することが出來ぬ大切のものであると、併し未だ詳細なる說明が到着せぬから不明であるが、ファンク博士は『更に幾多のヴヰタミンが將來發見せらるゝに相違ない』と言つて居る、兎に角右兩博士の發見で是迄三種なりしヴヰタミンが今度はＡＢＣＤＥの五種になつた譯である。

(六) 食品中ヴヰタミン含有比較表

前記三種のヴヰタミンが如何なる食品中に含有せらるゝかを

比較研究するに、今日迄欧米に於て報告せられたる調査を左に掲げて参考に供する。

食品名	A	B	C
脂肪類			
バタ	大量	ナシ	ナシ
肝油	大量	ナシ	ナシ
牛脂	中量	ナシ	ナシ
豚脂	ナシ	ナシ	ナシ
魚油	中量	ナシ	ナシ
鯨油	中量	ナシ	ナシ
植物性油	ナシ	ナシ	ナシ
肉類			
牛肉	少量	少量	少量
肝臓	中量	中量	少量
心臓	中量	少量	ナシ
脳髄	少量	中量	ナシ
鮭鰊	中量	微	ナシ
罐詰肉	微	微	ナシ
肉エキス	ナシ	ナシ	ナシ
卵	大量	少量	ナシ
蔬菜類			
甘藍(キャベツ)(新)	中量	少量	大量
同(煮)	少量	少量	ナシ
同(乾)	少量	少量	微
蕪菁	微	ナシ	大量
菠薐草	中量	少量	大量
トマト	少量	少量	大量
胡蘿蔔	中量	少量	大量
乳及同製品			
生牛乳	大量	少量	少量
脱脂乳	ナシ	少量	少量
乾燥乳	少量	少量	少量
煮沸乳	微	少量	少量
煉乳	微	少量	少量
チース	少量	少量	少量
穀菽類			
玉蜀黍	少量	少量	ナシ
小麦	少量	少量	ナシ
米の胚芽	中量	大量	ナシ
糠	ナシ	大量	ナシ
白米	ナシ	ナシ	ナシ
小麦粉	ナシ	微	ナシ
パン	ナシ	微	ナシ
大豆	少量	中量	ナシ
隱元豆	少量	中量	ナシ
發芽穀菽	少量	中量	大量

果實類			
バナナ、	微	少量	微
胡桃	少量	中量	少量
レモン汁（新）	ナシ	ナシ	大量
オレンジ汁	ナシ	ナシ	大量
其他			
酵母	ナシ	大量	ナシ
澤庵	ナシ	少量	ナシ
酒	ナシ	ナシ	ナシ
味噌	ナシ	ナシ	ナシ
醤油	ナシ	ナシ	ナシ

之を要するに

Aヴヰタミン｛専ら生長發育に關する最も大切なるものにして之を缺く時は榮養不良となり、或は乾性眼炎（とりめ）、又佝僂病（せむし）に罹る

Bヴヰタミン｛を缺く時は心臓疾患を招き、脚氣病となり、神經炎を起す、

Cヴヰタミン　を缺く時は壊血病を誘起す

右の如き恐る可き疾病を招くに依り平素榮養に心を用ひるものは前表の食品中を選みいろ〳〵と之を取替ひ決して一方に偏してはならぬ、尚料理の方法等に就ても殺菌以外に非常な高度の温熱を加へ折角のヴヰタミンをして其効力を失はしむる如き愚を學ばぬやう心掛けねばならぬ。

今假りに中流階級の人にして一週間の献立を擧ぐれば斯んな物では何うであらうか、但し官吏又は會社員にて晝は其省社の食堂にて註文するものとしたのである。

第一日

朝食	晝飯	晩食
ほうれんそう味噌汁	バタ附パン半斤	鷄臓物、玉葱と卵の親子煮
鷄卵　一	牛乳　一合	キャベツ、トマトの三杯酢
煮豆	果物　少々	香の物
香の物		七分搗飯
七分搗飯		

第二日

朝食	晝飯	晩食
豆腐味噌汁	ライスカレー（野菜入）一皿	餡汁
隱元胡麻合	菓物　少々	生鮭の照燒
鱈のデンプ	コーヒー一椀	香の物
香の物		七分搗飯
七分搗飯		

第三日

朝食	晝飯	晩食
アサリの味噌汁	サンドヰッチ一皿	牛肉とヂヤガ薯
ワカメの佃煮	菓物 少々	鯟の昆布卷
蚕豆	紅茶 一椀	香の物
香の物		七分搗飯
七分搗飯		

第四日

朝食	晝飯	晩食
キャベツ味噌汁	蕎麥	鰤の附燒
鯛味噌	もりかけ二つ	大根おろし
海苔 少々	蕎麥湯一杯	豆腐の吸物
香の物		香の物
七分搗飯		七分搗飯

第五日

朝食	晝飯	晩食
ワカメの味噌汁	ジヤム附パン半斤	兎肉の附燒
鹽鮭 一切	コヽア 一椀	ズイキの酢胡麻
煮豆		切鯣のスマシ汁
香の物		香の物
七分搗飯		七分搗飯

第六日

朝食	晝飯	晩食
トロヽ昆布スマシ汁	トーストパン半斤	鯖の油燒
高野豆腐の煮メ	野菜サラダ	キャベツのオムレツ
納豆（大根卸）	牛乳 一合	豆腐の餡かけ
香の物		香の物
七分搗飯		七分搗飯

第七日

朝食	晝飯	晩食
山薯のトロヽ汁	饂飩の餡かけ	鮪の刺身
鰯のメザシ	生卵 一	小間切と野菜のシチウ
香の物		ヒジキと油揚
七分搗飯		香の物
		七分搗飯

馬鹿囃子と見世物氣分

村松梢風

九月にはいつて、それから彼岸前後になると、東京の市中でも諸所方々でお祭が始まる。夏の夜の緣日も惡くはないが、九月の大祭はさすがに賑やかで、軒提燈のついた町を御輿を擔いだ連中が「わつしよ、わつしよ」と練り歩くのを見ると、流浪の都會居住者の胸にも何んとなく懷かしみが湧いてきて、此の土地に對する愛着の度が年々增していくやうに感じられる。東京の祭には附き物になつてゐるあの馬鹿囃子が私はまた好きだ。陽氣で單調な、あの馬鹿囃子の音色を聽いてゐると、私は識らず〳〵百年、二百年前の江戶の生活、あるひは數百年前の武藏野に棲んでゐた農民達の今から思へば夢のやうな生活を、眼の前に見るやうに彷彿するのである。わけても私が馬鹿囃子から忘れ難い感銘を得たのは、去年の秋の祭りであつた、それは四年に一度の本祭といふので昨年は何處の氏子も氣負つてゐた。神田明神の祭禮には久し振りで山車が出た。私が住んでゐる駒込附近でも、根津權現と白山神社とが同日から始まるので珍らしい賑はひだつた。處々の往來の傍らに囃子屋臺が出來て、其處で終日馬鹿囃子をやつてゐた。私もよくは知らないが、屋臺で打つ囃子には、屋臺囃子、昇殿、四丁目などといふ名稱があるさうだ。とにかく非常に陽氣なもので、あれが始まると俄かにお祭氣分が濃厚になる。

其のお祭の最中、私は徹夜して机に對つてゐた。駒込邊りは片田舍も同樣なので、夜が更けてからは、折り〳〵上野の森の彼方から貨物列車の汽笛の音が響いて來るほかは、世間は死んだやうに靜かになつてしまふ。曉近い頃だつた、我を忘れて仕事に耽つてゐた私の耳に、其の寂莫を破つて、突如馬鹿囃子の音が聞えてきた。「テンテンテンテン――テンテケテン」と締め太皷を打ち出したと思ふと、「ドン――ドコドン」と大太皷が大間にはいり始めた。とやがて絕え入る如き笛の音が太皷の間を縫ふて行くやうに「ヒヤラ〳〵〳〵――」と鳴り出した。それは四五丁離れてゐる香町でうつ囃子だつた。靜かな囃子だから多

分あれが「昇殿」と云ふのだらう。晴の澄んだ空氣の中を傳つて流れてくる其の囃子には、魂にしみ込むやうな冴えた音色があつた。私は其の時思はずペンを取り落した。そして私の胸は、どんなよい音樂を聽いた時にも劣らない強い感激をもつて盪されてしまつた。其の囃子は夜が明けはなれて、電車の音が騷がしくなる時分迄續いた。

今年は間の祭なので、それほど好きな馬鹿囃子が聽かれなかつたので物足りなかつた。が、根津權現の祭禮だけは、夜散步がてら獨りで行つて見た。神樂堂には例の馬鹿踊といふ舞があつたがそれは見ずに、社の裏手の見世物小屋の方へ行くと、小屋掛けが四五軒並んでゐた。私は、見世物を見る事も大好きだ。去年こゝの祭では「お杉お玉」といふ娘手踊と、ろくろツ首の藝當を見たやうに覺えてゐる。それから最近もよそで幽靈のからくりだの、支那人の手品だの、人面獸身の怪物などを見てゐる。小屋掛けの見世物を見に這入る時ぐらゐ、無邪氣な小供心に戻ることは無い。あの下等な顏をした木戸番の騷々しい呼び聲だの、ドンチヤン／＼といふ鳴り物だのが、謂れもなく私の好奇心をそゝつてついうか／＼と小屋の中へ足を引き入れられてしまふのである。見世物は幼稚であるほど興味の多いものである。舞臺の細工（からくり）が見え透いてゐるにも係はらず、口上言ひが眞面目な顏をして、口上を言つたり拍子木を打つたりしてゐるのも面白い見物である。又小屋掛けの女藝人は、淺間しく、あはれで、厭はしいけれども、それで不思議に私の心を惹き付けて止まないことがある。いづれも外へ向つた高い樂屋で、態と顏を見よがしに化粧をしてゐる女達、ケバ／＼しい衣裳を着込んで、白粉を目茶苦茶に塗り付け、漆のやうに濃い眉を引いた女達が、出鱈目の唄や鳴り物を相手に、手踊をしたり曲藝を演じたりするのを見てゐると、冷汗の流れるやうな恥かしさをおぼえると同時に、一方では、さうした低級卑猥な空氣の中でばかり釀されるところの放縱安逸な耽美心を、心ゆくまで味はふことができるのだ。私は知らず／＼彼等に魅せられてしまふ。墮落と捨て鉢の有り丈に盛りを過ぎてしまつた年增の顏も、豚のやうに肥えふとつて恥も誇りも知らないやうに見える若い娘の態度でも、私の眼にはまたなく美しいものに見えてくる。家も、世間も捨てゝしまつて、ジプシーのやうな其の女達と一緒になつて、他國から他國へと漂らひ歩いて見度いやうな氣持になる。

私は一番最初は改良劍舞といふ手踊の見世物へはいつた。中は滿員だつた。私がはいつて行つた時は、男が一人で「お半長右衞門」の茶番狂言を演つてゐたが、これが濟むと今度は娘の手踊が始まつた。樂屋から舞臺へ坂になつて附いてゐる花道から

稽古衣の上へ簑を着て、松明を片手に、笠で顏を隱しながら、曾我兄弟が威勢よく驅け下りて來る、カタン〳〵〳〵とつけがはいる。と、舞臺へ掛り、型の如く入り交りになつて「折しも降り來る五月雨の、雨こそ勿怪の幸と」てな割科白になる。科白が了つて笠をぽんと後ろへ投げるのがきつかけで唄になる。唄の合間〳〵へ「カタン〳〵」とつけがはいる。勇壯な踊が始まるのである。十郎は痩せぎすで齢も若く女學生のやうな感じのする割に上品な娘だが、五郎のはふは丁度正反對の、野猪の如く肥大で荒々しい女だ。が、藝は其の野猪のはふがずつと上手だ。そして彼は熱心だつた。けれども餘り大きく眼を剝いたり、ひつくり返りさうに見得を切つたりする容子が可笑しいので、其の都度見物が笑ひ崩れる。

改良劍舞といふものは明治何年頃から創つた見世物だか知らないが、私などが小學生の頃には既に旺んに行はれてゐた。其の頃國の方の祭禮へ毎年きまつて來る改良劍舞の一座があつた其の座頭は女で、而も非常な美人だつた。聲も良く踊も上手であつた。まつ黑くて長い髮の毛を後ろへ下げ、白の鉢卷をした其の美しい座頭の舞臺姿は勿論佳かつたが、時には其の儘の姿で木戸番に座つてゐたりして、「ハイ坊ちやん、おつり」なぞとしやがれた地聲で云つてつり錢を手渡されたりすると、私は思はず顏を紅めて胸をときめかすのだつた。其の後田舍の中學を了へて東京へ出て來た年あたりに、靖國神社の祭典に行くと、澤山の見世物の中に改良劍舞もあつたので這入つて見たら意外にも國で馴染の其の一座だつたので、私は何んとも云へず懷かしい氣持にうたれたのだつた。其の時見た座頭は、私が子供の時分とさして變りはなく不相變、美しい顏と聲とを有つてゐたが、それからもう十五年位經過してゐる。彼女は今何處に居るだらう……？何處にゐたにしたところで、もう彼女も老境に入つてゐる筈だ。あの美しかつた容色も衰ろへて今では人を惹き付ける力は無いだらう……。

唄ひ手は、さつきお半を演つた男だが、喉がまるきし潰れてゐるので一向引き立たない。一幕濟むと其の男が舞臺へ出て「演藝全部一同の終りでござい。今入りさんはお跡へ殘り、先樣前通りは替られませう――ッ」と呶鳴る。樂屋ではドンチヤンドンチヤンと囃し立てる。見物人はどや〳〵と動き出す。其の時私がふと樂屋を見上げると、七十餘の婆さんが幕の側へ座つて三味線を彈いてゐるのが眼にはいつた。三味線はちつとも鳴らなかつた。が、婆さんはそんな事にはお構ひなしで、鼠色の毛布にくるまつた脊中をまるくして、ショボ〳〵と瞬きをしながら、何の感興も無い顏付でペコ〳〵〳〵と三味線を彈い

てゐるのだ。邊りの騒ぎも婆さんの耳には風の音以上には響いてゐないかのやうに見える。婆さんは唯機械的に撥を動かして鳴りもせぬ三味線を彈くばかりである。それはほんとに枯葉のやうな感じのする婆さんだつた。あの風が吹くとカサカサと音をさせて、土の上を轉がつていく枯葉のやうな……。

そこを出て今度は支那人の片輪の見世物へ這入つた。それは齡が二十五で目方は二十貫といふ、胴體ばかりで脚の無い娘と六十近い老爺だが右の手ばかり大きくなつて其の片腕の目方が十四貫あるといふ稀代の片輪と、いま一人はお伽噺の絵にあるやうな豆頭の小僧とであつた。後見は日本の女だが矢張支那服を着て金ぶちの眼鏡をかけた、なか〳〵ハイカラな女だ。是れは片輪振りを見るだけで、藝と云つた處が、豆頭の小僧がキツキツと猿みたいな聲を發し、白い齒を見せて笑ひながらヨタ〳〵歩くか、胴體ばかりの女が、床の上を手で歩いて見せる位なもの。其の次は足藝を見に這入つた。是れは表看板にもある通り、生れは加賀の金澤で五十何歳の男、十二歳の時、兩腕を肩の附根から切斷してしまつたので全く手といふ物が無い。そこで多年修業錬磨の功を積んで此の足藝といふ事を覺えたと云ふ、坊主頭で、口髭をちよつぴりと生やした手無しの太夫は、幕と脊中合せに胡坐を搔いてゐる。其の前の處に半疊の疊が置いてある。兩脇に少し離れて、二十五六の銀杏返しの女と、十歳位の可愛らしい小娘とが座つてゐる。銀杏返しが拍子木を打つたり後見を勤めたりする。小娘が黄いろい聲を張り上げて、「エッチヤナア、エッチヤナア」と囃し立てる。最初は桶の組み立てといふ藝當を見た。バラ〳〵の桶子を一枚々々足で拾つて半疊の上で組み合せ、それに箍を嵌めて、左の足で桶をグル〳〵廻し乍ら、右の足では槌を持つて「トン〳〵、ストトン〳〵」と箍を叩く。箍が掛ると今度は底を入れる。面白おかしく僅かの間に桶が出來上つてしまつた。次なる藝當は、一厘錢を百文ばかり差しにさしたのを取り出して、一旦紐の結びを解いて殘らずザラツとぶちまけてしまふ。今度は其の差しの糸へ足で縒りを呉れる。それから右の足の親指をつかつて錢を一文〳〵寄せ集めて横に揃つた處で、左の足で差しを持つて一度に穴へ突き通すのである。首尾よく通ると元の如く紐の端に結び玉を作つてポンと向ふへ抛り投げる。まことに鮮かなものである。其の次は、お盆の上へ茶碗二個と箸を一ぜん載せて持ち出す。一つの茶碗には豆が入つてゐる。太夫は空のはふの茶碗を右の足でちよいと抓んで頭のてつぺんに載つける。それから左の足で豆がはいつてゐる茶碗を持ち、右の足では箸を持つて、兩脚を空へ浮かせたまゝ豆を一粒々々箸で挾んでは頭の上の茶碗の中へ運

ぶのである。以上の藝當を、彼はほんたうに楽々としてのけるのだつた。けれども其のとぼけたやうな顔からは汗が流れるので、彼は肩の處へ短かく殘つてゐる皮を着た棒のやうな物をピヨコ〳〵動かしては汗を拭くのだつた。太夫が一と休みする間は前藝として小さい娘が獨樂の曲廻しをやつた。それ迄は知らずにゐたが、其の小娘も、銀杏返しも、どちらも鳥娘だつた。浮かれはしやいでゐる二人の娘の顔が、氣のせいか急に暗く悲しげに見えてきた。



今年中一番私の心を動かした事

拜啓　晩秋爽涼の候益々御淸適の事と欣賀の至りに存じ奉り候
扨毎々御迷惑の儀と恐縮に存じ候へ共、左の諸項に對する御回答を得、之を「中央公論」十二月號に掲げて、本年掉尾の興趣ある讀み物と致し度候へば、十一月十三日中に屆き候樣御寄稿の程お願ひ申上げ候（御回答は切取線以下の御回答用紙の各項目の下の餘白に直ちに御記載願上候）

何餘りに長きに失するもの及び期日より後れ候ものは蒐錄致し兼ね候へば右豫め御含み置き願上候

大正十一年十一月九日

「中央公論」編輯局

切取線

御回答用紙

を喜ばした事（一）

を悲ました事（二）

を怒らした事（三）

を笑はした事（四）

今年中一番私

を感激せしめた事（五）
を義憤せしめた事（六）
を瞑想せしめた事（七）
を恐怖せしめた事（八）
に教訓となつた事（九）
に輕蔑の念を起さした事（十）
に崇敬の念を起さした事（十一）
に嫌忌の念を起さした事（十二）
の感服した文學及び藝術（十三）

左に蒐錄するは右の如き形式の下に寄稿を乞へるものなり。御回答を賜はられたる諸先生に深く感謝の意を表す（編者しるす）

○ 小川未明

（一）郊外に移つたゝめか、子供がみんな達者になつて、顔の色が紅味を帶びてゐることを嬉しく思ひます。

（二）春、父に遇つた時に、なか〳〵の元氣でしたが、何しろ高齢にて、昔のやうでなかつたことを悲しく思ひます。

（三）天神町にゐた時、家主は裁判官でしたが、法律を楯に家賃値上に應じなかつたゝめ立退きを迫りました。社會的正義などの彼等にないのを、深く憤らしめました。

（四）事實に於て糞尿問題は、まだ解決されてゐない。いくら威張つても東京が糞尿攻めになつてゐると思つた時、をかしかつたが、處によつては、杓子で掬んで溝に捨てゐる家がある

と聞いた時、私は笑はずにゐられなかつた。

(五)土耳古の興起したこと、虐げられ、苦しめられたものは、最後の一人を失ふまでは決して、復仇の念を捨てないことを同時に感じました。

(六)私は、小學校だけは神聖だと思つた。ところが、市立、私立共に腐敗してゐて、敎師は、金持に招かれ、收賄する事實を聞いたばかりでなく、試驗の成績も私情によつて決せられると聞いたこと。これにました義憤はなかつた。

(七)小作人と土地問題について考へさせられた。もし今年飢饉だつたらどうだらう。米を常食とする私達は、小作人がどん／＼耕やさなくなる事實を何と見よう。

(八)コレラが近所まで襲來したこと。ロシヤの飢ゑた子供等の骨と皮ばかりの寫眞と、飢ゑた人が、屍を喰つた寫眞を見たこと。

(九)炎天九十度といふ日に友人と荒川へ釣に行つて、私は汗が流れるので素裸になつて、帽にも被らずに舟の上で釣をしてゐて卒倒しました。後で、肌の皮が剝げて、五六日頭痛が續いたが、必ず炎天には何か被り着なければならないと敎へられた。

(十)獨逸皇帝の孤獨と寂寥の境遇にあることは眞に同情するが、獨逸民の窮困と、大戰の責任者として、皇后の死後一年たらずに結婚し、新婦に贈つたダイヤモンドの冠は輕蔑の念を起さした。

(十一)モスコウにて、無產階級のために活動する片山潜氏。大抵六十にもなれば意氣衰へ、納り返へる中に、まだ／＼主義に殉じつゝあるを崇敬す。

(十二)上り屋敷にゐた時武藏野線で、青年の轢死者があり、その血がガードに流れてゐるのを洗はずに五六日もそのまゝにしてあつたこと。

(十三)小說にては中西伊之助氏の「赭土に芽ぐむもの」前川河廣一郎氏の「三等船客」。繪畫にては、中澤弘光の版畫「日本大觀」にして、恐らく、廣重以後の風景畫家ならん。廣重に紅色の憧憬あれば、氏に青色の悲哀あり。

(一)喜ばした事
(二)悲ました事
(三)怒らした事
(四)笑はした事
(五)感激せしめた事
(六)義憤せしめた事
(七)瞑想せしめた事
(八)恐怖せしめた事
(九)敎訓となつた事
(十)輕蔑の念を起さした事
(十一)崇敬の念を起さした事
(十二)嫌忌の念を起さした事
(十三)感服した文學及び藝術

○ 白鳥省吾

(一)とりわけて嬉しきこともなかりけり水のごとくも時は流る

る。

(二)吾が友の小杉寛は柩なる愛妻を覗き去りがてにせり

(三)栗鼠のごと躍りあがりてくれがしの頭を撲ちぬ弘前の一夜

(四)川渡の温泉の宿に舊友と心ゆくまで笑ひけるかな

(五)豐葦原瑞穗の國の農民の話きく毎に涙こぼるる

(六)警官はサーベル鳴らし春の夜の風にまたたく星の恐さよ

(種蒔き社講演中止)

(七)武藏野の夕映のはて秋の富士小さく美し親しみ深し

(八)何者か火つけ道具の麻繩を生垣のなかに隱しゆきけり

(九)田舍びと三里の路を停車場へ荷馬車に乘れり母もまじれり

(十)吾が家の櫻の枝を盜み伐りて薪となせる隣り人かな

(十一)雪かつぐ遠山脈は青空に神の姿を描きけるかな(伊香保にて)

(十二)隣室の四人の客が一人づつ娼婦四人と抱き寢せるかも

(鹽原にて)

(十三)いにしへの奈良の都の夢ふかきみ佛達にわれはぬかつく

(奈良博物館にて)

○

高島米峰

(一)歐米にも支那にも佛教の研究者が非常に殖えて來たこと

(二)學者とか宗教家とか教育者とかいふ階級に背信忘恩違約の惡事が尋常茶飯事として行はれて居ること

(三)こゝ數年怒を封じて居る、恐らくは將來も

(四)新しい村に電灯が必要になつたといふので芝居まで興行したといふこと、そのうち電車も必要になり自働車も必要になりガスも必要になり料理屋も必要になり藝者も必要になり……かくて遂に新しい村は舊型の都となり了るだらう

(五)生れて始めて異父姉をその病床に尋ねて姉弟の名乘りをしたこと、姉は六十七歳僕は四十八歳

(六)文藝家とやらいふ人々が自己の醜き生活を辯護せむがために古聖前賢を勝手に玩弄して居ること

(七)友人の死

(八)次男がベースボールを見物して居て外れ球を鼻柱に受けて出血の甚しかつた時

(九)比叡山上の一夜

(十)政黨者流の援助なくしては演說會さへ開き得ざる新婦人連の微力

(十一)攝政宮殿下の御行動

(十二)便所の掃除を賣物にして無所有主義といふ安價な聖人道を鼓吹して居る人が金のために訴へられたり訴へたりして居

（一）喜ばした事
（二）悲ました事
（三）怒らした事
（四）笑はした事
（五）感激せしめた事
（六）義憤せしめた事
（七）瞑想せしめた事
（八）恐怖せしめた事
（九）教訓となつた事
（十）驟嘆の念を起さした事
（十一）崇敬の念を起さした事
（十二）嫌忌の念を起さした事
（十三）感服した文學及び藝術

ること
（十三）共に無し

○　田中貢太郎

（一）春と夏との二回故郷に歸つて村にゐる所謂竹馬の友と酒を飲んで少年の日の思出を話しあつたこと。
（二）高知縣高岡郡戸波村の友人横田彦太郎君が耕地整理組合長として勤務中、十月三十一日、使用せる殺人狂の一勞働者に理由なくして襲撃せられて横死したこと。
（三）先輩某氏が酒を疾んだ時、某新聞の社會部長に事情を明かして新聞に載せざるやうに頼んだところ、承諾しながらその日の夕刊に載せたこと。
（四）イタリイのフアスシスチ團が蜂起した時、共産黨の領袖を捕へてそれにヒマシ油を飲まして釋放したと云ふ新聞の記事。
（五）化學的に一升五十錢の酒が出來ると聞いた時、しかし金があればそんな酒は飲むまいと思つた。
（六）一同業の細君が若い男の許へ逃げて行つたこと。
（七）二月十一日、高知市にゐて東京から歸つて來る友人を待つてゐると、友人はその朝乘つてゐた汽船の中で急死してゐた。私ははかない人生に就ていつになく瞑想に耽らされた。
（八）先輩の病氣、
（九）某新聞との關係から嫉妬の恐るべきことを學んで大に教訓となつた。
（十）創作に名を借りて私怨を晴しあふ一部同業者の行爲。
（十一）無
（十二）女歌人白蓮と云ふ者の私通して男の許に走りてより尼になるまでの紛擾及びそれに關する私生兒問題。
（十三）芥川龍之介氏の『庭』と云ふ中央公論所載の小說。單行本としては生田長江氏の『落花の如く』

○　高濱虛子

（一）「隅田川」の能を演じた事
（五）「隅田川」の能を演じた事

○　近松秋江

喜怒哀樂感情激昂の如き、精神力を疲勞せしむるやうなこと

を努めて避けんといたし居れるに、幸にして今年は左様のことに餘り出會はさず、先づその點を喜び居れり。

次に、小生自身に數年來惱みし頭痛と嘔吐の劇しき發作の殆ど平癒せしは最も欣快とする所なり。

時は正さに晩秋初冬の好季。膝を容るゝばかりの庭に落葉の散りしけるを見て、蕭瑟たる自然の風物は倍々我が生の沈靜安樂ならんことを思はしむるのみなり。故に御下問にお答へすべき事項少しも持ち合はせ無之。

○ 長谷川天溪

(一)久邇宮殿下の口語體の御令旨
(二)森歐外氏の逝去
(三)新聞紙上に時々封建時代の表現法を見た時
(四)加藤內閣の出現
(五)日光に於けるイギリス皇太子殿下の平民ぶりの態度
(六)政友會の態度、外に對しても內部に對しても
(七)最近帝大文科生の殺人事件より、どこまで學問が個人の生命と融合するかといふ點について考へさせられた
(八)物價の下落せぬ事
(九)故大隈侯の國民葬と故山縣公の國葬との對照
(十)ブールジョア階級の節約宣傳
(十一)甚だ危險な仕事を平氣でやつてゐる勞働者を見た時
(十二)平和博覽會
(十三)特に記すべきものなし

○ 水野廣德

一番と云ひ得るや否やは知らぬが記憶に存するまゝに

(一)海軍縮小協定の成立
(二)普通選擧の法案の否決
(三)「滿鐵」其他疑獄の續出
(四)引下げと稱して湯錢の値上ゲ
(五)列強の暴壓に對するケマルの蹶起
(六)浦鹽武器密賣問題
(七)日本の將來
(八)コレラ
(九)心當りなし
(十)帝國議會の自墮落
(十一)英國皇太子の平民的態度
(十二)國粹會の暴行

(一)喜ばした事
(二)悲ました事
(三)怒らした事
(四)笑はした事
(五)感激せしめた事
(六)義憤せしめた事
(七)瞑想せしめた事
(八)恐怖せしめた事
(九)教訓となつた事
(十)輕蔑の念を起さした事
(十一)崇敬の念を起さした事
(十二)嫌忌の念を起さした事
(十三)感服した文學及び藝術

○中條百合子

今年一年、特に後半は、私にとつて、內的に、深く種々の變動あり、感銘を受けた時でした。却つて一々の題目を見ると、どれにもあてはめるものがない心持が致します。

○島木赤彦

(一)一、娘重症全快
一、萬葉集古寫本校合の一部を了し、萬葉考證著者自筆本全部の筆寫を了へしこと
(二)一、鷗外先生の逝去
(五)一、古賀鶴所談通夜筆記一文
一、大矢透氏が七十餘歲の老齡を以つて假名沿革研究を續けらるる材料の一部を拜見せしこと
(七)一、黑谷十日間の寺院生活
(十一)一、大和國內に散在する萬葉遺蹟と推古飛鳥藤原奈良時代佛敎藝術と對照して上古祖先の精神生活を考へ見しこと
(十三)一、鷗外筆「古い手帳から」
一、土田千尋歌集「靑杉」
各項目該當のもの無きにあらざれど簡單にては分らず或は誤解を招くことなきにあらず多く省略致し候不充實の回答御取捨御自由に願ひ上候病中失禮匆々十一月十一日

○中村吉藏

(二)は、故鄕の實家の主人として父祖の業を繼ぎ、それを可也發展させて鄕黨からなみ〲ならぬ信用を受けてゐた次弟が癌のために斃れた一大不幸事です、彼は別に學問もなく世故に長けてゐなかつたが、實に「純眞」な人間でした、彼の前に頭を低げたいやうな氣がする事も屢々ありました、彼を喪つた悲みに比ぶれば他の一切は自分には影の薄いものにしか見えません

○生方敏郎

この朝は喜怒哀樂の感情が容易に動かなく成りましたので、特に飛び上るほど嬉しかつたと思ふ事や悲しかつたと思ふことは記憶しませんが、今年中一番私を喜ばした事は(一)妻のヒステリーが産後ケロリとなほつたこと、私を悲ました事は(二)

長男が病身に成り成績も幾分落ちた事、私を怒らした事は（三）妻の親族らの無禮なるに對して。私を笑はした事は（四）長女が片言で喋り父母をも犬をも同じくアーヤンと呼びつゝある事。その他笑ふ事は頗る多し。私を瞑想せしめた事は（七）離婚に就いて去年二月から此五月迄考へた。離婚以外の事は殆んど考へる餘地がないほど離婚に就いて考へた。私を恐怖せしめた事。は（八）豆州湯ヶ嶋温泉の山道を子供を連れて散歩してゐる際下の方からドカン／＼鐵砲を打たれ、逃げ場に困つた事。私に教訓となつた事（九）妻のヒステリーから、及びその親族らの迫害から、修養するところ多かりき。私に輕蔑の念を起さした事は（十）妻の親族らの下劣なる態度に對して。私に畏敬の念を起さした事は（十一）離婚及び子供の將來に就いて考ふる爲め、去年永く歸らぬつもりで旅に出で、年も明けてこの一月十日駿州三保の松原に遊び、海上の富士山を見て、自然崇拜の心を起したり。私に嫉忌の念を起さした事は（十二）妻の親族らの無智邪曲なる言動に對して、三男維造不幸にして妻の親族に多く育たるより、日々その顏を見るのが嫌に成り、惡いことゝは思ひ乍ら、何うしても抱くことさへ出來ぬ。少しのことにも蹴飛すなど我心狂ひたる如し。

○　有島生馬

（一）十何年ぶりかで、セザンヌのセザンヌらしい作品三四點に接し得た事。

（四）夜中にピストル强盗が這入つたと思つて家内中驚いたら猫が高い所から額を落したのだつた事が知れた前後の有樣。

（十三）「暗夜行路」のやうに友達の作は別として、葛西氏の不良兒には感服しました。

又藝術上の作物ではフアデの野口氏胸像とザツキンの水彩及藤田氏の靜物に注意を拂ひました。

○　河井醉茗

（一）この相模の海岸へ移つてきた事、山に對つても海に對つても私の來るのを待つてゐたやうに思ふ。

（二）三女かつらを十六歳で喪つた悲しみ。

（五）東京を離れて東京を見ると、强く生きるのも東京なら强く死ぬるのも東京、東京に居たら死ぬ間際まで死ぬことに氣附かないだらう。

（七）自然愛より人間愛へ、人間愛より自然愛へ。

（八）恐ろしいものもバイキン、恐ろしくないものもバイキン。

（一）喜ばした事
（二）悲ました事
（三）怒らした事
（四）笑はした事
（五）感激せしめた事
（六）義憤せしめた事
（七）瞑想せしめた事
（八）恐怖せしめた事
（九）歎調となつた事
（十）輕蔑の念を起さした事
（十一）崇敬の念を起さした事
（十二）嫌忌の念を起さした事
（十三）感服した文學及び藝術

（九）私の詩集に私の年表を附けるので、明治二十八年以來今年までの日記を順にくり返してみた。矢張私を教へるものは私の外になかつた。

（十一）いつでも詩は尊いものだと思ふ。

（十三）最近に讀んだものでは「藝術の圓光」北原白秋（詩と音樂初號）、外に飜譯ではアルツイパアセフの諸作。

○

高須梅溪

（一）トルコの奮起
（二）森鷗外氏の長逝
（三）政黨の無能力
（四）一部小說家の成金態度
（五）「國民之日本史」に對する有力な反響
（七）人生及び社會問題の歸趨と大乘佛教の哲理
（八）險惡な人心を反映する殺人犯罪多し
（九）ロイド・ジョージの態度
（十）淺薄な宗教文學の流行
（十一）攝政宮殿下の御勵精
（十二）學生間に於ける戀愛萬能傾向
（十三）一つもなし

○

室生犀星

（一）なし
（二）己が文つたなき事。
（三）澤山あり。されどそはかげらふの類のみ。
（四）なし、
（五）なし、
（六）なし、
（七）子供を失ひたること。
（八）なし、
（九）發賣禁止にあひたること?——。
（十）澤山あり。己れにも人にも。
（十一）なし、
（十二）文筆とみに憂き事。
（十三）なし、

○　日夏耿之介

(一)何一つなし
(二)妻を亡したり
(三)愚人の盲動也
(四)資本家の沒落也
(五)ニル・アドミラリー
(六)義憤といふ語の語感悪ければ書きたきものなし
(七)特にいふべきものなし森林中でも電車中でも出來るもの也
(八)この日本！
(九)何一つなし
(十)煽民家の金儲け也
(十一)社會記事にさへある也
(十二)思想上のヤンキーズムの跳梁也
(十三)何一つなし

○　室伏高信

(一)二つの子供の丈夫になつたこと
(二)今になつて一つの感激が起りつゝあるように思ふがそれは今言ひきれないような心持ち。

(十三)「カリガリ博士」(活動寫眞)と藤村千代さんの創作

○　前田蓮山

(一)嬉しかつた印象はありません強いて言へば私の甥の妻が子を生みました
(二)原敬氏一週忌の日
(三)格別の印象はありませんが商人の暴利と奉公人の缺乏には怒りたくなつたことがあります
(四)内閣改造問題で苦笑しました
(五)小野訓導の殉難
(六)印象はありません
(七)我憲法運用に就て及び我軍備に就て並に日本國家の將來に就て
(八)國民思想の不安定
(九)一つもありません
(十)支那政治家及び日本一部政治家の輕擧盲動
(十一)ロイド・ジョーヂ氏の態度及び英國民に對し
(十二)日本に於ける政爭の卑劣なること
(十三)ありません寧ろ知らぬのでせう

（一）喜ばした事
（二）悲ましたた事
（三）怒らした事
（四）笑はした事
（五）感激せしめた事
（六）義憤せしめた事
（七）瞑想せしめた事
（八）恐怖せしめた事
（九）教訓となつた事
（十）輕蔑の念を起さした事
（十一）崇敬の念を起さした事
（十二）嫉忌の念を起さした事
（十三）感服した文學及び藝術

○ 松崎天民

（一）家みな無事で、何うやら此うやら飯が食へたことゝ長男が一高に入學し、三男が中學に入つたことなど

（二）新聞界を去つて、新聞社中の空氣からはなれた事、月々の定まつた收入が無くなつた事など

（三）自動車に泥をはねかけられた時、電車で足を踏まれた時、電話交換手が無能で駄目な時、怒髮天を衝く

（四）片上伸氏の弟が二人を殺し縊死した大馬鹿の行爲、新聞を見た刹那、カラ〳〵と腹の中から大笑した

（五）何う考へても、この頃にはかゝる心持に出合はす不幸なのであらう、無感激の年である

（六）三宅坂に寺内の銅像が立つ、銅像を強られるやうで、心中憤りに堪えません

（七）若し盲目になつたら……最も痛切に近眼の行末につき、いろ〳〵と想ひ惱み苦み煩ひました

（八）晩春の大地震と、初秋のコレラ流行には全く恐れ怖れました

（九）自分で自分がやつと判つて來たことを、何よりの教訓としませう

（十）春の帝國議會が愚劣で、現代議士が黨爭本位にのみ盲動して、各政黨が國民の生活を知らぬ馬鹿〳〵しさに愛想が盡きました

（十一）攝政宮殿下を拜して、何だか非常に親しみを覺え、自然に嬉しいやうな妙な氣持に、胸がゾク〳〵しました

（十二）柴田環が藝術家顏して、良人を置去りに、外國へ行つた申譯を、藝術のため云々呼はりした圖々しさに

（十三）菊池寛、里見弴、宇野浩二、三家の小說と、澤田正二郎の演劇と

○ 川路柳虹

（一）子供の出來たことゝ家の出來たこと

（二）父の老衰せし事

（三）人のことを理解せぬくせにいゝ加減な罵言をいふ人間を見て

（四）同上のやうな男の態度のつぢつまの合はぬのを見て

(五)特になし
(六)同上たゞ强いて言へば我々の社會が益不合理な狀態になることについて
(七)友の死に逢ひていろ〳〵に「生存」といふことを考へさせられた
(八)ロシア饑饉の現狀を知つて
(九)建築上の諸技巧について
(十)無智な男の思ひ昂つた態度を見て
(十一)何にもなし
(十二)センチメンタルな宗教文學
(十三)チンパリストの音樂、安井曾太郎君の繪、藤田嗣治君の繪、フアツギ氏の彫刻、現代日本文學に至つてはこれらに比すべきほど力あるものを見ず

このほかに「困つたこと」といふ項目なきを怨む。そこには可成り澤山かくべきことがあつたのに。

○　永井柳太郎

(一)在支友人より到着したる大箱二ツが全部支那に關する書籍であるを知つた時。
(二)敬愛したる先輩の一人を哭した時。
(三)取立てゝ云ふ程のことなし。
(四)可笑い事は常にある。どれが一番と云ふこと出來ぬ。
(五)地方に出でゝ地方の人々の國事に對する眞劍さを見た時。
(六)何時もながら虐げられたる人々を思ふ時。
(七)二ケ月に亘る入院。
(八)天に逆らひ天の咎めを感じた時
(九)加藤内閣出現し普選即行の愈々至難なるを思ふた時。
(十)何時もながら内容の空虛な偶像の如き人々の意張るを見た時。
(十一)謙信の墓に詣でた時。
(十二)コレラ襲來の新聞を見た時。
(十三)友人より贈くられたる久遠の作「日蓮」

○　村松梢風

(一)花のやうな愛人が出來さうになつた時。
(二)出來さうになつた愛人が結局出來なかつた事。
(三)隣人の飼ふ軍鷄が每日やつて來て朝顏だの菊の芽をたべてしまつた事
(四)節約デーといふ事。
(五)一寸思ひ出せません。

(一)喜ばした事
(二)悲ました事
(三)怒らした事
(四)笑はした事
(五)感激せしめた事
(六)義憤せしめた事
(七)瞑想せしめた事
(八)恐怖せしめた事
(九)教訓となつた事
(十)輕蔑の念を起さした事
(十一)崇敬の念を起さした事
(十二)驚異の念を起さした事
(十三)感服した文學及び藝術

(六)木曾へ旅行して、福澤桃介の水力電氣の工事が木曾川十數里の風景を跡方もなく破壞し去つた實況を見た時。是れは他日もつと詳しく書いて、天下の輿論に問ふつもりです。

(七)旅先で入院して隣室の重病患者の死ぬのを見た時。

(八)四月二十六日の地震。次が秋のコレラ。

(九)不肖にして、日々の新聞記事からでも無數の教訓を得ると云ふ次第。是れと云つて一つを舉げられません。

(十)自分を輕蔑しないと同時に、他人をも輕蔑しないやうに心掛けて居ります。

(十一)無かつたやうです。

(十二)平和博覽會及び其の會場の水上飛行機(實は游泳機)の爆音、

(十三)近來他人の物には感心しないことに決めてしまひました。幾ら感心したつて、他人の物では仕方がないと思ふからです。電車で對き合つた亭主附の美人に見惚れてゐるやうなもので。

○　千葉龜雄

(一)軍縮から「教育第一」へ

(二)ラテナウの死

(三)相かわらず、政黨の都合で、知事や大官を傍若無人に處置する事、信濃川の鮮人虐遇事件

(四)加藤内閣の窮策たる官吏暑中休暇廢止と、商業會議所發案の節約宣傳と、國勢院の廢止と、華族の日比谷公園の日中の草刈り

(五)ケマル・パシヤ、ガンヂの正義と反抗心、中岡艮一の豫審の人間的な調べ振りと橋本中岡の所刑の當を得た事など

(六)イギリス、フランス、アメリカなどの、自己主義ばかりを標準とした外交政策。ロシア飢饉に對する日本官民上流の無關心

(七)支那新人の孔子否定

(八)イタリイのフスシチや日本の國粹黨などの反動的勢力が、たとへ一寸でも勢力を得て、頑迷者流にそれ見た事かと得意であらしめた事

(九)サンガア夫人の理論としては別に新らしいものはないが、その熱意において與へられるものがあつた。
(十)帝展の審査員連の作品の多數
(十一)アイルランドのコリンスが戰鬪中に銃に射られて死ぬ刹那に、「敵をゆるせ」と言つたその心事
(十二)賣れるからとて人眞似をしたやうな、宗教小說めいたものが續出した事、それが宗教であるだけに猶ほ……
(十三)技巧としてはフランスの近代小說、思想としてはスカンヂナビヤから北歐の一帶、ロシヤ、それからスキス、ドイツのいろ〳〵な近代小說、イギリス、アメリカの思想や社會意識の評論など

○　久保田万太郎

(二)父の病氣、母の病氣、妻の病氣、こどもの病氣。
(十)新舞踊の流行。
(十一)いたづらなる階級意識の流行。
(十三)里見弴の「直輔の夢」と市川左團次所演の「謎帶一寸德兵衛」の團七。

○　本間久雄

拜復、いろ〳〵振りかへつて考へて見ましたが「一番」といふ最大級の言葉で喜怒哀樂を記すやうなことは何もなかつたやうに思はれます。それだけ私は今年は平凡な、つまらない生活をしたのだと今更ながら感ぜられます。たゞ藝術の上で、八月頃日本橋倶樂部で開催され冷泉爲恭の遺墨展覽會を見て、日本の傳統的藝術に對する異常な感激を受けたといふことを一言加へて置きたいと思ひます。

○　米田實

(一)西伯利撤兵の實行
(二)今春信越風雪慘事、今夏風水害
(三)チエツク武器及押收武器問題
(四)高橋內閣の一蓮托生騷ぎ
(五)土耳其の勢力回復にも表はれ其他に現はれて來た回教徒覺醒の機運
(七)時代の變轉を語る大隈山縣兩老の死
(十)政治家と言ふ職業階級の馬鹿な行動
(十一)小野さつき訓導殉職
(十二)列國皆苦しむ中に御祭氣分の平和博覽會
(十三)今年は一つもありません。

（一）喜ばした事
（二）悲ました事
（三）怒らした事
（四）笑はした事
（五）感激せしめた事
（六）義憤せしめた事
（七）瞑想せしめた事
（八）恐怖せしめた事
（九）教訓となつた事
（十）輕蔑の念を起さした事
（十一）崇敬の念を起さした事
（十二）嫉忌の念を起さした事
（十三）感服した文學及び藝術

○林癸未夫

總體的に言へば、今年は私に取つて內面的にも外面的にも至極平和な年でした。それは恐らく私が昨年の暮に於て、過去二十年間私の生活の半面を支配してゐた或關係と、全く手を斷つてしまつて、漸く自分の生活の中に己の全人格を沒入することのできるやうな今の自由を得たといふ事實が、重な原因を爲してゐるやうに思はれます。これは勿論精神上の問題でありますが、併し元來自分獨特の氣分といふものに絶えず浸つてゐたい私、從つて又氣分といふものに外面生活までも容易に左右され易い傾向を有する私に取つては、內面生活の平靜は大抵の場合同時に外面生活の安住といふことを伴ひます。ですから日々の生活上に幾らかの喜怒哀樂は免れぬとしても、特に「一番」と取立てゝ記憶に殘つてゐるやうな事柄は何にもありませぬ。これが私の御答にならぬ御答です。

○堀江歸一

（一）國際平和の曙光を認め得た事
（二）別になし
（三）別になし
（四）高橋內閣が野倒れ死にをしたこと
（五）別になし
（六）弱者を壓迫する事實の續出すること
（七）此有樣で我國の將來が如何に爲るかと云ふこと
（八）社會思想を理解せざる權力者のあること
（九）別になし
（十）免かれて耻なき輩の多きこと
（十一）小學教員や、下級警察官などの間に職責を全うする人のあること
（十二）大官や、政治家の背德行爲
（十三）別になし

○笹川臨風

奈良の秋を探るべく旅裝を整へてゐるところへ、十三ケ條申開きの御手紙に接しました。實の所を申すと、近來どう云ふせ

いか、喜怒哀樂に超然とする傾きがありまして「物以て之を盗ふあり、彼れ物の内に遊んで其外に遊ばざるなり」と云ふ氣がしてなりません。しかし考へましたなら、十三ヶ條中の數條に對して御返事も出來るでせうが、天平時代がもう待つてゐますので、今度はこれで御免を蒙ります。

○ 上司小劍

(一)多年心がけてゐた長編『東京』の第一部と第二部とを出し得て、引きつゞき第三部に取りかゝる準備の出來た事。
(二)なし。
(三)なし。
(四)なし。
(五)有島武郎氏の私有土地分配と、島崎藤村氏の印税辭退。(何んのかのと批評は出來るものゝ、自分が其處に坐ればなかなか出來ない事。)
(六)なし。
(七)縱には空間、横には時間……縱には國家、社會、人種、横には階級。……それがどういふ風に闘爭し、改革されて、我等の理想郷に到達するかといふ事。
(八)なし。
(九)狹い紙幅には書き難し。
(十)日本の作家に良民的素質が多過ぎて、叛逆的思想の稀薄或は絶無なる事。日本の有名な學者の論文の内容の淺薄なる事。
(十一)なし。
(十二)新聞の記事の誇張的傾向がいよ〳〵甚だしくなりさうな事。個人の私事を摘發して、讀者とゝもに喜ぶ風の盛んならんとする事。
(十三)アレキセイ・トルストイの『力』といふ短篇。

○ 宮島資夫

日々の生活には人並に笑つたり怒つたり、悲んだり喜んだりする事も有之候へ共、さてこうして改めて御質問に接する時、何を喜び何を悲んだかと自己の心に尋ねても御答へするに足るほどの價値ある記憶のなき事を恥入候、そうして大した感興もなく一年を過したのかと思へば今更遺憾の至に不堪、たゞこれからは希くは喜怒哀樂も瞑想も恐怖も、別れ〳〵にでなく、一度にごちや交ぜとなつて痛感するほどの生活を、日に日に送りたきものと自ら衷心に望むばかりに有之候。

○ 内ヶ崎作三郎

(一)喜ばした事
(二)悲ました事
(三)怒らした事
(四)笑はした事
(五)感激せしめた事
(六)義憤せしめた事
(七)瞑想せしめた事
(八)恐怖せしめた事
(九)教訓となつた事
(十)輕蔑の念を起さした事
(十一)崇敬の念を起さした事
(十二)嫌忌の念を起さした事
(十三)感服した文學及び藝術

(一)私共が十年奉仕して來た日本の自由宗教の運動がボストンのユニテリアン協會と全然關係をたちて、この秋から巣鴨町一四七〇、謙和舍にて自給獨立の經營に着手した事、
(二)敎友原田長治君がこの一月チフスで永徃せし事、
(三)關西方面より東京を通過して東北地方に旅した時、本線と池袋以北の山の手線諸驛との連絡がうまくとれず、下らぬ時間を改札口に費した事、
(四)この夏早大紀念事業のことに富山縣に赴いた時、糸魚川驛にて校友學生の一團がまち設けて私を寢卷のまゝで、寢臺車より下車せしめた事、
(五)六月十六日靜徃せられし新井奥邃翁の生涯、
(六)無意味なる西比利亞出兵と撤退、
(七)人間の運命、いろ〱な方面から、
(八)私一身の精神的危機に際して、よく、友人や親戚などに不幸があつたり、病人があつたりした事、
(九)新井奥邃翁の臨終と遺言、
(十)折々自分に對して輕蔑の心が起ることがありました、
(十一)文化史を研究して生物進化の背景に不思議なる力の働きあることを理解した事、
(十二)東京市街及び郊外の小道路と悪道路、
(十三)芥川君の切支丹伴天連を取り扱つた小説、賀川豐彥君の「太陽を射る者」の取り扱ひ方よりもむしろ材料その者がこれ迄あまり小説に取り扱はれなかつた方面から集められたといふ事、藝術の方は二科會も院展もみそこなひ、又帝展はまだみざる故何とも申上げやうなし、

○　長田秀雄

(一)思出せません
(二)思出せません
(三)あんまり澤山あるのでどれを一番にしていゝか分りません
(四)これも同前です。
(五)ありません。
(六)私の家の近くに辻待車夫が大ぜいゐます。その中に二三人若い朝鮮人がゐるのです。それらに對して邦人車夫のとる態度を見ると、何時も耐らなく癪にさわります。

(七)森林太郎先生の死
(八)コレラの流行
(九)ありません。
(十)私は何と云つても月評の下らなさだと思ひます。
(十一)ありません。
(十二)小野訓導の死と云ふ新派の芝居を見せられたときです。
(十三)ありません

○ 石川半山

(一)ケマルパシアの活動
(二)友人遲塚麗水氏母堂の永眠、同母堂は三十餘年前『我等の共同の母』で有つた
(四)第四十五議會以後、内閣明渡に至る迄の高橋首相の行動は、實に滑稽を極め、腹の皮をよれり
(五)友人峰岸繁太郎氏が其の最愛の令息の秀才を、第一中學から退學させて、芝浦製作所の職工に叩き込んだ事
(六)支那が日支協約を反古にして、來年三月、滿洲租借地返還の議を提すべく準備せる事
(七)備中新見町へ講演に赴き、舊友蜂屋重三の墓に詣し、偉材を抱きて青年時代に死したる彼の不遇を想ひ、深く人生に付て瞑想す

○ 谷本富

(一)ワシントン會議決議の御批准よりして、軍備いよ／＼縮少に赴く形勢見るはうれし。
(二)政黨内閣斃れ、軍人首腦の貴族院を根據としての内閣出現。嗚呼是れ時代錯誤の骨頂。
(三)兵器窃み賣りは實に一大國辱。軍人跋扈を觀ては、怒髪天を衝かんとす。
(四)原少佐審判の軍法會議の光景、果して新聞紙所報の如くば是れ所謂耳を掩うて鈴を盜むものか。
(五)英國皇太子の御來遊に際し、その日常の御生活振り如何にもデモクラチツクに見えたこと。噫。
(六)第四十五帝國議會普選請願運動に際し、政府が議院を警官にて取圍みたる濫暴狼籍。
(七)親鸞流行に就いての理由。知らず眞宗は果して眞の宗教か如何。
(八)近頃往々耳朶に觸れる無警察の報導と、内實その価を爲したことの噂ある當局者の無智。
(九)政友會除名事件に關して元田肇老人の男らしからざる醜態

醜態？

(一)喜ばした事
(二)悲ました事
(三)怒らした事
(四)笑はした事
(五)感激せしめた事
(六)義憤せしめた事
(七)瞑想せしめた事
(八)恐怖せしめた事
(九)教訓となつた事
(十)輕蔑の念を起さした事
(十一)崇敬の念を起さした事
(十二)嫌忌の念を起さした事
(十三)感服した文學及び藝術

(十)『木堂談叢』を讀み、老大政治家の眞價暴露に、幻滅の感なき能はず。さてもお氣の毒。

(十一)親鸞聖人の『歎異鈔』を再三反覆熟讀して、感興益々深く、終にこれに對して新解を下せり。難有しとも難有し。

(十二)一大野人たることを誇負し來れる筈の露伴日蓮に、大師號宣下奏請とは何事ぞ。唾棄すべき醜事とは正しく是なり。

(十三)岡枝俊文氏の近松紀念としての脚本『二つ櫓』さて又賀川豐彦氏の『關西日報』に聯載した『空中征伐』、これ實に奇想天外より落つるもの、一讀三嘆三笑。幾多の親鸞物の中では倉田氏のについでは先づ石丸梧平氏の『人間親鸞』か。松方幸次郎氏が持ち歸へられたるムンクの畫も亦却々面白し。

〇 長田幹彦

(一)去年一度害はれた健康が又昔に復したこと。

(二)いゝものが書けなかつたこと。

(三)或雜誌の編輯者に依つて與へられた侮辱。

(四)新潟で大醉したこと。

(五)或先輩に激勵されたこと。

(六)西伯利亞問題の歸結。

(七)私の知つてゐる或青年が自殺を遂げたこと。

(八)東北地方の或水電工事の狀態を見たこと。

(九)武藏野を漫歩して歩く度に自然が私の胸に與へた偉大なる教訓。

(十)某政治家の內的生活の貧弱さをみたこと。

(十一)或僧侶に斷食の實驗談を聞いたこと。

(十二)宗教小說の濫刊。

(十三)ゴドウヰスキイ氏の彈奏せるピアノ。ジンバリスト氏のヴアイオリン。

想華

十年振

永井荷風

○

爾來十年わたしは一歩も東京から外へ出たことがなかつた。

大正二年の夏慶應義塾講習會の大阪に開催せられた時わたしも厚かましく講演に出掛けたのが旅行の最終であつた。

今年大正十一年十月の朔日、わが市川松莚子一座の俳優を統率して京都に赴き、智恩院の樓門を其のまゝの舞臺となし野外の演藝を試るといふ。蓋しわが劇界未聞の壯擧である。この壯擧を聲援せんが爲日頃松莚子と深交ある文人作家は相携へて共に西行せん事を約した。こゝに於てわたしも十年振りで東京を後にする事となつた

十年前大阪へ行く時には丸の内の東京驛停車場はまだ工事半ばであつた。たしか大正四年の春松本泰君が再度英國に遊ばうとした折、又その翌年故上田博士が京都に歸らるゝ時、また大正八年松居松葉子が重て歐米漫遊の途に上らんとする際、わたしは丸の内停車場のプラットフオームまで見送りに來た事はあつたが、然し一度もこゝから汽車に乘つ

た事はなかつた。

わたしの旅行は今日全く人から忘れられたかの汐留の古いステーション——明治八年に建てられたとかいふ石造りの新橋ステーションからのみ爲されてゐた譯である。さう思ふとわれながら微笑を禁じ得ない。同時に、今更の如くわたしの身も正に彼の古いステーションと同じやうに今は全く過去のものとなつた——わが時代は既に々々遠く過ぎ去つたといふ事を意識しないわけには行かない。

○

京都に遊ぶのはこの度が四回目である。明治三十年の頃父母に從つて遠く南清に遊ぶ途すがら初めてこの都を見物した。次は明治四十二年淸秋の幾日かをこゝに送つた事があつた。三度目は慶應義塾大阪講演會の歸途であつた。偶然祇園の祭禮に出會つて其の盛觀を目覩する事を得た。人家の欄干に敷き連ねた緋毛氈の古びた色と、鉾の柄に吊したコブラン織の旌旗とは今も猶目に殘つてゐる。

幽暗なる蠟燭の火影に窺ひ見た島原の遊女の姿と角屋の庭の夜の松と座敷の繪襖とは、二十世紀の世界にはあらうとも思はれぬ神秘の極みであつた。

わたしは東京の友人に送つた繪葉書に、吾等は其の鄕土の美と傳來の藝術の何たるかを尋ね究めやうとすれば是非とも京都の風景と生活とに接觸して見なければならないと云ふやうな事を書きしるした。

それから十年を過ぎた。十年ぶりに來て見た京都の市街は道巾の取廣げられた事、橋梁河岸の改築せられた事、洋風商店の增加した事、人家の屋根の高くなつた事など、十年前の光景に比較すれば京都らしい閑雅の趣を失つた處も少く

はない。曾て一度眺め賞してより終生忘れることの出來ないやうに思つた彼の出町橋のあたりの寂しい町端の光景の如きは、今日再び訪ねやうとしても全く訪ねる事の出來ぬものとなつてゐる。

然し京都には幸にして近世文明の容易に侵略する事を許さぬ東山の翠帶がある。西山北山を顧望するも亦さほどに都市發展の侵害を被つてゐないやうに見えた。鴨河にはまだ幾條も日本風の橋が殘つてゐた。粟田御所の塀外に蛟龍の如く根を張つてゐる彼の驚くべき楠の大木は十年前に見た時と變りがなかつた。堀川の岸に並び立つ柳の老木は京都固有の薄暗い人家の戸口に落葉の雨を降らせてゐた。白川の小流れには人が染物を洒してゐた。大體に於て今日の京都は今日の東京の如くに破壊せられてゐなかつた。年年上野や芝山内の樹木の枯死するのを見てゐる東京人の眼には京都はいかにも松樹千歳の綠に包まれ青苔日に厚く自ら塵なき舊都であるやうに思はれる。

兒女の風俗も街上の光景と同じく今尙傳來の趣味を失はずに居る處が多い。洋風の束髮は岡崎公園の附近と市中のカツフエー洋食屋の外は稀に此を見るばかりである。京都の夜の巷を歩いてもわたしは銀座通りで見るやうな染色のけば〱しい飛模樣の羽織や縫取の帶を目にしなかつた。

自働車も人力車も通らない坂道の曲角、または寺院の古びたる土塀に添うた小道なぞで、わたしは物買ひにでも行くらしい京都の女の銘仙か節糸織の縞の袷に前掛をしめた質素な小ざつぱりした姿を見る度に、何のわけとも知らずわたしは東京の町女の二十年ほどむかしの風俗を思出すのであつた。

衰殘の人に對して無上の慰安を與ふるものは過去の追憶にまさるものはない。わたしは此儘永く京都に止りたいやうな心になつたのもこれ等の爲である。

○

京都の市街はこの後果していつまで過去及現在の幽靜閑雅の趣を持續し得るものであらう。これはわたしひとりの考ふべき問題ではない。また單に京都市民のみならず廣く國民一般の考慮して然るべき問題であらう。時勢と共に民衆生活の狀態と社會組織の既に激變しつゝある今日、京都に殘る古代の社寺庭園樹木の存亡は引いて國民將來に於ける思想上の大問題であらう。階級制度の世に於ける時よりも總て來らんとする民衆政治の世にあつては、史蹟と古美術に對する愛護の方法は更に一層の注意と考慮とを必要とするであらう。

一日粟田神社に近き一寺院の境內を過ぎた時、わたしは足駄をはいて野球を弄ぶ學生等の樹木庭園に對して何等一片の慮りをも持つてゐないらしい擧動を目擊した。都市の風致を損傷するものは獨り銅臭の資本家ばかりではない。常識なき無賴の學生とさかりの付いた野犬は共に林泉の破壞者として憎まなければならない。

○

京都に遊ぶことを喜ぶものはおのづから僧侶を敬ひまた妓女を愛しなければなるまい。緇衣と紅裙とは京都の活ける寶物である。この二ツのものがなかつたなら現在の京都は正に冷靜なる博物館と撰ぶ處なきに至るであらう。

幽邃なる寺院の境內より漏れ聞ゆる僧侶が讀經の聲と梵鐘の響とは古雅なる堂塔の建築と相俟つてこゝに森玄なる宗教藝術の美がつくり出される。東山鴨水の佳景にして若し綺羅紅裙の色彩を斷つたならば、其の風趣は啻に名家の畫を見て此れを疑ふも妨げはあるまい。京都を藝術の都市として鑑賞しやうとする時吾等は現代の佛教徒が信仰學識の如何

を論ずる必要がない。妓女が心事の如何もまた更に問ふを要しない。吾等は唯近世の空氣に冒されざる僧と妓との生活に對して感謝の意を表すれば足りるのである。

流水と松籟の響に交る讀經の聲と、櫻花丹楓に映ずる銀釵紅裙とは京都に來つて初めて覺め得べき日本固有なる感覺の美の極致である——即ち秀麗なる國土山川の美と民族傳來の生活との美妙神秘なる藝術的調和である。

○

名所古蹟の中にも遊覽者の萬人悉くこれを訪ふものと又然らざるものとの二ツがある。

金閣寺、永觀堂、下加茂の社等は其の前者に屬し、詩仙堂、三千院、修學院等の如きは後者の中に列せらるべきものであらう。

名所古蹟の俗了せられたものは恰も骨董店頭の古器を觀ると變りがない。藝術家の製作品もまた名所古蹟と同じである。俗衆の歡迎ほど製作の品位を傷けるものはない。作品の生命は唯限られたる少數者の理解と同情とによりて守護せらる。

一日鹿ケ谷に法然院を尋ねた後銀閣寺に入つて案內者の說明を聞いてゐる中、わたしは不圖以上のやうな事を感じて去つた。

○

東山を攀る林間の細徑には風致を保存する爲め樹木を愛惜すべき旨を諭めた官廳の訓示が處々に立てられてある。

東京市中に在つて此等に類する官廳の訓示は大抵の場合却つて人をして反感輕侮の念を抱かしめる外何の用をもなさぬものである。吾等久しく御濠の樹間に見馴れたる「此ノ土手ニ登ル可ラズ警視廳」の掲示の如き其の一例である。或は現に枯死したる街路樹の幹に札を下げて樹木の愛すべきを説きたるが如き滑稽なるものもある。

然し一度京都に來つて東山の林間に逍遥すれば、何人と雖永くこゝに此の幽趣を保存しやうといふ官廳の訓示の當然なるに首肯するであらう。それと共にまた一般遊歩者の名山の草木に對していかに無情にして狂暴なる擧動をなすかを推測し得るであらう。人家の墻に果實の熟するを見れば必石を投じ花の開くを見れば直にその枝を折らんとし、猫狗の路傍に遊ぶに逢へば木を取つて撲たうとするのは、蓋しわが國民性の然らしむる處、二千年來の教化も遂にこれを改めしむる力がなかつた。

鄕國風土の美は僅に官權の實施を俟つて保存せられてゐるのである。

○

人の病は外より冒されるが爲に發するばかりではない。自ら内より發する病も鮮くはない。山林庭園の草木を枯死せしむるものは獨俗客の跋渉によるが爲めのみではない。樹木にはおのづから樹木の病がある。加るに風雨と鳥獸と昆蟲も時に樹木に害をなす事あるは專門の學者ならぬわれ等の云ふを俟たぬ處である。

京都府廳とこの地方の林務署とは既に林中に訓示を揭げて東山の草木の保育に務めてゐる。若し其の方法にして獨りこゝに遊ぶ人間に對して訓示するのみに止まらず、進んで草木その物に對しては恰も農夫の稻に於けるが如く學者の書卷に於けるが如きものありとせば其の恩澤を蒙むるものは啻にわが國内の雅客のみならず世界の旅行者も深く其の勞

を謝するであらう。

佛蘭西共和政府はフォンテンブロオ深林の老樹を保養するに醫藥の費を惜しまないといふ事である。アナトールフランスの感想錄に佳樹（Bel arbre）と靜思（Calme pensée）とこの二者より麗しきものは世になしとの意を示した語があつた。

東京市中の庭園路傍の草木は塵埃煤烟の爲めに悉く生色を失つてゐる。一度病樹の巷を去つて松柏欝然たる京都に來るや否や、わたしはまづ何より先にアナトールフランスが佳樹靜思の一語を思出したのである。

祇園の垂糸櫻は大分弱つてゐる。粟田御所の大楠にも枝の枯れた處が見えてゐる。その下を過る度にわたしは何とも知れぬ暗愁を禁じ得ないのである。

○

十月一日智恩院三門演劇の壯觀は親しくこの事に參與せられた諸家の記錄の既に新演藝其の他の雜誌に掲載せられたものについて此れを見れば十分である。

わたしはこゝに當日寫眞機を携へたる新聞記者の甚しく演藝を妨害したる事を記述するに止めて置かう。

野外劇はその名の示すが如く晴天白日の下に公開せられたる演劇である。祭禮の行列ではない。野外劇は既に演劇である以上これを觀るに藝術を以てしなければならない事は普通劇場の内部に於て行はるゝ演劇に對すると少しも異る處はない。異る處は唯建築物の内に於けると否とにあるのみである。野外劇も藝術たる點に於いて普通の演劇と同じである以上、觀客と演劇との間には犯すことの出來ない境界を必要とすることは演劇の性質上已むを得ぬ事である。政談演舌

の如きに於ても猶聽衆の濫に演壇に上つて辯者と相並んで立つ事を許さない。然るに當日寫眞機を携ふる新聞記者は警護の者の制止するを肯ぜずして闖入する事の出來ぬ境に闖入して俳優の演技を撮影せんとした。

わたしはこゝに寫眞班と稱する新聞社員の暴行を責めるのではない。寫眞班は元より事理を解し得べき程度の人物ではない。わたしは寫眞班の派出を命令する新聞編輯の當事者を責めるのである。

平素劇場に出入する事を許されたる新聞記者と雖未曾て劇場の觀覧席より舞臺の演藝を撮影しやうとしたものはない。これ演劇の妨害となる事を知れるが故であらう。若し野外劇は劇場を出でたる公開の場所に於て行るゝ事を以て辨疏とするならば新聞記者は自ら演劇の何たるかを解しない無智文盲の徒なる事を告白するに過ぎない。

○

松と杉の茂つた河原の彼岸に朱塗の鳥居が見える。下加茂の鳥居である。

車は竹の林に沿うた平な街道を北へと走つて行く。

右も左も見渡すかぎり山の麓に至るまで稻は熟して秋晴の下に金波をたゞよはせてゐる。

白い野菊と赤い雜草の花は農家の垣、田の畦、道の傍に咲亂れてゐる。

間口の廣い家の前を過ぎた。黑光（くろびか）のした柱に行燈が掛けてある。平八茶屋である。

道は人家の間を過ぎて急に迂回すると急流にかゝつた橋を渡る。

左右の山は次第に相迫つて前面に聳る比叡山はいよ／＼近くいよ／＼險しく見え始める。牛車と大原女の往來が多くなる。

今まで道に沿うて眺めて來た谷川の流は樹の間から唯その響を聞くばかりとなつた。樹の枝が屢車の幌に觸れる。車は既に山腹を側つた岨道を攀ぢて行くのである。空の澄渡つて冷なことが際立つて感じられて來る。

山は幾重にも折かさなり道は幾條にも分れてゐる。道の分るゝ處には必しるべの石が立つてゐる。石と共に其の書體も甚古雅に見えた。

幾度か車は行ちがふ牛曳と大原女とに道を讓合つた。

思掛けない處に折々人家が二三軒つゞいてゐる。道もないやうな處に飛び離れて鳥居や寺の屋根が見えた。

行く車更に數丁遂に車を通ぜざる石逕に達した。また人家がある。生垣のほとりに三千院と刻した知るべの石を見た。

石逕は杉の木立の間を登つて行く。木立はいよ／＼深くまばらに日の光を漏す處、苔蒸した石段の上に門が立つてゐる。

人の跫音を聞いて頻に犬の吠る聲がした。

おそる／＼庫裏の戸を叩いて寺僧の出るを待つたのは松莚君と余の二人であつた。

時は九月晦日午下即智恩院演劇の前日である。

○

東京を出發する時わたしは斯くまでに京都を愛しやうとは全く思つてゐなかつた。

明治四十二年曾遊の際わたしは疏水工事の竣成と共に河原の夕涼の恰その前年より廢止せられた事を聞き此れを惜し

み悲しむのあまり京都も亦東京の如く傳來の年中行事を悉く失ひ終るの日も遠いことではあるまいと思つたのであつた。また市中見物の途上東大谷の門外なる松の並木の美麗なるを賞すると共に其の裏手に聳る富豪某の邸宅の甚しく風致を害するを憤つて、京都の市街も早晩東京の日比谷に類する光景を呈するであらうとの感慨を抱いて東歸の途についたのであつた。この後わたしは一度も内地の旅行を企てたことがなかつた。日々東京市の變革を目撃するにつけてわたしは獨り京都のみならず國内の都市はいづれも時勢の打撃を受けて東京及その近郊の如くなりつゝあるに相違ないと推測してゐたからである。然し幸にしてこの推測は當つてゐなかつた。わたしが假に京都を愛し京都に感謝せんとしたのはわが推測の少しく早計に過ぎた事を悔いたが爲に外ならない。

およそ一國には國民固有の風習がなくてはならない。都會にはまた其都會特種の情調の存すべき筈である。特種の情調なき都會の興趣に乏しきは恰も品性なき人物と面接するに同じである。匹夫は交を結ぶに難く特徴なき都市は永住の策を講ずるに適しない。現今の東京はさながらイカサマ紳士の徒に邸宅の門戸を大にして愚民を欺き驁すものと變がない。こゝに居住する市民の年々野卑暴戻となるは當然の事であらう。

わたしは明治四十三年の秋隅田川の汎濫と共翌年淺草の大火とを以て江戸の古蹟とまた江戸趣味との終焉を告ぐるものとなした。以後年々市區改正工事の進捗は市民生活狀態の變遷と相俟つて、僅に十年にして遂に東京市をして世界最醜の都會たらしむるに終つた。

大正八年の春の頃であつた。夜半八丁堀の溝渠に沿うて築地の僑居に歸らうとした道すがらわたしは家々牀機を織む筬の音の薄暗い裏町にひゞくのを聞き、春は去つて正に夏ならんとする市井の情調の猶掬すべきもののあるを思ひ、却て愁思を動した事があつた。翌年現住せる麻布の家に移つた年の秋には隣家の竹林に鵙の鋭い啼を聞き門前の椎に鵯の來る

を見たが三年ならずして今は雀の外庭に小禽の影を見る事は稀になつた。

この度京都の再遊はわたしをして恰も老夫の故山に歸臥したるが如き安慰を感ぜしめた。これ獨り山水烟霞の爲ばかりではない。街頭に新聞賣の叫ぶを聞かず、電車に無禮の乘客なく、道に駄馬の斃死するを見ず、劇場に新しき文士先生の影を斷ちたる、これ皆慰安の種とすべきである。

東京の人にして東京を去り羈旅却て家園に勝る樂しみを覺ゆるとは、わが薄倖も亦甚しといはなければならない。

○

藝者が通ると東京では人が目に角を立てゝ見る。中には罵詈するものもある。公園のベンチに若い男女の並んで腰をけてゐるのを見て振返らない人は殆ない。東京ほど岡燒の激しい處は世界に稀である。

京都には今でも合乘の人力車がある。藝者とお客の合乘をして行くのを見ても、往來の人は別に不思議な顏もしない。

京都に來て祇園の妓を聘するのと東京に在つて新橋に遊ぶのとは全然情緒を異にする處がある。それは恰も西洋の女優踊子のたぐひを米國の都會に於て見るのと巴里のモンマルトルに於て見る時との相違に似てゐるであらう。プロテスタントの教義の嚴しい社會に在つては此等紅粉の兒女は唯淺間しく恐しきものに見えるばかりであるがモンマルトルに來れば道德の判斷に先じて吾々はまづドガ、ボナアル、ロートレツク等が名作とまたミユツセ、ボードレール、ゴンクール等の詩文を思起さなければならない。

藝術を除外して巴里に留ることは決して巴里を知るの道ではあるまい。京都に遊んでよく山水殿堂の美を賞するものはおのづから脂粉の氣に親しまざるを得ないであらう。何故といふに、祇園の教坊は既に久しく山陽竹田三溪春濤諸家

の詩文によりて東山鴨水の勝景と共に今は全くクラシツクとなつた觀があるからである。

この度西遊するに臨んでわたしは豫め成島柳北の戯著京猫一斑といふ小冊子を行李に入れて行つた。都名所圖會はあまり大部であつて外に案内書となすべきものが見當らなかつた故である。柳北先生の戯文はわたしの云はうとする處を云ひ盡してゐる。採錄してわたしの記事の拙きに代へる。

西京ノ地若シ祇園之妓無ンバ則幾分ノ繁華ヲ減殺シ了スベシ祇園之妓若シ東山之勝無クンバ則亦幾分ノ聲價ヲ減殺シ了ラン天下之山ハ多シ矣而シテ東山之清秀溫雅ニシテ峻ナラズ峭ナラズ望ンデ愛ス可ク登テ樂ム可キガ若キ者ハ世ニ其匹ヲ罕トナス矣蓋シ東山ノ春ニ宜シキヤ探花傍柳之樂有リ秋ニ宜シキヤ觀楓採蕈之遊有リ綠陰納涼之夏ニ於ケル紅樓望雪之冬ニ於ケル四時之景宜シカラザルハ無シ而シテ鴨東脂粉之光彩ヲ添ヒ嬋娟觀ル可キ者亦嵐光峰影之奇能ク之ガ助ヲ爲ス者ニ非ズ邪然レバ則妓輩皆山靈之餘澤ヲ頼ンデ衣食スト謂フモ亦不可ナル無シ余ハ東人也西土ヲ喜バザル者然レドモ東山之勝ニ至ツテハ則愛翫シ娛樂セザルヲ得ズ故ニ此ニ遊ブ毎ニ必先山ニ對スルノ樓ヲ擇ビテ寓シ且莘欣賞ス一良友ト相晤語スル之思有リ云々

また曰く

世間無カル可ラザル者ハ文字也而シテ文字之遊亦酒ニ非レバ則樂シカラザル也其ノ既ニ酒有ルモ亦妓無カル可ラズ是古今達士之定論ニシテ然ル也然レドモ酒ト妓ト有ノミナレバ未其ノ凡且俗ナルヲ免レズ必ヤ山水ノ清秀以テ酒妓之興ヲ佐ル有テ而シテ後以テ遺憾無シトス可シ四條之地ハ固ヨリ名媛麗妹之淵藪ト爲ス而シテ樓々亦芳醑佳殽ニ富ム而シテ山ノ秀ナル水ノ清ナル亦世ノ希トスル所宜ナル哉文士墨客ノ來テ此ノ間ニ遊ブ者皆風咏歸ルヲ忘レ梓嘆シテ以テ樂郷ト爲ス嗚呼翠嵐清流之勝ヲ樂シミ妓ヲ拉シ酒ヲ載セテ以テ傲遊スル者ハ豈蕩子冶郎ノ色ヲ漁シ香ヲ竊ム

一驚之人ノミナラン哉三溪子京華雜詠數首アリ今其二ヲ錄シテ以テ騷流ニ告グ焉

紅袖當筵銀燭開。青衣行酒影徘徊。絲聲淸絕肉聲艷。合奏三絃雙鼓來。

月落鳧川第幾橋。曉烟罩柳白於綃。街頭千點玻瓈影。照到天明紅未消。

秋夜思

北川完三

二階の六疊の寢間の北側九尺を折半して、右が奥行一尺五寸の床の間、左は上半が窓になり下半が壁で其所に地袋戸のあつたのを、模樣替して、床の間は上から下迄ぶつ通しの書棚にしてしまひ、地袋は取除いて其跡へ窓の高さまで小ひき出しの付いた書類箪笥を設けた。室は昨日すつかり出來上り疊替もすみ障子の貼り替へも出來、書棚には書物の或る種類を書齋から移した、脊皮やクロースや金文字などが色とり〲に變化を見せて居る。

早朝から郊外電車で西の方の田舍に遊んで來た。その勞れたからだを湯に入つて寢衣に着更へ、床の上に長々とねそべつて天井を眺めて居ると、今日見て來た郊外の、くつきりと蒼い空に浮び出た村や森や、冬枯れ近く澄みきつた小流れや、唐辛子畠の蟋蟀や、柿の木の側にある納屋の穀磨(カラウス)などが鮮かに頭に浮ぶ。

今日は十一月三日だ。明治神宮祭だ。久世山あたりであげてゐるのだらう、夕方から盛に花火の音がする。植物園の方向から子供でもたゝいてゐるやうなお祭りの太皷が聞える。少し風があるやうだが誠に秋らしいよい晩だ。蝿が何を迷つたのか電燈で眞白に輝し出された障子にブン〲ぶつつかつてゐる。

郊外から態々持つて來た菊を、あすのあさ鉢へ植るのを樂しみながら泥のついてゐる根のところを紙に包んで、枕元の机の上にのせてある。輪の大きな菊はあまり好きでない、一番好きなのは野菊だ。それでなければ小輪の黄菊をさし芽にして盆栽仕立にしたのが良い。併しそういふものは得られなかつたので、淡紅の小輪のものを買て來たのだ。これ

を一つ小さめな素焼の鉢に植えて其鉢を更に青交趾の鉢に入れて見やうと思ふ。青交趾の色は寧ろ白菊の方がうつりが良いだらう。併しこれは應接間へ置かうと思ふのだからそれで淋し過ぎるに違ひ無い。やつぱり淡黄色の方が暖か味があつて良いだらう。

早く明日になるといゝな、朝食前に鉢へ植えてしまわう。そしてあの應接間の西側の窓の地袋の上へ置いたら、夕方歸て來た時にきつと夕日が一面に障子にさしてゐて淡紅色の此花が輝りさいて見えるだらう。明日も天氣にしたいものだ。

少し寒い氣持ちがする。併し却て體がひきしまるやうだ。ダリヤなども秋に咲く花は形も締つてそして色も大變に鮮かだ。

火鉢の鐵瓶がかすかな音を立てゝゐる。此の鐵瓶は恰度學生生活を終つて初めて月給を貰つた時に買つたものだ。T市に居る時だつた、觀音前の葉茶屋で新しいのを買つたのだ。あの店先きの樣子が明瞭に思出される。あの折も恰度今頃の季節だつた。鬱金木棉の上包みのまゝ何を買て來たか當てゝ御覽なさいと宿の奥さんに渡した時大變にほめられた。そして支那製の「なまこ」の火鉢にかけて机の傍へ置いて與れた。あの家は舊藩でも相當な家柄で其の當時も富有なものだつた。そして主人は趣味の人で抹茶もやり煎茶もやり、夫婦も子供一人では淋しいといふので、煎茶趣味の裝飾をした表書院に自分を置いて與れたのだつた。あの寒竹と石とをあしらつた丈けの庭が何ともいはれぬ趣のあるものだつた。

此の鐵瓶も、もう彼れこれ二十年近くも私のために役を務めてゐるのだ。南部製のものだつたらこうは行くまいが、あの時葉茶屋の親爺の使へば使ふほど良くなると自慢して居た通り、益々心を引かれるものになつて來る。こうして鐵瓶の音を聞いてゐると靜かな溫泉場へでも行つて寢てゐるやうな氣がしてならぬ。机元へ置いた懷中時計のチク〳〵とセコンドを刻んでゐる音は、ゆつたりしてゐる時は氣持ちよく聞かれるものだ。

四季の中では五月末から七月初めにかけて樹々の梢に若葉が萌えて小鳥が盛に囀ずつてゐる時と九月末から十一月の初めに掛けて黄ばんだ草が露にぬれて百舌鳥がキリ〱と啼いてゐる時とが一番よい氣持ちだ。前の初夏の方にはなか〱不純な慾望が萌え勝ちだが、後の初秋の方にはたゞもう藝術慾とでもいふやうな純な感情だけが旺盛だ。始終何か製作して見たいといふ考が頭の中へ突きかけて來る。庭をいじるとか、木を刻むとか、何作をするとか、何かしてゐなければゐられないのだ。作歌もよいがどうも自分には適せぬらしい。繪もさうだ、時々かいて見るがだうも思ふやうには行かない。だういふものだらう、やつぱり練習が足りない故だらうか。それにしても彫刻の方がまだらくなやうだ。これはきつと自分達ちの受けた科學教育が、ずつとプラスチックに頭を誘つてしまうためだらう。

斯うして左の方の窓の下の書類簞笥の上を見ると、山茶花を挿した宋窯の壺の側に、刻り掛けの女の像が自分を見下ろしてゐる。四年程前から始めて折々思出しては少しづゝ刻んで居るのだがまだ出來上らずにゐるのだ。少しづゝ刻つてゐるのでは碌なものは出來上るまい、一氣呵成に早く片付けて仕舞ひたいのだが、大分永く休んで鑿も錆びさしてしまつたので、砥ぐのも面倒だからほうりつぱなしにして置くのだ。氣乘りがしてやり出すと朝から始めて徹夜をして殆ど休みなしに翌日へ續けぬと氣が濟まぬのだから困る。

かう見て居ると、像がはだかでは寒さうに思はれてならぬ。あすは押入へ仕舞つてしまはう。

先達Tさんの所で王喚之の法帳を見せて貰つて大變に氣に入つた。父の王羲之の書はあまりに形が整ひ過ぎて、自分には物足りなく感ずるが、喚之の方はさうではない。力があつてそしていふにいはれぬうま味がある。自分も何とかしてあの法帳を手に入れたい、そしてあの字を稽古して見たい。不思議なもので、元來がフツオンテンペン黨で且つ昔は姓名を記すに足る主義の仲間だつたが、相當な年齢に達すると傳統的な東洋趣味に傾くとよく人のいふ其年齢に入りかけた譯

たのだらうか。此の室の床の間を書棚に作り替へた行きかたと比較すると少し逆のやうだ。まあどうでもいゝ、一つ習字をやつて見やうか。併し東京に居つては到底不可能だ。此頃はひところよりはずつと少くなつたがそれでも夜は中々種々の會がある。それに在宅のおりも間斷なく訪問者や電話などがあつて、今夜のやうに落付いて居られるのは珍らしい。習字のやうなものは本當に俗務から遠ざかつてくつろいでするでなければむづかしい。どこか静かな温泉へでも行つてやつたらいゝかも知れぬ。交通の餘り便利でない所がいゝな。天城を越えて南豆地方などがよいだらう。恰度此の頃は、あの、「磨（ウス）の轉るさや相手のよさや相手かはるな明日の夜も」などゝいふ古風な磨挽歌がきかれるだらう。獨りで行くのがいゝ、そして心ゆくばかり孤獨を味はつて見たいものだ。

涼風秋海を渡り　　我が郷思を吹て飛ばしむ
連山去りて際り無く　　流水何の時か歸らん
目を極む浮雲の色　　心は斷つ明月の暉
芳草柔艶歇み　　白露寒衣を催す
夢長うして銀漢落ち　　覺め罷んで天星稀なり
悲を含んで舊國を想ふ　　涙は下りて誰か能く揮はん。

李白の詩でも口ずさみ乍ら、其處で月夜の散歩も悪くなからう。支那の詩人のいふ事は多くは回顧的で感傷的だといふが事實さうだ。果てしも知らぬ廣野の地勢が斯ういふ氣分にするのかも知れぬ、昔しのものは知らぬが音樂でもさうだ。

一つ蓄音機を聞かう。いつもの好きなあのパリアッチのレコードを掛けやう。いつ聞いてもこれはいゝ、伊太利の小巴モンタントの午後三時、旅役者の村入りの所の此の合唱がほんとうにたまらなくいゝ、ア、あの鐘の音空氣を黄金色

に波うたして、其間にからむ大コーラスの肉聲、人々の遠ざかり行くに從て、聲と鐘とが低く溶けあつて、だん〴〵遠にへ漂つて行つてしまう。實にいゝ、たしかに秋の氣持だ。

先達の有樂座の露西亞歌劇のは此の鐘の音がなかつたから物足りなかつた。此の明瞭にそして高い鐘の音は確かに基教を象徴して居る。それに對して日本のお寺の低く大きい鐘の音は佛教を象徴して居ると思ふ。

此度は一つ日本のものゝ「秋の夜」を聞かう。此れはまた歌旨とメロデーと全く一致して寸分の隙きもない。雄大なまんまるに澄み渡つた月に照されながら、更けゆく夜を鐘の音に數へてゐる人間の弱小さが誠によくうつされて居る。此の春風亭柳の唄ひ方がまた歌とピッタリ一つになつて居る。顏を見ると淺薄な表情をして居るが斯う聞いて居ると誠に莊重な藝術の所有者だ。

もう花火も囃子もやんだ。汽車の汽笛が盛に聞える。エキゾースト・ステームを吐く音までが手に取るやうだ。池袋あたりからのものだらうが隨分遠くまで響くものだ。秋も深いが夜も更けた。寢やう。あすは早朝菊の鉢植をやらう。

また冬が來る

――親不知大慘事の回顧――

相馬御風

○

「また冬が來る！」

毎年のことではあるが、北國――わけても雪の多く降る、冬のとりわけ永い地方に住んでゐる私たちにとりては、この嘆聲のやうにその年々に新たなしみじみとした感じを作つた嘆聲は甚だ少い。

「また冬が來る！」

今年も同じく私たちは此の頃の肌寒い時雨空の下で、殆んど出遇ふ人毎にその言葉を取りかはしてゐるのである。

高い山々へは、とうにもう雪が來てゐる。白馬山に初雪の來たのは、今年は九月の二十何日かであつた。幾日かの暴風雨の後で思ひがけなく高山の頂が新雪の白く輝いてゐるのを見出した刹那の感じは、雪國に住む者には特別の味はひがあるやうに思はれる。とりわけ今年は此の地方の人々の雪を待ち、冬を迎へる心持に、これまでにはなかつた戰慄を伴うた暗い影が附きまとうてゐるのである。薄墨色の空に蔽はれ、眞白な雪にとざされた永い〳〵冬は、これまではどちらかと云へば私達にとりての靜かな、のんびりした休息の期間であつた。けれども今年は――未付有とも云はれた大

冬のあの怖ろしい雪の慘害のあまりに鮮やかな記憶を私達は持つてゐるのである。九十名の慘死者と四十名のむごたらしい負傷者を突嗟の間に出した親不知のあの殘虐な雪崩の災害――私達の胸裡にはその無殘な光景が今なほあまりに鮮やかに印せられてゐるのである。

人の世にあるべきことかわれの見るあまりにむごきこのありさまは

かう嘆ずるより外に言葉もなかつたあの怖ろしかつた光景の記憶に今なほ折々戰慄をおぼえるのは無論私ばかりでないにちがひない。罹災者の中にこれと云ふ特別の深い緣故のある人のなかつた私達でさへさうである。ましてそれらの人々の中に自分の子とか親とか夫とか兄弟とか親友とかのあつた人達の心の中はどんなであらう。

「またちき冬が來る！」

何と云ふことなしにかう嘆息せずにゐられない此の頃の暗い時雨空の下で、如何に多くの人々が其の事の追憶と來るべき冬の不安な豫想とに如何に激しい戰慄を覺えてゐることであらう。それをおもふと、休息の冬を待つ私達の心までがたまらなく暗くなるのである。

「もうぢき又冬が來るが、今年は何事もなければいゝが！」

かうした不安を作つた嘆息が、此頃いつとなしに私達の間に取り交はされるやうになつた。そして去年までは淋しいうちにしみじみとした懷かしみを持つてゐた「また冬が來る！」と云ふ私達の嘆息が、今年はその底に測り知れない深い闇を藏してゐるやうな響をお互の胸に傳へつゝあるのである。

○

先頃私は細い秋雨のしと／＼と降る日に、富山へ行く汽車の窓から、あの殘虐な雪崩の慘害のあつた勝山隧道口のあ

たりの淋しい景色を眺めて、たまらない感慨に撲たれた。人間の血で眞赤に染められてゐた何丈と云ふ深さの雪もいつしか消えてしまつた後には、今年の春も同じくみづ〳〵しい若草が一面に萠え出たのであつた。そしてどの草もどの草も、春から夏へ、夏から秋へと時の移るにつれて、伸びられるだけ伸び、咲けるだけ咲き、結べるだけ實を結んだのであつた。けれども、それらの草も木も、さすがに秋の深むにつれていつとなしに凋落の姿をほの見せてゐるのであつた。雪崩を落した山腹にも、海から切立つてゐる斷崖にも、斷崖に浪を打ち寄せてゐる暗い海にも、濃い灰色の雨霧が一樣に蔽ひかぶさつてゐた。雨に濡れた汽車の硝子窓を透して、その陰欝な光景に見とれてゐた私の眼には、いつとなしに熱い涙の浮ぶのを覺えた。と同時にあのすさまじい西北風に吹きまくられる吹雪の中を右往左往しながら、半狂亂になつてゐた大勢の私達の仲間が、血なまぐさい貨物列車によつて次ぎ〳〵にプラットフォームへと運ばれて來るあの幾十となき慘死者の死骸を受取るべく騷いでゐた當時の光景がまざ〳〵と憶ひ出されるのであつた。

　死骸は牛馬の死體でも運ぶやうにいづれも貨物車の板敷の上に藁を敷いてその上に列べて横へられてゐた。そして列車がプラットフォームに着くとは、人々は臨時に用意された藁繩製のモッコ同樣の擔架で、それらの死骸を一つ一つ指定された收容所へと運ぶのであつた。死體はいづれも草鞋まで穿いたまゝの作業姿であつた。どの死體もどの死體も顏面は一樣に紫色に脹れ上つてゐた。頭がつぶれて、眼の玉の飛び出てゐるのもあつた。頭から上がひどく壓しつぶされ滅茶々々になつてゐるのもあつた。腰から下がもぎとられ臓腑が悉く露出してゐるのもあつた。頭が破れて腦味噌の出てしまつたのもあつた。手のないもの、足のないもの、首のないもの、シャベルが胸から背へと突立つてゐるもの、車體の破片らしい太い木片が腹から背へ突通つたまゝになつてゐるもの……そしてどれもこれも皆血みどろになつてゐた。しかも、私達はさうした悽慘を極めた多くの死體の中に、唯一つではあつたが片手に食ひかけの餅を固く握つたまゝに

なつてゐた若者の死體のあるのを見出したのであつた。

「これはまあどうだ」

それを見た時に、居合せた者の凡てが思はずから叫んだ。

「これはまあどうだ」

何と云ふ意味の深い叫びであつたらう。

慘死體の懐中に入れてあつた時計で運轉をつゞけてゐたのゝ少なくなかつた事も、かなり强く私達の心に異樣の感動を與へた。

……こんな風に私はやゝしばらく冷たい車窓の硝子に額を押しあてたまゝ、それらの怖ろしい追想に沈んだ。隧道内のすさまじい音響の底に、今なほ慘ましい叫喚の聲が消えずにあるやうにさへ感じられるのであつた

隧道を拔け出ると、線路に沿うた山際に新たに堅牢な防雪堤の築かれつゝあるのが目についた。降りしきる雨の中で大勢の人達が土を運んだり、石を積んだりして働いてゐた。此の冬の慘事によつて與へられた警告によつて、あわてゝ取りかゝつた此の大袈裟な防雪工事を嘲笑するが如く眼下に見下しながら、板のやうに突立つた山の斷崖の冷たさは、今更のやうに物悽い感じを與へた。自然を征服しようとする人間の營みの小さゝと云つたやうな事が、その時ちらつと頭に浮んだ。

「親不知の嶮岨は、昔から知れ渡つてゐた。いかに多くの人の命が失はれたかわからない。如何に多くの人が此の道を行き惱んだかわからない、しかも、此の嶮岨をいくらかでも和らげて通行を便にする爲めの人間の努力は、明治の時代ではつひに聊かも加へられなかつた。何百年もの永い年月の間。（おそらく何千年もの永い〳〵年月の間であつた

かも知れない）親不知の嶮岨は自然が與へたまゝにされてあつた。こゝを通りながらその嶮はしさを嘆じた旅人は古來幾萬人あつたか知れない。しかも、依然として之れに向つて人間の手は加へられなかつた。苦しみながらも、嘆じながらも人間は堪へ忍ぶより外に道を知らなかつた。

德川時代に於てはこの邊は加賀の前田侯の領分であつた。百萬石の前田家がこんな道ぐらゐは造らうと思へば造作もなかつたのだが戰略上わざと道を開かず嶮岨のまゝにして置いたのだ。かう世上では語り傳へてゐる。だがそれは全くの事實であつたらうか。假りにそれが事實であつたとしても、その當時幾人がそれを明らかに知つてゐたらう。こゝを通つた大多數の旅人は、やはりあるがまゝの自然の狀態にすなほに從がつてゐたにちがひない

それに今はどうだらう。たま〳〵突發した雪崩れの災害をさへ、自然の不可抗力にのみよるものとは思ひ得ないのだ。人間の氣持も變れば變るものだ。現に私達でさへかうして汽車の窓から此の嶮岨な景色を眺めながら、坐つたまゝでこゝを通行する事が出來るなどゝ云ふことは、つひ先年までは夢にも思はなかつたほどだ。」いつしかこのやうな馬鹿げた幼稚な事をさへ考へずに居られなかつたほどに、私の心は屹立した斷崖の威力にへこまされてゐた。

汽車はまた物すごい響を立てゝ隧道に入つた。そのすさまじい響が、またしても私を暗い追憶へと誘つて行つたのであつた。

○

全くあの親不知の慘事の追憶はいたましい。就中多くの慘死者の中でもF―と云ふ靑年の事はわけて私にさま〳〵の追憶の種となつてゐる。高さ四百尺の山腹からなだれ落ちた何丈と云ふ深さの、しかも約一千坪ほどの廣さの大雪崩の

底から、千二百人ほどの捜索隊の人々の殆んど決死的な働きによつて、慘害の翌日即ち二月四日中に堀り出された慘死體だけでも七十二を數へた。Ｆ―の死體もその中にあつたのだ。Ｆ―は私達の町の山際にある小さな農民部落の者であつた。私はその部落へは三四年前から度々行つては、何かとそこの人達の話相手となつてゐた。隨てＦ―をもよく知つてゐた。彼はその部落では最もまじめな男であつた。最も頭のしつかりした男であつた。農事の改良にかけては、とりわけ熱心な忠實な働き手であつた。そんな風であつたから、何事につけても彼は部落中の若者達の頭となつてゐた。慘害のあつた日にも彼はその部落中の若者の殆んど大部分を率ゐて親不知方面の除雪作業に出かけてゐたのであつた。しかも、彼が率先して出かけた仕事の爲めに、彼の率ゐてゐた若者達の殆んど全部を死なせてしまつた。彼が死の前日まで一日も怠らずに書いて置いた日記が死後發見された。死に先立つ約一ヶ月前の一月元日の頁の初頭に彼は「芽出度もめでたし今日の日は」と書いた。

「朝雪も止み曇天なれども靜かなり小生等二時に起きて父と勇と三人連れで氏神樣及び佛樣へ參詣す、四時朝祝の馳走になり、小生はそれより繩ナイをする、初二丸仕上して休憩せり…………」

こんな風に彼は元日の朝早く其の年の仕事始めとして繩綯ひをせずにはゐられなかつたほどの忠實な働き者であつた。

「芽出度もめでたし今日の日は」――彼はおそらくそれを書いた時おぼろげながらに此の一年の幸多き年であらんことを祈つたであらう。しかも、僅に一ヶ月を隔てた後の彼は…………

一月二十八日の頁には彼が停車場の除雪の爲めに若者十人をつれて行つたことが書かれてゐる。そして「實ニ大雪ニテ平均七尺モアリシガソノ日ノウチニ更ニ一尺餘モ積リタリ。」と云ふことまで書き添へてある。

「一月二十九日

雪降ル西風强シ、小生等三人ニテ屋根全部ノ雪オロシヲス。

一月三十日

雪降ル西風强ク甚ダシ、小生等停車場ノ除雪ニ行ク、實ニ驚クベシ汽車ノ立往生デ何共オ話ニナラズ、大風吹ク。

一月三十一日

前夜ハ小生等ノ仲間五人夜番ニ居殘リテ夜中警戒ニツクス、實ニ大風ニテ致シ方ナシ、前夜ヨリ汽車立往生、新町寺町間ニ汽關車六臺立往生セリ、ソレヲ出スニ十二時迄モカヽレリ。

二月一日

珍ラシキ晴天トナル、午後小生等又停車場ヘ除雪ニ行ク、十三人ナリ、夜据風呂立ツ、

二月二日

二日續キノ晴天ナリ、同樣ノ作業ニ從事セリ、小生等ノ組ハ十七人ナリ………………」

かうしてその翌日卽ち、二月三日につひにあのやうな慘死をとげたのであつた。しかもその時彼の仲間の十七人中の十三人までが彼と運命を共にしたのであつた。

無論彼等が自ら進んでそのやうな危險な仕事に赴いたのは、賃錢を得る爲めなどではなかつた。彼等の行爲は、あのやうな悲慘な結果を見なかつたにしても、はじめから賞讚せらるべき立派な社會奉仕であつた。隨て彼が率先して彼の仲間を連れ出した事も、同じく大に感嘆すべき事であつた事は論ずるまでもなく明からであつた。しかるに、此の事についてあの場合彼れの責任を問題として人知れず非常な苦痛を感じた人が唯一人あつた。それは彼れの父であつた。

私はあのすさまじい風雪の渦まいてゐる廣いプラットフオームに半狂亂となつて右往左往してゐた大勢の人々の中に

交つて、しよんぼりとして隅つこに唯一人ぢつとしやがんでゐたF――の父の姿を今でもありありと憶ひ浮べることが出來る。しかも、他の多くの慘死者の死骸と共に、彼れの息子の死骸――頸から上がひどく壓し潰されてむごたらしく變形してゐた其の死骸が、いよ〳〵彼の面前に運び出された刹那、はね飛ばされたやうにその傍に驅け寄つて、つく〴〵其の醜く變り果てた息子の顏を見ながら、

「よう死んで來てくれた。お前が生き殘つたりなんかした日にや、俺は村の人達に顏向けがならんがだつた。ほんとによう死んで來てくれた。」かう叫んだ時の、彼のあの亢奮した樣子を、私は今なほ一層あきらかに憶ひ浮べることが出來る。

あの時の彼の父のあのやうな振舞は、私達には全くの驚異であつた。彼によつて突如として叫ばれたあの短い言葉はあの場合如何に多くの人々に如何に貴い感激を與へたことであつたらう。あまりに數多い、あまりにむごたらしい死體を見つゞけて來た爲めに、いつとなしに神經が痲痺しかけて居た私達は、その瞬間突如として再び人間らしい心に引き戻されて、居合はせた者は皆泣かずにゐられなかつたのであつた。

○

現場から汽車で運ばれて來た、慘死體は一旦町内の四つの寺院に收容された。二月四日中に私達の見た死體だけでも七十餘あつた。停車場から各寺院までの雪道には、所々になま〳〵しい血の滴りが雪を染めてゐた。一旦寺院に收容された死體は、一々その場で檢案された上でそれぞれ遺族に引渡された。遺族達はそれを各自橇に載せて深い雪の上を曳いて行つた。

薄暗い寺院内に澤山の死體の列べられたもの悽い光景も私は今に忘れることが出來ない。私の家のつひ近くの寺の如きは、あまり廣くない御堂の中に、三十六もの死體が收容された。しかも、その三十六の死體の中に唯一つだけついに

受取る人のないのがあつて、三日も四日もそのまゝにされてゐた。その不思議な死體も、今なほ私に深い印象を遺してゐる。

それは年の頃三十前後の印絆纏を着、卷脚絆をつけ、ゴム底の足袋をはいた男であつた。檢案の結果こゝと云つてひどく肉體をそこなはれてゐる個所もない變死をとげたものであること、所持品中に直江津津幡間の三等乘車券を持つた旅客であることなどが解つた、どうして此の旅客が唯一人だけ作業列車に乘込りんだのか。しかも切符に指定してあるのと反對の方向に行く汽車に乘つたのは何の爲めであつたか。そんな事は知るよしもなかつた。そればかりでなく、彼の所持品中にはつい近頃鐵道局の某保線事務所で紛失した高價な測量器械さへ發見された。金はすべてゞ一圓九十七錢しか持つてゐなかつた。手帳、質札その他の遺留品に書かれたさまざまの人名をたよりにして八方に調査の手をひろげたけれども、彼の素性は四日を經てもわからなかつた。その結果死體は不明のまゝ假埋葬される事になつた。

不思議な旅人の死體！しかし、それはつひにわかつた。十數日を經た後にはじめてわかつた。彼は遠い〳〵南の國に生れた者であつた。彼の生家は相當に暮らしてゐた。彼は幾年も前に家を出て、諸國を流浪して來たのであつた。前科もあるとか聞いた。彼の所持してゐた測量器械も彼自ら盜んで來たものらしかつた。しかも、何と云ふ運命の皮肉であつたらう。彼が唯一人の異分子として、社會の爲めに倒れた百餘の生靈と共に、あの世への道伴れとならうとは。かうした不思議な最後をとげるまでの彼の永い間の放浪生活は果してどんなものであつたらう。暖い南の國に生れて此の寒い北の國へしかも珍らしく雪の深い冬の最中に、さまようて來てこのやうな無殘な最後をとげやうとは……あまりに不思議な運命ではないか。

しかし、死は一切の終りである。死は一切を沈默の裡に葬る。運命と死との不可思議を痛感させつゝ、かの怪しい旅

人の死骸は私達の目から消えて行つた。

○

運命の神秘は、更に其の同じ列車に乘り合せながらも、或者は死に或者の無事に助かつた事實にも現はれる。遭難の列車の全體は六輛を以て編成されてゐた。しかも、その列車の最前部一輛は機關車と共に既に隧道内にゐつて無事、後部二輛はなほ鐵骨スノーセツドを出でずに居た爲め殆んど無事、たゞ中部の第二、第三、第四、位にあつた三輛の客車のみが雪崩の難に遭つたのである。卽ち生と死との間は辛うじて秒を以て數ふるに過ぎないのであつた。これは又何たる不思議な事實であらう。

彼等の中に一人の低能者があつた。列車が將に發しようとした時まで彼はぐづ〳〵して乘らなかつた。人々は車窓から盛に彼をからかつてゐた。彼はつひに皆と一緒の車に乘せてもらへなかつた。そして、止むを得ず機關車に乘り込ませてもらつた。しかも、その低能者がその馬鹿が、無事に助かつてゐるのである。皆の仲間入をさせてもらへなかつた爲めに、機關車に乘せてもらつたばかしに、彼は立派に助かつてゐるのである。運命の神秘はこゝにも閃めいてゐる。

○

「俺は皮もなく肉もなく骨ばかりになつて生きてゐる人間の掌と云ふものを始めて見た」と私の友人は語つた。私はそれを見なかつたが、その私の友人の世話をした負傷者の中にさう云つたやうな負傷をしてゐた人があつたと云ふ事である。その人の最も大きな負傷は左の大腿骨の折れ碎けてゐるのと、右の脛骨の碎けてゐるのとであつた。つまり腿から下が雪崩に埋められてめちや〳〵に壓し碎かれたのである。しかも、彼は自らその壓しつぶされてゐた兩足を雪の中から引きぬいて暗と吹雪の中を夢中に匍ひ出したのであつた。

けれども、その瞬間彼の耳のすぐ近くの闇の底で、悲鳴をあげて助けを呼び求める者のあるのを彼は聞いた。めちや〳〵に打ち碎かれてゐる兩足を引きずりながらも彼は突嗟にその悲鳴の方へ匍ひ寄つた。そしてそこに雪に埋められてもがき苦しみ叫んでゐる仲間の一人のあるのを見た。彼は何もかも忘れて仲間の埋つてゐる場所の雪を掌で堀り初めた。雪崩れ落ちた雪は氷のやうに堅い。しかも、その中には硝子の破片や石の破片や木の破片や何かゞ混じてゐた。彼の掌は一掻き毎に傷き破れた。その痛みに時々氣が遠くなるやうに覺えた。しかし、彼は飽くまで掻いた。最後に辛うじて相手の男が體を動かし得るやうになつたまで彼は深く堀つた。

「そんな風にして自分以外の一人の遭難者を救ひ出す事が出來たのだが、その爲めにその男の手は指の骨が折れ皮も肉も殆んどなくなつてしまふほどの傷を負けたわけさ、あの手を見た時は俺もさすがに身ぶるひした。」から私の友人は語つた。

その當時のある地方新聞にもこんな記事のあつたのを私は特に切り拔いて置いた。それは私の町から五里ほど離れた漁村から出てゐた一人の青年の勇敢な働きについての報道であつた。

「當時は多くの遭難者中にありて九死に一生を得たる彼は第二輛目の客車内にありしか、一大音響と共にスハ椿事隧道崩壞と思ふ間もなく、車輛はメリメリと音して七分通を押潰されたるも、幸に身に微傷だも負はず滿身の力を籠めて車窓を破壞し身を以て逸出したるが、暗黑中より起る悲鳴の聲助けて吳れいの悲叫哀號に我にかへりたる彼れは一大勇猛心を起し單身踏止まり再び車内に入りしも暗さは暗し悲鳴の聲を手さぐりに人の手と言はず頭と言はず、折重れる中より、漸くにして下敷となれる二三人を助け出したるも此處にても如何ともすべき術なく彼は俺が無事だぞ助けてやるぞしつかりして居れと連呼しつゝ更に屋上に上り破損して居る屋根板を引はづし、此處にても數人を助け出

せし折も折、後方第三輛車の丸潰れとなり居れる中よりも救助を求むる聲を聞きしも、暗黒咫尺を辨ぜざりしを以て彼は咄嗟の間に携帯せるマッチにて自己の笠を脱し點火して救急燈火に代へて取つて返し聲を頼りに折柄急を聞いて驅け付けたる消防隊員と協力して百方救助に盡力し、全身濡鼠の如くなり居りしを救助隊の人々より一先づ引揚を注意せられて漸く青海驛まで戻りたるも、なほ負傷者の看護其他に東奔西走して遭難の翌日の午後四時頃まで活動を續けゐたりしと云ふ。」

こんな風な美談はその當時つぎつぎに幾つも語り傳へられ、その度毎に人々は感嘆の聲を放つた。そしてそれは當時には眠つてゐても時あつて輝き出る人間性そのものゝ尊さの前に、おのづと人々の頭を下げさせるに充分であつた。

○

あの時の雪崩は、高さ約四百尺の箇所から約一千坪の雪が崩れ落ちたと云はれてゐる。そしてそれの落下した鐵道線路の上の雪の深さは、三丈五尺もあつたとの事である。その勢のいかにすさまじかつたかは、到底想像の及ぶところでない。

しかし、雪崩が如何に大きくあつたにしても、汽車などのなかつた昔には、おそらくこんなに多數の人間が一時に雪崩の爲めに慘死をとげるなどゝ云ふことは絶對にあり得なかつたであらう——そのやうな事まで私達はその當時語り合つたりした。

○

あの當時の事を憶ふと、今でもなほ時々夢であつたやうな氣がする。三四日の間は、私達までがまるで夢中であつた。毎日々々吹雪の中を駈け廻つてゐながら、寒いとか冷たいとか云ふ感じは殆んどなかつた。少しでも働くことの出來る

男は、みんな出て働いた。此の地方の人々が、あんなに多數一つ仕事に從事し、あんなに心を協せあんなに力を協せた事は、おそらくあれ以前には一度もなかつたであらう。私達はあんなに種類の異つた多數の人間が、仲よくしてゐる有樣を未だ曾て見たことがなかつた。何と云ふ美しい光景だつたらう。

この一事を私達に經驗させてもらつたゞけでも、私達は慘死者達の精靈に對して永久に感謝を捧げなくてはならない――こんな事をも私達は時々語り合つた。

○

雪崩の底に埋沒してゐた慘死體は凡てゞ八十八あつた。そのうち七十二人のが遭難の翌日即ち二月四日中に發掘された。五日には一つも發見されなかつた。六日になつて漸く殘りの十六人のが發見された。そして最後に唯一人だけどうしても發見されずに殘された。しかし、人々は困難な捜索作業をやめなかつた。嚴寒と戰ひ、風雪と戰ひ、雪崩の危險を冐して發堀をつゞけた。その當時は氣付かなかつたけれども、最後に殘されたたつた一人の死骸の爲めにあの吹雪の烈しかつた二日間に亙つて約千三百人の多人數が働きつゞけた事は、今から考へるといかにも貴い事實であつた、人一人の貴さと云ふことも、私達はその時痛切に感じた。

○

雪の中に立往生した汽車内の樣子は實際經驗したものでなければとてもわかるものでない。一旦車輛の運轉が止まつたとなるともうおしまひである。線路の上には前にも後にも雪はづんつん積つて行く。時間がたつにつれてスティームも通らなくなる。寒さが刻一刻增して行く。しまひには電燈さへ消えてしまふ。人々はたゞぢつとして暗黑と嚴寒との底に縮こまつてゐるより外に仕方がない。子供たちが絕え入るやうに泣き叫ぶ。飢がそろ〳〵襲ひはじめる。飢と共に

寒さも増す。外へ逃げ出さうとしても、外は一面に深い雪の原である。おまけに霏々として降りしきる雪は烈しい風に吹き捲くられて、一寸先も見えない。火を焚いて暖を取らうと思つても、狹い車室内では如何ともしがたい。

雪國の村々では、人々はかうした場合に鳴らされる汽車の非常汽笛の音の何を意味するかをよく知つてゐる。あつい湯と、あたゝかな飯の供給――彼等は先づ何よりも先にその事を考へる。そして村中の者は殆んど總動員の形でその急を救はうとして集るのである。そこには利害の打算などは寸毫もない。そこには强ひられた義務の煩ひなどは寸毫もないのである。

去冬私達のぶつかつた親不知の大慘事のやうな事は例外であるが、雪の多い冬の間に、私達が何等かの形で人間同志のあたゝかさと云ふことを、心のどん底まで感じさせられるやうな事件の一つや二つにぶつからないことはないのである。雪の多く降る永い冬を持つ國に生活する者にとりては、冬は實に人の心のあたゝかさを味ふべき時である。雪國の人々が不思議に冬を愛し雪を愛する傾のある所以も、さうしたところにあるのかも知れない。」

○

もうぢき又冬が來る。人々は今冬を迎へる準備に忙しく働いてゐる。「秋」が濟むとどこの村でも法事や報恩講などの佛事が始まる。お互に招きつ招かれつして、料理を味はひ酒を汲みかはす。佛事の濟む頃になると、年の暮が近づく。やがて正月がやつて來る。人々はまた集つて樂む。

大きな爐には火が焚かれる。爐の周圍には人が集る。雪が積ると、村と村との距離が短くなる。雪が積ると村のありかゞはつきりとして來る。

○

冬のおもひ出にはなつかしい事が多い。しかし、今年の冬のおもひ出は、私達にはあまりにいたましい。來るべき冬の間に日を同じくして村々の多くの家々で、如何に悲しい一週忌の法會が營まれることであらう。

私の家のつひ近くにも、あの折大事な家の主人を亡くした家がある。その家の主人と云ふのは、私の幼い頃の遊び友達であつた。しかも、あの慘死をとげた前日の夕方、彼は商用で私の家に來た。その日にも彼は鐵道線路の除雪に行つて來たのであつた、その時の彼の樣子が私には今でもあり〱とおもひ出されるのである。

その當時重病の床に就いてゐた彼の妻、夫の變死を知らせるのをすら危ぶまれた彼の妻、いよ〱その事を知つた爲めに急に病勢が重つて一時は危篤狀態にまで陷つた彼の妻は、今ではすつかり丈夫になつて彼亡き後の一家の生計を立派に支へてゐる。それだのに、あの危險な仕事に一組の人々を率ゐて自ら進んで出たほどに自らの頑强を恃んでゐた彼その人は、今は此世に居ないのだ。

冬が近づくにつれて、私達にはそんな事まで今更のやうにしみじみと考へられるのである。

冬はもうすぐそこへ來てゐる。今年の冬も雪が多く降るであらう。子供たちは今からもう雪の降るのを待つてゐる。彼等は霰や雪をさへ仲のよい友達のやうに思つてゐる。おそらく自分達の親が雪の爲めに慘死をとげた子供たちまでが雪の降るのを待ち樂んで居ることであらう。

秋より冬へ

中山帽子
英國 パッタースピー會社
九圓
九圓九十錢



特價
中折帽子（鼠色）
六圓均一



若向
鳥打帽子
チエビオット地
三圓五十錢





特價ワイシャツ
舶來綾ネル 四圓
縞綿ネル 貳圓五十錢



特價
メリヤスシャツ（裏毛） 壹圓貳十錢
ラクダ色 壹圓四十錢



特價靴
ボックス編上 七圓五十錢
短 七圓
ローダス短 九圓

東京今川橋

松屋呉服店

時論

我國政界の實相に目覺めよ

法學博士　吉野作造

○

先頃アメリカに總選擧があつた。民主黨に多少の好況あるべしとの評判ではあつたがあれ程までの大勝を得べしとは事前に於て何人も豫想せざる所であつた。而して斯ういふ事は實は彼國に於て決して珍らしいことではない。例へば英國の總選擧だつて（此稿を草してゐる今十四日は總選擧の前日である）、今の所勝敗の數が丸で見當がつかぬではないか。斯くて總選擧に在て勝敗の適確なる豫想の全く附かぬといふことと及び其の結果は多くの場合に於て意外の（併し後から考へて見ると深い意味のある）現象を來すといふことと、是れ彼國選擧界に於ける通則と謂ていゝ。

之に反して我國に於ては、總選擧の結果は概して事前に豫想のつくを常とする。政府乃至與黨の事前に揚言する所の目標は後に表はるゝ當選者數と大差がない。選擧に在て結果の豫想がつくといふは、我國獨特の現象である。僕はこの現象に讀者の一顧を煩したい。

我國では何故豫想がつくか。是れ取も直さず、政府なり政黨なりが選擧を支配するからである。英米では何故豫想が付かぬか。人民が政治家の頤使に甘んぜぬからである。最近アメリカの選擧に關しても、後から來る電報には種々の解釋を示して居るが、多數の一致する所は「選擧民が黨派關係を無視し自分達の要求を滿たす見込のある候補者に、投票した」（十一月十一日東京朝日新聞電報）結果だといふに在る。是れ即ちアメリカ今日の民衆が如何に政治家を支配するに有力であるかを語るものでないか。斯くてこそ始めて民衆政治の實績は擧るのだ。支配さべる政治家がアベコベに民衆を支配する我國の如きは、正に憲政の逆轉である。憲政の逆轉は理に於て正さゞる可らず。況んや逆轉に加ふるに其の當然の結果たる幾多醜惡なる罪惡が餘りに頻繁に行はるゝに於てをや。

○

僕は我國當今の政界に於て民衆は完全に政客に支配されて居ると云つた。この斷定に對して僕は何等の訂正又何等の條件を附するの必要を見ない。さうすると斯う質問する人があるかも知れない。政界の策士が時々民衆運動を計劃して輿論の作興に骨折るが如き措置に出づるものあるが、あれはそんな何の爲かと。成程之は尤もの問だ。之には少しく註釋が要る樣に思ふ。

政客が率先して所謂民衆運動を企つる場合に二つある。一つは政府反對黨のやる夫れだ。此方は其の何の動機に出づるやは問はずして明であらう。所謂虎威を借りて當局を威嚇せんとする苦策に出づるもので、政治の上から民心開發の上からも何の役にも立たぬものである。他の一つは政府又は與黨のやる夫れだ。此方は民衆を煽動して責任の一半を之に歸せんとする目的に出づるもので、多く問題の取扱に深き自信と勇氣とを缺く場合に執る方略である。之に付ては更に少しく説明が要る。

○

論歩を一轉して、日本の政界に於て實際に政界の方嚮を決める勢力の中心は何處に在るかを先づ明にして置かう。例を帷幄上奏問題に取る。之が合法的に解決せらるゝ爲には、第一に政友會が動かなければならず、第二には研究會の贊同を必要とする。下院に於て政友會、上院に在て研究會此二者にして同一の歩調を取らん乎、天下に於て何事も爲し得ないものはない。此の二者の中に就ても最も有力なるは政友會の動くことだ。政友會が斷然右しやうと思へば研究會の結局之に乖離し得ないことは想像に難くない。然らば政友會を動すにはどうすればいゝか、之を逆にして、政友會の進退に關し事實上最も有力なる死命權を握るものは何處かといふ問題にしてもいゝ。政友會は自ら政黨だと曰ふ。政黨は民衆を基礎とするものだと曰ふ。黨の進退は民主的にきめると曰ふ。從て政友會には代議士會あり、評議員會あり、其他曰く何、曰く何、色々の機關がある。が畢竟は飾り物だ。その實體を蔽ふ能はずして彼等も時々總裁專制の言葉を洩らすではないか。そこで更に問題を狹めて總裁は本當に專裁するのかといへば、伊藤西園寺の時代はいさ知らず、今日は全く然らず、嘗ては一部山縣公の鼻息を窺つたこともあるが、今や誰か西園寺公の隱れたる一大潜勢力を疑ふものがあらう。暮夜密に西邸に伺候して『やつてもよからう』との御託宣を蒙るに非んば、帷幄上奏問題でも普選問題でも、決して片のつく見込はないと思ふのである。

世人はよく元老は無責任の地位に隱れて絶大の權力を振ふといふ。之には少しく誤りがある樣だ。元老が所謂無責任の地位

に在て天下を左右するは疑ない。併し其の地位の形式的無責任を以て一から十まで彼を無責任呼ばはりするは當らない。何となれば、元老が一度『よからう』と受け合つた以上、後は其事の實行に際して或は起る幾多の難關に對しては、其の貴族院より來るものたり又は軍閥官僚の方面より來るもの たる に論なく、彼は其勢力の及ぶ限り力を竭して其の排除疏通に骨折つて吳れるからである。元老の一諾には常に之れ丈の價値がある。故に政界の策士は之を重んずるのだ。元老の一諾には常に之れ丈の道德的責任が伴ふ。故に彼は容易にウンと云はないのだ。我國に於て多くの急要問題が容易に手を觸れられずして殘るのは亦實に之が爲である。

○

右の如き形勢の下に、國利民福に大關係ある重要問題が、すら〳〵と通る見込の少いことは言ふを待たない。何となれば、元老の決斷の標準は、其事が國家民人の爲にいゝか惡いかに在らずして、家子郎黨の有象無象に承認を强ひ得るか否かに在るからである。而かもその家子郎黨たるや、或は官僚といひ或は軍閥といひ、箸にも棒にもかゝらぬ、代物である、加之年と共に所謂元老の凋落てふ大勢に乘じて段々先輩の頤使に甘んぜざらんとする者なるに於てをや、だから元老がすつたもんだの揚句『よからう』の御詫宣を下したとしても、夫は多くの場合無條件ではない。家子郎黨の納得を得るための各種の煩しい條件が附帶する。その結果いよ〳〵政界の表向きの問題となるとそは理に於て徹らずツマリ鵺の樣なものになる。之すら政友會邊から云へば苦心慘憺の結果だと誇るだらうが、我々國民から見れば、些つとも有り難いことはない。原前首相はよく我々の樣な評論家を捉へて、自分達の苦心の程も知らずに君等は空論ばかりするから困ると云はれたさうだが、其の苦心を知らぬではない、餘計な苦心をする馬鹿々々しさに呆れるのである。

○

さて色々の部分的讓歩に依てやつと元老の御許しが出たとする。そこで我黨の國家に對する貴重な貢獻などと呼號して愈々實際問題に上ぼすのだが、どんな事でも反對は免れぬもので、之も議會や、新聞で兎角の物議を促すことになる。理論が徹らず處々骨拔になつて居る丈また辨明に困る。斯んな時一番都合のいゝ說明は『輿論の要求 に從ふといふことである。斯くて政界の策士は、平素踏み付けにしてゐた民衆に俄に秋波を寄せて、所謂民衆運動をやるのである。眞逆元老の御許しがあつたから急に此の問題を持ち出したともいへぬ。乃ち彼等は民衆を煽動し、所謂輿論の要求といふに面倒な說明の一半の責を免れつゝ、衆

ねて民福の爲に圖つて忠なるの虛名を博さうといふのである。

こゝで前の說明に遡る。先きに述べた如く我國の政客は時として輿論の作興に骨折ることはある。併しその根本の動機は輿論に聽くに在らずして只之を利用せんとするに在るは前述の通りだ。故に曰ふ、我國今日の政界に於て、民衆は全然政界方向の決定に與らしめられないと。

○

我國の政界を決定的に動す者は、形の上から云へば元老だ。やゝ立ち入つて云へば、元老と貴衆兩院の多數黨だ。故に今日の政界に於て表面に活躍するを許さるゝ第一の資格は、元老の信任を得ることである。盲從によると硬持に出るとを問はない。第二には貴衆兩院の多數を味方に附くることである。於是陣笠と黨首とを連絡する多數のブローカーの發生を見るに至るのだ。衆議院の方は餘りに吾人の耳目に鮮だから改めて云ふまい。貴族院に於て今日研究會邊に重きを爲す幹部は槪して多數を糾合するに若干の堪能を認められたる保險會社の集金掛り底の人物に非んば、幹部にでもして置かなければ駄々を捏ねるといふひねくれ者ばかりでないかと申す人がある。此間に不義の財物を以て自ら利し他を欺くものあるは亦略想像するに難くない。斯くして上下兩院を通じて惡貨幣を以て良貨を斥け、而かも政界重要問題解決の鍵は着々として彼等の掌中に歸せんとする。彼等の爲す所國利民福と相隔るゝも亦怪むに足らない。

○

政治否認論の理に於て採る可らざるは吾人屢本誌に於て之を說いた。然れども我國今日の政治の如きは、之を否認し之を排斥するに吾人決して人後に落ちるものではない。但吾人の否認は畢竟は改善の爲でだ。然らば如何にして改善すべきか。他なし、政界方向の決定權を吾人民衆の手に恢復するに在るのみ。更に具體的の一重要綱目を擧げんか、選擧に於て吾人國民は完全に政治家の支配を脫することと是れ。之の點に就ては吾人屢々詳論を公にしたから茲には略する。英米選擧界の報道に接し、深く感激する所あり、切に讀者諸君の猛省を乞ふ次第である。

小題小言數則

○

去月中ばの新聞に例の西原借款のことが出て居る。之は改めて云ふまでもなく寺內內閣が段祺瑞政府を援ける政治的目的を以て貸し付けたもので、支那の人民からは勿論、日本內地に於ても大に非難を受けたものである。興業・朝鮮・臺灣の三銀行をして貸出さしめたものだとはいへ、政府の保證の下に無理に出

さしたものだから、其の後元利の支拂を受けず、今や之が爲に發行した興業債券の償還期の切迫を見るに至つては益々之が跡始末をしてやらねばならぬ羽目となつた。銀行側では國庫債券を發行して日本政府對支那政府の借款に乘替て貰ひたい希望を有すとの事だが、之では公債の表面の性質を一變し國際上面白からぬのみならず、內政上またいろ〳〵物議を滋くするの面倒ありとて、多分興業債券の發行借替とするだらうと云ふことだ。併し幾ら表面を取繕つても、結局政府の負擔に歸し、從て國民全體の損失となることは疑ない。之等の事情は疾うの昔から分り切つたことで、吾人は再三之を論難して政府の反省を促したのであつた。段祺瑞をして私を爲さしむる爲に(斯くすることに由りて日本の利益を圖り得べしと誤想しつゝ)無理に金を貸した形になり、事實之に由て支那の民衆は何の慶福にも浴することなく、而かも當の段祺瑞は日本の援助あるに拘らず沒落し了せる今日、この貸金の返却を受くる見込なきは云ふまでもない。況んや相手は日支條約の無効をすら宣言する程の無鐵砲漢なるに於てをや。強て償還を求めんとすれば武力に訴ふるの外ないが、こんな事は當今の形勢の下に於て到底許さるべきでない。結局帳面上の貸金として事實日本の損失となる外はない。之等の事情は始めから分り切つて居つたから、吾人は極力之に反對したのであつた。にも拘らず寺內內閣は之を斷行した。斷行して而かも得々たるものがあつた。沒落に際して勝田藏相以下の關係官民は厚き恩賞を授つて耻ぢなかつた。今日いよ〳〵其の後始末に窮するを見て、彼等は衷心果して晏如たるを得るだらうか。併し吾人は今更之を玆に追及せんとする意思はない。古いことをわざ〳〵こゝに持ち出したのは、過去によりて新に將來を警めんが爲である。そは西伯利出兵に關連して行賞の沙汰あるべしとの噂あるからである。

○

西伯利出兵は國帑を空費したる點に於て又何等の實益を帝國に齎さゞる點に於て遙に寺內借款にまさり、相手方の反感と世界の冷笑非難の下に帝國の道德的威信を傷けたる點に於て、軍閥的罪惡の空前の傑作とする。而して是亦寺內借款と同じく國民の烈しき反對を押し切つて秘密と欺瞞との裡に決行されたものである。想ふに當時軍閥者流の胸中深く期する所のものがあつたのだらう。今や其結果は如何。失態の跡歷々として掩ふ可らず其の損害の大なる——物質的にも精神的にも——固より寺內借款に數十倍する。心ある者正に死を以て罪を天下に謝すべきに、何を以て恬として行賞の恩命を請けやう。賞を受けると受けざるとは本人の勝手だけれども、吾人は風教の爲に之を默

視することが出來ぬ。吾人は讀者諸君と共に嚴しく之を監視したい。

○

急進的風潮の横溢する歐洲の天地に、ケマル・パシアの成功とファスシスチの擡頭とは一見驚異に値する現象である。土耳其の回教民が耶蘇教諸民族の間に介在して容易に結束するは怪むに足らぬ樣だが獨り伊太利に於ける反動的革命運動の成功せる要因に至ては、人の多く不思議とする所である。之に就て能く研究して見たなら色々の原因があらう。併し同じ樣な原因が他の國にもあるのに、獨り伊太利のみこの特異の現象を呈せるは、想ふに一つの重要なる原因を宗教的狂熱と常識的修養の欠缺とに置くものではあるまいか。天主教の一部には今仍ほゼシユイト的狂熱を伏藏する。之を緩和して其の甚しきに到らしめざるは常識的訓練の普及なるに、伊太利には之がない。果して然らば今のファスシスチは是れ當年のイグナシウス・ロヨラの運動に非ずして何ぞ。夫れ丈け一面に尊敬に値する熱誠あり、又國民の一半に深き根柢を有する次第であらう。併し之を以て歐洲一般に反動的潮流の擡頭せる徵證と爲すあらば大なる誤である。這般風潮の流行するには特殊の條件が要る。伊太利のこの流潮は精々西班牙葡萄牙等の諸國には或は及び得んも、佛蘭西以北には到底及び得ないだらう。伊太利に於けるファスシスチ運動の運命も亦、ロヨラ一派の運動の歷史の敎訓に依て之を揣摩するに大過なからうかと思はるゝ。

○

常識的訓練の富贍なる英國は、よかれあしかれ、長い間ロイド・ジョーヂを宰閣に据え置いた。急進保守の中間に位して可なり苦しい立場に在つた樣だが、英國の國民性を基として考ふるに、今の處あれ以外に往き方がない樣に思ふ。中間內閣なるが故に急進的民衆の熱心なる支持がない。之に乘じて保守派の策士はロイド・ジョーヂ內閣を倒壞して英國古來の傳統的慣例に戻らんとするが、之が果して能く急進的民衆を向ふに廻して今後の政界を切り拔け得るかどうか甚だ覺束ない。英國今後の政界は、傳統の惰性と急變せる社會的新形勢の要求との妥協に依て安定せらるべく、夫れ迄には可なり永い年月を要するは勿論だ。而して共間よく廟堂に立つて中央の政權を乘り得るものは聯立內閣でなければならぬと思ふ。聯立主義のロイド・ジョーヂ破れて今や天下は保守黨のボナー・ローに歸したけれども、結局の安定は最近に行はるゝ總選擧の結果に待たなければならない。何れにしても英國政界の勢力の推移は吾々にも至大の關係がある。吾人は刮目して其の結果の報道を待たう。



整腸に消化に保健に

ビオフェルミン

は第一の良劑として選ばる

既に腸疾患に悩むもの、殊に腸機能の衰弱せるものはビオフェルミンの服用に依つて速に健康に導かる。

粉末及錠劑あり、全國知名藥店に販賣す(說明書郵呈)

發賣元　大阪市東區道修町　武田長兵衛商店

製造元　神戸市二宮町　株式會社　神戸衛生實驗所

鴎外全集

文學博士
醫學博士
森林太郎
全著作集

鴎外先生は我國三千年の歴史を通じて、我日本が生みたる眞實の巨人なり。哲人にして文豪、改革者にして大成者、科學者にして詩人、之を弘法型、新井白石型の人格と稱す。桑木博士また先生を評して「ギヨオテ型」「カント型の偉人」と謂はれたり。先生は醫學、衛生學、陸軍醫政、文學、美術、哲學、國語學、教育學等、隨所に一代の豫言者先覺者たり。翻譯に、創作に、考證に、俊逸の天才、絕倫の精力を以て、實に一人にして善く十人を兼ぬるの業績を舉げられたり。

先生の思想の富贍、識見の卓拔、情熱の旺盛、筆致の新警、世に其比を求むべからず。語は獨佛英西伊諸國に通じ、學は和漢洋を兼ね、泰西文化の眞正の移植者として第一人者たり。國書、漢籍、佛典等の蘊蓄は晚年に至て益深厚を加へ、宏才明智の近代主義者たると共に博識大雅の古典詠學者なりき。

鴎外全集は先生の手澤墨跡の猶新たなる遺篇を本とし、世に散逸せる零碎の珠玉をも悉く網羅せり。著作の題目は古今東西の新生文化の各分野を綜合し、其醇正なる哲學思想と、高華なる藝術的表現と相俟って、現代及び未來を指導して餘りあり。

鴎外全集細目録

第一巻　藝術論篇　上

審美綱領　審美新説　審美極致論　審美假象論　印象派(?)　審美私說　審美[illegible]　[illegible]引草　審美[illegible]　柵草紙の山房論文　其他雜篇

第二巻　藝術論篇　下

[illegible]文論　演劇[illegible]法に就ての争　小説[illegible]　山房[illegible]　[illegible]士が[illegible]の[illegible]の芝　尼[illegible]答　[illegible]　獨語　めさまし草　[illegible]心頭語　[illegible]小言　其他雜篇

第三巻　創作小説篇　上

うたかたの記　舞姫　文づかひ　染めちがへ　[illegible]　ファスチエス(對話)　[illegible]　沈黙の塔　[illegible]　カズイスチカ　流行　不思議な鏡　食堂　[illegible]　蛇　心中　鼠坂　羽鳥千尋　百物語　ながし　杯　花子　獨身　[illegible]　あそび　木精　大發見　電車の窓　追儺　懇親會　牛鍋　里芋の芽と不動の目　ル・パルナス・アンビユラン　かのやうに　吃逆　藤棚　鎚一下　[illegible]　有[illegible]門

第四巻　創作小説篇　下

全十八冊

菊版　九ポイント組
最上天金　布製　紙數八百頁

豫約募集

雁　高瀬舟　ぢいさんばあさん　最後の一句　山椒太夫　寒山拾得　魚玄機　天寵　餘興　阿部一族　興津彌五右衛門の遺書　佐橋甚五郎　護持院ヶ原の敵討　大鹽平八郎　堺事件　安井夫人

創作戯曲篇

プルムウラ　附、脚本プルムウラの由來　玉篋兩浦嶼　附、兩浦嶼自註　生田川　靜　日蓮聖人辻説法　假面　なのりそ　團子坂（對話）　さへづり（對話）　影（對話）　建築師（對話）　曾我兄弟　女がた

第五卷　抒情詩、雜文篇（創作及飜譯）

於母影　長曾我部元親　うた日記　譯詩　オルフエウス　沙羅の木　我百首　奈良五十首　短歌　俳句　漢詩　漢文　盛儀私記　紀行　序跋　標榜諸篇　椋鳥通信　空車　其他雜文數十章

第六卷　史傳篇（一）

阿育王事蹟　能久親王事蹟　西周傳　清麻呂と足立山　山口古稀　ギヨオテ傳　レッシング　シルレル　ゴルキイ　外諸篇

第七卷　史傳篇（二）

栗山大膳　椙原品　都甲太兵衛　壽阿彌の手紙　鈴木藤吉郎　細木香以　津下四郎左衛門　澁江抽齋　森枳園

第八卷　史傳篇（三）

伊澤蘭軒　小島寶素

第九卷　史傳篇（四）

北條霞亭　[illegible]井年譜　大下藤次郎年譜　伊藤左千夫年譜

第十卷　飜譯戯曲篇（一）

ファウスト（ギヨオテ）　ファウスト考

第十一卷　飜譯戯曲篇（二）

ザラメヤの村長　折薔薇　伊　ギヨッツ　マクベス

第十二卷　飜譯戯曲篇（三）

寂しき人々　僧房夢　出發前半時間　ヂオゲネスの誘惑　花束　街の子

第十三卷　飜譯戯曲篇（四）

猛者　短劍を持ちたる女　耶蘇降誕祭の買入　戀愛三昧　奥底　白衣夫人　日常茶飯　痴人と死と　謎　れんねえ旅館　人の一生　僧院　奇蹟　忘れて來たシルクハツト　サロメ　シラノ・ド・ベルジユラツク　秋夕夢

第十四卷　飜譯戯曲篇（五）

ペリカン　稻妻　幽靈　ジヨン・ガブリエル・ボルクマン　ノラ　手袋

第十五卷　飜譯小説篇（上）

卽興詩人　尼　午後十一時、戰僧　みくづ　緣　笑　歎　聖ニコラウスの夜　蛙　鑑定人　舞踏　クザンチス　橋の下　田舍　不可說　復讐　猿　一匹の犬が二匹になる話　聖ジユリアン　父の讐　新浦島　洪水　うづしほ　瑞西館　パアテル・セルギウス　馬丁　樺太脱獄記　鱷　センツアマニ　笑　死　罪人　板ばさみ　フロルスと賊と　苦痛　犬　牧師

第十六卷　飜譯小説（下）

[illegible]演說　貧[illegible]年　ふた夜　惡因緣　地震　うきよの波　玉を抱いて罪あり　埋木　女丈夫　はげあたま　約　鶏　世界漫遊　顔　皆の上の[illegible]　女の決闘　山彦　ソクラテエスの死　汽車火事　冬の王　[illegible]光　老曹長　己の葬　[illegible]　防火栓　死する權利　二[illegible]　いつの日か　消[illegible]ります　父　父と妹　なかれ　労働　[illegible]　金杯　白　祭日　老人　[illegible]　アンドレアス・タアマイエルが遺書　一人者の死　みれん　正體　最後の午後　破落戸の昇天　辻馬車

第十七卷　醫學篇

獨逸文　六種傳染病分類圖　防疫法　消毒　雜誌　[illegible]阻業の醫斷　エミル・ドユ・ボア・レエモン傳　ペッテンコオフエル　ロオベルト・コッホが傳　ヰルヘルム・ロオト　ゲシヤイドレンの傳　軍醫ドンアレス　外十數篇

第十八卷　衛生、軍事、人文篇

衛生學大意　公衆衛生略說　英國衛生制度　女子衛生　日本食論　[illegible]　病院論　市區改正論　[illegible]田の利害　戰論　二卷　日本兵食論　人種哲學梗概　黄禍論梗概　名の上に就いて　古い手帳から　其他十數篇

規略

申込金　金五圓（最後の會費に充つ）
拂込　毎月拂金五圓　一時拂込　金八拾五圓
送本　大正十二年一月より毎月壹册宛十八ヶ月完了

豫約申込　十二月二十日限

内容見本　御申越次第進呈

申込所

東京市日本橋通區一丁目
電話本局五一・四二〇七番
振替東京一六一
春陽堂

東京麹町區内幸町一丁目
電話銀座七八三・二一八八
振替東京五二二九八
國民圖書株式會社

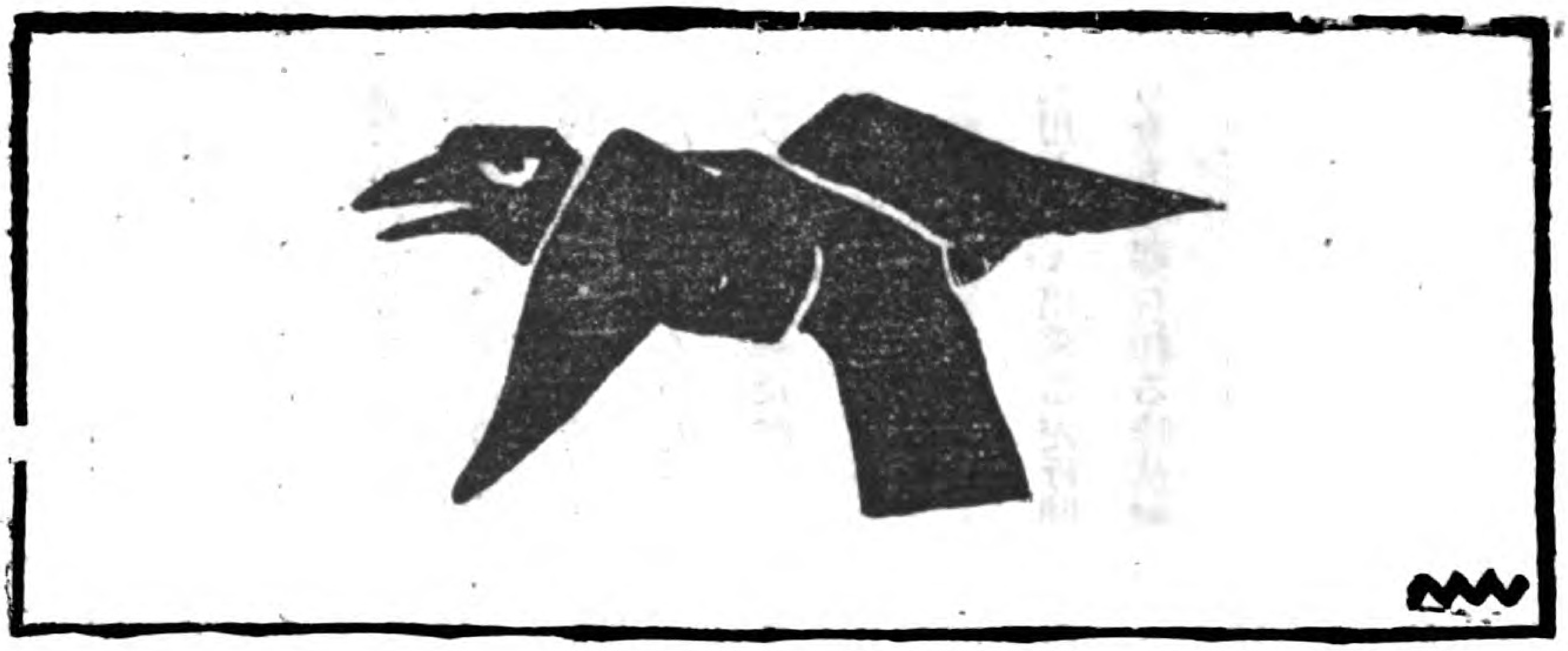
東京市牛込區矢來町
電話番町八〇七・八〇八・八〇九
振替東京一一七四二〇番
新潮社

東京市麹町區内幸町一丁目
電話銀座七八三・二一八八
振替東京六二四八五番

鷗外全集刊行會



あたゝかい滋強飲料
カルピス
僕のすきなカルピス
お母さんと　飲んだ
兄さんと　飲んだ
僕のすきなカルピス
花子さんにあげよ
（一壜が八壜にふえる）
販賣所・酒店・食料品店・藥店
製造元・ラクトー株式會社
カルピス



幻滅後の新らしい幻

宮地嘉六

一

古道具屋を呼んで來て諸道具一切の價格を見つもりさせたりして一度は家をたたむ決心にもなつたけれど、いざとなると彼はいろ〳〵考へねばならなかつた。どんな器物にも愛惜が感ぜられ、それに、妻と別れて直ぐに家をたゝんで放浪生活に陷ると云ふことが、體驗を極めると云ふ上からは勇ましいことのやうには思へたけれど、それには幾分無謀な、自暴自棄的な輕卒さが手傳つてゐることを自分でも分つてゐたからである。そればかりでなく、妻の方で訴訟を起したとすれば、それが解決しないうちに滿洲なりシベリヤなりに行くのも卑怯のやうに思はれた。そしてまた、他日法廷に立たねばならぬ場合に、自分にとつて、有力な證人ともなつてくれさうな近隣の差配、その他の人達と今遠ざかることは非常な損失になりはせぬか、と云ふことも氣にかかつたのであつた。

で彼はもうしばらく現狀を守つてゐた方がよいと思つた。その方が世間態もよいと云ふこと、それから二つにはまた、萬一思ひもよらぬよい相手が出來でもしたら、强いて放浪生活をするにもあたるまいと云ふ考へも起らないではなかつた。唯、前の妻と結婚する爲めに買つた長火鉢と唐木の机と、その他あまり必要でないと思ふ器物だけを賣ることにした。これは、シベリヤへ行くつもりでこしらへた外套やルパシユカの代價として服屋に支拂はねばならぬ必要に迫られてゐたからであつた。それに長火鉢は今や思ひ出のよくない無用の記念物でもあつた。然しそれでさへも賣り飛ばしてしまつた後は、家の中が一入さびしく、がらんとなつて、光彩を失つた。

離婚と云ふことが唯單に妻と別れると云ふこと以上に重大なものであつたことを彼は離婚後に於て始めて具體的に知り得た。世の多くの人々が不幸な結婚生活から思ひきつて脫し得ない理由をも知り得た。彼が考へてゐたやうに、離婚は再びもとの孤獨に歸つてひとり身の不自由を忍ぶと云ふ覺悟だけではすまなかつた。――どんな愚かなる妻でも、一度妻として定めた後はその男の社會的存在にとつては一つの背景であつたからである。その意味に於て彼は離婚後、複雜な社會的反響といろ／＼の損失を意識した。別れた妻の方では彼がさうした反響を幾分でも受け得る地位にあることを利用しつゝ出來るだけ問題を惡化させ、世間が彼と云ふ人物をひとへに嫌責するやうに謀つたのであつた。

『君ももう葬られる時が來た。君の文壇的存立も人としての信用もこれでおしまひだ……』彼は一時全くさう見られてしまつたやうな氣がして、いたましい狼狽に陷つた。

『なあに君、少しも頓着することはないさ。最後まで戰ひたまへ、かうなれば戰より他にない。』或る者は彼にさう云つて聲援した。然しさうした親友の聲援でさへもが半ば彼の存立的危機を感じてゐて云つてくれる言葉のやうに受け取れるのであつた。事實さうでもあつたのである。人はどんなに重い病人に對しても、直接に『君はもうあの世の人だ……』

と云ふやうな無遠慮を敢てしないものであつたから。

『全く妙なものだ……』と彼はひとり呟きながら思つた。彼は一つの新らしい心理を自分に發見したのであつた。それはかうである。夕方戸外に立つて彼が空を眺めてゐるところへ西隣の妻君が箒を持つて出て來た。二人は挨拶した。妻君は無論掃除をする爲めに出て來たのである。

『よくお天氣が續きますこと。』

『はあ、ほんとによく……』

『おひとりで、ほんとうに御不自由でゐらつしやいませう。』

『ありがたうございます。』

『でも、よく何んでも御自分でなすつてゐらつしやいますこと。』

『いえもう、全くなつてをりませんです。』

『さうでございませんわ――でも早くおあとをお迎へなさいませんではねぇ。いつまでもおひとりでは……』

『はあ……』と彼は變に答へた。

『ほんとうにお氣の毒なことでございましたのねぇ――で奥さんとの問題はもうおすみになりまして……』

『いえ、それがまだどうも變にこぢれたきりになつてをりまして。』

『ではどうしても矢張奥さんの方では法律問題になさるのですかねぇ。』

『さうらしうございます。』

『まあ、何てお考へ違ひでございませう。』

二人は挨拶のついでにそんな話をした。

彼は話のついでにから妻君に訊ねて見たかつた。

『奥さん。他人さまから御覽になつて私の妻は日頃どんな女に見えましたでせうか。』と、さう訊ねて見たい氣持がした。自分達の離婚事件が多少でも世間の問題になりさうな今、他人としては數ケ月間最もよく近接して來た隣人の批判を聞きたかつた。別れた妻の長所よりも短所の方をより多く知つてゐるであらう隣人の批判によつて、自分が妻と離婚せざるを得なかつた氣持を幾分でも正當化したいのであつた。

『どうも私共の結婚は最初から間違つてをりましたものですから。』

『でも大變お睦まじいやうにお見受けしてをりましたのに。』

『さう見えましたでせうか。他人さまのお目には私の妻はどんな女に見えましたでせう。奥さん。』彼はとう〳〵訊ねて見た。妻君は微笑で受けたが直ぐに答へなかつた。

『さうでございますねえ……ちよつと……然しどことなく横着な……つて申しますと失禮ですけれど、そんなやうな御性質が見えましたわ。』妻君は云つた。

『それは、たしかにさうでした。』彼も頷いた。それは幾分あたつてゐたからであつた。然し彼は、さう云はれた瞬間、異樣な顏つきをした。妻君はそれを氣づかなかつた。彼は自分の妻の缺陷を一つでも知つてゐてくれる第三者の批判をまめてゐながら、此の妻君の言葉をそのまゝ承認することに一種の矛盾を感じたのであつた。而も彼は彼の味方になつてやらうとしてゐる此の妻君の好意と同情を無視してはならなかつた――己の頬にとまつた蚊を殺す爲めには己の頬を打たねばならなかつたのであつた。

『全く妙なものだな……』と彼はさも新らしい心理をでも發見したやうにさう思つた……。或日臺灣の叔母から來た手紙には次のやうに書いてあつた。

『△△新聞にてお前さまの離婚のことを知りました。かげながらいろ／＼心配してをります。その記事の中にお前さまがひどく神經衰弱に罹つてゐると書いてありましたので一層心配しております。御不動樣に早く全快するやうに朝夕ゐがんでをります。兎に角獨身では不自由でせうと察してをります。意地にも早く何とかする方がよいと思ひますよ。昔から質屋の娘と辯護士の娘は決してお嫁に持つものではないと云ひますよ。矢張今度は國の方からよい人を貰つたがよいでせう中略』

國の方の妹は兄の離婚事件など少しも知らないで自分の亭主の行くへが分らないことなどを手紙に書いてよこして來た。多分小笠原島にゐる筈だから、兄上の力で若しや良人の消息が分れば何よりと存じます。と手紙にくれ／＼も書いてあつた。彼は妻を捨て得た男としては妹の亭主が妹を捨てゝ行くへを知らさない其の氣持を是認しなければならぬ立場にあつた。で彼は妹に對してかう云ふ意味の返事を書いてやつた。

行くへも知らさないやうな良人を思つてもつまらぬと云ふこと、さう云ふ男は思ひきつてしまつてはどうか。と云ふ意味の返事を兄らしく書いてやつた。すると妹から折り返し長い手紙がまた來た。決して夫婦仲が惡い爲めに良人が家出したわけでないこと、良人は正直者で賢い人間であること、たゞ母との折合が惡い爲めにそんなことになつてしまつたこと、(彼女の亭主は養子婿であつた)然し母もなくなつた今日では、良人にそのことを知らせさへすれば必らず良人はもとのやうになつてくれる筈であること、などが長たらしく書いてあつた。彼女の母と云ふのは彼には繼母で、從つて彼女は彼の異腹の妹であつた。父の死後、繼母と絶緣してから最早二十年も年月が經ち、それ以來逢つたことのない妹で

あつた。それゆゑ人妻となり、二人の子の母となつてゐる現在の妹を彼は想像にも描くことが出來なかつたけれど、唯一人の妹としてなつかしかつた。

二

汽車は埼玉平野を馳つた。漸く穗の出かゝつた淺黄色の麥畑は海原のやうに遙かに續いてゐた。そしてところ〲にどつしりとした新綠の森が島のやうにうづくまつてゐて、曇つた低い空に掩はれたそれらは白夜のやうに靜かに煙つてゐた。田舍家があつた。チゲスチンの白い廣告の文字がくつきりと麥畑の靑に染めぬきを見せ、電柱、松林、灌木、彼等は列車の速度と同じリズムで舞踏でもしてゐるやうにぐる〲と廻るのであつた。

そして列車はやがて小さなステーションへ着くのであつた。停車はほんの一分間――。

彼は列車がどんな田舍の小ぽけなステーションへ着いた時でも、なつかしさうに窓からプラットホームやその附近の茶店のありさまを眺めるのが癖であつた。幼年時代にステーションの附近で育つた爲めであつたらう。彼はステーション通であつた。そして機關車通であつた。發車の時に驛長がどんな風にしてタブレットをば機關車の上の運轉手に渡すであらうとか、それから專務車掌がどんな手の擧げ方をして合圖の笛を吹くだらうとか、そして彼がどの程度の落ちつきと意氣な姿勢で後部列車に飛びつくであらうとか、彼はそれを一種の藝術であるかのやうに注意して見るのであつた。更にまた、機關車が黑い煙を一度にどつと出さないと云ふことに火夫の忠實さと老練とを知るのであつた。それは機關車が黑い煙を一度にどつと吐き出すのは火夫の不忠實と怠惰とを最もよく證明するもので、適度のスチームを保つ爲めにはファイヤボックスの裡で直ぐによく燃燒し得る小量の石炭を絕えず忠實に投入すべきものであつたからである。その意味で黑煙を出すことは石炭の浪費でもあると云ふことを彼は知つてゐた。

更にまた彼は、僅か一分間の停車にも運轉手が機關車から飛び下りてサイドロッドやピヤーリングやその他の主要部分に手を觸れて注意を怠らないことをも見のがさなかつた。彼はまるで、指導機關手が乘務員の成績表を作る爲めに乘客に化け込んで出沒自在にステーションからステーションを巧みに乘り巡つてゐるそれのやうに注意を拂つた。

さうかと思ふと、ポケットからノートブックを取り出して妙なことを書き止めるのであつた。例へば次のやうな文句を。

『淋びしいひとり旅と云ふものは列車がステーションに着く度に淡い失戀を味はねばならぬとは。あゝ……』

それは彼の前に腰をかけてゐた二十四五の丸髷の妻君が下車して行つた後の感想であつた。そればかりでなく、列車が或るステーションへ着く。すると反對の方からも客を滿載した列車がやつて來てそこで落ち合ふ。その時ふと彼は自分の列車の窓から向ふの列車の窓を見た。そして思ひかけない美人を見出した。その瞬間何となく彼女の魅力に惹かれて、はかない切ない戀を感ずる。彼女の方でも彼をちよつと見る。と思ふ間にピリ〳〵〳〵……ポウッ……それで最早彼の切ない戀は終りを告げねばならぬのであつた。彼はもう一度よくその美人を見て置きたいのであつた。然し列車はどん〳〵馳り出してしまふのであつた。彼女の影はもう五六間彼方に消え去つてしまつた。どんなに首を窓から伸ばしたとて追つくものではない。唯他の乘客のろくでもない頭が影絵のやうにばら〳〵と續くのみで、永久に彼女は彼から消え去つてしまつたのである……。

然しもとより彼は、次のステーションまで行く間には彼女のことは忘れてしまふのであつた。

彼は今日、熊谷の町まで小旅行を試むべく汽車に乘つたのであつた。彼は妻と別れてからは時々かうした小旅行をするのが癖になつてしまつたのである。彼はポケットから次のやうな手紙をそつと取り出して讀み返して見るのである。

『先生、長々御無沙汰いたしました――かう申したら先生は驚きなさいますでせう。一度もお目にかゝつたこともない、まだお手紙一つ差しあげたことのない私がこんな手紙を上げたら先生は屹度眉をおひそめになつて、怒り遊ばすかも知れませんわ。でも先生、私の無躾をお許し下さいませ。だつて先生を私は隨分以前から存じてをりましたのですもの。ですから何だかそんな言葉を出したくてたまりませんの。私は先生の御創作やお寫眞をいつも思ひ出して拜見してをりますの。』

『何て茶目な小娘だ……』と彼は微笑を禁じ得ないのであつた、

『先生、私は此の田舍町の小さな荒物屋の小娘でございますの。私は先生のお作を初めて拜見いたしました時分から、何故はとなく先生がおなつかしうございましたの。でも私は先生にお手紙を差しあげる勇氣がございませんでしたの。ですけれど、とう／＼思ひきつて此手紙を認めることにいたしましたの。若し私が先生のお宅をお訪ねいたしましたら先生はどんなお顔で迎へて下さいますでせう。それが初對面でも『おうよう來た。おあがんなさい……』と先生はおやさしく云つて下さるやうに思はれてなりませんの。私は今、鐵面皮にこんなことを先生に對して書いてゐることが不思議にうれしくてたまりせんの。どうぞお許し下さいませ。

先生がこれまでいろ／＼と人並以上の御苦勞を遊ばしたこと、先生がお小さい時分から繼母におかゝりになつたこと、内氣でお心弱い方でゐらつしやいましたこと、また最近に離婚問題でお惱みになつてゐらつしやいますこと、私はようく存じてをりますわ。たより少い、そして先生と同じやうに繼母の手によつて成長いたしました私は、先生をお父さんとも伯父さんともよばして頂きたいほどおなつかしうございますの。中略』

彼はそのお父さんと云ふ文字がちよつと氣にならぬでもなかつた。

『どうぞ先生、先生を敬慕する哀れな、たより少ない小娘が常に先生の御奮闘を祈り望んで居りますことをお忘れなさいませんで下さいませ。私は此の手紙を認め終つて心から喜びと慰めとを覺ゆることが出來ましたの。さやうなら。

敬慕する　　小夜子

三好先生御許

汽車はそれから一時間ほどして熊谷のステーションへ着いたのであつた。無論彼は此の田舍町にやつて來てわざ〳〵その小娘の家を訪ねて見る勇氣はないのであつた。唯、さうした自分をなつかしんでくれる娘が此の熊谷の町にゐると云ふことで滿足しやうと思つた。その意味で、初めて來た田舍町であるが、一種特別の情趣を感じたのであつた。然し、時もあらうに町中は此の日あいにく大掃除の爲めにめちやくちやだつた。家々は疊や建具やを戸外へ持ち出して、まるで彼と云ふ新來の旅客を追ひ返さうとするかのやうに、はたいたり掃き出したりしてゐた。通りは掃き出された一年中の芥塵が山をなしてゐた。何處に彼女の家があるか分りさうもない。

『これはひどい……』彼は芥塵(あくた)とほこりの臭いにむせつた。それでもハンカチで口と鼻を掩ひながら町を歩いて行つた。どこまで行つても町は見るかげもない同じ狀態だつた。疊を叩く音がばん〳〵と拍子とり〳〵聞へるばかりだ。彼は最早町の中程以上まで來たので引き返しもならなかつた。で追はれるやうにどん〳〵町の續くまで前方へ急いだ。大股で。

やがて町はづれまで來てしまつた。そこから廣い〳〵田圃が眺められた。彼はほつとした。田圃の間を白い國道が眞直に續いてゐた。彼の後方から乘合自動車が馳つて來た。そこの駐車場で止つた。駐車場の掛け看板には太田、妻沼行

と書いてあつた。彼は兎も角もそれに飛び乘ることにした

『お客さん、あんたどこまで行かつしやるだ。』切符をきる男が云つた。

『どこまでゝも好い……終點まで。』彼は云つた。運轉手も他の客も呆れたやうに笑つた。

自動車は國道を驀に疾走した。

三

『ちょいと旦那、およんなさいな。』女は軒下から小聲で熱心に彼を呼びとめた。

『ねえ、ちよいと、これだけで好いのよ。遊んでいらつしやいな。これだけ……』女は彼の手の指を二本ほど握つた。

『ねえ、つてば。』女は更に力を入れてきゆつと彼の指を握りしめた。

『なに何……』彼は口もとに笑ひを含んで問ひ返した。久しぶりに柔らかい女の手にふれたのであつた。

『君は東京者だね。』

『え、さうよ。私東京よ。旦那どちらからいらしたの……』

『これから東京へ歸らなくちやならん……』

『好いぢやないの、遊んでいらつしやいな。ねえ、ちよいと……あらまあ、つれない人よ。』

彼は握られた手を愛想よくもぎとつた。

彼はそれから二時間の後に東京の郊外の家に歸りついたのであつた。もう夜の十時過ぎだつた。

『只今……』彼は兩隣の人に聞えるやうに云つて裏口から入つた。

『お歸りになりましたか。』裏の家のお婆さんの答へる聲がした。

彼は家に歸りつくと今更のやうに疲れを覺えた。徒らに電燈の光の明るい、がらんとした部屋でほつとしながら服を脫ぎすてゝそれから直ぐに二階へ上つて、自分で蒲團をのべて、わびしく、ごろりと寢た。田園の新綠と濁りのない空氣の中をほつき廻つた快い疲勞は彼の就眠を此の上もなく助けた。

いつもならば、彼は先づ眠りに入る前にいろ〳〵のことを考へて頭を亂すのであつた。死んだ赤ん坊のこと、世間の思はく、流質期に近づいてゐる質物のこと、創作上のこと、健康のこと、若しかして、ひよつと死にでもした時のこと、などろくでもない考へにまで移るのであつた。かうして、一軒の家に唯一人になつて病みついた場合の悲慘、夜中に心臟痲痺でも起してそのまゝ息を引きとつてしまふことにでもなれば、家は內側から戶しまりがしてあるから、誰れもそれとは氣ついてくれないだらう。とか、そのうちに俺の死體は腐爛して異樣な臭氣が家中をこめるであらう。とかそんなことをも考へて見るのであつた。『不遇なる勞働小說家三好孝吉氏の慘めなる死』と初號活字の新聞紙の大見出だしがあり〳〵と目に浮ぶのであつた。さうした自分の死が或は極度の神經衰弱の爲めの自殺と誤傳され、或は他殺と曲傳されるかも知れぬと云ふこと、然しいづれにしても今自分が死んだとて世間は何等の損失をも感じないであらうと云ふこと、然し若しさう云ふことになりでもしたら、いつも默つてゐて十圓貸してくれる質物を、受ける時のことを考へて五圓だけ借りて來た質屋に對して馬鹿々々しいなと云つたやうなことまで考へるのであつた。然しその夜はいつもの妄想に妨げらるることなく、枕につくと直ぐに鼾聲をあげるのであつた。

翌朝目がさめたのは九時頃であつたが、寢床の中で考へるともなく歸鄕についての準備などを考へるのであつた。A雜誌社から殘金を全部送つて來次第九州の鄕里へ久々ぶりに墓參旁々歸る計畫であつた。然しその雜誌社がいつまでも送金してくれない腹立たしさ、だが何れ來るには違ひないとして、さていよ〳〵歸鄕するとなれば和服で行かうかどう

しやうか。五月の末に玉羅紗の外套は無論だが、多服はちと時候はづれだ。然し矢張旅装は洋服に限る。あい着を一着新調すると申し分はないが、それでは旅費が足りなくなるにきまつてゐる。恰好な中古のあい着を買ふとしようか。だが久しぶりの歸鄕だ。何まあ〳〵服裝などはどうでも好いではないか。三好孝吉は一介の勞働者から文學者になつて十年ぶりに歸鄕すると云ふことで面目は充分だ。風采など氣にするんぢやいけない。寧ろ出來るだけ質素な服裝で行くのだ。平凡な、少しも氣どらない謙遜な、眞面目さを失つてはならぬ。ところで鄕里では新聞社の主催で講演と云ふことになるだらう。その時何を題目にしてやつてのけたら好いか知ら。『プロレタリア藝術について』かな……『プロレタリア藝術の使命』かな……プロレタリア藝術と云ひブルヂョア藝術と云ふも藝術それ自體は異らぬと思ひます。砂糖には黑もあり白もあり茶色のもありますが、砂糖それ自體に於て同一であります。私共は街を步きます。街にはいろ〳〵の店屋があります。酒屋、唐物屋、菓子屋、パン屋、いろ〳〵の商店を見るでありませう。若し私がひどく空腹であつたならば先づ何よりも私はパン屋に心を惹かれるでありませう、また私がひどく寒さにふるえてゐましたならば毛皮屋の店頭に目を惹かれるでありませう。更に若しまた私の生活がゆたかで贅澤がゆるされ、そして胃袋は美食を以て滿ち、全身は暖衣を以て裝はれてゐたならば私はその場合最早パン屋や毛皮屋には用がないのです。自然、私は香水店か室內裝飾品店に心を惹かれるでありませう。それは必然であります。境遇の相異は直ちに生活意識の相異を生じます。故にプロレタリア藝術と云ひブルヂョア藝術と云ふも畢竟作者の生活體驗、生活意識の相異から別れるのであります。拍手……故に諸君私の信ずる藝術は體驗の所產であらねばなりません。體驗の援助なくして事物に對する交涉を深めることは不可能であります。その意味に於てプロレタリア作家たるものは血と熱汗との犧牲を以て親しく體驗したところの艱難を主題とします。それに對する呪を主題とします。反抗を主題とします。拍手……はち〳〵〳〵……。

そして更に彼はかう云ひ足すことを忘れてはならなかつた。

要するに現在の社會組織、經濟組織の下にあつて我々プロレタリアートがブルヂョア的生活を模倣することは取りも直さず富裕なる階級の人間達から贅澤なる生活を見せつけられた其の上になほ、それをば苦じい境遇にあるにもかゝはらず少しでも階級的侮蔑を免かれようとするいたましい努力であります。そして、それは二重の悲慘と屈辱を意味するものであります。即ち空腹なる人間がパン屋へ行かずして香水店へ走ると同一のいたましい矛盾であります。拍手……

ぱち／＼／＼／＼……

彼は寢床の中で演説の腹案をしながらひとりで昂奮してしまつた。間もなく寢床から起き出すと非常な敏捷さで雨戸を開け、寢床を押入にしまひ込み、それから部屋中を掃出すのであつた。彼は自分ではきれい好きのつもりであるが、はたきをかけることと、雑巾をかけることは嫌いであつた。唯、毎朝、起きると、いきなりばた／＼と魚屋のやうに威勢よくやるのである。焜爐に火をおこしたり、植木に水をやつたり、顔を洗つたり食器を洗つたりして朝飯をすます頃はもうお晝近いのであつた。

ところで今朝は食事もしないうちに思ひかけない訪問者が押しかけて來たのであつた。その男は彼と對座するといきなりかう云ふ話を持ちかけた。

『あなたと結婚したいと云ふ婦人があるがどうでせう。』

彼は一度も結婚しない以前と異つて、極めて落ちついた態度で相手を見た。

『どんな婦人が私と結婚したいと云ふのです。』

『それは名を云へばあなたも多分知つてゐられる筈ですが、あの淺井花子、つてほら歌を作る……』客は云つた。

『名だけは知つてゐます。その人がどうして僕と結婚したいのか理由を聞かして下さい。』

『それはかうなんですよ。或る日、花子女史が僕の家へやつて來ましてね、いろ〳〵の話からあなたの話が出たんです。すると彼女は『わたし三好さんに結婚を申し込んで見ようか知ら……』と云ひ出したんです。それは好い。僕早速話して見てあげませう。と僕が云ふと、彼女は翌日またやつて來ました。兩親とも相談したら好いと云はれたので乘り氣になつたわけです。兎も角あなたを晩餐に招待したいと兩親は云つてゐるさうですが、日を定めて僕と一緒に行つてくれませんか。』

『あんまりタツチが荒いぢやありませんか。』

彼は此の人からかうした話をしかけられたことはこれまでにもあつたのでそれほど不思議な感じはしなかつた。同時に直ぐ信ずるわけにもゆかなかつた。然し彼は、君の云ふことは信じられないと云ふ氣持を見せることを遠慮した。それは或る意味で面白いとも思つたからだ。かうした人間でも飛び込んで來なければ彼の生活はあまりにわびしかつたに違ひない。

『さあ。まあ一杯……』彼は早速ウヰスキー壜を茶棚から取り出した。

客はいつも或る種の若い女を三四人ぐらゐつれて町を歩いてゐる不思議な男だと云ふことで知られてゐた。三流どころの女の作家、女の畫家、女優志望で地方から飛び出して來た女、さうした種類の女が此の男の身邊には不思議にごろ〳〵集つて來ると云ふのだ。そして彼はそれらの女を世話することが好きだと云ふ男であつた。尤もそれは以前に婦人雜誌の記者をやつてゐた關係からであつたのは無論だ。ところで彼の身邊に集まる女は大抵もう屑に近いと云ふことも定評であつた。

『あの婦人はどうしました。女優になりたいと云つて長崎から君をたよつて來たあれ。』

『あれですか。あれは肺病になつてしまひましたよ。』

『あんな好い體格の女が。』

『え、分らんもんですな。』

『それから、あのもうひとり、女流作家になりたいと云つてゐた方は。』

『あれは國へ歸つて今は結婚してるさうです。』

客はいろ〳〵の女の近狀をそれからそれと語つた。そして再び最初の話しに戻つた。

『兎に角一緒に來てくれと云ふんですから行つて見やうぢやありませんか。兩親も娘がこれまでいろ〳〵の噂を立てられたりしたので早く相當な人にかたづけたいらしいのです。で彼女にも私は云ひました。僕がお世話する以上はこれまでのやうな浮いた考へではこまります。つて私は云つたのです。當人もそれは充分考へてゐるらしいんです。』客は話しの調子を少しくしんみりとさせた。

彼は何故か、自分と結婚したいと云ふ女を聰明でかしこい婦人だとは信じられないのであつた。それも、此の男の云ふことだから、果して先方が希望してゐるかどうかも分りやしないと思つた。で彼も好い加減な答へで充分だと云ふ氣がした。

『ぢや行きませう。』

『ほんとうに……。ぢやいつにしませう。日を定めて下さい。今度の土曜日はどうでせう。』客は云つた。

『僕はいつでもよろしい。』

『それぢや、さう云ふことに。』

客はそれから一時間ほども話し込んでやつと去つた。

四

約束の土曜日はそれから三日目に來た。彼はその男の來るのをあてにして待つと云ふことは馬鹿らしい氣もしたが、矢張心待に待つてゐたのだ。するとその男はきちんと、約束の午後三時にやつて來た。かうなると今更躊躇するわけにはゆかぬのであつた。

『いや、輕卒だつて構はん。俺は如何なる事柄でも生きた藝術に仕上げねばならぬ。』と彼は自分を許した。

彼は客を待たせて置いて入浴へ出かけた。ところが此の日に限つて近所の風呂屋は定休日で、とう／＼彼は四五丁もある次の町まで行かねばならなかつた。運命は此の日、彼を垢臭い男のまゝで彼女の家へ行かしめようとするかのやうに。然し彼はやつと一軒の風呂屋を見出した。ところで何と云ふ妙な日であらう。彼は風呂屋を探し廻つてゐる間に肝心の剃刀をおつことしてしまつたのだ。その爲めに、もと來た横町へ引き返したりして思はず時間を無駄にした。彼はこんないやなことのある日には直ぐに別れた妻の恨がましい顔を思ひ浮べるのである。

『呪ふなら呪つて見るさ。』彼はさう心で呟いた。おとした剃刀はとう／＼見つからなかつたので、床場で顔はあたることにした。

家を出る時は四時だつた。そして四十分の後には市ケ谷町の彼女の家まで行きついた。彼は此の日ルパシユカを着て、その上からオーバーを着てゐたのだ。石の門の外には三人の小さい女の子が遊んでゐたが、二人がやつて來る姿を見つけて直ぐに門内へ驅け込んだ。二人の來るのを見つけ次第誰れかに報告する役目を云ひつかつてゐたらしい。

家は石の門構への和洋折衷の二階家だつた。彼は鬼怒川の後について、斜に續いてゐる敷石を踏んで玄關の前に立つた。彼は近代劇を演ずる役者の氣組に自分を輕く置き替へてやらうと思つた。そして出來るだけ落ちつかうとした。半ばさうした自分を憎惡しながら自分を面白がつてゐるやうでもあつた。

『よくお越し下さいました。どうぞお二階へそのまゝ……』女中は玄關に二人を迎へた。鬼怒川は先に上つて行つた。彼もその後方から、クロースの梯子段を上つた。外觀は西洋風であつたが部屋は日本風に床の間があつて山水の軸が掛つてゐた。梯子段を上つて直ぐのところは段通を敷きつめた板の間で、そこには大きな姿見などがあつた。二人はそこを通りぬけて十疊ほどの部屋に導かれたのであつた。紫檀の机を中心に四つの大座蒲團が置かれて、きちんと部屋はしてゐた。二人は最初端の方に座つた。十五六の娘が茶を持つて來た。

『銀子さん。お姉さんは。』鬼怒川は云つた。

『をりますわ。』

此の時母親らしい五十あまりの婦人が入つて來た。

『よくおいで下さいました。さあどうぞあちらへ。私が花子の母でございます。』

孝吉は初對面の挨拶をした。

母親は碎けた調子で鬼怒川に多く話しかけた。はき／＼した、きさくな、世なれた婦人であつた。煙草が一分間もやめられないと云つて、絶え間なしに卷煙草を煙らせた。

『あなたはお煙草は如何でございます。めし上らないのでございますか。どうぞおつけ下さいませ。』母親と孝吉とはそんな話しの時だけまともに顔を見合つた。母親の方がより多く彼を觀察しようとしたのは無論であつた。

『俺は一度結婚してしくじつたのに、こんな輕卒な氣で此所へやつて來てしまつたのだ。先方は矢張本氣で俺を招待してくれたのだ。然し大抵俺は此の母親に好感を與へ得ないだらう。だから結局はおぢやんになるだらう。俺はその方を望む……』彼は心にさう思つた。彼は鬼怒川と云ふ男を最初から馬鹿にしてゐたのが惡かつたと思つた。

『全く此の男はさう馬鹿にしたものぢやない。俺をこんなものがたい家庭に紹介してくれようとは案外だつた。』と孝吉は思つた。

然し鬼怒川の方では孝吉を引つぱり出して來てやつたと云ふことが、此の母親に對しては誇りらしかつた。

先刻、門の外で遊んで居た三人の小さな女の子が入つて來た。

『おじぎをなさい。あらそんなおじぎのし方がありますかね此の人達は、ちやんとおすわりして、よくいらつしやいました。つて云ふのよ。』母親は云つた。

順々に大きい三人の少女は母親に云はれる通りにした。

『おゝお悧巧〱。さあ下階へ下りて、お父さまはお歸りになつたの。あさう……』母親は云つた。

三人の子供達はまたどん〱音をさせて下りて行つた。

間もなく主人らしい五十四五の、頭髮などの若々しい痩せぎすの人が入つて來た。

『あなたが鬼怒川さんですか、よくおいで下さつた。』主人は鬼怒川を見て云つた。鬼怒川は主人の在宅中に此の家を訪ねたのは今日が始めてだつた。で鬼怒川は主人に對して初對面の挨拶をした。

『此の方が三好孝吉氏であります。』鬼怒川は孝吉を主人に紹介した。

『あさうですか。よくおいで下さいました。』

『始めてお目にかかります、どうぞよろしく……』と彼は型通りの挨拶を云つた。

『文壇方面の人は全く知らないのですが、あなたは多くどう云ふものを御發表になるんですか。論文の方ですか。』主人は孝吉に話しかけた。

『いえ、多く小說を書いてをります。』

『ははあ、なるほど。』

『此の主人は全く自分を知らないのだな。』と彼はちよつと拍子ぬけがした。

『どうも我々は實業一方だもんですから全くその方面のことは知りませんでな。然しちよい〱新聞や雜誌を覗いて見るのですが、なか〱文壇と云ふところは賑やかのやうですな。兎も角自分の思つたことを思ふ通りに發表が出來るのは愉快な事ですなあ。』

『いえ、なか〱さうでもございませんよ。』鬼怒川が答へた。

『まあそれや、よそから見るやうにはないでせうな。隨分頭をつかはにやならんから氣骨の折れることにや違ひない。どうも然し、女の子が文學などをやるちふと我がまゝになつていけませんなあ。家の花子などは、もうその……親の云ふことなど聞かうともしませんから手がつけられませんよ。どうでせう。あれで物になりませうかな。やれ歌集を自費出版で出したいからお父さん五百圓ほど下さいとか、やれ何とか、かとか、母親までが一緒になつて私を手こづらせるんですからたまりませんよ。はあつ〱〱。』主人は云ひながら笑つた。

女中がお膳を運んで來た。

『さあ、どうぞ、何もございませんが……』とそばの母親は云つて、『お姉さんにおいでつて云つておくれ。』

『かしこまりました。』女中は云つた。

しばらくして二十三四の丸顔の小柄の女がくす〳〵笑ひながら、ひよろ〳〵した足どりで入つて來た。全く彼女は酒にでも醉つてゐるやうに見えるのだつた。

『鬼怒川さんよくいらつしやいました。』娘はさう云つて鬼怒川と父親の間にすわつた。孝吉は彼女の名は知つてゐたが、顔を見るのは始めてだつた。

『三好さんよくおいで下さいました。』彼女はもう古い知り合でゝもあるやうに孝吉に云つた。そして鬼怒川にお酌をした。

『此の方が花子さんですよ。』

『お始めて……』孝吉は少し顔を赤めながら彼女に挨拶した。

『三好さん。あなた私を貰つて下さる。私短刀直入で申しますよ。はつきりいやならいやとおつしやつて下さい。』花子は高飛車に笑ひながら云つて孝吉を見た。

孝吉は面喰つた氣味でどう答へてよいか惑ふ風だつたが、

『私のやうなものと結婚なすつてあなたは好いんですか。』と笑ひながら云つた。

『隨分調子の變つた女だ。これでは妻にしても矢張双方が長持ちしさうもない。』と彼は思つた。

『お前もよく考へてからきめるが好い。一時の情熱にまかせてやつてくれちやお父さんがこまるからのう。三好さんにしてもさう輕々しくきめなさるわけにも行くまい。前の奥さんとのこともあるからのう。』

『え……』彼女は父親にさう云はれると伏目になつて默り込んでしまつた。

父親は鬼怒川に向いて、

『私にとつては此の子は最愛の娘でしたが、私の意に背いたから以前ほど愛してやりたくないのです。まあ然し文學が好きでやり出したんですから、やり出した以上は大にやるが好いです。』と云つて父親は更に孝吉の方を向いて『如何でせう。これの詩はものになつてをりますかねえ三好さん。ひとりよがりちやこまります。大に一つ指導してやつて下さい。』

『は、然し私共も實はまだ青いのでして……』孝吉は彼女の心持よりも此の父親の心持の方がよく了解された。そして何とも云へない氣持になつた。かう云ふ父親に直接面接した以上は一層厳粛に自分の態度を定めて彼女との結婚については深く考へねばならぬと思つた。寧ろ飽くまで辭退した方がよいと思つた。それに第一彼女が彼と結婚しようと云ふ氣持にどれ程の眞實さがあるかゞ彼には疑問であつたのだ。彼女の性格から判斷してもそれは不安であつた。

『矢張御苦勞なすつたゞけ落ちついていらつしやいますよ。ねえお父さん。』母親は主人に對して孝吉をさう評した。

然し孝吉は此の兩親に對してかう云へるものなら云ひたかつた。

『いえ〳〵、どうしまして、唯お娘さんの氣持が僕には分らないのです。眞實僕と云ふ者を好いてゐて下さるならば直ちに結婚と云ふことを御兩親に相談なさらずとも好いかと思ひます。これまで自由な戀愛もし、そしていろ〳〵のお噂も傳つたお娘さんが、私に對してだけは結婚と云ふ形式を先に考へられたのが妙に解らないのです。私は戀愛なしの結婚にはもう一度でこり〳〵した男です。私はお娘さんと戀愛なしに直ち御兩親の許しを得て結婚する勇氣はございません。いやかうして一度でも御兩親と面接した以上はお娘さんと戀愛關係を結ぶことさへも私には出來さうもありません。それはお娘さんに對する御兩親のお氣持を尊重せずにゐられないからなのです。』

彼の此の場合の氣持は全くさうであつた。

五

鬼怒川と共に孝吉は其の夜、晩餐をよばれて十時頃辭した。

『彼女は火鉢の灰に『ぜひたのむ』つて書いて見せたりしましたよ。』鬼怒川は歸途そんな話をした。

『あれぢやちよつとこまりますね。』

『どうしてゞす。』

『無邪氣でだゝ子じみてゐて憎げはないが、妻としてはどうかと思ふ。』

『然しあゝ云ふのが結婚後しつかりして來出すと好いんですよ。』

『それはさうかも知れんが。』孝吉は云つたがそれも疑はしい氣がした。

それから二三日經つての夕方、花子は鬼怒川に伴はれて孝吉の家を訪ねて來た。やつて來たな。と思ひながら孝吉は二人を二階の書齋に迎へた。

『先夜はたいへん御馳走になりました。』孝吉は彼女に挨拶した。

『いゝえ、ちつとも……まあ大變結構なお家ですわねえ。』此の日の彼女は孝吉が先夜彼女の家で始めて會見した時よりもしとやかで、どことなく異つてゐた。兩親の前では駄々兒に見えた彼女も今日は普通の女らしく遠慮深かつた。或は鬼怒川が何か云つて聞かせたのかとも思はれた。

『花子さん。煙草一つ買つて來て下さい。』鬼怒川は席につくと直ぐに花子にさう云つた。花子は云はれるまゝに、すわらうとしてゐた膝をそのまゝあげて、席を立つて煙草買ひに行つた。

『此の男はまるで自分の雇ひ女か何ぞのやうに彼女を命令的に取り扱ふのだな。』孝吉はちよつと妙な氣がした。假にも自分に對して結婚してはどうかとすゝめる鬼怒川が彼女をそんな風に取り扱ふのが氣になつた。然しまた、それは何でもないことのやうにも思はれた。

『花子さんが今日僕のところへ最初やつて來ましてねえ、是非つれて行つてくれと云ふんで一緒にやつて來たんです。もう彼女はあなたと結婚することに定めてしまつてゐるんですよ。兩親もそれを許したらしいんです。そこで今日は、此の家の勝手もとの工合などを見たいからつれてつてくれと云ふので來たわけなんです。若し不便な家だつたら、兩親達もなるたけ自分達の近くに家を持たせたいと云ふから大久保へんに家を見つけようと云つてゐます。』鬼怒川は花子が煙草を買ひに行つた間にさう話した。

孝吉はちよつと當惑したやうな顏をした。

『ねえ君、鬼怒川君、僕もまだ前の妻との離婚事件が此のさきどう延長するか測られないんで、今直ぐ彼女と結婚するのはどうかと思ふんですがね。互に當分交際して見た上でのことにしたらどうでせう。』

『然し向ふではあれほど熱心なんだから、いつそ結婚してしまつても好いぢやありませんか。どうであなたも獨身で一軒の家にさうしてゐるのは不自由ぢやありませんか。それに此の際、一日も早く第二の結婚をすることは以前の奥さん側に對しても、それは却つて好いことぢやありませんか。

『それはさうだが、今花子さんと結婚したところでまた直ぐ互に幻滅を感ずる時が來るんぢやないでせうか。いや屹度來るに定つてゐますよ。あの人の性格が僕と同じやうにさう作られてゐます——さうだとすると僕はまた第二の破婚事件を演じなきやなりません。さうなれば僕はもういよ／＼世間からも文壇からもよく云はれないに定つてゐます。矢張

僕はもう少し自重してゐたが好いと信ずるので。』

『それはあなたとしては尤もの考へですがね。だがもう彼女は、ひとり定めに定めてしまつて、三好さんはあまりはでな着物なんかを着るといやがるでせうから、わたし、これからぢみな服裝をしますわ。はでな着物はみんな妹にやつてしまひませう。なんて云つてるほどです。』鬼怒川はさう話した。

そんな話しをしてゐるうちに煙草を買ひに行つた花子は入つて來た。

孝吉は自分でお茶を焙じてあり合せの菓子と共に二人に出した。

『お家は隨分勝手よく出來てをりますわねえ。でも電車へ遠うございますわねえ。』

『え、少し遠う過ぎますが。』

『でも空氣がよろしいですわねえ、それに日あたりも。ほんとにかうしてゐても清々しますわ。ねえ鬼怒川さん。』彼女は輕い調子で云つた。孝吉はそれとなく彼女が話しをする時に現はれる金齒の交つたみそつ齒を見た。我がまゝらしさを多分に持つ脣を見た。なまめかしく、時々流し目などで對者を見る技巧的な眼つかひをも見た。お納戸色に金糸の刺繡をした襟の裡にふつくらとして、包まれてゐる胸のほとりをも見た。彼女は丸顏であつた。そして肩のあたりなどは少女のやうに幼い丸味を見せてゐるのであつた。唯、額の生え際に小さな向ふ傷があるのはどうしたのだらう。と彼は思つた。

『口元が前の妻にちよつと似てゐる。』と孝吉は思つたりした。

『もう花子さん下のお勝手の工合など見たんですか。』鬼怒川は笑ひながら云つた。

『ええ、もう私今拜見しましたの。お許しも得ないさきに。』と彼女はよろけるやうに後方へ手をついて、片手でみそつ

笛をかくしながら、笑つた。

『随分やりつぱなしになつてたでせう。』孝吉も笑つた。

『え、でもそれほどでもございませんでしたわ。』と孝吉の顔を笑ひながらまともに見て『よくおひとりでなさるわね。下のお部屋なんかきちんとしてゐますわ。随分おきれい好きのやうですけれど障子のさんなどはほこりだらけよ。おつほほほ。』

『ほこりは寧ろ誇りですかね。』と鬼怒川が横合から洒落を云つた。

『驚きましたな。』と孝吉も笑つた。

『もう幾時でせう。わたし今日は五時までに歸れと母に云はれてゐますの。』彼女は笑ひ終ると鬼怒川を見てさう云ひながら襟元や膝前をつくらつた。

『まあ好いでせう。』と孝吉は云つたがこれで、母親から云はれた時間だけは守るのか知ら、と頼もしくも思つた。

『では今日はこれでおひとまいたしますわ。』

孝吉は其の日の日記を次のやうに書いた。

△△日、天氣晴

午後、彼女鬼怒川と共に來訪。今日も鬼怒川は彼女との結婚を慫慂す。余は彼女の眞意を知るに苦しむと共に、鬼怒川の眞意を知るに苦しむ。然し愛すべき駄々娘なり。彼女はこれまでの戀愛生活に飽き疲れて、その最後の休息所を余に求めんとするか。余の見るところを以てすれば彼女にはそれ以上のものなきが如し。而して鬼怒川は如何。彼は何等かの理由のもとに彼女を……云々。

然し翌日の夕方、孝吉は彼女からの手紙を受取つて、また彼女に對する見解を多少修正した。

『三好さま。今日は御勉强中をたいへん御邪魔いたしました。まことに相すみませんでした。すべてを家へ歸りまして父母に話しました。そして今此の御手紙を書くことをゆるされたのでございます。歸途鬼怒川さんからいろ〳〵承つて頭が痛むほど考へました。眞面目に考へれば考へるほど私はあなた樣に結婚して下さいと云へる資格はないのでございますの。過去は私を傷けると共に一方には私を教訓してくれました。けれども私はすべてをあなたの御觀察におまかせいたします。世間が兎や角評することはかなり私には怒りと驚きに値するものですが、その責めは半ば私にもあるのでございますから、自分を反省いたしますと、何にも云へないのでございます。私はほんとうに缺點だらけの女でございますの――中略――私と結婚して下さる方は私の過去を知つて大變不幸な氣の毒な女として、それでも生かしてやりたいと云ふお心で受け入れて下さる方でなくては駄目かと思ひます。普通の方では私をゆるし、受け入れると云ふことは出來ますまい――中略――私はあなたにそれだけを申し上げて置かねばなりません。私は御緣のあるなしに對しては少しもあなたに對して兎や角思ふやうなことはいたしません。その點は御安心遊ばせ。それからお住ひはあれで結構だと存じましたわ。空氣は淸し、あたりは靜かでほんとうによいお家だと母にもお住ひの模樣を話しましたの。文士と云ふものは不精者とのみ高をくゝつてしらみでもわきさうに思つてをりましたのに、私は全く意外に存じましたの――中略――どうぞお遊びにだけはいらして下さいませ。父母からもよろしくと申しました。さよなら。　花子』

そこで孝吉は早速次のやうな返事を認めて彼女に出した。

『お手紙拜見いたしました。昨日はお遠いところをお訪ね下さつたのに何にもお構ひしませんで失禮でした。私はあなたが私と結婚して下さらうと云ふお心に對しては感謝の外ございません。然し私としては、あなたと結婚する以上は、

あなたと幸福に暮すことが出來ると云ふ自信が何より必要なんです。幸福に暮し得ると云ふ自信を持ち得ないまでも、何等かの確信がなくては許されないことです。然し私には今その確信がありません。何故なら私はあまりに自分の性格上の缺陷を知り過ぎてゐるからです。あなたは生一本で無邪氣なよい方だと云ふことは最初から分つてをります。然しそれだけ、あなたは向ふ見ずに事をなさる人のやうです。で私は今、失禮ですが、あなたの分まで考へて見なければならないやうな氣がします。私は今三十九です。あなたは二十二におなりになると聞きました。ところで私は妙なことを申すやうですが、あなたのお父さんと始めてお目にかゝつた晩、しみ〴〵私はあなたのお父さんのお心持にならずにゐられないのでした。大事な嫁入時の娘を持つ父なる人の心持、私はあなたのお父さんと一つ二つ話しをしてゐる間に深く感じたのでした。そして一層あなたに對して私としては輕卒な決定が許されなくなつたのでした。私は十七歳の時父を失ひ、父の死後長男のこと故、早速叔父等のはからひで結婚させられるところでしたが、其の頃、若し私が結婚してをりましたならば、今は丁度あなたくらゐの娘の子があつてよい頃です。そして、その意味ではあなたは僕の娘であつてもよいお年なんです――と私はそんなことをも考へて見るのです。親爺臭いことを云ふやうですがお許し下さい。兎に角私はあなたのお心持よりもあなたのお父さんのお氣持を考へます。そして、もつと若い生々とした、誰が見てもあなたにふさはしいお婿さんを持たせたい氣がします。少し書き過ぎました。怒らないで下さい。さよなら。御兩親によろしく――孝吉――』

するとニ三日して、また彼女の方から封書が來た。

『お手紙拜見いたしました。早速御返事下さいましてありがたう存じあげます。今日は女中と二人で朝から張り物に追はれ、最後の張り板をかついで外に持ち出してゐるところへ、あなたさまのお手紙がまゐりました。早速拜見してひと

りで私は吹き出してしまひました。私はあなたのお年齢などは少しも氣にしてはをりませんわ。或る易者は私にかう申しましたことがございますの。『あなたはなるだけ年の多いお方と結婚なさるがよい』つてさう申しましたのよ。私自身でもそんな氣持がいたしますの。私はなま若い苦勞の足りない男がいやでございますの。兎に角兩親もあなたさまを信じてをります。今後あなたさまとの交際は少しも氣にかけないで許してくれる筈でございます。どうぞお心置きなくお遊びにおいで下さいませ。家には妹達が澤山をりますのでそれは〱賑やかでございますのよ。朝から晩まで笑ひ聲が絶えたことがございませんのよ。小さい鼻をぴく〱させて得意になつて歌ひますのよ。おさびしい折には妹達の歌を聞きにいらして下さいませ。これは十五になる妹の傳言でございます。それから今母からのおことづけを申しあげます。お都合のおよろしい日に午餐においで下さいますやうに。さよなら——花子——』

六

雜誌社からの金が手に入ると彼は早速歸郷の支度をした。久しぶりに故郷へ歸りたくなつた氣持にはいろ〱のものがあつたが、何よりも離婚後の氣持を一掃する上に効果がありさうに思へることだつた。それに、死んだ嬰兒に對するいとほしい思ひ出は彼を惱ましい反省に導いた。また長い間墓參を怠つてゐる彼は父母やその他の祖先の墓が自分の歸郷を常に待つてゐるやうな氣がして、一種の神秘的な暗示が彼の心を支配するやうになつた。長い間の反抗生活はそれだけ幾多の苦勞の經驗と自己反省の資料とを以て彼に第三の彼を作らしめ、一個の倫理的觀念の必然を意識させるのであつた。それは彼の心の弱さをも意味した。然し彼自身ではさう思ひたくなかつた。その内容は善き意味の苦勞の賜と云ふことにした。

『此の十年間の苦しい奮鬪生活は如何に自分の一生にとつて有意義なものであつたか……』さう思ふと一種の小さな誇

りと感慨とを以て久しぶりの歸郷が急がれたのである。異腹の妹の身の上も氣になつて逢ひたい氣持がした。然しそれよりも、去年の春、良人に死なれて今は未亡人となつて佐賀の實家に歸つてゐる從妹の歌子に對する幻想の誘惑に彼は遂に打ち勝つことが出來なかつたのだ。

彼は横濱からロンドン行きの汽船に便乘して門司まで海上を馳ることにした。病的にまでいぢけきつてしまつてゐる自分の現在の心には大まかな海の氣分の必要であることを彼は知つたのであつた。そして、その意味では豫期通りの成功をば船に乘り込んで直ぐに感じた。云ふまでもなく乘客の過半は遠い外國行きの人々だつた。そこには人々の遠大な希望を世界の彼方に運んで行く巨船の行進曲があつた。世界の東から西を常に往復してゐる勇ましい船員の生活があつた。遠い異國の市場に輸出されて行く荷物の堆積があつた。彼はこれまでの自分の氣持の如何にせばめられてゐたかを知るのであつた。そして彼はいつしか洋行者の氣持に同化された。そして汽船が岸壁を離れる時の汽笛の聲や紅白のテープになごりを惜しむ離愁の光景に對しては遠く國土を離れて去り行く人のやうに一種の幻想に顏を曇らせるのであつた。

汽船は五月晴の波靜かな沿岸を悠々と馳つた。

船客の大半は獨逸行きであつた。シュウミット君と云ふ獨逸人の若夫婦、女子大出身のS女姉弟、帝大の哲學科出身で心理學を研究に行く長谷川と云ふ青年、上海に店を持つてゐると云ふ骨董屋でおしやべりの老人、赤ん坊をつれて良人の轉任地なる新嘉坡へ行く血色のよい小肥りの妻君、京城の醫專を卒業して獨逸へ研究に行く鮮人の一行、門司行きの客は孝吉の外は慶大生と下關の呉服屋の息子とその他の二三であつた。孝吉はそれらの人々のいろ〳〵の運命と生活とを直感し想像して見たりした。また、何かの拍子で時たま、目と目がぶつつかつたりする美人の船客に對しては心を硬直させたりした。

シュウミツト若夫婦は汽船が横濱の埠頭を離れる時から他の人々を見向きもしないで、甲板の欄干に肱をもたせて寄りそひながら、ポソ〱と何か私語し合つてばかりゐた。そしてそれが、いつしか孝吉の心を惹いた。どこか、二人の影にはさびしみが感ぜられたからであつた。仲がよ過ぎると思はれるほどの二人の上に何故か哀愁の影があつた。然しそれは二人の愛情の副産物で眞實互に愛し合つてゐる夫婦の外形はよそ目にさびしく見えるものゝやうでもあつた。女はまだ二十前後の娘々した可憐な細面であつた。

『二人は遥々遠い日本の國へやつて來て、そして直ぐに日本と云ふ國が不愉快で堪へられなくて、何の未練もなく本國へ歸つて行くのではないだらうか……。ほんとにさうだとすれば氣の毒なことだ。日本はかうした異邦の若夫婦が樂しく安住するにふさはしくない國であつたらうか。何故二人は獨逸へ歸國するのであらう……』孝吉は二人のさびしい影に對してさう思つたりした。彼は自分の想像通りに此の若夫婦の身の上を決定して何となく同情と哀憐を感ずるのであつた。思ひなしか此の若夫婦は日本人に對して親み近づかうとしないかのやうに見えた――然しそれは孝吉の思ひ過ぎだつた。彼はその日の夕方、此の獨逸人の若夫婦と組になつて輪投げのゲームをすることによつて自分の誤認を知つた。

『あなたはどちらまで。』とシュウミツト君は日本語で孝吉に訊ねた。

『門司までです。』

『あゝさうですか。それはつまらないですなあ。』とシュウミツト君は笑つた。此の若夫婦は獨逸へ歸るのでなく、ポートサイドまで行くのだと云ふことだつた。

『失禮ですが、新婚旅行ですか。』慶大生は無邪氣に笑ひながら云つた。

『ノー〱。私達夫婦は結婚してもう二年にもなります。』と彼は笑ひながら云つた。然し彼の顔は赤らんでゐた。

『あなた方の海上生活が羨ましいですなあ。』

『いえさうぢやありませんよ。全く海上生活と云ふものはまとまりのつかないものです。汽船の中でこそ船長とか、機關長とか云つて巾をきかしてをりますが陸へ上つちや何にも社會的地位を意味しませんからねえ。その他の中級下級の船員に至つては全くゼロですな。海の上でこそ役に立つ人間ですが、陸へ上ればそれこそ水鳥の陸にさまよふそれにも似て哀れなものです。海上生活をした者は陸ぢやからつきし役には立ちませんよ。社會思想の變遷も流行の推移も分りませんからねえ。そのくせ皆早く足を洗つて船員生活をきり上げたい、そればかり思つてるんです。もう一航海したら思ひきつてやめやう。と云ふ連中が多いんですが、矢張陸に上つちや使ひ途がないもんだから、やめるにはやめても、また船員生活に歸るより仕方がないてことになるんですよ。』

甲板部受持の若い中級船員の一人は乘客の誰れ彼れとそんな話しをしてゐた。

ソシヤルルームではシトロンやビールを酌み交しながらつれ〲の會談に時を忘れてゐる連中もあつた。

『要するに動機論と結果論との相違ですな。結果を重んずると常識主義にならざるを得ないんです。然し我々は結果よりも動機を重要とすることを忘れてはならぬと思ひますよ。』

『それは理想主義の上からはさうでなくちやなりません。出發點に重きを置くことになりますです。が、私はかうも考へて見るんです。どちらにしても結局同一だと云ふことをです。つまり我々人間が主觀的にものを受け入れて行く以上は、例へば對人關係の場合に於ても常に錯誤だらけですからね。假に私が神聖な動機のもとに社會的事業を爲すにしたところで、結果がそれを證明しなければ誰も私の神聖な動機を信じてはくれません。それは結果がどうであらうとも動機が神聖でありさへすれば少しも惑ふことはないと云ふ動機論は成り立ちますが——そこで今日の私は動機の神聖と云

ふことよりも結果を重にして行く方が好いと思ふやうになつたんです。我々は自分の心の神聖を得ることがどうしても覺束ない。そんなことを考へてをれば一生涯何にも出來さうにありません。そこで私共は手とり早く自他共に利益を增進することが出來さへすれば、どん〳〵實行してよいと信ずるやうになつたのです。或る人が私にかう云ふことを云ひました。或る時會社の玄關の廊下の帽子掛から、誰れかの帽子がはづれて落ちてゐたと云ふのです。その人は最初それを衝動的に、拾つて帽子掛にかけてやらうと思つたが、若しかして誰れかゞ見てゞもゐたら、自分がそれを落したから拾つて掛けたのだと思はれはせねか。それではつまらない。まあ打つちやつて置かう、とさう思つて掛けずにしまつたと云ふのです。これは何でもない一つの例なんですが、私はそれではいけないと思ふのです。いづれにしても落ちてゐるものなら拾つて上げて置く方が好いではありませんか。私はさうした消極的獨善主義は一番こまると思ふんです。私は嘘僞でもよき結果をもたらすと信ずる場合には許します。え、許します。それは許します。」實業家らしい肥つた男は云つた。

孝吉はさうした人達の會談にもよそながら耳を傾けた。

汽船は翌朝の十時に神戸の港についた。そこは二十年前彼が勞働の辛苦をなめた土地だつた。曾て飢えと失業と無宿の爲めにさまよふた自分の姿をそこに描かうとでもするかのやうに彼方を眺めた。

汽船は神戸でまた夥しい荷物といろ〳〵の歐洲行きの乘客を乘せ込んだ。獨逸へ歸國するすばらしい美人だの、ホルトガル人だの、上海行の商人の一團だの——甲板は賑やかになつた。そして孝吉はあと一晝夜だけの同伴者としてそれらの人々の中にあつて小さく自分を守つてゐた。

七

まだ六月の初めだつたが彼の故郷は暑かつた。冬服で來たことは全く失敗だつたと彼は思つた。尤も神戸の古着屋で中古のセルのズボンを見つけ出して買つたので、ズボンだけはそれで間に合せたが、上衣は依然として二重釦の厚羅紗の冬服を着てゐたのだ。汽車が故郷の佐賀に着いたのは夕方だつた。彼は町の小さな旅館へ宿を定めた。そして翌日は先づ妹に逢ふつもりで三里ほど隔つた神埼の町まで汽車で行つた。汽車は十分間で行きついた。此の日も前日に劣らぬ暑い日で眞夏のやうな日光が鐵道線路やあたりの水田をギラ〳〵照りつけてゐた。それだのに一人の冬服の紳士は悠々とステーションから町へ續く埃つぽい土堤を歩いて行くのであつた。勿論悠々と歩くことは汗を出さない用心だつたのである。

土堤から見える小さな田舎町は彼の繼母の里であつた。彼も七八つの時分、父が此の邊一帶の鐵道工事の監督をしてゐた一年間を此所で暮した。遠くの地平線にはくつきりと薄紫の波狀を見せて筑後境の山々が續いてゐた。竹藪かくれに見える家村があり、杉や雜木の森があつた。土堤はきれいな砂底の里川と共に町へ續いてゐた、

彼が東京を立つ少し前に着いた妹からの手紙によると、妹の亭主は此の四月の末に小笠原島から歸國して、またもともと通りに夫婦となつて同棲してゐると云ふことであつた。

『――去る十二日より、良人ともと〳〵通り同居することになりました。今は親子共々嬉しく日を送ることになりましたゆゑ、兄上にも御安心下さいませ。最早母も此の世になきことゆゑ、今後は夫婦圓滿に暮すことが出來ると存じます。兄上にもいろ〳〵御心配をかけてまことにお恥かしい次第でございました――中畧――私共は只今父（孝吉には全く無關係の繼母の晩年の亭主）も一緒でございます。此の驛ケ里と申す神埼の町はづれの百姓家を借り受け當分假住ひをいたしてをります――中畧――荒木屋（繼母の實家）の方も三四年の間に叔父叔母に續いて二人の子達まで死去致され只

今は長男の徳松さん兄妹が殘りて以前の荒木屋から三四軒東の方の家にてオモチャ屋を出されてをります。私の妹も今はお里叔母唯一人でございます――中略――是非々々一度兄上様が御歸國下さいますやうお願ひいたします……云々』

孝吉はいきなりその驛ケ里の妹の家へ行つてよいものかどうかと考へた。そこには繼母の後ぞひの亭主がゐる筈だつたからである。そして妹の亭主と云ふのはその男の甥であつた。

そこで孝吉は先づ町にオモチャ屋をしてゐると云ふ、繼母の甥の徳松の家を最初に訪ねることにした。其の方へ町を歩いて行つた。彼は八才ぐらゐの時分の徳松を覺えてゐるだけであつたが乾度善良な性質の大人になつてゐることを信じた。小さい時分から色白の直ほな憎げのない子であつたと彼は思つた。

然しそのオモチャ屋を訪ねたが徳松に直ぐは會へなかつた。

『魚市場の方へ行つとらすばんた。』と、あまりきれいでない嫁さんは云つた。

『いつ頃お歸りですか。』

『もう歸らす時分ばんた。あなたは、どなたでございんすつかんた。』

『私は東京から來ましたが、菊子の兄です。』

『あら、まあ、さうかんた。』嫁さんは驚いたやうに云つて孝吉をまじ〳〵見た。

『さあ、おあがんさい。よくおいでんさいたのまい。もう直ぐ歸らすさうけん、ちよつとお上んさい。』

『ありがたうございます。菊子にもまだ逢ひませんが、どうしてをりませうか、いろ〳〵お世話になることでせう。』

『いゝえもう、あなた……菊子さんもお婿さんともとのやうにおなんさつたけん、何よりでござんした。』

孝吉は十分間ばかり狹い店頭の椅子にかけて、嫁さんと話しながら徳松の歸宅を待つた。徳松はオモチャ屋をしなが

ら魚市場の帳面方をしてゐるのであつた。

孝吉は、ひる近い時刻でもあつたので引きとめるのを辭退して一應そこを出た。そして彼は町角で俥を雇つて驛ケ里の妹の家へ行くことにした。彼は妹に一目逢つて手土産を渡せばそれで好いと思つた。墓參りやいろ〳〵の用があるので出來るたけ妹には簡單に逢つて別れたかつた。俥は町を出はづれてから草いきれの匂ふ田圃道をがた〳〵ゆれながら走つた。橋の袂の駄菓子屋で俥夫は家を訊ねた。

『直ぐその鐵の向ふの大吉さんの家ばんたあ。』駄菓子屋のかみさんは指した。

橋を渡ればその家は直ぐであつた。屋敷の廣々とした土藏附の百姓家であつた。孝吉は妹夫婦がどうしてから云ふ百姓家に假すまひをしてゐるのかゞ分らなかつた。

彼はいきなり自分が入つて行くことを遠慮して俥夫に名刺を持たせてやり、自分は生垣の外で俥に乘つたまゝ待つことにした。妹とは云ひながら二十年來逢はないので、全く知らない女に逢ふと同じやうな一種の硬直した心持であつた。彼女の七八才頃を思ふてそれほど見にくい女ではない筈と考へて見るのだつた。

間もなく俥夫は俥の方へ戻つて來た。その後から二十七八のふだん着のまゝの女が飛び出して來た。髮のおくれ毛を掻きなでながら遠くからおじぎをして孝吉の方へ近づいて來た。孝吉は直ぐにそれと直感したので俥から下りて帽子を脫いだ。

『あんたが菊さんか。』

『はい。』と先方は叮嚀におじぎをして『どうぞ、さあ、御遠慮なく。丁度昨日から親爺さんも旅へ行つてをらすさんばんたあ。』

孝吉は長居をする氣でなかつたので伸夫を待たせて置いて土藏の前を通つて庭先の方へ導かれるまゝに行つた。そこには二人の小さな男の子が襦袢一つで遊んでゐた。

『いつおいでんさいたかんたあ、いろ〳〵變なお手紙ばかり上げて御心配かけまして。』妹は云つた。

『いや、ちつともさうぢやない。私こそあんたの爲めには少しもなつてやれずにすまないと思つてゐる。』孝吉は、彼女が小笠原島へ行つてゐる亭主の居所を探してくれと云つてよこした手紙に對して、『そんな居所も知らさぬ男は思ひきつたがよいではないか』と返事したそのことが今となつては云ひ過ぎであつたと知るのであつた。

『大變好い家だな。これから百姓でもやらうと云ふのかね。』

『いえ、さうじやありませんばつてん、町の方によかあんばいの家がなかもんですから一時此所の座敷を借り受けたのでござんす。』妹は云つた。

『此の家の主人達も此所に矢張をるの。』

『え、それがあなた相場ですつかり損して、その爲めに此村にをれんことになつて、かうして私達に貸したまゝ仁比山の方へ行つとらすばんたあ――まあ兄さんお上んなさつてようございませう。』

『え、ありがたう、まだ昨日の夕方着いたばかりでお墓參りもしてゐないし、いろ〳〵用があるから、今日はこれで直ぐ歸ることにせう――そして婿は何をする人です。』

『今は町の呉服屋の方に勤めてをらすばんたあ、いづれ自分で商賣をする氣でをりますが、今しばらくその方へ勤めてからにすると云つとります――商賣の方は小さい時から苦勞してをりますから、ぬけ目のない人でござんす。』

妹に對する彼の美的幻想は彼女を一目見た瞬間に兄らしい憐憫に變つた。七八才の時分は愛らしく、鼻筋なども品の

よい女の子であつたが、もうすつかり古女房になつてしまつてゐた。かうした女でも妻としてつれそふてくれてゐると思ふと兄らしい好意がその亭主に對して起るのであつた。そして一目でもその亭主に逢はずに歸ると云ふことがすまないやうな氣がした。

兄妹がいろ／＼の話しをしてゐるところへ三十ぐらゐの色の白い男が自轉車で屋敷の中まで走り込んで來て、ひらりと飛び下りた。

『今來たあれが婿ぢやないのかい。』孝吉は妹の菊子に小聲で訊ねた。

『いゝえ、あれは德松さんばんたあ。』

『あ、さうか。』

此の男は自轉車を土藏の壁に立てかけて汗を拭き／＼椽側の方へやつて來た。

『あんた德松さんですか。』

『は、よく……先刻お寄り下すつたちふて家内が云ひましたから多分此所においでになるぢやらうと思つてやつて來ました。どうもしばらくぶりでございました。』德松は魚市場あたりに見る、いなせな、さつぱりした男に出來上つてゐた。

『兄さん。伸夫さんを待たせて置くよりも歸した方が好うはなかかんたあ。』

『まあ、今日はゆつくりなさいませ。今、菊さんの婿にも來しなにさう云つて置いたから、やがて來る筈ですから。』德松は云つた。

八

孝吉は待たせてゐた伸夫を歸すことにした。

孝吉は父の死後は全く故郷と云ふものを忘れたやうに、呉、神戸、東京、と放浪に身をまかせて、多くもない近親にさへたよりをしないのであつた。父の遺産の大半は繼母にまきあげられて全く身一つの勞働者となり諸國の鐵工場を渡り歩いてゐたのであつた。そして幾年目かに歸郷した時は警察の注意者になつて刑事が二人も尾行してゐた。出獄後の身一つを持てあまして久しぶりに故郷にこつそりと歸つて來たが叔母の家でも歡迎されなかつた。

繼母は彼の父の死後、間もなく博勞を情夫に持つて同棲し、二人の娘をもつれ子として共々に暮してゐたのであつたが一人は十九の時に長いわづらひに罹つて死んでしまひ、殘つた唯一人の娘の菊子にその博勞の甥を婿養子にとつたのであつた。そしてその繼母は去年の秋六十二で死んだのである。菊子は母の死後間もなく佐賀を引きあげて、此の神埼へ住むことになつた。此所は彼女の母の里で町には身よりの叔母や從兄の德松兄妹もゐたからであらう。

『姉がなくなる少し前に兄さんに一目逢ひたい〳〵と云ふもんですから、松原町の叔母さんにもあなたの居所を聞きに行つたりしたけれど矢張分りませんし、するうちに東京から歸つて來た人が△△侯爵のお屋敷にあなたがゐなさると敎へてくれましたから早速その方へ問ひ合せましたが、もう三四年前からおいでになりませんと云つて返事が來ましたの。姉は兄さんのことばかり云つてなくなりましたのよ。』と菊子は姉のお靜の死の前後をいろ〳〵と物語つて佛壇から寫眞を出して見せたりした。

『あなたが何年か前に一度お歸りになつたことは後になつて聞きました。何でもその時は刑事が尾行したりして大へんぢやつたと云ふ話でござんしたが、今はもうそんなことはござんせんか。』と德松は、そんなことには平氣らしく笑ひながら訊ねた。

『えゝ、もう、今は……』と孝吉はこともなげに云つてお菊の方へ向ひ『ほんとうにお靜は可愛さうなことをしたなあ。』

と心から云つた。然し長年自分の居所を知らさなかつたのは勿論故意で、繼母に對する意地からであつたのだ。孝吉は海老茶の袴をはいた十八九の背丈の高い娘姿の寫眞にちよつと見入つた。菊子の話しでは小學校時代から優等で、女學校卒業後は村の小學校に女教師をしてゐたとのことであつた。

孝吉はふと、一方の佛壇を見やつた。それは見覺えのある佛壇であつた。そこには彼の父の位牌や實母の位牌が古い先祖の位牌と共にある筈だつた。彼はいつまでもそれらの位牌を此の家に置くことはいろ／＼の意味で好まなかつた。もとより三好家の戸主である彼は當然それを引きとつてまつらねばならぬのであつたが、放浪生活以來そのまゝにしてゐたのである。然し繼母は繼母で、物慾の強い女であつた爲めに、位牌を孝吉に引き渡すとなれば裝飾品である佛壇までも渡さねばならぬとの考へから、情夫と同棲後に於ても、彼女には無用であるべき前夫の位牌や孝吉の實母の位牌までも祭り込んでゐたのであつた。

『位牌は皆此の中にあるかい、菊さん。僕の母の位牌や三好家代々の寄せ位牌があるだらうなあ。』

『え、ちやんとござんす。私にとつても矢張御先祖さまでござんすから……』と妹は云つた。

情夫と同棲後の繼母の手元にそれらの位牌を今日まで置き放しにしたことは、佛にとつては恥辱であつた。と云ふ氣もしたが、今更それを思つても始まらないと孝吉はあきらめた。

『ほんに、あなたとかうして久しぶりにお目にかゝることが出來て私は嬉しうございますよ。小さい時分あなたによく抱かれて可愛がつて貰つたことを覺えてをります。あなたのお父さんも私を徳坊々々ちふてよく可愛がつてくれよりました。私の父がまた、あなたのお父さんとは性分がよく合つてをつたさうです。』と徳松は小さい時分の記憶を辿り／＼話した。

『それはさうと、奧さんとの事件はどうかたつきましたかね。大分妙なことになつてゐるやうに新聞や雜誌に出てをりましたけえ、陰ながら菊さんとも話してをりました。』德松は云つた。

『いや、別に根も葉もないことで、唯一生つれそふのがいやだつたもんだから、此方は正しく離婚しただけです。それを先方ではかれこれ云つて問題にしてゐるに過ぎません。』と孝吉は答へた。

丁度ひるになつたので妹の菊子は何かこしらへやうとしてゐたが、孝吉はそれを止めて、德松の案内で町の小料理屋へ行くことにした。勤めさきの忙しいお菊の婿にも都合のよいやうにと、德松はその吳服屋の筋向への柳屋と云ふ小料理屋に孝吉を案內した。そこは町を貫いて流れてゐる砂底の川を裏にひかへた凉しい小ざつぱりした小料理屋であつた。欄干から直ぐに滑い川の流れの見下される裏二階の氣持のよい部屋に女中は彼等を導いた。

『東京から來んさつたお客さんぢやつけん、まづい物を出しちやいかんばい、お安さん。』德松は土地つ子で日頃からの馴染と見えて、なれなれしく女中にそんなことを云つたりした。

二人がそろそろビールを飲み始めてゐるところへ菊子の婿は店員姿のまゝやつて來た。三十三四の小男で、小さい時分から商店で養はれたと云ふだけに機智と商略とで固つたやうな利巧げな三角型の顏であつた。

『始めてお目にかゝります。よく……』

『お忙しいのに、お呼びしてすみませんでした。』孝吉は叮嚀な挨拶をした。彼は兄として妹の亭主と云ふものに對する氣持を生れて始めて此の時經驗したのであつた。そして此の男からよく理解されたいと云ふ氣持で彼は最初正直に自分を見せようと努めた。そして自分のさうした心持を分つてくれる男ならば一層嬉しいと云ふ氣だつた。然し相手は挨拶が終つた後は多く德松にのみ話しかけて、孝吉にはあまり口數をきかなかつた。それが畏敬のやうにもあり、何か一つ

の心構へをしてゐるやうにも感ぜられた。

『いつか、妹に云つてやつた手紙を此の男は見たのかも知れぬ。』と孝吉は思つたりした。然し會つてゐる間は出來るだけさうした思惑を意識しないことに努めた。

然し兎も角も、かうした一場は作家としての彼を喜ばせた。如何なる場合にも彼は作者としての立場を意識することに於て厭やな思ひをも我慢しようとした。

『二十年ぶりに妹に逢ふ。妹の婿に逢ふ。その心理描寫。そこは故郷の田舍町の涼しい小料理屋の二階であつた。俺の顏はどことなく生々さを欠いで都會生活に疲れてゐるのは無論。妹や妹の婿や德松達は俺がもつと堂々とした人物になつてゐると思つてゐた。それが會つて見ると案外であつた。此の暑さに二重釦の冬服を着込んでゐて、權威のない輕蔑にさへ價する神經質の弱々しいおど〳〵した心の持主である。東京にゐても、あまり人と交際をしないで郊外の家に妻との離婚後をわびしくくすぶつて暮してゐたのである。人を笑はせるやうな會話の妙もない、然し見る人の目には決して俺が愚かでないこと、氣持の深刻な藝術家であることが分るのは云ふまでもない。まあそれで好い……ところで俺はどの程度までこれを描き上げることが出來るだらう……』彼はさう思ふのであつた。

間もなく妹の菊子はしやんと身しまひをして、二人の子供をつれて、お里叔母と一緒にやつて來た。

『まあ、お久しぶりでござんすうつ。ほんにまあよく……』お里叔母は部屋に入るといきなり云つた。彼女は孝吉の繼母の妹であつた。

『貴女はお達者で、何よりでございます。』孝吉もなつかしい調子で云つた。彼女は二十幾年孝吉が逢はない間にもうすつかりお婆さんになつてゐた。昔ながらにおでこの女で、然し若い時分よりは肥つてゐた。

『あなたが此所の小學校に通つておんさつた時分には、私が毎晩讀本のおさらひをしてあげよつたばなた。憶えておんさるかなた。試驗の時には、それは算術が出來ずにな。おつほほほほ、でもほんにこんなにおなんさいた。一いろ〳〵苦勞もなさつたちふお噂も聞きましたが、今では仕上げなさつたちふことで、喜んどります。』お里叔母は云つた。若い時分は幾度も異つた男と馳落などして親兄弟をてこずらせたほどの彼女も最後に町の醬油屋の息子と一緒になつてからは、すつかり身が定まり、仕立屋で儲けて今では自分の實家である昔の荒木屋の家を德松から貸金流れに買ひとつて大きな雜貨店の內儀になりすましてゐるのであつた。德松は父母の長わづらひの間の借金整理の爲めに遂に先祖の家を叔母夫婦に明け渡したのであつた。

『もうわたしも中學に通ふ息子がござんすよ。でも年をとつて、こんな婆さんになりました。』

『まあ、然しあなたが一番仕合せです。皆は死んでしまはれて氣の毒なことでした。』

『ええ、德松の親ぢを始め皆は早死にでござんしたゝい。』と彼女は云つた。

德松は何故か感慨深さうに默り込んで下を向いてゐたが急にコツプをほして孝吉にさした。

『今晩私の家へ狹いけれども泊つて下すつてどうです。ゆつくりいろ〳〵お話も伺ひたいですから。』德松は云つて『私も兩親がなくなつた後、半年ばかり東京へ行つてぶら〳〵しました。あなたのお所が分つておればお訪ねするつもりでしたが、どこにゐられるやら一向見當がつかず――實は西洋料理の方をあちらで覺え込んで來て、此の土地で洋食屋を始める目的でしたが、どうもそれもつまらんと思ひましてな、思ひきつて歸つて來たんでござんした。』

『さうでしたか、それは然し好い考へだつたでせうに。』と孝吉は云つたが、此の正直な男が兩親の死後、叔母夫婦に家を明け渡してからいろ〳〵と分別に迷ふたことが想像されるのであつた。

『私は少し店の方が今日忙しうございますから、夕方早くしまふことにして、これで失禮いたします。どうぞ今夜はこちらでお泊りになつて下さいませ。それでは。』菊子の婿はさう云つて座を退きかけた。

『ありがたう。お忙しいところをほんとうに。』

『それぢや夕方早うしまふやうにしんさい。』と德松も云つて店の方へ行かせた。

九

孝吉は其の夜の十一時の汽車で佐賀の旅館へ歸つた。德松は菊子の亭主と二人で彼をステーションまで提灯を持つて田圃道を見送つた。

翌日は早速墓參をする筈であつたが久しぶりのことゆゑ寺にも少しは餘計な布施をやらねばならぬ氣持がして、その爲め、東京から金が送つて來るまで延期することに定めた。蝦蟇口には二十圓あまりの金がありはしたけれど、昨日の小料理屋の支拂を德松がしてしまつたので、そのまゝではすまぬと思ひ、今朝は早速十五圓ほど妹の菊子あてに送つたのであつた。

東京を立つ時は百圓あまりの金があつたけれど、横濱で一夜を有樂町で明かし、汽船が神戸に碇泊中も何かと金をつかつたので佐賀の故鄕に着いた時はもう三十圓足らずの金であつた。然し用心深い彼は他の百圓ほどの取り前の金を若しもの用意に東京の方へ置いて來たのであつた。持つてをれば必らずつかつてしまひさうな氣がしたので置いて來たのだ。そしていよ〳〵必要の時が來たので電報で取りよせることにした。晩くも一兩日のうちには來る筈であつたので、彼はそれまで旅館の二階で靜かに待つことにした。旅館は町で三流格の商人宿に近いむさくるしい家であつた。彼は自分でもわざ〳〵こんな下等な宿屋を何故選んだらうと後悔した。けれどもステーションから俥に乘つて町を通る途中、

此の旅館が昔の神樂屋の跡だと思ふと、妙に好奇心が動いたのだ。それに此の町の通りもなつかしかつた。神樂屋と云へば昔は此の町で二つとない小間物卸店であつた。それが息子の道樂がもとで沒落して今は旅館に變つてゐたのであつた。裏庭などには昔の全盛を語る風雅な松の木や庭石が殘つてゐた。昔の廣い間口も今は自轉車屋、宿屋、理髪所、と三軒にしきられて、廂はだるみ、屋根の瓦は落ちさうに下を向いてゐた。

孝吉は裏庭の見下される土藏の二階の十疊の間に陣どつて、まづい三度の食事を小娘の給仕で食べながら二日三日と過ごすのであつた。十年ぶりになつかしい故郷に歸つて來て、こんな陰氣な宿屋の二階に落ち着くとは豫期しなかつた。けれども考へやうによつては興味をも覺えた。それは例によつて、作家としての自分の立場を意識すると、却つてかうした宿屋に泊り込んだと云ふことが藝術的取材になると思ひ直すからであつた。

此の宿屋の亭主と云ふのは半病人らしい蒼い痩せた顔をして下の裏座敷に、いつも物憂さうにすわつてゐた。孝吉は厠に通ずる廊下の往復にそれとなく見た。かみさんは一人でせつせと働いてゐたが、毎晩のやうに亭主と口喧嘩をした。女中と云つては十六七の小娘が一人で、田舍から出て來たばかりの氣のきかない啞のやうな女であつた。

彼は自分が久しぶりになつかしい思を抱いて來たのは、故郷そのものにでなく、故郷の幻影を慕ふて來たのであつたことを自から氣づいた。そして彼が慕ふて來たそのなつかしい故郷の街の幻影は彼が着いてから三日も經たぬうちに消えてしまつたのであつた。矢張なつかしい故郷も遂に來て見れば醜い現實の街であつた。もとより彼はそれを知つて來たのである。幻滅の復習を覺悟で幻影を追ふ男であつたから。

金の來るのが晩い爲めでもあつたが、故郷の街が少しも愉快に感ぜられなかつた。街の二三の親類は皆喧嘩してゐて長年音信不通の狀態を續けて來たので氣輕に訪ねるわけにも行かなかつた。それに彼は一番近親である松原町の洋服屋

の叔母に對しては、父の死後預けて置いた金品を流用された一件から凄文句の手紙を度々投げつけてゐたのであつた。そればかりでなく叔母一家をモデルにして二三の小説を書いて發表したこともあつた。叔母一家では彼が東京で小説家の仲間入りをしてゐると聞いて屹度それとは知らず其の小説を讀んで目を光らせたのは無論だ。然し實母の唯一人の妹である叔母であり、赤ん坊の時分からいろ〳〵世話になつた叔母だと思ふと、喧嘩はしてゐたがなつかしかつた。

『訪ねるにしても金が來てからにしよう。』と彼はさう思つた。

前以て歸鄕の通知を何人にもしてゐなかつたので、新聞社は無論のこと、豫て彼の小説の愛讀者として書面を寄せてゐた青年達も彼れの歸鄕を夢にも知る筈はなかつた。時々彼の寫眞などを入れて、鄕黨で唯一人の小説家三好孝吉として誇らしい記事をのせてくれた町の新聞社の前を通りはしたが、名のりをあげて其の社を訪ねるのも氣おくれがした。強いて請はれる時は辭さないつもりで講演の腹案もないではなかつたが、得意でもないことをやつて、あたら愛讀者達や町の人々に幻滅を起させては一大事と考へた。兎に角十年ぶりに故鄕の町を見たと云ふことゝ、祖先の墓参を果すと云ふことで滿足したいと彼は思つた。

夕食後は大抵宿を出て彼は町をぶらついた。昔と少しも變つてゐない町もあつた。少年時代に河童のやうに泳ぎもぐつた川の橋際に佇んで、水を染めてゐる夕燒の空を眺めて今昔の感に耽つても見た。町は新らしい時勢に迎合して、部分的には華やかさと活氣を見せてゐたけれど、一歩横町へ入ると頽廢の陰が家々の軒に深く巣くつてゐた。町裏の空地の向ふには田圃が見えたり、そこの眞菰の間から蛙の聲やよしきりの高鳴きの聲が聞えて來るのであつた。廣い城下街ではあるが、町の大部分は晝もなほ眠つてゐるかのやうに、人影さへも稀れで、夕暮時になると蚊の夥しい細長い町々は、早くから蚊帳を吊したり、蚊やりをいぶしたりして、一層さびしさと陰氣さを濃くして見せた。然し孝吉には寧ろ

さうした町々がなつかしかつた。さうした古い陰氣な町々を通つてゐると我が故郷と云ふ感じがしみ〴〵とするのであつた。

然しまた、昔しながらに賑やかな新馬場の廣い通りも、いろ〳〵の思ひ出と共に彼にはなつかしかつた。そこには劇場があつた。取引所があつた。松原神社の大鳥居があつた。社前の太鼓橋の下をゆるやかに流れてゐる清い松原川があつた。川のほとりには氷屋の玉すだれが灯影を宿して涼風にゆれてゐた。一流の旅館が廣い社前の通りに向ひ合つて軒を並べてゐた。レストランの二階の灯は冴え、球突場からは球のかち合ふ音が通りへもれた。劇場の入口には新劇團の役者の名が讀まれた。美しい藝者達の姿が旅館の玄關口へ消えて行つた。

孝吉は松原神社の祭禮の日を樂しみ待つた幼年時代を思ひ浮べずにはゐられなかつた。春秋二度の祭禮は城下の子女の心をどんなに浮き立たゝせるものであつたか。今もなほさうに違ひなかつた。在鄕からは花編笠に赤襷のふりゆうが幾團も鉦太鼓で押し寄せた。廣い新馬場通りは見世物小舍で狹められ、人で埋められた。大蛇、山あらし、猿芝居、輕業、江川なにがしの玉乘一行、ぬけ首、一寸坊の藝當、女劍舞、水藝、さうした見世物の繪看板がずらりと續くのであつた。子供達はビードロ德利にニツケー水を入れ、風船玉や獨樂を買ひ込んで祭りにはしやぐ――。

『え、最初あげまするは黑いのは胡麻でございます。胡麻は薩州鹿兒島の名產としておなかに精根をつけ、髮の色たちを黑くし……』祭禮の日に胡麻入りの砂糖菓子を賣る男の、さうした辯舌を孝吉は幼年時代に覺え込んだものであつた。

彼は心弱い內氣な少年だつたので、お祭の時に僅かのお小使を貰つても、それを大事にした。實母を持たなかつた彼はよその子達のやうに母親や姉につれられて見世物を見に行くことは望まれなかつた。一人で行つて玉乘りを見た。大蛇を見た。ぬけ首を見た――或る年の祭に彼はさうした見世物小舍の中で偶然、母親につれられて來てゐる小さな戀人の

姿を見出してどんなに彼女が自分の存在を認めてくれるやうにと願つたことか。彼女は赤い帯を尼はさみに結んで、髮を稚兒輪に結つて、孝吉と少し隔つた前の方に立つてゐた。舞臺の一段高いところでは、蒼白い弱々しい美しい女が、振袖を着て、總かんざしを澤山頭髮にさして、小暗い行燈の灯のゆれる張り幕の裡に座つてゐるのであつた。陰氣な調子で三味線太鼓の囃子がひとしきり續くと、ぬけ首の女は悲しげな、うるはしい聲を張り上げて唄ひ出すのであつた。そして彼女の首はだん／＼拔け上つて、細々といやが上にも伸びるのである。長い煙管で煙草を吸ひながら陰氣な行燈の灯影の上にじつと思ひ入れをするその氣味惡い彼女の妖艶な姿態は、どんなに少年の好奇心をとらへたことか。

然し彼はそれらの古い記憶を忠實に辿りなつかしむには心の年齢を取り過ぎてゐた。その時分の初戀の女も今は此の世になかつた。町はづれの鐵道線路の方にあつた彼女の家も今は跡形なく取り拂はれて、あたりには倉庫や工場の建物ばかりであつた。

十

『これがあなたの大伯父さんにあたる吉田長五郎さんのお墓でごさんすたい。奧羽戰爭でいかい手柄をなさつた方で、此のお墓は隊の方からお建てになつた墓で、おうちでお建てなさつたお墓は、ずつとあつちの、祖母さんの並びにごさんすぢや。昔は吉田さんと云へば聞えてをりましたが、今では市太郎さんもなくなられ、信次郎さんとお久さんがおいでになるばかりで――久しぶりに松原町の叔母さんにお逢ひんさつたかな。信次郎さんも久留米の方でお丈夫のやうぢやが長いことわしもお目にかゝりませんでな。』老住職は孝吉を案内して一々先祖の墓を教へた。孝吉は殊勝らしく數個の石碑におじぎをした。それから再び本堂の隣りの座敷へ戻つて、いろ／＼と東京の話などを住職から問はれるまゝに語つた。

『文藝の方ちふと、新聞や雜誌に書いて發表しなさるのかな。』

『は。』

『時勢が變つて來ましたでその方もなか〳〵頭腦がいりますぢやらう。』住職は云つた。

孝吉はしばらく話し込んでからお布施を出して寺を辭した。彼は此の日、二ケ所の寺に墓參をすまして、早速唐津行きの汽車へ乘る爲めにステーションへ急いだのであつた。いよ〳〵四時間の後には、今度の歸鄕の主なる目的である歌子の兄に逢へると思ふと、またいろ〳〵のことが考へられた。然し彼は先祖の墓參をすましたと云ふことで、半ば心持が明るく輕々としてゐた。此の明るい輕々とした心持は屹度何かよいことを來らしめさうな豫感もした。さうした氣持は古い觀念の惰勢と知りながらもそれをも自分に許した。

『然し、從兄は果して俺を歡迎してくれるだらうか。』彼は汽車に乘つてからいろ〳〵氣になつた。中學校長と云ふ敎育家の地位にある從兄には、小說家と云ふものがどんな風に理解せられてゐるかゞ第一氣になつた。世間の誤解を招くやうな離婚事件を惹き起した自分に對して、眞面目一方に固まつてゐると云ふ從兄がどう云ふ氣持を抱いてゐるであらう、そして自分が歌子に對して或る考へを抱いてわざ〳〵やつて來たと知つたら彼はどう云ふ態度を見せるだらう。と孝吉はいろ〳〵思ひ過ごして見るのであつた。

彼の從兄は五月の上旬頃、校長會議に列席する爲めに多分東京へ來た筈であつた。五月頃上京致すやも知れず候、その際は久々ぶりに對面致し度候。と二月頃來た手紙の終りに書きそへてあつたので、孝吉は心待にしてゐたのであつたが從兄はそれ以來何の通知も孝吉に與へないのであつた。果して從兄が五月に上京したかどうかはよく分らないが、その前後に於て或は孝吉の離婚事件を新聞記事で知つて其の惡評的記事に幾分愛想をつかし、彼に逢ふのを避けたのではな

いかと思はれるふしもあつた。さう考へると孝吉はわざ〳〵從兄を訪ねて行くことに張合ひを失はねばならなかつた。そして歌子に對する空想までもいたましい反省に變へねばならなかつた。

「恐らく彼女との結婚は成立しまい。彼女にしてもそんな氣にはなれないかも知れぬ。第一彼女の父も俺と云ふ人物を昔からあまり好いてゐないのだ。それに死んだ彼女の良人は小說家なんてものを輕蔑してゐたらしいから、從つて彼女もさうであらう。自分との結婚など〻云ふことは死んだ良人に對しても、また彼女自身思ひもよらぬことかも知れぬ。いやそれならそれでも構はないのだ。自分も強いて彼女をと望むわけにも行かないのだから……兎に角二十何年ぶり從兄の顏を一目見ることで滿足しよう。さうだ。さう思へば何でもない……」孝吉はさう考へ直して汽車の馳るにまかせた。

汽車は幾つものトンネルを潜つて山と山との間を馳つた。途中には炭坑があつた。

　歌子が唐津の兄の家にゐるかどうかは孝吉には分らなかつた。麴町にゐる歌子の姉の松子の話では久留米にゐる死んだ良人の叔母の家へ行つてゐたり、唐津の兄の家にゐたり、岸川村の實家に歸つたりして日を暮してゐるとのことだつた。岸川村は佐賀の町から二里ほど北に隔つた在であつた。彼女には良人の忘れかたみの女の子が一人あつたので、再婚を急ぐわけにも行かず、あたら若さの身でわびしく片田舍で日を送つてゐること〻孝吉には思はれた。彼女は五人の女の姉妹の內では一番きれいで、娘時代は眞面目な兄のもとに身を置いてゐたので、しとやかであつた。それに二十一の年から△△侯爵邸の上女中として望まれ、そこで三年ほど勤めたので作法や行儀は一通りわきまへてゐた――孝吉は彼女や彼女の姉の松子と同じ東京にゐながら隨分久しくそれを知らずにゐたのであつたが、孝吉の名が新聞や雜誌に現はれるやうになつて、始めて姉の松子が知つて或る日孝吉の宿を訪ねて來たことによつて一切は判明した。長い間音信もせぬほど疎隔してはゐたがさうした從妹達と久しぶりに東京で出逢つて見ると孝吉はひどくなつかしかつた。

もう其の時、歌子は結婚してゐた。そして彼女の良人は呼吸器の病氣で逗子へ轉地してゐた。彼女は良人の病氣に心を奪はれて滅多に東京へ來ることもないとのことであつたが或る日孝吉は偶然、松子の家で歌子と唯一度逢つたのであつた。それが二十年ぶりであつた……。

孝吉は歌子に對して別段に戀してゐるとは自分でも思はなかつた。唯彼は妻と別れてから、偶然麹町の松子から歌子の現在の身の上を聞いて、いつしか彼女の上に或る空想を持つやうになつたのであつた。もとより歌子を戀してゐないまでも嫌ひではなかつたのだ。それに、自分の亡父の唯一人の實妹の娘と云ふ意味で、彼女等四人の姉妹の中の何れかとさう云ふことになるべきもの〻やうにも思はれるのであつた。今日まで自分の父が生きてゐ、彼女の母が生きてゐたならば事實さう云ふことになつてゐたかも知れなかつたと彼は思ふのであつた。

兎もあれ、孝吉はあまりそんな考へを持たずに従兄を訪ねようと云ふ氣になつた。

汽車が唐津のステーションへ着いたのは夕方の五時頃であつた。孝吉はそこから俥を雇つて城内の従兄の家へ走らせた。

「城内に武林と云ふ中學の校長の家があるかね。」

「え、あります。校長先生のお家までですな。」俥夫は直ぐにのみ込んだ。

「その校長の家の附近に宿屋はないかね。」

「え、ございますよ。海岸に二軒ほど宿屋がございます。」俥夫は云つた。

俥は町を過ぎ、閑靜な屋敷町を通つて十分ほどで城内の校長の家の前に着いた。孝吉の心は妙に動揺した。一先旅館へ落ちついてから訪ねようか、どうしようかと惑つたのである。

此の日は日曜だつたので、校長は在宅の筈であつた。兎も角彼は俥を下りた。俥夫を待せて置いて門を入つた。門内は小松林になつてゐて、砂路の奥に平家が見えてゐた。とう〳〵來るべきところまで來た。と云ふ氣持で彼は玄關先に立ち止つて、心を落ちつける爲めに今更のやうにハンケチで額の汗を拭いたりした。

『御免下さい……。御免下さい……』

すると二聲目に内から聲がして上り口の障子が開いて美人と云へるほどの廂髮の婦人がそこに姿を見せた。妻君らしかつた。

『私は東京からまゐつた三好でございますが。』

『さやうでゐらつしやいますか。あの三好孝吉さんでゐらつしやいますか。』細面の婦人は彼を見入つた。

『は。』孝吉は少し照れ氣味に答へた。

『まあよく……。さあどうぞ。あの宅は今日學校の會議にまゐりまして、まだ歸りませんが、もう歸る頃と存じますが……』

『さうでございますか、ではまた、後ほどあらためてお訪ねいたしませう。』

『さやうでございますか。まあお上り下さいませ。そのうちに歸るかと存じますが。あの、いつこちらへは……』

『今日、いまし方ついたばかりでございます。』

『まあ、さやうでゐらつしやいますか。宅も上京いたしまして、つい四五日前に歸宅したばかりでございます。あの、あちらでは今度もとう〳〵お逢ひしなかつたとか申してをりましたが……』

『は、多分五月には上京される筈と、心待にしてをりましたがとう〳〵……』

『まあ、どうぞ、さあお上り下さいませ。』

『ありがたうございます。』

孝吉は、そのまゝ上つて從兄の歸宅を待ちたいとも思つたが、或る氣持が許さなかつたので、其の場は一應引き返へすことにした。

『矢張五月には東京へ來たのだ。そして俺に逢つてもくれなかつたのだ。』孝吉はさう思ふと自分がわざ〳〵彼を訪ねて來たことがひどく愚かしいことのやうな氣がしたのであつた。その意味でも一應旅館へ落ちついた上で會見と云ふことにしたかつた。然しさうは云ひながら、一分間も早く從兄に逢ひたいのが心いつぱいだつたので彼は待たせて置いた俥に乘つて更に中學校まで走らせることにした。學校はそこから直ぐであつた。俥夫に名刺を渡して小使に取りついで貰ふことにしたが、

『もう先刻お歸りになつたさうです。』と俥夫は戻つて來て云つた。

『先刻……』

孝吉はいよ〳〵つまらない氣がしたので、そのまゝ海岸の旅館へ行つてしまつた。

十一

日本海に面した海べの旅館の二階で肌心地のよい湯あがりの凉味に一先くつろいだ孝吉は、もう一分二分を爭ふて從兄との對面を急ぐほどのこともないと、反動的に落ちついてしまつて、愛想の好い女中を相手に土地の話しなどに興を覺えながら晩餐の膳を前にして思はず酒の量を過ごしたのであつた。まだ避暑客の入り込む時期でもなかつたので廣い旅館の二階は靜かにしめやかだつた。孝吉は歸鄕以來始めて旅館らしい旅館に落ちついたと云ふ氣持で、東京を立つ

てからの日數などを顧みた。

『今度の校長先生は大へんお出來になるさうでございますねえ。御評判がそれはよろしうございますよ。』女中は酌をしながら云ふのであつた。

『さうですかね。そんなに評判が好いんですかね。』

女中は此の客が校長の從兄にあたる人とは知らなかつたが、校長に用があつて來た人間であることは分つてゐた。彼女は、孝吉が何處かの學校から轉任して來た教師であらうと云ふやうに見てゐるらしかつた。

『校長の家に電話はありませんか。』

『え、お電話はございませんやうですよ。』

やがて孝吉は食事をすませると、着物を着替へて支度をした。旅館から校長の家までは半丁ほどだつた。靜かな宵闇の砂路を踏んで再び松林の奥なる從兄の家を彼は訪ねて行つた。玄關へ近づいた頃、一方の庭からがつしりとした筒袖姿の坊主頭の大男が彼に聲をかけた。

『三好君かね。待つてをつたよ。』その聲は孝吉にはたしかに聞き覺えのあるほがらかな、少年時代の從兄の聲に違ひなかつた。

『や、しばらくでした。』

『さあ、あがりたまへ。先刻來てくれたさうだが大變妻が失禮したらしい。何故上にあげて待たせなかつたか。と今怒つてゐたところだ。旅館はそこの海岸——旅館などに泊らないで此所へ來なさい。』從兄は中學校の校長と云ふよりも佐官級の軍人と云ふ感じがした。

『いらつしやいました。さきほどは失禮いたしました。何故お止めして置かなかつたと云つて宅は大變な不機嫌でございますの。さあどうぞ。』

『始めてお目にかゝります……』孝吉はあらためて妻君に初對面の挨拶をした。そこへ、段々に小さいのから大きいのまでの男女四五人の子供達が交る／＼おじぎをしに來て飛んで行つてしまつた。

『ほんとうに君が來ようとは思ひがけなかつた。僕も實は校長會議で上京して、つい一週間ばかり前に歸つて來たんだが、君をお訪ねしようかと思つて地圖などしらべたりしたが、何しろ在京中に江原さんが急になくなられたりして、そのお葬式にも參列せんけりやならず、いろ／＼用が多かつたもんだから、また此の次にしようと思つて、とう／＼お訪ねしないで歸つて來たわけだつた。――それはさうと、其の後離婚問題はどう解決したかね。先方で訴訟を起したらしいが。矢張慰藉料でもほしいのだらうか。』

『さうかも知れませんが、女の家はそれほど貧乏でもない筈なんですから五百圓やそこらの金をほしがつてゐるとも私には思へないのです。それよりも私を社會人として傷けようと計つてゐるやうです。訴訟を起したと云ふのも一つの宣傳に過ぎないんで、今だに裁判所からは一度も呼び出しはないんです。呼び出してくれたら一通り事實を述べたいと思つて證據になるやうなものを取り揃へてあるんですが、そのまゝになつてをります。裁判所の方で受けつけなかつたのかも知れません。何しろ離婚屆などは先方から作製して來て調印を求めたほどですから。』

『ぢや矢張、君を世間の問題にしようと考へて大げさに宣傳のつもりでやつたんだな。僕もあの記事を讀んだ時は少し書き方がひどいとは思つた。兎に角氣の毒なことだつた。まあ仕方がないさ。だが先方も君を傷けるつもりでやつて却つて損をしただらう。君の辯明の方が世間では受けが好いやうだから。』

『早く、何よりも幸福な御結婚を更になさいませ。ほんとうにお氣の毒なことでございましたねえ。』妻君も良人の傍らにゐて云つた。ビールなどが運ばれた。

『あの人なんかなら三好君には好いかも知れんねえ。年は三十にもなるが、高等師範を出た女だから、しつかりはしてゐる。』從兄は妻君を顧みながら云つた。

『さうでございますねえ。あの方ならば屹度好うございますわ。』妻君も云つた。從兄夫婦は孝吉に對して適當な候補者があるらしく、ちよつとそんな話しをした。

『で、離婚後はどうしてやつてるんです。矢張一軒の家を借りて一人でゐるんですか。』

『え、自炊でやつてゐます。』

『まあ、それは御不自由でございませうねえ。でもよく。』

『さう云ふことには君は我慢强いなあ。』と從兄は感心したやうに云つて『その堅忍が出來るからこそ、勞働生活の傍ら文學などがやれたのだね。よくやり通したと家內とも時々君の噂はしてゐました。然し文士生活もなか〳〵容易ぢやあるまい。いや我々も同樣だ。』と校長はから〳〵と笑つて見せた。

『どうも力が足りないと何をやつても同じです。』孝吉は云つた。

『いやさうぢやない。文筆で行く人は直接自分と云ふものを社會に押し出して行けるから好いです。そこへ行くと敎育家はつまらん。つまらんと思つてしまへば之亦つまらんが、人間を理想的に育てゝ行くと云ふことも、やつて見ると愉快ではある。然し何しろ相手は生意氣ざかりの中學生だから骨は折れる。それに、折角吾々が理想通りにやつて行かうとしてゐると、今の新思想家連にぶちこわされるんで、これには一番こまるて。』中學生と云ふものは何でもかでも手あ

なり次第本を讀んで、そいつをまるのみに呑み込んでしまふのだからなあ。近頃の新しい雑誌なんかをどん／＼内證で讀んでマルクスだの、レーニンだのと云つてゐるのだから手こずらされるさ。』

『さうでせうなあ。』孝吉は近代思想が地方中學生間にまでどん／＼浸透して行くことを一面面白いとも思つたが、かうして直接に教育家の從兄からそんなことを聞かされると、彼の立場にも同情したくなるのであつた。

『だが、教育と云ふことには多年の經驗も積んだし、また自分の使命を信じてゐるから、まあやつてゐるやうなものだが、下には生徒と云ふ恐ろしいドンキホーテがゐるし、上には視學と云ふ姑男を控へてゐるので、どうかすると、おさらばをしたい時がある。然し人生はどうせさうしたものなんだから忍耐するんだが、忍耐すると云ふことは結果に於ては愉快なことでもある——君の文壇生活の話も聞かうぢやないか。』

『いや、僕の文壇生活はボートで世界一週をやつてゐるやうなもんです。』と孝吉はさびしく笑つた。

『矢張文壇と云ふところも一本立ちぢやいかんらしいなあ——君の作は大抵讀んでゐる。どれだつたか、或る海邊の宿屋の小娘を戀して、寒い冬の日に汽船で逢ひに行くのがあつたが、あれなどは君と云ふ人がよく現はれてゐた。從兄は笑ひながら云つた。孝吉はさう云はれると、思はず顏を赤らめた。此の從兄をわざ／＼訪ねて來た今度の歸鄕の心持もそれに類してゐたからであつた。

從兄は素朴坦懷な男であつた。孝吉よりは一つだけ年上であつたが、實家に於ては十何人の弟妹の長兄でもあり、既に五人の子供の父親でもあつて、教育家として固まつてゐたので、或る意味では完成されてゐた。彼は立派な農家に長男として生れ、嚴格な祖父と物がたい父と慈愛に富んだ母親によつて殆ど模範的に育て上げられ、小學から中學、高等師範、と優秀な成績で通り過ぎて來たのであつた。中等教員としては群馬、大分、其の他二三の縣立中學を轉任して今

日に到つたのであるが、彼の生れながらの明るい素朴な謹直な性格人物は到る處の長上の信任を得た。彼には酒も煙草も不必要であつたと共に其の愛する妻君以外の女もまた不必要であつた。彼は生れながらの教育家であつたらう。彼は眞面目で謹直であると共に何事も正しいと信ずるところをどし／＼實行した。それ故校長として轉任して來た當時は、古くからゐる職員連の反感を招き、其の反感派の煽動によつて生徒の盟休騷ぎまで勃發したが、それは日ならず生徒の了解を得て大事に到らず、却つて彼の信念の硬きを示すこととなり、得がたい良校長として知事の信任も厚いのであつた。

十二

孝吉は從兄夫婦に強いて云はれるまゝに其の翌日の夕方、海岸の旅館から從兄の家に移ることにした。そして其の夜はまた、前夜と同じやうにいろ／＼と語り更した。

從兄の妻君は孝吉に再婚の候補者のあるなしを確める爲めにかう云つた。

『東京の方には好い人がございますでせう。矢張都の人でなくてはあなたにいけますまいね。』

『いえ、さうも思ひませんです。都會の女と云つてもあまり感心の出來るのはたんとゐませんので持つならいつそ田舍から迎へたいと思つてをります。』

『いろ／＼、あちらでもおすゝめになる人がございませう。』

『は、ちよつとあるにはありましたがどうも一度しくじつた反動で、直ぐその氣になれませんです。』

『然しさうばかり云つてゐらしても何ですから、早くお迎へになつては如何でせう。こちらにも一人あるにはあるのですけれど、あなたがどうお思ひなりますかと、それを伺つた上でと思ひますの。一度嫁入つたのでございますから、それもどうかと思ひますの。もう一人は初婚ですけれど、これはもう全く田舍育ちで迚てもお歯には合ひますまいけれど

……』妻君は云つた。従兄は此の時椽先の柱に身をもたせながら默つてゐた。

孝吉は妻君の口ぶりによつて或る豫感が胸に襲ふたが、それを出來るだけ抑制しようとした。然し彼は此の時嬉しい豫感の爲めに醉はされて妻君の次の言葉を期待する心がやわらかに胸にこみ上げて來るのを覺るのであつた。然し妻君は露骨を謹むやうにしばらく間を置いてそして云つた。

『血族結婚はおいやでございますか、どうお思ひになりまして。』

『は……いえ別にいやではございません。唯、さう云ふことになると一層自分と云ふもの丶不完全を怖れずにゐられなくなるのでございます。全くの他人との結合と異つて、萬一よく行かない時のことがでございますよ。』孝吉はさう云つてしまつてから、直ぐにもう、自分で自分の言葉に對して憤慨と輕蔑と嘲笑と失望とを覺えた。彼は自分の望みを得る爲めには必要でない第二の言葉を先に云つてしまつたのであつた。然し其の瞬間、まだ取り返しがつくと思つて更に彼は妻君の次の言葉に期待を持つた。しばらく座には沈默が續いた。

『まあ、再婚はさう急がん方がよからう。一方の離婚問題の方もまだ全然解決してゐないとすれば、もう少し時期を待つがよいかも知れぬ。一生涯藝術家で終るとすれば寧ろ獨身で行くのも好いことではある——それに君は獨逸行きの計畫はどうした。僕はそれもよいことだと思ふ。』椽側の柱にもたれてゐた従兄は云つた。

『それは外國へいらつしやるにしても、相手を定めてからいらつしやつてもおよろしいですわ。あなた。奥さんをお持ちになつたつて孝吉さんの藝術は大丈夫のびると思ひますわ。』妻君は良人の横顔を見ながら云つた。

『それもさうだが。何にしても、世間の思はくも考へなくちやならん。』と良人は云つた。

またしばらく沈默が三人の間に續いた。

『もう晩いやうだなあ、そろ〳〵寢ようぢやないか。久しぶりに孝吉君と二人で俺は寢よう。』と云ひながら從兄は庭に下りて月など眺めた。孝吉も續いて椽側から下りた。好い月夜であつた。

『此の石は由緒ある石なんだよ君、豐太閤にゆかりのある石なんだ。』從兄はさう云つて廣い庭の一隅にある大きな平たい石を孝吉に指し示した。そして此の廣い庭があり、裏には五十坪の畠がありして、家賃が僅かに二十五圓であることなどを話した。

『裏の畠を君に見せよう。』校長はさう云つて更に孝吉を其の方へ引つぱつて行つた。冴えた月光の下に茄子や馬鈴薯や胡瓜の葉が畝に影を落して續いてゐた。

『これは見ごとだ。』孝吉は讃嘆して見せねばならぬやうに云つた。

『皆これは家内がやつたんだ。彼女は柄になくこんなことが上手でねえ。却つて百姓の家に育つた僕は何にも此の方のことは分らないんだ。此の胡瓜を見たまへ。此の中で唯一本變にねぢくれて、いくら手を入れても眞直に上に伸びないのがある。油糟やその他の特別の肥料を與へても矢張駄目だ。その他の奴は皆此の通り竹にすがりついてすく〳〵上へ伸びてゐるだらう。皆同じ種なんだがそれ〳〵矢張個性があると見えて、どうも此奴一本だけは特に甚だしいよ。』從兄はまるで多くの子弟をでも養成してゐるかのやうに一本〳〵の個性を說明するのであつた。

『はあ、面白いもんですなあ。』孝吉はさう云つて眺めたが、それよりも從兄の心持に一種の興味を感じてゐた。

『全く俺に似てゐる。その胡瓜は俺のやうだ。』と孝吉は思つた。そしてエキセントリツクなその胡瓜が其の中で一番偉いのかも知れぬと思つた。

孝吉は其の夜、從兄と二人で久々ぶりに枕を並べて寢た。眠りに入るまで語り更かした。

翌朝、校長は早く學校へ出て行つた。制服制帽のキチンとした裝ひで、小脇に參考書の包を抱へて、規則正しい步調で。

孝吉は從兄が學校へ出て行つた後、しばらく妻君といろ〳〵の話をした。

『私は宅とつれそふてから、もう十五年にもなりますけれど、一度もまだ叱られたことがございませんの。それが何だか私にはもの足りませんのですの。宅はいつも私との間に垣根を設けて、それから一步も互に犯し合ふことを許さない人でございますの。私はどうかしてそれを破りたいと思つて一時はいろ〳〵試みて見ましたけれど、矢張駄目でございますの。或る時は、それを破り得たと思ふほど接近しますけれど、また直ぐ翌日になりますと、ずつと互にあらたまつてしまつて、お早うございます。行つていらしやいませ。と他人行儀な挨拶をどうしてもしなければならなくなりますの。それは眞面目な親切な人ではございますけれど、私は何だかもつと宅の本質にふれて見たいやうな氣がいたしますのよ。然しそれを見せてくれませんので、私唯それだけがもの足らない感じが始終いたしてをりますの。』妻君は云つた。

『それが或はよいのかも知れませんよ。それが家庭生活を墮落させない正しい方法ではないでせうか。いつも垣根なしでは却つて……』孝吉はさうでも云はなければ言葉が他になかつた。

『それもさうでございますけれど。』

『私がお見受けしたところでは實にお姉さん御夫婦の間は申し分ないとさう思はずにゐられません。』

『は、それは夫婦の間に、別にどうと云ふことはございませんのよ。唯、佐賀のお父さまに何だかすまないやうな氣持が私にはございますの。私は實家で一人子だつたものですから實父は私を嫁にやるわけには行かないと申しましたの。でもやつと、生れた長男をあちらの籍に入れることにして、私が武林に入籍することになつたのでございますの。そん

なことで何だか佐賀のお父さまにはいつもすまないやうな心持がいたしますの。私共のやうなものを嫁におとりにならないでもお父さまにはお父さまのお考へがあつたでせうにと、さう思ひますと何だか……』

『然し小父だつてお姉さんとの御緣に不滿はございますまい。それは屹度心では喜んでをるでせう。』と孝吉は云つた。

『此の夫婦は馬鹿に幸福を感じ合つてゐるに違ひない。屹度さうなんだ。幸福感より他に感ずることがないから、そんなことが云つてをれるんだ。自分達の幸福を露骨に語れないのだ……』と孝吉は心に思ひながら一種の頬笑を嚙みしめた。妻君は從兄が最初の就任地である宇佐中學にゐた時分にお安くない仲になつて今日に到つたのであつた。孝吉は幾分その話を麴町の松子から聞いて知つてゐたのであつた。

『兎に角武林君はあの通り眞面目ですからお姉さんもそれだけは御安心ですよ。』

『は、それはもう、職柄が職柄でございますから、眞面目一方でございますの。長年かうしてをりますけれど宴會以外にはよそで飲食することとは殆どございませんの。私に內證で樂しみをするなんてことは絕對にない人でございますの。』と妻君は云つてちよつと頬笑ながら『ですけれどまあ、此の間は妙なことを同僚の方が申しますのよ。宴會などにまゐりますと、あの武骨な人が藝者に大へん持てるんださうでございますの。自分でも宅はさう申してをりますの。俺は滿洲節一つ唄へないが、それでも藝者は俺のそばへ皆寄つて來るから妙だ。つまり俺がうぶだから彼等は自分のまゝにして見たいのだらう。つてさう云つて自分でも笑つてをります。でもそれはどうとも分りませんわ。あなたのやうな方がどうかすると却つてひどい道樂屋さんになるかも知れませんから御注意なさらないといけません。四十代になつてからの道樂は死ぬまでやまないて申しますから、つて申しますと、それは大丈夫さ。つて云ひますの。』

そんな笑話しに時を移した。話のついでに孝吉は妻君がもう一度歌子についての話題を出してくれることを待ち受け

たが、遂に彼女はそれを云ひ出さなかつた。

十三

孝吉はその日、午後二時頃までに中學校を訪れることになつてゐた。それは職員中に作家としての孝吉の名を知つてゐて、彼が時々發表する創作を讀んでゐる二三の人があるので、それらの職員達に校長は孝吉を紹介し、そして都合では高級生徒達に一場の文藝講演をやつてくれと云ふのであつた。然し孝吉は講演だけは斷ることにした。中學生徒と云ふものが彼には怖ろしかつたのだ。そこで彼はその二三の職員達にだけ合つて見るつもりで家を出た。まだ約束の時間までには二時間ほどの間があつたので、中學校の裏手の濱邊を傳ふて城山の上の公園へと登つて行つた。そこからは長い滿島橋が見え、船場の町の全景が見下された。虹の松原は遠く岬の果まで續いてゐて、淺黄色の海は灣曲の濱邊に打ち寄する白い波にふちとられ、夏の日はその眞上から一切を照りつけてゐた。

孝吉は山上の葉櫻の蔭の茶店に腰をかけてしばらく四邊の景色を眺めてゐたが、やがてそれにも飽きて、彼は城山の向ふへと石段を下りて船場町の方へ歩いて行つた。そこは入江になつてゐて、對岸は滿島の遊女屋町であつた。眞夏の盛り時には一里島の生簀へ客を運ぶモーターボートが出ると云ふその渡船場から、孝吉は二錢の渡し船に飛び乘つて對岸の滿島の町へと渡つた。向ふ岸へ上ると直ぐに遊女屋町で、おさらひの三味線の音などが表格子からもれてゐた。彼は物好きにも眞晝の遊女屋町を、幾分きまり惡さうにぶら／＼歩いて行つた。ところ／＼の二階からは居續け客に戯れかゝる遊女の聲などがきやつ／＼と聞えてゐた。彼はあてもなく歩いて行つたがやがて松原に近い海邊へと出る路を見出した。そこには涼しい潮風が吹き寄せてゐて、伊太利の風景畫に見るやうな風車がくる／＼と廻つてゐた。それは町の潮湯場へ海水を送る風力ポンプであつた。

波打際には白いモーターボートが一艘、今しも濱邊から乘り出さうとして人待顔の男が二三人立つてゐた。が、間もなく遊女屋の裏手から三人の女が小走りに出て來ると、互に嬉しさうに呼び交はすのであつた。一人の女は三味線を提げてゐた。

三人の男はハデな揃ひの浴衣を着て頬冠りをしてゐたが女達が近づくと一人は船からひらりと飛び下りて、見る間に三人の女を一人宛抱き上げて船に積み込んだが、女の浮々と笑ふ聲が靜かな眞晝の濱邊を一瞬間賑やかにした。此の洒落者の一行は云ふまでもなく一里島の生簀を目ざして行くのであつた。ボートは見る間に沖へ小さく消えて行つた。

孝吉はそれから再び城山の上の公園へ引き返して木陰の茶店で思はず午睡に時をはづして、中學校を訪れた時はもう時計は四時を指してゐた。職員達は全部歸つてしまつて校長室に唯一人從兄がゐた。

校長はがらんとした板の間の廣い室の一方のテーブルによつて、何かの書類に目を通してゐるところだつた。

『公園の茶店でうつかり午睡をしてしまつて、すみませんでした。』

『さうかね。まあそこへかけたまへ。』

兩方の壁には萬國地圖だの卒業生徒の記念寫眞だのが懸つてゐた。校長の眞正面の長押には御眞影の箱がうや〳〵しく置かれてゐた。

『邪魔ぢやないんですか。』

『いや、別に……』校長は云つた。

『これは生徒の家を受持教師が戸別訪問した其の報告書なんだがね。つまり生徒の室内の樣子、書籍の種類、其の他の所持品等によつて、生徒の趣味や思想や素行を觀取して、それ〳〵に注意や警戒をしなければならん。なか〳〵めんど

うなものさ。』

『はゝあ。』孝吉は頷づいた。

『澤山の生徒の中には種々なのがをる。かう云ふのが一人四年級にゐるよ。』と校長はその報告書の頁をくつて二三行讀んで孝吉に聞かせた。

『四年級——何某、彼の室内は日あたり惡く陰欝なり。机邊は南京豆の皮散亂せり。壁にはレニン、トロツキーの肖像をかけたり。書架にはマルクス、ロマンローラン等の譯書あり……』

『かう云ふのがゐるから油斷ならんよ。君。』

『なるほど面白い。』孝吉は笑つた。

小使は茶を持つて來た。

校長は茶を飲み終ると歸り支度をした。そして、各教室や、道場などへついでに孝吉を案內して、やがて門を出た。

『此の運動場は東から西の端まで一メートル三百ミリほど傾斜になつてゐたので、此の通り今生徒の勞力で水平にならしてゐる。これを人夫の手によつてするとなると尠なからぬ工費を要するから學校の豫算金では到底不可能なんで全生徒が毎月放課時間を利用して土工作業をやつてゐるわけだ。勞働と云ふことを生徒に體驗させる上にも教育的効果があると云ふのでやらして見たが、此の通り八分通りは出來上つた。』校長は立ち止つて運動場を指しながら孝吉に云つた。孝吉の頭の中には陰欝な部屋で南京豆をかぢりながらレニン、トロツキーの肖像を壁にかけて革命思想を自から養ひつゝある報告書の中の中學生のことがふと浮んだ。校長糺彈の盟休騷ぎでも勃發しなければよいがと從兄の爲めに氣になつた。

十四

孝吉は二晩ほど從兄の家へ泊つた。彼は從兄夫婦の口からもう一度歌子に關する何等かの話が出はしないだらうかと、それを内心期待したのであつたが、その話はあれきり話題に上らなかつたので、半ば失意の氣持で從兄夫婦に別れを告げて汽車に乘つた。然し彼は其の失意から自分を救はねばならぬと考へた。それには、もう一度佐賀驛で下車して、直接歌子を岸川村の實家に訪ねるのが何よりの方法だと思つた。

『さうだ、折角來たのだから彼女に一目逢つて行かう。どんな風にくらしてゐるか、どんな氣持を俺に示すかそれ次第では東京へ歸つてから思ひきつて求婚の手紙を從兄夫婦に送ることにしよう。その時は何もかも正直に自分の心持を打ち明けてしまふのだ。兎に角彼女に逢つて見るに限る。』とさう思つた。久しぶりに小父や、歌子の弟妹達にも逢つて見たい氣がした。で彼は久保田驛で折角、門司へ直通の列車へ乘り換へたが、佐賀のステーションで再び下車することにした。五日ほど滯在してあき／＼した故郷の街ではあつたが、素通りするのが何となく心殘りでもあつたのだ。

彼はステーション前から川上行の乘合自働車に乘つて眞直な國道を走つた。

『從兄は一體俺に對してどう思つてゐるのだらう。妻君があの晩歌子の話をそれとなく持ち出したのは妻君だけの考へだつたらうか。それとも良人と前以てそんな話しを持出すことにしてゐたのだらうか。然しそれにしては從兄の云ひ分はあまりに素氣なかつたではないか。彼は妹を俺にやりたいと思つてゐるだけ、丁度俺が彼女をほしいと云ふ氣持を見せまいとするやうに、その心持を俺に見せまいとしたのだらうか。いやさうは云ふもの丶俺の返答もあまりにまづかつた。云ふまでもなく妻君が、血族結婚はおいやですかと云つたのは、歌子と結婚してはどうかと云ふ意味だつたのだ。其の時俺はから答へればよかつたのだ。いや決していやではございません。出來るものなら早速どうぞ……まさか從兄

の前でさうも云へないではないか……そこで俺は愼重な態度を見せる爲めにあゝ云つたんだ……見せる爲めに……馬鹿……俺はどう云つたかな……さうだ。血族結婚はいやではございませんが、唯さう云ふことになると一層自分の不完全を怖れずにゐられなくなるのでございます。全くの他人との結合と異つて萬一よく行かない時のことがでございますよ……俺は確かさう云つたやうだ。そこで椽先の柱にもたれて聞いてゐた從兄は、まあ再婚はさう急がん方がよからう――一生涯藝術家で終るとすれば寧ろ獨身で行くのも好いことではある。と云つた。そして話しはそれきり打ちきられたのだ。從兄は俺のあの時の答へに對してさう云はずにゐられなかつたのかも知れぬ。俺と云ふ人物が或る意味では不安な人間に見えたのかも知れぬ。あゝ長蛇を逸してしまつたんだ。いや〳〵、歌子に逢つて見なければそれはどうとも分らない。或は一縷の望みを見出せるかも知れない。彼女だつてさういつまでも獨身でゐるわけにゆくまいから。然し彼女の方で全然俺に對してその氣がないやうなら俺はもうそれで好いのだ。それは少しも俺にとつては苦痛でない。寧ろ俺は幻想から解放されて氣持がさつぱりするだらう。そして新たに對象を定めるのさ……然しまあ見ろ、何と云ふ好い景色だ。此の廣濶な田園は何と云ふうるはしい雄大さだらう……』孝吉は疾走する自働車の上で二十年ぶりに故郷の田園を讃嘆した。

自働車は川上まで三十分で行き着いた。孝吉はそこの溪流に臨んだ茶店の二階で一休した。着物を脱いで全身の汗を拭きとつて、それから俥で一里ほど行かねばならなかつたのだ。歌子の實家はその谷川の支流にそふて南西に展いてゐる土堤を下ればよいのであつた。そこには、なつかしい叔母は最早此の世の人としてはゐなかつたが、歌子の他に叔母の子達がまだ三四人ゐた。氣むづかしい小父ではあるが、久々ぶりに逢ふと云ふことで、それもなつかしかつた。

彼は戀と云ふ概念によつて自から戀を作つてゐるのであつた。彼は歌子に對してそれほど戀してゐるのではなく、歌

子に對して戀らしい心持を自から作つてその甘い幻想で自分をいたはつてゐるのであつた。それゆゑ、彼の戀はあまりに無雜作に易々と遂げられることよりも山あり河ありて、それを迂回しながら幻想を樂しむところに生命が保たれるのであつた。

俥は杉並木の土堤を走つて一時間ほどで岸川村の歌子の實家の生垣のそばに行きついた。胸がさわいだ。門から母屋までの路の兩側は蜜柑畑になつてゐて、鷄が餌をあさつてゐた。彼は其の鷄までがなつかしいやうな氣がした。母屋の方から孝吉の姿を一番最初に認めたのは歌子であつた。それと知つて歌子の妹の貞子も目を見はつた。

『まあ、お珍らしい方が。』

孝吉は帽を脫いで輕くおじぎをしながら、

『突然やつて來ました。皆さんお變りないですか。』

『まあ、思ひがけない、ほんとによくいらつしやいました。』歌子はあいそよく彼を迎へた。

『まあ、孝吉さんかんた。』貞子は丸い顏にいつぱい笑ひを含みながら云つた。孝吉は彼女がまだ六つぐらゐの時分の顏を記憶してゐるだけであつたが、想像通りの大きな女になつてゐたので、意外にも感じなかつた。

『顏は小さい時分とあまり變つてゐませんよ、貞子ちやんは。』

『さうかんた。』

孝吉は早速、納屋の脇で箕をつかつてゐる小父の方へ行つて挨拶した。

『おう孝吉どんか。』小父は孝吉の顏をじつと見入つて『いつ來たかん。』

『もう一週間ほど前に來ました。唐津に三晩ほど泊つて、今日立つて來ました。』

『さうかん。まあ上らんかう。さあ……』小父はつかつてゐた箕を納屋に置いて、佐七冠りしてゐた手拭を脫いて座敷の椽先に腰をかけて一ぷく吸ひながら孝吉に何やかと東京の話しなど聞いた。

『唐津の方は別に變りはない風ぢやつたかん。俺も急な用が出來て明朝出かけようと思ふとるが。』小父は云つた。

『さうですか。いえ、別にあちらは變りもないやうです。幸福にやつてゐました。』

孝吉は此の小父がどんな急用が出來て明朝唐津へ行くのだらうと思つた。そして、從兄夫婦がとめるまゝに、もう一夜あちらへ自分が滯在してゞもゐたら、あちらで小父と落ち合ふことになつたのだと思つた。此の小父が急用で唐津の長男のもとへ行かねばならぬと云ふことが孝吉の胸に或る豫感を喚び起した。

『或は歌子に緣談が始まつたのではないだらうか。それとも妹の貞子にかな……急用が出來たとは何だらう。』孝吉はさう思つた。

『まあ、上にあがらんかん。ゆつくりしてよからうもん。久しぶりに來たもんぢやけん。』小父は云つた。

『は、ありがたうございます。實はちよつとお寄りして、と思ひまして、まあ、小父さんはいつまでも達者で何よりです。』

『うん。ぢやがもう俺も六十八になつたたん。そいどん、おかげでまだ——仕事はもう小作人にまかせて、かうしてぼつ〳〵家で働いとる。』さう云つて小父はふと座敷の長押の肖像畫を指して『あれが勝一ちやんぼう。士官候補生でとう〳〵松島艦と一緒にあゝ云ふことになつてしまふたたい。』

『あ、よく、そつくりそのまゝだ。』孝吉もそれを見上げた。それは唐津の校長の直ぐの弟であつた。

『私はちよつと叔母や勝一ちやんのお墓へお參りして來たいのですが。』孝吉はさう云つて歌子に案内を乞ふとにした。

『そんなら私が行つて敎へて上げませう。』歌子は三つになる女の子を負ぶつて直ぐ生垣一重を隔てた裏の菩提寺へ孝吉

を案内した。

『あ、とう〳〵俺は此所までやつて來た。俺の頭の中を始終往來してゐたその人のところへ今俺はもう來てゐるのだ。そして俺は一體何を彼女に話しかけるつもりなんだらう。全く田舍に一年近くも來てゐるが、さう田舍臭くもなつてゐない。それでも氣むづかしい父達の手前、あまりおしやれも出來ないと見える……』孝吉は彼女と並んで寺の方へ歩きながら彼女の美しい素顏やその襟脚を竊み見て思つた。

『歌さんは東京で一度逢つた時よりも若くなつて見えるよ。』

『さうですか。さうでもないでせう。』と歌子は笑つて『女はほんとにつまりませんわ、良人に死なれると早速行き場に迷はねばならないんですもの、親兄弟だつて、さう構つてはくれませんし。』

『でもかうして、しつかりした實家があるからまあそれほどでもないさ。唐津の兄さん夫婦だつて、あなたのことはいろ〳〵思つてゐるやうでした。』

『……』歌子はそれには答へず『ほんとに、それはさうと、あなたも奧さんと妙なことになつてお氣の毒でしたわねえ。其の後どうなりましたの。』

『え、もうあの問題は最初から解決がついてゐたんです。それを向ふで……』

『矢張奧さんの方では別れたくなかつたのでせうか。』

『さうでもなかつたでせうが、どうかして私を傷けてやらうと云ふ氣なんですよ。それも一應は尤もだと云ふ氣もしますが、つまらんことをするもんです。』

『どうしてまたあなたは離縁なすつたの。』

『え、いろ〱事情はありますが性分が全く合はなかつたからです。』
『では今、東京の方ではお一人？……』
『え。』
『お食事や洗濯なんか誰れがしますの。』
『僕やるんですよ。』
『お洗濯も。』と歌子は笑つた。
『え。何でも。』
『まあ……じや早く、あとをお迎へになる方がよくはなくつて。』
『え、さう思ふんですが。』
『いくらも東京の方にはありませうけれど。』
『え、あるにはあるが。これと思ふのはないもんです。』
そんな話しの間に寺の門まで來てしまつた。
準吉は歌子の案内で叔母や士官候補生の墓に一々殊勝らしくおじぎをして、それから、また、いろ〱の話しをしながら、家の方へ引き返した。
『あなたも不幸だつたねえ。お婿さんに死なれてつまらなかつたなあ。二年越しの良人の病氣を看護してもその甲斐がなかつたのは殘念だつたなあ。』
『えゝそれも、こんな小さな子がなければ、まだよかつたのですけれど。』

『さうですとも。實際子供も可愛さうだ。』

『いろ〳〵と再婚の話もありますけれど、私が再婚でもすることになれば、此の子は父を失つた上に母にまで生き別れをするわけですから、直ぐにと云ふ氣にもなれませんの。』

『あ、それはさうでせう。』孝吉には稍々其の言葉は強く響いた。彼は彼女の背の兒をよく見た。子供は少し顏色が蒼かつた。

『子供は丈夫の方ですか。』

『え、見かけほど弱くもありませんのよ。』

『兎に角、田舍にゐれば丈夫になる。實に田舍は好いなあ。僕は今日土堤を來る時、つく〴〵さう思つた。』

『え、空氣はようございますわ。でも東京に長くゐつけてから寂しくつてゐられませんわ。初めは好いと思ひましたけれど。』

『それはさうでせう。あなたも、もう一度東京へ來てはどうです。』

『は、どうせ暮すならあちらで暮したいと思ひますの。御殿からも、もう一度來てくれと云つて下さいますけれど、もう御殿にはあがりたくございませんの。』彼女は云つた。

家に歸り着くと、座敷には夕餐の膳が出されてあつた。孝吉は云はれるまゝに小父と向ひ合つてお膳についた。

『お前もまあ、東京でさうなつて結構ぢや。これからはお前達の世の中たい。俺共はもうこれから死んで行くばかりぢや。俺も十何人の子供をそれ〳〵に育て上げるには容易ぢやなかつた。嬶どんだけが早死しやつて馬鹿らしい話ぢやつたたい。今頃まで生きてをらすぎいにやあ、あつちからも此方からも、子どん達から引つ張りだこぢやらうだい。此の家

の財産も俺の代になつてからは、まあ少しは殖えはしたが減つてはをらん。それだけが先祖に對する申しわけたい。唯、殘念に思ふことあ、俺も一軒、新らしゆう自分の隱居所を建てゝ、そこで往生したい思ふたいどんかあ、その願望だけがとゞきさうもなか——俺も昔は久賀廉造どもと寺小屋で机を並べたこともある。人間の一生涯と云ふものあいろ〳〵たい——ちやが俺はまだ耄碌はしとらん。何でもちやんと覺えとる。』小父は盃をちびり〳〵乾して述懷らしく孝吉に云ふのであつた。孝吉は此の小父の前に据ると、以前と同じやうに畏縮してしまふのであつた。彼は默つて小父の云ふことを聞いた。歌子と貞子とが交る代るお酌をした。

『——ちやが俺はまだ耄碌はしとらん。何でもちやんと覺えとる……』と終りを結んだ小父の言葉は孝吉には意味ありげに聞えたりした。彼は曾て放浪生活時代に他鄕から見るかげもない姿で此の家を訪れたことがあつて、その時、僅かばかり預けてある父の遺産を直ぐに渡してくれなかつたので孝吉は此の小父に喰つてかゝつたのであつた。云ひたいだけの我がまゝを此の小父に對して、云ひ得たのは其の時が始めてゞあつた。小父はその時のことを暗に云ふのではないだらうかと孝吉は思つた。その爲めにすゝめられる酒が胸につかへた。

十五

二週間は歸鄕中に費されたのであつた。そしてその內容に於て二週間の日數は二年間の生活に値するほど、みつしりと彼の空想を滿たしてくれた。彼はもう早く東京へ歸つて、そして歌子に對する求婚の決心を書面で以て從兄夫婦に披瀝しようとの氣持で力つけられ、その爲め歸京が急がれた。小父も歌子も妹の貞子も是非一晩泊つて行けとすゝめてくれたけれど彼はそれを辭退して、其日の夜の夜汽車で門司へ向つた。

『一氣に東京へ歸らうか、吳へちよつと立ち寄らうか。』彼は夜汽車の中でまた考へた。吳は彼にとつては第二の故鄕で

あつたのだ。そこには十七歳から三十歳まで勞働の辛苦をなめた牢獄のやうな工廠があつた。彼はそこで社會主義と文學と戀とを知つたのだ。そして最後にとう〳〵ストライキ事件でその土地を追放されたのであつた。そこには久しぶりに逢つて見たい仲間がゐた。ストライキ事件の際、差入や一切の世話をしてくれた厚い恩人がゐた――丁度、出獄者が幾年か經つて後、久しぶりに曾て苦役に苛まれた其の牢獄の前を一種の勝利感を以て通つて見たいと云ふ氣持が起るやうに、孝吉は呉の街へ久しぶりに立ち寄つて見たいのであつた。自分の過去の姿をそこに見ると同時に、多くの昔の仲間が今もなほその境遇に繋がれて生活してゐる狀態を見たいと思つた。それを見ることによつて自分の思想生活を更に鞭韃し刺戟せられたいと思つた。で彼は汽車が夜明に門司へ着いた時は既に呉へ立ち寄ることに決定してゐた。

昔の放浪時代の追憶は、彼をして呉へ立ち寄らしむるに中國通ひの小さな汽船を選ばせた。彼はさうした小汽船のむさくるしい三等室内に昔の靑服姿の小さな放浪者孝吉の影を見出すのであつた。そして彼は現在、ハンマを持つ代りにペンを持つ境遇を贏ち得たけれど、最早其の當時の貴い若さの失ひつくされてゐることをしみ〲と顧みねばならなかつた。

『あ、早いもんだなあ、つい此の間のやうだが、もうあれから二十年以上過ぎてしまつてゐる。』

彼のからだは今、放浪時代の靑服に代はるに二重釦の厚羅紗の冬服で裝はれてゐた。然し昔の若さに躍る潑剌たる筋肉の上に無雜作にひつかけて着てゐた靑服姿の如何に貴かつたことか――然し瀨戸内海を行く汽船の上は涼しかつたので二重釦の冬服を着てゐてもさして汗は出なかつたのである。

汽船は翌日の十時に呉の港についた。恰も免囚者が久しぶりに牢獄の外壁を眺めてありし日の苦役の追憶と感慨とに耽るが如く、彼は煤煙にとざされた工廠の幾棟に、港の空に感慨の目を据ゑた。

工廠では軍備縮小の爲めの職工解雇が斷行されむとして、職工等の結束的對抗運動が始まり、稍々不穩の氣が動いてゐる矢先であつた。孝吉は二三の仲間と逢つてそれを知つた。そして、いつしか彼は自分の身邊に思はぬ警戒の手廻しがされつゝあることを知つた。彼は二日ほど滯在した後、追はるゝ如く不愉快な警戒の目をのがれて其所を飛び去つた。牛刀を向けられた鷄のやうに……。

東京へ歸り着くと間もなく梅雨期であつた。陰濕な雨の日が續いた。

『――お許樣には無事御歸京なされし由安心いたしました。何十年振の對面にて嬉しく且つなつかしくてたまりませんでした。然し折角お越し下さいましたのに何のお構ひもいたさず、ほんとにすみませんでした。ゆつくり、いろ〳〵のお話しを承りたいと存じましたけれど、そわ〳〵なされてお立ちになつたので、いまでも心殘りに存じます――中略――實は早速お手紙差し上げる筈でしたが姉の歌がお許樣のおいでになつてから間もなく亡夫の從弟と再婚いたし、何かと多忙にて手紙を書くひまもない有樣でした。どうぞ不惡お許し下さいませ。また此の度は見事な品を各々へ御贈與下さいまして、私が皆に代つて厚く御禮申し上げます。皆々からもよろしく。先は御禮旁々御返事まで。これからお暑くなりますから御身御大切に遊ばしませ。さよなら。

月　日　　　　貞子

孝吉樣

孝吉は此の手紙によつて歌子の再婚を知らねばならなかつた。

『して見ると、俺があの日立ち寄つた時は既に歌子の再婚は半ば定つてゐたのだ。小父が唐津へ急用の爲めに明朝出かけると云つたのもその爲めであつた。矢張さうだつた……』

孝吉はそんなことには馴れてゐるやうに直ぐあきらめた。そしてしばらく顧みなかつた花子と云ふ女が今更のやうになつかしくなつたので、彼女の手紙などを取り出して見るのであつた。（完）



松永彈正（一幕二場）

岡榮一郎

人物

松永彈正少弼久秀

右衛門佐久通　久秀の子

岡周防守　老臣

森傳介　家臣

仙可　茶坊主

家臣　甲、乙、丙、丁。

待女　一、二、三、四。

その他、使番、雜兵數名。

時代　天正五年十月十五日夕刻より夜

場所　大和國信貴山松永彈正居城

第一場

城内本丸廣間

舞臺下手に近く、奥と前とに太き柱二本。柱より上手は、一面に少しく高くなり居る。正面に物見窓。窓より二の丸櫓の頂少し見ゆ。上手下手ともに、大なる杉戸。何れも開け放ちあり。

柱より下手にかけて、鎧櫃、槍、刀、弓、鐵砲の類、雜然と置きあり。

幕あくと、數人の雜兵、下手に集まりて、弓に弦を張る者、鐵砲を調ぶる者、矢を束ぬる者など、各々忙がはしく手入れをなし居る。何れも鎧を着る。鉢卷きを緊むるもあり。

正面物見窓の前に、家臣甲、乙、見物に後を見せて立つ。窓外遠くを望み見て、互に耳語す。二人とも鎧を着る。物見窓よりは、初冬の落日赤々と射し込む。

初のうち稍しばし、山麓を圍める織田勢と合戰のどよみ、鐵砲、陣太皷等の音に交りて、微なれども山谷に響きて聞こゆ。

上手より松永彈正出づ。年六十八歳。白髮總頭なり。腹卷、小さ刀。後より岡周防守、森傳介、家臣丙、丁、從ひ出づ何れも鎧を着る。

彈正を上座にして、何れも柱の上手に圓くなりて坐す。家臣甲、乙、雜兵等、彈正に叩頭す。

彈正。大手口の模樣はどうぢや。使番はまだ來ぬか。

周防。先刻參りましたぎりでござりまするが、今日はいまだに寄せ手が引退かぬやうに存じまする。

彈正。何とも心許ない。(家臣甲を顧みて)その方見て參れ。

家臣甲。は。(下手より去る)

彈正。本願寺からの加勢の衆徒は何處に配りおいた。

周防。とりあへず二の丸の固めを申しつけおきました。

傳介。無人ながら本願寺勢の手並みを見せたいと申して、今朝未明に到着致しました際にも、某を以て憚ながら大手口を固めたいと願ひ出でましたが、遠路疲勞の癒ゆるまで、二の丸で休息致すがよろしからうと傳へ置きました。何さま、今にも一氣に敵を追ひ散らすげに見えました。

彈正。天晴ぢや。當城を十重二十重に取り圍む寄せ手の中を拔けて、加勢に參つたほどの健氣なものぢやが、到着早々左樣な廣言を吐くとは面白い輩ぢや。

周防。弓矢八幡の御加護はもとより、本願寺阿彌陀如來の御冥助を添へられたも同然と、心丈夫に思召し下されと口上致し居りました。

彈正。日頃の厚誼を思うて、約束通り後結め致してくれるとは、彈正祝着の至りぢやと、傳介、その方からも傳へてくれい。此の上にも手厚う取計うがよいぞ。北國押さへの大軍を當城一と手に引受け居る重圍の中を、無事に拔けて參つたとは、鼠のやうな奴ぢやの。

周防。衆徒二百人の大半は、紀州雜賀表で、寄り寄り小勢を以て、織田勢を惱ましましたさうで、とりわけ此度は氣鋭の者を擇り選つて參つたとの事でござりまする。

傳介。何れこゝ三四日の中には、大阪表乃至紀州からの後詰めとして、二三千騎も馳せ參ずる儀と承知致しまする。愈々、殿、日頃の御鬱念を晴らせられまする上に、兼ねての御本望成就の時も瞬くひまかと大慶に存じ居りまする。

彈正。當然の事ぢやよ。多年、尾張の小倅めが存分に振舞ひ居るのを、ぢいつと指を啣へて眺めて居つた報いぢやよ。彈正が老後の思ひ出に、本懐を遂げるも、不思議にも當たるまいぞ。思へば久しい間の屈伏ぢや。幾度思ひ立つても、犬の骨折ると同然ぢやつたが、今度こそは、年來の宿願成就の時が至つたやうぢや。再び京洛を彈正一手に收めて、天下に號令する時期到來と申すものぢや。

家臣甲、再び出づ。

彈正。おゝ、見て參つたか。大儀ぢや。して、寄せ手の容子はどうぢや。

家臣甲。いまだ合戰中にござりまする。寄せ手は一刻一刻に數を增すばかりの上、先日來の不覺に氣を焦つたものかと存ぜられまして、只今の模樣では一氣に當城を踏み潰す氣か、短兵急に攻め寄せて、いつかな跡へ引かぬやうにござりまする。

彈正。(笑ふ)天與の險所に加へて、紅毛伴天連の智慧を藉りて築き上げた、彈正畢生の要害が、僅八日の籠城で脆くも落ちると思ひ居るのか。して、寄せ手が一氣に蹴散らす容子とは、どうして分かつたのぢや。

家臣甲。總大將城之助殿旗下が、眞つ先驅けに攻め寄せて參りました勢は、父御織田殿にも增してもの凄い有樣でござりまする。

彈正。小童め、味をやり居るな。――大儀であつた。(周防守に)大手口へ加勢の者を遣さずばなるまいかな。

周防。二の丸に控へて居りまする中から、何程か差向けては如何でござりませうか。

彈正。いつそ、本願寺衆徒を向けてはどうぢやな。

周防。御名案、却つて身方の勵みにもならうかと存じまする。(下手に向ひて)一同大儀でござつた。一應調べがついた上は、早々大手口まで運んだが宜しからう。持ち場は、(傳介を顧みて)貴殿宜しきやうにお指圖下されい。只今手入れ致した弓、鐵砲の類は一切、本願寺衆に割宛てゝ、十分防ぎ矢の手配りが肝腎でござるぞ。猶不足の分は、某までお届け下さるまいか。

傳介。畏まりました。では、某案内して、彼に一と泡吹かせて參りませうか。

彈正。味ようして參れ。

周防。御苦勞でござる。

傳介、下手へ立ち行く。下手の雜兵一同、傳介に從ひて去る。

彈正。周防、そちはどう思ふ。何れ日ならず、二三千騎も後詰めに參るとは申して居るが、本願寺よりの加勢が僅二百とは、松永年來の懇情に報いるにはちと不足ぢやの。

周防。某は左様には思ひませぬ。殿の御催促に、兎も角も御見舞として、たとへ二百騎にしても、精兵を選つて參りましたではござりませぬか。何にしても、敵の目を掠んで、間道傳ひに拔けて參るには、餘り多勢では協ひませぬ儀と心得まする。それも二千三千の大衆ならば、遮二無二一方の圍みを押破つて參りも致しませうが。

彈正。いや、松永安心の爲とならば、今少し人數を驅り催して來てくれようかと思うて居つたのぢや。二百騎とは、何にして

も心細からうて。

周防。お言葉とも存じませぬ。殿の御氣性にも似合はぬ、心弱い事を仰せられまする。萬が一後詰めが參らぬにもせよ當城は海內無双の天險、南山不落の稱へもある程の要害でござりませぬか。半年一年の間は、天下の兵を引き受けても、見事に支へて見せようとの見込みで、此度の御企てを思ひ立たれたのではござりませぬか。

彈正。(苦笑して)それはそちの理解を俟つまでもない。いや、彈正も近頃はとんと、氣が弱うなつたやうぢやの。年寄りの愚痴ぢや。本願寺の坊主めが、もの惜しみではないかと思うたまでの事ぢや。

周防。年寄りと仰せられまするが、殿は百歳の壽をお恃みなされるから見ますれば、まだまだ愚痴は御無用かと存ぜられまするて。

彈正。一年子の松虫を三年まで飼ひ續けた末が、人間百歳の長壽も、唯養生次第ぢやとは思うても、矢張わしの年が年ではな。何時か、室町御所夜討ち當時の意氣も衰へたかと見えるな。

周防。心細い事を仰せられまするな。御氣質とも覺えませぬ。今日の場合、一としほ某の氣懸かりでござりまする。

彈正。いや、許せよ、ほんの笑ひ話ぢやて。ぢやが、そろそろ本願寺阿彌陀如來のお慈悲でも願うて見るかな、彈正も古稀に近い老人ぢやからの。

周防。それでは、お側の腰元衆もお遠ざけなさるが宜しうござりませう。

彈正。(笑ふ)それぱかりはならぬぞ。周防、そちはきつい事を云ひ居るな。

周防(聞かざるものゝ如く、聲高く)お次の衆、灯りを參られい。

侍女三人、上手より灯りを運び出づ。何れも年若く、姿美し。舞臺三方に灯を配る。

彈正。（侍女一を見て）どうぢや。軍も恐ろしいとも思ふまい。籠城もまだ八日目ぢやぞ。しかも遠卷きにして、遊籠の方で合戰の物音が聞こゆるばかりぢやよ。

侍女等、柱の陰に隱る。

侍女一。別段恐ろしいとも覺えませぬ。殿樣のお側に居る事でござりますれば、何が軍やら、一向に分かりませぬ。

彈正。世辭のよい奴ぢや。わしの側に居れば、心丈夫ぢやと云ふのが、氣に入つたぞ。今宵はそちに伽を申し附けたぞ。

周防。（苦々しき顏色にて）殿、合戰最中でござりまするぞ。

彈正。又嬌めと申すか。よいよい。（高く笑ひて）周防、陣中の茶を振舞うてとらさう。茶を持て。

侍女二、立ちて上手へ入る。

彈正の子、右衞門佐、三十歳ばかり、下手より家臣數名を從へて出づ。すべて鎧を着る。家臣の一人は、右衞門佐の兜を捧げ持つ。

右衞門佐。父上、こゝに御休息でござりましたか。寄せ手はだんだんと勢を增して參るやうでござりまする。

彈正。氣遣ひ致すな。用心堅固の當城に指差しもさせる事ではない。吉法師の信長自身に攻めて參る事か、小倅の城之介如きがへろへろ矢が、此の彈正に立つと思ふか。

右衞門佐。如何にも寄せ手は攻め厭んで居るとは見えまする。先刻から搦手の方を見廻つて參りましたが、別段身方の膽を冷すほどの計略もないやうに存じまする。

彈正。さうであらう。明日は此方から逆寄せして、目にもの見せてくれようか。松永が手のうち、存分思ひ知らせう

ぞ。

茶坊主仙可、上手より茶を捧げて出づ。侍女二、同じく茶を持して再び出づ。仙可は彈正に、侍女二は周防守に、各々茶をすゝむ。

彈正。(茶を服して)よい加減ぢや。

周防。(同じく茶を服して)忝うござる。

彈正。(右衛門佐を見て)その方はどうぢやの。

右衛門佐。某は後刻頂戴致しませう。

彈正。左様か。(侍女等に向ひて)そち達は天主の方へ參つて居れ。夜食の刻限まで用はないぞ。

仙可、侍女等上手へ去る。

右衛門佐。明日未明の逆寄せは如何相成りましたか。

周防。某十分に手配り致しておきました。萬事、某手の者に申し聞けて、手筈は先程仰せ通りに運びおきましたで、必ず身方思ふまゝの勝利と存じまする。定めて、明日の一戰に怖ぢ恐れて、以後は遠巻きのまゝで、只喚くばかりが能でござりませう。

彈正。夜討ちの利を說く者もあるが、逆寄せは小勢で大勢を制するものぢやて、敵の油斷を見澄すが肝腎ぢやから、未明の朝駈けに如くはない。前公方光源院殿の御しるしを擧げたも、南都大佛殿に押寄せて、豪勇無双と歌はれた槍中村を討ちとつて、三好の三人衆を追ひ散らしたも、皆明け方の軍ぢや。明日は城之介めが心膽を寒うしてくれやうぞ。あはよくば追ひ打ちにして、一擧に當城から追ひ拂ひたいとも思ふがの。

　下手より大手口の使番出づ。

使番。お取次が願ひたい。大手口よりの口上でござりまする。

周防。口上は。

使番。寄せ手の總大將城之介殿自身陣頭に立つて、ひた押しに押して參らるゝと見ましたが、身方必死の防ぎ矢をものともせず、面も振らずまつしぐらに攻め寄せ參つて居りまする。こゝ一と時ほどが大事の場合と存じまするが、何分にも雲霞の如き大軍にて、勢を恃んで潮のやうに寄せて參りまするに、身方難儀の軍でござりまする。何卒片時も早く、飛び道具、殊に鐵砲、並びに砲術に達した屈竟の者を御差添へ、當口の加勢として御差廻しが願ひたうござりまする。

周防。大儀でござつた。しばらく控へて居られい。――殿、何程の事もござりますまいが、お聞きの通りの次第でござりますれば、兎も角も某、二の丸詰めの衆を率ゐて、大手口まで降つて、今一戰致さうと存じまするが。

彈正。うん、一應、生駒口の容子を見て參るがよい。大儀ぢや。

周防。後刻參上仕りまする。御免。

　周防、家臣二三を伴ひて、使番と共に、下手より去る。

右衛門佐。某も安閑としては居られませぬ。周防の跡から參りまして宜しうござりませうか。

彈正。十分休息して參るがよい。先づ落着いて、茶でも參らぬか。

右衛門佐。某は茶など悠長に落着いて ゐられませぬ。周防と一手になつて、大手口の防ぎ矢を致したうござりまする。

彈正。戯け者め。狼狽するには、まだまだ早いわ。度々云ふ通り、信長自身に參つて居れば兎も角、小童めに何事が出來ようぞ。それも才覺者の羽柴筑前でも居ることか、成上がり者が自慢の旗印をも見えぬ。力づくの眞つ正直に、ひた押しに押して來る能のない奴ばらばかりぢや。松永ほどの者が、力攻めに攻め落とされると思ひ居るか。あはて者め先づ、落ち着いて居れ。心を靜にもてもて。

右衛門佐。いやいや、某は氣遣ひでなりませぬ。じたい、此度の御謀反に、日頃の御企て成就と思召しますか。

彈正。何、謀反——謀反とは何ぢや。此の彈正が誰に謀反ぢや。無道人の信長めに謀反の弓を引くと申すか。大戯け者め。そちは此の父を何と心得居る。信長は今でこそ從三位參議の高位高官を偸んで、公方同樣に振舞ひ居るのも、皆此の彈正の手引があればこそぢや。尾張の片隅に、斯波の被官が、たかだか二郡か三郡か、首尾よくいつて尾州一國の主となるが、上々の出世と三拜して喜ぶべき身が、一時の風雲に乘つて、桶狹間の一戰に今川治部を討ちとつた目覺ましさを賞めて、此の松永が上洛を促したのが、吉法師の開運の始めぢや。その時の口上に、何と云ひ居つた。松永殿のお取持ちあればこそ今日の爲合はせ、織田の家のあらん限り忘却仕らぬと、涙を零して誓文まで致し居つたのは、そちもよく存じて居よう。

右衛門佐。しかし、今日では——。

彈正。まあ、聞いて居れ。その信長が、一旦禁庭の御綸旨を承ると、忽ち鉾を大恩あるわしに向け居つたわ。恩知らずの犬にも劣つた奴と、わしも臍を噛んだが、その時はもう追ひつかぬ。詮方なくて、今日まで、おめおめと、小伜が下に附いて、下知のまゝに動いては居つたが、わしが口惜しさは、何時如何なる時にも忘れた事がないぞ。——謀反とは、何たる戯けぢや。それほど、織田の弓勢が恐ろしいか。臆病者め。忝くも、永祿四年の昔、禁庭より直々に從四

位下彈正少弼を拜し、源の姓まで賜はつた松永が、信長討伐の軍を起こしたが謀反か。戯け者め。よくよく事理を究めるがよいわ。

右衛門佐。先づ先づ御腹立ちを宥めて下されい。某の思ひ違ひでござりましたに。――しかし、先月末より夜な夜な坤(ひつじさる)の空に、彗星が現れて、今日までも消え失せぬのも、何となう心懸かりでなりませぬ。松永の家調伏の妖星かと、これは父上の御存じではござりますまいが、思慮なき雜兵どもが、世俗の噂を聞き傳へて、怖ぢ恐れて居りますのも、當家の爲よからぬ前兆かとも存ぜられまして、(物見窓を顧みて)あの通り、今宵も氣味の惡い、空も燃ゆるやうに、怪しい光を放つて居りまするを見ますると――。

彈正。大佛殿炎上の祟りぢやとか、乃至は春日明神の御咎ぢやとか、云ふのであらう。そちも雜兵同樣、臆病風に取憑かれたと見えるな。一應云ひ聽かせるが、彗星が此の彈正を見知つて居ると申すのか。わしは今年六十八歳になるが、天上の星とまだ近附きはないぞ。近附きでもない下界の人間に、何の天上からの祟りぢや。そちも彈正が子として、天晴大將の器量に育て上げたつもりぢやが、愚な世迷ひ言に加擔して、妖星ぢやの、祟りぢやのと、世にも戯けた風說を實と思ひ居るのか。心に迷ある者は、白晝怪を見るとか申すが、そちも僅八日の籠城に心が亂れたさうな。笑止千萬の沙汰ぢや。十年以前の大佛殿炎上はわしのせいではないぞ。三好三家のものどもが、興福寺の衆徒を語うて、大佛殿近くに陣を布いたからの事ぢや。わしに何の罪がある。一擧に灰燼になつたといふも、興福寺衆徒が自ら招いた禍ぢや。よし又、わしに咎ありとて、罰を下さる爲めの彗星ならば、さてさて、春日明神も悠長な神であるぞ。昔の遺恨をよくも今日まで堪へられたものぢや。わしは神も佛も恐ろしいとも思はぬ。恃むものは、自らの力ぢや。

右衞門佐。しかし、今宵はちやうど十年以前と同じ十月十日に當たりまする。それに、これは某も如何かと存じて居りまするが、城之介の兜の立物は、鹿の角でござりまするを、雜兵どもが目敏く見知つて、春日明神の化身かと、只管怖ぢ恐れまするのが、自然と響き渡つて、猶々大手口の守りも危いやうに見えまする。

彈正。今日が恰も十月十日――（笑ひて）まだまだ戲けた、痴れ事を申すか。安心致すがよい。春日明神が妖星となつて、十年前の怨みを晴らさるゝなら、いつそ彈正が日頃心願の、百歳に達するまで宥恕を賜はるであらうぞ。大手口には周防が參つて居れば、氣遣ひ無用ぢや。今宵は枕を高うして、早う休め。眠の淺いは迷のもとぢや。くよくよ氣を疲らすが、何より命を縮めるものぢや。――思慮の至らぬ下人どもの雜說に耳を藉して、妄想に心を惱ますは、武將としての恥辱ぢやと思はぬか。

以前と異りたる使番、下手より出づ。

使番。申上げます。周防どのゝ口上でござりまする。お取次ぎ下されい。

右衞門佐。苦しうない。口上は何とぢや。

使番。周防守自身に防戰致しましたところ、敵は一時引退きましたが、十分遠方まで引取りませぬ模樣にござりまする。或は夜討ちの計略かとも存ぜられまするが、十分油斷なきやう、城内に觸れを出しましても宜しきや、如何がとの口上でござりまする。

彈正。よいよい。殘る隈なく、一人も洩れなく、觸れを廻すやう申附けろ。尙此の上にも、一層氣を配つて、篝を焚けと、周防まで傳へい。

使番去る。

右衛門佐。今宵寄せ手が引き上げましたとは、先づ祝着に存じまする。

彈正。先づとは何ぢや。當城には三年の兵糧、矢玉が備へあるわ。一年が二年でも持ち堪へて見せようが、それも無用ぢや。明日未明の逆寄せに、寄せ手を存分に追ひ退けた上、本願寺よりの大軍の加勢を待つて、當國、河州の固めを修めるうちには、中國より毛利右馬頭も上洛の運びとならう。まだまだ、北國の上杉入道は、織田勢が越前加賀の境まで押出した抑への後を突く謀もある。その上、甲州よりは武田入道をも招いてある。如何な隙間見(すきみ)の大將と自らも許し居る信長めも、それには協ふまいて。尾州勢も三方から攻められては、一と支へも出來まいぞ。先づ北國の上杉と、中國の毛利とを加擔人(かとうど)としたわしが采配は、甲州武田入道の上洛致した上で、三方互に嚙み合はせて、その隙を見て、漁夫の利を占むる考へぢや。日頃廻らしてある權道の計ひが見物(みもの)ぢやらう。その時こそわしが年來の本願成就といふものであらうて。(快く笑ふ)ぢやが、平蜘蛛の釜で、ゆるゆると寛ぎながら、そち達にも振舞ふのには、まだ少々間があらうな。

此の時、突如として鐵砲、陣太鼓、法螺の音、鬨の聲、喧しく間近に擧がる。

右衛門佐。何事が出來致したか。それ物見。(と、家臣の二三に命じながら、自らも物見窓に立ち行きて、窓外を下瞰す。)

父上、大變でござりまするぞ。大事出來致しましたぞ。二の丸に火が上がつて居りまする。

彈正。(思はず立ち上がりて)何、二の丸に火の手が——。

右衛門佐。身方に不祥の禍が出來致したのでござりまするか。一應、某見屆けて參りませう。

右衛門佐、下手へ行かんとす。下手より慌しく家臣一名入り來る。

家臣。裏切り者でござりまする。何者とも見定め兼ねまするが、俄に火を二の丸に掛けましてござりまする。正しく寄せ手に内應した、謀反人の爲業と承知致しまする。
彈正。裏切り者――いや、左樣な筈がないぞ。火を誤つたのではないかな。
家臣。確に裏切り者に相違ござりませぬ。不意に驚愕致しました身方の者どもに、弓、鐵砲を射掛けまする。
彈正。わしには合點が行かぬ。何者の爲業か、その方よくよく見定めて參れ。急げ急げ。
家臣。御免。（下手より去る。）

此の時、既に窓外一面の焔となりて、二の丸櫓の頂き炎上するを見る。

右衛門佐。最早猶豫はして居られませぬ。父上、兎も角も天主までお引取り遊ばしては如何でござりませうか。
彈正。まだまだ敵に内應したか否か、十分見屆けた上、是非に及ばずば、天主に立籠らうが、――それにしても、わしには一向腑に落ちぬ。彈正二十年來手馴づけおいた身方に、裏切りなどの不所存者を出さうとは、夢にも覺えぬ事だわ。
右衛門佐。某、實否を確めて參りませう。
彈正。おゝ、見て參れ。萬一、裏切り者と極まつた上は、片時も早く天主まで戻つて參れよ。用心して行け。

右衛門佐、家臣二三を從へて、下手より急ぎ去る。

彈正。頻に物見窓より外を眺む。

上手より仙可、慌しく出づ。

仙可。殿樣、一刻も御猶豫がなりませぬ。天主までお移り遊ばせ。

彈正。靜に致せ。まだ此處まで火が廻つては來ぬわ。

仙可。もう二の丸は悉皆、火の中になつて居りまする。やがて、此處にも燃え移つて參りませう。

彈正。十分容子を見た上でなくば、容易に此處は引上げられぬわ。

　下手より周防守、二三の家臣を後にして出づ。額に傷を負ひて、鉢卷には血滲みたり。

周防。殿、殘念でござりまする。最早御運の盡きかと存じまする。本願寺加勢の衆とは、眞つ赤な僞りでござりまするぞ。敵方の廻し者とは思ひも寄らぬ、周防めが不覺は、只今お詫び致しまする。

　周防守、肌を寬げて、腹を切らんとす。

　彈正、家臣等、齊しく右手を押へて、これを止む。

彈正。うろたへるな。腹を切るには、まだ早からうぞ。その方より、此の彈正一期の不覺だわ。本願寺衆徒は、敵の廻し者であつたか。口惜しいぞ。これしきの油斷に、大事に立至つたか。殘念だわ。

周防。無念至極でござりまする。(平伏す)

彈正。大手口も破れたな。

周防。潮のやうに亂入致して參りまする。二の丸に火を掛けるを合圖に、堤を切つて落とした樣に群がり入りまして、不意を討たれた身方の支へる裕はござりませぬ。

彈正。口惜しいぞ。彈正ほどの者が、兒戲に等しい敵の術中に陷つたのが無念ぢや。——敵の廻し者であつたか。卑怯者め。——是非に及ばぬ。天主に引上げて、最後の一戰を試みるより外はない。

周防。最早致し方がござりませぬ。

彈正。いや、まだまだ武運盡きたとは申されぬぞ。矢玉、焔硝のあらんかぎり、防ぎ矢の續く間防ぐが大切ぢや。——卑怯者め。むざむざ敵の計略に乘せられたか。——周防、悴が二の丸まで下つた筈ぢや。その方、悴めを尋ねて、手勢を纒めた上、同道して、天主まで參れ。

周防守、家臣を從へて、急ぎ下手へ去る。

彈正。（殘り居る家臣と、仙可とに向ひて）天主に引上ぐるぞ。參れ。

彈正を先にして悉く上手へ去る。

第二場

城内天主閣物見之段

舞臺中央に稍低き上段の間。低き段。上手奥に、大幅の懸けある床。風爐。彈正父子の具足櫃、その他の調度。中に平蜘蛛の釜を入れる箱あり。上手長押に長刀。

正面下手寄りに、斜に瓦燈形の物見窓。下手に銀襖。

下手前に段階子の上がり口。

上手と下手とに、短檠の灯り。

前場より一刻ほど後。

幕のあく前より皷燥、鐵砲の音頻に擧がる。織田勢のつくるどよめき、その間に斷續して聞こゆ。

下手物見窓より火焰空に映じて、凄じきを見る。

彈正。正面段の上に腰を掛け居る。その左右に侍女四人、狼狽しながら、附き添ひ居れど、爲す所を知らず、泣き喚くのみなり。物見窓の前に、仙可立ち居て、外を凝視す。段階子上がり口の前に、家臣丙、丁の兩人、下を見詰め居る。

彈正。(下手の家臣兩名に向ひて)右衛門佐はまだ見えぬか。忰はまだ來ぬか。その方、下まで見て參れ。

家臣丙、下に降りて去る。

彈正。(侍女を見廻して)騷ぐな騷ぐな。今宵に盡きた命數と諦めろ。そち達も一緒に地獄へ連れて行かうぞ。わしと一緒ぢや。定めて閻魔大王も懇ろに致してくれよう。地獄の客になるのも、一興であらうよ。――仙可、火の手はまだ鎭まらぬか。

仙可。一としほ旺に燃えて參りました。

彈正。いよいよ最後の時が來たと見える。明日からは枕を高うして、安らかに眠れようと思うたも、束の間の夢見であつたかの。是非に及ばぬ命數と諦めても、諦め切れぬは、易々と敵の術中に陷つた事ぢや。無道人の信長めと潔う合戰の上なれば、まだしも老後の思ひ出ともならうが、たかゞ小童の城之介に欺かれたとは、口惜しさも一層ぢや。要

寄堅固の當城が、一夜のうちに落ちるとは、彈正一生の不覺ぢやと觀念の眼を閉ぢかねるわ。口惜しいぞ。無念ぢや。殘念ぢや。

仙可。(段を下りて、彈正の足下に跪る) もうかうなつては、如何ほど悔やんでも致し方がござりませぬ。此の上は尋常の御覺悟の程が願はしう存じまする。

彈正。控へろ。彈正多年經營の謀を一夜に覆したばかりか、此の身はもとより、一家の破滅にならう上は、死に際の潔いを望まぬぞ。地獄に落ちても、此の恨を忘れぬ覺悟ぢや。そちも一緒に隨いて參れ。(意地惡き笑ひを浮べながら、侍女等に向ひて) 泣くな泣くな。いや、今のうちに存分に喚いておけ。そち達の泣き聲を。地獄に落ちる念佛代りに聞いてやるぞ。――仙可、まだ火は天主に移らぬかな。

仙可、窓の前に行きて、外を望む。

仙可。まだ本丸が十分燒け落ちませぬ。敵はたゞ遠卷きに致して居るかと存ぜられまする。

彈正。まだ一と時の命はある。先づその間にいつもの灸をすゑると致さうかの。ゆるゆる最後の仕度をする裕はある筈ぢや。(侍女等に) 灸の支度をしてくれい。線香、灸の用意をせい。

侍女等泣き叫ぶのみにて、答ふるものなし。

彈正。未練な奴ぢや。早く致せ。危急の場合ぢや。早く致せ。早く致せ。――さてさて、女は心の弱いものぢや。そのやうに死ぬるのが恐ろしいか。笑止な者ぢや。――仙可、その方灸の用意をせい。

仙可、寂しげに彈正の面を見詰めたれど、やがて片隅に置きある手匡より、線香、艾を取出し、線香に火を點じて、彈正の後に寄り進む。彈正、段の下に胡坐して、頂點百會に灸を點ぜしむ。

右衛門佐、家臣甲、乙、その他數名を從へて、段階子を上りて出づ。

右衛門佐。(その體を見て、慌しく)父上、此の期に及んで、何の灸療でござりまするか。眼前最後の迫るを見て、何の爲の養生でござりまするか。最早命運の去つた只今でござりますれば、憚りながらお氣をお鎭めなされませい。

彈正。戯けめ。そちの意見より、軍の容子が聞きたいわ。最後の一戰に、無事に當城を支へられる見込みがあるか、どうぢや。

右衛門佐。最早施す策とてもござりませぬ。本丸まで火の移つて居りまする上に、敵はひしひしと城内に攻め寄せて參つて居りまする。只今が最後かと存じますればこそ、悠長な灸療沙汰は、些か笑止の儀と心得まする。

彈正。今が最後ぢやと思ふこそ、持病の療治を致すのぢや。今が今、卒爾に中風が發したとせい。五體痺れて、心のまゝにならぬが定ぢや。腹切らうにも、手足震ふて思ふに任せぬ。彈正多年の豪勇一時に空しうならうも計られぬわ。中風の神灸、百會を灸で燒いて、萬が一にも左樣の病難の起るを十分に防いだ後、心に生害する深慮から出たのぢや。彈正ほどの者が最後へ飾つて、生き恥をさらすまいとの心底が測られぬとは、そちこそうろたへ者ぢや。よくよく呆け者となつたと見えるの。――仙可、十分にすゑてくれい。いつもよりも艾を增すがよいぞ。

右衛門佐。面目もござりませぬ。

彈正。何とぞして此處を逃れ出る隙はないか。いよいよ我命數も盡きたと思うが、今一度存分に、最後の軍を試みたいわ。

右衛門佐。蟻の這ひ出る隙もござりませぬ。今にも此天主に火が移りませうぞ。

彈正。憎まれ者のわしが、今の今まで何たる惡運の惡さよと、京童も噂してゐると聞いたが、それも今宵一と時限りと

なつたか。命數の盡きた上は是非に及ばぬが、目の上の瘤の信長めに、多年凝つた恨を晴らさずに土となるのが、何よりも口惜しいぞ。こればかりが諦め切れぬ妄執ぢや。――仙可、灸はそれでよい。もうよいよい。

仙可、灸を止めて、傍に坐す。

右衞門佐。父上、臆病者とお笑ひ下されまするな。某は此の一と時の間、ぢつとして最後を待つては居られぬ氣が致しまする。父上の御伴して、冥途まで御一緒に參るべきが定でござりませうが、それまで此の儘手を束ねて死期の至るを見詰めて居られませぬ。逆緣ながら、父上、某の先途お見屆け下されませぬか。右衞門佐、最後のお願ひでござりまする。

彈正。うろたへ者め。腹を切るには、まだ間がある。――わしの云ふ事をよく聞けよ。そちはまだまだ老い先の長い身ぢや。此の彈正とても、かほど老年でなくば、おめおめ此處で火の移るのを待つては居らぬ。そちは如何やうの方便を藉りてなりとも、是が非でも此の場を脫け出してくれい。此れが何よりの孝行ぢやぞ。わしと一緒に腹を切るのは此の上ない不孝と心得ろ。たとへ此の天主の下で敵に見現されて、捕はれの身とならうとも、一旦は落ち延びてくれい。そち一身の爲ばかりではない。わしが日頃の心願を、わし一代で愜はずば、そちが受け繼いで、何時か此の彈正の志通りに、天下を一手に握つて、日本諸國を左右する計成就の爲ぢや。よいか、分つたか。わしの賴みぢや。今此處で生害するは、何よりも容易からう。そこを一旦逃れ出て、當分は何處になりとも忍び潜んだ上、當國永原、佐久間與六郎が許に預けおいた。そちの弟二人を召し連れて、本願寺上人を賴んで、時期の至るを待つてくれい。どうぢや、會得がいつたか。

右衞門佐。思召しの程はよく理解致しましたが、今此の際に父上を見捨てゝ、某一人生き延びようとは存じませぬ。そ

の儀ばかりはお許し下さい。

彈正。七生までの勘當ぢや。わしが最後の賴みを聞き入れず、一生の大願、本望の志に逆ふ上は、悴とも思はぬぞ。そちも父と思ふな。勝手に何處にても腹を切れ。わしと先途を共にする事、堅く無用ぢやぞ。――今此の場を凌いで、父の志を行ふは、わしが死んでも死に切れぬ妄執を霽らす、如何なる善知識にも優る念佛ぢやと思はぬか。わが子ながら、さてさて、愚ものぢや。

右衛門佐。是非がござりませぬ。お言葉に從ひまする。惜しくもない命を、しばらくは長らへませうよ。卑怯者と我ながら思ひまするが、それも致し方がござりませぬ。

彈正。きいてくれるか。有難い有難い。いや、卑怯者ではないぞ。それが眞の勇士ぢや。――して、いつかは機を見て、信長めに父の恨を晴らしてくれい。――逃れ出る方便は、今にも天主に火のかゝる折、その騷の隙に、雜兵に身を變して、敵の目を掠めるがよい。(家臣甲、乙の兩人を顧みて)その方達も、悴の伴をして、共々に逃れ出い。是非に脱け落ちてくれい。いやいや、わしの爲に追腹を切る事、一切無用ぢや。同じく死ぬる命なれば、悴の先途を見屆けてくれい。よいか。――早く仕度をせい。雜兵の衣裝は下にあるぞ。早く致せ。早く致せ。寸時も猶豫はならぬぞ。

家臣甲、乙、默禮して、しぶしぶ右衛門佐を促しながら伴ひ去る。

彈正、三人の段階子を下り行を見送り居たるが、瞑目稍久しうして、しばらく凝然たり。侍女等、依然として泣き崩をれ居る。

彈正。(侍女等に向ひて)おゝ、そち達も此處を逃れ出い。日頃寵愛致したそち達を、一緒に冥途へ伴ひ行かうとも思うて見たが、成程、それも無殘ぢや。まだ若年の者ばかりのそち達ぢや。男と違うて、美しい姿をした女に、敵も刄を

向ける事もあるまい。織田の身内のものに、今宵から可哀がらるゝがよいぞ。一夜でも伽を申附けたそち達を、むざむざ敵の手に渡すも心殘りぢやが、彈正が最後まで女に未練を殘したと云はれるも口惜しい。わしが許す。早う出い。——再び會ふ事もあるまい。ぢやが、彈正ほどの慈悲深い主はまたとあるまいぞ。(笑ふ)

侍女等、これを聞き終るや、些の躊躇もなく、急ぎ下手へ立ち行く。

彈正。待て待て。不埒者め。さてさて情を知らぬ女どもぢや。そち達を助け遣はすを、何と心得居る。せめて最後の名殘を惜しむと思ひの外、只今の様は何ぢや。喜び勇んで、わしに目もくれず一散に駈け出ようとは、言語道斷の沙汰ぢや。(家臣丙、丁を見て)その方達、不心得の女どもを一々首打つて參れ。用捨はならぬぞ。彈正が慈悲を辨へぬ、不埒の女どもを生けおくも詮ない事ぢや。下に連れ參つて、卽座に打ち首に致せ。不屆至極の女めが。

侍女四人。(一齊に手を合はせて)お助け下さりませ。お慈悲でござりまする。お助け下さりませ。

彈正。いや、ならぬならぬ。無用ぢや無用ぢや。早う首を打て打て。

家來丙、丁、用捨なく、泣き叫ぶ侍女等を段階子より突き落とす。二人とも下に下る。

仙可、此の光景に驚き恐れて、片隅に蹲りさるまゝ、頭を抱へて震ひ居る。

一時に鋭き悲鳴聞えて、直に止む。

彈正、再び默然たり。

此の時、鐵砲の音、鬨の聲、一時に止みて、四邊は怪しくも寂然たる事しばしなり。

周防守、乳身、段階子より出づ。

彈正。おゝ、周防か。最早手の盡くしやうもあるまい。

周防。仰せの通りにござりまする。只唯殘念至極にござりまする。寄せ手は天主の間近くまで押して參りました。最早火の廻るにも間がござりませぬ。

彈正。周防。此度の思ひ立ちほど仔細に用意を調へたはないに、かやうに易々と敵の計略に陷つたのが、如何にも思ひ切れぬ恨ぢやぞ。千丈の堤も蟻の穴の喩へ通りぢや。運の盡きと云ふものぢやわ。

周防。是非がござりませぬ。某も迂濶千萬、油斷の罪は、面目次第もござりませぬ。

家臣丙、丁上り來る。

彈正。申し附けた通り處置致したか。

家臣甲、乙。は。

彈正。腰元どもの命を助けおかうと思うたが、我を忘れて飛ぶやうに駈せ行かうとし居つた不埒者ばかりぢやて、不便ながら、殘らず首を打たせたわ。少々は無殘ぢやと思うたが。

周防。(少し顏色を曇らしながら)女子供が泣き喚いては、生害の妨でござりまする。それもようござりませうよ。

此の時、音高く弓鳴して、物見窓より矢文飛び來りて、上手に落つ。

周防守、拾ひ取りて彈正に渡す。

彈正。(矢文を改め見て)佐久間右衛門からの狀ぢや。降參致せと云ふのであろ。(矢文を讀み終りて)佐久間右衛門より使者を遣はすと云ふて參つたのぢや。――わしがわざわざ下まで參るにも及ぶまい。その方、彈正名代として聞いて參れ。降參など申しても、ゆめ承引致すな。

周防、仰せまでもござりませぬ。某兎も角も承つて參りませう。

周防守下手に行く。右衛門佐、家臣甲、乙、雑兵の姿となりて、上り來る。

周防。若殿、如何なされました。

右衛門佐。尋ねてくれるな。惜しからぬ命、助かりたさに、此のやうに雑兵と身を窶したのぢや。

彈正。周防、悴は一と先づ此の場を落ち延びて、本願寺を頼めと、わしが申し附けたのぢや。何もわしの志を繼かしたいからの事ぢや。是非にわしと一緒に腹切らうと申したのを、無理に承引させたわ。悪うはとるまいぞ。

周防。何の何の。殿の御深慮、多年の御計(はかりごと)を恙くお運びの程、願はしう存じまする。周防、却つて大慶に存じ上げまする。

彈正。親子一世の別れぢや。ようく顔を見せい。(右衛門佐の手を執りて)無事に逃れ出るほどを祈り居るぞ。弟どもはまだ至つて幼年ぢや。よく勞つてやれよ。(小さい刀を抜きて、鬢の毛を少しく切りて與ふ)これを悴どもに、父の形見として取らせてくれい。折角養生の上に養生して、長生きしてくれい。くれぐれも信長めに、父の恨を晴らすこと、夢にも忘れまいぞ。

右衛門佐。お言葉肝に銘じて、忘却致しませぬ。――唯此のまゝ、お別れ致すのが、本意なう存じまする。

彈正。未練な事を申すな。もう行け行け。十分氣を配つて、用心の上にも用心して、敵に見露されぬやうにして參れ。(家臣甲、乙に向ひて)そち達も堅固でゐてくれい。悴の後見しかと頼んだぞ。

家臣甲、乙。お名殘惜しう存じまする。

周防。(右衛門佐に)御運の長久を、周防、地下より御守護致しまする。何卒われらの仇をおとり下されい。それが何よりの孝行と思召し下されい。且つは、われらの冥福の爲でござりまするぞ。

衛門佐。忝い。何事も命あればぢや。――ぢやが、わしはどうあつても行きたうはない。父上――。

彈正。未練者め。早う行け行け。さらばぢや。

右衛門佐。是非もござりませぬ。これが最後のお暇でござりまする。（涙を抑へながら下手へ立ち行く。）

周防。（家臣甲、乙に）堅固でゐられい。若殿をお賴み申すぞ。

家臣甲、乙。殿のお申し附けに背かれませぬ。おさらばでござる。（家臣丙、丁に）殿の御先途お見屆けの程、某等に代つてお務め下されい。

家臣丙、丁。念もない事ぢや。おさらばぢや。（一同互に最後を惜しみながら、下に下り行く。）

彈正、瞑目しゐたりしが、やがて、片隅に蹲りて、頭を抱へながら震え戰きゐる仙可を認む。

彈正。仙可、何を致して居る。臆病神に誘はれたか。そちも逃れ出い。苦しうないぞ。兎も角も落ち延びられるだけは、脫け出るがよいぞ。ぢやが、暫時の間待つて居れ。倅の邪魔にならうとも知れぬ

仙可答なく、唯打ち震え居るのみなり。

彈正。弱い奴ぢや。逃れるにしても、命懸けぢやぞ。（笑ふ）

周防守、上り來る。

周防。若殿は敵味方小競合ひの間を拔けて、某問答のうちに、敵方雜兵の中に紛れ入つて、無事に落ち延びられましたと存じまする。

彈正。大儀であつた。彈正、心靜に生害出來よう。今は心に殘る事もない。――して敵の口上はどうぢや。

周防。降參を勸め申すのではござりませぬ。殿御秘藏の平蜘蛛の釜、織田殿かねて御所望と承り居れば、殊に千金に換

へ難い天下の重寶として、殿と御一緒に空しう相成つては、一大事でござる。是非に織田殿見參に入れ申さう爲、未練なく只今お出し下されいと、松永殿へ御披露せられたいとの口上でござります。

彈正。(忽ち憤怒の形相となりて)言語道斷の痴者ぢや。彈正の首だけでは氣に入らぬと申すか。わしが一生の伽にせうと思うて居るあの釜まで、手に入れようするか。横道者め。卑怯至極の計略に掛け居つて、今日まで巧みに巧んだ彈正多年の望みを空にして居つた上に、あの釜まで奪ひ取らうと申すか。無禮者め。佐久間ほどの者が、かくまでに媚び諂ふとは武士の風上にも置けぬ戯け者ぢや。——よし、彈正自身で返答してくれよう。その方も參れ、

周防。直々に御返答は御無用と存じまする。萬一、飛道具をもつて覗ひ打ちに致すやも知れませぬ。

彈正。いや、わし自身で返答してくれる。それがせめてもの腹癒せぢや。

周防。では、物見の窓より佐久間殿へ申入れられては如何でござりませう。敵は本丸櫓の上まで、犇々と詰め寄せて居りますれば、聞き洩らしは致しますまい。

彈正。さうか。せめて滿身の欝忿を些かなりとも洩らさずにはおかぬわ。

彈正物見窓の前に立つ。周防その後に從ふ。

彈正。(聲高く)寄せ手の衆、暫く靜まり居られい。——佐久間殿にもの申さう。彈正自ら返答に參つた。——耳を澄まして、よく聞かれい。——われら所持の平蜘蛛の釜、織田殿御懇望の御取次承り申した。かねて彈正秘藏の二品のうち、つくもかみの茶入は、いつぞや安土にて進上致したさへ、今に心殘りでござるが、今度われら最後の形見として、今一つまで御所望とは、織田殿の強慾、ほとほと呆れ申した。これはわれらの首同然、決して織田殿の見參に入れ申さぬ所存ぢや。織田殿も先年越前朝倉攻めの折、江州淺井殿に後を絶たれて、敦賀退陣の節、うろたへ沙汰を思ひ合は

せられい。その節此の彈正を偏にお賴みあつたは、今に思うても笑止千萬ながら、命の親同樣のわれらに、左樣の非道は申されぬ筈ぢやが、人非人の織田殿旗下の佐久間殿なればこそ、只今の口上ぢやと、彈正生害の前まで笑ひ居つたと、くれぐれとも傳へ下されい。念の爲に申し傳へるが、平蜘蛛の釜はわれら首と一つに、微塵に碎く所存でござる。――いさ、天主に火をお掛け下されい。但し、われらの威勢に怖ぢて、御無用になさるゝか。われら自身に火を掛け申さうか。臆病者の織田殿旗本には、それも無益の問答でござらうな。（大に笑ふ）

忽ち外はどよめき渡り、鼓の音、鬨の聲、一時に起る。

彈正。愈々最後ぢや。生害の仕度せうぞ。

周防。某は寄せ手の中へ踊り入つて、斬り死に致したい所存でござりまする。周防、最後の願ひ、お許し下されい。死に花を咲かせ、冥途への土産に致したうござりまする。

彈正。天晴ぢや。松永が家の子らしい手並みを見せて、織田の腰拔けどもの膽を冷してやるがよい。さらばぢや。

周防。おさらばでござりまする。

周防守、急ぎ下へ下り去る。

彈正、床の間に近づきて、平蜘蛛の釜を入れる箱を取出し、釜を出して、稍少時これを注視す。

此時まで、恰も死人の如かりし仙可、忽然と首を擧げて、舞臺眞中に出で來る。

仙可。殿、その釜を微塵にお割りなされますか。

彈正。わしと一緒に生害させようわ。信長めにむざむざ渡さうと思ひ居るか。――その方は火の掛からぬ中に、早う逃げい。

仙可。殿、仙可、一生のお願ひでござりまする。その釜を無事にお殘し下さりませ。そのやうな天下の重寶を、如何にお恨に任せてとは云へ、微塵になされませうとは、殿の御風流にも似合ひませぬ所業でござりませうぞ。此の事ばかりは思ひ止まつて下さりませ。仙可、命に懸けてもお願ひ申しまする。

彈正。(冷然として)ならぬわ。その方にはわしの心底は會得行くまい。——早く逃れ出い。命は二つないぞ。

仙可。いや、その釜を捨てて行かれませぬ。

彈正、長押より長刀を取おろし、石突にて釜を碎かんとす。仙可、狂氣せる如く、躍り上がつて、身を以て釜を護る。

仙可。お願ひでござりまする。かやうの寶物は、殿御一人のまゝにはなりませぬ。

彈正。默れ。その方の知る事ではない。妨げ致すな。のけのけ。

仙可。どうしても、お止め申さねばなりませぬ。

彈正、仙可の妨ぐるを見て、長刀を以て拂ふ。仙可、長刀を摑みて離さず。彈正、怒りて、仙可の頸を斬る。仙可叫び聲を擧げて斃る。

彈正。うるさい坊主め。(長刀の石突にて、釜を打ち拔き、碎けたるを更に手に取つて、上手柱に向ひて投ぐ。釜は微塵に碎け落つ。)

彈正。(狂せる如く)小氣味よい碎け方ぢや。(空虚なる笑ひ聲を立つ)

天主に火を掛けたりと見えて、此の時烟立ち籠む。

家臣丙、鐵砲を持ちて、段階子より顏を出す。

家臣丙。殿、おさらばでござりまする。某も周防殿の跡に續きまする。

彈正。おゝ、もう參るか。さらばぢや。――そちも斬死に致すか。――うん、最早鐵砲には用があるまい。玉藥の箱を此れに持て參れ。

家臣丙。は。（一旦姿を隱し、忽ち出で來る、玉藥の小箱を持ち來る。）殿御介錯は。

彈正。介錯は頼まぬわ。彈正ほどの者は、獨りで生害せうぞ。死ぬるに相手は入らぬ。

家臣丙。でも、御先途を見屆申したうござりまする。

此時、以前の森傳介、拔刀して、織田勢の一人と、段階子を上り來る。

傳介。彈正殿、見參。

傳介等二人、斬つてかゝる。彈正は長刀にて、家臣丙は刀を拔きて立ち向ふ。丙、織田勢の者を追ひて、段階子を下り去る。

傳介。松永殿の御しるし頂戴致す。

彈正。無禮者め。（傳介を認めて）傳介、そちは裏切り致し居つたな。日頃目に掛けて遣はした恩を忘れて、落城に氣が狂うたか。犬にも劣つた奴ぢや。

傳介。いや、某は筒井入道殿の恩顧の者でござるぞ。三年以前主人の申し附けを受けて、當家に間者として入り込み居つたのを、今の今まで心附かれぬとは、松永殿にも似合はぬ事でござらぬか。

彈正。筒井の坊主の廻し者であつたか。無念ぢや。よくもわしを欺き居つたぞ。最後の作を申し附けたぞ。

傳介。今者の際に申渡さう。今朝本願寺加勢の衆と僞つて、當城へうまうまと這入り込んだ佐久間殿の手勢は、某が手

引したのでござるわ。
彈正。犬侍め。筒井の坊主の家來に欺かれたとは、彈正の運もとくに盡きて居つたか。——無念ぢや。——いざ、最後の件を致せ。
兩人相戰ふ。傳介、斬り立てられて、段階子より、下に轉落す。彈正、上より望み見て、跡を追はず。
四方より火焰吹き始む。
彈正、上手に來りて、後向きとなり、腹を切りながら、火藥の箱を風爐に投ず。轟然たる音とともに、火飛んで、彈正が面を燒く。風爐の上に顏を押し宛つる如くにして倒る。
鬨の聲、鼓の音頻りに聞こゆ。

幕

曾根の死

谷崎精二

一

曾根がどんなに片意地で强情だかと云ふ事を人に說明しなければならない場合には、私は屹度次ぎのエピソードを持出すのだつた。

其れは何でも二人が學校を出て間も無い頃だつた。或る日私は彼と一緒に電車に乘つた。夕方近くつて、電車はかなり込んで居たが、曾根は車室の中央にやつと空席を見出して、其處へ割込んだ。私は彼の前の吊革に凭れて立つて居た。電車は幾つかの停留場に留つては又走り出したが、殆ど降りる人が無くつて、乘る人ばかりで、車內は次第に雜沓して來た。彼の直ぐ前に立つて居た私は後からはいつて來た乘客に押されて、三つ四つ先の吊革へと手を移して行かねばならなかつた。

暫くして私は曾根の直ぐ前に立つた勞働者風の男が何か怒鳴り立てゝ居るのを聞いた。

『かあいさうに、子供を抱いたかみさんが立ん坊をして居らあ。若い者が場席を讓つてやるのが當り前だらうになあ。』

其の男はかなり醉つて居るらしく、赤黒い顏に眼をどんより光らせて、其の眼でぢつと彼の直ぐ前の曾根を見つめて居た。彼は明らかに曾根に對して此の言葉を吐きかけて居るのだつた。

だが曾根は知らん顏をして銀金具の附いたステツキの柄へ薄い二つの手の甲を重ねて居た。彼の眼は其の勞働者の汗ばんだ腹掛の丼(どんぶり)へと注がれたまゝで、彼は其の勞働者の直ぐ後ろに立つて居る、子供を抱いたかみさんに席を讓つてやらうとする樣子が無かつた。曾根の冷かな態度が増々其の勞働者を憤慨せしめたらしかつた。彼は更に怒鳴り聲を拔けた。

『へん、知らん顏をして居やがら。何てづうづうしい奴なんだらう。若い者が女子供に席を讓つてやるのは當り前ぢやないか。俺が云はなくつたつてわかつて居る筈だ。學問があつたつて、人情を知らない奴は人間ぢやねえ。虫けらだ。』

さうした暴言を吐かれても曾根は平然として居た。勿論此の電車の中で腰を掛けて居る若い者は曾根一人ではなかつたけれど、其の勞働者は曾根の直ぐ前に立つて居て、憎々しげな視線をぢつと曾根の顏に注いで居たので、直接其の言葉を投げかけられたのは曾根である事はよくわかつて居た。そして大概の男ならさうしたたちの惡い醉漢などにぐづぐづ云はれたら、おそらく無言で、若しくは何とか罵り返して直ぐ席を立つてしまふのであつたらうが、曾根はぢつと其の席に腰を据ゑて動かなかつた。席を女に讓るのが厭やなのでは決してなくつて、他人から自分の行動を干渉されるのが彼には堪へ難く不快なのだつた。寧ろ默つて其の罵言を聞いて居る方がましなのだつた。否、自分の片意地を貫き了せた事に一種の誇りを感ずるのだつた。

到頭曾根の隣りに居た五十前後の男が見兼ねて立上つて其のかみさんに席を譲つてやつた。勞働者は急に笑顔を造つて其の男にお時儀をした。

『旦那、どうも濟みません。わつしは旦那に云つたんぢやないので。此方の洋服を着た若い男が澄ましてステツキなんかいぢくり廻して腰を掛けて居るのが癪だつたんで、思はず怒鳴つちやつたんです。――どうも濟みません、さあおかみさん、此處が空いたよ、早く掛けなせえ。』

勞働者は振返つてさうかみさんに勸めた。だがかみさんは自分の爲めに車内に小さな騷動が持上つて、乘客たちの視線を浴せかけられた事がかなり迷惑だつたらしく、『いゝえ、よろしいのでございます。私もう此の次で降りますから。』と斷りながら、少し顏を赤くしてこそ〳〵車掌臺の方へ出て行つてしまつた。

勞働者は又不機嫌になつて、再び曾根に當り散らした。

『へん、年寄に席を讓らせて、自分は好い氣になつて腰を掛けて居やがら。何て厚かましい奴だらう。こんな奴が一ばし豪さうな顏して、世の中を渡つて行くんだからいやになつてしまふ。』

私は頻りに曾根に眼配ばせをして席を立つてしまへと云ふ意味を傳へた。だが彼は依然として其の冷かな表情と態度とを續けたまゝ、勞働者の前の席を動かなかつた。勞働者は今にも攫みかゝりさうな敵意を罩めた眼でぢつと曾根を見續けたが、曾根の方で一言も口答へをしないので、さすがに手出しをする事も出來ず、其の中に自分の降りる場處へ着いたので、『馬鹿野郞、今度合つたらひつぱたいてやるぞ。』と怒鳴りながら降りて行つてしまつた。其の時乘客の視線が一斉に曾根の顏へと集中された。だが彼は平然として居た。勞働者の後ろを見送つた彼の眼には敵意でもなければ、侮蔑でもなく、却つて或る誇りが罩められて居た。其れは決して彼の行爲が正しかつたと云ふ自信から生じたものではな

かつた。唯彼の片意地が見事に貫ぬかれたからなのであつた。

實際曾根の片意地には不思議な強靱な力が潜んで居た。理非を問はず、場合を論ぜず、大概な者は其片意地に負けてしまつた。例へば四五人の友達が彼と一緒に散歩に出たとする。そして電車に乘つてから上野へ行かうか、淺草へ行かうかと相談を始めたとする。皆が上野がいゝと主張して曾根一人が不贊成であつても、彼は決して口へ出して強く反對の意を表さない。

『上野かい、さあ、ね……』

と云つたきりで默り込んでしまふ。だが愈々電車が上野へ着いて皆が降りようとして立ち上つても、彼は動かうとしない。結局皆不承不承又腰を落着けて淺草へ行つてしまふ。そんな場合、皆が斷然曾根を見捨てゝ上野で電車を降りてしまへば、其の時は彼が後からついて來る樣な事はないにしても、次ぎの場合から彼の片意地は多少折れるかも知れないのだつたが、四人五人の友達が揃つても、其の根氣と意地で曾根に及ばないのだつた。決して彼に對する友情とか、憐憫からでなく、唯曾根の片意地に屈服された形でいや〳〵彼に從つてしまふのだつた。曾根が寡言である事も、表面の態度が慇懃である事も、却つて彼の本心を底氣味惡い物に思はせた。實際曾根はどんな場合でも決して自ら激したり、人を激させたりする事はなかつた。不機嫌であればあるだけ、意地が強くなればなるだけ、彼の態度は落着いて來るのだつた。だから彼の本當の性質を知らない者は、うつかり彼をおとなしさうな男だと思ひ違へて、手痛い目に合はされる事が屢々あつた。曾根の片意地は彼の全生活の最大の原動力だつた。或る目的、或る主義の爲めの執拗さと云ふ樣な物ではなくして、結果が彼の爲めに不利益である事がみす〳〵わかつて居る場合でも、決して彼は自分の意地を曲げなかつた。意地を貫き通す事が彼に執つて一番確かな、一番生きがひのある生活なのだつた。

二

曾根が妻を迎へる事になつたのは、彼が學校を出てから五六年たつた時分だつた。私と彼は私立大學の經濟科の出身で、彼は或る新聞社に其の頃勤めて居た。

『僕、近い中に家を持たうと思ふんだよ。』

或る日彼は私の處へやつて來てから告げた。

『家を持つゝて……結婚する事かい？』

私は問ひ返した。

『うん。』

彼は例の通り言葉寡なに新聞社の友人の世話で、或る都下の女學校を二三年前に卒業した、山ノ手の商人の娘とかを妻に迎へる事に決めたと云ふ話をした。

『おとなしい、愛情の豊かな人だといゝね。其の愛情で君の片意地を柔かく包んで、溶かしてくれる樣な。』

私がかう云ふと、彼は唯苦笑して居た。

其の後私は二三度彼の下宿を訪れたが、私の外には殆ど親しい友達も無く、今迄勤めから歸ると大概下宿の部屋に引籠つて居た彼が、どうしたのかいつも留守で會へなかつた。女中に聞くと、若い、ハイカラな女が此の頃足繁く曾根を訪ねて來て、二人で散歩に出かけると云ふ話だつた。其れが彼と近い中に結婚する筈の婦人である事は明かだつた。私は彼の女がどんな性質と容貌とを持つた女性であるか、そして曾根が彼の愛人の前でどう振舞つて居るか、今迄友人に

對して示したと同じ樣な片意地と、一種不得要領な冷かさとを依然として持ち堪へて居るかどうか、二人の應對を想像する事にかなりな興味を感じた。

間も無く彼はK區の郊外に近い處に小さな借家を探しあてゝ、其處に新世帶を構へた。始めて彼の家を訪れて、新夫人の種子に紹介された時、私は彼の女が非常に勝氣て、さつくばらんで、惡く云へば稍や放縱らしい性質の所有者である事に驚かされた。何故ならば、其處には曾根の冷靜を攪き亂し、彼の片意地に直ぐ楯を突きさうな可能性が十分に見えたから。そして曾根の氣持から云へば、もつと氣の弱い、しとやかな女性が妻として選ばるべきであつた樣に信じて居たから。

『幡村さん、あなた曾根の一番の親友なんですつてね、そして曾根の片意地を一番突つくのはあなたですつて。』

初對面の日にいきなりそんな事を種子から云はれて、私は少からずびつくりさせられた。勿論いやに儀式張つた、馬鹿丁寧な物の云ひ方をする必要は無いのだつたが、其れにしても彼の女の態度や、表情に、普通の打解けた親密さを示す氣持以外に、何か私をひやりとさせる物があつた。

ビールや果物を出して彼の女は私をもてなしてくれた。曾根はいつもの通り滿足だか、不滿足だか、ちよいと見當のつかない冷靜な樣子を續けて居た。だが平常私たちのちよいとした意見に對しても『さあ、さうかねえ、果してさう云へるかねえ？』と云つた工合に必ず先づ不同意の言葉を挾む癖のある彼が、細君の云ふ事には一々尤らしく『ふん、ふん。』と頷いて居るのを見ると、彼の例の片意地を彼の女に對してだけは抑へて居るらしく思はれた。

やがて細君は手文庫の中から寫眞帖を取出して來て私の前に擴げた。父親らしい人の膝に抱かれて寫した、四五歲頃の愛らしい姿だの、女學生時代のクラスメートと並んで寫したのだの、海水着を着て海岸に立つた、十六七歲で、誰で

も羞恥を感ずる年頃なのに、ひどく澄まし込んだ顏をして、小太りな手足を大膽に露出した姿だの、いろ〳〵な年代と境遇とを思はせる寫眞が順々に私の前へ示された。

『これ、ちよいと好いでせう。』

彼の女はさう云つて、其の中の一枚を私に指した。其れは最近に寫したものらしく、身體の恰好から顏の肉附や表情迄、現在の彼の女そのまゝであつた。そして派手なお召を着て椅子に腰を掛けた彼の女の側には私たちと同年輩位の、背の高い、眼鼻だちの美しい、だが何だか氣持の弱々しさを見せた青年が立つて居た。戀人か、新婚の夫婦かと想像してもいゝ位二人は、或る同じ打解けた氣持を通はせながら、寄り添つて黒い背景(バック)の前に其の姿を寫し取られて居た。

『此の寫眞、私が一番氣に入つて居るのよ。此の男の人を誰だと思つて？』

彼の女は馴々しく私に問ひかけた。

『さあ？』

私は曾根の思はくが測り兼ねて、何とも答へられなかつた。

『此の人私の親類で、高等商業を出た人なの。親類と云つても、他人と云つていゝ位極く遠縁なの。よく寫つて居るでせう――曾根つて云つたら、其れはやきもち燒きで、此の寫眞を見たら顏色を變へてしまつたわ。そして此の人は誰だとか、今何をして居るとか、どう云ふ譯で一緒に寫眞なんか寫したんだとか、其れは根掘り葉掘りくど〳〵聞き續けるんですもの、私いやになつてしまつたわ。若い女が男と寫眞を取つたつてちつとも差支ないぢやありませんか、ねえ。』

『さあ、然し夫が妻に對して愛情が深ければ深いだけ、妻が未婚時代に若い男と寫眞を寫した事があつたら、其れを氣にするのは當然ぢやないでせうか。』

私は再び曾根の顏色を窺ひながら、おづおづ云つた。

『でも寫眞を寫したと云ふだけで顏色を變へて騷ぐなんて、餘り野暮だわ。外に何も怪しい事があつた譯ぢやないのに。』

『さう云つて見ればさうですけれど。然し曾根君の氣持も決して無理ではないと云へますね。』

『どうして？　だつてあなた方だつて今迄女の人と一緒に寫眞を取つた事がなくはないでせう？』

彼の女ののんきな質問が私を驚かせた。

『私たち？　少くとも僕は若い女と二人きりで寫した事などはありませんよ。』

『ぢやあ、あなたはどう？』

種子は夫の顏をぢつと見返つて問ひかけた。

『さあ、それはあつたらうよ。』

曾根は澄して答へた。

『それごらんなさい。誰と？　何處の人と？』

彼の女は嫉妬からではなく、子供が賭けをして勝つた時の樣な得意さから、語調を强めて云つた。

『何處の人と？　何處の人とだつていゝぢやないか。要するにお前と同じ樣に、何の特別の關係も無い、唯親類同志と云つた樣な人とさ。』

曾根は少しどぎまぎして答へたが、單純な種子は其れで氣が濟んだらしく、更に曾根を追窮しようとはしなかつた。

だが私は曾根が身に覺えも無い事を云つて居るのだと云ふ事を直ぐ看破した。東北の或る小さな町で生れた彼は東京

に若い女の親戚などはないし、ほかに女性の友人などが今迄に決して無かつた事を、私は學生時代からの永い交際でよく知つて居た。勿論强いて若い女に近づかうと努めれば機會はいくらでもあつたであらうが、彼はさう云ふ方面ではかなり潔癖で、曾て婦人に關係した惡い噂を聞いた事がなかつた。彼は今私と彼の妻との問答を聞いて、唯何となく私をへこましてやりたい爲めにそんなでたらめを云つたのだつた。いつもの彼の片意地から私の主張に楯を突いて彼が當然不快に思つて居る筈の種子の言葉に却つて味方したのだつた。

『へーえ、君が他處の女と一緒に寫眞を取つたなんて事があつたかねえ。』

さうした言葉が直ぐ私の唇の裏へ突き上つて來た。だが永年親密につきあつて居る友人として、私は彼に對して憤るよりも、寧ろ此の場合憐れみを感じてやらなければならないと思ひ返して、私は其れ以上ひねくれた彼の氣持の底へ突つかゝつて行く事を思ひ留つた。

三

孤獨だつた曾根は結婚してから急に家庭が賑かになつた。畫家、文學者、大學生、雜誌記者、いろ〳〵な人が彼の家に出入した。だが其れは曾根よりも寧ろ種子の友人で、彼の女は何處でどうして近づきになるのだか、多勢の若い男を知つて居た。そして訪ねて來るとビールだの、すしだの、洋食だのを出して愛想好くもてなした。曾根も其の席へ出るには出たが、相變らず不得要領な冷かな態度をしてお客たちに應對した。彼は種子の行動には一切干渉しないばかりか、彼の女にだけは自分の片意地を通さうとしなかつた。そして自分も彼の女の意のまゝになつた。

『今日はお客が四五人來るかも知れませんから、あなたの部屋を貸して下さい。』

さう云はれると彼は素直に自分の書齋を明渡してやつた。

『ちよいと私お湯へ行つて來ますから、留守に誰か來たら上げてお茶を出して下さいな。』

さうした命令にも從つた。

私は彼の態度を少なからず齒痒ゆく思つた。誰に對しても固執する彼の片意地が、細君にだけは全く抑へられて居るのが飽氣無かつた。剛情な、僻の强い彼の心を柔かく包んで溶かしてくれる樣な優しい女性が彼の妻として迎へられる事を祈つて居た私だつたのだが、かうした放縱な、我が儘な一人の婦人の爲めに曾根の氣持がむざ〳〵蹂躙されて行くのを見るのは確かに不快だつた。彼の片意地が消え失せて、其の代りに卑屈な、女性的な氣象がいつのまにか浮び上つて來るのだとしたら、其れは尙惡い事に違ひなかつた。

『今迄若い女に接した事が無いだけ新婚の夢に人一倍醉つて居るのだらう。今に醒つて來る。今に眼が醒めて、其の持前の片意地を細君の前へ曝け出して來るに違ひない。』

矛盾した期待に自ら耻ぢながら私は秘かにかう思ひ續けた。だが幾月たつてもやはり曾根は其のまゝだつた。細君に對しては無條件に素直であり、他人に對しては以前の通り强情で、片意地で、決して胸襟を開いてくれなかつた。

曾根が家を持つてから二年程たつた或る日、私は彼の家を訪れると日曜の午後だつたのに珍らしく誰も來客が無くつて、曾根が一人ぼんやり茶の間の緣近くに坐りながら庭先を眺めて居た。

『珍らしく今日は靜かだね。奥さんは留守かい？』

私は上り込んで彼と向ひ合つた。

『あゝ、三越へ買物に行くと云つて出て行つた。先刻お客があつたのだけれど、種子が居ないんで歸つて行つたつけ。

――どうも來客が多くつて、日曜などに家に居ても何も出來ないよ。』

だが彼は別に困つた樣な顏も見せなかつた。うつかり同情などを寄せると、却つて不機嫌になられる事をよく知つて居たので。私も卒直に彼を慰める譯に行かなかつた。

『何とかしてもう少しお客を制限する法は無いものかね。』やつと私は彼の顏色を窺ひながら云ひ出した。『一體奧さんの交際ぶりが少し派手過ぎる樣ぢやないか。やたらに人を呼んで御馳走するとなつたら際限の無い事だからね。』

『うん。でも家の中の賑かなのも亦好いさ。』

彼は私から憐憫の眼を向けられさうなのがそろ〳〵氣に懸つて來たと見えて、氣輕にさう云つて退けてしまつた。

夏の初めで、庭にはかなり大きな紫陽花が一株植ゑられてあつたが、枝を刈込まないと見えて葉ばかり無造作に繁つて、花はたつた一かたまりだけ其の葉を押し分ける樣にして顏を覗かせて居た。手水鉢には水がからからで、臺石と紫陽花との間には此の家の住人の不精なのにすつかり安心して、蜘蛛がレースの窓掛の樣に幅廣の巢を掛けて獲物を待つて居た。垣根に絡ませた朝顏も蔓が延び放題で、庭一面に何の趣きも見えなかつた。

緣側に足を投げ出しながら、そして二人共其の紫陽花や、から〳〵になつた手水鉢や、蜘蛛の巢の網やらを順々に見廻しながら、ぽつ〳〵話を續けた。曾根は何だか元氣が無かつた。憂鬱な眼つきをして時々私を見返つては何か喋りながら、實は頭の中では私との間の話題とは全然懸け離れた或る事――何か混亂した物思ひに締め括りをつけようとあせつて居る樣だつた。だが其れが何だか私にはわからなかつた。身の一杯詰まつた厚い貝殼の樣に、彼の心はいつもぴつたり閉されて居たから。

夕暮近くなつて細君の種子が歸つて來た。

『唯今。お客樣よ。三越で偶然小霍さんに會つちやつたの。』

彼の女は元氣な聲を立てゝ茶の間へはいつて來た。畫家の小霍が赤ら顔に微笑を浮べながら姿を現した。

小霍は比較的最近種子と知合になつたらしかつたが、忽ち彼の女と親密になつて、家が餘り遠くない關係もあるが足繁く此の家を訪れて來た。無論私も屢々此の家で彼と落合つた。

『K——畫會の展覽會を見に三越へ行つたんですよ。さうしたらエレエータアの處で奥さんに出合つちやつたんで。』

太つた、體格の良い小霍は洋服の上着を脫いで汗を拭きながら、自分の家へ歸つた樣な氣で自墮落に坐敷へ寢そべつた。

種子が晴着を不斷着に着替へ、林檎を皿に盛つて坐敷へ運んだ。

『途中で買つて來たんですの。皆さん召上つて下さい。』

小霍が起直つて早速一つ林檎を取り上げた。後の三人もそれぞれ皮を剝き始めた。

『もう林檎は駄目ですね、僕のは虫が食つて居る。』小霍は食べかけを盆の上へ捨てゝ種子を見返つた。『奥さん、あなたのはうまさうですね。其れを半分下さい。いゝでせう、お客の權利として。』

『まあひどい。折角私おいしさうなのを見つけたのに。——ぢやあ、食べかけの、齒のついた處をあげようかしら。』

『えゝ、それで結構。』

種子は皿の上で自分が食べかけた林檎を二つに切つて、半分小霍に渡した。實際彼の女は齒のついた處を彼に與へたのかも知れなかつた。

『有難う。成程、こつちの方がずつとうまい。』

仲根も私も默つて居た。私が不快を感じた以上に仲根が此の場の光景に氣を悪くしたに違ひなかつたが、彼は依然として冷かな、落着き拂つた態度をして居た。そして小雀も、種子もさうした不謹愼な行動を少しも羞づる樣子がなかつた。

『どうでした、K——誓會の展覧會は？　頭株のY氏S氏などを除いたら大して見る價値は無さゝうですね。』

柔和な、或る親しみさへ籠つた語調で、仲根は小雀に話しかけた。

私が歸り支度をすると、種子は是非晩飯を食べて行つてくれと引留めた。小雀の方はもう其つもりらしく、悠然と腰を落着けて居るので、私も結局御馳走になる事に決めた。近所から取寄せた洋食とビールで一同は晩飯を濟ませた。

『私活動を見に行きたいわ。どうせ半日遊んだんだから、ついでに晩も遊んでしまはなくつちや。』

種子が食後にさう云ひ出した。小雀は直ぐ贊成した。

『あなたどう？　一緒にいらつしやるでせう？』種子は仲根にかう云つた。

『無論ですよ。どうせ暇でせう。さあ、支度なさい、早い方がいゝから。』

小雀がかう口を添へた。だが其の一人決めの口調が仲根の片意地に觸れたらしかつた。彼は身體がだるいから出るのはいやだと云ひ張つた。無論小雀が再々勸めても駄目だつた。

『ぢやあ幡村君、あなたは一緒に行くでせう。』

小雀は今度は私を誘つた。

『行き給へな、君は。』

仲根は皆出て行つて早く一人になる方がいつそいゝらしく、さう云つた。又仲根と二人きりになつて此の家に殘つて

居ても仕様が無いので、とにかく私も一緒に出かける事にした。

『曾根君どうして來なかつたのだらう、僕たちが機嫌を惡くしたのかな?』

外へ出ると小窪が多少氣懸りらしく云つた。

『何でもないのよ。あの人氣難かしやだから人に勸められると却つて反抗するのよ。今時分一人ぼつちで淋しくなつて、一緒に行けばよかつたつけと後悔して居るでせう。』

種子が事もなげに答へた。

『さう、人の事を氣にしたつてつまりませんね。僕たちは見に行きたければ遠慮無くどん／＼行つた方がいゝんだ。』

『えゝ、私も其の主義よ。』

私は默つて二人の問答を聞いて居た。實際種子の云ふ通り、今時分曾根は家に一人取殘されて、病人が自分の患部を憎み、そして劬る樣に彼の其のどうにもならない片意地を悲しい氣持でぢつと愛撫して居るかも知れなかつた。複雜な、奇異な性質を持つて生れた、此の古い友達の身の上を私は今更に深くいとほしんだ。

『でも彼の妻として、種子は何故もつと曾根の氣質を察してやらないのだらう? 砂地に水が浸み込む樣に、彼の其の片意地を柔かく潤ほしてやるだけの愛情を持たないのだらう?』

曾根の片意地が種子に向けられない事に不正な失望を感じて居る私ではあつたが、種子が曾根の片意地のぶつかつて行く範圍外に立つた唯一の者であるだけ、私は曾根の親しい友人として彼の女に強い不滿を感じないでは居られなかつた。

賑かな電車通りへ出ると、活動寫眞館は直きだつた。其處でもう一度勸められて、曾根程片意地でない私は結局餘り

氣が進まないながらも、彼等と一緒に中へはいる事になつた。二階の正面の家族席と云ふ處へ三人は導かれた。

輕い滑稽劇(ファース)、人情物、それから連續冒險活劇と云つた樣な、極りきつた番組だつた。並んで腰を掛けた種子と小窪は、かなり充實した興味を持つて映畫を眺めて居るらしく、時々小窪が小聲で種子に字幕(サブタイトル)の說明をしてやつたりして居た。私は一人さつぱり興味が乘らなかつた。家に取り殘された曾根の事が、遠くへ旅立つた人であるかの樣に妙に悲しく思ひ出された。片意地であつても、强情で僻みやであつても、やつぱり彼の方が、今私が並んで坐つて居る此の二人よりずつと懷しかつた。

ふと私は二人の樣子を見返つた。そして思はず『あつ。』と叫び出しさうになつた程驚いた。種子の長い袖の下で彼の女の手と小窪の手が握り締められてあつた事を見出したからであつた。

『いや、何でもないかも知れない。ほんの一時の戲れかも知れない。結婚した人々には獨身者にわからない、變に複雜な、蠱惑的な氣分が起つて來るものかも知れない。直ぐ次ぎの瞬間に彼等は無造作に其の手を解き放して、私の過敏な神經を嘲笑ふかも知れない。』

私は强ひてさう思ひ直して、自分の驚愕と憂鬱とを拂ひ退けようとした。

映畫の面白さに夢中なのか、それとも彼等の其の、袖に蔽はれた秘密な握手に我れを忘れたのか、二人は私の視線が其處に注がれて居る事をいつ迄も氣づかなかつた。

四

それから二月ばかりたつた。私は其の間に二度程曾根の家を訪れた。一度は曾根一人で、種子は小窪に誘はれて何處

やらの展覽會へ行つた留守だつた。一度は種子も在宅で、相變らず三四人の客が來て居た。無遠慮な、度を越えた快活を示さうとして居る小窪も其の中に居た。そして無論例の冷かな、默りがちの、曾根の顏も見られた。
其の二度目に彼を訪れた歸りに、私は電車の中で昔の學校友達の皆田に會つた。
『暫くだつたね。何處へ行つたの?』
後から乘込んで來た皆田は私の前の吊革にぶら下つてから云つた。
『曾根の家へ行つた歸りなんだよ。君は曾根にはちつとも會はない?』
私は問ひ返へした。
『あゝ、暫く會はないよ。君は彼とは相變らず親しいらしいね。――細君家に居たかね?』
皆田はちよいと皮肉な微笑を浮べた。そして私が頷くのを待つて更に言葉を續けた。『曾根の細君に就て變な噂があるんだが、君は知つて居るかい?』
丁度私の隣りに居た乘客が立ち上つて車掌臺の方へ出て行つたので、皆田は直ぐ其の後に腰を下して、最近彼の耳にはいつた其の變な噂を私に傳へた。
其れは曾根の細君と、あの小窪との間に忌ましい關係があると云ふ事だつた。二人が場末の小待合へこつそりはいり込んだのを見屆けた者があると云ふので、其の他に種子は女學生時代から品行が惡くつて、其爲めに學校から退學處分を受けたと云ふ話も確からしかつた。
『君はどう思ふね。僕は曾根はそんなに馬鹿な男ぢやないから、二人の關係に氣がつかない筈はないと思ふよ。だが知つて居て知らん顏をして居るのだとすると、曾根は餘り意氣地が無いぢやないか。俺は曾根と云ふ男は明情で僻みやな

ので、餘り好きではないが、かう云ふ噂を聞くと彼の爲めに氣の毒で默つて居られなくなるね。實際細君にしても、小笹と云ふ男にしても、宥し難い奴だ。俺だつたら身命を賭して彼等に痛烈なる制裁を與へてやるがな。』

學生時代から武張つた事が好きで、單純な正義派である皆川はさう云つて大きな、赤ら顏に貼りつけた樣な太い眉をぴくぴく動かしながら、ステッキの柄を兩手で握りしめた。

『やつぱり俺の推測が間違つて居なかつたか？』

私はさう思つて深い憂欝に沈んだ。

だが曾根は果して二人の關係を知つて居るだらうか？　私はさう思ひたくなかつた。あの片意地な曾根が如何に家庭生活で細君に壓倒され、翻弄されて居るにしても、彼の女と小笹との醜關を實際耳にして居たなら、其れを澄まして傍觀して居る筈はあり得ない。怪しみながら、疑惑に苦しめられながら、種子を愛して居る彼はやはり何處迄も彼の女を信じようとして居るのだらう。そして彼の性分として誰にもさうした胸の中の苦しみを打開け得ないだけ、彼の立場は一層暗い、みじめな物であらねばならない。

私は彼に會つて、其れとなく注意を與へてやらなければならないと思つた。そして一週間程たつてから、或る晩又曾根の家を訪れた。

種子は下痢をしたと云つて奥座敷で寢て居た。火鉢の火が消えちやつたので、曾根は臺所で火をおこして、湯を沸したり、茶を入れたりした。

『奥さん、餘程惡いの？』

『いゝや、ちよいとした腹下しなんだ。もうよくなつたんだがね、二日ばかり碌に何も食はなかつたものだから、今日

は朝からやたらに何か食べたかつて困るんだ。おかげで二日社を休んで看病さ。』

『ちよいと、あなた。』

奥で種子が呼んだので、曾根は直ぐ立つて行つたが、やがて鷄卵を二つ持つて來て長火鉢に掛つた鐵瓶の中へ放り込んだ。

『半熟の玉子が食べたいと云ふんだが、何分位煮ればいゝのだらう?』

曾根は私にかう問うた。

『さあ、よく知らないが、湯が沸いて居れば四五分でいゝんぢやないかね。』

曾根は時計を見上げて、それから湯氣の立つ鐵瓶の中をちよつと覗き込んで居た。病妻の爲めに玉子を適度に熟させる事にすつかり氣を取られて、私が話かけても碌に返事もしなかつた。

此の場の光景が私が彼に細君の品行に關して辛い注意を與へるには甚だ不適當な事を私は悟つた。

『散歩にでも連れ出して、歩きながら靜かに話すとしよう。』

私はさう決心した。

やがて彼は箸で鐵瓶の中の鷄卵を挾み上げ、小皿に燒鹽を添へて奥坐敷へ運んで行つた。

『少し散歩しないかね?』

私はかう彼を誘つた。

『出てもいゝね。二日ばかり家に閉ぢ籠つて居たので、少し歩きたいと思つて居たんだ。』

曾根は立ち上つて帶を締め直し、又種子の寢床の方へ行つて戻つて來た。

夏から秋へと時候の移り變る季節で、夜になると家の中に居てもめつきり涼しかつた。もう唯涼みがてらにぶら〳〵歩く必要も無かつたが、それでも夜の街はなか〳〵人通りが賑かだつた。

『果物を買つて來てくれつて賴まれたんだが、まあ歸りでいゝだらう。』

或る水菓子屋の前でちよいと足を留めて、さう云ひながら曾根は又歩き出した。

成るたけあたりが物靜かな、そして二人にしんみりした氣持を感じさせる處へ！　さう思つて私は暗い町外れの方へと彼を導いた。大きな邸宅だの、破れた塀の間から荒廢した墓場が覗き出て居る寺だのが續いて、街の火影は次第に疎らになつて行つた。空はもう夏の間のぼや〳〵した不透明な色をすつかり秋の氣に淸められて、小さな、一つ〳〵の星の形をはつきりと浮き出させて居た。二人は默りがちに歩いた。冷かな夜風が私たちの眼を潤ませた。もう秋が來たと感ずる氣持が、自然の移り變りを素直に受容れようとする氣持が、もう其れだけで私には感傷的だつた。

『本當に此の男とかうして二人きりで歩くのも幾年ぶりの事だらう！』

私はさう思つて曾根を見返つた。無言ではあつたが、いつもの通り冷靜な表情を浮べては居たが、彼もやつぱり幾らか私が今心に感じて居る其の同じ氣持を味はつて居る樣に思はれた。

山の手線の電車線路の上に架けられた橋を渡つて、私は線路を見下した崖の上に腰を下した。

『少し休んで引返すかね。』

曾根は私が彼を此處迄連れ出したのが單なる散歩以外に何等かの目的がある事を少しも豫想して居ないらしく、無造作にさう云つて私の側に蹲(しやが)んだ

私はぼんやり空を見上げ、それから又崖下を見下した。ところ〴〵錆び、ところ〳〵光つた四條のレールが人の眼を

波ふ様に長く、長く、延びて居た。私はふと旅と云ふ事を考へ始めた。何處か遠くの小さな町で、いつだつたかやはり秋の夜にかうして崖の上に立つて鐵道線路をぢつと見下した事があつた様に思はれて來た。夜露に濡れた足許の雜草や、枕木にレールを留めた鐵釘の扁平な頭迄、何故か私に或る靜かな、回顧的な氣持を起させた。

『いや、然し今はぼんやり自分だけの回想に耽つて居る場合ではない。』

私はさう思ひついて、突然曾根を見返つた。彼も眼をぼんやり空間に放つて居た。だが其の眼は妙に燻ぶつて、陰欝で、若し彼の現在の氣持が私と同じ様に回顧的になつて居たとしても、彼の回想の對象はずつと新しく、生々しい物らしかつた。私は或る壓迫を感じた。だが思ひきつて口を切つた。わざと彼の方を向かないで。

『あの、小窪と云ふ男をだね――君はどう思ふ?』

『どうつて? 要するにあれだけの男だらう。畫家としての彼の將來がどうだらうと云ふのかい?』

曾根はもう私に對して反抗的な氣持を感じ出した樣に素氣無い態度で問ひ返した。

『いや、そんな事ぢやない。あの男の性質さ。――友人として信頼するに足ると思ふかどうかと云ふ事さ。』

『それは友人と云ふ言葉の內容如何に依るだらうぢやないか。生死を共にし大事業を成さうと云ふ場合の友人もあるし、さうでなく、ほんの輕い意味で、まあお互に家が近いから退屈凌ぎにつきあはうと云ふ場合の友人もあるし……』

『無論其の後の方の場合だよ、普通の、ありふれた友人としてさ。』

曾根の語調の皮肉なのが少し私を昂奮させた。だが私は却つて其の昂奮に藉りて云ひたい事が云へる氣がして來た。

『普通の友人としてなら、あれでいゝたらうぢやないか。場合に依れば人間は犬や猫を、いや、無生物をさへも友達と

する事があるからね。』

『それはさうだ。だが無生物は人の好意を裏切らないからね、ところが人間と云ふ奴は………』

『ぢやあ君は小雀が僕を裏切る様な行動をしたと云ふのかね。だが僕は始めからあの男に裏切られて憤慨する程の好意も期待も抱いて居ないよ。向ふだつてさうだらう。あの男は僕よりも寧ろ種子の友達としてやつて來るのだからね。』

私の一語一語を手強く反撥する様な意氣込みで彼は答へた。彼がさうした持前の片意地を發揮しかゝつたら、もうどうも策の施し様が無いのだつた。だがさうかと云つて、今更私は云ひかけた事を引込ます譯には行かなかつた。

『それがだね。一體細君を平氣であんな男に近づけて置くと云ふ事が良くないんぢやないかね。』私は友人の義務として、今云はうとして居る事が全く正しくあり、彼に感謝されてもいゝ筈であるのを堅く信じながらも、曾根の鋭い語調に壓倒されてだん／＼おづ／＼した調子になつた。『誤解してくれちやあ困るよ。僕は最近變な噂を耳にしたので、古くからの友人として好意上君に注意するんだから。』

『はゝあ、すると君は、つまり何だね――種子と小雀との間に何か醜關係でもあると云ふんだね。そして古い友人の義務として――義務だか、特權だかわからないが――其れを世間へ吹聴する前に、先づ僕に通告して置かうと云ふんだね。』

刺す様な棘々しい言葉が――其處には反對に私を苦しめて得意がつて居る惡意が確かに籠つて居た――私にはもう我慢がならなかつた。

『何を云ふんだ、君は？』私はかつと激しく怒鳴つた。『君の片意地はよく知つて居るが、そんな風な物の云ひ方は餘り無禮ぢやないか。――僕の眞意がわからないんぢやない、わかつて居てわざとそんな皮肉な事を云ふのが、僕にはたま

らなく不快なんだ。僕が世間へ君の家庭の醜聞を吹聴しさうな男だつたら、君はそんな高飛車な云ひ方は出來ないだらう。僕が世間へ喋りさうもないのを知つて、安心してわざとそんな亂暴な事を云ふんだらう。何故もつと素直な氣持になつてくれないのだ？　口で云はなくつても心でだけは、僕の眞意を受けてくれないんだ？」

實際彼が若し素直に『さうだつたね、濟まない。』とか、『有難う、わかつたよ。』とか云つてくれたら、私は彼の手を握つて、わつと泣き出したい程異常に昂奮した感情に心を任せて居たのだつた。だが彼はやつぱり默したまゝだつた。其れは靜かな反省で心の底から私の要求する素直さを取戻さう爲の沈默ではなく、秘かに反抗と皮肉との武器を磨いて居る樣な憎々しい沈默だつた。

私は此の上の努力の無用である事を悟つたので、彼を見捨てゝ立ち上つた。

五

暫く私は曾根に會はなかつた。

片意地な男だけに表面では私の忠告の言葉を手痛く擊退して得意がつては居たものゝ、心の中ではおそらく彼がかなり狼狽したに違ひない事は明かだ、私はさう思つた。出來るならばあんな放縱な、粗野な細君は斷然離別してしまふがいゝ、だが曾根の種子に對する愛着が強くつて其れが出來ないとしても、少くとも彼の女は曾根から嚴しい訓誡を受け、小窪の妻は全然遠ざけられ、彼の家庭は屹度今迄よりはもつときちんとした、節度と禮讓との備はつたものになるに違ひない。一時は憎んでみても結局曾根は私の好意に感謝するだらう。其れだけで私は滿足だと思つた。

だがある晩、私は神田の古本屋をひやかして居ると、偶然あの皆川に會つた。久しぶりだつたので神保町のカフエー

へはいつて話合つて居る内に、意外な事を彼から聞いた。其れは小窪が相變らず盛に曾根の家へ出入して、此の頃はモデルになつて繪を描いて貰ふ爲めに種子が毎日小窪の畫室へ通つて居ると云ふ事だつた。

『曾根の奴、全く見下げ果てた男だね。無論細君と小窪との關係を知らない筈はないよ。知つて居て、彼等に制裁を與へる事が出來ずに居るんだ。』

許田は相變らずいまいましげにかう云つた。

「ところで君は近頃彼の家へ行かない様だね。「許田は私の顏をぢつと見た。「君は何か曾根夫妻に恨みを買つて居やしないかね？」

『さあ、別に恨みを買つた覺えはないが、どうかしたのかね？』

私は訝しげに問ひ返した。

「實はね、變な噂があるんだよ。無論僕は信じやしないが――」

『何だね、どう云ふ變な噂だね。』

私は漠然とした不快な豫感を受けながら更に追窮した。

『つまり、君がだね、曾根の細君に愛を求めたとか、求めようとして居るとか云ふんだ、』

『馬鹿な！　あんな女は大嫌ひだよ。一體誰がそんな失敬な事を云ひ出したんだ？』

實際餘りに意外な噂なので、私は最初憤りよりも寧ろ愚かしさを感じた程だつた。

「其れがねえ、どうも曾根が云ひ出したらしいんだよ。君を知つて居る僕等は無論そんな噂は信じやしないが、曾根がそんな事を云ひふらすのもをかしいぢやないか。だが彼奴の事だから何か君に恨みを抱いて居て、腹癒せをするつもり

なのかも知れないし、或ひは小孫と細君との噂が次第に擴まるのを氣にして、我々の注意を外らす爲めにそんな事を云ひふらしたのかも知れないと思ふよ。』

皆田はさうした解釋を下した。

さうだ、おそらく其の二つの理由の爲めに曾根はそんな無根の噂を自分で擴めて歩いたのかも知れない。だが其れにしても何と云ふ惡辣な復讐だらう！　私の好意的な忠告に對する何と云ふ念の入つた應報だらう！

他人の同情とか、注意とか云ふ物が大嫌ひで、いつ、誰に對しても弱みを見せまいと努めて居る倨傲な彼に執つて、先夜の私の忠告はかなりの打擊であり、有し難い僭越であり得たかも知れない。だが私の眞意がわからない程愚昧な彼では決してない筈であつた。あの時こそ反對に私をやり込めようとして皮肉な言辭を弄したにしても、後でもつとよく反省して私の好意を受容れてくれるのが當然であるのに、これは又何とした友情の蹂躙であるだらう！誠意に對する侮辱であるだらう！

『餘りひどい、人を愚弄しきつて居る。』

私はすつかり激昂しきつた。そしてカフエーを出て皆田に別れ、電車に飛び乘つた。もう九時近かつたが、直ぐ曾根の家へ行つて彼に會ひ、夫妻が家に居たら曾根の前で種子を、種子の前で曾根を思ふさま痛罵して、汚辱と野卑と淫慾とに充された彼等の家庭を呪つてやらずに居られない氣になつた。

『何と云ふ片意地な、誠實を持たない心だらう。馬鹿でもなく、無教育でもなく、しかも結局人間の本道から一番遠ざかつた道を得意顏をして歩いて行く奴だ。』

私は電車の中で口惜しさに唇をぶる〳〵顫はせながらかう思ひ續けた。

K町の停留場で電車を降り、稍や上り坂になつた暗い横町を私は曾根の家の方へと歩いて行つた。急いで行かないと曾根が何處かへ逃げてしまふ樣な氣がして、私の足は次第に早まつた。

『さうだ、皆田を一緒に連れて來ればよかつたつけ。曾根を捉へて詰問しても、案外彼奴の事だから澄まして空嘯いて居るかも知れない。そんな事を云つた覺えがないと云はれたら、又此の前みたいに、反對に向ふから皮肉を浴びせかけられたら、どうしたらいゝだらう？』

ふと私はさう氣がついた。私の激しい憤りを彼の前にぶちまける前に、先づ彼のいつもの冷かな飜弄を受けない用意が必要になつて來た。急に私の心は挫けかゝつた。

あたりの家が皆ひつそりとして居る中で、曾根の家だけはまだ戸も締めず、賑かな話聲が往來へ洩れて來た。

『誰か客が來て居るな。』

さう思つて私は往來から彼の家の庭を限つた、荊棘の垣根にそつと近づき、明るい電燈の光に照された茶の間を覗き込んだ。

緣側の近くに食卓が持ち出されて、曾根夫妻と小窪が其の周りに坐り込んで居た。ビールと洋食の皿が食卓の上にあつた。小窪が曾根のコツプへビールをついでやつた。今度は曾根がビール瓶を取り上げて小窪に酌をした。急に何がをかしいのか、稚子がはしやぎ立つた聲で笑ひ出した。小窪も聲を合せた。そして曾根も私たちの前で見せた事のない樣な氣輕な笑顏を見せる事を惜しまなかつた。三人の影は和やかに搖れて緣側の上に落ちた。何の蟠りもない、打解けた、幸福さうな團欒だつた。

垣根にそつと身を寄せて、其の樣子をぢつと見て居る中に、私の眼には熱い涙が浮んで來た。だが其れは美しい者の

爲めに流す純な涙ではなくつて、人の弱點の爲めに濺ぐ憐憫の涙であつた。曾根にはあゝして居る事が確かに愉快なのだ。彼に好意や同情を示す者を冷笑し、彼を裏切る者には反對に寛大なのだ。何と云ふ、異常な超人間的の片意地だらう？ 其の虛無の樣に巨大な、不氣味な片意地の前に、私の正しい憤りも餘りに無力である事を感じて、暗い感情に惱まされながら、私はすご／＼其の場から引き返した。

六

一年餘も曾根に會はなかつた。年賀狀の取りやりをした以外、私と彼とは文通もしなかつた。唯時折り第三者から曾根が益々細君の尻に敷かれて、而も平然として居る事や、小澤が相變らず足繁く曾根の家に出入して、種子と彼との間柄は他人から見ても眼に餘る程になつて來た事などを聞かされた。私はもう一生涯曾根の顏を見たくないとさへ思つた。だが彼に對する深い憎惡の裡にはやはり秘かな憐憫の情が根を張つて居た事を認めないでは居られなかつた。時々私は自分自身に憚る樣にそつと彼の事を思ひ耽つた。古い友達同志の關係は肉親の其れの樣に複雜であり、憎しみの後ろに直ぐ懷しさが、嫌惡の中に忽ち同情が、湧き上るものであつたから。

『曾根肺炎にて危篤の狀態にあり、至急見舞に行かれては如何？』

菅田からさう云ふ意味の速達の葉書を私が受取つたのは、其の一年目の冬の半ばだつた。菅田にも暫く會はず、思ひがけない通知だつたので、私は少なからず驚かされた。

『死ぬだらうか？ 其れとも運好く助かるだらうか？』

曾根の家へ見舞に行く途中、電車の中で私は今更に曾根の過去の生活を思ひ浮べてみた。今死ぬとしたら彼の一生は

本當の男らしい力と歡びとに置去りにされた、如何にもみじめな物に思はれて來た。だが次の瞬間、其のみじめさは彼の經て來た生活よりも寧ろ彼の生來の性格にあつた事が氣づかれた。彼にはあれより外に生きて行く途が無かつたのかも知れない。彼の片意地が、彼の僻みの强さが、甘んじて彼に正直な、平和な萬人の生活を見捨てさせたのだ。彼は其の異常な片意地の重荷を背負はされて生れて來た。今後幾年生き延びても、結局彼は元のまゝの彼であるに違ひない。彼の性格が必然的に招くもつと多くの苦しみが、難境が前途に控へて居るだけで、何の救ひも、和らぎも、遂に惠まれないかも知れない………

『もしどうしても助からないとしたら、せめて彼の死ぬ前に二人で手を握つて、すつかり和解をして置きたい。』

私はさう思つた。どんな深い憎しみを抱いた仇敵同志でも、死の前には快よく和解するに吝かであるべきではない。まして私と彼との間には其れ程越え難い罅隙があるのではなかつたのだ。彼の片意地は夙くから私によくわかつて居る筈なのだ。

曾根の家の格子口で、私は小雀に會つた。

『やあ、暫く。お見舞ですか。どうも曾根君の經過が良くない様で心配して居ます。』

彼は鍔の廣い、天鵞絨の帽子を取つて長い髮を掻き撫でながらかう云つた。『ぢやあ失敬。ちよいと用があるので、家へ歸つて又後で出直して來るつもりです。』

私は冷かに頭を下げて彼と別れた。

曾根は奥座敷で厚い蒲團に括まれて昏々と睡つて居た。看護婦が一人枕許に附きゝりで、さすがに種子も打ち凋れた、心配さうな顏をして居た。

『本當に困つてしまひました。痩我慢の強い人でしてね、熱があつてもなか〳〵醫者に見て貰はうと云はないんですよ。だもんですから少し手遲れになつてしまつて病院へ入れようと思つても、もう今動かしてはいけないさうで。』

彼の女は小聲で私に曾根の病氣の經過を說明した。

『熱は餘程あるんですか？』

『えゝ。夕方には四十度ありましたの。心臟が弱いものですから、急に熱が下る時に危險だと云ふんですよ。先刻お醫者が來まして、萬一の用意に親類や何かに知らせて置く方がいゝだらうと云つて行きましたから、もう殆んど見込みが無いんでせうよ。』

私はせめて一言曾根に言葉を掛けたいと思つて、彼の眼が醒める迄枕許で待つ事にした。重患の爲めか、一年ぶりで見る曾根の顏はひどく窶れ果て、生氣が無かつた。艶の脫けた髮が蒼白い額を隈取り、肉が落ちた、痛々しい頰の兩側には、小さな耳が枯葉の樣に凋れてぴつたり縋り着いて居た。熟睡出來ないのか、いや、睡りと云ふよりも、其れは不氣味な、だがどう反抗しようもない死への移動であつたのか、病人は時々微かに唇を顫はせて苦悶の表情を口元に浮べかゝる樣に見えた。だが彼はなか〳〵眼を開かなかつた。私も種子も、看護婦も、曾根の生き餘した僅かな時を小刻みに刻んで行く時計のセコンドの音に無言で耳を澄まして居た。中の氷が溶けて、氷嚢の恰好が微かに崩れる音さへ聞える程の靜寂が室內に充ちて居た。

小一時間もたつてからやつと曾根は眼をぱつちり開いた。

『お氣分はどうでございます？　何か召上りますか？』

看護婦は病人の枕許へ身を屈めてから囁いた。曾根は物憂氣に首を振つた。

『曾根君！』

私は中腰になつて彼の顔を覗き込んだ。曾根は大きな、だが光の鈍つた眼でぢつと私を見返した。

『僕だよ、幡村だよ、御無沙汰して濟まなかつた。氣分はどうだね。氣を強く持つて養生し給へ。』

曾根は明かに私を識別し、私の言葉を了解したと思はれたのに、何とも云はなかつた。冷かな表情をしたまゝ、ほんの義務の様に一つ頷いてみせただけだつた。

『小窪君は？』

彼は細君を見上げて問うた。

『小窪さんは用があるからつてちよいと家へ歸りましたわ。でも又直き見舞に來て下さるつて。』

種子の答へを聞いて、曾根は満足した様に眼を閉ぢた。一年ぶりで訪ねて來た、古い友達の私よりも、彼の妻の愛情を奪ふた小窪の方が彼にはずつと懐しいらしかつた。

ひどく感傷的になりかゝつた私の心は、忽ち冷たく凝固してしまつた。普通人に素直に受容せらるべきあらゆる物を曾根は悉く拒否するのだつた。同情や、親しみは傷に鹽を塗る様に彼の片意地を苛立たせた。私が望んだ最後の和解は、彼の其の片意地が死よりも厭な物であつたに違ひない。

七

翌日の夜半に曾根は息を引取つた。

朝になつて知らせを受けた私は皆田と一緒に曾根の家へ弔問に行つた。病床は綺麗に片づけられ、北向きに置き替へ

られた曾根の遺骸が逆さ屛風の陰に靜かに横たはつて居た。

私は進み寄つて死骸の顏に掛けられた白布をそつと取り除けてみた。あの倨傲な、冷澄な眼はもう長へに閉ぢられて居たが、堅く結ばれた口元や、嚴とした樣に平らになつた、廣い額に、まだ昨日の曾根の顏の特徴であつた一徹と片意地とが潜んで居る樣に思はれた。だが凡ては間も無く灰に化してしまふのだ。彼の其の一徹と片意地とに惱まされた私たちも、やがて其の苦い記憶を、死者に對する悲しい、物柔らかな情緒で次第に蔽ひ盡すであらう。此の世を去つた彼に、もう其れだけは拒み得まい…………私は眼を閉ぢて、愼ましやかに曾根の遺骸の前で默禱した。

種子は次の間で故人の生前親しかつた人々を相手に葬式の相談をして居た。私と皆川も其の席へ加はつた。

『實は息を引取る少し前に曾根が遺言をしましてね、――小窪君は一番世話になつて有難く思つて居る、どうか面倒でも葬式や其他の死後の處置は一切小窪君に指揮をして頂きたいつて申したんですの。』

種子は私だちの顏を見ながらかう云つた。

『いや、どう云ふ譯だか、曾根君には妙に信頼されましてね。僕は比較的近頃知合になつたので、他のもつと古くから親しくして居られる方に奥さんの相談相手になつて頂いたならよからうと思ふのですが、たつてと云ふ事なので、及ばずながらお手傳ひするつもりです。』

居合せた小窪は少し擽ぐつたさうな笑ひを浮べながら言葉を挾んだ。

『でも小窪さんは其れは曾根には親切にして下すつたわ。毎日々々見舞に來て下すつたし――』

種子のさう云つた言葉を聞いて、皆川と私は顏を見合せた。種子と小窪との、何の疚しさも感じないらしい、餘りに平然とした態度が私には特に堪へ難く不快だつた。そして一切の事情を知りながら、小窪を最も信賴して、彼に死後の

處置一切を托する旨を遺言した曾根の片意地さは、更に其れ以上私の心を暗くした。人々の持つ正義の感情に對して其れは餘りに甚だしい侮辱であつた。餘りに傷ましい嘲笑であつた。彼を欺き、彼を裏切り、其の瀕死の病床に侍しながらも、おそらく互に汚れた慾望の眼と眼を見交したであらう此の二人に彼は、感謝と信頼の言葉を殘して息を引取つたのだ。彼等の改悛を促し、彼等の罪を潔く宥して、死んで行つたのでは決してなく、唯素直である事、正直である事が嫌ひな故に、彼は二人の其の同じ不正直と、權謀とに親しみを寄せたのだ。そして其の爲めに自らの夫としての正しい憤りをも犧牲にして顧みなかつたのだ。彼の胸の中の苦悶を知る者が一人も無くとも彼の片意地が貫き通された事が人々に知れ亘つたなら、其れで彼は滿足して瞑目するつもりなのだ。何と云ふ執拗な、根の深い、致命的な片意地であらう！

私は熱した、憎惡の籠つた眼で種子と、小澤を見返つた。そして曾根の複雜した、異常な性格に比べれば、此の二人は極くありふれた、淺薄な凡人に過ぎない事を思つた

M町の小さな寺で曾根の葬式が營まれた。曾根の兩親はもう數年前に世を去つて、郷里には實兄が居たが、病氣で來られないとかで、從兄が代りに上京した。親族席には白羽二重の喪服を着た種子と、其從兄と、其れから二三人の種子の親戚らしい人が居並んだ。一般の會葬者は四五十人ばかりだつた。

小澤は葬儀委員長と云ふ格であちこち忙しさうに馳け廻つて居た。

『何と云ふ圖太い奴だらう。俺は彼奴を捉へて思ふ樣毆りつけたくなつた。曾根の代りに彼奴に嚴重な制裁を加へてやりたいんだ。』

皆田がいま〳〵しげにかう呟いた。

式の始まる前に小窪が私たちの側へやつて來た。

『實は其の、友人を代表して靈前で弔詞を讀まうと思ふんですが。』

『君がですか？』

皆田が冷かに問ひ返した。

『え〻。——いや、僕が友人を代表するのは如何にも僭越なんですが、種子さんがとにかく誰かに弔詞を讀んで貰へないかと云はれるので——どなたか、古いお友達の中で讀んで下さる方はありますまいか？』

さすがにおづ〳〵しながら小窪は私たちの顏を見廻した。

『ない事はないでせうが、今此の場になつてそんな事を賴んだつて間に合ひませんよ。』

『い〻え、其の、文案は出來て居りますので。私が持つて來たのを其ま〻讀んで下されば い〻んです。』

『そんな事は眞平だ。僕等が弔詞を讀むのなら無論自分で作ります。君の故人に對する關係と、僕等の關係とは違ふかも知れませんからね。僕等は君程曾根君から信賴を受けなかつた樣だから。』

皆田は今にも小窪に攫みかゝるかと氣遣はれた程、苛立たしい憎惡に充ちた態度を見せつけて答へた。

『其れぢやあ止むを得ません。私が讀む事にしますから。』

小窪は皆田の見幕に恐れをなした樣にこそ〳〵引下つてしまつた。

鐘が鳴つて式が始まつた。長い讀經が濟むと、曾根の勤めて居た新聞社の經濟部長が先づ立つて簡單な弔詞を讀んだ。其の後で小窪が柩の前へ靜かに進み出た。

小窪と種子との關係を知つて居る會葬者たちは、憎惡と好奇の眼を見張つて彼の樣子を眺めた。お通夜や何やかで疲勞したらしく、彼の顏は稍や蒼ざめて、モーニングを着込んだ骨格の良い身體もいつもより少し瘦せて見えた。鈍感であるが爲めに圖太く見え、單純であるが爲めに輕薄に見えるのかも知れない彼の姿が、其時急に私には可憐に感ぜられた。確かに彼は曾根に對しては親切で、善良であつたのかも知れない。彼には曾根の複雜な氣持などは少しもわからないのだ。彼は本當に曾根に對する罪滅ぼしの意味で熱心に曾根の死後の處置を引受け、今心から故人に對して哀悼の意を披瀝しようとして居るのだ。彼自身が結局曾根の片意地の傀儡にされて居る事などは夢にも知らないに相違無い……私は固唾を呑んで今彼が讀み上げる弔詞を聞いた。

『君資性渥厚、身を持する事堅く、職をK新聞社に奉じて經濟部の重鎭と仰がれ…………』

始めの中はさうした比較的平凡な、空疎な言葉を羅列しただけだつたが、だん〳〵故人を憶ふ眞情が溢れて來て、小窪の聲も著しく感傷的な、抑揚に富んだ物になつた。

『予と君とは交友の日尙淺きにも拘らず、君の予を信ずる事甚だ篤く、死に臨み、予を枕頭に招きて懇ろに後事を托さる。予は……予は…………』

小窪は蒼白い頰にはら〳〵涙を落しかけた。聲が詰まつて、時々彼は息を喘いだ 彼の顏は物凄い程緊張して來た。

『予等友人柩に侍して今君の傍にあり、しばらく最後の別れを惜しまんとす。幽明世を隔つるの人、願はくは——』

私は忽ちわつと云ふどよめきが會葬者の間に起つたのを聞いた。小窪が弔文を握つたまゝ氣を失つて柩の前に倒れたのだつた。二三人の者が馳け寄つて、直ぐ彼を抱き上げ、廊下の方へ連れ出した。

『なあに、腦貧血だらう。』

『いや、心臓麻痺だ。脈が止つてしまつた。』

口々にさう叫ぶ騒がしい人聲が聞えて來た。

一人が近所の醫者を迎へに飛んで行つた。其の間に喪主から順々に燒香が營まれた。私も柩の前に進み出て、合掌しながらぢつと默禱を捧げたが、思ひがけない椿事で私の心は暗く掻き亂された。

『見ろ！　勝つたぞ。俺の片意地が到底勝つたぞ。』

私は曾根がさう叫びながら、あの冷たい冴えた、何物をも見透す眼で、柩の中からぢつと小窪の倒れた姿を見つめて居る樣を想像した。

◉定價 金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾四錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六拾錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵稅共		

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし

送金注意

一 誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一 振替貯金口座は東京三十四番なり
一 郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一 代金引替小包の取扱は一切謝絶す
一 集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一 金一圓迄 金六錢
　一 金五圓迄 金七錢（集金委託料及送料共）
　一 金拾圓迄 金八錢
但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一 中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正十一年十一月三十日印刷納本
大正十一年十二月一日發行（禁轉載）

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本郷區本鄉三丁目六番地 中央公論社
電話 小石川一四四
電信略號 コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING CO., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.